平城京左京七条一坊十五・十六坪
発掘調査報告

立文化財研究所

1997

正 誤 表

頁・図版	行	誤	正
目次 (p.5)	4	Englishi	English
p. 3	33	Edward	Edwards
p. 11	27	人面墨書土器	墨書人面土器
	31	関わわる	関わる
p. 14	右 12	SX6403	SD6403
	右 16	SX6404	SD6404
p. 18	左 23	灰色粘砂層	灰色砂粘層
p. 29	10	西北拡張区	北西拡張区
p. 30	Tab.3,No.4	57 年度』p.49	56 年度』pp.45－52
	Tab.3,No.8	p.44	pp.21－25
p. 35	19	幅 4,5～4.7m	幅 4.5～4.7m
p. 39	17	2m 西側溝	2m、西側溝
	22	井戸でない	井戸ではない
p. 42	22	梁間	梁行
p. 45	29	梁間	梁行
p. 47	31	近いの掘立柱	近い掘立柱
p. 53	7	南北は	東西は
	14	灰緑色粘混灰白色砂	灰緑色粘土混灰白色砂
p. 58	23・24	17m に位置する。条間北小路北側溝の北岸から溝内にかけて、	17m、条間北小路北側溝の北岸から溝内にかけて位置する。
p. 60	33	人面墨書土器	墨書人面土器
p. 66	8	掘り直して	彫り直して
	32	第一角	第一画
	33	第二角	第二画
p. 72	7	褐粗砂層	褐色粗砂層
	8	褐粗砂層	褐色粗砂層
p. 78	6	欠けての	かけての
p.103	10	長 23.5cm	長さ 23.5cm
p.110	30	X 銭写真	X 線写真
p.120	4	北側溝 SD6472	南側溝 SD6471
p.121	Tab.9	*Bos tauras*	*Bos taurus*
p.124	11	墨書人面土器が 11 点が	墨書人面土器が 11 点
p.136	36・37	土器埋納遺構遺構	土器埋納遺構
p.137	13	fr*hgeschichtlicher	frühgeschichtlicher
		Gef**inhalte	Gefßinhalte
p.151	25	西側 R ライン	西側溝 R ライン
p.161	21	方位東側溝も	方位も東側溝と
	Tab.23	Y－2,488,041.57	Y－3,488,041.57
p.163	31（文献）	3	2
p.177	20	j	J
p.178	3	人面墨書土器	墨書人面土器
p.180	25	第Ⅴ章 2	第Ⅵ章 2
p.187	18	飛鳥浄御原	飛鳥浄御原宮
p.196	9	別表 11	別表 10
	30	別表 11	別表 10
p.197	9	別表 11	別表 10
p.198	2	別表 12	別表 11
	Tab.29	時期別計測値比較	人形時期別計測値比較
p.200	19	隠陽思想	陰陽思想
	26・27	人面墨書土器	墨書人面土器
p.206	12	別表 13	別表 12
p.207	25	別表 13	別表 12
p.209	23	保持してよう	保持したよう
	28	10 世紀初頭のもの間	10 世紀初頭のものとの間
p.212	16	瓦磚類	瓦塼類
p.213	22・23	西側溝出土から	西側溝から
p.259	25	and burialSX6428	削除
p.262	18	Nara palace site	Nara capital site
Ph.73		14－遺跡包含層	14－遺物包含層

SD6400出土祭祀関連遺物

奈良国立文化財研究所学報第56冊

平城京左京七条一坊十五・十六坪
発掘調査報告

奈良国立文化財研究所

1997

序

奈良国立文化財研究所は、1959年以降、継続して平城宮跡で発掘調査を実施してきました。この宮域内の発掘調査は、一定の計画のもとに実施しているものです。これまでに調査を完了した部分は、全宮域のほぼ30パーセント、これによって、多くの事実を解明し、また、新たに多くの問題を提示することができました。

この宮域内の計画的な発掘調査にあわせて、宮域外になる平城京の街区域の発掘調査も断続的に担当しています。その発掘調査のほとんどは、各種の建設土木工事などの予定地を工事の事前に発掘する、いわゆる緊急調査であり、それを奈良県や奈良市の調査組織と分担しているのです。今回報告する平城京左京七条一坊十六坪を中心とし、一部がその十五坪にわたるほぼ1.4ヘクタールの地域の発掘調査もまた、大型小売店舗建設予定地における緊急調査であり、1994年から95年にかけて実施したものでした。

左京七条一坊は、平城宮から南へ2キロメートルほど離れた、平城京南半部の朱雀大路に面した街区にあたります。これまでの街区域における発掘調査の成果からすると、調査にのぞむにあたって、いくつもの問題が浮かんでいました。このあたりは一般的な住宅地域なのか。住宅ではなく、都の特別な施設があった地域か。住宅があったとすれば、その宅地はどの程度の広さを占め、どのような建物がどのように配置されているのか。推定できる居住者はどのような身分の人物か。さらに、街区を区画する街路は、このあたりではどうなっているのか。問題は多岐にわたります。

もちろん今回の一度の発掘調査ですべての問題が解決できるとはかぎりません。しかし、従来の調査成果とあわせ考えると、今回の調査によっても、街路と街区の規模と構造、住宅とそれ以外の特別な施設との交代の状況、平城京終末前後の街区の利用状況など、平城京の実態を解明し、さらに新たな問題を提起する資料を得ることができました。

これまでの平城京の街区域の発掘調査の成果をかえりみますと、奈良時代史の考究にとって、平城宮跡における発掘調査とならんで、それらの調査がいかに重要なものであったか、それを強く感じるとともに、この報告書がその意義をご理解いただく一助になることを願っています。今回の調査を含めてこれまでの発掘調査における関係各位のご協力に深く感謝申しあげます。

1997年3月

奈良国立文化財研究所長
田中　琢

平城京左京七条一坊十五・十六坪
発掘調査報告

目　次

第Ⅰ章　序　　言 ……1

1　平城京の発掘調査 ……1

A　左京七条一坊十六坪の調査 ……1　　B　平城宮跡における発掘調査と整備事業……2

2　報告書の作成 ……3

第Ⅱ章　調査概要 ……5

1　調査の経過 ……5

2　調査地域 ……7

A　位置と環境 ……7　　B　地区割と測量 ……9

3　調査の概要 ……11

A　第251次調査 ……11
B　第252次調査 ……11
C　第253次調査 ……12
D　第254次調査 ……12
E　第255次調査 ……13

4　調査日誌 ……14

A　第251次調査 ……14
B　第252次調査 ……14
C　第253次調査 ……19
D　第254次調査 ……23
E　第255次調査 ……27

第Ⅲ章　遺　　跡……29

1　遺跡の概観……29

A　平城京造営以前の地形……29
B　平城京廃都後の地形……31

2　条坊遺構……32

A　東一坊大路……32
B　六条大路……35
C　坪境小路……35

3　十五・十六坪の遺構……37

A　奈良時代以前の遺構……38
B　奈良時代以降の遺構……38
C　祭祀関連その他の遺構……60

第Ⅳ章　遺　　物……65

1　瓦　塼　類……65

A　軒丸瓦……65
B　軒平瓦……67
C　丸瓦・平瓦……69
D　その他の瓦塼類……70

2　土　　器……71

A　東一坊大路西側溝出土土器……72
B　道路側溝出土土器……78
C　井戸出土土器……81
D　土抗出土土器……83
E　埋納遺構・木棺墓出土土器……84
F　柱穴出土土器……85
G　平城京造営以前の土器・10世紀以降の土器……86
H　施釉陶器・特殊土製品……89
I　祭祀用土器・土製品……91
J　墨書・刻書土器……99

3　木製品・漆塗製品……100

A　東一坊大路西側溝出土木製品……100
B　六条大路北側溝出土木製品…105
C　井戸 SE6657出土木製品……105
D　遺構に関連する木製品……106
E　木棺墓 SX6428出土品……106

4 金属製品……107

A 銅製品……107
B 鉄製品……108
C 銅 銭……110

5 ガラス製品・鋳造関連遺物・石製品他……111

A ガラス製品・鋳造関連遺物 …111
B 奈良・平安時代の石製品 ……113
C 弥生時代以前の石器 ……114

6 木 簡……116

7 動物遺存体……120

A 出土した動物遺存体 ……120
B 種ごとの概要 ……121
C 考 察……122

第Ⅴ章 自然科学による分析 ……125

1 左京七条一坊十六坪から出土した遺構・遺物に残存する脂肪の分析……125

A 土壌試料 ……125
B 残存脂肪の抽出 ……126
C 残存脂肪の脂肪酸組成 ……127
D 残存脂肪のステロール組成 …130
E 脂肪酸組成の数理解析 ……133
F 脂肪酸組成による種特異性相関……135
G 総 括……136

2 東一坊大路西側溝覆土の珪藻分析……138

A 試 料……138
B 分析方法 ……140
C 結 果……140
D 溝の堆積環境 ……148

3 東一坊大路西側溝覆土の花粉分析……151

A 試 料……151
B 方 法……151
C 結 果……151
D 考 察……154

4 金属製品・ガラス関連遺物の分析調査……156

A 分析資料と観察 ……156
B 調査の結果 ……156

第VI章　考　　察 ……159

1　条坊復原 ……159

A　十六坪四周の道路復原 ……159
B　左京七条一坊十六坪の位置 …162
C　まとめ ……164

2　遺構の変遷 ……165

A　はじめに ……165
B　I期の遺構 ……165
C　II期の遺構 ……167
D　III期の遺構 ……169
E　IV期の遺構 ……171
F　V期の遺構 ……172
G　VI期の遺構 ……174
H　まとめ ……174

3　瓦　塼　類 ……176

A　瓦の使用状況の検討 ……177
B　出土軒瓦の問題点 ……181

4　土　　器 ……185

A　十六坪周辺の土器埋納遺構 …185
B　出土土器から見た奈良時代の祭祀……188

5　金属製人形について ……196

A　分　類 ……196
B　年代・出土遺構 ……197
C　法　量 ……198
D　金属製人形の特性 ……199
E　まとめ ……200

6　木　　簡 ……202

7　木棺墓 SX6428 ……206

A　SX6428の概要……206
B　木棺墓の集成とSX6428の分析……206
C　畿内中枢部における古代木棺墓……207
D　まとめ ……209

8　結　　語 ……211

別　表 ……214
別　図 ……239
英文目次 ……248
英文要約(Englishi Summary) ……260
出土木簡釈文(抄) ……巻末

挿　　図

Fig.
1　調査次数と区域 ……6
2　地区割図……10
3　第251次調査区遺構略図 ……14
4　第252次調査区遺構略図 ……15
5　第253次調査区遺構略図 ……20
6　第254次調査区遺構略図 ……23
7　第255次調査区遺構略図 ……27
8　平城京造営以前の地形……29
9　調査地周辺の流路検出地点……30
10　調査地周辺の遺存地割……31
11　道路側溝土層図……33
12　東一坊大路西側溝……34
13　堰 SX6413と堤 SX6452 ……34
14　東一坊大路西側溝の勾配……35
15　土器埋納遺構……61
16　木棺墓 SX6428 ……62
17　橋状遺構 SX6420 ……63
18　曲物埋設遺構 SX6422 ……64
19　SD6411・6449・6471・6472出土土器 ……79

20　柱穴出土土器……86
21　縄文・弥生土器……87
22　平城京廃絶以降の土器……88
23　特殊土製品……90
24　動物遺存体破片割合 ……120
25　木棺墓 SX6428土壌試料採取位置 ……126
26　土器埋納遺構 SX6448土壌試料採取位置 ……126
27　土器埋納遺構 SX6460・6461土壌試料採取位置 ……126
28　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成(1) ……128
29　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成(2) ……129
30　試料中に残存する脂肪のステロール組成(1) ……130
31　試料中に残存する脂肪のステロール組成(2) ……131
32　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図 ……134
33　試料中に残存する脂肪酸組成樹状構造図 ……135
34　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関 ……136
35　西側溝西方Ｌラインの土層図および珪藻分析試料採取位置 ……138
36　西側溝Ｒラインの土層図および珪藻分析試料採取位置 ……138
37　西側溝Ａラインの土層図および珪藻分析試料採取位置 ……138
38　西側溝Ｒライン主要珪藻化石群集 ……144
39　西側溝Ａライン主要珪藻化石群集 ……147
40　西側溝Ａ・Ｒラインの花粉化石群集 ……153
41　坩堝に残存するガラスの鉛同位体比 ……157
42　坩堝Ｘ線回折分析 ……158
43　関係条坊位置 ……159
44　十六坪四周の条坊復原 ……162
45　Ⅰ期の遺構 ……166
46　Ⅱ期の遺構 ……168
47　Ⅲ期の遺構 ……170
48　Ⅳ期の遺構 ……171
49　Ⅴ期の遺構 ……173
50　墓尾古墳隣接地甕棺墓出土土器 ……187
51　竈の製作技法 ……188
52　SD1250出土土器……192
53　金属製人形の形式 ……196
54　銅製人形の実例 ……197
55　木棺墓の規模 ……206
56　木棺墓の変遷 ……209

表

Tab.

1　航空写真撮影一覧 ……9
2　調査次数と中地区の関係……10
3　調査地周辺の流路……30
4　遺構の新旧関係……37
5　遺構別出土金属製品集計表 ……107
6　西側溝土層別出土ガラス関連遺物 ……111
7　西側溝鋳造関連遺物土層別出土量 ……112
8　遺構別出土動物遺存体 ……120
9　出土種名表 ……121
10　種類・部位別動物遺存体出土量 ……121
11　土壌試料の残存脂肪抽出量 ……127
12　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合 ……132
13　珪藻の生態性 ……139
14　西側溝西方Ｌライン珪藻分析結果 ……140
15　西側溝Ｒライン珪藻分析結果(1) ……142
16　西側溝Ｒライン珪藻分析結果(2) ……143
17　西側溝Ａライン珪藻分析結果(1) ……145
18　西側溝Ａライン珪藻分析結果(2) ……146
19　花粉分析結果 ……152
20　錆部分定量分析結果 ……156
21　金属部分定量分析結果 ……156
22　関係条坊計測座標一覧 ……160
23　条坊遺構の関数化 ……161
24　十六坪四隅の座標 ……161
25　大路両側溝の心々距離 ……163
26　出土軒瓦の時期 ……176
27　銅製人形形式別計測値比較 ……198
28　鉄製人形形式別・時期別全長分布 ……198
29　人形時期別計測値比較 ……198
30　平城京内の南北道路側溝における木簡の出土事例 ……203
31　木棺墓の分類 ……208

別　　表

1　建築遺構一覧 ……215
2　遺構別出土木製品一覧表 ……217
3　東一坊大路西側溝出土土器・土製品一覧 ……218
4　墨書土器一覧 ……223
5　銭貨計測表 ……224
6　石製品一覧表 ……226
7　動物遺存体一覧表 ……228
8　東一坊大路西側溝地区別木簡出土点数 ……232
9　畿内及び周辺の土師器甕埋納遺構 ……233
10　金属製人形出土例 ……234
11　銅製人形計測表 ……235
12　木棺墓一覧表 ……236
13　木棺墓出土遺物一覧表 ……237
14　6272A・B、6710A・C、6663F・Jの平城京域での出土一覧表……238

別　　図

1　軒瓦の分布 ……240
2　塼の分布 ……241
3　丸瓦の分布 ……242
4　平瓦の分布 ……243
5　6316A・E・G、6710A・C分布図 ……244
6　6227A・D、6663F・J分布図 ……245
7　東一坊大路西側溝地区別出土遺物 ……246

図　　面

Pl.		
1	遺構実測図の割付	
2	6AHC—J 6AHD—A	東一坊大路実測図
3	6AHD—A 6AHH—I	六条大路実測図
4	6AHG—R 6AHH—I	東一坊大路西側溝実測図
5	6AHH—H・I	十六坪北西部西半実測図
6	6AHH—H・I	十六坪北西部東半実測図
7	6AHH—H・I	十六坪北東部西半実測図
8	6AHG—Q・R 6AHH—H・I	十六坪北東部東半・東一坊大路西側溝実測図
9	6AHG—Q・R	東一坊大路実測図
10	6AHH—G・H	十六坪西辺部実測図
11	6AHH—G・H	十六坪中央部西半実測図
12	6AHH—G・H	十六坪中央部東半実測図
13	6AHG—P・Q 6AHH—G・H	十六坪東辺部・東一坊大路西側溝実測図
14	6AHH—G・H	七条条間北小路・東一坊坊間東小路実測図
15	6AHH—G・H	十五坪北辺部・十六坪南西部西半・七条条間北小路実測図
16	6AHH—G・H	十五坪北辺部・十六坪南西部東半・七条条間北小路実測図
17	6AHH—G・H	十五坪北辺部・十六坪南東部西半・七条条間北小路実測図
18	6AHG—O・P 6AHH—G・H	十五坪北辺部・十六坪南東部東半・東一坊大路西側溝・ 七条条間北小路実測図
19	井戸実測図	
20	祭祀土坑 SX6530実測図	
21	軒丸瓦実測図 1	
22	軒丸瓦実測図 2 ・道具瓦実測図	
23・24	軒平瓦実測図 1 ・ 2	
25・26	SD6400出土土師器実測図 1 ・ 2	
27～31	SD6400出土須恵器実測図 1 ～ 5	
32・33	井戸出土土器実測図 1 ・ 2	
34	土坑出土土器実測図	
35	祭祀土坑・埋納遺構出土土器実測図	

36　埋納遺構・木棺墓出土土器実測図
37　施釉陶器・硯実測図
38～41　墨書人面土器実測図１～４
42　小型模造土器実測図
43・44　土馬実測図１・２
45　墨書土器実測図１
46　墨書土器実測図２・刻書土器実測図
47　墨書土器実測図３
48～52　SD6400出土木製品実測図１～５
53　SD6451・SE6457・SX6428出土木製品等実測図
54　SD6400出土銅・鉄製品実測図
55　SD6400出土鉄製品実測図
56　SD6400出土ガラス製品・鋳造関連遺物実測図
57　鋳造関連遺物実測図
58　奈良・平安時代の石製品実測図
59　弥生時代以前の石器実測図

付図（巻末袋入り）
平城京左京七条一坊十五・十六坪遺構集成図

原色写真

巻首図版　SD6400出土祭祀関連遺物

Color Ph.

1　上　第252次調査区
　　下　第254次調査区
2　祭祀土坑 SX6530
3　木棺墓 SX6428
4　上　木製人形
　　下　下駄・木印
5　上　金属製人形
　　下　海老錠
6　上　ガラス製品関連遺物
　　下　鋳造関連遺物
7　上　石製品
　　下　石　器
8　琴形木製品

写　　真

Ph.

1　　調査地周辺の地形１・２
2　　東一坊大路西側溝１・２
3　　東一坊大路・東一坊大路東側溝
4　　六条大路１～３
5　　七条条間北小路・東一坊坊間東小路
6　　第251次調査区
7・8　第252次調査区１・２
9・10　第253次調査区１・２
11～16　第254次調査区１～６
17～20　第255次調査区１～４
21　　橋・土坑
22　　溝・祭祀土坑・木棺墓

23　井戸・曲物埋設遺構
24　土器埋納遺構
25　軒丸瓦
26　軒平瓦・文様塼
27　丸瓦・平瓦・土管
28　祭祀用土器・土製品・硯の製作技法
29～31　SD6400出土土師器１～３
32～35　SD6400出土須恵器１～４
36　道路側溝・柱穴出土土器
37～39　井戸出土土器１～３
40　井戸出土土器４・土坑出土土器
41・42　埋納遺構出土土器１・２
43　平城京造営以前・廃絶以降の土器
44　施釉陶器・特殊土製品
45～56　墨書人面土器１～12
57・58　小型模造土器１・２
59～61　土馬１～３
62・63　SD6400出土墨書土器１・２
64　墨書土器・刻書土器
65・66　SD6400出土木製品１・２
67・68　SD6400・SE6657出土木製品１・２
69・70　SD6400出土金属製品１・２
71　SD6400出土銭貨
72　SD6400出土ガラス関連遺物
73　鋳造関連遺物
74　奈良・平安時代の石製品
75～79　木簡１～５
80　木簡６（琴形木製品）
81　SD6400・SX6530出土動物遺存体
82　X線CT写真
83・84　SD6400出土珪藻化石１・２
85　SD6400出土花粉化石

第Ⅰ章　序　　言

この報告書は、平城京左京七条一坊十五・十六坪において、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1994年度に実施した、第251次、第252次、第253次、第254次、第255次調査の結果をまとめたものである。

1　平城京の発掘調査

A　左京七条一坊十六坪の調査

1980年代のバブル経済の崩壊後、平城京域における開発工事は奈良市などが行う公共工事を除いて急速に減退し、同時に事前の発掘調査も減少した。当調査部においても1986～89年に実施した「そごう百貨店」建設工事に伴って長屋王邸・藤原麻呂邸を発見してからのち、京域での大規模な発掘調査にたずさわっていない。

奈良市の南郊に当たる国道24号線の沿線では、旧24号線のバイパスとして開設して以来、大型小売店舗・流通倉庫・郊外型レストラン・簡易ホテルなどが徐々に進出して水田地帯を蚕食しており、現在でもその趨勢はとどまっていない。94年度に当調査部が発掘調査を担当した調査地域もそうした大型小売店舗新築に伴う開発工事に関わるのもで、奈良時代の東一坊大路を南下してきた国道が約120ｍ西へ移行し、北東から南下する佐保川と交差するあたり、奈良盆地東西線のほぼ中央に当たる低湿地に位置する。

開発対象の敷地総面積は約31,500 m²、その範囲を遺存地割によって確かめてみると、左京七条一坊・七条二坊・六条一坊・六条二坊にわたることが明らかになり、駐車場など地下遺構に影響を及ぼさない範囲を除き、しかもできるだけ１坪全体を発掘するという意図のもとで、七条一坊十六坪を中心とする地域で約14,000 m² の調査地を選んだ。

調査地の南に佐保川が流れる低地に位置することから、洪水などの氾濫で奈良時代の遺構がすでに流出していることも予想され、事実、東一坊大路と六条大路が交差する調査区東北隅のあたりの試掘では、中世以降の大規模な氾濫の痕跡が認められた。しかし、十六坪では保存状況がかなり良好で、厚さ約１ｍの堆積土をのぞいて奈良時代の遺構を検出した。　発掘調査

これまで、発掘調査例や地勢によって、京域を南北にほぼ二分する五条ないしは六条大路以北が１町以上の宅地を占拠する貴族の邸宅の区域であり、それ以南が坪内を細分した下級役人などの小住宅が集合する地域であると考えられてきた。しかしながら、十六坪では１坪という広い敷地の利用状況が明らかになった。発掘調査時には東一坊大路西側溝から坩堝などの鋳造関係の遺物を発見していることから、鋳造関係の工房跡あるいは工房を管理する役所ではないかという説も提起されたが、敷地内には工房の存在を伺わす遺物が出土せず、住宅とする見解が強くなった。その解答については本文中で明らかにするであろうが、条坊地割内に散在する宅地の様相については、それぞれの地域によってかなり大きな違いがあり、京域の住み分けについて一定のルールを設定するのには、まだ実例が不足していることを改めて認識させられた。

B　平城宮跡における発掘調査と整備事業

この場を借りて、最近の平城宮跡における発掘調査と整備事業の要点について簡単に触れておこう。1993年度までの動向については『平城宮発掘調査報告 XIV』で述べており、ここでは94～96年の事業が対象となる。

平城宮跡の発掘調査

発掘調査　西面中央門である佐伯門内で右馬寮の遺構を検出した。東西を掘立柱塀で区画するほぼ中央に正殿を置き、それに西脇殿と後殿がともなう。この状況は佐伯門内の北側で明らかになっている左馬寮と酷似し、南方に馬場・馬房が展開する右馬寮の北郭にあたるものと想定した（1994年度調査）。

東方の遺構展示館に隣接する駐車場整備のため、造酒司の南区域を発掘した。造酒司南面築地と南門を検出し、造酒司敷として一辺約120 m（400尺）の方形区画が想定できた。なお造酒司の南には幅約20 m の宮内道路が東西に延びる（1995年度調査）。

第二次朝堂院において東第六堂・南門・南面築地を発掘して、第二次朝堂院の全貌が明らかになった。下層遺構として奈良時代前半の掘立柱朝堂・南門・南面塀があり、うえに奈良時代後半の礎石付瓦葺き朝堂・南門・南面築地が重なる。ただし、上層の東面築地は南に延び朝集殿院を囲むが、下層の掘立柱塀は南に延びず、部分的に調査区を拡張した東朝集殿北辺でも下層朝集殿の遺構を認めていない（1995・1996年度調査）。

1980年以来の調査によって、壬生門内の東側に式部省と神祇官があり、神祇官の東面築地に接して東側に官衙ブロックが予想された。発掘の結果、北面に正門を開く官衙が奈良時代を通じて存在し、平安宮を参考にすると神祇官の東院になる（1996年度調査）。

朱雀門の復原

朱雀門・東院庭園の復原整備　1993年度の補正予算によって、朱雀門（総額36億円）・東院（総額20億円）の復原整備費が計上された。朱雀門については92年度に基壇の整備が終了しており、建築本体の復原が中心となる。基本的には伝統的な木造建築として復原するのだが、建築基準法に基づくいくつかの強度補強が問題となり、ところどころに現代技術による補強を大幅に加味することになった。阪神大震災の影響などによって工事の遅延が余儀なくされたが、97年度中には完成する。

東院庭園については園池付近の調査を完了していたが、南面大垣及び園池の西方区域については発掘調査が及んでいなかったので、工事前の発掘調査から始まった。その結果、南面大垣で奈良時代後半の宮城門を発見するなど、新しい所見に基づいて設計変更を行った。また未買収地が残るなどのことから、工事は遅延せざるをえず97年度の完成を期している。

復原研究の進展

第一次大極殿院の復原研究　第一次大極殿院の復原研究は1989年度から特別研究として基礎調査を開始し、基本設計の段階に立ち至っている。土質・地耐力など各種立地条件にともなう調査を行うとともに、主として意匠を検討するために全域の1/100・大極殿の1/10模型を製作した。また柱・桁・梁・斗栱など木構造の耐震性を検討するため実物大の柱を立てての実験、コンピュータを活用しての構造力学的なシュミレーションも進めている。本格的な復原工事に際しては構造上の問題もさることながら、後殿遺構の直上を通過する通称一条通りの移設など、着手前に解決を必要とする問題が山積しており、今後は奈良県・奈良市など関係機関の協力が強く要請される。

2　報告書の作成

本報告書は、(仮称) ダイエー奈良南店新築工事に伴って、平城京左京七条一坊十六坪を中心に、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が、1994年度に実施した第251次、第252次、第253次、第254次、第255次調査の報告である。

以下、発掘調査の責任者 (所長・部長) と発掘担当者を掲げ、他の関係者は一括して列記する。 調査組織

次　数	所　長	部　長	発掘担当者
第251次	田中　琢	町田　章	浅川滋男
第252次	田中　琢	町田　章	内田和伸
第253次	田中　琢	町田　章	長尾　充
第254次	田中　琢	町田　章	岩永省三
第255次	田中　琢	町田　章	加藤真二

臼杵勲、小澤毅、小野健吉、岸本直文、小池伸彦、小林謙一、杉山洋、高瀬要一、巽淳一郎、舘野和己、玉田芳英、寺崎保広、毛利光俊彦、山岸常人、山崎信二、渡辺晃宏、(三重県教育委員会一船越重伸　東京大学一久保憲一、山之内誠　京都大学一福田美穂　奈良大学一岩崎大介、亀山直樹、小西寛之、高木克彦、望月英史　天理大学一井手正人、木下満代、永田朋子、長田美奈　京都橘女子大学一中村幸代、中山玉生　敦賀女子短期大学一清水由利恵)

報告書の作成は、1995年から2ケ年計画でおこなった。遺構関係の整理は遺構調査室と計測修景調査室があたった。遺物の整理は木製品・金属製品・石製品等を考古第一調査室、土器類を考古第二調査室、瓦塼類を考古第三調査室が分担し、木簡と墨書土器については史料調査室が担当し、歴史研究室が協力した。

本報告は、各執筆者が遺構、遺物を整理検討し、1995年12月から計7回、執筆者を中心とする検討会の討議を経て作成した。

本書の執筆担当者は次のとおりである。

執筆・協力

第Ⅰ章　1町田　章　2小林謙一

第Ⅱ章　1・2A・3・4　小林　2B内田和伸

第Ⅲ章　1・2内田　3長尾　充

第Ⅳ章　1岩永省三　2玉田芳英　3A・B・C・D・4臼杵　勲　3E・5加藤真二　6舘野和己　7松井　章

第Ⅴ章　1中野益男 (帯広畜産大学)、中野寛子・長田正宏 (ズコーシャ総合科学研究所)　2・3パリノ・サーヴェイ株式会社　4肥塚隆保

第Ⅵ章　1内田　2長尾　3岩永　4玉田　5臼杵　6舘野　7加藤　8小林

英文要旨　Edward Walter (天理大学)

樹種の鑑定は光谷拓実、ガラス・鉱物の分析は肥塚隆保があたった。また、金属製品、坩堝の分析調査には、辻本与志一、降旗順子の協力を得た。

写真撮影は佃幹雄と牛嶋茂が担当し、杉本和樹、楠本真紀子、妹尾由佳、森本佐由理の協力

を得た。ただし、第Ⅴ章に使用した写真は、各執筆者が撮影した。

図面・挿図・表等は各執筆者が作成し、以下の各氏の協力を得た。

石塚美恵子、今津朱美、上田元子、浦田智子、大日節子、小倉依子、置田弥生、鎌田礼子、木ノ下淳美、北野陽子、笹　恵子、杉本陽子、高橋順子、高見ます子、長尾朱美、長谷川陽美、南本　忍、宮崎美和

本書では、引用・参考文献において、頻出する機関名・書名については、シリーズ番号等を除き、以下のように略した。

機関名

奈良国立文化財研究所：奈文研

奈良県教育委員会：奈良県教委

奈良県立橿原考古学研究所：橿考研

奈良市教育委員会：奈良市教委

滋賀県教育委員会：滋賀県教委

書　名

平城宮発掘調査報告：平城宮報告

奈良国立文化財研究所年報：年報

平城宮跡発掘調査部発掘調査概報：平城概報

飛鳥藤原宮発掘調査概報；藤原概報

平城宮発掘調査出土木簡概報；平城木簡概報

奈良県史跡名勝天然記念物調査報告：奈良県報告

奈良県遺跡調査概報：奈良県概報

奈良市埋蔵文化財発掘調査概要：奈良市概要

本書の編集は平城宮跡発掘調査部長町田章の指導のもとに、小林謙一がおこなった。

第II章　調査概要

1　調査の経過

調査に至る経過

1993年11月25日、平城京左京六条一坊十三坪・七条一坊十五・十六坪（奈良市八条町５丁目452他43筆）における、（仮称）ダイエー奈良南店建設に伴う埋蔵文化財発掘届が㈱ヒラサワから奈良県教育委員会に提出された。敷地面積31,497 m²、建築面積17,468 m² にもおよぶ大規模な計画であった。奈良県、奈良市、地元との間で開発に対する協議が進められる一方で、1994年１月には、事前に発掘調査を実施することになり、1994年４月には、奈良県教育委員会から、奈良国立文化財研究所に発掘調査の依頼があった。

これを受けて、奈良国立文化財研究所は、発掘調査を実施するにあたり、店舗建設が予定され、かつ事業地にその大部分が含まれる十六坪を集中して発掘するとともに、事業地の東辺に想定される東一坊大路西側溝を可能な限り発掘する、という調査計画をたてた。奈良県教育委員会、奈良市教育委員会と協議した結果、発掘調査は開発面積約31,500 m² のうち、まず十六坪を中心とする約11,500 m² を対象とし、調査期間は、1994年５月から1995年３月となった。

発掘調査は、最初に東一坊大路の位置を確定し、その後、十六坪をほぼ四分割して４回にわたって調査することになった。調査期間が限られていることもあって、早急に調査を開始すべきところであったが、諸般の事情により、調査が可能となったのは、５月31日であった。

調査の概要

最初に実施した第251次調査は、東一坊大路の位置と規模の確認を目的として、六条大路想定地の北で東西に長い調査区を設定した。この調査は、当初の予測に反して、東一坊大路想定位置において、沼状の堆積が広がっていることを確認したにとどまり、東一坊大路西側溝の位置を確定することができなかった。これが、その後の調査区の設定に少なからず影響を及ぼした。調査期間は1994年５月31日から６月21日、調査面積は約190 m² であった。

ひき続いて実施した第252次調査は、十六坪北東部と東一坊大路西側溝の調査である。第251次調査と並行しておこなった重機による排土が終了した段階で、調査区東辺には、第251次調査区と同様の様相を呈する個所があったが、調査区東端において東一坊大路西側溝の西岸を検出することができた。その結果、西側溝は当初設定した調査区内では収まらないことが明らかになり、また、六条大路、東一坊大路といった条坊遺構を明らかにできるのは、本調査をおいて他にないため、調査区の拡張をすることとなった。また、東一坊大路西側溝の西で、平城京の調査では初めて、平安時代の木棺墓を検出した。調査期間は1994年６月１日から10月26日、調査面積は、拡張を重ねた結果、約4,010 m² になった。

第253次調査は、第252次調査区の南、十六坪の南東部と東一坊大路西側溝、および七条条間北小路東半の調査である。調査期間は1994年10月13日から12月27日、調査面積は約3,790 m² であった。

第252・253次調査において、当初の計画通り東一坊大路西側溝をほぼ完掘し、また、金属製人形をはじめ、琴形などの木製祭祀遺物、墨書人面土器・土馬等の土製祭祀遺物が出土し、平

城京における祭祀の良好な資料をうることができた。その一方で、坪の東半部は、建物遺構が希薄であることが明らかになった。

第254次調査は坪南西部の調査で、七条条間北小路の西半を検出するとともに、調査区南西隅を一部西へ拡張して、東一坊坊間東小路との交差状況を明らかにした。前2回の調査と異なり、遺構密度が高く、坪の東西で敷地の利用状況に違いがあることが明らかになるとともに、七条条間北小路南側溝の底において、馬骨・馬歯を納めた祭祀土坑を検出した。調査期間は1994年11月15日から1995年4月6日、調査面積は約3,600 m² であった。

第255次調査は、坪北西部の調査である。当初、坪の中心部に建つ民家を撤去して調査をおこなう予定であったが、調査期限が迫っていたため、第254次調査と並行して、民家と進入路部分を除いて重機による排土作業をおこない、可能な限り発掘することにした。本調査も遺構密度が高く、時間に追われる調査となったが、ほぼ予定の期日に調査を終了することができた。調査期間は1995年1月10日から4月6日、調査面積は約2,610 m² であった。

これらの調査で十六坪の約75%を発掘したことにより、平城京南半における坪内の様相を把握するとともに、祭祀関連の良好な資料をうることができた。5次にわたる調査面積は、計約14,200 m² であった。

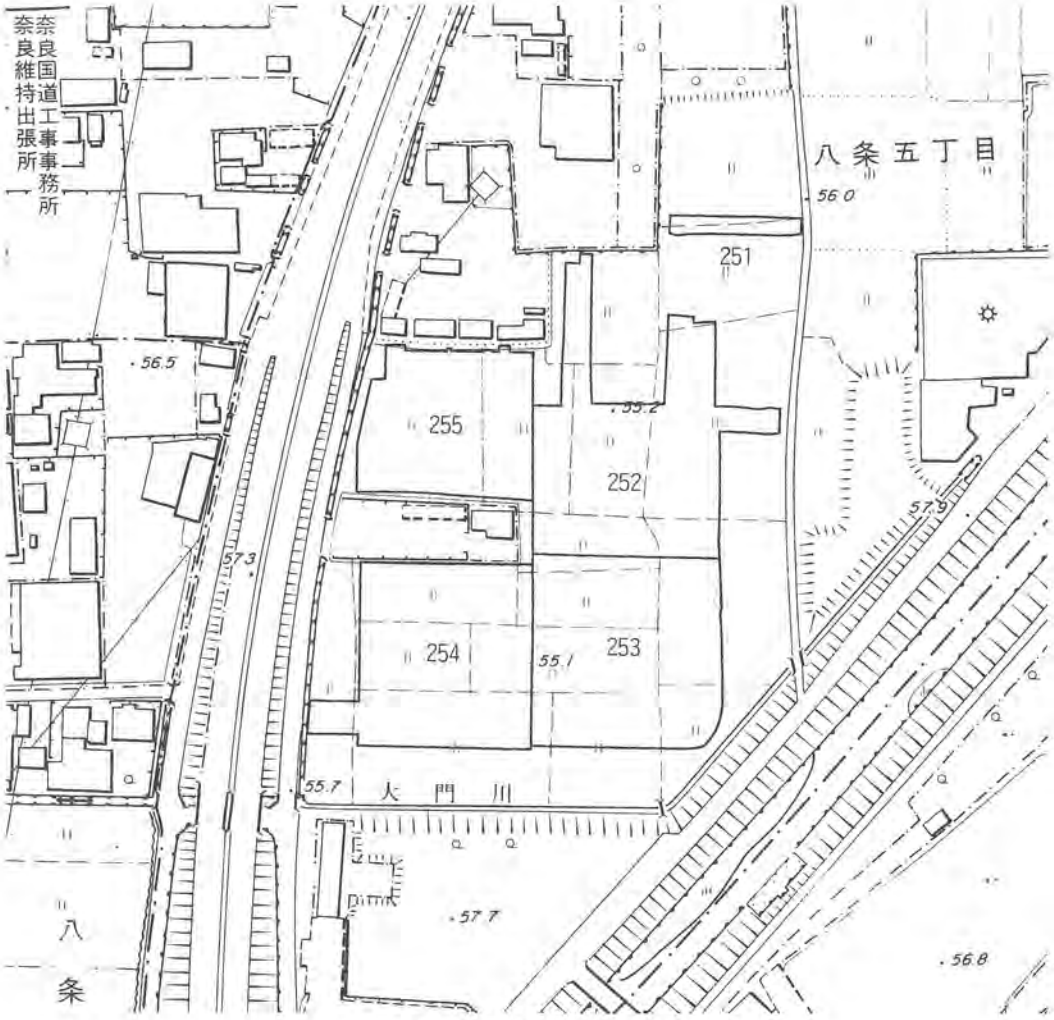


Fig. 1　調査次数と区域

2　調査地域

A　位置と環境

平城京は、東は春日山系、北は奈良山丘陵、西は矢田丘陵から派生する支丘上と中小の河川が形成する沖積地に造営されている。今回の調査地は、平城京の中央に近く、丘陵縁辺からも離れている。調査地の南東を佐保川が北東から南西に向けて流れているが、現状では、勾配がほとんど認められない平坦地といってよく、調査前は湿地状を呈していた。また、調査地の周辺部には、平城宮小子部門前に通じる東一坊大路をはじめとする、奈良時代の条坊が遺存地割として、水田畦畔にその痕跡をとどめている。

今回の主たる調査地である左京七条一坊十六坪は、北は六条大路、東は東一坊大路に面している。そこで、調査地を中心として、２条の大路に面する４坊について、過去の発掘調査の成果を概観しておくことにする。平城京における発掘調査は、従来から開発事業との関係で実施されることが多く、幹線道路の通る左京三条二坊や区画整理事業が進む右京二条三坊を中心とした一帯等では、かなりの面積の調査が進み、平城京の様相が明らかになってきている。しかし、今回の調査地は、その西に接して、奈良盆地の南北の主要幹線道路である国道24号線が通ってはいるものの、1971年にバイパスとして開通した後も、調査地周辺に開発の波が急激に押し寄せることもなく、ある程度水田が目立つ景観を呈していた。したがって、調査地の周辺における発掘調査の事例もそれほど多くはない。

周辺の発掘調査事例

調査地周辺における最初の発掘調査は、1974年に左京六条一坊二坪において実施したものである。これは、朱雀大路の調査に際し、隣接する街区の確認を目的とした小規模な調査[1]であった。その後、十～十二・十四坪で発掘調査を行っているが、発掘面積もそれほど広いものではなく、十二坪における東西廂付の南北棟建物[2]の存在が目立つ程度で、いずれも、小規模建物や建物の一部を検出したに過ぎず、具体的な状況は不詳である。なお、条坊関係としては、十・十五坪の坪境で実施した発掘調査[3]で、東一坊坊間東小路を検出しており、両側溝心々距離約6.5ｍという成果をあげている。

東に隣接する左京六条二坊は、現在、菩提川と合流した佐保川が北東から南西に流れ、それに北から菰川が合流している。六条条間路に重なるように県道が東西に通っていることもあって、４坊のなかでは、もっとも調査例が多い。そのなかで、三坪北半中央では、約1,000 m² の発掘調査[4]を行っている。掘立柱建物９棟、掘立柱塀３条、井戸１基等を検出し、遺構の重複関係から、奈良時代について、４時期の変遷をたどることが明らかになっている。また、坪の東西を二分する位置に、溝、塀など、坪内を区画、あるいは分割する施設が認められなかったため、三坪は、２分の１町以上の宅地であったと考えられている。なお、この調査では、坪東辺にも調査区を設け、東二坊坊間西小路の西側溝を検出しており、その北辺で実施した調査[5]でも、西側溝を検出している。なお、これらの調査で、坪の北辺、東辺における築地等の外周閉塞施設やそれに伴う雨落溝等については、いずれも確認できなかった。一方、九・十坪の調査[6]では、六条条間北小路およびその両側溝を検出するとともに、雨落溝の存在から、十坪北面に

は、築地等の外周閉塞施設のあったことが明らかになっている。十四坪南西部の調査[7]では、坪のほぼ4分の1近くの面積を調査し、掘立柱建物46棟、掘立柱塀9条、井戸4基等を検出し、建物の重複関係だけでみても、少なくとも3時期の変遷がたどれる。坪を東西に二分する位置に南北溝があり、その西側約4mに溝が部分的に残ることから、当初は坪内に南北道路があり、後に東側の溝だけが残り、宅地割の機能を有していたと考えられている。また、宅地内の南西隅の土坑からは、土師器皿に載せられた状態で、ガラス玉と金箔片を納めた三彩小壺2点が出土しており、宅地全体の地鎮のために埋納したと考えられている。

左京七条一坊では、九坪の南西部における調査[8]で、掘立柱建物5棟、掘立柱塀2条、南北溝1条、井戸1基を検出し、井戸からは、奈良時代中頃から後半の土師器・須恵器とともに斎串、銅鈴、漆紙文書の断片等が出土した。また、十一坪の西端における調査[9]では、東一坊坊間路東側溝と坪の西面を区画すると考えられる掘立柱塀を検出している。

左京七条二坊では、六坪のほぼ中央における調査[10]で、掘立柱建物6棟、掘立柱塀2条、井戸2基等を検出した。2基の井戸からは、土師器、須恵器とともに、唐三彩片と斎串が出土している。また、十一坪の南半で約1,000 m²の調査[11]を行っているが、沼状の堆積を確認したのみで、奈良時代の遺構・遺物は残っていなかった。

以上、比較的顕著な遺構を検出した調査を中心に、調査地周辺の発掘調査の概要を記してきたが、発掘調査は約20件、面積にして計約8,700 m²で全体の1％にも満たない状況である。出土遺物には、注意をひくものがあるとはいうものの、調査面積も狭いものが多く、また、坪内の一部を調査したにすぎないこともあって、宅地の規模等は、ほとんど明らかになっていないのが現状である。また、これらの調査で検出した掘立柱建物も、その規模を明らかにしえなかったものが多いが、そのなかで最大のものは、身舎が2間5間で廂付、柱間は8尺程度である。これが平城京南半における最大規模の建物として一般的であったのであろうか。このような状況の下、広大な面積を対象とした発掘調査を行うことにより、上述したような問題を解決する手がかりを得るとともに、平城京南半の具体的な様相が明らかになるものと期待された。

1）奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974　pp. 7・8
2）奈良市教委「平城京左京六条一坊十二坪の調査」『奈良市概要昭和58年度』1984　pp. 42・43
3）奈良市教委「平城京左京六条一坊十・十五坪坪境小路の調査 第139次」『奈良市概要昭和62年度』1988　p. 49
4）奈良市教委「平城京左京六条二坊三坪発掘調査報告」『奈良市概要昭和56年度』1982　pp. 45―52
5）奈良市教委「平城京左京六条二坊三坪の調査」『奈良市概要平成3年度』1992　pp. 68・69
6）奈良市教委「平城京左京六条二坊九・十坪の調査」 註2）前掲書　1984　pp. 44―47
7）橿考研「奈良市平城京左京六条二坊十三・十四坪発掘調査概報」『奈良県概報1987年度』別刷　1988　pp. 1―18
8）奈良市教委「平城京左京七条一坊九坪の調査 第128次」『奈良市概要昭和62年度』1989　pp. 21―25
9）奈良市教委「平城京左京七条一坊十一坪（東一坊坊間路）の調査」 註2）前掲書 1984　pp. 71―73
10）奈良市教委「平城京左京七条二坊六坪（第93次）の調査」『奈良市概要昭和60年度』1986　pp. 31―35
11）奈良市教委「平城京左京七条二坊十一・十二坪の調査」 註2）前掲書 1984　p. 70

B　地区割と測量

地区割　地区割は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1989年度から採用している平城宮・京の発掘調査地区割[1]に従った。今回の調査区域には東一坊大路と六条大路の交差点が入るため、大地区で4地区、中地区で8地区にわたる。地区割と各調査区の関係はFig. 2、各中地区の基準座標値はTab. 2の通りである。　地区割

測量　奈良市教育委員会が1980・81年度に設置した、奈良市埋蔵文化財発掘調査測量用基準点の17番辰市小学校から柏木三等三角点に結合するトラバースを組み、調査地域およびその周辺に、発掘調査の基準となる多角点を7点設けた。トラバース測量の路線長は2,355.283 m、角閉合差23″、水平位置の閉合差は26 mm、閉合比は1/89,000であった。調査区域内に設けた3点の高さは奈良市水準点4から、直接水準測量で求めた。

これらの成果に基づき、遺構の平面および高さの実測を行った。第251次調査はトータルステーションを用いた手計りで行ったが、第252次調査から第255次調査までは航空写真測量で行い、航空写真測量後に検出した遺構などの実測は、第251次調査と同様の方法で行った。なお、補足測量の高さの測定には、水準器から直接に標高数値を読みとれる標高換算式標尺を用いた[2]。　航空写真測量　標高換算式標尺

航空写真測量での撮影では、ヘリコプターに搭載した航空写真測量用カメラを使用し、1/200～1/400の垂直写真を、すべてネガカラーフィルムで撮影した。使用したカメラのレンズの焦点距離は主として210 mmであったため、撮影高度はおよそ42～84 mであった。各撮影の日時等はTab. 1の通りである。図化では当研究所のデジタルタイプの解析図化機（WILD—AC3）と互換性のある機種を使用し、縮尺1/200の写真を用いて縮尺1/20でデータ採取を行い、縮尺1/50、1/100、1/200の平面図を作成した。なお、図面の校正は、空撮後の断ち割り調査の結果、遺構カード、日誌、写真等を用いて行った。各調査の遺構図が完成した段階で、それらを合わせた編集図を作成した。この段階で手計りで実測した第251次調査の実測図、第252次調査の六条大路南北両側溝ならびに東一坊大路の西側溝の完掘後の実測図も入力した。　図化縮尺

Tab. 1　航空写真撮影一覧

次数	撮影年月日	フィルム種別	写真縮尺	写真枚数
252	1994. 9 . 8	カラー	1/500	1
			1/200	23
253	1994.12.15	カラー	1/500	1
			1/200	13
254	1995. 2 .22	カラー	1/500	1
			1/250	10
255	1995. 3 .23	カラー	1/500	1
			1/200	11

1）奈文研「平城宮・京の発掘調査地区割り」『1989年度平城概報』1990　pp. 2—6

2）奈文研「発掘調査支援機械システムの試作研究」『年報1995』1996　p. 35

Tab. 2　調査次数と中地区との関係（X，Y座標値は国土方眼座標系第VI系に基づく）

中地区名	Aライン（X）	10ライン（Y）	調査次数
6AHH—G	−148,314.000	−18,054.000	253 254
6AHH—H	−148,254.000	−18,054.000	252 253 254 255
6AHH—I	−148,194.000	−18,054.000	252 255
6AHD—A	−148,143.000	−18,054.000	251 252
6AHG—P	−148,314.000	−17,790.000	253
6AHG—Q	−148,254.000	−17,790.000	252 253
6AHG—R	−148,194.000	−17,790.000	252
6AHC—J	−148,143.000	−17,790.000	251

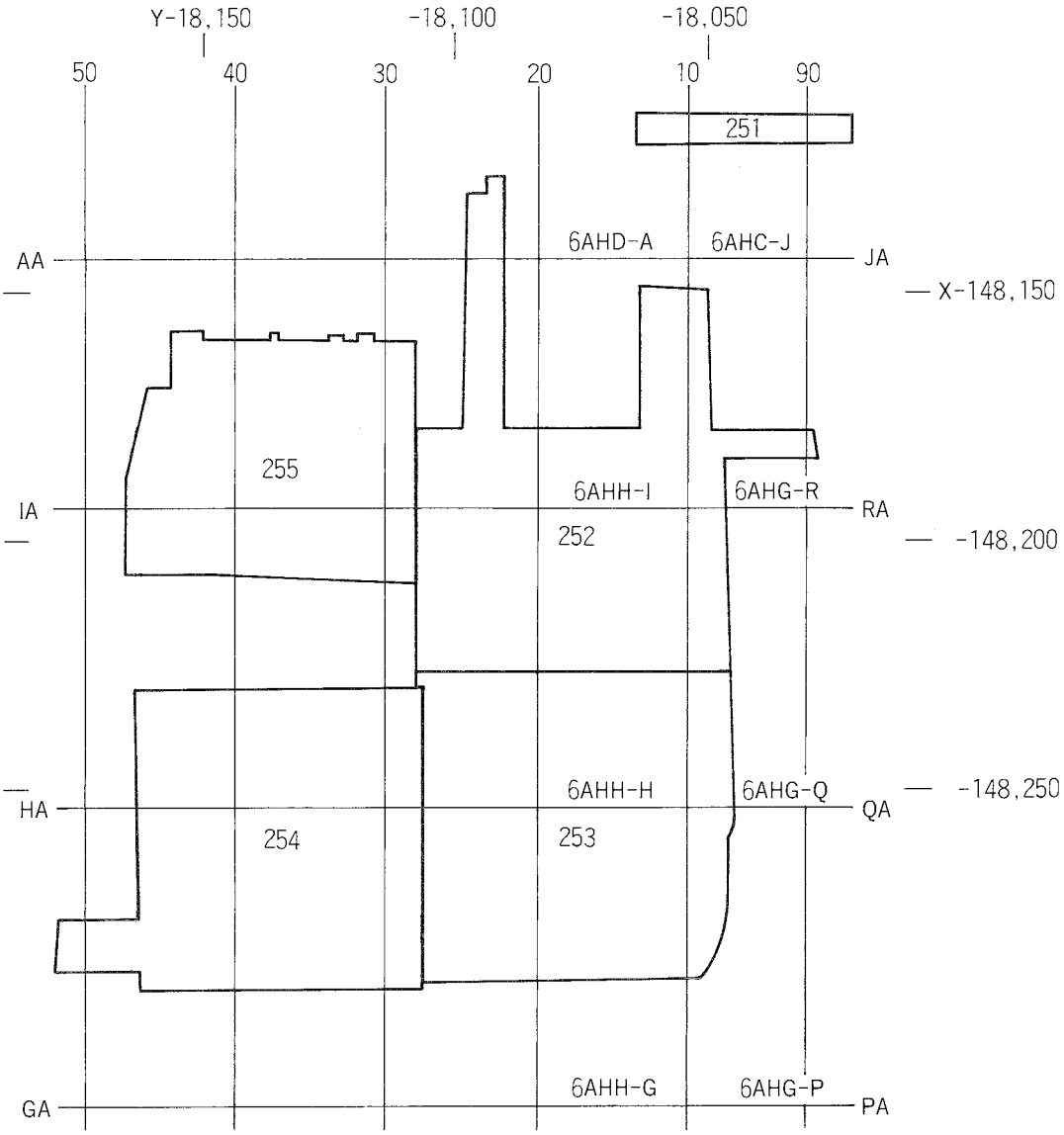


Fig. 2　地区割図

3　調査の概要

今回の調査は、左京七条一坊十六坪を中心とする約31,500 m² を対象として、約10ケ月間5次にわたって実施した。調査面積は、計約14,200 m²、検出した奈良時代以降の主な遺構は、建物58棟、塀49条、井戸11基、土器埋納遺構５基、祭祀土坑１基、溝15条、道路４条および両側溝等であり、このほか、古墳時代の竪穴住居址と平安時代の木棺墓を検出した。遺物としては、東一坊大路西側溝を中心に、木簡、瓦塼類、土器、土製品、木製品、金属製品、石製品等が出土した。

A　第251次調査

東一坊大路の位置と規模を明らかにするために、六条大路想定位置の北(6AHC—J 区、6AHD—A 区)で実施した調査である。東西に長い調査区を設定したが、後世の沼状の堆積が広がっており、東一坊大路とその東西両側溝は遺存していなかった。

沼状の堆積

B　第252次調査

左京七条一坊十六坪の北東部、及び東一坊大路、六条大路（6AHD—A 区、6AHG—Q･R 区、6AHH—H･I 区)の調査である。東一坊大路と六条大路の位置と規模が明らかになるなど、平城京の条坊に関して一定の成果を得たのであるが、坪内の遺構密度は希薄であった。

検出した遺構は、東一坊大路、六条大路およびそれらの両側溝のほか、掘立柱建物８棟、掘立柱塀３条、井戸１基等である。遺構の重複関係は、３棟の建物をそれぞれ同位置、あるいは近接した位置で建て替えていることが確認できたに過ぎず、遺構に伴って出土した遺物も少なく、遺構の変遷や時期を知る手がかりは乏しかった。わずかに、調査区南辺で検出した２間５間の東西棟建物が、坪東半を東西二等分する位置にあり、中心的建物群を構成する可能性が考えられた。なお、坪を南北にほぼ二等分すると考えられる位置には、東西溝 SD6430があるが、坪東端まで達しておらず、また、途中で溝が途切れ、通路状の遺構 SX6429があるので、宅地内の区画溝、あるいは地割溝になると考えられた。

東一坊大路西側溝

東一坊大路については両側溝心々距離22.5 m であることが明らかになり、その西側溝は、奈良時代末に一度掘り直しているが、過去における上流部分の調査と同様に幅約８m と規模が大きく、平城京内の基幹排水路にふさわしいものであった。出土遺物には、木簡をはじめ、金属製人形や木製形代、人面墨書土器、土馬等の祭祀関連遺物や鋳造関連遺物がある。特に、鉄製人形の出土は、従来例が少なかっただけに注目されるであろう。西側溝は、その後、規模を縮小しつつも、平安時代にいたっても、溝として機能しており、最後は水田の用水路となっていたことが明らかになった。十六坪の北から1/3付近では、西側溝に架かる橋状遺構を検出した。時期を決定しえなかったが、大路側溝に架かる橋とすると、十六坪の性格とも関わわる可能性があり、今後の坪内の調査が注目された。

六条大路

一方、六条大路については、初めてその両側溝を併せて調査した。当初想定していた位置より北で検出したのであるが、両側溝心々距離が14.3 m で、従来知られている他の大路より狭い

ことが明らかになった。平城京の条坊研究に新たな資料を加えることができたのであるが、同時に新たな問題も提起することとなった。

木棺墓　なお、東一坊大路西側溝の西岸近くでは、平安時代の木棺墓を検出し、銅銭（承和昌寶）や漆器を含む豊富な副葬品からその年代が推定でき、平城京廃絶後の土地利用の一端をうかがうことができた。このほか、六条大路の路面上では土器埋納遺構１基を検出し、東一坊大路の路面上では古墳時代の竪穴住居址を検出した。

C　第253次調査

第252次調査区の南、十六坪南東部と十五坪北辺東半（6AHG—P・Q区、6AHH—G・H区）の調査で、条坊関係では、ひき続き東一坊大路西側溝を調査するとともに、七条条間北小路と南北両側溝の東半を調査した。

東一坊大路西側溝は、今回の調査で、当初の計画通り１坊分を発掘することができた。出土遺物には、第252次調査と同様、大量の木簡、木製品、金属製品、土器・土製品等がある。

七条条間北小路は、従来知られている小路の規模の範疇に収まるものであったが、六条大路道路心から推定される位置より南で検出した。その結果、道路心々距離は条坊計画寸法より長い460尺ほどになり、第252次調査で検出した東西溝SD6430は、道路心々間を南北にほぼ二等分する位置にあることが判明した。

坪内では、掘立柱建物８棟（内２棟は第252次調査と重複）、掘立柱塀３条を検出したが、第252次調査と同様、建物遺構の密度は高くなく、調査区南西部と北東部には、広い空間がある。第252次調査区南辺で検出した東西棟建物は、南に廂を伴うことが判明し、建て替えに際して南廂を廃していることが明らかになった。その南にはほぼ同規模の南廂付きの東西棟建物SB6500が建ち、さらに小規模ながら脇殿風の南北棟建物（SB6490・6495）もあり、これらが、十六坪東半における中心的な建物群を構成していることが明らかになった。また、井戸も、坪北東部の１基のみであることから、少なくとも十六坪東半は一体で利用していたと考えられた。また、南辺に門になると考えられる遺構SX6475を検出したことにより、外周閉塞施設の存在を想定しうるようになった。

坪東半の中心的建物群

一方、十五坪は、北辺を調査したに過ぎず、掘立柱建物の一部を検出したのみであった。調査区西端近くでは、七条条間北小路南側溝の幅を狭くしている部分（SX6473）があり、板を架け渡して橋とした可能性がある。このように、本調査により、それぞれの坪への出入りに関する手がかりを得ることができた。

なお、七条条間北小路との交差点に近い東一坊大路路面上の西側溝東岸に近接する位置で２基、西側溝西岸近くで１基、それぞれ土器埋納遺構を検出した。

D　第254次調査

第253次調査区の西、十六坪南西部と十五坪北辺西半（6AHH—G・H区）の調査で、第253次調査にひき続き、七条条間北小路の西半を調査するとともに、七条条間北小路と東一坊坊間東小路の交差点を調査し、東一坊坊間東小路東側溝に架かる橋を検出した。

これまでの東半の状況とは一変して、遺構密度が高く、十六坪内では、掘立柱建物19棟（内１

棟は第253次調査と重複)、掘立柱塀19条、井戸1基等、十五坪内では掘立柱建物4棟(内1棟は第253次調査と重複)、掘立柱塀2条等を検出した。十六坪の遺構変遷については、遺構の方位の振れ、重複関係、位置関係などから4時期(その後の検討の結果、本報告では6時期に区分している)に区分することができた。加えて、本調査で、十六坪の約6割近くを調査したことになり、敷地の利用形態や性格等について、検討しうるようになった。

坪を東西に二等分する位置で検出した南北掘立柱塀は、南端近くに柱間の広い個所があり、坪南半については、そこを通路として東西で使い分けていたと考えられるにいたった。調査区北西部には廂付の掘立柱建物群があり、十六坪西半の中心がここにあったと見られ、さらに、総柱建物の倉庫や貯蔵施設と見られる建物の存在から、整然とした建物配置をとる南東部に対して、南西部は日常生活をまかなう厨的空間と位置づけた。一方、建物や塀の位置から、十六坪南辺には、築地等の外周閉塞施設が存在しない時期のあることも明らかになった。また、調査区南東部では刳抜井戸を検出し、その出土遺物から、調査地においては、平安時代まで活動が及んでいたことが判明し、第252次調査の木棺墓とともに、平城京廃都後の状況を知る手がかりを得ることができた。

坪内は東西で使い分け

本調査においても、七条条間北小路と東一坊坊間東小路の交差点において土器埋納遺構1基を検出した。また、東一坊坊間東小路との交差点近くの七条条間北小路南側溝の底で、祭祀土坑SX6530を検出した。これは側溝に水がない段階で掘り、馬歯、馬骨、墨書人面土器などを納めたものである。このような祭祀は、平城京では、従来知られていなかっただけに注目されるであろう。なお、北側溝のほぼ同位置にも同様な土坑を検出したが、こちらからは顕著な遺物の出土はなかった。

祭祀土坑

E　第255次調査

十六坪北西部(6AHH－H・I区)の調査である。検出した遺構は、掘立柱建物21棟、掘立柱塀10条、井戸3基等で、遺構の重複関係等、遺構変遷を知る手がかりが少なかったが、第254次調査の成果にしたがい、建物の位置関係等から4時期に区分された。

調査区の関係で、第252次調査検出の坪を南北にほぼ二等分する位置にある東西溝SD6430の有無を確認することはできなかった。一方、第254次調査で検出した坪を東西に二等分する位置に設けられた南北掘立柱塀は、坪の北半には及んでいないことが判明した。さらに、調査区北東隅で検出した南北廂付東西棟SB6630が坪を東西に二等分する線上に位置し、区画施設等を検出していないことから、北半についても、一体の敷地利用と考えられ、十六坪は奈良時代を通して、1町の敷地利用であることが明らかになった。坪北西部は、この南北廂付東西棟とその西に並ぶ東西棟SB6635を除くと、比較的小規模な建物を雑然と配置しており、十六坪の主要な建物群は、やはり南東部にあることが明らかになった。

1町占地

最後に、第252次調査の北西拡張区で検出した十六坪北面築地の雨落溝SD6446は、調査区北辺中央付近で途切れることが判明した。西方については削平された可能性も考えられたが、雨落溝が想定される個所において、溝と重複する、あるいは併存しがたい位置で掘立柱建物を検出していることから、外周閉塞施設が存在しない時期も考えられ、今回の調査区では解決しえなかった。

4　調査日誌

A　第251次調査

6AHC—J区、6AHD—A区
1994年5月31日～6月21日

5・31　調査区(東西43 m・南北6 m)を設定し、重機による表土、耕土、床土の除去をはじめる。

6・1　排水溝を掘りはじめる。調査区北側にも水抜き用の溝を掘る。

6・2　地区杭を打つ。

6・3　排水溝を掘り終わる。調査区四壁の整形後、西側から遺物包含層(黄灰土層)を除去し、遺構検出にかかる。

6・6　調査区の西端部では、遺物包含層の下は砂と粘土の堆積層になる。遺物は南北溝で取り上げたが、溝ではなく、また、道路と想定された部分は、沼状の堆積である可能性が高くなる。

6・7　排水溝をさらに掘り下げるが、地山に達しない。とりあえず、沼状堆積層の北半部について部分的に掘り下げはじめる。遺物は灰色土として取り上げる。道路側溝は存在しない可能性がでてきた。JI88区で土坑状の穴を検出する。

6・8　沼状堆積の範囲は、11ライン付近から89ライン付近に及ぶ。JI90～91区付近には、さらに下層の堆積層があり、灰色土下層と命名する。JI88区の土坑状の穴を掘りはじめる。

6・10　調査区北壁断面で、93・94ライン付近に2条の溝状の堆積を確認。これの検出面を暗青灰土とする。

6・14　暗青灰土層を掘り下げたところ、94ライン付近で、沼状遺構の底で斜行溝(SX6403)を検出。JI88区の土坑は野井戸(SE6401)のようである。掘り下げ後、写真撮影。

6・15　昨日検出した斜行溝の東で、もう1条の斜行溝(SX6404)を検出。遺構検出終了し、午後から写真撮影と平面実測。

6・16　平面実測終了し、土層図作成にかかる。

6・17　土層図作成終了。

6・21　砂入れして、調査終了。

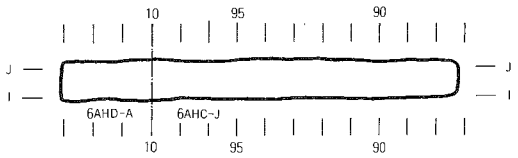


Fig. 3　第251次調査区遺構略図

B　第252次調査

6AHD—A区、6AHG—Q・R区、6AHH—H・I区
1994年6月1日～10月26日

6・1　第251次調査区にひき続き、第252次調査区、第253次調査区を併せて、北東から重機による表土、耕土、床土の除去をはじめる。

6・2　調査区の東限を一応11ラインとする。これで、第252次調査区は東西50 m・南北48 m、第253次調査区は東西50 m・南北63 mとなる。重機による排土は、湧水が多く難航する。事業地全域の排水と並行して進めることにする。

6・14　調査区西側の排水溝を掘りはじめる。

6・15　地区杭を打つ。

6・29　第252次調査区、第253次調査区の排水溝を掘り終わる。

6・30　西から遺構検出。南半には遺構らしきものがあるが、北半は何もない。

7・1　現場班交代し、ひき続いて25～26ライン間までの遺構検出をするが、遺構密度は極めて低い。東西畦の北は暗灰土の混じる灰色砂質土であるが、南は黄褐土が多い。ともに所々に下層の青灰砂質土がでている。5条の溝を検出したが、いずれも耕作溝であろう。

7・4　梅雨開け宣言あり。HJ24区、HJ25区において小柱穴を5個検出する。東西溝数条があるが、他に顕著な遺構はみられない。

7・5　HQ24区、IB24区で柱穴を検出する。それぞれ、これらを西妻とする梁行2間の東西棟掘立柱建物になりそうである。

7・6　昨日検出の柱穴は、それぞれ桁行3間の東西棟(SB6435・SB6440)としてまとまった。一部小穴が柱穴に重なりはじめる。

7・7　IA21～IC21区で、南北に並ぶ柱穴3個を検出する。I地区の掘立柱建物(SB6440)は東に廂を伴うのであろうか。調査区南端近くでも、

21・22ライン付近で柱穴5個を検出し、東西棟になりそうである。I D21区では、径2.7mの土坑を検出する。

7・8　20ラインまで遺構検出。昨日、調査区南端付近で検出した柱穴の続きを検出する。

7・11　H地区の掘立柱建物は、一部が南北畦にかかる4間目の柱穴を検出する。

7・12　H地区の掘立柱建物は、18ライン西で東妻を検出し、2間5間の東西棟(SB6426)でまとまる。南東隅の柱抜取穴には、土器が入っている。調査区西端から続いていたNライン北の東西溝(SD6430)は、18ラインまでは延びていない。HS19区からI C18区ぐらいまでは、遺構検出面が、西側は灰色砂質土層、東側は茶灰褐土層と違いがある。

7・13　本日より、作業を分け、遺構のチェックもはじめる。西から26ラインまでを精査する。Nライン北の東西溝(SD6430)を18ライン東で再び検出し、この溝が18ラインでいったん途切れることが判明する。この溝は、坪を南北に二分する想定位置に近い。

7・14　14～15ライン間で、東側が一段落ちる。東一坊大路西側溝の堆積が広がっていると考え、南北大溝と命名する。これの範囲を確認するため、東西畦の南で試掘したところ、この堆積は、調査区内では収まらないことが判明したので、調査区を東に拡張することにする。

7・15　西側のベルコンは、午後電圧低下のため、遺構精査ができず。東側では、昨日検出した南北大溝の輪郭線を確定するとともに、堆積層の暗灰粘質土を一部下げはじめる。

7・18　調査区を東に拡張するため、第253次調査区の南東隅より、重機による排土をはじめる。一部試掘したところ、遺構検出面から1.3mほどは

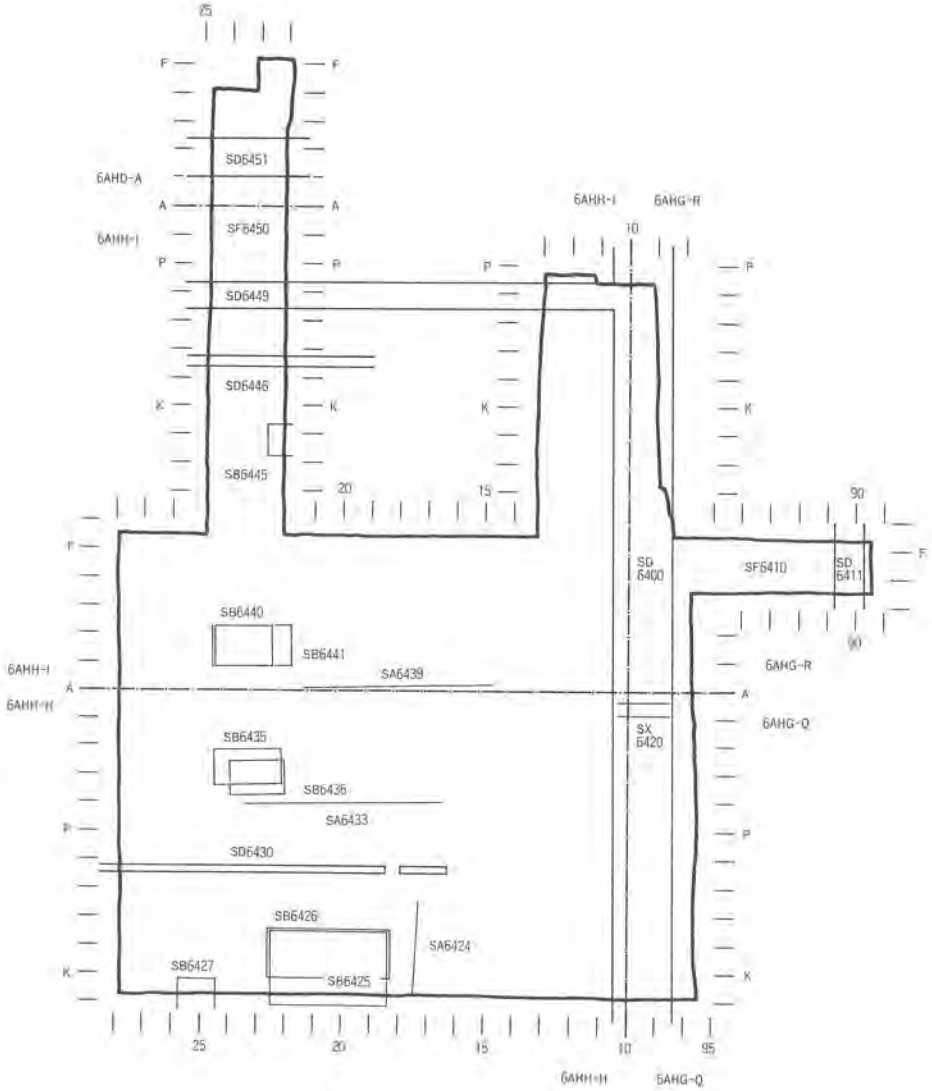


Fig. 4　第252次調査区遺構略図

暗灰色の粘質土が堆積する。HM13の地区杭の南と東に塼、石が集中する。HO～HS区の12ラインと13ラインの中間で、南北に一本線が通る。ここから東が西側溝になるのであろうか。

7・19　調査区の東への拡張は、11ラインから東4mまでとし、重機による排土は本日で終了する。さらに、調査区北端では、東側溝を検出するため、8m幅で東へ26m拡張することにする。

7・20　遺構検出は、当初設定した調査区の東端(11ライン)に達する。南北大溝の暗灰粘質土層を掘り終わり、その下の灰黄粘質土の掘り下げをはじめる。重機による東拡張区の排土は、本日1日で終了。

7・21　東拡張区に続き、六条大路の位置と規模を確認するため、重機による北西拡張区(東西8m・南北46m)の排土にかかる。

7・22　調査区東端近くの灰黄粘土層から、奈良末～平安の土器が出土。この層の下に奈良時代の遺構があると考えられる。東一坊大路西側溝の西岸は、偶然にも、当初設定した調査区の東排水溝とほぼ一致するようである。北西拡張区に続き、西側溝と六条大路南側溝との合流部を確認すべく、重機による北東拡張区(東西11m・南北20m)の排土にかかる。

7・25　北東拡張区、東拡張区の地区杭を打つ。南北大溝は灰黄粘土層の下の暗茶灰粘土層の掘り下げをはじめる。

7・26　西側からの精査は22～23ライン間まで到達する。22～24ラインで、東西畦をまたぐ掘立柱建物(SB6436)を検出。東でやや北に振れる。HP24区付近では、黄灰土の下の整地層である灰褐土層を取りはじめる。

7・27　遺構精査で検出した調査区南西部の「コ」字状溝(SD6431)を掘る。柱穴の精査をした結果、調査区南端の東西棟については、新旧2時期(SB6425・SB6426)あることが判明する。

7・28　東西畦の南で南北大溝を試掘したところ、東に拡張したにも関わらず、溝が収まらないことが明らかになったので、北東拡張区と合わせ、東にさらに5m拡張することにする。調査区南端の掘立柱建物(SB6426)について、抜き取りも含め、新旧柱穴の重複関係を検討する。輪郭が決定したものから掘り下げはじめる。

7・29　北西拡張区の排水溝を掘り、東西の壁で溝を検出する。重機による排土終了。

8・1　東拡張区の排水溝を掘る。西からの精査は18ラインの東まで。北西拡張区での知見に基づき、北東拡張区をさらに北に拡張すべく、重機で排土する。北はX＝－148,149.5としたが、明日さらに50cm北へ延ばす予定。

8・2　坪南北二分の一溝(SD6430)の途切れる部分の北に柱穴2個を検出する。出入り口になるのであろうか。東拡張区では、90ラインの東西で、東一坊大路東側溝の両岸を検出。幅約3m。西側溝東岸も確認し、東一坊大路は側溝心々で約23mとなる。北東拡張区の重機による排土。北限をX＝－148,149とする。

8・3　Nライン北の区画溝(SD6430)は、16ライン近くでなくなる。東拡張区の東一坊大路東側溝の堆積土を半スコさげる。遺物は東側溝青灰粘質土で取り上げる。東一坊大路の路面上に方形の遺構を検出。埋土は黄灰粘土。竪穴住居址になるのかもしれない。北東拡張区は、重機排土と並行して、東西に排水溝を掘る。東辺の再拡張(11ラインから東へ10m)は、第253次調査区南端から重機による掘削を開始。西側溝は、当初調査区の北端部(Fライン北)で、試掘したところ、砂質気味の粘土(後に、灰色粘土層と褐色砂に分層)の下は、青灰粘土層、茶灰土(木屑層)と続くことが判明する。

8・4　西からの精査は13ラインまで到達する。東拡張区では、東側溝を掘り下げる。西側溝は、東岸の検出とFライン北の東西畦の土層図作成。

8・5　東拡張区は東側溝、竪穴住居址の土層図作成と地上写真撮影。東辺の拡張では、第253次調査区の東西畦予定地(Aライン)の北側で試掘し、西側溝の東岸を確認。その深さまで、重機で掘削することにする。ただ、第253次調査区の南半では、西側溝東岸は、拡張部の東になるようである。基本的には、溝を掘り上げることを目的とするが、排土が近接して危険なため、重機で可能な限り排土を東に移動することにする。

8・8　北東拡張区では、重機で拡張区を整形するとともに、排水溝掘りと並行して、遺構検出をはじめる。HP14区の井戸(SE6432)は、南半を掘り下げはじめる。14ライン東、南北大溝の上部堆積土は灰褐砂土とする。

8・9　北東拡張区では、Mラインから北が六条大路南側溝になるようであるが、拡張区内では、北岸が確認できない。IK12区で埋土に土器を含んだ土坑(SK6423)を検出する。

8・10　HP14区の井戸(SE6432)の掘り下げを続けたところ、一辺約90cmの縦板組の井戸枠を検出する。六条大路南側溝と東一坊大路西側溝の関係を検討するため、土層観察用に畦を残すことにする。また、南側溝の北岸を検出するため、北東拡張区を北に拡張することにする。

8・11　六条大路南側溝の北岸は拡張しても確認できず、北東拡張区の西端を重機で北へさらに3m拡張する。西側溝西岸は、13ライン東に、南北でいくつもの土の違いがあり、複雑な状況を呈している。西側溝では、堆積が西に広がるHL11区の北西に土層観察用の畦を残して掘る。畦の南側

は、幅40 cm 程度の溝となった。

8・12　西側溝西岸の検出作業。拡張した本調査区東壁の整形。

8・16　西側溝は96ライン付近で東岸が確定し、東西畦の南では、掘り下げをはじめる。北東拡張区では、南側溝北岸は再拡張しても確認できず。さらに、北に拡張することにする。

8・18　西側溝堆積土の灰黄粘土層、灰色粘土層のうち、上層の灰黄粘土の除去を続ける。北東拡張区では、上層の暗茶灰粘土を除去した後、下層の灰色粘土層を掘りはじめる。ＩK12区の土坑(SK6423)の写真撮影。

8・19　西側溝灰黄粘土層の掘り下げ。北東拡張区では西排水溝を掘る。

8・22　西側溝灰黄粘土層の掘り下げ。ＩL10区から瓦器が出土。北東拡張区では、暗茶灰粘土層に続き、灰色粘土層の除去。東西畦のうち、西側溝にかかる部分をはずしはじめる。

8・23　西側溝灰色粘土層の掘り下げ。灰色粘土を除去すると、テラス状の平坦面が現れ、そこで溝幅が狭くなり、そこから再び傾斜を強めて落ち込むようである。北西拡張区の六条大路南側溝でも、ほぼ同様の状況が窺え、Ｎライン南45 cm の位置で、２段目の落ちを検出する。

8・24　HL11～HL13区に設定した東西畦で、珪藻分析・花粉分析のための土壌サンプリングをおこなう。西側溝では灰色粘土層の掘り下げを続ける。ＩK12区の土坑(SK6423)の掘り下げを再開する。上半部より布目痕跡のある漆膜片が出土。

8・25　西側溝は、灰色粘土層の掘り下げ。調査区南端のQJ97区で、杭・横木・人頭大の礫からなる東西方向のしがらみ(SX6452)を検出。ここで、溝は東へ曲がる。11世紀代の瓦器が出土する。東西畦から北は、灰色粘土層の除去が東岸まで達する。ＩK12区の土坑(SK6423)の埋土は、昨日までが土坑１、本日から下層部分を暗灰粘質土とし、遺物を取り上げる。また、土坑中央に東西畦を設け、そこで地区を南北に分けることにする。

8・26　西側溝灰色粘土層の掘り下げは、北東拡張区を除き、ほぼ終了する。溝は用水路の様相を呈しており、それが調査区南端で堰き止められて、東へ流路を変える。これが、11世紀頃の西側溝の姿であろう。西側溝から東へ支流が分岐する地点では、溝底がやや深くなり、灰色粘土が比較的厚く堆積している。北東拡張区の西側溝灰色粘土層の除去を再開。ＩK12区の土坑は、底が近づくにつれ、遺物が少なくなる。

8・29　北東拡張区では、西側溝灰色粘土層を掘り下げる。東へ達し、折り返しも灰色粘土で遺物を取り上げる。

8・30　北東拡張区の土坑(SK6423)、西側溝しがらみなどの写真撮影。北東拡張区では、西側溝灰色粘土層の除去。北西拡張区にベルコンを並べる。

8・31　北東拡張区の西排水溝をX＝－148,138.8まで重機で北へ延長し、六条大路南側溝の北岸を探す。標高53.6 m 付近の砂層を追うが、砂層が続いたままである。

9・1　北東拡張区では、RH～RJ ライン間で、西側溝の支流が西にのびる。北西拡張区では、遺構検出面までを本調査区と同様、黄灰土として遺物を取り上げるが、ＩM ライン以北は、遺構検出面が一段下がり、その上には、灰色の粘質土が堆積している。AC～AD ラインの中央以北は、灰色粘土層をはずすと粗砂になる。

9・2　北東拡張区のＩK12区の土坑(SK6423)と西側溝から西へ広がる溝(SD6421)を完掘する。

9・5　北西拡張区では、一段高いＩM ラインの南で遺構検出。ＩP ラインで東西に線がつくが、その北側の土層の判断がつかず、下げきれない状況である。排水溝で確認した東西溝が六条大路南側溝とすると、路面推定幅から、北側溝が拡張区内に収まらないことも考えられたため、北端の東半を約3 m、重機で拡張する。

9・6　空撮用の対空標識打ち。北西拡張区では黄灰土層をはずす。北側溝は、A～Ｃライン間で灰色粘質土が広がり、判断に苦しむ。南側溝は、東壁では浅い窪みしかなく、その下には、溝とは考えにくい土坑がある。西から南側溝埋土黄褐土として掘り下げる。北側溝では、灰色粘質土層の下の暗灰シルト層で合わせ口甕棺を検出する。

9・7　北西拡張区では、北側溝暗灰シルト層、南側溝黄褐土層の排土。脂肪酸分析のため、土器埋納遺構(SX6448)の土壌を採取。

9・8　空撮後、ひき続き地上写真撮影。

9・9　地上写真撮影。北西拡張区は、北側溝暗灰シルト層の下の暗灰砂質粘土層、暗灰粘土層の掘り下げ。その下は灰黒粘土層となる。土器埋納遺構は、実測後、土器を取り上げる。東拡張区北壁の土層図作成。

9・12　本調査区の北壁、西壁の排水溝を掘り下げ、土層図の作成にとりかかる。北西拡張区では北側溝灰黒粘土層の排土。灰褐砂で底になる。北側溝の底では、これに先行する溝が、北西から南東に斜行する。南側溝は茶灰シルト層を除去したところ、灰色粘土を埋土とする東西溝を検出。東壁では土坑とみていたが、南側溝を掘りなおした溝であることが判明した。

9・13　北西拡張区では、南側溝の掘り下げ後、写真撮影。北東拡張区では、南側溝と西側溝の支流(SD6421)の掘り下げをはじめる。遺物は、青灰粗砂として取り上げる。一部の柱穴の断ち割りをはじめる。土層図作成のため、南北畦の東側を１

スコ下げる。

9・14　昨日に続き、北東拡張区の掘り下げを続ける。北西拡張区では、雨落溝の深さを東壁で確認。南側溝の掘り下げ終了。建物群の柱穴の断ち割りにかかる。東西畦にかかる建物(SB6435)には柱根が残っており、建物群のみ平面実測することになる。

9・19　北西拡張区では、雨落溝を掘りきる。調査区南端の掘立柱建物(SB6425・SB6426)は、断ち割りの結果、新旧関係が逆転するものがあり、柱穴の組み合わせが問題になる。土層図作成のため、東西畦の際を掘り下げる。

9・20　北東拡張区では、西側溝を掘る。Ｊ～Ｍラインでは、青灰細砂層を、ＩＨ・ＩＩ区の10～12ラインでは青灰細砂層の下の暗灰粘土を掘る。北西拡張区では、雨落溝、南側溝の写真撮影。南の柱穴の断ち割り。調査区南端の掘立柱建物の柱穴の断ち割り。

9・21　北東拡張区の掘り下げと並行して、柱穴の断ち割りを続ける。畦土層図の作成。

9・22　北西拡張区は平面実測。ＩＩ22～ＩＪ22区で建物(SB6445)の西妻を検出する。北東拡張区は、西側溝灰色粘砂層の掘り下げ。木簡、一本歯の下駄、刀子等が出土。HP14区の井戸(SE6432)の掘り下げの準備にはいる。

9・26　柱穴の断ち割りと土層図作成のため掘り下げた畦際の埋め戻し。北西拡張区では、平面実測終了。北東拡張区では、西側溝暗灰砂層の掘り下げ。東側では、木屑層がでているが、中央では薄い。木屑層の下は粗砂になる。南側溝部分は、暗灰粘土、青灰粗砂として掘り下げる。

9・27　HO13区で木棺墓(SX6428)を検出。北東拡張区では、南側溝部分は灰色粘砂、西側溝部分は暗灰砂として掘り下げる。暗灰砂層には、土馬、硯の他に、8世紀後半から10世紀の墨書土器が含まれる。

9・28　西側溝は、灰色砂粘層、暗灰砂層の掘り下げ。動物遺存体等が出土する。木棺墓には、銭、漆箱、須恵器平瓶等が副葬されている。土器は奈良時代より新しい。現地説明会の準備。

9・29　北東拡張区では、西側溝暗灰砂層の掘り下げを続ける。ＩＪ11区で、曲物を埋設した取水遺構(SX6422)を検出する。現地説明会の準備。

9・30　西側溝は、昨日にひき続き暗灰砂層の掘り下げ。HP14区の井戸(SE6432)の写真撮影。木棺墓は、畦を残し棺輪郭部内側の落ち込み部分を掘り下げ、遺物を出して写真撮影。その後、平面と断面の実測。現地説明会の準備。

10・1　現地説明会。

10・3　本日から秋の現場班も稼動する。第252次調査区のうち、西側溝のＦライン以南とHP14区の井戸を秋の現場班が引き継ぐ。西側溝は、Ｆライン北とＲラインの11ライン以東に畦を再設定。Ｄ～Ｆラインでは青灰粘土層の上面を確認する。Ｒ～Ｄラインでは、青灰細砂層を掘り下げ、奈良時代後半期の西側溝東岸の検出作業をする。北東拡張区では、西側溝部分の暗灰砂層の掘り上げ。ＩＪ11区の曲物埋設取水遺構(SX6422)は、実測後、写真撮影。木棺墓は、畦をはずしたところ、頭部付近で水晶玉を検出する。遺物出土状況の写真撮影後、方形漆器を除く、土器、漆器等の遺物を取り上げる。畦を再設定し、棺輪郭線の内側を掘り下げる。掘形ラインが現状掘削面より、深く落ちていくようにみえるが、なお、精査が必要。井戸(SE6432)の実測。

10・4　西側溝の堆積状況を観察するため、ＣラインとＲライン南で試掘。Ｒライン南では、ほぼ溝底まで掘り下げ、木屑層も確認する。Ｒライン以南では、掘り下げの範囲をＮラインまで広げる。西側溝東岸確認のため、青灰細砂層を掘り下げ、暗灰粘土面に達する。遺物は非常に少ない。北東拡張区では、西側溝最下層の褐色粗砂層の掘り下げ。ＩＮ10区で木杭を検出。木棺墓は棺身部分の掘り下げ。高台付土師器椀の下から銅銭出土。遺物を取り上げたところ、棺材(底板)が遺存していた。南北畦沿い南端でも断ち割る。棺身部と掘形の落ちは明瞭であるが、掘形の底は依然として不明。断ち割った底面で、横桟の痕跡と思われる灰色粘土帯を検出する。

10・5　西側溝堆積土のうち、暗灰粘土層と灰色砂粘層については、土層の境が不明瞭のため、遺物は一括して暗灰粘土で取り上げる。北東拡張区では、写真撮影の後、平面実測の準備。木棺墓は、棺身部分の掘り下げ後、実測図の補足。棺西側の縦桟状の灰色粘土帯は、棺側の圧痕と判断し、桟ではないと理解する。棺内完掘後の写真撮影。脂肪酸分析のため、木棺墓の土壌を採取する。

10・6　西側溝は、Ｎラインまでは暗灰粘土層をほぼ完掘する。暗灰砂層の掘り下げにかかり、Ｃライン以北を除き完掘する。暗灰砂層の下の木屑層は、Ｂライン以北では東岸、Ｂ～Ｐラインでは西岸に堆積する。暗灰砂層からは、金属製人形、神功開寶、刀子、木印等が出土。QT10区で、南北に並ぶ柱根3本を検出。橋脚にでもなるのであろうか。溝対岸にある石も、これと関連する可能性がある。北東拡張区は実測終了。木棺墓は、掘形底も現状の棺底と変わりのない浅いものであることが判明。横桟も掘形底に食い込んでいるものと判断する。掘形埋土も掘り上げたが、遺物はなく、埋め戻して終わる。

10・7　西側溝は、西岸の木屑層の掘り下げ。Ｒライン畦以南は、木屑層とその下の褐色粗砂層も

掘り下げる。Rライン畦以北では、東岸の検出作業後、西岸の木屑層を掘り下げをおこなう。Dライン以北では、東岸側を掘り下げる。

10・11　Rライン以北では、溝両岸の精査。褐色粗砂層を残して完掘に近づく。Rライン以南では、褐色粗砂層を完掘する。B～Cラインの溝西側底でしがらみの杭とみられる木杭6本を検出。HL12～13区の東西畦をはずす。畦の北に残っていた石と塼の入った灰色砂質土は浅く、これを除去すると、HK12区から続く南北溝が終わっていることが判明した。

10・12　Rライン以北は西側溝最下層の褐色粗砂層を完掘。和同開珎、鉄人形、銅人形等が出土。複雑な様相を呈していたため、保留していたNライン以南の作業を開始する。西側溝東岸はほぼ確定できたが、西は一部不明瞭。地山が崩壊した黄粗砂を含む青灰細砂層を掘り下げるが、西の溜りからの流入土によりわかりにくくなっている。

10・13　Fライン北の畦を、層ごとに遺物を取り上げながらはずす。Nライン以北は、後日の写真撮影に備え清掃。Nライン以南では、西側溝上層の青灰細砂層を掘る。調査区南端のJライン北で試掘したところ、かなり深いところから中世(10世紀末～11世紀)の土師器が出土した。しがらみを設けたのは、それ以降のことになろう。

10・14　昨日にひき続き、調査区南端で、西側溝の掘り下げをおこなう。しがらみの部分の下に大きな溜りがある。Kライン南側の石、杭ともに、この溜りに関係するものと考えられる。昨日の土師器はこの溜りの底から出土したものである。この溜りは奈良時代の東一坊大路西側溝の一部を掘り下げてつくったものらしい。西側溝古→西側溝新→石と杭で壁を固めた溜りをつくる→しがらみを設ける、という変遷をたどるのであろうか。

10・17　Nライン以南の西側溝は、暗灰粘土層を完掘し、暗灰砂層の掘り下げにかかる。HP14区の井戸(SE6432)を掘る。井戸枠は上端から1m弱で終わる。井戸埋土は粘土で、井戸底は灰褐粗砂である。井戸底から須恵器双瓶、木片が出土。

10・18　西側溝はNライン以南を完掘し、写真撮影。井戸の断ち割りと断面図の作成を終える。

10・19　井戸枠の取り上げ。Rライン畦で土壌サンプルの採取。西側溝実測の準備にかかる。

10・20　完掘後の西側溝の平面実測図と土層図の作成。

10・24　平面実測とRライン畦の土層図のチェック。先入観を排し、改めて線引きし、図面作成。

10・25　平面実測終了。橋脚(SX6420)部分の断面図の作成。溝土層図の最終チェック。

10・26　橋脚3本を取り上げ、調査終了。

C　第253次調査

6AHG―P・Q区、6AHH―G・H区
1994年10月13日～12月27日

10・13　調査区(東西61m・南北63m)の西辺に、第254次調査区の重機排土の搬出路が必要なため、26ライン以東から調査をはじめる。ベルコンをセットし、26ラインから東に向けて、遺物包含層の黄灰土を除去しつつ遺構検出を開始。遺物は少ないが、東西畦の北で、柱穴がいくつかでてきた。

10・14　遺構検出面は、O～Hラインでは褐斑灰色粘質土であるが、その北のH～Jラインは砂地で、Oラインから南は褐色土となる。26ライン東のC～Fラインに柱穴が4個南北に並ぶ。東西畦の南では25ラインまで進むが、遺構はほとんどない。Nライン付近では、褐斑灰色土が溝状に東西方向に延びる。

10・17　24ラインまで遺構検出。砂地は、北端からHB24区まで広がり、その西側の褐斑灰色粘質土は整地土になるようである。Nライン付近の溝状の褐斑灰色土は24ライン西でなくなる。Jライン付近にも砂層があり、24ライン付近では北へ広がる。

10・18　第252次調査区西側溝写真撮影のため、作業なし。

10・19　十六坪南の七条条間北小路は、六条大路道路心から計算すると、Mラインがほぼ道路心になる。小路は幅6mほどと推定されるので、Nライン北の褐斑灰色土が北側溝かとも考えられるが、この土は24ライン付近でなくなる。Oラインの南1mにも土の違いがあるが、24ラインの東では不明瞭になる。Kラインから南1.5mほどの間は、白斑赤橙色砂質土が溝状に東へ続くようである。その南は砂地(一部粗砂)となる。

10・20　東西畦南のG地区では顕著な遺構はない。Kライン南の白斑赤橙色砂質土は東へ続いている。東西畦北のHC22区、HE22区で柱根の残る柱穴を検出。その間には柱穴がみつからない。さらにその東、21ラインの西で柱穴4個を確認。23ラインのF～Hラインで、南北に並ぶ柱穴4個を検出する。

10・21　21ライン西の柱穴4個は、掘形の大きさが一定しない。Kライン南の白斑赤橙色砂質土は、まだ東へ続いている。

10・24　東西畦の北では、柱穴を順調に検出する。ただし並びはそれほどよくはない。東西畦の南には顕著な遺構がなく、遺構検出面の土の違いを追い続けている。Kライン南の白斑赤橙色砂質土

は、東西溝の埋土としてよさそうである。幅が少し細くなったが、東へ続いている。

10・25　遺構検出作業は南北畦を越える。東西畦北のDラインとFラインの柱穴は、18ラインの西で東妻を検出し、2間5間の東西棟(SB6500)となり、第252次調査で検出した建物(SB6425・SB6426)と柱筋が揃う。ただし、西妻の南北端の柱穴は未確認。また、建物南側にあるいくつかの柱穴は、南廂が付く可能性を残している。Kライン南の東西溝は、ますます不明瞭になってくる。溝ではなく、築地、あるいは土塁の崩れたものであろうか。

10・26　15ラインまで遺構検出。東西畦をはさんで柱穴を検出するが、建物としては、まだまとまらない。Mラインをはさんで幅3mほどの溝状遺構が表れた。小路に由来するものであろうか。

10・27　16ラインの東、Q～Tラインに並ぶ柱穴4個の東でさらに柱穴を検出し、2間3間の南北棟(SB6490)としてまとまりそうである。ただし、東側柱の北から2つめが不明瞭。Kライン南の白斑赤橙色砂質土は、16ライン付近で不明瞭になってしまう。Oラインの南には東西の溝状遺構が表れた。

10・28　11ライン西まで黄灰土を除去する。GN13区で土坑(?)から漆器片出土。ただし、平面形は不明瞭。12ライン付近から東には、西側溝の堆積土と考えられる土がある。

10・31　10ライン以東は重機による掘削が20～30cmほど、Rライン以南は50cmほど浅く、掘り下げが難航する。11ラインの東1m付近で、西側溝西岸らしい土の違いを検出。東西畦の南のHA～GRラインまでは、顕著であるが、東西畦の北では土の違いがはっきりしない。昨日検出の12ライン付近の土の違いは、溝最上層の乱れと考えられる。

11・1　西側溝西岸の検出作業をするが、いま一つはっきりしない。Mライン付近で、逆L字形に西に曲がる土の違いがあるが、小路側溝によるものであろうか。Tライン付近の試掘で、96ライン東1.5mほどに東岸の上がりがみえるが、Sライン以南は、調査区壁面が近く、掘り下げが危険なため、96ライン東1mまでしか発掘できないであろう。Kライン以南はさらに控えなければならない状況である。PL97区で大土坑を検出。Kライン以南は、小路との関係もあり、しばらく、掘り下げずに保留しておくことにする。

11・2　97ラインより東に向けて黄灰土を除去。東西畦の南は、調査区東壁がオーバーハングして危険なため、急遽重機によって、壁に法面をつける。東西畦の北は、東壁から96ラインの東1.2mまで掘ることにする。Jライン南に土層観察用の畦を設定。

11・4　西側溝東岸の精査。第252次調査区南端で検出された溜りにはじまるものと考えられる平安時代の新溝(SD6415)の堆積土(土層名は新溝暗褐粘質土)を除去しつつ東岸を検出する。Jライ

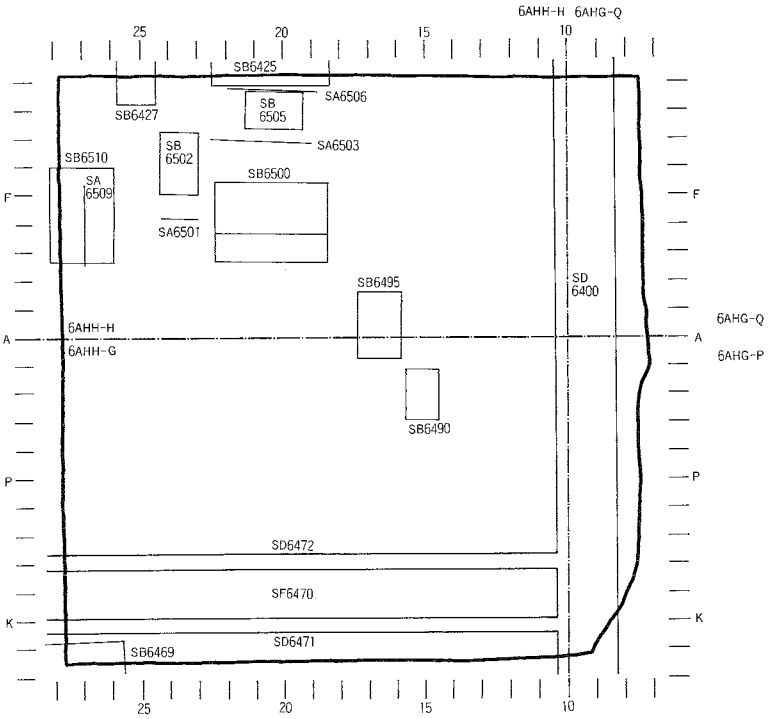


Fig. 5　第253次調査区遺構略図

ンからＥライン南1ｍまでは東岸を検出したが、それより南は、新溝が東へ広がっており、検出できない。新溝の東岸は北の方では、ほぼ10ラインにあるが、徐々に東にずれ、Ａラインの東西畦では、96ラインの西1.5ｍ付近になる。新溝からは、12世紀の瓦器が出土した。調査区南東隅は、斜行する用水路に接しているため、調査区南東角が斜めになる。

11・7　新溝を掘る。一番広がった時の新溝は、第252次調査で検出した溝最上層にあたる。西側で11ライン付近にあらわれる土の違いもこの時期にあたるのか。Ａ～Ｅラインでは新しい東への広がりがあり詳細不明。Ｏラインに土層観察用の畦を設定し、北側を試掘することにする。

11・8　新溝は、東西畦以南では西偏し、調査区内で大きく蛇行している。PR96区で、12世紀初頭の椀が出土した。Ｏラインの試掘で西側溝最下層の褐色粗砂層まで掘り下げる。東西に並ぶ杭７本を検出する。新溝の範囲を確認するとともに、11ラインの東1.2ｍの位置で西側溝の西岸を確認した。

11・9　東西畦の南では、西側溝西岸の検出。Ｌライン以南は、新溝の検出。坪境小路両側溝からの流れ込みを思わすような堆積は、今のところ確認できない。

11・10　東西畦の南では、新溝の掘り下げを終了し、写真撮影。Ｌ～Ｍライン間で新溝の東側に大土坑があるが、周辺は沼状で、遺構検出に苦労する。西側溝西岸の精査。Ｍ～Ａライン間はほぼ確定したが、部分的に不明瞭な個所がある。Ｋラインの南1.2ｍ付近から北には、溝堆積土かと考えられる青灰細砂層があり、坪境小路に関係する可能性がある。Ｍライン付近にも溝らしい堆積があるので、坪境小路心はＬライン付近になるのかもしれない。

11・11　西側溝西岸の精査でＯラインから北は確定した。昨日不明瞭であったＢ～Ｃライン間で、北東から南西へ斜行する溝(SD6482)を検出。この溝は西側溝に達したところで途切れている。Ｌ～Ｍライン間も西から溝が入り込んでいるらしく不明瞭。一方、Ｊ～Ｋライン間にある青灰細砂層は東西帯状に続いた白斑赤橙砂質土層とつながる可能性がでてきた。

11・14　西側溝の掘り下げ。東西畦以北は青灰細砂層、東西畦以南、Ｌ～Ａライン間は暗灰粘土層を掘り下げる。Ｌライン以南は黄灰土層を掘り下げ、坪境小路の精査。HC10区で、青灰細砂中から合わせ口甕棺(SX6485)が出土。東西畦以南は、Ｎ～Ｏライン間は暗灰粘土層を掘り上げ、暗灰砂層を掘りはじめる。Ｎライン以南では、小路側溝の検出。Ｍライン南とＫライン付近に東西溝があり、これが小路の両側溝になるのであろうか。ただし、六条大路道路心からの距離では、想定位置より南になる。

11・15　西側溝東岸の精査。暗灰粘土層を掘り下げる。東西畦北では、ＢラインからＦラインの北1.5ｍの間を東へ0.5ｍ拡張する。Ｆライン付近で奈良時代以前の斜行溝を検出する。Ｂ～Ｃライン間の西岸で検出した溝(SD6482)の延長と考えられる。東西畦南では、Ｔライン付近で木屑層らしき土層を検出する。東岸はＱライン付近で、東へ広がる。東からの流入路(SD6463)があるのであろうか。Ｏラインでは、東岸に東西溝(SD6462)があり、西側溝東岸が不明瞭になる。Ｏライン畦の南で、東西に並ぶ杭をさらに４本検出する。東岸沿いのＮラインで、南北に並ぶ合わせ口甕棺２基(SX6460・SX6461)を検出する。Ｍライン以南では、西側溝は東へ広がる。Ｌラインの12ライン以西では、地山が高く残っており、その南北が溝になるらしい。やはり、これが坪境小路になるようである。

11・16　東西畦以北では、HC10区の土器埋納遺構(SX6485)を残して、西側溝の平安時代以降の層を掘り終わる。東西畦以南のＮラインまでは、暗灰粘土層を除去した。Ｎライン以南では、西から流入する溝堆積土の範囲が定まりにくく難航するが、Ｌラインの南北にある溝は、やはり坪境小路にともなう溝であると考え、北側の溝を東西溝１(SD6472)とした。

11・17　東西畦の北では、西側溝の暗灰粘土層を掘り下げ、一部暗灰砂層も下げはじめる。暗灰砂層は、木屑層を浸食するように中央付近に厚く堆積し、両岸近くに木屑層が残るようである。東西畦以南では、暗灰粘土層、暗灰砂層を掘り下げるとともに坪境小路の検出作業をおこなう。北側溝(SD6472)はかなり深く、埋土は青灰細砂。これに対し、南側溝(SD6471)は浅く幅も狭い。

11・18　西側溝の掘り下げ。東西畦の北では暗灰粘土層を完掘し、暗灰砂層を掘り下げる。東西畦以南ではＯライン以南で、暗灰砂層の掘り下げ。PK96区の暗灰砂層から、ほぼ完形の鉄鋤・鍬先が出土する。

11・21　西側溝は、いよいよ遺物を多量に含む層に入る。東西畦以北では、暗灰砂層と木屑層、東西畦以南では、Ｏライン以南の暗灰砂層から褐色粗砂層の掘り下げ。銅銭、小銅鏡、銅鈴、土馬、木簡などが出土。

11・22　東西畦以北では西側溝を完掘。Ｆ～Ｈライン間では、溝底に大きな窪みがある。Ｃ～Ｄライン間では、溝の中に小さな窪みが並ぶ。橋にでもなるのであろうか。東西畦以南もＯライン以南はほぼ完掘。坪境小路との関係を確認するまで保

留してあったO～Tライン間の暗灰粘土層の掘り下げをはじめる。銅銭、海老錠の牡金具、木簡などが出土。

11・24　西側溝は、O～Tライン間の暗灰粘土層と暗灰砂層の掘り下げ。ベルコンを西側溝未完掘部分と坪内精査用の2系列に組み直す。

11・25　西側溝は、引き続きO～Tライン間の暗灰粘土層と暗灰砂層の掘り下げ。これと並行して東から小路側溝と坪内の精査を開始。小路北側溝は13ラインまで確認。小路南側溝は、東端では3時期重なっているらしく、それぞれを東西溝2～4とする。本日、第254次調査区の排土搬出路が撤去され、西端(28ライン)までの調査が可能になる。

11・28　第254次調査区の排土を処理していたブルドーザーに北の電源本線を切られたため、西側溝の作業を中止。坪内の精査に集中する。東西畦の北では、一削りして地山のチェック。坪境小路北側溝は、13ラインあたりから少しずつ浅くなっているようである。南側溝は、幅が少し広がり、西の方で検出していたKラインの白斑赤橙砂質土につながりそうである。また、東西溝2は、14ライン以東だけの掘り直しと判明した。

11・29　西側溝O～Aライン間をほぼ完掘する。坪内では、11～13ライン間で、東西畦からRラインにかけて、井戸2基(SE6479・SK6483)と南北に長い土坑2基(SK6481・SK6486)を検出する。小路両側溝の掘り下げ。

11・30　西側溝を完掘する。溝底は西高東低。また、Rライン付近の西岸近くに、斜めに打ち込まれた木杭があり、その上に大木が横たわる。東側にも自然木らしき大きな木があり、ここに橋があった可能性がある。坪内は、PQ13区の井戸状の大穴(SE6489)を15 cmほど下げる。坪境小路両側溝の掘り下げは、16ラインまで到達。

12・1　引き続き坪内の精査をするが、東西畦の北には、顕著な遺構はほとんどない。東西畦の南では、遺構精査の結果、GS14区で新たに柱穴を検出し、2間3間の南北棟(SB6490)としてまとまった。小路北側溝は、遺構検出面と溝堆積土の区別が難しく難航する。GL16区で幾何学文様を浮彫にした塼が出土。

12・2　東西畦をはさむGT～HCライン間、15～18ライン間で、建物がまとまる。2間3間の南北棟(SB6495)であるが、南面の柱割が4尺＋7尺＋4尺、あるいは、4.5尺＋6尺＋4.5尺と変則的である。南入りの建物になるのであろうか。一方、昨日検出した南北棟(SB6490)は6尺等間らしい。坪境小路両側溝の掘り下げは、18ライン付近まで進む。

12・5　坪内の精査は南北畦の西に入る。HHライン以北の遺構検出に手間取る。HH～HJライン間に建物、その南に東西塀がある可能性がでてきた。HJラインの南に並ぶ小柱穴は、第252次調査区の東西棟の南廂(SB6425)になることが判明した。HC～HGライン間の東西棟(SB6500)の南廂が揃う。南北畦の西では、GSラインに井戸らしき遺構(SK6491)を検出。小路北側溝は18ライン以西で溝幅が狭くなる兆候がある。南側溝は、南北畦より西は、少し幅が広がっている。

12・6　坪内精査用と小路側溝用の2系列にベルコンを組み直す。HH～HJライン間の建物は、2間3間の東西棟(SB6505)と考えられるが、北側柱の検出に難航する。HC～HGライン間の建物(SB6500)は、南北側柱の西端の柱穴を検出し、柱穴がすべて揃った。その北西でも、いくつか柱穴を検出する。小路両側溝は22ライン付近まで完掘する。

12・7　26ラインの東、C～Fライン間に7尺間隔で並ぶ4個の柱穴の西約3mの位置で、柱穴2個を検出。Dライン付近には柱穴がないので、東西棟になる可能性がある。小路両側溝は26ラインまで掘り上げた。北側溝は2時期あるらしい。南側溝は、22ライン付近で底に倒木、その西に窪みがあり、それ以西は底が浅くなる。

12・8　H地区では、Hライン以北は地山が砂。精査の結果、23ライン、F～Hラインの柱穴の東でも、柱穴を検出し、2間3間の南北棟(SB6502)としてまとまる。HG27区の土坑(SK6507)から、須恵器壺が出土。C～Fライン間の柱穴は、結局10個になったが、建物としてはまとまりにくい。小路両側溝は完掘した。南側溝は、GJ27区で北岸が南に寄って溝幅が狭くなっている。ここに板を渡して橋にしたのであろうか。GJ24区では、溝底が砂となり、これを延長すると、HC10区の斜行溝(SD6484)に一致する。空撮の対空標識を打つ。

12・9　空撮の予定であったが、雨のため中止。13日に延期する。

12・12　空撮の準備。坪境小路周辺を残して清掃完了。

12・13　空撮に向け、清掃、排水作業をおこなうが、天候回復せず、空撮は中止。明日に延期する。

12・14　空撮後、地上写真撮影。空撮に手違いの連絡がはいり、明日再撮影することになる。

12・15　空撮の再撮影。その後、記者発表。午後からは、昨日にひき続き地上写真撮影。

12・16　午前中で地上写真撮影終了。現地説明会の準備。東西畦のうち西側溝部分の土層図作成と土器埋納遺構3基(SX6460・SX6461・SX6485)の実測。

12・17　現地説明会。

12・19　西側溝東岸、路面上にある土器埋納遺構

(SX6460・SX6461)の断ち割りと西岸の井戸状遺構(SE6479・SK6483・SE6489)の掘り下げ。1基(SE6479)は、瓦器の時期の井戸と推定される。西側溝Oライン畦土層図の作成。

12・20　脂肪酸分析のため土器埋納遺構の土壌を採取し、土器を取り上げる。Aライン畦とOライン畦で西側溝の土壌を採取。井戸状遺構をさらに2基(SE6466・SE6478)掘る。昨日と合わせ、5基の内、1基は井戸でないことが判明し、残る4基も井戸枠は残っていない。柱穴の断ち割りをはじめる。

12・21　ひき続き、柱穴の断ち割り。GT18区の井戸状遺構(SE6492)を掘るが、やはり井戸枠はなく、旧流路にあたるのか、底から流木が出土した。HC10区の土器埋納遺構(SX6485)の土器を取り上げる。調査区南壁の土層図作成。

12・22　西側溝の流木のサンプリング。柱穴の断ち割りと調査区南壁の土層図作成を継続する。

12・26　柱穴の断ち割りと土層図の作成。漆塗木製品を出土し、墓の可能性も考え保留していた、GN13区を精査した結果、西から続く溝状遺構(SD6477)の東端にあたることが判明した。

12・27　柱穴の断ち割りと畦の土層図作成完了。HF25区の炭入土坑(後日、南北棟SB6510の東廂、北から1間目の柱抜き取り穴と判明)の土器を取り上げ、調査終了。

D　第254次調査　　6AHH－G・H区　1994年11月15日～1995年4月6日

11・15　東西55m、南北55mの調査区を設定し、南西端と北西端から重機2台で排土を開始。

11・21　調査区南辺の排土は第253次調査区との境界まで到達する。

11・26　重機による排土終了。

12・9　第253次調査の空撮延期のため、午前中、調査区西辺と南辺の整形と排水溝を掘る。

12・16　ベルコンをセット。

12・19　一部地区杭を打ち、東辺から黄灰土の排土を開始(～12・26)。Dラインの南には、第253次調査区から続く柱穴がある。

12・27　黄灰土層の除去は35ライン付近まで達す。残りの地区杭を打つ。

1・9　37ラインに南北畦を設定。調査区北端はIラインとする。小路交差点調査のため、東西14m、南北10mの南西拡張区を設定する。35ラインから西に向け、黄灰土の除去を進め、ほぼ南北畦に達する。

1・10　黄灰土の除去を続行。この時点で確認できる遺構については、輪郭線をひきつつある。ただし、掘り下げはしていない。HA35～HA37区で検出した柱穴は、2時期あるようで、新しい柱穴の抜き取りには遺物がはいる。北側溝は、南側溝に比して、幅が広いようである。南西拡張区は、

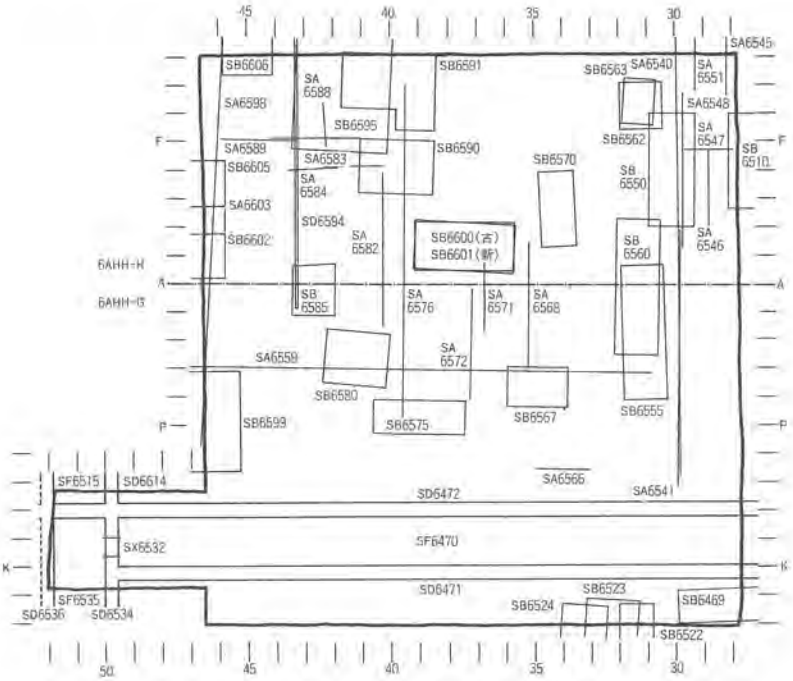


Fig. 6　第254次調査区遺構略図

重機の退路を確保するため、西端を水路より2mのところに縮小して排土をはじめる。

1・11　黄灰土層の除去は41ラインの東まで達す。東西畦北のHA36～HA39区にかけて並ぶ柱穴には、布掘地業状の遺構がともなう。HD・HEライン付近の37ラインから西に柱穴がでてきた。東西畦南のGN38・GN39区には、土器片がきわめて多く、また瓦が集合している。

1・12　東西畦北では布掘地業状の遺構が続く。HD40区で西妻を検出し、東西畦北の柱穴群は2間5間の東西棟(SB6590)としてまとまる。東西畦南では、GK～GNラインの42ライン付近に、灰色粘質土の入った土坑がいくつかある。

1・13　東西畦北の44ライン以西では、遺構検出面が灰白粘質土層となり、遺構がみにくくなる。

1・18　黄灰土層の除去は一部を残し、西端に達す。HHライン付近の灰白粘質土層は遺物を多く含んでいる。HA46～HE46区の西壁沿いに、柱穴が並ぶ。南西拡張区にベルコンを並べる。

1・19　黄灰土層の除去が終了。西から本格的な遺構検出を開始し、45ラインまで進む。調査区の外へ続く建物3棟(SB6599・SB6602・SB6605)、南北の掘立柱塀3条(SA6597・SA6598・SA6604)を検出する。小路側溝は輪郭のみの検出にとどめ、掘り下げず。南西拡張区は排水溝を掘り、東から黄灰土層の除去を開始。

1・20　HE～HHラインの45ライン付近には灰色粘質土層が広がる。HC46区で重複する柱穴の新旧関係を検討した結果、東側の建物(SB6605)の方が塀(SA6604)より新しいことが判明した。GN45区の柱穴(SB6599の東廂南端の柱)を探すが、本日も確定できず。その東には、暗灰粘質土のはいる土坑がある。調査区南辺の45ラインから東では、土器片を多数含む土坑(SK6528)を検出する。土器は古いので、奈良時代初めの遺構であろうか。南西拡張区の黄灰土の除去は、49・50ラインの中間まで進む。

1・23　遺構検出は43・42ラインの中間まで進む。HFラインに小柱穴が東西に並ぶが、複数の遺構があるようで、検討を要す。東西畦をはさんで、柱穴を検出する。東西棟になるのであろうか。東西畦の北の布掘地業状とみていた遺構は、重複関係から、柱穴より古い時期の東西溝となった。南西拡張区では、黄灰土層をほぼ取り終わる。

1・24　東西畦にかかる建物(SB6585)は、北側柱は東西3間で収まる。東西畦南では、Pラインにかけて延びる遺物を含む南北に長い土坑を掘る。七条条間北小路両側溝について、41ラインで断面を観察した結果、北側溝の堆積は、上下2層あることを確認した。上層の灰色土を東西溝上層として、明日以降は、上層のみ掘り下げることにした。南西拡張区の遺構検出をはじめる。東一坊坊間東小路の東側溝が南北に通り、そこに七条条間北小路の両側溝が合流する。それより西では、溝状土坑などがあり、東西溝も確認できない。

1・25　東西畦の北では、HDラインから北で、多くの柱穴が重複して検出される。いくつかは、建物としてまとまりそうである。東西畦の南では、40～41ライン間の南北に長い溝状土坑を掘る。南西拡張区では、薄く残っていた包含層を除去し、再度遺構検出。東一坊坊間東小路の北半部には、重複関係から東側溝より新しい、塼を多く含む大土坑があり、これを掘り下げはじめる。

1・26　東西畦の北では、北西区中央やや東の2間5間の東西棟(SB6590)など、多くの柱穴がいくつかの建物にまとまりつつある。HA区に並ぶ柱穴は、39ラインで西妻を検出した結果、2間5間の東西棟(SB6600)としてまとまりそうである。東西畦の南には、遺物の混じる灰褐粘土層が広がる。溝状土坑、土器溜り等を掘っていく。本日から、南西拡張区はいったん休止。

1・30　昨日検出の東西棟(SB6590)の北側で、2間5間の東西棟(SB6591)がまとまった。HF38区で検出した東西に並ぶ柱穴2個は、北側の東西棟(SB6591)の南廂と考えたが、西に続かない。南側の東西棟(SB6590)の北廂としても、柱間が合わず、検討を要する。東西畦北の東西棟(SB6600)の北西隅柱は柱根が残っているが、2時期の可能性がある。明日チェックの予定。GRラインに並ぶ柱穴は東西塀の可能性がでてきた。

1・31　遺構検出作業は南北畦を越した。東西畦北半では、小溝が多く、遺構検出に手間取る。懸案の東西畦北の東西棟は、柱穴8ケ所について検討し、2時期と確定した。古い柱を抜き取り、その抜き取り穴を掘形として、新しい柱を立て、最後にその柱も抜き取っている。古い抜き取り(新しい掘形)を抜き取りA、新しい抜き取りを抜き取りBとする。東西畦南ではGRラインに東西塀(SA6559)が続き、その北では南北畦の東西で、2条の南北塀(SA6571・SA6573)を検出する。

2・1　東西畦の北では、東西棟(SB6600)の東妻を再検出し、2間5間で確定した。35ライン東、HC～HEライン間で、南北に並ぶ黄褐土の入る柱穴4個を検出する。35ライン西では、東西畦をはさんで、南北5間の小柱穴を検出した。昨日の南北塀の北半を西側柱列とすると南北棟になるが、妻柱がないので南北塀(SA6568)であろう。東西畦南では、35～36ライン、GP～GRライン付近で、東西棟になると思われる柱穴を検出する。

2・2　東西畦北の柱穴は、結局、2間5間の南北棟(SB6570)としてまとまった。その北は、堅い地山であるが、遺構はない。逆に、南北棟のある

ところは、軟弱な砂層である。昨日問題になった2条の南北塀の間で、北妻にあたる位置に柱穴を検出したが、やはり南妻はない。36ライン東の柱穴は、2間3間の東西棟(SB6567)になった。GRラインの東西塀は、柱穴の重複関係から、東西棟より古いことが判明。GR32区、GS32区で、それぞれ井戸と思われる遺構の一部を検出する。

2・3　調査区北辺で、再び柱穴が重複して検出される。東西畦をはさんで、2棟の南北棟の一部を検出。昨日検出した井戸状遺構を掘る。GR32区の遺構(SK6556)は、埋土の状況から井戸ではなさそうである。GS32区の遺構は刳り抜き井戸(SE6561)となる。GR31区周辺には、雑多な遺構があり、精査が必要。

2・6　坪を東西二分する30ライン東の位置で、重複する南北塀(SA6540・SA6541)を検出する。GRラインの東西塀(SA6559)とも重複する可能性があり、新旧関係を精査する必要がある。東西畦にかかる2棟の南北棟(SB6555・SB6560)は、いずれも2間6間と判明。桁行2間分ずれており、南側の方が古い。東西畦北半でも、2時期の総柱建物らしき遺構(SB6562・SB6563)などがまとまりだす。GR31区では竪穴住居址状の方形大形土坑(SK6556)を検出する。

2・7　遺構検出作業は東端に達す。東端近く、HC～HGラインで南北に柱穴が並ぶ。第253次調査区検出の柱穴群との関係が問題になったので、その部分を26ライン東まで再発掘したところ新たに柱穴を検出し、2間5間、東廂付きの南北棟(SB6510)としてまとまった。坪東西二分の一の南北塀は、GOラインよりさらに南に延びそうであるが、確認できなかった。

2・8　遺構検出作業は折り返し、西に向かうとともに、第253次調査区のHB～HIライン間の26ライン東から西の部分を精査する。坪二分の一南北塀のGOライン以南は、本日も決着がつかなかった。小路両側溝を掘りはじめる。北側溝では、既に除去済みの上層灰色粘土の下は、茶褐粘土層、暗灰粘土層となる。南側溝では、上層の灰色粘土の下は、茶褐砂質粘土層となる。この土と地山は、若干区別しにくい。

2・9　GR31区の住居址の可能性のある大土坑(SK6556)を5cmほど掘り下げる。GO30・GO31区の土坑(SK6552・SK6553)を掘り下げはじめる。GS32区の井戸(SE6561)を掘る。枠内の埋土は最上部に黄灰粘土があり、以下は灰色粘土。井戸枠は刳り抜きで、下方に4ケ所方孔があいている。坪二分の一南北塀はGNラインの南、北側溝の際まで延びていることが確定した。小路両側溝は34ラインまで完掘した。

2・10　GR32区東南の土坑(SE6557)を掘り下げたところ、やはり井戸にはならないようである。GO30・GO31区の土坑(SK6552・SK6553)は完掘した。GO30区の土坑については、井戸の可能性もあったが、これも井戸ではなかった。南北畦の西、O～Qライン付近で柱穴を検出し、2間5間の東西棟(SB6575)としてまとまる。ただし、北側柱列と南側柱列が揃わない。GRラインの東西塀(SA6559)は、39ラインの東西にある柱穴の柱間が広い。小路北側溝は、南北畦から西にかけて、部分的に溝底が深くなる。南側溝では、36ラインの東西で、溝底に2個の柱穴を検出する。

2・13　調査区北端のHGライン以北、39～46ラインを精査し、柱穴を検出。43ラインの西に南北に並ぶ柱穴とそれより古い南北溝(SD6599)を検出。この一帯については、明日再度検討の予定。小路両側溝は、39～43ラインを完掘。ただし、北側溝の41ライン以西については、上層を掘り下げていないので、茶褐粘土層、暗青灰粘土層とあわせて3層に分けて掘り下げる。南西拡張区の北西隅の大土坑を完掘したところ、その底で、七条条間北小路北側溝と東一坊坊間東小路東側溝の交差状況が表れてきた。GK50区で土器埋納遺構(SX6533)を検出。

2・14　北端部の精査では、43ラインでさらに柱穴を検出し、桁行5間以上の東西両廂付きの南北棟(SB6595)としてまとまることになった。その西廂と重複する、より古い南北溝(SD6599)は、さらに南に延びる。44～46ライン、Hライン以北で、総柱建物がまとまりそうである。HC43区周辺に広がる炭化物混じりの土を除去すると、黄白粘土層になるが、これも除去する必要がある。GN45区で、南北棟(SB6599)の東廂南端の柱を確定した。七条条間北小路両側溝と東一坊坊間東小路東側溝は、ほぼ掘りあがる。東側溝に架かる橋の柱穴4個を検出する。南北両側溝は、上層に瓦、土器が多く、下層には遺物がほとんど含まれない。北側溝の46～48ライン、南側溝の46ライン東～48ライン東では、溝底に細長い土坑がある。南側溝の土坑(SX6530)には、馬骨、土師器、転用墨書人面土器等が並べられ、祭祀土坑と思われる。重機により、南西拡張区の西側を拡張する。

2・15　北端部の遺構精査、遺構の掘り下げと並行して、HC43区周辺の黄白粘土層の除去を開始する。道路側溝は、すべて完掘した。なお、東一坊坊間東小路西側溝は、Mライン以南で、東岸のみを検出した。七条条間北小路北側溝底の土坑(SK6531)は壁が垂直に落ち、底も深い。南側溝の祭祀土坑の写真撮影。土坑内の馬骨等は、側溝に水のない時に、穴を掘って埋めたものである。

2・16　遺構精査の続き。HC43区周辺の黄白粘質土層を取り終わり、南北溝(SD6599)と小柱穴

を検出。南北溝が南へどこまで続くかは未確認。東西畦南では、土坑状の窪みにたまる灰褐粘質土層を除去。GO40～GS41区の炭化物の入った土坑をすべて掘り下げる。南側溝祭祀土坑の実測。空撮に備え対空標識を設置する。

2・17　遺構精査と空撮に向けての清掃。GT38区の大土坑(SK6577)、GN37区の炭化物の入った土坑(SK6574)を完掘。GN37区の土坑の下には、白色砂層が広がる。42・43ライン付近で柱穴を検出し、東西畦北の柱穴と合わせ、建物(SB6585)としてまとまりそうである。祭祀土坑の遺物の一部を取り上げる。

2・20　遺構清掃と掘り下げていなかった柱穴を掘る。十五坪の27～32ラインで、柱穴を多数検出し、掘立柱建物２棟(SB6469・SB6522)がまとまる。祭祀土坑の写真を撮り直す。GS32区井戸(SE6561)の平面図作成。

2・21　清掃と十五坪の遺構検出作業。昨日検出の東西棟(SB6469)は、さらに東にのび、桁行７間となった。地上写真撮影。

2・22　空撮。その前後に地上写真撮影。

2・23　調査区北東部から柱穴の断ち割りを開始する。午後、記者発表。

2・24　ひき続き柱穴の断ち割り。東西畦にかかる南北塀の柱穴については、畦を取って柱穴全体を平面検出する。現地説明会の準備。

2・25　現地説明会。終了後、祭祀土坑中の土器を取り上げる。

2・27　柱穴の断ち割り続行。祭祀土坑の馬歯を取り上げる。

2・28　断ち割りと並行して、祭祀土坑では、上半を既に取り上げた墨書人面土器の下半部を清掃し、写真撮影。土器の隣りにでていた馬歯は、土器に納められていたものの一部であった。明日実測の予定。馬骨集合部の周囲を掘り下げ、明日の取り上げに備える。

3・1　本日、断ち割りは中止。祭祀土坑は実測後、墨書人面土器を取り上げる。その後、ウレタンを注入して、馬骨の集合部等を取り上げる。また、東西畦の南、40～42ラインで、GR ラインの東西塀(SA6559)と重複する位置で、２間４間の東西棟(SB6580)を検出する。

3・2　昨日検出した東西棟は、写真撮影後、平面実測。その後、柱穴の断ち割りを再開する。

3・3　南北塀(SA6540・6541)を中心に柱穴の断ち割り。GQ29区において、東西塀(SA6559)との交点には、柱穴が１つしかないことを確認。

3・6　坪東西二分の一南北塀とその西方の掘立柱建物(SB6555・SB6560)等の柱穴の断ち割り。

3・7　柱穴の断ち割り続行。

3・8　柱穴の断ち割りは、南北畦を越え、調査区南西の区画に入る。

3・9　本日より、発掘作業は、第255次調査に集中し、図面作成に専念する。

3・14　第255次調査の発掘に集中していたが、本日より柱穴の断ち割りを再開する。南北畦の西、O～Qライン間の掘立柱建物(SB6575)は、２間６間の東西棟としていたが、西妻柱列は、断ち割りの結果、柱穴ではないことが判明した。その東に柱穴を検出し、２間５間の東西棟となった。東西畦にかかる総柱風建物(SB6585)は、やはり建物内部の２柱穴を欠く。

3・15　柱穴の断ち割りは、北西の区画に入る。

3・16　柱穴断ち割りの図面作成。明日は、第255次調査に集中する。

3・20　北西区北半の建物群の柱穴の断ち割り。２間５間東西棟(SB6590)の南西隅柱抜き取り穴からは、平城Ⅲと思われる土師器皿が出土した。

3・22　南北畦の北、東西畦にかかる新旧２時期の建物(SB6600・SB6601)の柱穴の断ち割り。新しい時期の東妻中央柱穴には柱根が残っていた。土層図作成のため、壁削りと畦際の掘り下げ。南北畦の西側南端近く、十五坪の北端で、柱根の残る柱穴を検出する。周辺を精査する必要がある。

3・23　北西区北半の建物の柱穴の断ち割り、畦際の掘り下げと並行して、昨日検出した十五坪北端の柱穴の周辺の遺構検出をおこない、東にさらに柱穴５個を検出する。

3・24　東一坊坊間路東小路東側溝にかかる橋(SX6532)の柱穴、十五坪の柱穴の断ち割りもおこなう。調査区南東隅の東西棟(SB6469)の第253次調査区にかかる部分を平面実測。東西畦、南北畦から、土層図作成に着手する。

3・27　十五坪の柱穴の断ち割り。

3・28　十五坪の柱穴と南側溝溝底で検出した柱穴(SX6525)の断ち割り。

3・29　柱穴の断ち割りは終了。土層図の作成。

3・31　昨日にひき続き、土層図の作成。

4・3　GS32区の井戸(SE6561)の断ち割りを開始。その東南の竪穴住居址と認識していた遺構(SK6556)は、東西畦を残して掘り下げを開始。約50 cm 下げたところ、井戸になりそうだったので、南半断ち割りに切り替え、約1 m で底に達する。井戸を掘る予定であったが、湧水のない層に達したので、中止したと思われる。

4・4　GS32区の井戸とその南東の土坑の写真撮影。井戸の土層図作成後、井戸枠を取り上げる。

4・5　土層図の作成。

4・6　中央建物の南北畦にかかる南側柱の断ち割り。HG26区の土坑(SK6507)も断ち割りの結果、途中で中止した井戸と判断した。土層図作成終了。器材撤収し、作業終了。

E　第255次調査

6AHH－H・I区
1995年1月10日～4月6日

1・10　調査区(東西57 m・南北50 m)を設定。

1・11　北西部から重機による排土開始。黄灰土層の途中までを取る。遺物は結構多い。

2・14　午後、地区杭打ち。

2・21　南から遺物包含層の除去をはじめる。

2・22　時間的に制約されているので、包含層除去と同時に遺構検出をおこなう。包含層は西へいくほど厚くなる。

2・23　包含層を除去すると、所々で砂層がみえ、地山面に凹凸があることを示している。遺構は、調査区中央から東側にかけて、比較的多く検出され、そのなかで、2間4間の東西棟(SB6620)がまとまりそうである。また、Rラインでは、重複関係からこの東西棟の柱穴より古い、幅の広い東西溝(SD6621)を検出する。西側は遺構が疎か。

2・24　南北畦の東と西で、南北棟になりそうな柱穴を検出するが、まとまりそうでまとまらない。第255次調査区の柱穴は、第254次調査区の柱穴に比べて、概して小さい。

2・27　IBラインまで、作業は進む。調査区西端のIAラインに柱穴が並ぶ。桁行6間、もしくは7間の東西棟にでもなるのであろうか。

2・28　作業は東西畦に達する。東西畦南の35～36ラインで、2間4間の南北棟(SB6625)がまとまる。その南東、33～35ラインの南北棟(SB6623)については、2棟の東西棟になる可能性がないか、再度検討が必要。39～40ラインでIAラインの北から南に並ぶ柱穴も、南北棟(SB6640)になるのであろう。昨日検出した、西端の柱列に対応すると思われる柱穴を検出するが、東西棟としてはまとまらない。

3・1　東西畦より南の遺構検出作業は、概ね終了。これまでに、掘立柱建物7棟、塀1条が確認された。31～33ラインでは、東西畦の北へ延びる南北棟の一部と思われる柱穴を検出。その西側、東西畦の北にも数個の柱穴らしきものがある。

3・2　東西畦にかかる31～33ラインの柱穴は、2間2間の総柱建物(SB6626)でまとまる。その西の一群も、2間2間の総柱建物(SB6628)になる。この建物の中央の柱穴は小さい。東西畦西端の排水溝で土層を観察したところ、厚さ約20 cmの黄灰土層、厚さ約15 cmの黄色土層、厚さ約10 cmの茶褐土層となっており、整地土である黄色土層で遺構を確認できる。この層は、調査区全域で確認され、柱穴の埋土には、黄色土が含まれる。

3・3　南北畦に近い総柱建物(SB6628)の北東隅の柱穴の位置で、重複関係からこれより古い南北溝(SD6633)を検出する。北西区でも、北でやや西に振れる2間5間の東西棟(SB6652)等を検出する。

3・6　遺構検出面までが、次第に深くなってきたので、IHラインより北については、再度重機で排土する。IHライン西端の東西溝を掘り下げたところ、柱穴7個が東西に並んで検出された。IG40～IH42区で検出した大土坑(SK6656)は、埋土に土器、瓦を含む。

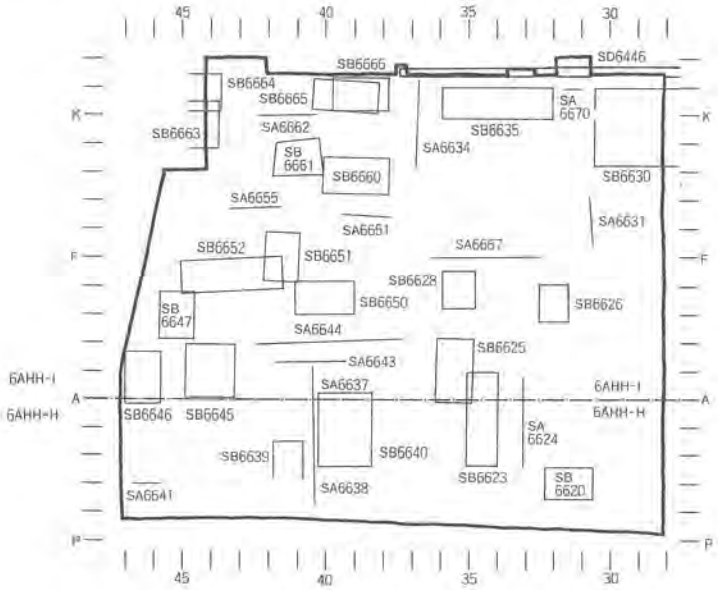


Fig. 7　第255次調査区遺構略図

3・7　昨日検出の大土坑を掘り下げる。土器、土馬が出土する。北東隅IIラインの北で東西に並ぶ柱穴を検出する。明日精査の予定。

3・8　調査区北端に近づくにしたがい、柱穴が多くなる。北東隅の精査では、桁行5間以上の南北廂付きの東西棟(SB6630)となった。IHラインの北、38～40ラインの建物は、2間4間の東西棟(SB6660)でまとまる。その北西の2間3間の東西棟(SB6661)は、重複関係からこれより新しい。

3・9　40～42ラインのIKラインより北で、多数の柱穴を検出するが、建物としてまとまらない。調査区北端で東西溝の一部を検出。第252次調査で検出した築地雨落溝(SD6446)と同一と考えられ、溝幅を確認するため、調査区を一部拡張する。溝は37ラインの西で途切れ、42ラインの西では、溝の位置で柱穴を検出している。また、33ライン北端で井戸らしき遺構を検出したので、ここも拡張する。遺構検出作業は北端に達す。

3・10　北端の東西溝の幅は約1mであることが判明。IF43区の大土坑(SE6653)の掘り下げをはじめる。土器が多数出土。39ライン西を南流する古溝(SD6642)の掘り下げを、北からはじめる。遺物はほとんど含まれていない。IK39区で古溝より新しい柱穴1個を検出する。

3・13　IH38区の大土坑(SE6658)を掘り下げる。方形の掘形を確認。井戸とみるが、掘形埋土に瓦器を含む。IH43区の大土坑(SE6657)を掘り下げたところ、縦板組の井戸枠を検出。枠内から斎串等が出土した。横木第1段までの暗灰青粘土を井戸枠内埋土、第1段以下の灰白ブロック混じり暗灰粘質土を井戸枠内埋土IIとする。南北古溝は、この井戸によって途切れる。IG37区の大土坑(SK6659)の底で、柱穴2個を検出。また、IG41区でも、精査の結果、土坑の底で、IHライン近くの東西塀(SA6655)に続く柱穴を確認する。IF～IJラインの32～36ラインでは、精査したが、顕著な遺構はない。

3・14　IF43区の大土坑(SE6653)を掘り下げた結果、井戸になった。検出プランは二重のドーナツ状を呈し、内側を井戸抜取穴、外側を掘形として、遺物を取り上げる。抜き取り穴は次第に狭まり、約90cm下では、一辺1m程の方形の輪郭になる。埋土は灰褐粘質土で、遺物は井戸抜取穴灰褐粘土で取り上げる。須恵器平瓶、甕、土師器甕、壺の完形品など、土器が多数出土した。土器は、抜き取り、掘形、いずれも平城II～IIIの時期である。南北古溝(SD6642)は、東西畦までは、やや西に偏しつつ南流する。

3・15　遺構の精査は、東西畦の南にはいる。東西塀としたIAラインの柱列のうち、西の2個は柱穴でないことが判明した。東側の4個は、東西棟(SB6645)の南廂となる。南東区の柱穴についても、再度検討する。南北古溝は、旧流路と判断し、東西畦から南では、清掃時の平面検出にとどめることにする。土師器椀がまとまって出土したID41区の土器埋納遺構(SX6644)の写真撮影。

3・16　南西区では、HR～IAライン、39～40ラインの南北棟(SB6640)には東廂が付くことが判明した。

3・17　北東区では、南北畦の一部を半割し、畦際の東で、北で東に振れる南北塀(SA6634)の検出を試み、IDラインの北で、柱穴1個を検出する。また、北西区、東西畦北の東西棟(SB6650)の南側柱を確認すべく、東西畦の一部をはずし、ID39区で柱穴を検出する。南東区IBラインの南、33～35ラインの柱穴については、建物としてなかなかまとまらない。南北古溝は、東西畦の南では、南西に向きを変える。

3・20　空撮に向け清掃。対空標識を打つ。

3・22　清掃と壁削り。

3・23　空撮と地上写真撮影をおこなう。

3・24　昨日にひき続き、地上写真撮影。その後、柱穴の断ち割りをはじめる。

3・27　柱穴の断ち割り。

3・28　柱穴断ち割りを継続する。南西区西端の南北棟(SB6646)の東側柱、南から1間目の位置には柱穴がないことを確認。また、東西棟2棟(SB6660・SB6661)の重複関係を明らかにするため、柱穴を断ち割っところ、西の東西棟(SB6661)が新しいことを確認。また、IK43区では、断ち割りの結果、新旧関係が逆転し、南の建物(SB6663)が北の建物(SB6664)より新しくなった。

3・29　柱穴の断ち割り、図面作成は終了し、土層図の作成にとりかかる。調査区北端の築地雨落溝(SD6446)では、黄色土を埋土とする雨落溝の下層で溝状の土坑を検出する。調査区北壁で見え隠れしているので、蛇行しているのであろう。

3・31　土層図の作成。

4・3　土層図作成のため、東西畦から南で旧流路(SD6642)を一部掘り下げる。

4・4　ひき続き、土層図の作成。IH43区の井戸(SE6657)の平面実測。

4・5　IH43区の井戸を掘り下げる。縦板組の下は方形の枡、曲物となる。最下層の枡および曲物の中から木製品や多量の土器が出土。最下層灰褐粘土で取り上げる。井戸枠、枡も取り上げる。

4・6　井戸最下層の曲物を取り上げ、埋め戻す。器材撤収し、調査終了。

第Ⅲ章　遺　跡

1　遺跡の概観

A　平城京造営以前の地形

平城京は奈良盆地北部の標高約50～80 m、全体として北から南に傾斜する沖積地にある。さらに細かくみると、東二坊大路以東は東から西に、西一坊大路以西は西から東に傾斜し、中央付近は北西から南東に緩やかに傾斜する。調査地は、平城京の中央やや南に位置し、東からの斜面と北西からの斜面によって構成される谷筋の西側にあたる。以下では、今回の発掘調査で得られた知見や航空写真の判読結果、周辺での発掘調査の成果等も総合して、調査地における平城京造営以前の地形について、その概略を記す。なお、遺構検出面の標高は約54.25～54.70 m で、第252次調査区の本調査区と西北拡張区が接する付近が高く、四方に傾斜する地形で、第254次調査区南西隅がもっとも低い。

平城京の地形

調査地における遺構検出面は、奈良時代の遺物包含層が部分的に残る以外は沖積世の自然堆積層である。この層は単純なものではなく、平城京造営以前の蛇行する幅数 m から約15 m、深さ数十 cm から約 2 m(溝底標高52.5 m)の流路が縦横に通り、複雑な様相を呈している(Fig. 8)。

平城京造営前の流路

一方、これらの自然堆積層を深く削り込んでいる東一坊大路西側溝の底(標高53.60 m 付近)や七条条間路北小路南側溝の底(標高53.60 m)では、それぞれ自然木を確認しており、前述した流路より古い大きな流れがあったことがわかる。しかし、これらの平城京造営以前の流路および自然堆積土の時代を確定する手がかりを得ることはできなかった。

近年、調査地周辺における発掘調査では、弥生時代、古墳時代等の奈良時代以前の流路を多数確認している(Tab. 3, Fig. 9)。これらのことから、平城京造営以前、調査地を含む一帯は、旧佐保川の度重なる氾濫に伴って形成された氾濫原のような地形で、低湿なところであったといえよう。ところで、今回の調査で、東一坊大路路面位置において竪穴住居跡を検出したが、それは、低湿ななかにあっても、ここが微高地であったことを物語っている。深さ約10 cm 程度を残すのみであったことは、平城京造営時、あるいはそれ以降に、削平されたためと考えられよう。

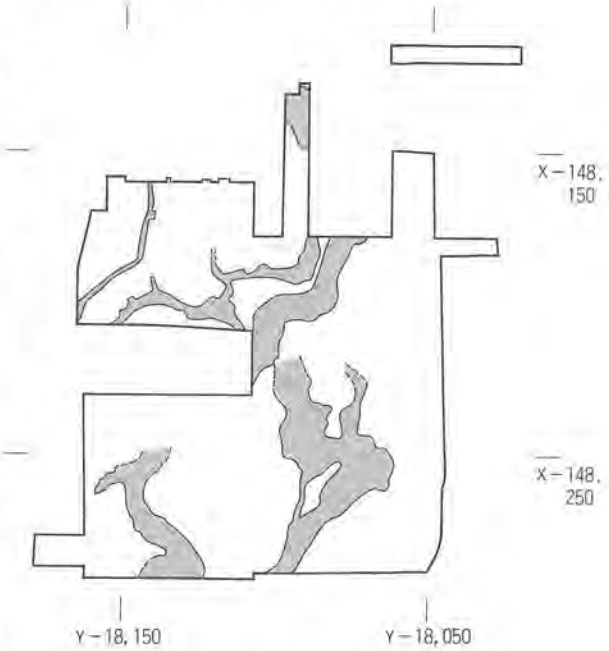


Fig. 8　平城京造営以前の地形(●は流路跡)　1：2,500

Tab. 3　調査地周辺の流路

No	時期と種別	地　点	文　献
1	弥生時代の流路跡	左京八条二坊一坪	奈良市教委「平城京左京八条二坊一坪の調査　第98次」『奈良市概要　昭和60年度』pp. 36・37　1986
2	古墳時代の流路跡	左京六条二坊七坪	奈良市教委「平城京左京六条二坊七坪の調査　第162次」『奈良市概要　昭和63年度』pp. 41・42　1989
3		左京六条二坊二坪	奈良市教委「平城京左京六条二坊二坪の調査　第163次」『奈良市概要　昭和63年度』pp. 43・44　1989
4	奈良時代以前の流路跡または氾濫原	左京六条二坊三坪	奈良市教委「平城京左京六条二坊三坪の調査」『奈良市概要　昭和57年度』p. 49　1982
5		左京六条一坊十坪	奈良市教委「平城京左京六条一坊十坪の調査」『奈良市概要　昭和56年度』pp. 202・203　1982
6		左京六条一坊十一坪	橿考研「奈良市柏木町398・399番地（平城京左京六条一坊十一・十六坪）の調査」『奈良県遺跡調査概報1987年度（第2分冊）』pp. 217—221　1989
7		左京六条一坊十二坪	奈良市教委「平城京左京六条一坊十二坪の調査」『奈良市概要　昭和58年度』pp. 42・43　1984
8		左京七条一坊九坪	奈良市教委「平城京左京七条一坊九坪の調査　第128次」『奈良市概要　昭和62年度』p. 44　1988
9		左京七条一坊十六坪	本書

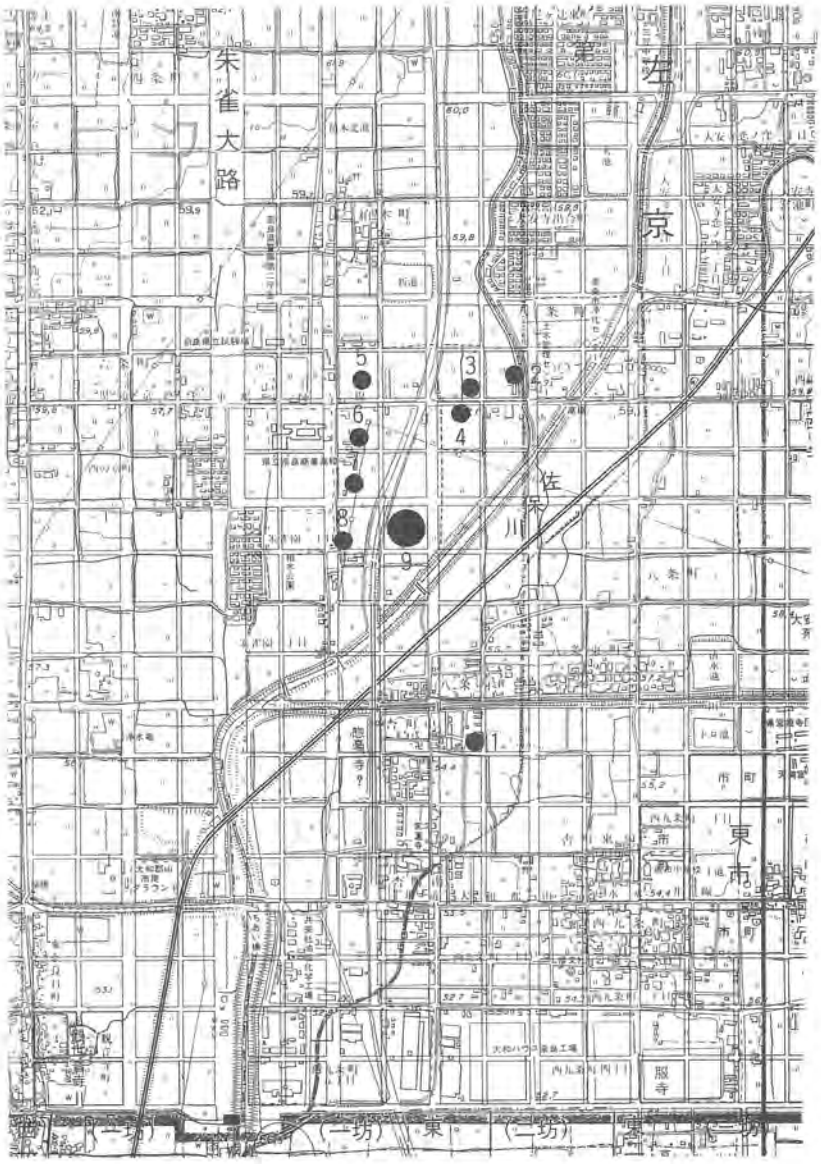


Fig. 9　調査地周辺の流路検出地点　1：20,000

B　平城京廃都後の地形

『日本三代実録』貞観6(864)年11月7日条などが示すように、廃都後80年の平城京は、かなり開墾が進んでいた。調査地周辺でも、時期は降るが、安元2(1176)年の左京七条一坊十四坪東大路[1]、建長6(1254)年の左京九条一坊○拾坪之内[2]の水田としての土地売券の史料が残っている。今回の調査地周辺の畦畔は、奈良時代の条坊制に由来する地割を示しており、左京七条一坊十六坪四周に大路2条と坪境小路2条の検出が予測された(Fig. 10)。

条坊遺存地割

六条大路とその両側溝は条坊遺存地割を呈する水田の中に収まる。発掘調査の結果では、南側溝は東一坊大路西側溝と合流するところで南に広がるが、そこの水田も南に広くなっており、地割が南側溝廃絶時の状況を反映している。遺構そのものは検出できなかった十六坪北辺の築地も、その想定位置には水田の畔が東西に残っている。東一坊大路とその両側溝も条坊遺存地割を呈する水田の中に収まり、大路と水田の東西中心線は、ほぼ一致し、この地割は二条条間路から八条条間路近くまで続いている。ただ、遺存地割の方が大路規模より東西幅があり、水田化するにあたり東西に拡張したと考えられる。なお、遺存地割の西端、すなわち、西側の水田畦畔の位置は、西側溝を検出する過程で、南北大溝とした暗灰粘質土の西端とほぼ一致する。

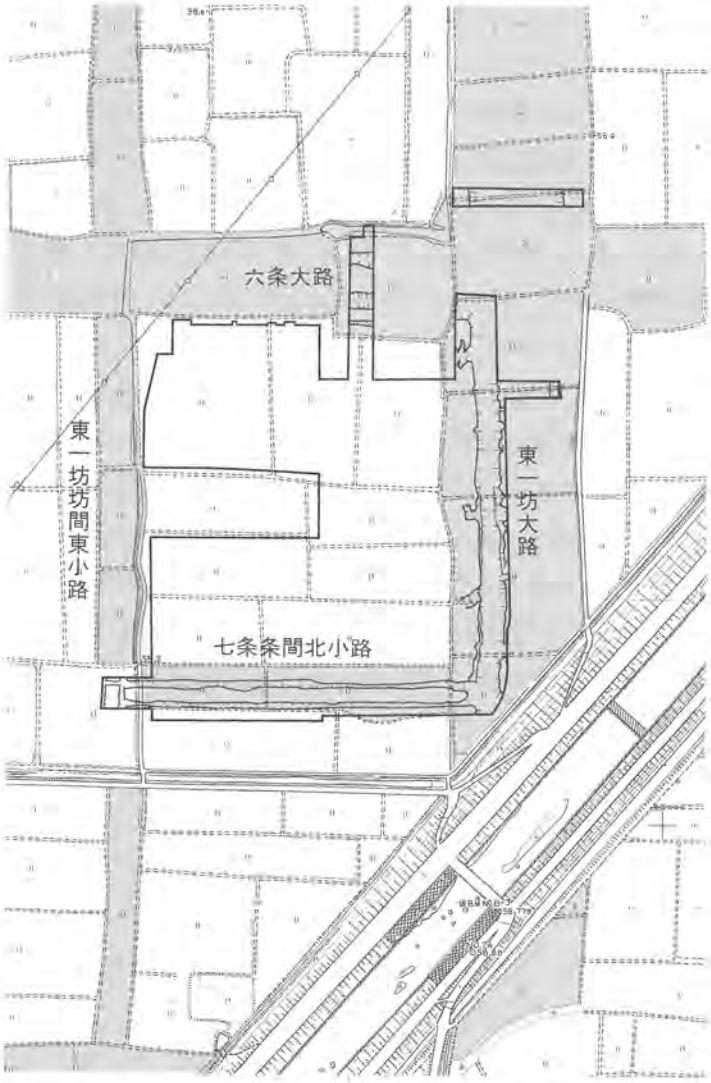


Fig. 10　調査地周辺の遺存地割　1：2,500

一方、七条条間北小路と東一坊坊間東小路は、それぞれの両側溝ともに条坊遺存地割を呈する水田の中に収まるが、道路中心線は水田の中心線からずれる。これは幅の狭い小路を水田とするには適当でなかったために、それぞれ北と東に拡張したのであろう。

1)『平安遺文』第7巻　3750　春日灌預中臣祐政田地売賣券
2)『鎌倉遺文』第11巻　7727　尼妙性田地売賣券

2　条坊遺構

5次にわたる調査で検出した、平城京の条坊に関連する遺構は、東一坊大路、六条大路、七条条間北小路、東一坊坊間東小路の計4条の道路とその両側溝である。

A　東一坊大路(Pl. 4•8•9•13•18、Ph. 2•3)

東一坊大路の路面

東一坊大路SF6410は、調査区の東辺でその西側溝を延長約137 mにわたって検出し、東拡張区でその東側溝を長さ約5 m検出している。両側溝を確認できたX—148,190付近では、その心々間距離は22.5 m、東側溝の幅3.0 m、西側溝の幅7.8 mで、路面にあたる平坦部の幅は17.1 mである。路面上で竪穴住居跡SX6412、土坑等を検出しているが、砂利敷等の舗装材は検出されず、シルト質のいわゆる地山からなる。路面は削平を受けていると考えられる。なお、検出した路面の標高は約54.2〜54.4 mで、中央がわずかに高くなっているが、ほぼ平坦である。

東側溝

東側溝　東側溝SD6411は断面が浅い皿形の素掘溝で、幅3.0 m、深さ0.25 m。溝底の標高は53.95 m。堆積層は下から青灰粘質土、灰褐砂質粘土の2層に区分できる(Fig. 11-2)。

西側溝の変遷

西側溝　西側溝SD6400・6520は断面が逆台形の幅の広い素掘溝で、幅7.5〜8.6 m、深さ1.5〜1.7 m。溝底の標高は52.5〜52.6 m。一部では護岸用の杭をともなうが、横木等は遺存していない。堆積の状況は場所によって若干異なるが、溝は大きく3時期の変遷をたどり、堆積層は7層に区分できる(Fig. 11-1)。最下層は褐色粗砂層で、溝底から溝の側面に残っている。その上には木屑層が堆積し、さらに青灰色砂質土層が堆積している。この段階で溝を掘り直しており、その後の堆積が暗灰砂層である。北東拡張区の西側溝西岸近く、暗灰砂層中で検出した曲物を埋設した遺構SX6422は取水施設と考えられるが、この層の堆積環境は、一時的な流れがあったにせよ、定常的な流れが長期間続いたり、長期に亘って滞水することがなかったという珪藻分析の結果(第V章2参照)とも矛盾しない。この層の上には、暗灰粘土層と青灰細砂層が堆積する。さらにこれらの堆積を開削し、灰色粘土層が堆積する幅3 m弱、深さ0.9 m程の蛇行する溝SD6414となる。調査区東辺中央のQKライン付近には堰SX6413がある。周辺の水田への導水施設になるのであろう。堰は杭と石でできており、横木等は遺存していない。堰の下流には幅約3.2 m、深さ0.5 mの溝SD6415が取り付いている。堰は後にほぼ同位置で杭と横木によるしがらみから成る堤SX6452に造り替えている(Fig. 13)。SD6414は南流したのち堤によって堰き止められ、溝SD6416を経て東側に送水された。この堤によって、堤南側の溝は廃絶する。ところで、第251次調査区では、調査区の東端3.2 mのところから西側が沼状遺構SX6402となり、東一坊大路とその両側溝を検出できなかった。おそらく、西側溝にこの堰または堤が設けられたことにより、東一坊大路上が沼状になったのであろう。

各層の堆積時期については、出土した紀年木簡や土器が手がかりとなる。最下層の褐色粗砂層からは奈良時代初めから中頃の土器が出土している。また、天平20年(748)、天平勝宝7年(755)、天平宝字年間(757〜764)の紀年木簡をはじめ、天平12年以降である可能性の高い「里」を記さない国郡郷表記の荷札木簡が出土していることから、奈良時代中頃までの堆積と考えられる。次の木屑層からは奈良時代後半以降の土器や天平2年(730)から宝亀3年(772)までの年紀

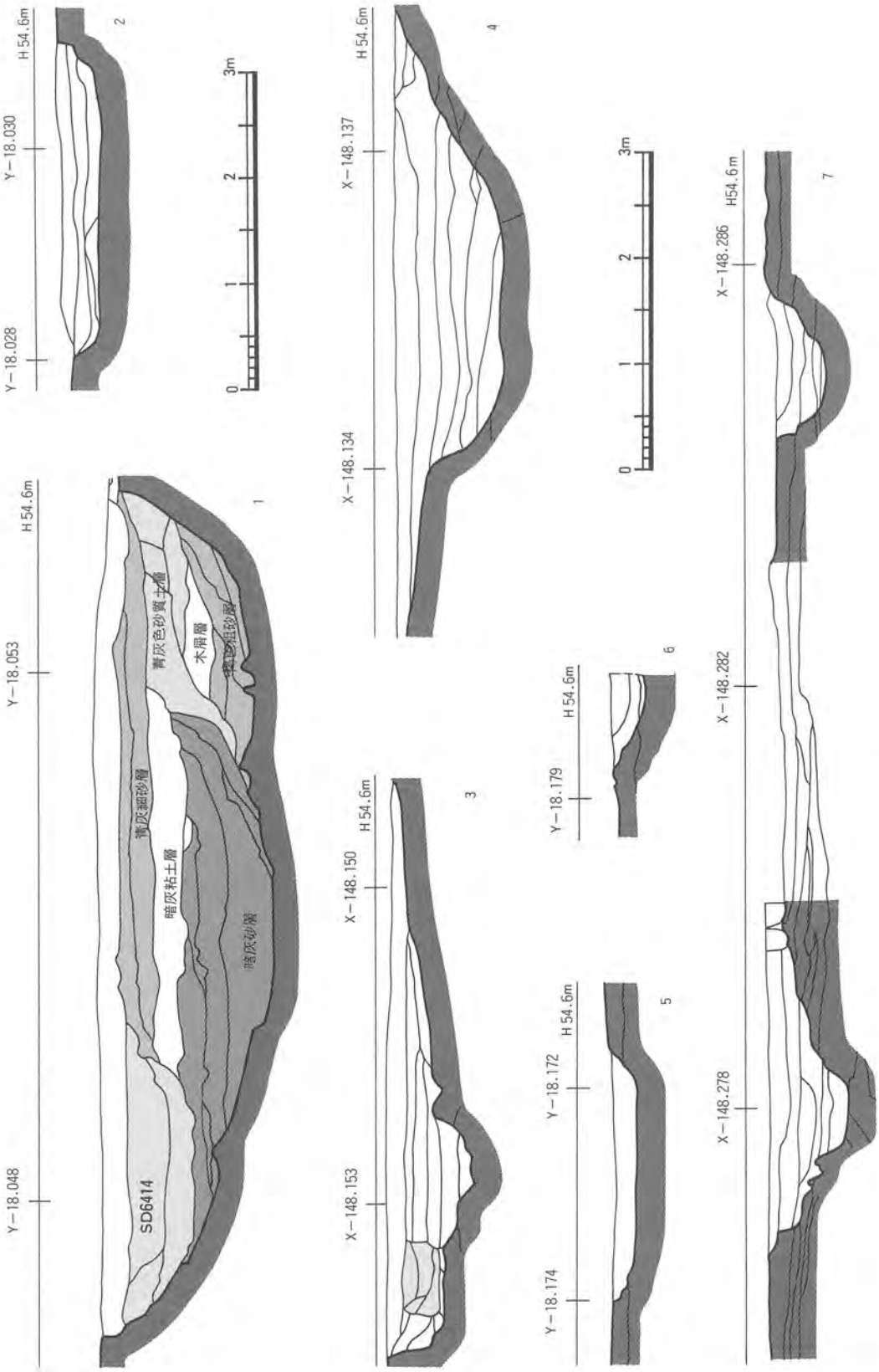


Fig. 11　道路側溝土層図　　1：60
1. SD6400　2. SD6411　3. SD6499　4. SD6451
5. SD6535　6. SD6536　7. SD6471・6472

をもつ木簡が出土しており、奈良時代後半以降の堆積と考えられる。青灰色砂質土層からは遺物がほとんど出土しなかった。奈良時代末に、これらの層を除去する大規模な改修を行なっており、その後に堆積した暗灰砂層からは、天平宝字7年(763)の年紀をもつ木簡や土馬の他、奈良時代末から12世紀までの土器が出土している。この堆積層の上の暗灰粘土層、青灰細砂層からは、12世紀までの土器が出土する。堰および堤を伴う溝の埋土である灰色粘土層からは、12～13世紀の土器が出土し、最終的に、西側溝はこの時期に廃絶したと考えられる。

西側溝の勾配

ところで、東一坊大路西側溝は、今回の調査地より上流において、数ケ所の調査例がある。溝底の標高から、それらの間の勾配を示したのがFig. 14である。これによると、西側溝は五条条間北小路までは0.4～0.5%の勾配で、五条条間北小路から六条大路までは0.2%、さらに、今回の調査区内では0.1%となり、平城京南半で、特に今回の調査区において勾配が緩くなる。また、東一坊大路西側溝の集水域としては、これまでの発掘調査の知見や遺存地形から、平城宮内では、南面東門の壬生門を通る南北中軸線から東で、東院の南東隅を除いた部分まで含む。

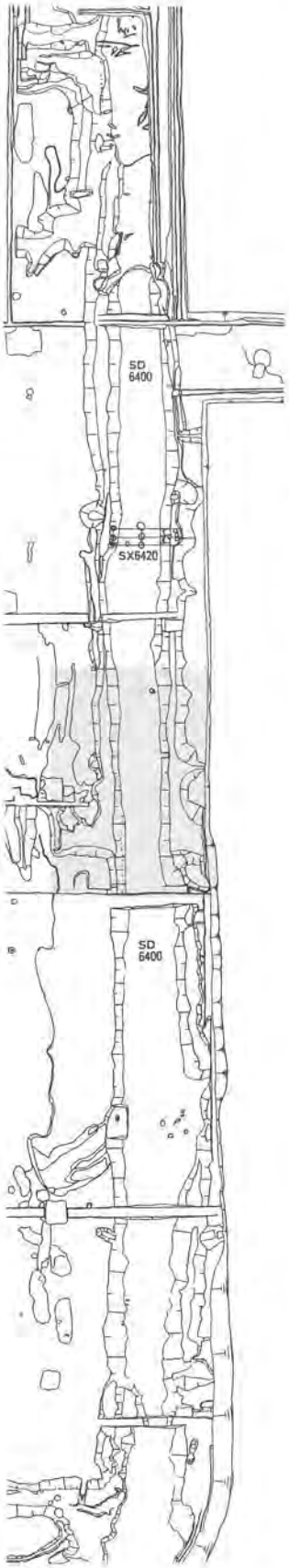


Fig. 12　東一坊大路西側溝
1：600

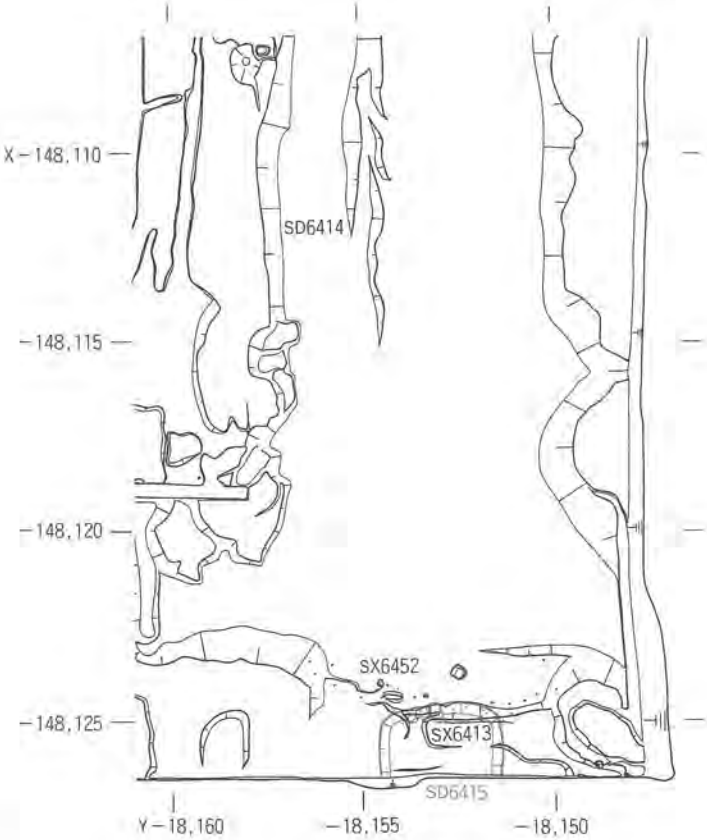


Fig. 13　堰SX6413と堤SX6452　1：200

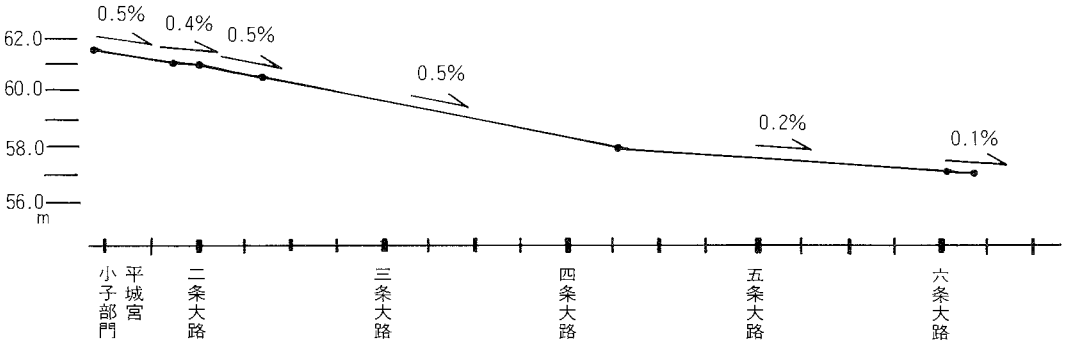


Fig. 14　東一坊大路西側溝の勾配

したがって、西側溝から出土した遺物についても、溝底の勾配だけからみれば、平城宮の一部も含めた上流で破棄されたものが本調査区内で堆積したと考えることもできよう。しかしながら、暗渠や橋脚、あるいは京内で既に破棄されたものなどが流下の障害となりうることを考えれば、その可能性はかなり低くなるであろう。

B　六条大路(Pl. 3、Ph. 4)

六条大路の規模

北西拡張区で六条大路 SF6450の路面および両側溝を長さ約 8 m にわたり検出した。溝心々距離は14.3 m で、路面幅は8.6～9.0 m である。遺構検出面は北側へ下がっており、標高は南側溝南岸が54.5 m、六条大路路面中央付近で54.4 m、北側溝北岸が54.2 m である。また、検出面は沖積層の粘質土と平城京造営以前の斜行する流路に堆積した砂質土である。六条大路路面上の北側溝南岸近くでは土器埋納遺構 SX6448を検出している。

南側溝　南側溝 SD6499は幅5.0～5.5 m、深さ0.9 m の素掘溝で、溝底の標高は53.9 m。堆積層は下から青灰粘土、灰色粘土、灰黄シルト、茶灰シルト、黄褐土の順である。茶灰シルトまで埋まった段階で、南寄りに幅0.7 m、深さ0.3 m の小規模な溝を掘り直している(Fig. 11-3)。南側溝は北西拡張区では、六条大路の路面側に大きく広がっており、北東拡張区の東一坊大路西側溝との合流点付近では、3.4 m 程南に広がっていた。また、北東拡張区において、南側溝の北岸も検出すべく X―148,138.8までトレンチを入れたが溝の上がりすら確認できず、西側溝との合流点では南北に大きく広がっていたのを確認したにとどまる。遺物としては、少量ではあるが、奈良時代前半の土器が出土した。

北側溝　北側溝 SD6451は幅4,5～4.7 m、深さ0.7 m の素掘溝で、溝底の標高は53.4 m。溝の上部は南側溝同様に六条大路の路面側に広がっており、それを含めると幅は5.9 m になる。堆積層は下から灰褐砂、灰黒粘土、暗灰粘土、暗灰砂質粘土、暗灰シルト、黄灰砂質土の順である(Fig. 11-4)。暗灰粘土層および灰褐砂層から奈良時代の荷札木簡がそれぞれ 1 点が出土しており、奈良時代の堆積ではあるが、南側溝同様、出土した遺物は少ない。

C　坪境小路(Pl. 14～18、Ph. 5)

七条条間北小路の規模

七条条間北小路　七条条間北小路 SF6470は、東一坊坊間東小路西側溝から東一坊大路西側溝までの約124 m を検出した。両側溝の心々間距離は7.0～7.4 m で、路面幅は4.5～5.0 m であ

る。遺構検出面は粘質土または砂質土のいわゆる地山で、標高は東一坊坊間東小路との交差点で54.3 m、東一坊大路西側溝付近で54.05 m となっており、東に0.3%弱の勾配をもつ。

北側溝 SD6472・6612は素掘溝で、東一坊坊間東小路の路面を横切り、同東側溝と交差して東一坊大路西側溝まで達する。東一坊大路路面上には延長部にあたる溝はない。溝の規模は東小路との交差点部分が幅1.0～1.8 m、深さ0.15 m と小さいが、十六坪に面する部分は幅1.5～2.7 m、深さ0.3～0.8 m である。東一坊大路西側溝との合流点付近では、護岸用の杭を伴うが、横木等は遺存していない。溝底の標高は、東一坊坊間東小路付近で54.0 m、東一坊大路西側溝との合流点の西約18 m では53.4 m で、東へ0.6%と緩い勾配であるが、合流点付近では急勾配になる。溝の最深部は溝の北寄りにあり、部分的に掘り直しが認められる。溝の堆積は大きく 3 層に区分でき、埋土は下から下層が灰色粘土、灰褐粘質土、中層が灰褐砂質土、褐色砂質土、上層が黄灰褐砂質土、淡灰粘質土である(Fig. 11-7)。下層には奈良時代初頭から中頃、中・上層には奈良時代後半から平安時代の土器を含む。

南側溝 SD6471は素掘溝で、幅1.4～2.4 m、深さ0.3～0.8 m。東一坊坊間東小路の路面を横切らず、同東側溝から東一坊大路西側溝まで達する。東一坊大路路面上の溝の延長部は調査区外になる。また、南側溝は Y—18,083付近から東側が国土方眼座標系に対して、東で北に振れる角度が大きくなる。溝底の標高は東一坊坊間東小路付近で54.0 m、東一坊大路西側溝との合流点付近で53.6 m であり、東へ0.4%の勾配である。溝の堆積は大きく 2 層に区分でき、埋土は下から下層が灰色粘質土、灰橙粘質土、灰褐粘質土、上層が暗茶褐砂質土、明黄褐砂質土である(Fig. 11-7)。下層からは奈良時代初頭から中頃、上層からは奈良時代後半の土器が出土した。東一坊坊間東小路寄りには祭祀土坑 SX6530があり、中央やや東寄りに橋 SX6525が架かる。部分的に掘り直しがあり、そこからは、奈良時代末の土器が出土した。

祭祀土坑

東一坊坊間東小路　東一坊坊間東小路 SF6535・6615は七条条間北小路との交差点を含む形で約10 m を確認した。東一坊坊間東小路の路面検出面は粘質土の地山で、標高は約54.3 m、路面幅は5.2～5.5 m。交差点内には土器埋納遺構 SX6533がある。

東側溝 SD6534・6614は幅約 2 m、深さ0.2～0.4 m の素掘溝。七条条間北小路両側溝との合流点付近では幅2.0～2.5 m で、七条条間北小路と交差する部分ではやや狭く、幅1.5 m となっている。溝の埋土は、暗黄灰粘質土である(Fig. 11-5)。七条条間北小路との交差点には東側溝を渡るための橋 SX5632がある。

西側溝 SD6536は、その東岸のみを長さ約 6 m にわたり検出した。溝心は調査区外になるため、規模は明らかにできなかった。溝の堆積層は下から明灰褐粘質土、明茶褐粘質土、暗灰褐粘質土である(Fig. 11-6)。

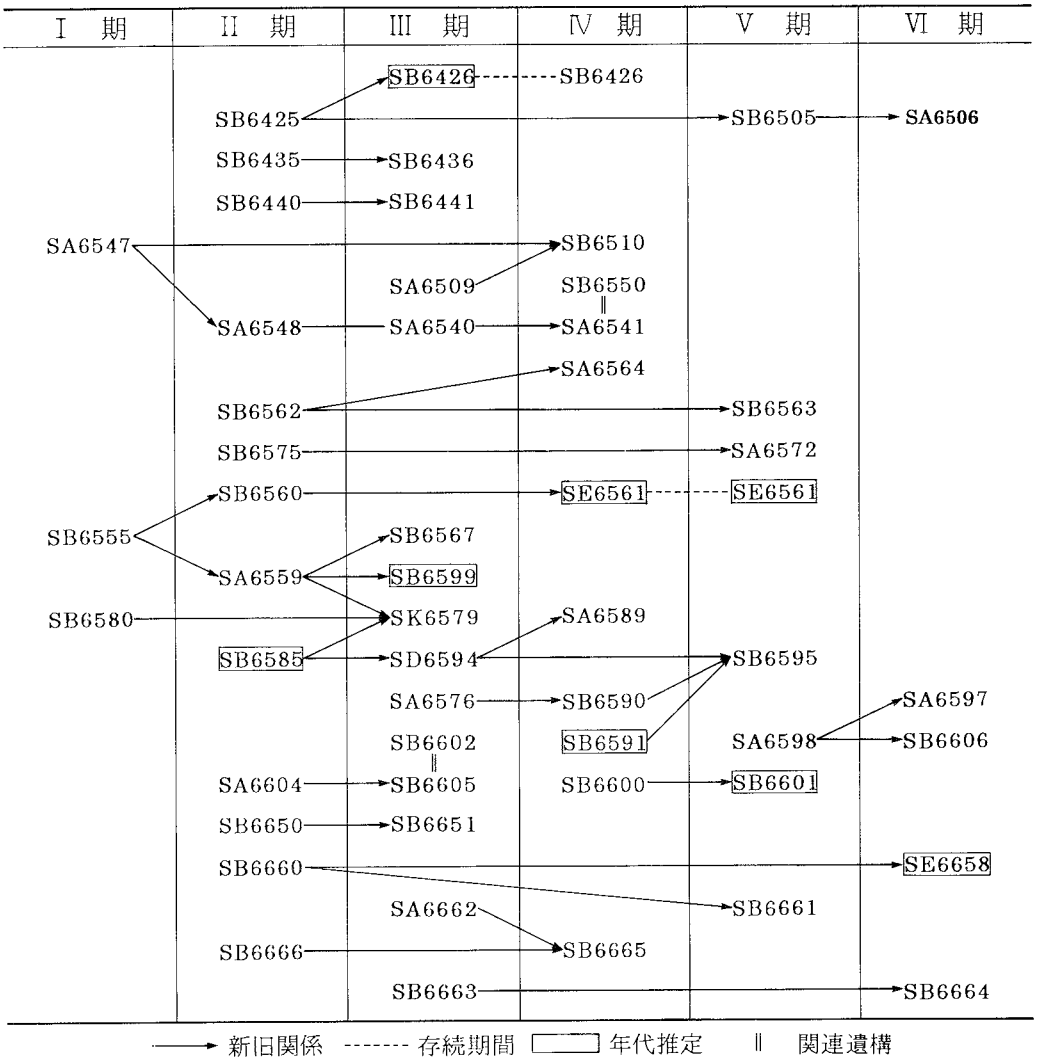
3　十五坪・十六坪の遺構

平城京左京七条一坊十五・十六坪では、４次にわたる調査で、建物58棟、塀49条などを検出した。しかし十五坪については北辺から５ｍ足らずの発掘にとどまっており、遺構も小規模建物４棟、塀２条などを検出しただけである。かつ、遺構に伴う遺物も少なく、遺構の時期を知る手がかりは皆無といってよい。したがって、本稿では、時期別に記述していない。

十六坪については、条坊道路側溝で囲まれた坪のほぼ3/4を発掘調査しているが、遺構の重複関係が少なく、遺構の時期を決定できる遺物の出土も乏しい状況である。また、多くの遺構は、整然とした配置計画に基づいている様子が認められない。しかも、遺構の時期を知りうるわずかな手がかりからは、遺構の方位と時期が必ずしも一致しないことが明らかになっている。したがって、遺構の重複関係・位置関係、出土遺物などの乏しい手掛かりから、時期・変遷を推定せざるをえない。ここでは遺構を時期別に記述しているが、この時期区分は一案として提示するものである。伴出遺物や重複関係から新旧を判断しうる主な遺構を Tab. 4 に示す。

坪の3/4を発掘

Tab. 4　遺構の新旧関係



A　奈良時代以前の遺構

SD6484　6AHG—Q・6AHH—H 地区　(Pl. 13)

旧流路

十六坪の南東部を北東から南西へ流れる斜行溝で、平城京以前の旧流路である。この流路が自然の堆積で埋没した後、東一坊大路西側溝 SD6400が掘削されている。国土座標に対し北で東に55°振れる。幅 4 m、深さ50 cm で主に白色粗砂が堆積する。東一坊大路西側溝 SD6400の西岸から長さ 6 m ほどを検出するにとどめた。

SD6621　6AHH—H 地区　(Pl. 6)

十六坪北西部にある東西素掘溝。幅50 cm 前後で長さ10 m を検出した。SB6620西妻通の柱穴に切られる古い溝である。

SD6642　6AHH—H・I 地区　(Pl. 5、Ph. 20)

十六坪の北西部で検出した旧流路の堆積である。発掘区北端では東一坊坊間東小路東側溝 SD6614から30 m に位置し、25 m 南流したのち南西に向きを変えている。

SX6412　6AHG—R 地区　(Pl. 9)

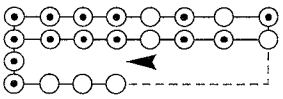
東一坊大路路面上の竪穴住居

東一坊大路 SF6410の路面上で検出した竪穴住居である。東西 4 m、南北 4 m であるが、東辺は3.7 m と北東角が南へ縮む。北西隅に小穴 1 個を検出。貼床と考えられる黒褐色粘土・黄褐色粘土混じりの暗青灰色砂質土の底部 5 cm ほどが残るのみで、周堤は削平されている。建物内に柱穴は検出できなかった。時期を示す遺物は出土していないが、古墳時代の遺構であろう。

B　奈良時代以降の遺構

i　十五坪の遺構

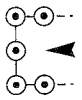
SB6469　6AHH—G 地区　(Pl. 16・17、Ph. 16)



十五坪の北辺中央にある北廂付掘立柱東西棟建物。東一坊大路西側溝 SD6520西岸から46 m、七条条間北小路南側溝 SD6471から 0.5 m に位置する。北で西へ2°00′の振れを測る。桁行 7 間×梁行 2 間で、北廂がつく。柱間寸法は梁行・桁行とも 6 尺であるが、東 2 間が 8 尺、7 尺と延びる。廂の出は 4 尺で、造営尺は29.5 cm を測る。北小路南側溝とは近接しすぎており、共存し難い。

なお、建物遺構に添えた平面模式図の記号は、○：掘形・抜取穴のみの柱穴、⊙：柱痕跡を残す柱穴、●：柱根を残す柱穴であることを示す。

SB6522　6AHH—G 地区　(Pl. 16、Ph. 16)

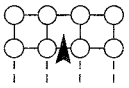


十五坪北辺中央西寄りの掘立柱南北棟建物で、北妻から 1 間分を検出した。東小路東側溝から52 m、北小路南側溝から2.5 m に位置する。北で東へ0°30′の振れを測る。桁行 2 間以上×梁行 2 間で、柱間寸法は桁行 5 尺、梁行 6 尺、造営尺は30.0 cm を測る。柱穴の重複関係から SB6523より古い。

SB6523　6AHH—G 地区　(Pl. 16)

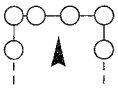
十五坪北辺の中央に近い掘立柱東西棟総柱建物で、北側柱から 1 間分を検出した。北小路南側溝から 2 m に位置する。北で東へ2°30′の振れを測る。桁行 3 間×梁行 2 間以上で、柱間寸法

は桁行・梁行とも６尺、造営尺は29.5 cm を測る。柱穴の重複関係から SB6522より新しい。北小路南側溝に近接しており、共存し難い。



SB6524　6AHH—G 地区　(Pl. 16)

十五坪北辺中央西寄りの掘立柱東西棟建物で、北側柱から１間分を検出した。東小路東側溝から46 m、北小路南側溝から2.5 m に位置する。北で東へ3°00′ の振れを測る。桁行３間×梁行２間で、柱間寸法は梁行６尺、桁行は６尺で西端間のみ４尺に縮む。造営尺は30.0 cm を測る。SB6523と重なるが、前後関係は不明である。



SA6526　6AHH—G 地区　(Pl. 16)

十五坪北辺中央西寄りの掘立柱東西塀。東小路東側溝から41.5 m、北小路南側溝から3.5 m に位置する。東で南へ1°50′ の振れを測る。２間の塀で柱間寸法は4.5尺を測る。北小路南側溝の橋 SX6525の南東にあり、これと関係する可能性もある。

SA6527　6AHH—G 地区　(Pl. 16)

十五坪北辺中央西寄りの掘立柱東西塀。東小路東側溝から36.5 m、北小路南側溝から３m に位置する。東で北へ2°10′ の振れを測る。２間の塀であるが、柱間寸法は4.5尺、6.5尺と不揃いである。造営尺は30.0 cm を測る。東方に SA6526があるが、一直線には乗らない。

SE6466　6AHH—G 地区　(Pl. 18)

十五坪の北東隅に近い井戸。七条条間北小路南側溝から２m 西側溝西岸から８m に位置する。掘形は南北２m 以上、東西1.7 m、残存深さ145 cm。井戸枠は遺存しない。埋土は青灰色粘土と暗灰色砂質粘土が混交しており、近世の遺構と思われる。

SK6521　6AHH—G 地区　(Pl.16)

十五坪北辺中央、SB6469西の隅丸長方形土坑。北小路南側溝から２m にある。南北2.8 m 以上、東西1.7 m、残存深さ75 cm で、40 cm 以下を２段掘する。底は灰緑色粘土で井戸でない。

SK6528　6AHH—G 地区　(Pl. 15)

十五坪北西隅、七条条間北小路南側溝 SD6471に並行する溝状土坑。北小路南側溝の南３m に位置する。東西11.8 m、南北2.0 m 以上、残存深さ25 cm で、平城宮土器IV～Vが出土した。

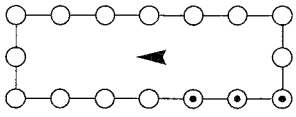
SX6465　6AHH—G 地区　(Pl. 18)

東一坊大路西側溝 SD6520内の十五坪北東隅に南北に並ぶ小杭４本。総長1.7 m、杭間隔２尺足らず。杭径10 cm 前後。奈良時代の西側溝の護岸しがらみ用の杭と考えられる。

ii　十六坪の遺構

a　Ⅰ期の遺構

SB6555　6AHH—G・H 地区　(Pl. 11・16、Ph. 13)

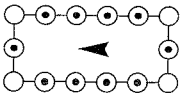


平城京造営に関わる建物

十六坪南半のほぼ中央にある掘立柱南北棟建物。西側溝西岸から60 m、七条条間北小路心から15 m に位置する。北で西へ1°25′ の振れを測る。桁行６間×梁行２間で、柱位置の歪みが多少大きいが、柱間寸法は桁行８尺、梁行7.5尺、造営尺は29.4 cm を測る。平城京造営初期の仮設的な建物であろう。重複関係から SK6553・SK6556より新しく、SB6560より古い。北西隅柱から

SB6570南西隅柱まで北へ2m(7尺)、西へ4.5m(15尺)離れる。

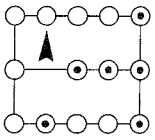
SB6570　6AHH—H地区　(Pl. 11、Ph. 12)



十六坪南西部の掘立柱南北棟建物。北で西へ1°50′の振れを測る。桁行5間×梁行2間で、柱位置は多少歪むが柱間寸法は桁行5.5尺、梁行6尺、造営尺は29.5cmを測る。SB6555の北西隅柱から西へ4.5m(15尺)、北へ2m(7尺)離れる。SB6655と同様、平城京造営初期の仮設的な建物であろう。

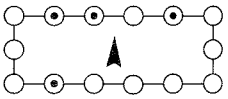
SB6580　6AHH—G地区　(Pl. 15)

床をもつ可能性のある建物



十六坪南西部の掘立柱東西棟建物。東小路東側溝から21m、北小路北側溝から12mに位置する。東で南へ4°30′と大きな振れを測る。桁行22尺、梁行19尺、造営尺は30.0cmを測る。柱配置は桁行4間×梁行2間であるが、特に桁行方向で柱間が不揃いである。棟通りに小柱穴を検出したが、西妻から1間目の柱穴を欠く。この小柱穴が床束であったとすると、東半に床を張った可能性もある。

SB6652　6AHH—I地区　(Pl. 5、Ph. 20)



十六坪北西部の掘立柱東西棟建物。東小路東側溝から12.5m、北面築地雨落溝想定位置から21mに位置する。北で西へ3°00′とやや大きな振れを測る。桁行5間×梁行2間で、柱間寸法は桁行7尺、梁行6尺、造営尺は30.0cmを測る。南へ6m(20尺)離れてSA6644、北へ6m(20尺)離れてSA6655があり、2条の塀に挟まれる。

SA6546　6AHH—H地区　(Pl. 11)

十六坪南半ほぼ中央の掘立柱南北塀。西側溝西岸から55.5m、北小路北側溝から29mに位置する。振れは微小である。北端で東西塀SA6547に取りつく。柱間2間で、柱間寸法は南から15尺、12尺で、造営尺は29.5cmを測る。

SA6547　6AHH—H地区　(Pl. 11)

十六坪南部半ほぼ中央の掘立柱東西塀。西側溝西岸から53m、北小路北側溝から37mにある。中央の柱をSA6546と共有する。東で北へ1°40′の振れを測る。2間の塀で、柱間寸法は8.5尺、造営尺は29.5cmを測る。柱穴の重複関係からSB6510・SA6548より古い。

SA6549　6AHH—H地区　(Pl. 11)

十六坪南半中央の掘立柱南北塀で。西側溝西岸から58m、北小路北側溝から40mにある。北で西へ4°30′と大きな振れを測る。柱間1間で、柱間寸法は7.5尺、造営尺は29.5cmを測る。柱穴の重複関係からSA6540・SA6548より古い。

SA6571　6AHH—G・H地区　(Pl. 11・16)

十六坪南西部のSB6570の南西にある掘立柱南北塀。北で東へ1°30′の振れを測る。5間の塀で、柱間寸法は6～7尺である。SB6555の西14.7m(50尺)、SB6570の西6m(20尺)にあり、両者を区画する。

SA6644　6AHH—I地区　(Pl. 5・6)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。北面築地想定位置から28.5mに位置する。北で西へ2°10′と少し大きな振れを測る。7間の塀で、柱間寸法は6～13尺と不揃いである。SB6652の南6m(20尺)にあり、これに伴う塀と考えられる。

SA6655　6AHH—I 地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の SB6652の北の掘立柱東西塀。北面築地雨落溝想定位置から19 m に位置し、SB6652から 6 m(20尺)離れる。 3 間の塀で、柱間寸法は 5 尺、造営尺は30.0 cm を測る。

SD6430　6AHH—H 地区　(Pl. 7•8•12•13、Ph. 22)

地割溝の可能性

六条大路南側溝南岸から60 m 南にある東西素掘溝。幅 1 m、深0.2 m。坪の東半部で、全長34.7 m を検出した。西端は未発掘部分へ続くものと考えられる。東端は西側溝西岸から18 m の位置で止まる。溝東端から5.5 m、西側溝西岸から23.5 m の位置で一旦途切れて地橋 SX6429をもち、東端が坪東辺に達しないことから、坪内の排水溝にはなりえない。西端は未確認であるが、少なくとも坪東西二等分線付近までは続くものと推測される。これが坪西辺まで達するとすれば、坪全体を南北に区画していた可能性もある。ただし六条大路心・七条条間北小路心からほぼ等しい距離(69 m)にあると見ることもでき、道路心々距離を二分した坪内の地割遺構である可能性もある。

SE6557　6AHH—G 地区　(Pl. 16)

坪内最古の井戸

十六坪南西部の SB6555の西側の方形の井戸。北小路北側溝から13.5 m に位置する。南北2.1 m、東西1.6 m の掘形と、南北0.8 m、東西0.9 m の円形の抜き取りを検出した。SB6555の建設時に、SE6558を造り替えたと考えられる。重複関係から SK6554・SA6559より古い。

SE6558　6AHH—G 地区　(Pl. 16)

十六坪南西部の SB6555の西側の方形大土坑。北小路北側溝から15 m に位置する。南北2.5 m、東西2.8 m の掘形と、南北1.2 m、東西1.5 m の円形抜き取りを検出した。SE6557より古く、SB6555の建設前に用いられた井戸と考えられる。

SK6507　6AHH—H 地区　(Pl. 12)

十六坪南東部、坪中心に近い円形大土坑。西側溝西岸から51 m、北小路北側溝から42.5 m に位置する。掘形は南北2.3 m、東西1.9 m、残存深さ70 cm。法面は緩やかで、湧水のない砂層で断念した井戸か。底近くから高杯脚、埋土上層から須恵器甕が出土した。

SK6553　6AHH—G 地区　(Pl. 16)

十六坪の南辺中央にある土坑。南北7.6 m、東西2.5 m で北小路北側溝から 5 m に位置する。平城宮土器IIが出土した。北の掘立柱南北棟建物 SB6555の造営前の土坑と考えられる。

SK6556　6AHH—G 地区　(Pl. 16)

十六坪南半中央部の方形土坑。掘立柱南北棟建物 SB6555と重なり、SB6555より古い。南北3.6 m、東西3.1 m で、平城京造営時に井戸として掘られたが、湧水がない等の理由ですぐに放棄されたと考えられる。

SK6596　6AHH—G 地区　(Pl. 15)

七条条間北小路北側溝の北側の東西に長い不整形土坑。北小路北側溝から1.5 m に位置する。南北3.7 m、東西9.2 m 以上で発掘区の西方に続く。南北棟建物 SB6599より古い。

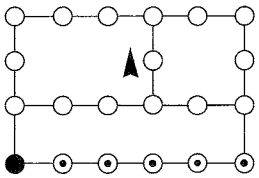
SX6429　6AHH—H 地区　(Pl. 7•12、Ph. 22)

SD6430の東端から5.5 m にある地橋。東西1.3 m を掘り残している。西側溝 SD6400西岸からは23.5 m に位置する。溝を渡る通路とも考えられるが、SD6430が地割溝であったとすると何らかの目印であった可能性もある。

b　II期の遺構

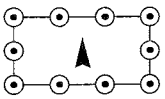
SB6425　6AHH—H 地区　(Pl. 12、Ph. 8)

II期の正殿



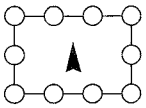
十六坪南東部の南廂付掘立柱東西棟建物で、この時期の正殿と考えられる。西側溝西岸から24 m、また北側柱は北面築地南雨落溝から60 m(200尺)、北小路北側溝から60 m に位置する。SD6430までは6 m の余地があり、SD6430の地橋部 SX6429は、この建物の東妻とほぼ揃う。北で東へ0°25′ の振れを測る。桁行 5 間×梁行 2 間の身舎に南廂がつく。棟通りの東から 2 間目に小柱穴を検出しており、間仕切りがあった可能性がある。南廂の西端柱穴には柱根が残り、残存長41 cm、直径20 cm で、 7 寸に復原できる。柱間寸法は桁行の中央 3 間が 8 尺、両端各 1 間が8.5尺、梁行は 8 尺、廂の出は10.5尺で、造営尺は29.5 cm を測る。廂の出が 5 寸の端数を含むのは、廂を後に付加したことを示すのであろうか。身舎柱径は不明だが、仮に 1 尺とすれば、その外面から10尺測って廂の柱を建てたとも考えられる。身舎北東隅柱の抜取穴から平城宮土器II～III古が出土している。後に同位置で廂を廃した SB6426に建て替える。

SB6435　6AHH—H 地区　(Pl. 7、Ph. 8)



十六坪北東部の掘立柱東西棟建物。西側溝西岸から35.5 m、北面築地南雨落溝から40.5 m に位置する。北で西へ2°00′ の振れを測る。桁行 3 間×梁行 2 間で、柱間寸法は桁行 8 尺、梁行 6 尺、造営尺は30.0 cm を測る。SD6430の北 6 m にあり、SB6440と 9 m、SA6433と 2 m 離れる。南東に少しずれて SB6436が重なるが、柱穴は重複しない。

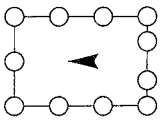
SB6440　6AHH—I 地区　(Pl. 7、Ph. 8)



十六坪北東部の掘立柱東西棟建物。西側溝西岸から36.5 m、北面築地南雨落溝から27.5 m に位置する。SB6435から北へ 9 m(30尺)離れ、西妻の位置がほぼ揃う。振れは微小である。桁行 3 間×梁行 2 間で、柱間寸法は桁行・梁間とも 7 尺、造営尺は29.5 cm を測る。後に柱抜取穴を利用して SB6441に建て替える。

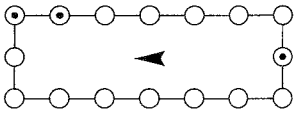
SB6495　6AHH—G・H 地区　(Pl. 13、Ph. 9)

正殿付属の建物



十六坪南東部の掘立柱南北棟建物。西側溝西岸から16.5 m、北小路北側溝から21 m に位置する。北で東へ0°30′ の振れを測る。桁行 3 間×梁行 2 間で、柱間寸法は桁行 8 尺、梁行 8 尺だが、南妻面は4.5、 7 、4.5尺の 3 間に柱を建てており、南妻入の建物と考える。造営尺は29.5 cm を測る。SB6525から南へ21 m(70尺)、東へ 3 m(10尺)離れる。

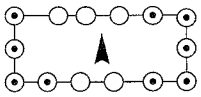
SB6560　6AHH—G・H 地区　(Pl. 11・16、Ph. 13)



十六坪南半中央の掘立柱南北棟建物。北小路北側溝から15 m、坪東西二等分線から 2 m に位置する。北で東へ1°20′ の振れを測る。桁行 6 間×梁行 2 間で、柱位置は少し乱れるが、柱間寸法は桁行 8 尺、梁行7.5尺、造営尺は29.5 cm を測る。柱穴の重複関係から SK6556・SB6555より新しい。SA6548の西2.4 m(8 尺)、SA6559の北1.95 m(6.5尺)に位置する。

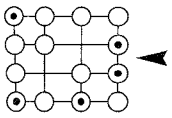
SB6575　6AHH—G 地区　(Pl. 15、Ph. 14)

十六坪南西部、坪南辺に近い掘立柱東西棟建物。坪東西二等分線から西へ22.5 m(75尺)、北小



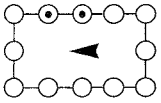
路北側溝から6.5 m(22尺)に位置する。SA6559からは南へ3 m強(内法10尺)離れる。北で東へ1°30′の振れを測る。桁行5間×梁行2間である。柱間寸法は梁行は6尺等間を測るが、桁行方向の柱位置は不揃いで、南側柱通りでは東から6、7、6、6、6尺、北側柱通りでは東から6、6、6、5、8尺である。造営尺は29.5 cmを測る。柱穴の重複関係からSA6572・SK6578より古い。

SB6585　6AHH—G・H地区　(Pl. 10・15、Ph. 14)



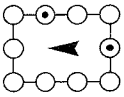
十六坪南西部の掘立柱南北棟建物。北小路北側溝から19 m、東小路東側溝から18 m(60尺)に位置する。北で東へ1°30′の振れを測る。桁行3間×梁行3間である。建物内部の2柱穴を欠くが総柱建物であろう。柱間寸法は梁行は5尺等間であるが、桁行は6.5尺で北端間のみ5尺に縮み、かつ北西隅柱が南へずれる。造営尺は30.0 cmを測る。SA6584の南10 m(35尺)、SA6559の北5.5 m(18尺)にあり、柱穴の重複関係からSK6581・SD6594より古い。南西隅柱の抜取穴から平城宮土器II～IIIが出土した。

SB6625　6AHH—H・I地区　(Pl. 6、Ph. 19)



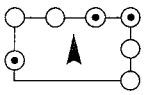
十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。SD6430から北へ18 m、東小路東側溝から39.5 m、坪東西二等分線の西15.5 mに位置する。北で東へ2°00′の振れを測る。桁行4間×梁行2間で、柱間寸法は梁行は6.5尺等間、桁行は南2間が5.5尺、北2間が6尺である。造営尺は30.0 cmを測る。SB6660から南へ50尺離れ、東妻から30尺に東側柱が位置する。後出SB6647とは東側柱どうしで30 m(100尺)離れる。

SB6647　6AHH—I地区　(Pl. 5、Ph. 20)



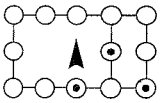
十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。SD6430から25 m(85尺)、東小路東側溝から10.5 m(35尺)に位置する。振れは微小である。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は梁行は6尺等間であるが、桁行は全長17尺を3等分するようである。造営尺は29.5 cmを測る。前出SB6625との間隔は東側柱どうしで100尺を測る。

SB6650　6AHH—I地区　(Pl. 5、Ph. 20)



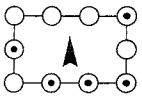
十六坪北西部の掘立柱東西棟建物。SD6430の北28 m、北面築地雨落溝想定位置から22 mに位置する。桁行3間×梁行2間であるが、柱位置の歪みはかなり大きい。柱間寸法は桁行北側柱は7尺であるが、東端間が6尺に縮む。梁行東妻は5.5尺等間であるが、西妻は中央柱が棟通りから南へ2尺ずれる。造営尺は30.5 cmを測る。SB6660の南9 m(30尺)、前出SB6625の東8.5 m(29尺)に位置する。柱穴の重複関係からSB6651より新しい。

SB6660　6AHH—I地区　(Pl. 5、Ph. 20)



十六坪北西部の掘立柱東西棟建物。北面築地想定位置から8.5 m、東小路東側溝から28 mに位置する。北で東へ1°30′の振れを測る。桁行4間×梁行2間で、柱間寸法は梁行が6.5尺等間、桁行は東2間が5.5尺、西2間が6尺で、造営尺は30.0 cmを測る。SB6666とは南側柱どうしで30尺離れる。SB6625の北西隅柱から北へ50尺、西へ30尺に南東隅柱が位置する。重複関係からSD6642より新しく、SE6658より古い。

SB6666　6AHH—I地区　(Pl. 5、Ph. 18)



十六坪北西部の掘立柱東西棟建物。北面築地の南雨落溝想定位置に接する。東小路東側溝から24 m(80尺)に位置する。北で東へ1°10′の振れを測る。桁行3

間×梁行2間で、柱位置の歪みが大きいが、柱間寸法は梁行が6尺、桁行は全長20尺を3等分している。造営尺は29.5cmを測る。

SA6433　6AHH—H地区　(Pl. 7•8)

十六坪北東部の掘立柱東西塀。北面築地南雨落溝から46m、SB6435の南2mにある。東で北へ0°50′の振れを測る。全長20m、12間の塀で、柱間寸法は5～11尺と不揃いである。

SA6548　6AHH—H地区　(Pl. 11)

坪を東西に二等分

十六坪南半部中央の掘立柱南北塀。東一坊大路西側溝SD6400の西岸と東一坊坊間東小路東側溝SD6534の東岸から等距離(200尺)にあり、十六坪を東西に二分する。北で東へ0°20′の振れを測る。北小路北側溝から26mの位置から北へ6間分を検出したが、北端を井戸SE6543掘形で撹乱されており、さらに北へ延びる可能性がある。第255次調査区では検出されておらず、未発掘部分の坪の南北二等分線付近で止まると推定される。柱間寸法は8.5～10尺と不揃いだが、造営尺は29.5cmを測る。西方の南北塀SA6576との間隔は29.5m(100尺)である。柱穴の重複関係からSA6547より新しく、SA6540より古い。

SA6559　6AHH—G地区　(Pl. 15•16、Ph. 14)

坪の南から八分の一

十六坪南西部の掘立柱東西塀。北小路北側溝から北へ14.5m(50尺)にあり、坪の西半を南北に八分する。東で南へ1°20′の振れを測る。19間分を検出し、発掘区西方へさらに延びる可能性がある。柱間寸法は7～10尺と不揃いである。SB6560の南1.95m(6.5尺)、SA6566の北10.5mに位置する。柱穴の重複関係からSB6555・SK6557より新しく、SB6567・SB6599より古い。

SA6566　6AHH—G地区　(Pl. 16)

十六坪南辺中央部西寄りの掘立柱東西塀。北小路北側溝から3m弱(9尺)に位置する。北で東へ0°25′とわずかに振れる。2間の塀で、柱間寸法は東から10尺、9尺と不整である。

SA6576　6AHH—G・H地区　(Pl. 10•15)

坪を東西に四等分

十六坪南西部にある掘立柱南北塀。坪内を東西二分するSA6548の西29.5m(100尺)にあり、坪内を東西に四分する。北で東へ0°40′の振れを測る。全長122尺を検出したが、柱間寸法は南から27、28、18、9、10、12、18尺と不整で、中間の柱穴を欠くようであるが、造営尺を29.5cmとすると良く合致する。区画塀ではなく、地割用の仮設的な柱列と考えられる。南端近くでSA6559・SB6575と重なっており、地割確認後ほどなく取り払われたのであろう。

SA6604　6AHH—H地区　(Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。北小路北側溝から31m、東小路東側溝から9mにある。北で東へ0°20′の振れを測る。3間分を検出しており、柱間寸法は5.5尺を測り、造営尺は30.0cmと推定する。SB6585の北6m、西9m。柱穴の重複関係からSB6605より古い。発掘区の西へ続く建物の可能性もあり、梁行2間、柱間寸法6尺ほどの総柱建物を考えると東小路東側溝まで5.5m(18尺)の余地がある。

SD6446　6AHH—I地区　(Pl. 3•6)

十六坪の北端近くで検出した東西素掘溝。幅0.7～1.1m、深0.4mで、六条大路南側溝南岸との間隔は4.5mである。築地築成土は確認していないが、坪北面築地の南雨落溝と考える。

SE6653　6AHH—I地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の井戸。東小路東側溝から15.5mにある。SB6647からは北へ4m、東へ1m、

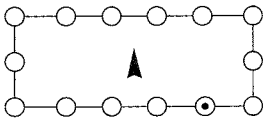
SB6650からは北へ4m、西へ7.5m、SB6660からは南へ4m、西へ9mに位置する。井戸掘形から平城宮土器II、井戸枠抜取穴の灰褐粘質土から平城宮土器IIが出土した。

SK6423　6AHH—I地区　(Pl.4、Ph.21)

十六坪の北東隅にある南北に長い土坑。南北長5.1m、東西幅1.5m、深0.8mが残存する。漆容器の須恵器や漆器が出土した。

c　III期の遺構

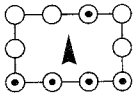
SB6426　6AHH—H地区　(Pl.12、Ph.8)



SB6425の建て替え

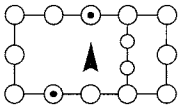
十六坪南東部の掘立柱東西棟建物。SB6425の南廂を廃して同位置で建て替えたもので、この時期の正殿SB6500の後殿と考える。北面築地南雨落溝から60m、西側溝西岸から24mに位置する。振れは微小である。桁行5間×梁行2間で、柱間寸法は桁行の両端各1間が9尺、中央3間が8尺、梁行は8尺、造営尺は30.0cmを測る。SB6500と東妻を揃え13m(45尺)離れる。

SB6436　6AHH—H地区　(Pl.7、Ph.8)



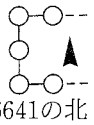
十六坪北東部の掘立柱東西棟建物。SB6435を位置をわずかに南東にずらして建て替えたもの。西側溝西岸から35m、北面築地南雨落溝から42mに位置する。北で西へ1°40′の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は梁行が6尺、桁行は6.5尺で、東端間のみ6尺に縮む。造営尺は30.0cmを測る。SD6430とは8m、SA6439とは7.5m、SB6441とは10m離れる。

SB6441　6AHH—I地区　(Pl.7、Ph.8)



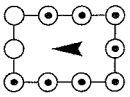
十六坪北東部の掘立柱東西棟建物。SB6440を東に1間延ばして建て替えた。西側溝西岸から34.5m、北面築地南雨落溝から27.5mに位置する。北で西へ1°30′の振れを測る。桁行4間×梁行2間で、身舎内の東から1間目の柱筋に揃う小柱穴2個を検出しており、ここに間仕切りがあった可能性がある。柱間寸法は梁行7尺、桁行の両端各1間が7尺、中央2間が6.5尺、造営尺は30.0cmを測る。SB6436から北へ10m離れる。南東隅柱から南へ2.5m(8尺)の位置から東へ延びる東西塀SA6439がある。

SB6445　6AHH—I地区　(Pl.3)



十六坪北東部の掘立柱東西棟建物。西妻から1間分を検出。西側溝西岸から西妻まで37m、北面築地南雨落溝から6m(20尺)に位置する。振れは微小である。桁行2間以上、梁行2間で、柱間寸法は桁行・梁間とも6尺で、造営尺は30.0cmを測る。SB6641の北18m(60尺)に位置する。

SB6490　6AHH—G地区　(Pl.18、Ph.9)



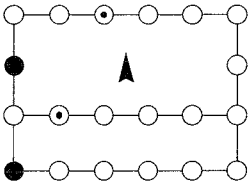
十六坪南東隅に近い掘立柱南北棟建物。西側溝西岸から12.5m、北小路北側溝から14mに位置する。北で東へ0°25′の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は桁行・梁行とも6尺で、造営尺は29.4cmを測る。

SB6500　6AHH—H地区　(Pl.12、Ph.10)

III期の正殿

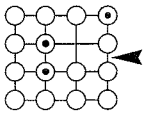
十六坪南東部中央の南廂付掘立柱東西棟建物で、この時期の正殿と考える。西側溝西岸から24m、北小路北側溝から31mに位置する。北で東へ0°25′の振れを測る。桁行5間×梁行2間の

身舎に南廂がつく。柱間寸法は身舎桁行８尺、梁行９尺、廂の出10尺で、造営尺は29.5 cm を測る。身舎西妻の棟通り柱穴に柱根が残り、残存長72 cm、径22 cm で、柱径８寸以上に復原される。また廂の西端柱穴の柱根は残存長42 cm、径12 cm で、柱径７寸に復原される。



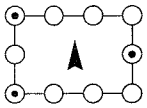
SB6562　6AHH—H 地区　(Pl. 11、Ph. 13)

十六坪南半中央部北寄りの掘立柱南北棟建物。坪東西二等分線から西1.5 m(５尺)、北小路北側溝から39 m にある。北で西へ0°40′ の振れを測る。桁行３間×梁行３間で、建物内の１柱穴を欠くが、総柱の建物と考えられる。柱間寸法は桁行5.5尺、梁行５尺で、造営尺は30.0 cm を測る。SA6540から西へ1.5 m(５尺)、SA6565から南へ1.5 m(５尺)に位置する。柱穴の重複関係から SB6563より古い。



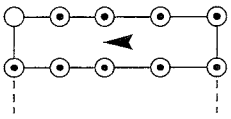
SB6567　6AHH—G 地区　(Pl. 16、Ph. 14)

十六坪南西部の掘立柱東西棟建物。SA6540から西へ12 m(40尺)、北小路北側溝から9.5 m に位置する。北で西へ0°30′ の振れを測る。桁行３間×梁行２間で、柱間寸法は桁行・梁行とも７尺、造営尺は29.6 cm を測る。柱穴の重複関係から SA6559より新しい。



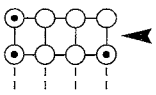
SB6599　6AHH—G 地区　(Pl. 15)

発掘区の西端、十六坪南西隅の東廂付掘立柱南北棟建物で、東廂柱列と身舎東側柱列を検出した。北小路北側溝から2.5 m、SA6540からは西へ46.5 m(155尺)に位置する。北で西へ1°10′ の振れを測る。桁行４間×梁行２間以上で東廂がつく。柱間寸法は桁行の南２間が10尺、北２間が８尺、廂の出は９尺で、造営尺は30.0 cm を測る。西側柱が未検出で坊間東小路との関係が不明であるが、身舎の梁行が２間で、柱間が８尺程度とすると東小路東側溝までの余地は4.5 m(15尺)となるので、片面廂であろう。柱穴の重複関係から SA6559・SK6596より新しい。身舎東側柱北から１間目の柱穴の掘形から平城宮土器II～III古が出土した。



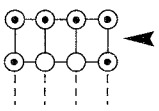
SB6602　6AHH—H 地区　(Pl. 10、Ph. 16)

発掘区の西端、十六坪南西部の掘立柱南北棟総柱建物。東側柱から１間分を検出したと考える。SA6540から西へ48 m(160尺)、北小路北側溝から23 m に位置する。振れは微小である。桁行３間×梁行２間以上で、柱間寸法は桁行5.5尺、梁行6.5尺、造営尺は29.5 cm を測る。SB6605と東側柱を揃えの南３m(10尺)の位置にある。SD6594から西へ7.5 m(25尺)、SA6582から西へ16.5 m(56尺)に位置する。３×２間の建物とすると東小路東側溝まで７m の余地がある。

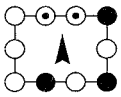


SB6605　6AHH—H 地区　(Pl. 10、Ph. 16)

発掘区の西端、十六坪南西部の掘立柱南北棟総柱建物。東側柱から１間分を検出したと考える。SA6540から西へ48 m(160尺)、北小路北側溝から31 m に位置する。北で西へ0°20′ の振れを測る。桁行３間×梁行２間以上で、柱間寸法は桁行5.5尺、梁行7.5尺、造営尺は30.0 cm を測る。SB6602と東側柱を揃え、北３m(10尺)の位置にある。SD6594から西へ7.5 m(25尺)、SA6582の西16.5 m(56尺)にある。３×２間の建物とすると東小路東側溝まで６m(20尺)の余地がある。

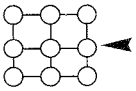


SB6620　6AHH—H 地区　(Pl. 6、Ph. 19)



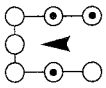
十六坪北西部の坪中央に近い掘立柱東西棟建物。北面築地南雨落溝から南へ41.5 m(140尺)、坪東西二等分線から西へ1.5 m に位置する。桁行 3 間×梁行 2 間で、柱間寸法は桁行5.5尺、梁行 6 尺、造営尺は29.5 cm を測る。南東隅柱穴に残る柱根は残存長38 cm、径18 cm、復原柱径 7 寸以上である。北東隅の柱穴の柱根は残存長23 cm、径11 cm である。また南側柱の東から 2 間目にも木片化した柱根が残る。

SB6628　6AHH—I 地区　(Pl. 6)



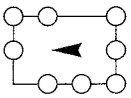
十六坪北西部の掘立柱南北棟総柱建物。北面築地雨落溝から21 m、坪二等分線から西14 m に位置する。北で西へ1°30′ の振れを測る。桁行 2 間×梁行 2 間で、柱間寸法は桁行6.5尺等間だが、梁行は東間が 6 尺、西間が 5 尺である。造営尺は30.0 cm を測る。南東隅・南西隅柱穴底には長径25 cm、厚11～12 cm の河原石の礎盤石が残る。

SB6639　6AHH—H 地区　(Pl. 5、Ph. 17)



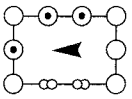
十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。SA6637から西へ 1 m 強(4 尺)に位置する。北で西へ1°40′ の振れを測る。桁行 2 間×梁行 2 間であるが、南妻面棟通り柱を欠き、柱掘形小さく、柱配置も不整で、囲柵状の施設の可能性もある。柱間寸法は桁行 7 尺、梁行 5 尺ほどか。

SB6646　6AHH—H・I 地区　(Pl. 5)



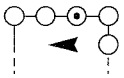
十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。北面築地雨落溝想定位置から29 m に位置する。東小路東側溝から 6 m(20尺)にある。北で西へ0°30′ の振れを測る。桁行 3 間×梁行 2 間だが、東側柱の南から 1 間目と北西隅柱を欠く。柱間寸法は桁行・梁行とも 6 尺で、造営尺は30.0 cm を測る。SA6637から西へ16 m、SA6641から北へ8.5 m に位置する。

SB6651　6AHH—I 地区　(Pl. 5)



十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。北面築地雨落溝想定位置から16.5 m、東小路東側溝から21.5 m に位置する。北で東へ2°20′ の振れを測る。桁行 3 間×梁行 2 間で、柱間寸法は桁行・梁行とも 6 尺であるが、西側柱中央間を 7 尺に広げる。この 7 尺間の柱の間に4.5尺の間隔で 2 柱を立てるのは戸口であろうか。造営尺は30.0 cm を測る。SB6647から東へ 7 m(24尺)、SA6643から北へ8.5 m 離れている。柱穴の重複関係から SB6650より新しい。南東隅柱の掘形から平城宮土器III中～が出土した。

SB6663　6AHH—I 地区　(Pl. 5)



発掘区西端、十六坪北西隅に近いの掘立柱南北棟建物で、東側柱と南妻棟通り柱を検出したと考える。北面築地雨落溝想定位置から2.7 m(9 尺)に位置する。桁行 3 間×梁行 2 間以上で、柱間寸法は桁行5.5尺、梁行 5 尺、造営尺は30.0 cm を測る。柱穴の重複関係から SB6664より古い。

SA6439　6AHH—I 地区　(Pl. 7•8)

SB6441の南の掘立柱東西塀。北面築地南雨落溝から34 m にある。東で北へ1°20′ の振れを測る。全長21 m を検出したが、柱間は西端 2 間が 8 尺であるほかは不揃いである。SB6441の南2.5 m、SB6636の北7.5 m にあり、両建物の東側空閑地を南北に区画する。

SA6509　6AHH—H 地区　(Pl. 12)

十六坪南半ほぼ中央の掘立柱南北塀。西側溝西岸から50 m、北小路北側溝から31 m に位置する。北で東へ0°50′ の振れを測る。4 間の塀で、柱間寸法は 7 尺であるが、南から第 3 ～ 4 柱のみ 6 尺に縮む。造営尺は30.0 cm を測る。SB6500から13.5 m(45尺)、SA6540から 9 m(30尺)に位置する。柱穴の重複関係から SB6510より古い。

SA6540　6AHH—G・H 地区　(Pl. 11・16、Ph. 13)

坪南半を東西に二等分

十六坪南半を東西に二分する掘立柱南北塀。西側溝西岸から58 m、東面築地を想定すると56 m(190尺)に位置し、南端は北小路北側溝から 2 m 離れる。20間分を検出し、北端は近現代の井戸 SE6543に攪乱され、さらに北へ延びると考えられるが、第255次調査区では検出されず、未発掘部分の坪南北二等分線付近で止まると推定される。北で西へ0°25′ の振れを測る。柱間寸法は 7 尺を測るが、南から第 5 ～ 6 柱が 8 尺、第 6 ～ 7 柱が 5 尺、また第16～17柱が 6 尺、第17～18柱が 8 尺と柱間を調整する箇所があり、この部分に出入り口が設けられた可能性がある。第17柱以北は 8 尺等間である。造営尺は29.5 cm を測る。SA6509とは 9 m(30尺)、SB6562と1.5 m(5 尺)離れる。柱穴の重複関係から SA6548より新しい。後に SA6541に造り替えられる。

SA6565　6AHH—H 地区　(Pl. 11)

十六坪南西部、坪中心に近い SB6562の北を限る掘立柱東西塀。北小路北側溝から45.5 m に位置する。振れは微小。2 間分を検出したが、東端を SE6543に攪乱されており、もう 1 間延びて SA6540に取りつく可能性もある。柱間寸法は 5 尺で、造営尺は30.0 cm を測る。

SA6568　6AHH—G・H 地区　(Pl. 11・16)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。SA6540から西へ16 m、SB6567の北2.5 m(8.5尺)の位置から北へ延びる。北で東へ0°45′ の振れを測る。6 間の塀で、柱間寸法は南 2 間が 5 尺、北4間が6.5尺、造営尺は29.7 cm を測る。

SA6582　6AHH—G・H 地区　(Pl. 10・15)

十六坪の南西部の掘立柱南北塀。SA6540から西へ31.5 m(105尺)に位置する。北で東へ0°20′ の振れを測る。6 間の塀で、南端から18 m(60尺)で北小路北側溝に至る。柱間寸法は南から第 2 柱が未検出であるが、南 3 間が10尺、北 3 間が 8 尺、造営尺は30.0 cm を測る。

SA6586　6AHH—H 地区　(Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱東西塀。北小路北側溝から38.5 m に位置する。東で北へ0°10′ の振れを測る。全長14.4 m、5 間の塀であるが、柱間は 7 ～14尺と不整である。SB6590・SB6595などと重なるが、柱穴は重複しない。

SA6603　6AHH—H 地区　(Pl. 10)

SB6602と SB6605の間をつなぐ掘立柱南北塀。SB6602北東隅柱と SB6605南東隅柱の間に 1 柱を建てて設けた目隠し塀と考える。柱間寸法は南が1.3 m、北が1.6 m である。

SA6637　6AHH—H・I 地区　(Pl. 5)

十六坪北西の掘立柱南北塀。坪東西二等分線から西へ31 m、東小路東側溝から27 m(90尺)に位置する。振れは微小。8 間分を検出し、南方の未発掘部分へ延びる可能性があるが、第254次調査区では検出しておらず、坪南北二等分線付近で止まると考えられる。柱間寸法は4.5～ 8 尺と不整である。SB6620から24 m(80尺)、SB6646から16 m(54尺)に位置する。

SA6641　6AHH—H 地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。SB6646の南8.5 m にある。振れは微小。2 間分を検出したが、発掘区西方へ延びる可能性がある。柱間寸法は 5 尺、造営尺は30.0 cm を測る。柱穴の重複関係から SD6642より新しい。

SA6643　6AHH—H・I 地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。北面築地雨落溝想定位置から30 m 離れ、SA6637の北端に接する。振れは微小。全長7.5 m(25尺)を検出したが、東から10、15尺間隔の 3 柱穴の掘形が大きく西側15尺の間に小穴 3 個が並ぶ。SB6639の北8.5 m に位置する。

SA6662　6AHH—I 地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。北面築地雨落溝想定位置から 4 m に位置する。北で西へ2°30′の振れを測る。3 間の塀だが、柱間寸法は 5 ～ 9 尺と不整である。

SD6594　6AHH—G・H 地区　(Pl. 10、Ph. 22)

十六坪南西部の南北素掘溝。東小路東側溝から18 m(60尺)、SB6602・SB6605の東7.5 m(25尺)、SA6582の西 9 m(30尺)にある。幅25～50 cm でわずかに蛇行する。南端は北小路北側溝の北20 m で途切れており、敷地内の排水の用はなさない。地割溝とも考えられるが坪を整数等分するような位置にはなく、性格は不明である。柱穴などとの重複関係から SB6585より新しく、SA6589・SB6595より古い。

SD6609　6AHH—G 地区　(Pl. 15)

坪東西二等分線の西32 m に位置する南北素堀溝。SK6574の西 1 m にある。南北の長さ 9 m、幅0.4～1.1 m で、七条条間北小路北側溝に注ぐ。宝珠硯片が出土した。

SE6432　6AHH—H 地区　(Pl. 8•19、Ph. 23)

縦板組の井戸

十六坪北東部の井戸。西側溝西岸の西12.5 m、北築地雨落溝から46.5 m にある。SB6536から東へ22 m、SD6430の延長線からは北へ 6 m に位置する。掘形は直径 4 m、深1.6 m で、一辺84 cm の縦板組井戸枠が残る。四隅に 5 cm 角ほどの支柱を立て、横桟 2 ～ 3 段をあてがって縦板を支持する構造である。縦板は幅15 cm ほどで一辺に 7 ～ 9 枚用い、板の重ねを大きくとっている。掘形から平城宮土器II、枠内から平城宮土器II～IIIが出土した。

SK6578　6AHH—G 地区　(Pl. 15)

十六坪南西部の南北に長い不整形土坑で南北4.3 m、東西1.5 m。SA6540から32.5 m、北小路北側溝から4.5 m に位置する。SB6575より新しく、奈良中頃の土器が出土しており、745年平城還都直後の土坑と考える。

SK6579　6AHH—G 地区　(Pl. 15)

十六坪南西部の SB6580と重複する南北に長い不整形土坑。坪東西二等分線から34 m、北小路北側溝から 7 m に位置し、SA6552の西2.5 m にある。南北13.3 m、東西4.3 m である。土坑内北端に一段深い SK6581があり、これがあふれたものであろうか。柱穴の重複関係から SA6559・SB6580・SB6585より新しい。平城宮土器III古が出土した。

SK6581　6AHH—G 地区　(Pl. 10)

十六坪南西部の SB6585の東南隅柱と重複する隅丸方形土坑。東小路東側溝から22 m、北小路北側溝から19 m に位置する。SK6579の北端の一段深くなった部分で、南北1.6 m、東西2.7 m。

SA6582の西3m(10尺)に位置する。SB6585より新しい。

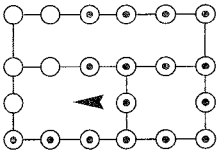
SX6475　6AHH—G地区　(Pl. 17)

南辺の門　十六坪南辺の中央東寄りで検出した東西に並ぶ2柱穴で、七条条間北小路から坪南東部への門と推定する。西側溝SD6400西岸から45m、北小路北側溝SD6472北岸から1.5mに位置する。柱間寸法は10尺で、造営尺は29.5cmを測る。これを南面築地に開く門とすると、築地の基底幅は条間北小路との間隔からみて6～7尺程度になる。

d　Ⅳ期の遺構

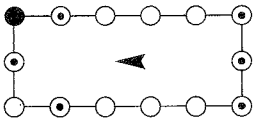
SB6510　6AHH—H地区　(Pl. 12、Ph. 10)

SB6500の脇殿　十六坪南東部の東廂付掘立柱南北棟建物。SA6509を廃して造営しており、南妻をSB6500の南廂に揃える。身舎東側柱がSA6509の柱位置を踏襲する。西側溝西岸から46.5m、北小路北側溝から31mに位置する。北で西へ0°40′振れを測る。桁行5間×梁行2間で、東廂がつく。身舎の南から2間目の棟通りに柱穴があり、ここで南北に間仕切った可能性がある。柱間寸法は梁行が6.5尺、桁行は南2間が7尺等間、北3間は6.5尺で、北から2間目のみ7尺、廂の出は9.5尺、造営尺は29.7cmを測る。SB6500西妻から10.5m(35尺)、後出SB6550東側柱から3.5m(12尺)に位置する。



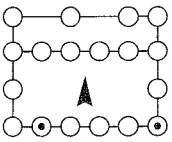
SB6550　6AHH—H地区　(Pl. 11)

十六坪南半の中央にある掘立柱南北棟建物。西側溝西岸から57m、北小路北側溝から28.5mに位置する。SA6541に造り替えた際、その北端に建てられた。SA6541の柱通りから東へ1.5m(5尺)が東側柱通りである。北で東へ1°00′の振れを測る。桁行5間×梁行2間で、柱間寸法は桁行・梁間とも8尺、造営尺は30.0cmを測る。SB6510から西へ3.5m(12尺)に位置する。



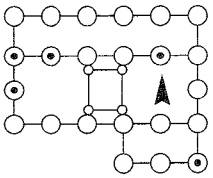
SB6590　6AHH—H地区　(Pl. 10、Ph. 15)

十六坪南西部の北廂付掘立柱東西棟建物。北小路北側溝から32m、東小路東側溝から25mに位置する。北で東へ2°10′の振れを測る。桁行5間×梁行2間で、北に廂がつくが廂の東から3・5柱めを欠く。廂の柱掘形は身舎のものよりかなり小さく、屋内化されない土縁様の構造であろう。柱間寸法は桁行5尺、梁行6.5尺、廂の出は6尺で、造営尺は30.5cmを測る。SB6591とは東妻を揃え、身舎南側柱どうしで9m(30尺)離れる。またSB6600から北3m(9尺)に位置する。柱穴の重複関係からSA6576より新しく、SB6595より古い。



SB6591　6AHH—H地区　(Pl. 10、Ph. 15)

倉庫状建物　十六坪南西部の掘立柱東西棟建物で南北に廂がつく。建物内に甕の据付穴SX6593があり、倉庫と考える。身舎中央に方形に並ぶ4本柱SX6592を検出している。北小路北側溝から41mで身舎南側柱、東小路東側溝から23mに位置する。北で東へ2°20′の振れを測る。桁行5間×梁行2間で、北側には桁行全長、南側には東から2間分の廂がつく。柱間寸法は桁行6.5尺、梁行6尺、廂の出は北・南とも7尺で、造営尺は30.0cmを測る。柱穴の重複関係からSB6595より古い。

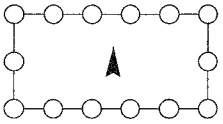


身舎北東隅の柱穴掘形から平城宮土器Ⅴが出土した。

SX6592　6AHH—H 地区　(Pl. 10)

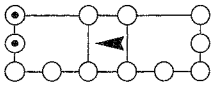
SB6591内に方形に並ぶ掘立柱穴4基。SB6591の身舎の中心にあり１間四方で、柱間寸法は身舎桁行方向６尺、身舎梁行方向７尺、造営尺は30.0cm を測る。性格は不明だが、建物の構造材ではなく、架台様の施設であろうか。

SB6600　6AHH—H 地区　(Pl. 10・11、Ph. 15)　南西部の中心建物



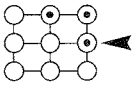
十六坪南西部ほぼ中央の掘立柱東西棟建物。北小路北側溝から23.5 m、東小路東側溝から30.5 m に位置する。坪東西二等分線から17.5 m に位置する。北で東へ2°20′ の振れを測る。桁行５間×梁行２間で、柱間寸法は桁行７尺、梁行8.5尺、造営尺は29.5 cm を測る。前出 SB6590の南7.2 m(24尺)に位置する。後に柱抜き取り穴を利用して SB6601に建て替えられる。

SB6623　6AHH—H・I 地区　(Pl. 6)



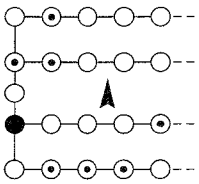
十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。SD6430の北12 m(40尺)、坪東西二等分線の西15 m(50尺)で西側柱通り。北で西へ0°30′ の振れを測る。桁行５間×梁行２間だが、東側柱の南から第２・５柱を欠く。柱間寸法は桁行は6.5尺であるが、中央間のみ７尺、梁行は5.5尺で、造営尺は30.0 cm を測る。SB6635から27 m(90尺)に位置する。

SB6626　6AHH—I 地区　(Pl. 6、Ph. 19)



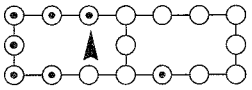
十六坪北西部の掘立柱南北棟総柱建物。北面築地雨落溝から22 m、坪東西二等分線から4.5 m(15尺)に位置する。振れは微小。桁行２間×梁行２間で、柱間寸法は桁行6.5尺、梁行５尺、造営尺は30.0 cm を測る。SA6667の南３m(10尺)、SB6623から北へ5.5 m(18尺)、東へ4.5 m(15尺)に位置する。

SB6630　6AHH—I 地区　(Pl. 6、Ph. 18)　坪北半の中心建物



十六坪の北辺ほぼ中央にある掘立柱東西棟建物で、南北２面に廂がつく。西妻から４間分を検出した。北面築地南雨落溝から１m、東小路東側溝から56 m に位置する。坪東西二等分線は西妻から２柱目付近を通る。振れは微小である。桁行５間以上×梁行２間であるが、第252次調査区では検出されていないので、桁行は８間以下である。柱間寸法は桁行6.5尺、梁行5.5尺、廂の出は南・北とも８尺で、造営尺は30.0 cm を測る。身舎南西隅柱穴に柱根が残る。残存長25 cm、径10 cm で復原柱径は７寸以上である。

SB6635　6AHH—I 地区　(Pl. 6、Ph. 18)

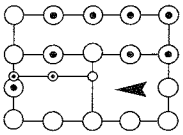


十六坪北辺に近い掘立柱東西棟建物で、北側柱を SB6630の北廂柱に揃え、４m 強(14.5尺)離れる。北面築地南雨落溝から南側柱まで4.5 m(15尺)、東小路東側溝から40 m に位置する。振れは微小である。桁行６間×梁行２間で、柱間寸法は桁行6.5尺等間、梁行は全長10.5尺を二分する。造営尺は30.0 cm を測る。SA6667から北側柱まで18 m(60尺)ある。

SB6640　6AHH—H・I 地区　(Pl. 5、Ph. 17)

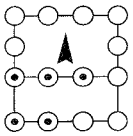
十六坪北西部の東廂付掘立柱南北棟建物。北面築地南雨落溝から33.5 m、東小路東側溝から27 m、坪東西二等分線から25 m に位置する。振れは微小である。桁行４間×梁行２間で、東廂

がつく。柱間寸法は桁行の南2間が6.5尺、北2間が7尺、梁行は6尺、廂の出が7尺で、造営尺は29.5 cmを測る。身舎の北半2間では、身舎東側柱通から西へ4尺の位置に小柱穴が並び、間仕切りあるいは床束とも考えられるが、性格は不明である。身舎東側柱からSB6623まで12 m(40尺)、SB6645まで9 m(30尺)離れる。



SB6645　6AHH—H・I地区　(Pl. 5、Ph. 20)

十六坪北西部の小規模な掘立柱東西棟建物であるが、南側に廂がつく。北面築地雨落溝想定位置から28.5 m、東小路東側溝から13.5 mに位置する。北で東へ1°30′の振れを測る。桁行3間×梁行2間に南廂つきで、柱間寸法は桁行6尺、梁行5.5尺、廂の出8尺、造営尺は29.5 cmを測る。



南半を東西二等分

SA6541　6AHH—G・H地区　(Pl. 11・16、Ph. 13)

十六坪南半を東西に二分する掘立柱南北塀で、SA6540を柱間半分ずらして造り替えたもの。南端は北小路北側溝から1 m、北端はSB6550南妻に接する。北で東へ0°15′の振れを測る。全長27 m(90尺)、12間の塀である。柱間寸法は8尺であるが、南から2～3柱で7尺、3～5柱で6.5尺、また8～9柱で6尺と柱間を調整しており、この部分に出入り口を設けた可能性がある。造営尺は30.0 cmを測る。

SA6545　6AHH—H地区　(Pl. 11)

十六坪南東部の坪中央に近い掘立柱南北塀で、SB6510の北西隅柱の北1.9 m(6.5尺)から北へ延びる。2間分を検出し、北へ続くと考えられるが、第255次調査区では検出されず、未発掘部分の坪南北二等分線付近で止まるらしい。後出SA6551との間隔は3 m強(11尺)で、この間を通路としたものか。西側溝西岸から53.5 m、北小路北側溝から43 mに位置し、北で東へ0°35′の振れを測る。柱間寸法は南から6.5・7尺で、造営尺は30.0 cmを測る。

SA6551　6AHH—H地区　(Pl. 11)

十六坪南東部の坪中央に近い掘立柱南北塀で、SB6550の北東隅柱の北2.4 m(8尺)から北へ延びる。2間分を検出し、さらに北へ続くと考えられるが、SA6545と同様に坪南北二等分線付近で止まるらしい。SA6545との間を通路としたものであろうか。西側溝西岸から57 m、北小路北側溝から43 mに位置し、北で東へ1°弱の振れを測る。柱間寸法は5.5尺、造営尺は30.0 cmを測る。

SA6588　6AHH—H地区　(Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。SB6591の西妻から2.3 m(7.5尺)、SB6590の西妻から4.5 m(15尺)に位置する。北で東へ2°20′の振れを測る。全長5.2 m、3間の塀と推定されるが、南から1間目の柱穴を欠く。柱間は不揃いである。

SA6624　6AHH—H・I地区　(Pl. 6)

SB6623の東にある掘立柱南北塀で、SB6623の目隠し塀と考える。南端がSB6623の南妻と揃い、東へ2.7 m(9尺)に位置し、北で西へ0°30′の振れを測る。3間の塀で、全長9 m。

SA6667　6AHH—I地区　(Pl. 6)

十六坪北西の掘立柱東西塀。SD6430の北34 m(115尺)に位置する。東で北へ0°30′の振れを測る。4間の塀で、全長11.4 m(38尺)である。SB6623から12 m(40尺)、SB6635から15 m(50尺)、SB6626から3 m(10尺)離れる。

SA6670　6AHH—I 地区　(Pl. 6)

SB6630の北廂西端柱とSB6535の北東隅柱の中間に東西に並ぶ掘立柱穴2基。北面築地南雨落溝から1.2 m(4尺)に位置する。柱間寸法は6尺、造営尺は30.0 cmを測る。振れは微小である。SB6630とSB6535の間を繋ぐ目隠し塀と考えられるが、SB6630とSB6535の間隔14.5尺の二等分線が柱間の中央を通っており、扉口としていた可能性もある。

SD6431　6AHH—H 地区　(Pl. 7)

十六坪北東部のロ字状の素掘溝。南北3.3 m、南北は南辺8.5 m、北辺7.7 mで、溝幅15～50 cm、深3 cmである。SB6436の南2 mにあり、これに伴う菜園等の外周溝であろうか。平城宮土器IV新～が出土した。

SE6561　6AHH—G 地区　(Pl. 16・19、Ph. 23)

十六坪南西部の井戸。SA6541から西へ9 m、北小路北側溝から16.5 mに位置する。掘形は南北2.7 m、東西3.0 m、残存深さ2.0 mである。ヒノキの刳抜井戸枠が残り、直径80 cm、残存長183 cm、厚3～4 cmで。下端から7 cmほどを斜めに削り落とす。上端から75 cmが風化する。井戸底は自然木を含む灰色砂、裏込土は灰緑色粘混灰白色砂である。裏込から平城宮土器V、井戸枠内から平城宮土器V～VIIが出土し、奈良時代末から平安時代初頃まで使われた。　刳抜井戸

SE6657　6AHH—I 地区　(Pl. 5・19、Ph. 23)

十六坪北西部の井戸。北面築地南雨落溝想定位置から10 m、東小路東側溝から18 mに位置し、SB6645からは北へ18.5 m(60尺)離れる。掘形は東西2.5 m、南北2.4 m、残存深2.7 mである。縦板・木箱・曲物を組み合わせた井戸枠が残る。最下部は底板を抜いた曲物で、径55 cm、高さ42 cm、厚さ0.5 cmである。この上に一辺60 cm、高さ40 cmの方形の木製桝を、やはり底を抜いて載せている。板厚1.2 cmで、四隅は三枚組としている。最上部は平面が正方形の縦板組で一辺65 cm、残存高さ1.6 m。四隅の柱に横桟2段をほぞ差しにし、幅18 cmほどの縦板を一辺に4～5枚立て込む。四隅の柱材には、井戸の桟とは関係のないほぞ穴や欠き込みがあり、転用材の可能性がある。井戸枠内埋土から平城宮土器IV～V、井戸枠抜取穴から平城宮土器Vが出土した。奈良時代末に掘られ、平安時代初めには廃絶した井戸である。　縦板・木箱・曲物を組み合わせた井戸

SK6577　6AHH—G 地区　(Pl. 10)

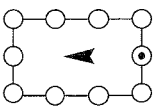
十六坪南西部の不整形土坑。坪東西二等分線の西24～30 m、北小路北側溝から18 mに位置する。南北4.5 m、東西6.4 mで、平城宮土器III新～IVが出土した。

SX6593　6AHH—H 地区　(Pl. 10)

SB6591内の浅い土坑6基。甕を据えた穴か。直径0.7～1.0 m、残存深さは15～20 cmである。遺構の重複関係からSX6592より古い穴もある。

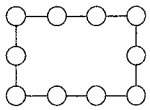
e　V期の遺構

SB6502　6AHH—H 地区　(Pl. 12、Ph. 10)



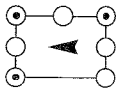
十六坪南東部の掘立柱南北棟建物で、西側溝西岸から38 m、北小路北側溝から38 mに位置する。北で東1°25′の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は桁行7.5尺、梁行6.5尺、造営尺は30.0 cmを測る。北妻を後出のSB6505の南側柱と揃えて坪南北八等分線近くに置き、SB6505の西4.5 m(15尺)にある。

SB6505　6AHH—H 地区　(Pl. 12、Ph. 10)



十六坪南東部の掘立柱東西棟建物。西側溝西岸から27 m、北小路北側溝から45 m に位置する。北で東へ1°30′ の振れを測る。桁行 3 間×梁行 2 間で、柱間寸法は桁行・梁行とも 7 尺、造営尺は30.0 cm を測る。SB6502の北東隅柱から東へ4.5 m(15尺)に南西隅柱が位置する。柱穴の重複関係から SA6506より古い。

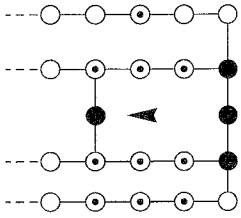
SB6563　6AHH—H 地区　(Pl. 11、Ph. 13)



十六坪南西部の坪中心に近い掘立柱南北棟建物。北で東へ3°30′ と比較的大きな振れを測る。桁行 2 間×梁行 2 間だが、西側柱通中央柱穴を欠き、西側の開いたコ字形の囲いの可能性もある。柱間寸法は桁行が 8 尺、梁行が5.5尺、造営尺は29.7 cm を測る。SB6595の東24.5 m、SB6591の東20 m、SA6598の東47.5 m(140尺)にある。柱穴の重複関係から SB6562より新しい。

SB6595　6AHH—H 地区　(Pl. 10、Ph. 15)

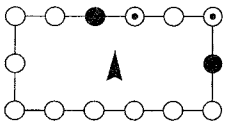
V期の中心建物



十六坪南西部の東西 2 面廂つきの掘立柱南北棟建物で、南妻から 4 間分を検出した。北小路北側溝から36.5 m に位置する。北で東へ3°30′ と比較的大きな振れを測る。桁行 5 間以上×梁行 2 間で、東西に廂がつく。身舎の棟通り南から 3 間目に柱穴があり、ここに間仕切りがあった可能性がある。柱間寸法は桁行7.5尺、梁行 8 尺、廂の出は東9.5 尺、西 7 尺で、造営尺は30.5 cm を測る。身舎の南妻の 3 柱穴と、棟通り間仕切り位置に柱根が残る。身舎南西隅の柱根は残存径18 cm、残存長50 cm で復原柱径 8 寸以上。身舎南妻棟通りの柱根は残存径10 cm、残存長22 cm、復原柱径 7 寸以上である。SA6598の東8 m(26尺)に位置する。柱穴の重複関係から SB6590・SB6591・SD6594より新しい。

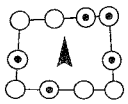
SB6601　6AHH—H 地区　(Pl. 10・11、Ph. 15)

SB6600の建て替え



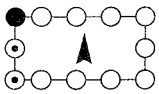
十六坪南西部の北西隅に近い掘立柱東西棟総柱建物で、SB6600の柱抜き取り穴を利用して同規模で建て替える。北小路北側溝から23.5 m、坪東西二等分線から17.5 m に位置する。北で東へ1°20′ と SB6600より振れは少し小さい。桁行 5 間×梁行 2 間で、柱間寸法は桁行 7 尺、梁間8.5尺、造営尺は29.5 cm を測る。SB6590南側柱から南へ7.2 m(24尺)に北側柱通りが位置する。東妻棟通り柱穴に残る柱根は残存長72 cm、径25 cm で、復原柱径 9 寸、北側柱西から 3 柱目の柱根は残存長40 cm、径10 cm である。北東隅柱の抜取穴から平城宮土器IV～Vが出土した。

SB6661　6AHH—I 地区　(Pl. 5)



十六坪北西隅に近い掘立柱東西棟建物。北面築地南雨落溝想定位置から 6 m、東小路東側溝から21.5 m に位置する。柱位置の歪みが極めて大きいが建物とした。桁行 3 間×梁行 2 間を想定する。柱間寸法は桁行の南面は 6 尺等間であるが、北面は東から4.5、5.5、 6 尺と不揃いである。梁行は東面が南から 5 尺、 8 尺、西面が 5 尺、 7 尺を測る。振れも測り難いが、南側柱では東で南へ1°00′ 振っている。

SB6665　6AHH—I 地区　(Pl. 5)



十六坪北辺西寄りの掘立柱東西棟建物。北面築地南雨落溝想定位置に接し、東小路東側溝から27 m に位置する。北で東へ2°30′ の振れを測る。桁行 4 間×梁

行２間で、柱間寸法は梁行5.5尺、桁行は６尺で東端間のみ4.5尺に縮む。造営尺は30.0 cm。SB6666と重なるが柱穴の重複はない。柱穴から土師器甕が出土した。

SA6501　6AHH—H 地区　(Pl. 12)

十六坪南東部、SB6502の南の目隠しになる４間の掘立柱東西塀。SB6502南妻から2.7 m(９尺)離れる。北で東へ1°25′の振れを測る。全長3.9 m(13尺)で、中間の柱穴は小さい。

SA6572　6AHH—G 地区　(Pl. 10・16)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。坪東西二等分線の西22 m に位置し、SB6601の南２m(６尺)から南へ延び、北小路北側溝の北10 m に達する。北で東へ1°20′の振れを測る。４間の塀で、柱間寸法は10尺、造営尺は29.5 cm を測る。柱穴の重複関係から SB6575より新しい。

SA6598　6AHH—G・H 地区　(Pl. 10・15)

十六坪南半の西端に近い掘立柱南北塀。全長41 m、16間分を検出した。北の未発掘部分へ延びる可能性があるが、第255次発掘区では検出しておらず、坪南北二等分線付近で止まるものと考える。柱間寸法は８尺または９尺であるが、南から第３～６柱で6.5、7.5、7.5尺と縮み、第13～14柱で、12尺に延びる。造営尺は30.0 cm を測る。北で東へ3°30′の振れを測る。SB6590の西15 m(50尺)、SB6595の西８m に位置する。SA6597・SB6606より古い。

坪西辺の閉塞施設

SK6574　6AHH—G 地区　(Pl. 15)

十六坪南西部の不整形土坑。南北4.0 m、東西7.9 m で、坪東西二等分線から西23.5 m、北小路北側溝から２m 離れる。奈良時代末期の土器を出土する。

SK6608　6AHH—G 地区　(Pl. 15)

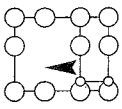
十六坪南西部の土坑。南北1.1 m、東西0.7 m で、坪東西二等分線から西25.5 m、北小路北側溝から0.5 m 離れる。平城宮土器Ｖが出土した。

SK6656　6AHH—I 地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の土坑。東小路東側溝から24 m、北面築地南雨落溝想定位置から12 m に位置する。SE6657の東南3.5 m 離れる。東西4.5 m、南北2.9 m、残存深さ20 cm。多量の平城宮土器IV～Ｖが出土した。

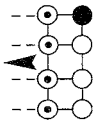
f　VI期の遺構

SB6427　6AHH—H 地区　(Pl. 12)



十六坪南東、坪中心に近い掘立柱南北棟建物。東一坊大路西側溝から42.5 m、北小路北側溝から48 m に位置する。北で東へ1°30′の振れを測る。桁行３間、梁行２間であるが、桁行が５、６、５尺、梁行が東から５、８尺と不整である。造営尺は30.0 cm を測る。柱穴は小さい。南から１間目、東から１間目に柱穴があり、南から１間を間仕切りしたものか。同じく西側柱の南端間では側柱から２尺内側に２小穴を検出しているが、性格は不明である。小規模な建物にもかかわらず、複雑な平面形をもつ。

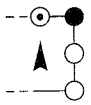
SB6606　6AHH—H 地区　(Pl. 10、Ph. 16)



十六坪の西辺中央の掘立柱建物で、東西棟総柱建物の南から１間分を検出したと考える。北小路北側溝から45 m、東小路東側溝から10 m に位置する。北で西へ0°40′の振れを測る。桁行３間×梁行１間以上で、柱間寸法は桁行5.5尺、梁行６尺、造営

尺は30.0 cm を測る。柱穴の重複関係から SA6598より新しい。

SB6664　6AHH—I 地区　(Pl. 5)



十六坪北西隅の掘立柱東西棟建物で、東妻から 1 間分を検出したと考える。北面築地雨落溝想定位置に接し、東小路東側溝から東妻まで17 m。桁行 2 間以上×梁行 2 間で、柱間寸法は桁行6尺、梁行6.5尺、造営尺は30.0 cm を測る。柱穴の重複関係から SB6663より新しい。

SA6503　6AHH—H 地区　(Pl. 12)

十六坪南東部の掘立柱東西塀。西側溝西岸から28 m、北小路北側溝から49 m に位置する。東で南へ2°45′ の振れを測る。5 間の塀で、柱間寸法は 6 尺、造営尺は30.0 cm を測る。北へ5.5 m(18尺)に SA6506があるが、東へ 1 間分ずれる。 2 条の塀の間を通路としたものか。

SA6506　6AHH—H 地区　(Pl. 12、Ph. 10)

十六坪南東の掘立柱東西塀で SA6503と平行する。北小路北側溝から44 m に位置し、東端から西側溝西岸まで25.5 m ある。東で南へ2°25′ の振れを測る。5 間の塀で、柱間寸法は 6 尺、造営尺は30.0 cm を測る。SA6503の北5.5 m(18尺)にあり、東へ 1 間分ずれる。

SA6597　6AHH—G・H 地区　(Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。東小路東側溝から10 m に位置する。北で西へ3°50′ の振れを測る。 3 間の塀で、柱間寸法は5尺、造営尺は29.5 cm を測る。SA6598より新しい。

g　中・近世の遺構

SE6478　6AHH—G 地区　(Pl. 17•19)

十六坪南東部の坪南辺に近い井戸。西側溝西岸から27 m、北小路北側溝から 4 m に位置する。掘形は北西角が北へ、南東角が南へ延びた平行四辺形で、東西1.35 m、南北1.4 m、残存深さ90 cm。遺構面から30 cm 下で 2 段掘りになっており、以下は直径 1 m ほどの円形となる。底は灰白色砂、井筒などは残存しておらず、埋土は黄灰色粘土混じりの青灰色粘質土である。底から中世の瓦器が出土した。

SE6479　6AHH—G 地区　(Pl. 18)

十六坪南東隅に近い方形土坑。西側溝西岸から 6 m、北小路北側溝から 9 m に位置する。掘形は隅丸方形で、南北1.6 m、東西1.6 m、残存深さ82 cm である。底は黄灰色荒砂、埋土は灰色粘土と黄灰色砂が混交する。湧水のない砂層に達して断念された井戸と考える。

SE6489　6AHH—G 地区　(Pl. 18)

十六坪南東隅に近い方形土坑。西側溝西岸から11 m、北小路北側溝から12.5 m に位置する。掘形は南西隅が北へ縮んだ方形で、東西2.15 m、南北2.15 m、残存深さ135 cm。遺構面から50 cm 下がって 2 段掘りとなり、以下は東西1.4 m、南北1.35 m の円形掘形となる。底は灰色砂、埋土は段掘以下が青灰粘土。上層が灰褐色砂質土と黄褐色粘質土が混交する。湧水のない砂層に達して断念された井戸と考える。遺物はないが中世の遺構であろう。

SE6658　6AHH—I 地区　(Pl. 5、Ph. 20)

十六坪北西部の井戸。東小路東側溝から30 m、北面築地雨落溝想定位置から11 m に位置する。SB6660内部で検出した。掘形は東西2.5 m、南北2.5 m の方形で、埋土に瓦器を含む。

h　時期不明の遺構

SA6424　6AHH—H 地区　(Pl. 13)

十六坪南東部の掘立柱南北塀。西側溝西岸から21 m に位置する。北で東へ2°00′ の振れを測る。全長10 m、7 間の塀で、柱間寸法は5.5～ 8 尺と不揃いである。柱穴掘形は小さい。耕作に伴う遺構の可能性もある。

SA6564　6AHH—H 地区　(Pl. 11)

十六坪南西部の坪中心に近い掘立柱東西塀。北小路北側溝から42 m に位置する。振れは微小。2 間分を検出した。柱間寸法は東から 5 尺、7 尺で、造営尺は29.5 cm を測る。SB6562・SB6563と重なり、SB6562より新しいが、SB6563との新旧関係は不明。掘形小さく、耕作に伴う遺構の可能性もある。

SA6573　6AHH—G 地区　(Pl. 11)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。北で西へ5°50′ と極めて大きい振れを測る。3 間の塀で柱間寸法は 8 尺、造営尺は30.0 cm を測る。南から 2 柱目に柱根が残り、残存長21 cm、径 6 cm、復原柱径は粘質土の範囲から見て12 cm 程度か。

SA6583　6AHH—H 地区　(Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱東西塀。北小路北側溝から35 m、東小路東側溝から21 m に位置する。東で北へ0°20′ の振れを測る。3 間の塀で、柱間寸法は 7 尺、造営尺は30.0 cm を測る。柱穴の重複関係から SA6584より新しいが、時期は決め難い。

SA6584　6AHH—H 地区　(Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱東西塀。北小路北側溝から35 m に位置する。東で北へ2°00′ の振れを測る。3 間分を検出し、柱間寸法は 9 尺、造営尺は29.5 cm を測る。SB6585の北10 m(35尺)にある。柱穴の重複関係から SA6583より古いが、時期は決め難い。

SA6587　6AHH—H 地区　(Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。北で西へ2°50′ の振れを測る。2 間の塀で、柱間寸法は 8 尺等間、造営尺は30.0 cm を測る。SA6586・SB6595と重なるが、新旧関係は不明。

SA6638　6AHH—H 地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱南北塀。北で東へ3°20′ の振れを測る。2 間の塀で、柱間寸法は 7 尺、造営尺は29.5 cm を測る。SB6640と重なるが柱穴は重複しない。振れが耕作溝と一致し、耕作関連の可能性が大きい。

SA6648　6AHH—I 地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。東で南へ2°20′ の振れを測る。5 間の塀で、柱間寸法は中央 3 間が7.5尺、両端間が6.5尺。振れは耕作溝と直交しており、耕作関連の可能性が大きい。

SA6654　6AHH—I 地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。東で南へ2°00′ の振れを測る。2 間の塀で、柱間寸法は5.5尺、造営尺は30.0 cm を測る。振れは耕作溝と直交しており、耕作関連の可能性が大きい。

SD6476　6AHH—G 地区　(Pl. 16・17)

十六坪南辺中央付近の東西素掘溝。北小路北側溝から1.5 m に位置する。SX6475から西へ24

mの間で断続して検出した。幅30 cm 前後でSA6541より新しい。十六坪南面の区画施設に伴う溝とも考えられるが、耕作関連の溝の可能性もある。

SD6477　6AHH—G 地区　(Pl. 18)

十六坪南辺に近い東西素掘溝。東一坊大路西側溝から 9 m、北小路北側溝から3.5 m に位置する。東西長さ8.5 m、幅0.5～1.2 m、残存深さ46 cm。東端の浅くなった部分で漆器片が出土した。十六坪南辺を区画する土塁または築地の土取り穴の可能性もある。

SD6494　6AHH—G 地区　(Pl. 17・18)

十六坪南辺の SD6477の西に続くごく浅い東西溝。北小路北側溝の北 4 m にある。東西4.8 m、幅70 cm 前後で、残存深さ10 cm。SD6477同様、南面区画施設の土取り溝の可能性もある。

SD6632　6AHH—I 地区　(Pl. 6)

十六坪北東部の SB6630と重複する斜行溝。幅約40 cm、長さ3.9 m で、SB6630より古い。

SE6529　6AHH—G 地区　(Pl. 15)

七条条間北小路路面上の井戸。小路交差点から東へ18 m、北小路の北寄りにある。掘形は南北1.7 m、東西1.7 m の方形で、残存深さ126 cm、遺構面より1.0 m 下がって 2 段掘とし、以下は長径80 cm 短径61 cm の楕円形の掘形となる。

SK6434　6AHH—H 地区　(Pl. 8)

十六坪東辺中央付近の隅丸方形土坑。西側溝西岸から 9 m、北面築地南側溝から42 m に位置し、SE6432から東へ3.5 m、北へ4.5 m にある。掘形は隅丸方形で、東西1.7 m、南北2.0 m、残存深75 cm。底は灰色細砂、埋土は底から55 cm が黒灰色粘土混青灰色シルト、その上は黄灰色粘質土である。掘形の法面は急角度で、途中で断念した井戸か。出土土器は時期不明。

SK6474　6AHH—G 地区　(Pl. 18)

七条条間北小路北側溝 SD6472を切る隅丸方形土坑。西側溝 SD6400西岸から17 m に位置する。条間北小路北側溝の北岸から溝内にかけて、東西1.1 m、南北1.1 m、残存深さ80 cm。途中で断念した井戸であろうか。

SK6481　6AHH—G 地区　(Pl. 18)

十六坪東辺南寄りの南北に長い土坑。西側溝西岸から 4 m、北小路北側溝から北へ12 m に位置する。南北3.85 m、東西1.3 m、残存深さ45 cm。法面は急角度である。須恵器が出土したが時期は不明である。東辺を区画する築地の土取り穴の可能性もある。

SK6482　6AHH—G 地区　(Pl. 18)

十六坪東辺南寄りの南北に長い不整形土坑。西側溝西岸から 4 m、SK6482の北 2 m に位置する。東西1.6 m、南北2.7 m、残存深さ30 cm で、法面は急角度である。東辺を区画する築地の土取り穴の可能性もある。

SK6483　6AHH—G・H 地区　(Pl. 13)

十六坪南東部の方形土坑。西側溝西岸から 5 m、北小路北側溝から23.5 m に位置する。南北2.0 m、東西1.8 m、残存深さ70 cm。底は茶褐色粘土で井戸にはならない。埋土は灰褐色粘質土塊を含む黄灰色粘質土である。瓦・土器が少量出土したが、時期は不明である。

SK6486　6AHH—G 地区　(Pl. 18)

十六坪東辺南寄り、SK6481の北西の南北に長い不整形土坑。西側溝西岸から 6 m、北小路北

側溝から14 m に位置する。南北4.6 m、東西1.5 m、残存深さ50 cm。法面は急角度である。東辺を区画する築地の土取り穴の可能性もある。

SK6487　6AHH—G 地区　(Pl. 13)

十六坪東辺南寄り、SK6481と SK6483の間をつなぐ形で検出された南北に長い不整形土坑。西側溝西岸から 6 m に位置する。南北4.2 m、東西1.0 m、深さ35 cm。東辺を区画する築地の土取り穴の可能性もある。

SK6488　6AHH—H 地区　(Pl. 13)

十六坪東辺南寄り、SK6483の北西にある円形土坑。西側溝西岸から 6 m、北小路北側溝から25 m に位置する。南北1.0 m、東西1.0 m で、拳大の礫が多数投入されている。性格不明。

SK6491　6AHH—G 地区　(Pl. 17)

十六坪南東部の不整形土坑。西側溝西岸から27 m、北小路北側溝から18 m に位置する。南北2.5 m、東西2.7 m、残存深さ40 cm 以上で大きさの割に浅い。

SK6492　6AHH—G・H 地区　(Pl. 12)

十六坪南東部の方形土坑。SB6495の西 2 m にあり、西側溝西岸から24 m、北小路北側溝から23 m に位置する。掘形は南北1.7 m、東西1.9 m、残存深さ78 cm。底は自然木を含む黒灰色砂質土、埋土は黒色土塊と白色砂塊を含む灰色粘質土である。未完掘の井戸であろうか。

SK6493　6AHH—H 地区　(Pl. 13)

十六坪南東部 SB6495の北方 5 m にある炭と土器を含むごく浅い方形土坑。西側溝西岸から13 m、北小路北側溝から33 m に位置する。南北1.0 m、東西1.4 m、残存深さ16 cm。

SK6552　6AHH—G 地区　(Pl. 16)

十六坪南辺に近い不整形土坑。北小路北側溝から 5 m に位置する。南北3.6 m、東西2.8 m。土器の時期は不明である。

SK6554　6AHH—G 地区　(Pl. 16)

十六坪南西部の SK6553と SK6557の間にある不整形土坑。南北1.5 m、東西1.1 m で SK6553・SK6557より新しい。土器の時期は不明である。

SK6569　6AHH—G 地区　(Pl. 11)

十六坪南西部の不整形土坑。坪東西二等分線の西12 m。南北4.1 m、東西1.8 m。

SK6622　6AHH—H 地区　(Pl. 6)

十六坪北西部の SB6620西妻棟通柱に切られる不整形土坑。南北1.1 m、東西1.1 m、残存深さ25 cm である。SD6621より新しく、SB6620より古いが、時期は決め難い。

SK6627　6AHH—I 地区　(Pl. 6)

十六坪北西部の SB6625の北の土坑。東西1.2 m、南北0.9 m 以上。

SK6629　6AHH—I 地区　(Pl. 6)

十六坪北半の中央に近い砂混じり大土坑。南北2.6 m、東西1.9 m。

SK6636　6AHH—I 地区　(Pl. 6)

十六坪北西部の築地南雨落溝 SD6446を撹乱する土坑。東西2.2 m、南北 1 m 以上。

SK6659　6AHH—I 地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の SB6660南東隅を撹乱する土坑。東西3.8 m、南北1.8 m。

C　祭祀関連その他の遺構

i　奈良時代の祭祀関連遺構

SX6448　6AHD—A 地区　(Pl. 3、Fig. 15、Ph. 24)

六条大路上の土器埋納坑

六条大路上の土器埋納遺構。六条大路と東一坊大路の交差点から西へ55 m、六条大路北側溝南岸から1.5 m にある。掘形は南北93 cm、東西50 cm の長円形で、残存深さ25 cm。奈良時代後半の甕2個を合口に横たえ、主軸を南北に埋納する。上半が削平され、甕の下半分が残る。

SX6460　6AHG—P 地区　(Pl. 18、Fig. 15、Ph. 24)

東一坊大路上の土器埋納坑

東一坊大路 SF6410路面上の西側溝寄りにある土器埋納遺構。七条条間北小路との交差点から北へ 6 m に位置する。掘形は南北99 cm、東西61 cm の長円形で、残存深さ25 cm。奈良時代後半の土師器甕 2 個を口縁に底部を重ねて掘形の中央から南寄りに横たえ、主軸を南北に埋納する。掘形北寄りに土器片が多く、もう一点甕があった可能性もある。掘形の埋土は黄灰色砂、甕内土は暗褐色砂質土である。北に接して SX6461がある。

SX6461　6AHG—P 地区　(Pl. 18、Fig. 15、Ph. 24)

東一坊大路 SF6410路面上の西側溝寄りにある土器埋納遺構で、SX6460の北に接してある。七条条間北小路との交差点から北へ 7 m に位置する。掘形は南北130 cm 以上、東西61 cm の長円形で、残存深さ30 cm。奈良時代後半の土師器甕 2 個を合口にして掘形の中央北寄りに横たえ、主軸を南北に埋納する。掘形埋土は黄灰色砂質土、甕内土は暗灰色砂質土である。

SX6485　6AHH—Q 地区　(Pl. 13、Fig. 15、Ph. 24)

東一坊大路西側溝 SD6400内の西岸寄りの土器埋納遺構。北小路北側溝から32 m に位置する。西側溝の堆積土中にあり掘形不明瞭。土器の検出範囲は南北60 cm、東西37 cm で、奈良時代後半の土師器甕2個を合口にして横たえ、主軸を南北に据える。

SX6533　6AHH—G 地区　(Pl. 14、Fig. 15、Ph. 24)

交差点の土器埋納坑

東一坊坊間東小路 SF6535路面上の土器埋納遺構。坊間東小路心にあり、交差点中央から南へ 2.5 m に位置する。掘形は南北47 cm、東西31 cm、残存深さ11 cm で、奈良時代後半の土師器甕 1 点を横たえ、主軸を南北に埋納する。口縁と掘形の間に空間があり、有機質の蓋が存在した可能性がある。上半が削平され、甕の下半分が残る。

SX6649　6AHH—I 地区　(Pl. 5)

十六坪北西部の SB6652南の土器埋納遺構。東小路東側溝から22 m、北面築地雨落溝想定位置から23 m に位置する。掘形は直径70 cm ほどの不整円形で、土師器椀多数が出土した。

SX6530　6AHH—G 地区　(Pl. 14・20、Ph. 22)

七条条間北小路南側溝 SD6471の溝底で検出した祭祀土坑。小路交差点から東10～16 m にあり、東西6.2 m、側溝の底から50 cm 掘込む。西端から 2 m 付近に馬上顎骨 2 点・下顎骨 1 点・脚部骨、3.2 m 付近に土師器甕、1.4 m 付近に人面墨書土器 1 点・馬上顎骨 1 点、4.8 m 付近に須恵器壷・須恵器杯などが出土した。土器は平城宮土器Ⅱに属す。

SK6531　6AHH—G 地区　(Pl. 14)

祭祀土坑

七条条間北小路北側溝内の土坑。小路交差点から東へ 9 m にある。東西5.4 m、南北1.5 m、

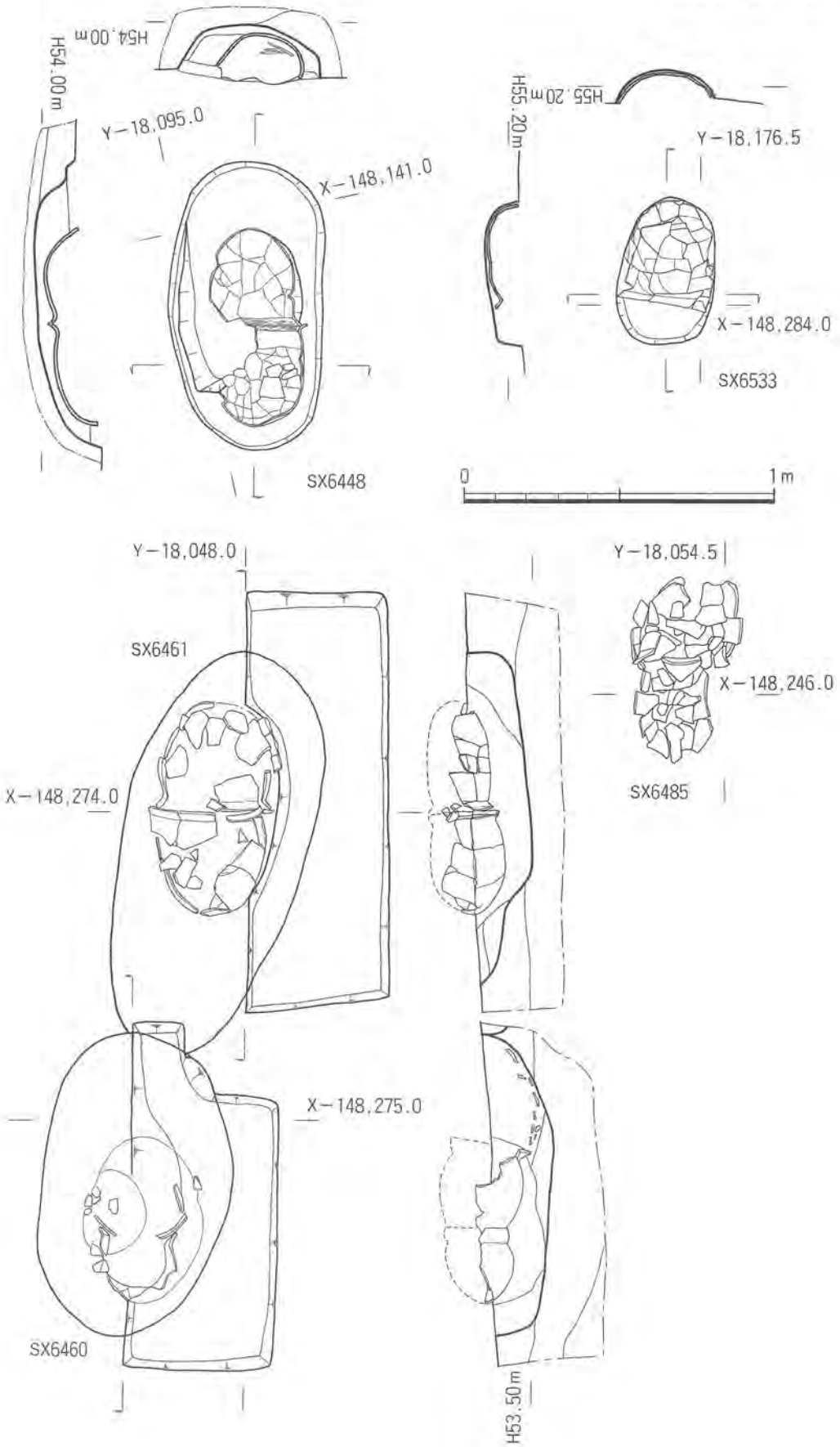


Fig. 15　土器埋納遺構

北側溝底から40 cm 掘込む。北小路を挟んでSX6530の真北にあり、規模も似るが、祭祀関連遺物は出土しなかった。

ii　平安時代の遺構

SX6428　6AHH－H 地区

(Pl. 8、Fig. 16、Ph. 22)

木棺墓　十六坪の東辺中央で検出した木棺墓。西側溝西岸から西へ 9 m、十六坪北端から南へ57 m に位置する。墓坑掘形は南北に長い長方形で、南北長202 cm、北端幅65 cm、南端幅58 cm と南辺に比して北辺がわずかに長い。残存深さは19 cm で、墓坑掘形の法面はほぼ垂直である。木棺は完全に腐朽しているが、側板・底板が腐朽した厚さ 2 ～ 3 cm の暗灰色粘質土の範囲からみて、法量は長175 cm、北端幅56 cm、南端幅49 cm、高さ19 cm 以上と推定される。木棺の主軸は、北で西へ0°30′ の振れを測る。木棺中央部の下には長53 cm、幅・深さ 3 cm の暗灰色粘質土が東西方向に残る。断面 3 cm の角材を主軸と直交して据え、桟としたものらしい。墓坑西面に接して木棺を納めており、墓坑掘形との間に北側で40 cm、東側12 cm、南側28 cm の間隙があり、これを灰褐色粘質土で埋めている。遺骸は残存していないが、木棺の痕跡や副葬品の配置から見て北頭位であろう。副葬品は棺内北端に集中する。ガラス玉 1 点を中心にして、北東部に漆器方形箱を置き、南東部に承和昌宝 1 枚・土師器椀・漆器椀を重ね、北西部に土師器甕・皿、南西部に須恵器平瓶・承和昌宝を置く。承和昌宝は承和 2 年(835)初鋳であり、埋葬時期はこれ以降の 9 世紀後半と考えられ、土器の形式もこれを裏付ける。

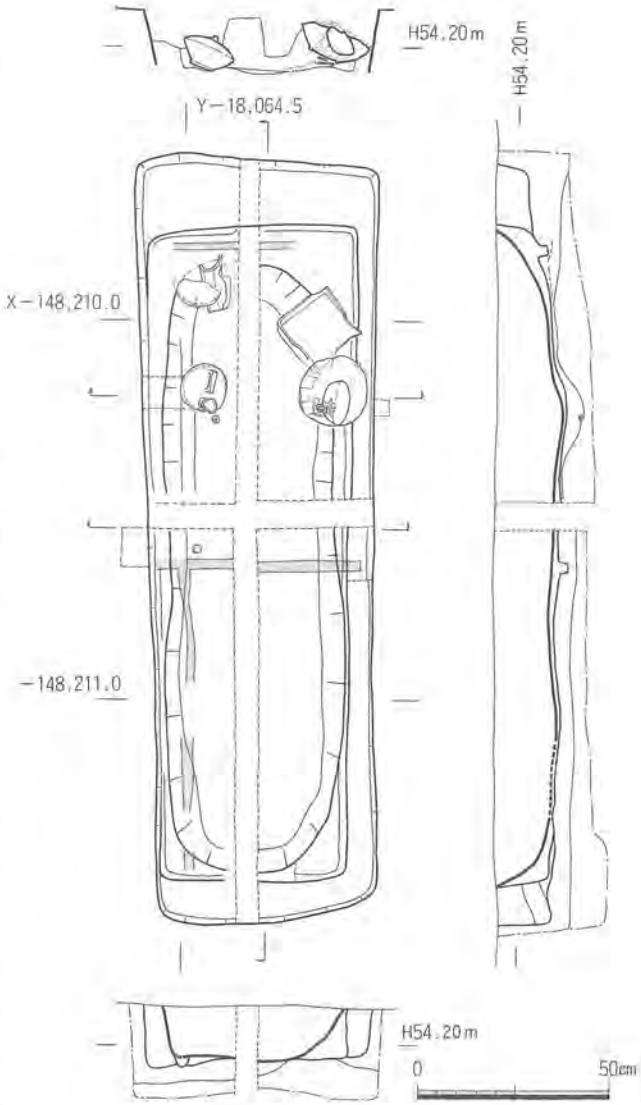


Fig. 16　木棺墓 SX6428　1：20

承和昌宝

iii　橋状遺構

SX6420　6AHG—Q・6AHH—H 地区　(Pl. 8、Fig. 17、Ph. 21)

橋脚柱根　東一坊大路西側溝 SD6400にかかる橋。十六坪の北端から42 m、南端から81 m に位置する。西側溝の西岸に近い底に橋脚柱根 3 本、溝中央の底に柱穴 3 、大路側東岸に石組みが残る。西岸に近い 3 本の橋脚は、下端を杭状に尖らせた丸太を掘形に落とし込んだ後に打ち込んでいる。

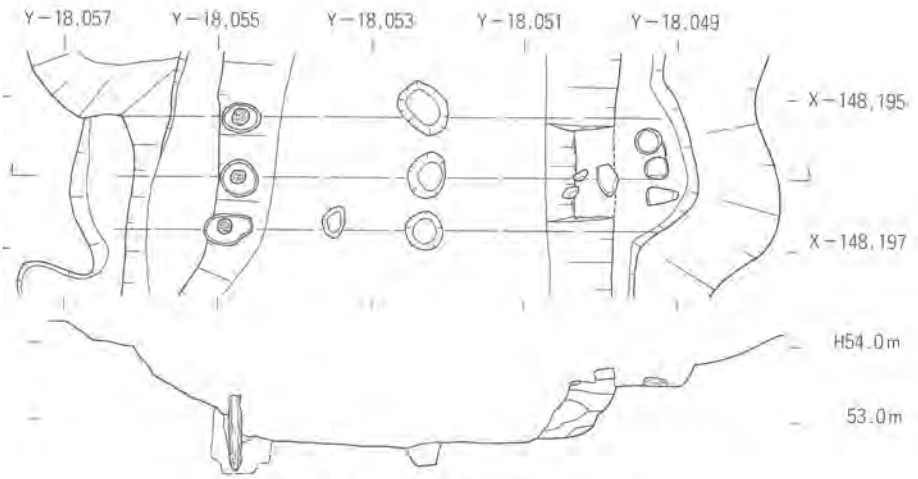


Fig. 17　橋状遺構 SX6420　1：100

梁行の柱間寸法は南間が0.7 m、北間が0.8 m である。この上に橋桁を載せ、板を張ると橋幅は6～7尺程度になる。柱根列と柱穴列の間隔は2.4 m（8尺）である。溝中央の3柱穴には、柱根は残っていない。溝東岸には拳大～人頭大の河原石と石抜き取り跡があるが、溝に近い石は西側溝の新しい堆積上にあり、原位置を保っていないようである。東岸の大路側の構造は不明であるが、石組みの上に梁材を転ばしに置き、その上に橋桁を載せるような手法を想定しうる。西岸には構造を示すような痕跡は残っていなかった。3本の橋脚はいずれもヒノキ丸太である。橋脚南材は残存長90 cm、径13 cm（4.5寸）、外周を手斧はつりした後、槍鉋で仕上げる。下端から18 cm 程を手斧で杭状に尖らせている。中央材は残存長99 cm、径15 cm（5寸）で外周は手斧はつりのままで、下端から18 cm 程を手斧で尖らせる。北材は残存長100 cm、径17 cm（5.5寸）で、外周は樹皮を剝がしたままである。下端は斜めに削っただけである。造営時期は不明である。

SX6480　6AHG－P 地区　（Pl. 18）

東一坊大路西側溝 SD6400の西岸寄りの底にある斜杭4本。条間北小路北側溝から14 m、交差点から北へ19 m に位置する。直径10 cm 前後の杭が、西側溝の西法面下端付近から斜めに40 cm 前後突出する。2本ずつ組になり、北の2本は間隔40 cm、南の2本は間隔30 cm。両者は1.4 m 離れる。護岸用しがらみとしては、打ち込み角度が不自然で、橋状構造の下部になる可能性がある。時期は不明である。

SX6473　6AHH－G 地区　（Pl. 17）

七条条間北小路南側溝 SD6471の狭くなった部分。東一坊大路西側溝から46 m に位置する。条間北小路南側溝の幅はこのあたりで1.2 m あるが、この2.2 m の区間で北岸を南に寄せて0.9 m に狭める。板を掛け渡して橋としたものか

SX6525　6AHH－G 地区　（Pl. 16、Ph. 21）

七条条間北小路南側溝 SD6471に架かる橋で、橋脚2本を検出した。十五坪西端から40 m に位置する。橋脚の間隔は1.8 m（6尺）で、造営尺は30.0 cm を測る。これに橋桁を架け、板を張れば、幅7尺程の橋になろう。

SX6532　6AHH－G 地区　（Pl. 14、Ph. 21）

東一坊坊間東小路東側溝 SD6534に架かる七条条間北小路の橋。北小路心から南に寄る。橋脚

の柱穴２列４基を検出した。橋脚の桁行柱間は南側が2.5尺北側が３尺で、梁行は７尺弱である。橋脚は杭打したものらしい。橋幅７尺ほどに復原できよう。

iv　その他の遺構

SX6402　6AHC－J・6AHD－A 地区　(Pl. 2、Ph. 6)

六条大路・東一坊大路交差点北方の沼状の広い落ち込み。東西33 m、深さ1.2 m で、北および南西へ広がる可能性がある。

SD6403　6AHC－J 地区　(Pl. 2)

SX6402の底で検出した北で西へ振れる斜行溝。幅1.6 m、深さ１m。

SD6404　6AHC－J 地区　(Pl. 2)

SX6402の底で検出した北で西へ振れる斜行溝。幅0.8～1.5 m。SX6403の西側にある。

SX6422　6AHH－I 地区　(Pl. 4、Fig. 18、Ph. 23)

西側溝 SD6400内の西岸底近くにある曲物埋設遺構。十六坪の北端から８m に位置する。掘形は東西61 cm、南北72 cm の長円形で、底を抜いた木製曲物を２段に重ねる。西側溝からの取水用の施設であろうか。上段の曲物は径45 cm、高９cm、厚４mm、外枠材４mm で、厚さ６mm の底板が一部残存していた。下段の曲物は径35 cm、高22 cm、厚４mm、外枠材４mm である。底は砂で、掘形の埋土は暗灰細砂である。西側溝の層序から平安時代前半期の遺構と考える。

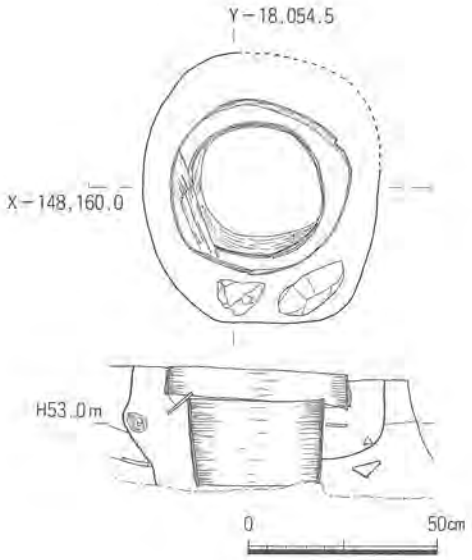


Fig. 18　曲物埋設遺構 SX6422　１：20

第IV章　遺　　物

1　瓦　塼　類

今回の調査区は左京七条一坊十五坪・十六坪、東一坊大路、六条大路、七条条間北小路、東一坊坊間東小路に及ぶが、本項では瓦塼類の出土地点にかかわり無く、軒丸瓦・軒平瓦を型式番号順に、他の瓦を種類ごとに記述する。なお、型式番号は『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧(以下、『型式一覧』と略す)』(奈文研・奈良市教委　1996)に準拠する。軒丸瓦の外縁形態、軒平瓦の顎形態は『平城宮報告XIII』に準拠するが、軒丸瓦の外区内縁を外区、外区外縁を外縁と略す。

A　軒　丸　瓦(Pl. 21・22, Ph. 25)

奈良時代の軒丸瓦は、型式判明が10型式11種12点、型式不明が8点出土した。そのほか中世の巴文軒丸瓦が1点ある。

6012B　6012は中央に珠点がある三重圏軒丸瓦で、A～K・Mの12種がある。東一坊大路西側溝・暗灰砂層からBが1点出土した。Bは、圏線を内側から数えて第1・2圏線の間隔が、第2・3圏線の間隔より広い2種(A・B)のうち、やや大振りなものである。接合式である。

6143A　6143は単弁蓮華文軒丸瓦で、A種のみがある。東一坊坊間東小路上から1点出土した。内区が短い菊花状重弁＋連続する間弁、外区が珠文縁、外縁が低い傾斜縁Iで粗い鋸歯文をもつ。間弁が高く突出するのが特徴である。丸瓦の接合位置が低く、凸面側の接合粘土が多く、接合線は低い台形状を呈する。

6272B　6272は複弁蓮華文軒丸瓦で、外縁に面違鋸歯文をもつ2種(6271・6272)のうち、8弁のもの。中房に1＋4＋8の蓮子を配す。弁には照りむくりがなく子葉が長く高く突出する。外縁を外区より一段高くする。成形は接合式である。A・B2種があり、東一坊大路西側溝・暗灰粘土層からBの外縁のみの小片が1点出土した。BはAより中房と外縁の突出度が小さい。

藤原宮式型式不明　外区珠文が密な藤原宮式の小片1点が東一坊大路西側溝・暗灰砂層から出土した。

6282Bb　6282は弁を取り巻くB系統の間弁をもつ複弁蓮華文軒丸瓦の一種。蓮子が1重で、弁は照りむくりがなく線的に表現する。A～E・G～I・Lがあり、A以外は中心蓮子が他の蓮子より大きく、外区・外縁間の界線が太い。東一坊大路西側溝・褐色粗砂層からBbの小片が1点出土した。Bは蓮弁が短く、子葉を囲む輪郭線どうしが離れる。Ba・Bbがあり、Bbは中房と弁区の境に界線がなくなり、子葉を囲む輪郭線と間弁が接したり、輪郭線どうしが接する箇所がある。接合式である。

6282Ca　6282には小型品が2種(C・D)あり、両者酷似するが、Cの方が、中房中央の蓮子が大きく、弁を取り巻く間弁が細い。Ca・Cbがあり、Cbは弁を粗雑に掘り直す。接合式である。本例はCaで、東一坊大路西側溝・暗灰砂層から小片1点が出土した。

6285A　6285はB系統間弁をもつ複弁蓮華文軒丸瓦で、中房が小さく、弁が細長く中高に盛り上がる。A・Bの2種があり、東一坊大路西側溝・暗灰粘土層からAが1点出土した。Aの方が弁の盛り上がりが強く、中房が凸レンズ状に高まる。接合式である。

6291Ab　6291はB系統間弁をもつ複弁蓮華文軒丸瓦であるが、弁の形態は、間弁A系統の6308・6311と類似する。A～Cがあり、東一坊大路西側溝・暗灰粘土層からAbが1点出土した。Aは内区が中高で、中房が突出し、間弁端に小さな三角形がある。外縁は傾斜縁IIIで頂部に1条の凸線がある。Aa・Abがあり、Abは対角線の位置にある2箇所の間弁と三角形とを繋げ、弁を取り巻く間弁の弁央湾入部を掘り直して直線状とする。丸瓦の接合痕跡がなく、一本造りと考えられている。

6304L　6304はB系統間弁をもつ複弁蓮華文軒丸瓦で、中房が突出し、弁が長く先端が尖り気味で中高に盛り上がる。A～E・G・L・N・Oがあり、東一坊大路西側溝・褐色粗砂層からLが1点出土した。Lは大型品で、中房が凸レンズ状に膨らみ、子葉を囲む輪郭線が太い。接合式である。

6308C　6308は外区に珠文、外縁に線鋸歯文をもち、間弁がA系統で、小さい中房に蓮子を一重に巡らす複弁蓮華文軒丸瓦のうち、中房が外区と同高ないしやや高く、弁区と同高ないしやや高いもの。A～D・H～N・Rがあり、HT13区の遺物包含層からCの小片が1点出土した。Cは内区が盛り上がり、中房が突出せず、間弁端と弁端湾入部に三角形を置く。一本造りと考えられている。

6314A　6314は小型の複弁4弁蓮華文軒丸瓦(6313・6314)のうち、B系統間弁で中房に1＋5～6の蓮子を配すもの。A～Fがあり、東一坊大路西側溝・暗灰粘土層からAの小片が1点出土した。Aは面径が最大で、弁が中高に盛り上がり、弁端が尖る。外縁は傾斜縁IIIで頂部に1条の凸線がある。一本造りと考えられている。

新　型　式　**6346Aa・Ab**　当調査地で初出の新型式である。外区に珠文、外縁に唐草文があり、中房に蓮子が2重にめぐる複弁8弁蓮華文軒丸瓦(6345・6346)のうち、6345は外縁が平坦であるのに対し、6346は傾斜縁である。弁区が中房に向かってやや盛り上がり、中房は弁区より少し突出する。中房には1＋5＋12の蓮子を配す。Aa・Abがあり、東一坊大路西側溝・褐色粗砂層から1点ずつ出土した。Aaは中房の外周に凸線がめぐる。AbはAaの中房外周凸線の頂部の高さまで中房全体を高くし、さらに低く幅広い中房外周凸線をめぐらす。蓮弁・間弁は線的に表現され、Abは弁の基部を中房に向かってわずかに高く彫り直す。間弁は先端がM字形で蓮弁と接続し、弁区全体が一見細弁の集合のように見える。外区の内外の界線が太く、珠文は密で配置が不整である。珠文の数は不明だが40ほどと推定できる。外縁は傾斜縁Iだが途中で傾斜角が変わり、下半が約45°、上半が約70°で、頂部をヘラケズリで面取りする。外縁下半の傾斜面に、第一角が短く第二角が長い「八」字形の唐草文を疎に配す。唐草文の数は不明だが11単位ほどと推定できる。整形は接合式で、丸瓦の取付位置は蓮弁の端部に当たり、丸瓦端は外区面から1.8cmの位置まで入る。丸瓦の内外の接合粘土は比較的多く、接合線は円弧を描く。瓦当裏面はやや中窪みで、ナデののちヘラケズリする。瓦当下半側面はヘラケズリし、現状の外縁頂部から0.8cmほどの位置に、笵型と枷型の合わせ目の痕跡が残る。焼成良く硬質で、Aaは灰白色、Abは燻し焼き風で暗灰色を呈する。

B　軒　平　瓦(Pl. 23•24, Ph. 26)

奈良時代の軒平瓦は、型式判明が9型式14種20点、型式不明が2点出土した。そのほか中世の軒平瓦が1点ある。

6641J　6641は支葉が2～3個の偏行唐草文軒平瓦のうち、上外区に珠文、下外区に線鋸歯文を置き、右偏行のものである。A・C・E～Pがある。当調査区で東一坊大路西側溝・暗灰砂層から出土した個体は小片1点であるがJと推定する。Jの標式資料は薬師寺出土の1点のみで、瓦当の左3分の1であり、唐草は第3単位の左半までしか残らない。当個体は唐草の2単位分のみが残るが、平瓦部の側面が一部残り、現存部が唐草の第4・5単位であることが判明する。もっとも当個体は標式資料と文様の重複部分を持たないので、厳密にはJと確定できない。しかし両者ともに、瓦当面に笵の木目が顕著に浮き出ており、その木目の特徴や方向が酷似することから、当個体もJと推定し、標式資料と当個体とでJの特徴を記述する。茎の始点が反転せず、唐草第3単位と第5単位の茎が、内区と外区の界線に並行して走るのが特徴である。脇区は内区との界線沿いまでヘラケズリされており、鋸歯文の有無は不明である。粘土板桶巻作りで、凸面は縦縄タタキのあとナデでタタキ目を消す。凹面はナデで布目を消し、瓦当沿いを横にヘラケズリする。貼りつけ段顎で、顎面にはナデをほどこし、顎幅は8cmである。焼成良く硬質で標識資料は淡灰色、当個体は燻し焼き風で暗灰色を呈する。

藤原宮式型式不明　偏行唐草文軒平瓦の小片で、6641の可能性が高いが、二次的に焼損して文様が膨れ上がり不鮮明であるため、確定できない。IC13区の遺物包含層から出土した。

6663F　6663は外区が圏線文で3回反転の均整唐草文軒平瓦のうち、上に巻き込むC字形中心葉で花頭形を囲む中心飾りを持つもので、A～F・H～Mがある。F・H～Jは唐草第3単位の主葉と第1支葉が界線に接さず巻き込む。東一坊大路西側溝・褐色粗砂層からFの小片が1点出土した。Fは中心飾りが大振りである。段顎と曲線顎があり、本例は曲線顎である。

6663J　Jも東一坊大路西側溝・褐色粗砂層から1点出土した。Jは内区の幅が狭く中心飾りが横長で、文様が太い。顎は曲線顎IIで、顎面の幅が2～3cmと広く、当個体は2.2cmである。凸面は縦縄タタキ、凹面はナデで布目を消し、顎面はヨコナデ調整する。焼成良く暗灰色を呈する。

6668C　6668は均整唐草文軒平瓦で、上に巻き込むC字形中心葉で花頭形を囲む中心飾りを持ち、外区が珠文で、唐草が3回反転の7型式のうち、花頭の左右端が尖るものである。A～Cがあり、Cが東一坊大路西側溝から1点出土した。Cは当調査地で初出の新型式で、花頭形の基部がA・Bと異なり平行し、外区の珠文が密である。段顎Iで顎幅は5.5cm。顎端で欠損し平瓦部を欠く。顎面と凹面は横にヘラケズリののちナデを施す。上外縁側面に笵端痕があり、笵端は縁頂部から5mm。焼成良く暗灰色を呈する。　新　型　式

6681A　6681は外区が圏線文で3回反転の均整唐草文軒平瓦のうち、上に巻き込むC字形中心葉で有軸三葉形を囲む中心飾りを持つもので、A～G・Sがある。Aが第251次調査区のSX6402から1点出土した。Aは唐草第3単位主葉と第1支葉が脇区との界線に接する3種(A・B・E)のうち、もっとも小振りで、曲線顎である。当個体は外区の左端のみ残り、焼成甘く燻し焼き風である。

6681C　6681Cは東一坊大路西側溝・褐色粗砂層から1点が出土した。Cは唐草第3単位主葉と第1支葉が脇区との界線に接さず、中心飾りが逆T字形で中心葉とつながっている。曲率の緩い曲線顎IIである。当個体の顎幅は1.7 cmであるが、面取り部とそれ以下との境界線が不明瞭で、一見曲線顎Iのように見える。凹面はナデで布目を消し、瓦当沿いを横にヘラケズリする。凸面は縦にヘラケズリする。焼成良く、淡灰色を呈する。

6691A　6691は均整唐草文軒平瓦で、上に巻き込むC字形中心葉で有軸三葉形を囲む中心飾りを持ち、外区が珠文で、唐草が4回反転の3型式のうち、花頭が獅子鼻形のものである。A・B・D・Fがあり、Aが東一坊大路西側溝の褐色粗砂層から1点、暗灰砂層から2点、暗灰粘土層から1点出土した。Aは唐草の巻き込みが小さく、中心飾りの軸部上端が小さく二股に分かれており、界線に接しない。直線顎と曲線顎IIがあり、当地の出土品はすべて曲線顎IIで、顎幅は1.3、1.5、1.8、1.8 cmである。平瓦部はもっとも良く残るものでも瓦当面から15 cmまでしか残らないが、4点とも、凹面はナデで布目を消し、凸面にもナデを施す。すべて焼成良く、灰色を呈する。

平安時代から奈良時代に変更

6703A　この型式はかつて平安中期とする説[1]もあったが、飛鳥・山田寺で6143Aと組む奈良時代の瓦であることが明らかとなり[2]、『型式一覧』では6703Aと名付けた。東一坊大路西側溝・暗灰粘土層から1点出土した。通常の中心飾りと向きが逆転し、下に巻き込むC字形中心葉で、左右端の尖った上向き花頭形を囲む中心飾りを持つ。唐草は3回反転で、第1単位が中心飾りの上部から発し、各第1支葉が大きく巻き込みも強い。主葉と第1支葉の間に、M字形にΛ字形を重ねた蕾状の飾りを置くが、左第3単位では蕾の表現に省略が見られる。顎は曲線顎IIで、顎幅は2.2 cmである。顎面を横にヘラケズリし、斜面は当個体では横にヘラケズリし、薬師寺出土品では縦に板でナデを施す。平瓦部凸面には縦縄タタキ目を残し、凹面は布目を残し瓦当寄りを横にヘラケズリする。焼成良く、灰色を呈する。

6710A　6710は均整唐草文軒平瓦で、上に巻き込むC字形中心葉でΛ形を囲む中心飾りを持ち、外区が珠文で、唐草は巻きが弱く3回反転である。A・C・Dがあり、Aが東一坊大路西側溝・褐色粗砂層から1点、十六坪南西隅の土坑SK6607から1点出土した。Aは上下外区の珠文間に各4個の×文を入れる。直線顎で、凸面は縦のヘラケズリで縦縄タタキ目を消し、凹面は瓦当寄りを横にヘラケズリする。1点は焼成良く、燻し焼き風で暗灰色を呈し、他は焼成やや甘く、灰白色を呈する。

6710C　6710Cは七条条間北小路北側溝から1点、同側溝北側の遺物包含層から2点出土した。Aに比して中心飾りが大きく、唐草が太く、外区に×文がない。直線顎である。当地の出土品はいずれも焼成甘く、灰白色を呈し、表面の残りが悪い。

6716C　6716は均整唐草文軒平瓦で、下に巻き込むC字形中心葉で小字形三葉形を囲む中心飾りを持ち、唐草主葉が連結し、支葉は主葉から派生する。AからFがあり、Cが東一坊大路西側溝から1点出土した。Cは外区に杏仁形珠文を密に配す3種(A～C)のうち、唐草の巻き込みが最も小さい。段顎Iで顎幅は5.2 cm、焼成甘く、灰白色を呈する。

6721A　6721は均整唐草文軒平瓦で、上に巻き込むC字形中心葉で小字形を囲む中心飾りを持ち、唐草が5回反転で、外区に密に珠文を配す。A・C～Kがあり、Aが東一坊大路西側溝・暗灰砂層から1点出土した。Aは中心飾りの両支葉が杏仁形でほぼ水平である。中心飾りの中軸

に珠文を置かない。唐草の巻きが弱い。曲線顎IIで、顎幅は1 cm。顎斜面は縦ヘラケズリののち、縦にナデを施す。上外縁側面に笵端痕があり、笵端は縁頂部から3 mm。凹面は瓦当際までナデる。

6721C　6721Cは東一坊大路西側溝・青灰細砂層から小片が1点出土した。Cは中心飾りの両支葉が逆八字形である。中心飾りの中軸に珠文を置かない。唐草の巻きが弱い。曲線顎IIで、顎幅は1.1 cm。外縁側面に笵端痕があり、笵端は縁頂部から3 mm。焼成やや甘く、燻し焼き風で暗灰色を呈する。

6721Gb　6721Gbは東一坊大路西側溝・暗灰砂層から1点出土した。Gは中心飾りの両支葉が三日月形でほぼ水平。中心飾りの中軸に珠文を置く。唐草は繊細で抑揚がある。唐草右第5単位第2支葉を欠く。Ga・Gbがあり、Gaは外区の珠文の外側にも界線を置き、外区より一段高い外縁を持たない。Gbでは外側界線の所から立ち上がる外縁をつくる。Gaは直線顎、Gbには直線顎と曲線顎IIがあるが、当個体は顎を欠き不明である。焼成良く、灰白色を呈する。

C　丸瓦・平瓦(Ph. 27)

遺構や遺物包含層から出土した丸瓦は412.1 kg(5,196点)、平瓦は1410.2 kg(13,484点)に達するが、丸・平瓦の多くは破片であって、資料的に十分な検討を行うにいたっていない。しかし、全形を知りうる資料があるので、それについて記す。

丸瓦　井戸SE6657堆積土最上層から出土した。粘土板巻き付け技法によるもの。広端部の一隅を欠くが、全長36.0 cm、玉縁長4.4 cm、径は広端部で16.7 cm(復原)、玉縁端部で10.9 cm。厚さは広端部で1.8 cm、玉縁端部で1.5 cm。凸面には縦位の縄叩きを施した後、横方向にナデて叩き目を消すが、わずかに残る。玉縁部の凸面と端面及び丸瓦部の玉縁側端部には、横方向のナデを施す。丸瓦部の広端面はヘラケズリする。側面は広端部から玉縁までを一連にヘラケズリする。胎土に小礫と長石類を少し含み、焼成は硬質で、淡赤褐色を呈する。

平瓦1　井戸SE6657の裏込めから出土した。側縁近くに布端が残り、一枚作りによるものである。全長33.3 cm、幅は広端部で25.4 cm、狭端部で20.6 cm、厚さは1.6～2.0 cmと一定でない。凸面には糸切り痕と縦位の縄叩き目がよく残り、ナデは施していない。凹面には糸切り痕と布目がよく残り、ナデは施していない。凹凸両面の広端寄りにも狭端寄りにも、手で持った際の指頭圧痕があり、いずれも親指は凸面に当てられている。側面と両端面にはヘラケズリを施す。凹面の狭端寄りと片方の側縁を面取り風にヘラケズリする。胎土に小礫と砂粒を含み、焼成は硬質で灰色を呈する。

平瓦2　井戸SE6657井戸枠内埋土から出土した。側縁近くに布端が残り、一枚作りによるものである。狭端部の一隅を欠くが、全長31.6 cm、幅は広端部で25.2 cm、狭端部で20.8 cm(復原)、厚さは1.5～2.1 cmと一定でない。凸面には縦位の縄叩き目がよく残り、ナデは施していない。凹面には布目がよく残り、ナデは施していない。広端寄りの凹凸両面には、手で持った際の指頭圧痕があり、親指は凹面に当てられている。側面と両端面にはヘラケズリの後ナデを施す。凹面の狭端寄りを面取り風にヘラケズリする。胎土に砂粒を含み、焼成は硬質で灰色を呈する。

平瓦3　遺物包含層から出土した。側縁近くに布端が残り、一枚作りによるものである。広端部の一隅を欠くが、全長34.5 cm、幅は狭端部で20.0 cm、厚さは1.5～2.1 cmと一定でない。

凸面には縦位の縄叩き目がよく残り、ナデは施していない。凹面には布目がよく残り、ナデは施していない。側面と両端面の調整は、表面の遺存状態が悪く不明である。凹面の狭端寄りを面取り風にヘラケズリする。胎土に砂粒を含み、焼成はきわめて硬質で灰白色を呈する。

平瓦4　掘立柱建物SB6651西側柱列の南から1間目の柱穴から出土した。側縁近くに布端が残り、一枚作りによるものである。広端部の一隅を欠くが、全長33.5 cm、幅は狭端部で22.2 cm、厚さは1.7～2.2 cmと一定でない。凸面には縦位の縄叩き目が残り、ナデは施していない。凹面・側面・端面は表面の遺存状態が悪く観察不能である。凹面の狭端寄りと両側縁を面取り風にヘラケズリする。胎土に小礫と砂粒を含み、焼成はきわめて硬質で淡赤褐色を呈する。

D　その他の瓦塼類(Pl. 22, Ph. 26・27)

隅平瓦　小片が東一坊大路西側溝から2点出土した。隅平瓦は寄棟や入母屋などの隅棟に葺かれたもので、焼成前に広端の一方の隅を裁断している。1点は広端面と裁断面のなす角度が140°で、厚さは28 mm。他は裁断面と側面を残し、厚さは16 mmである。

塼　223点出土したが、小片がほとんどであり、全形が復原できる5点と特異な1点について記述する。方約1尺の方形に復原できる個体が4点ある。28.3×24.3以上×6.2 cm、27.8×24.2以上×5.4 cm以上の2点は、井戸SE6561の井戸枠裏込めから、29.2×28.9×6.7 cm、29.0×26.5以上×6.5 cmの2点は、東一坊坊間東小路路面上の土坑から出土した。1尺×0.5尺の長方形に復原できる個体が1点ある。29.4×15.3×6.7 cmで東一坊大路西側溝から出土した。これらはいずれも型枠に粘土を充塡して作る規格品である。辺の長さが不明だが稜が丸く厚さ8.5 cmの特殊塼が東一坊大路西側溝から1点出土した。これは型枠を用いずに粘土塊を積み上げて成形した可能性がある。

特異な文様塼

文様塼　笵による凸線の文様を有す塼が、七条条間北小路北側溝から1点出土した。現状で8.5×8.1×4.5 cmの小片で、本来の形が方形か長方形か不明である。側面は1面だけ残り、その面に文様がある。厚さは文様がある側でもっとも厚く4.5 cm、他端は4.2 cmである。文様は幾何学文様で他に類例がない。ϕ形と串団子形を一部重複させて文様面主軸に直交するように配し、団子状部から4本の緩曲線が主軸に沿って出る。型枠に粘土を充塡して成形し、上下面は側面に平行して粗くヘラケズリする。上下面に笵端痕は無く、笵が文様面の幅より広かったか、笵端痕がケズリで除去されたかであろう。焼成良く灰色を呈する。

土管　東一坊大路西側溝・青灰細砂層から1点出土した。直径13.4 cmで、玉縁側は欠けており、現存長22.5 cm。粘土紐巻き付けで成形され、外面は横方向にヘラケズリしたのち、縦方向にナデを施す。内面には布目を残すが、広端面から5.5 cmの所まで深さ2～3 mmでヘラケズリして布目を削り落とし、内径を大きくしている。玉縁の直径が丸瓦部広端面側の内径より大きくなって、接続に難を生じるのを防ぐためであろう。焼成甘く、淡灰褐色を呈する。

1）山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集VI』1980

2）花谷　浩「山田寺軒平瓦の概要と主要堂塔の造営・修理」『山田寺学報検討会記録Ⅰ』1995

2　土器・土製品

左京七条一坊十六坪とその周辺の調査では、多量の土器が出土した。土器を出土したのは主に東一坊大路西側溝 SD6400であり、他には六条大路と七条条間北小路の側溝や井戸、土坑、土器埋納遺構、建物の柱穴をはじめとする遺構や包含層などである。出土土器には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、施釉陶器、製塩土器や、硯・土製円板などの特殊土製品、祭祀用土器・土製品、および縄文、弥生、古墳時代の土器、埴輪があるが、土師器、須恵器が多数を占める。SD6400からは祭祀用土器・土製品が大量に出土し、注目される。ここでは、SD6400出土土器を中心に、井戸、土坑、土器埋納遺構、柱穴の出土土器、奈良時代以外の土器、施釉陶器、特殊土製品、祭祀用土器・土製品、墨書土器の順に記述する。

土器の器形、調整手法、年代などに関しては、既刊の『平城宮発掘報告』[1]に従うこととする。現在、8世紀から9世紀初頭の土器の編年に関しては、平城宮土器Ⅰ～Ⅶまで細分しており、そのうち平城宮土器Ⅲは古・中・新の3段階を設定している。平城宮土器Ⅵは長岡京時代、平城宮土器Ⅶは9世紀初頭のものである。恭仁宮への遷都(739・天平12年)は平城宮土器Ⅲ古段階の終末、平城宮への還都(745年)は平城宮土器Ⅲ中段階の頃と考えている。　平城宮土器の編年

土師器の調整手法は、記述の煩雑を避けるために記号化している。a手法と呼ぶのは、土器の口縁部外面をヨコナデし、底部を調整せずに残すもの。b手法は口縁部をヨコナデ、底部をヘラ削りで調整するもの。c手法は口縁部と底部の全面にヘラ削りを施すもの。e手法は口縁部直下を幅狭くヨコナデし、それ以下を調整しないものである。また、土器の外面にはヘラ磨きを施す場合があるが、施す場所の違いによって区別を行なっている。1手法と呼ぶのは口縁部だけを磨くもの、2手法は底部を磨くもの、3手法は口縁部と底部の両方を磨くものを示す。また、口縁部も底部も磨かないものがあるが、それは0手法と呼んでいる。この様に、a～e手法と0～3手法の組合せによって、a_1手法などと、調整を表現できることになる。　土師器の調整手法

また、胎土により、土師器を2群、須恵器を6群に分けている。土師器のⅠ群土器は胎土に砂粒をほとんど含まず、灰白色を呈するもの。Ⅱ群土器は砂粒を多く含むもので、灰褐～赤褐色になるものである。今回の調査では、Ⅰ群土器はほとんど出土していない。須恵器のⅠ群土器は、青灰色を呈し、黒色、白色の粒子を含み、Ⅱ群土器は黒色粒子がナデや削りで墨を流したように延びるものである。Ⅲ群土器は、花崗岩の母岩に近い粘土を用い、磁器質に焼き上がるもの。Ⅳ群土器は粗大な長石類の他、白色微砂を含むもの。Ⅴ群土器はやや砂っぽい胎土で、微細な黒色粒子を含み、赤みを帯びた黒褐色を呈するもの。Ⅵ群土器は、砂っぽい胎土で、焼き締まりが悪く、表面がざらざらした感となり、明灰色～淡暗灰色に発色するものである。以上の須恵器の群別は、産地の差を反映しているもので、Ⅰ・Ⅱ群土器は和泉陶邑窯、Ⅳ群土器は生駒東麓窯、Ⅴ群土器は尾張猿投窯、Ⅵ群土器は美濃須衛窯の製品に比定でき、Ⅲ群土器は播磨の製品であると推定している。　土器の群別　須恵器の産地

土器に付した番号は、実測図、写真図版、表ともに共通している。なお、1～100番台は土師器、200～400番台は須恵器、500番台はそれ以外の土器、施釉陶器、特殊土製品、600～900番台は祭祀用土器・土製品を示す。

A　東一坊大路西側溝出土土器

奈良時代のものとしては、土師器、須恵器、製塩土器と奈良三彩などの施釉陶器、特殊土製品、および祭祀用土器・土製品が出土した。奈良時代以外のものは縄文、弥生、古墳時代の土器と平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、瓦器がある。このうち、祭祀用土器・土製品、施釉陶器、特殊土製品と、平城宮土器Ⅶに属するものを除いた奈良時代以外の土器については後述することとし、ここでは奈良時代の土師器、須恵器と9世紀初頭の土器について述べる。

層位的傾向

土器は大きく上下4層に分けて取り上げたが、そのうち奈良時代の堆積層は下から褐粗砂層、木屑層、暗灰砂層の3層で、最上層の暗灰粘土層は平安時代の堆積層である。また、褐粗砂層の土器はほぼ平城宮土器Ⅱ～Ⅳの範囲で収まるが、木屑層、暗灰砂層出土の土器は各型式が混在しており、西側溝の掘り直しによる再堆積であると考えられる。そのため、層位ごとに記述する方法は採らず、器種ごとに説明していくこととする。なお、SD6400出土土器の地区、層位に関しては、平安時代の土器、祭祀用土器・土製品を含めて別表3に挙げたので、合わせて参照されたい。

i　土 師 器(Pl. 25・26, Ph. 29～31)

土師器の器種

杯A、杯B、杯B蓋、杯C、皿A、皿B、皿B蓋、皿C、椀A、椀C、盤A、盤B、高杯の食器、壺A、壺B、壺Cの貯蔵器、甕A、甕B、甕C、甕X、鍋、竈の煮炊具がある。このなかで主体を占めるのは食器であり、甕の出土量はやや少なく、壺は小破片のものしかない。土器の出土量に比して完形に復せるものは少ない。以下、器種ごとに記述を行なう。

杯A(Pl. 25-1～12)　広く平らな底部と斜め上に開く口縁部を持ち、口縁端部は肥厚する。杯AI(1～7)・AII(8～10)・AIII(11・12)がある。1・2は平城宮土器Ⅱのもので、内面に連弧暗文を持つ。1はa_1手法、2はb_0手法で調整する。8・9は平城宮土器Ⅲ新段階のもので、ともにb_0手法で調整し、8は内面に放射暗文がある。3・4～6・10・11は平城宮土器Ⅴに属する。

平城宮土器Ⅶの杯A

4～6・10はc_3手法、3・11はc_0手法で調整する。7・12は平城宮土器Ⅶで、e手法で調整したものを削ったc_0手法で調整する。

杯B蓋(26・27)　27は杯BI、26は杯BIIに対応する。26は完形で、外面には4方向の丁寧な磨きがあり、縁部にはさらに4方向の磨きを施す。内面には螺旋暗文を施すが、つまみ頂部には螺旋暗文を持たず、平城宮土器Ⅲ古段階頃と思われる。

杯C(13)　底部は小さな平底で、口縁端部は内傾する。杯CI(13)・CIIがある。13はc_0手法で調整するが、削りの範囲は口縁部直下までは達しない。平城宮土器Ⅴに属する。

皿A(28～42)　広く平らな底部に短い口縁部がつく器形。皿AI(28～32・40～42)・AII(33～39)がある。28・33・34はa_0手法で調整し、放射一段暗文を持つ。29～31・38～42はc_0手法で調整する。29～31・38は平城宮土器Ⅴ、39～42は平城宮土器Ⅶに属するものであろう。

灯火器

皿C(14～25)　e_0手法で調整した小型粗製の皿。15・18・19は灯火器として使用している。口径はほぼ12 cm前後であるが、23・24は約9 cmと小さい。

椀A(43～50)　口縁部は内弯しながら開き、底部は小さな平底となる。椀AI(48～50)・AII(43～46)・AIII(47)がある。ほとんどがc_3手法で調整するが、46・50はc_0手法で調整する。50

は平城宮土器Ⅶのものであろう。44は漆のパレットとして用いており、内面全体に黒漆が付着する。

椀C(51～56)　e手法で調整した粗製の椀で、外面に粘土紐の継ぎ目を残すものもある。口縁端部は面を持って内傾する。深い器形と浅い器形がある。55は灯火器として使用している。

高杯(57～62)　口縁部が大きく外に開く杯部に、脚部と裾部を付けた器形。大小の二者がある。完形に復原できるものは57のみである。57はII群土器で、杯部内面に螺旋暗文、放射暗文と連弧暗文を持つ平城宮土器IIのもの。58は螺旋暗文と左上がりの放射暗文、59は螺旋暗文を全面に持つ杯部で、ともに平城宮土器IIIに属する。外面は、縦方向に削った後、四方向の磨きを施す。59の暗文は、長屋王邸北の二条大路上に掘られた溝状土坑SD5100出土土器に類例[2]がある。60・61はI群土器の脚部で、60は外面にハケ目を施す。61の裾部は磨かない。62は平城宮土器Vに属するものの脚部で、裾部に磨きがある。

壺E(63)　外反する体部が肩部で屈曲し、短い口縁部が立ち上がる器形で、高台を持つ。外面には密な磨きを施す。

壺B(Pl. 26-69～72)　広口で、球形に近い体部に外反する短い口縁部を付す器形。口縁部のみを幅狭くヨコナデし、体部は不調整のままである。そのため、体部には粘土紐の巻き上げ痕跡や、指頭痕が残ることが多い。壺Bと壺Cは墨書人面土器として用いることが多いが、ほぼ完形品で出土し、墨書が認められないものはここで扱うこととする。71の胴部には小孔があるが、これは意識的な穿孔かは不明。72は完形品で、胴部の2ケ所に把手を持つ。外面と口縁部内面にハケ目があり、胴部内面にナデの工具の痕跡が残る。　墨書人面土器用

壺C(64～68)　壺Bを小型にしたもの。器形は頸部がくびれるもの(65)と、くびれずに口縁部のみが外反するもの(64・66～68)がある。65は胴部内面にナデの工具痕を残す。68は完形品で、底部に1ケ所、焼成後の穿孔がある。64の内面には漆が付着しており、漆液を小出しにする容器として使用している。

鉢(73)　口縁部が内弯しながら立ち上がる半球形の器形で、内傾する口縁端部はやや凹んだ面を持つ。底部は、同一個体の破片から丸底となると思われる。内外面ともに口縁部直下をヨコナデし、胴部の外面は斜め方向の削り、内面はハケ目で調整する。外面に煤が付着しており、煮炊きに使用している。　煮炊用の鉢

甕A(77～85)　球形の体部に外反する短い口縁部を付ける。口径はおよそ32 cm、28 cm(84・85)、20 cm(82・83)、17 cm(77・79)、14 cm(78・80・81)の5種に分かれる。口縁部は、外面は縦方向、内面は横方向のハケ目を施した後にヨコナデを加える。外面のハケ目はほとんどナデ消されている。81・82・84・85は内面のハケ目が顕著に残る。体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデ調整を加える土器が主体を占めるが、77・79・80・85は内面にもハケ目が残る。79は体部外面下半に削り調整を加え、内面全体にハケ目を施す河内型の甕である。内外面に煤や炭化物の付着したものが多い。なお、図示はできなかったが、胴部内面に叩きの当て具痕を残す叩き成形の中型の甕も出土した。甕Aは完形に復せるものが少ないため、甕Bをも含む可能性がある。

甕B(74～76・86・87)　甕Aに把手を付けた器形。口径約32 cmの大型品(86・87)と約12 cmの小型品(74～76)がある。大型のものは胴部の2ケ所に把手が付くが、小型品は1ケ所のみに把手を持つ。74・75・86は胴部外面にハケ目を施し、口縁部と胴部内面はヨコナデで調整する。87は　把手の数

口縁部内外面と胴部内面にハケ目が残る。86の把手は外方に張り出すが、87の把手は胴部に近接しており、退化した様相を示す。75はロクロ整形の甕で、胴部外面下半にロクロ削り、胴部外面上半と口縁部内外面にロクロナデを施す。口縁部から胴部にかけて、黒斑がある。

ロクロ整形の甕

ii　須 恵 器(Pl. 27～31, Ph. 32～35)

須恵器の器種

杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯E、杯L、皿A、皿B、皿B蓋、皿C、皿D、椀A、椀B、鉢A、鉢F、盤、高杯の食器、壺A、壺A蓋、壺B、壺E、壺G、壺K、壺L、壺M、壺Q、水瓶、平瓶、横瓶、甕の貯蔵器がある。先にも述べたように、再堆積層から出土したものが多く、型式認定が困難なものもある。Ⅰ群、Ⅱ群土器が主体で、Ⅴ群、Ⅵ群土器も見られるが、Ⅰ～Ⅵ群に属さないものもある。

杯A(Pl. 27-237～248)　平底で、口縁部が直線的に開く器形。杯AI(237～240)・AII(241)・AIII(242～246)・AIV(247・248)がある。そのうち、237は杯AI1、240は杯AII1、242は杯AIII1、247は杯AIV1の深い器形であり、各口径に深いものと浅いものが認められる。

Ⅰ群土器

240・247はⅡ群土器で、240は外面をロクロ削りする。243は群外の土器で、内面は硯として使用したためか、平滑に磨滅している。それ以外は全てⅠ群土器で、237・241は底部外面をロクロ削りするが、他はヘラ切り不調整。237・245・246には重ね焼きの痕跡があり、238・242は灯火器として使用する。241は底部外面を硯に用いる。

杯B(217～236)　杯Aに高台を付した器形。杯BI(217～220)・BII(221～224)・BIII(225～231)・BIV(232～234)・BV(235・236)がある。杯A同様、深い器形と浅い器形があるが、杯BII1～BV1は少ない。

杯BもⅠ群土器が多数を占め、図示したものでは、218・229がⅢ群土器、231・233が群外の土器である以外は、Ⅰ群土器である。217～219・221・228は胴部下半をロクロ削りする。220は外面に布状のものでナデを施したらしく、細かい擦痕が残る。227は堅く焼き締まり、外面に降着した灰が釉化している。229は焼成の堅緻なⅢ群土器で、灰白色を呈する。231・233は群外の土器で、胎土に黒色粒子を多く含む。231の底部外面にはロクロ削りを施し、333は灯火器として使用する。222は内面を硯に使用している。217・228は平城宮土器Ⅱ、219・224は平城宮土器Ⅴに属すると思われる。

杯B蓋(201～216)　201・202は杯BI、203・204は杯BII、205～209は杯BIII、215・216は杯BIV、210～214は杯BVに対応する。なお、210は壺の蓋の可能性もある。

Ⅰ・Ⅱ群以外

杯B蓋はⅠ群土器の比率が杯A・Bに比べて低く、図示したものでは201～203・208・211・212がⅠ群土器である。203は頂部外面をロクロ削りし、211の外面には降灰が見られる。208のつまみ部には沈線状の圧痕があり、212は灯火器として使用している。207はⅡ群土器で、頂部外面をロクロ削りする。204・216はⅤ群土器で、愛知県猿投窯の製品である。204は同一個体と思われる2片から図上復原した。頂部外面をロクロ削りする。216は外面に自然釉が降着する。その他は群外の土器で、205・215は頂部外面をロクロ削りする。209は胎土に黒色粒子を多く含み、内面全体に煤状の付着物が見られ、灯火器として使用したものか。214は内面を転用硯として使用する。206・211の外面には緑色の自然釉が厚く降着している。201・215は平城宮土器Ⅱ、208・212は平城宮土器Ⅲ、203は平城宮土器Ⅳ、207は平城宮土器Ⅴに属するものであろう。

杯C(249・250)　土師器杯Aを模した形態で、口縁端部が肥厚する。250はⅠ群土器で、底部はヘラ切り不調整。249は金雲母を含み、淡褐色を呈する胎土の群外の土器で、底部をロクロ削りする。

杯E(251～253)　杯Aに似た形態だが、口縁端部が内傾する面を持つ。金属器の模倣形態である。杯EⅠ(252・253)・EⅡ(251)がある。251はⅠ群土器で底部はヘラ切り不調整。252・253はⅡ群土器で、底部外面と体部下半をロクロ削りする。252は外面を丁寧に磨く。　金属器模倣

杯L(254)　佐波理稜椀を模した器形で、口縁部が外反しながら開き、体部に稜を持つ。Ⅰ群土器で、口縁部内面に浅い凹線を入れ、端部が肥厚した様な形態を表す。焼成は堅緻で、外面全体に降灰が見られる。

皿A(261)　Ⅱ群土器の皿AⅡで、底部外面をロクロ削りする。他に皿AⅠも出土している。

皿B(257～260・266)　皿BⅠ(257～260)・BⅡ(266)がある。258・259はⅠ群土器で、外面に降灰が見られる。257は群外の土器で、体部外面下半と底部をロクロ削りし、体部内外面と底部内面を磨く。底部外面を硯として使用している。260は口縁部が彎曲しながら開く土師器皿Bの器形を模したもので、極めて珍しい器形である。灰白色を呈する群外の土器で、全面をロクロナデで調整する。京都市東寺から同様の器形の奈良三彩が出土[3]しているが、260は胎土から見て奈良三彩の素地というわけではない。266はⅤ群土器で、底部外面をロクロ削りする。　土師器形の皿B

皿C(262～264)　口縁部が外反して開き、口縁端部は平坦に面取りをする。皿CⅠ(263・264)・CⅡ(262・264)がある。図示したものは全てⅠ群土器で、262は灯火器、263は内面を硯として使用している。

皿D(267)　皿Cに高台を付したもの。Ⅰ群土器で、口縁部外面に降灰が見られる。

皿E(255・256)　小型の皿で、口縁端部は外反する。灯火器として使用することが多い。ともにⅠ群土器で、内面に煤が付着する。

皿X(265)　土師器皿Aの器形を模したもので、類例は少ない。胎土に金雲母を含む群外の土器で、底部外面はヘラ切り不調整。

鉢A(Pl. 28-268・269)　口縁部が内弯し、丸底に近い底部を持つ鉄鉢形の器形。完形に復せるものはない。ともにⅡ群土器で、外面にロクロ削りを施し、上半部にヘラ磨きを施す。

鉢D(272)　平底で肩部が膨らむ胴部に、外反する短い口縁部を付す器形。胴部外面をロクロ削りする。

鉢F(270)　口縁部が直線的に外反して開く器形で、円盤状の底部を持つ。口縁部を欠失する。焼成の堅緻なⅠ群土器で、内面に降灰が見られる。底部外面には植物繊維の圧痕がある。底部には、外面から内面に向かって焼成後に一孔を穿つ。　底部の圧痕

盤(271)　大きな平底に直線的に外反する口縁部を付したもの。口縁端部はやや肥厚し、上端に面を持つ。群外の土器で、底部から体部下半にかけてロクロ削りする。

高杯(273)　脚部から杯部の一部にかけての破片で、脚部中ほどに2条の沈線を入れ、透しはない。Ⅰ群土器で、杯部、脚部とも外面にロクロ削りを施し、その後にナデ調整を加える。

壺A(276～280)　肩が胴の上部で強く屈曲し、口縁部は内傾して立ち上がる。276・278はⅠ群土器で、278の肩部には自然釉が降着し、ともに蓋をかぶせて焼成した痕跡がある。279はⅤ群土器で、猿投窯の製品。内外面ともに自然釉が厚く降着する。277は口縁部の立ち上がりが高く、

肩部もやや稜を持って屈曲する器形で、一般の壺Aとは異なる。体部にはロクロ削りを施し、外面の一部に自然釉が降着する。280は底部を欠失し、全形は不明であるが、口縁部、体部の形態から壺Aに含めた。肩部の屈曲がやや強く、体部にはロクロ削りを加える。2条単位の沈線を肩部の1ケ所、胴部の2ケ所に施す。灰褐色の緻密な胎土で、硬質に焼き締まり、一部に降灰が見られる。富山県小杉流通団地内遺跡群2号窯[4]、新潟県山崎窯[5]などに類例があり、北陸地方の製品であろう。

北陸地方の壺A

壺A蓋(274・275)　ともにⅠ群土器で、外面に降灰が見られる。端部は、275は下方に鋭く突出するが、274は殆ど突出しない。275は内面を硯として使用する。

壺蓋(281・Pl. 29-294)　280は口縁部から頂部の一部の破片で、口縁部の立ち上がりが高い器形。口縁部外面に軽いロクロ削りを施し、頂部にはロクロ削りにより段を表出する。宝珠形のつまみを持つものであろう。灰褐色の胎土で、黒色粒子を含み、頂部には降灰がある。岐阜県老洞2号窯に類例[6]がある。294は円筒形の器形で、頂部と体部の境には鋭い稜を持ち、端部は平坦な面をなす。胎土は緻密、焼成が堅緻なⅠ群土器で、外面に自然釉が降着する。双耳瓶の蓋であろう。

壺D(282・283)　偏平な体部に直線的に立ち上がる短い口縁部を付した器形。283は口縁端部を欠失する。ともにⅠ群土器。

壺E(284)　短い口縁部で、肩に稜をもつ器形。体部下端をロクロ削りし、その後全面にロクロナデを施す。Ⅰ群土器で、肩部と底部内面に降灰がある。

壺Gの産地

壺G(286～290)　口縁部の長い徳利形の器形で、静岡県内の窯[7]で焼かれたことが最近判明した。奈良時代後半から出現し、長岡京期の遺跡で多く出土する。286は口縁部を欠くが、体部は完形。丸みのある肩部を持ち、口縁部と体部との接合は一段構成。底部に回転糸切り痕を残す。黒色粒子を多く含む灰白色の胎土で、外面に自然釉が降着する。底部に容量を記したと思われる墨書がある。287・288は口縁部の破片。287は内面に顕著なロクロ目を残し、降灰が見られ、灰黒色に堅く焼き締まる。288は灰褐色の胎土で、一部に降灰がある。289・290は体部の破片。289は肩部ににぶい稜を持ち、底部に回転糸切り痕を残す。肩部には降灰が見られ、胎土、焼成から287と同一個体の可能性がある。290の底部はやや上げ底気味で、不調整であるが、糸切り痕はない。黒色粒子を含む灰褐色のやや粗放な胎土であるが、堅く焼き締まる。

墨書

壺H(285)　外反する口縁部で、肩部に稜を持つ器形の小型の壺。口縁端部の全周を意識的に打ち割っている。Ⅰ群土器で、肩部の一部に降灰がある。

壺Q(293)　肩部が稜を持って屈曲し、外反する口縁部を付す器形。口縁端部を欠失する。Ⅰ群土器で、肩部に降灰が見られる。体部下半をロクロ削りする。

水瓶(291)　卵形の体部に細く長い口縁部を付す器形で、金属器をまねたもの。口縁部から肩部の一部にかけての破片。Ⅰ群土器で、外面に降灰が見られ、口縁部と体部の接合は二段構成と思われる。

壺K(292・Pl. 29-304～307)　肩に稜を持つ長頸の壺。Ⅰ群、Ⅱ群土器以外のものが多く、完形に復せるものはない。292は壺Kに含めたが、肩部以下の外反が弱く、他の壺Kとは趣を異にする。胴部下半をロクロ削りし、底部には回転糸切り痕を残す。305は口縁部の破片で、内面に顕著なロクロ目を残す。灰褐色の胎土で黒色粒子を含み、それが焼成によって火ぶくれとなる。304は

糸切り痕

口縁部を欠くが、体部は完形。黒色粒子を含む灰褐色の粗放な胎土で、焼成もやや軟質。肩部と体部の境には１条の沈線を入れ、肩部上面に焼成前に施した「×」のヘラ書きがある。306は内面や断面に漆が付着しており、漆液の運搬具として使用したもの。肩部は稜を持って屈曲し、高台端部は鋭く外方に突出する。体部下半にはロクロ削りを施すが、部分的に叩きの痕跡が残る。少量の黒色粒子を含む胎土で、堅く焼き締まり、外面の一部に降灰が見られる。307は肩部から体部下半の破片で、やや焼けひずみが見られる。少量の黒色粒子を含む胎土で、暗褐色に堅く焼き締まり、底部内面と肩部に降灰が見られる。底部外面には砂が融着する。

漆の運搬具

壺 L(295～299)　球形に近い体部に細い口頸部を付す器形。壺K同様、群外の土器が多い。297は口頸部の破片。口縁部に降灰が見られる。295・296は口縁の一部を欠く他は完形。395は肩部の張りが著しく、偏平な高台を付す。胴部下半はロクロ削りで調整する。胎土には大量の黒色粒子を含み、色調は基本的に灰褐色を呈するが、原料の粘土の質が場所によって異なるためか、水平方向に黒灰色の帯状の部分が見られる。非常に堅く焼き締まり、全面に自然釉が降着する。猿投窯の製品か。296は灰褐色の胎土で焼成は堅緻、全面に降灰が見られる。298・299は口頸部を欠くが、胴部は完形。298は暗灰色の胎土で堅く焼き締まり、肩部に降灰が見られる。随所に火ぶくれがある。299は胴部下半をロクロ削りする。胎土は青灰色で黒色粒子を含み、それが墨を流した様ににじむ。胴部上半のナデ調整の部分と下半の削りを施した部分では黒色粒子の流れが逆方向で、まず上半部にナデを施してから倒立させて下半部を削り、高台を取り付けたものであることがわかる。

調整方向の逆転

壺 M(300～303)　壺Lを小型にした器形。いずれも口縁部を欠くが、胴部は完形。300・301はⅠ群土器で、302・303は群外の土器である。304は黒灰色の胎土で、肩部に降灰が見られる。303は肩部に1個の穿孔がある。これは外側から中へ向けてあけたもので、外面の孔の両端には粘土を貼り付けている。内面には灰白色の付着物が残る。

肩部穿孔の壺　M

四耳壺(308)　肩部が稜を持って屈曲し、短い口縁部を付す。肩部の４ケ所に穿孔のある耳を付けるが、これは２個のみ残存する。体部はロクロナデを施すが、一部に叩き目が残る。肩部には自然釉が降着し、蓋と共に焼成した痕跡がある。

壺 X(309・310)　その他にも、多種多様な壺が出土した。ここでは、底部２個体を報告する。310は灰褐色の緻密な胎土で、焼成は堅緻。内面にはロクロナデを施すが、粘土紐の輪積みの痕跡が残る。胴部外面はロクロ調整を行った後、下から上へ削り上げる。底部外面は不調整で、底に敷いていた柏と思われる葉の圧痕がある。この柏の葉を敷くという手法は、愛知県猿投山古窯址群の鳴海32号窯出土の甕[8]に見られ、310も胎土、焼成から見て、猿投窯の製品である可能性は高い。309は暗赤褐色の胎土で、外面の一部に降灰が見られる。内外面ともにロクロナデで調整するが、底部外周を中心に外面に格子目叩きがあり、内面に当て具痕を残す。

柏の葉の底部圧痕

平瓶(312～319)　偏平な胴部の端に直立する口頸部を付す器形。他の器形に比べ、完形に近い形で出土したものが多い。大きさは、胴径約20 cm、17 cm、12 cm の３種に分かれる。316を除き、上面に降灰が見られる。315・318は小型のもので、把手、高台ともに付かない。底部は315はヘラ切り不調整、318は胴部下半を含めてロクロ削りする。312・313・316は中型品で全て把手を持つが、把手は欠失する。313は高台を持たないが、高台が付く312・316とともに、胴部下半と底部をロクロ削りする。313は内面に茶褐色の付着物が見られる。314・317・319は大型のもの

で、全て把手が付き、317のみ高台を持たない。314は底部はヘラ切り不調整で、胴部にはロクロナデを施す。319は胴部外面、底部をロクロ削りで調整する。314・319ともに胎土は少量の黒色粒子を含み、降灰は釉化している。317は口頸部を欠く他は完形。底部は不調整であるがヘラ切り痕は認められず、部分的に藁状の植物繊維の圧痕がある。胴部外面にはロクロ削りを施す。

横瓶(311・Pl. 30-320)　俵型の胴部に直立する短い口縁部を付す器形。311は口縁部から胴部の一部に欠けての破片。外面の叩き目はほとんどナデ消している。内面は当て具痕が残り、漆が付着する。320は口縁部と胴部の破片で、胴部両端を欠く。

甕の器種　**甕**(Pl. 30・31-321～346)　大量に出土したが、完形に復せるものは少ない。形態、産地に多くの種がある。321・323～326・331は甕A、322・327～330は甕B、332は甕Cにあたる。外面に格子目や平行叩き目、内面に当て具痕を持つものが多いが、325・334・335は内面の当て具痕をほとんどナデ消している。

321は黒色粒子を含む胎土で、硬質に堅く焼き締まる。322・325・327はやや粗放な胎土で、焼き締りも悪い。325の表面は薄く剝離している。323の胴部外面には擦痕があり、325・334の内面には黒色の付着物が見られる。332は甕Cの口縁部で、復原口径が120 cm にもなる大型品である。甕A・Bの底部は343～346の様な丸底で、底部が小さな平坦面になる。343・344・346には焼台とした須恵器片が融着する。324・329・330・345は陶邑窯の製品と思われる。333は灰白色の胎土で器壁が薄く、硬質に堅く焼き締り、外面には緑色の自然釉が降着する。VI群土器で、美濃の製品であろう。337～342はV群土器で、猿投窯の製品。337～337は口縁部、340は口縁部から胴部上半、341・342は底部の破片。胎土に黒色粒子を含むものがあり、口縁部から胴部にかけてと底部内面には降灰が見られる。337・338は外面に酸化鉄を塗布しており、337はそれが黒色の鉄釉の様な観を呈する。341は灰褐色を呈し、それほど焼き締まらない。底部外周にロクロを用いないヘラ削りを加え、底部に成形の際に敷いたワラの痕跡が残る。

猿投窯の甕

B　道路側溝出土土器(Fig. 19，Ph. 36)

i　東一坊大路東側溝 SD6411出土土器(88)

東側溝 SD6411は長さおよそ5mにわたって検出したのみで、出土した土器は多くはなく、図示できるものはほとんどない。出土土器には平城宮土器II～Vに属するものがあり、奈良時代全期にわたって東側溝は存続していたことが知られる。図示したものは土師器皿 AI で、a0 手法で調整し、内面に放射暗文がある。平城宮土器IIIと思われる。

平城宮土器III

ii　六条大路南側溝 SD6449出土土器(347)

六条大路は検出長が約8mときわめて短く、北側溝 SD6451、南側溝 SD6449から土器はほとんど出土していない。ここでは、南側溝 SD6449出土の須恵器杯 AIV(347)を報告する。これは灰白色を呈するI群土器で、焼成は不良。底部はヘラ切りの後、軽いナデ調整を加える。奈良時代前半のものであろう。先述したように、SD6449・6451出土土器はきわめて少量であり、時期判定の可能な資料も少ないが、断片的な資料から判断すると、両側溝ともに奈良時代のある時期に廃絶したとする積極的な証拠はない。

iii　七条条間北小路側溝 SD6471・6472出土土器

SD6471・6472はほぼ全長にあたる約124 m を完掘したため、多くの土器が出土した。しかし、完形に復せるもの、図示できるものは少ない。側溝の堆積は SD6471が上下 2 層、SD6472が 3 層に大きく分かれ、SD6471・SD6472ともに下層出土土器は平城宮土器II・III、SD6471の上層と SD6472の中・上層出土土器は平城宮土器III～V にほぼ属する。一部には掘り直しがあり、下層として取り上げた土器にも新しい土器が混在している。出土した土器には、土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器があるが、土師器、須恵器が主体を占める。土師器は保存状態が不良で、手法等の観察が困難なものが多い。

a　南側溝 SD6471出土土器(89～94・348～359)

土師器　89～94ともに全て下層出土。89・90は杯 AI。89は a_0 手法で調整し、内面に密な放射　平城宮土器 III・IV

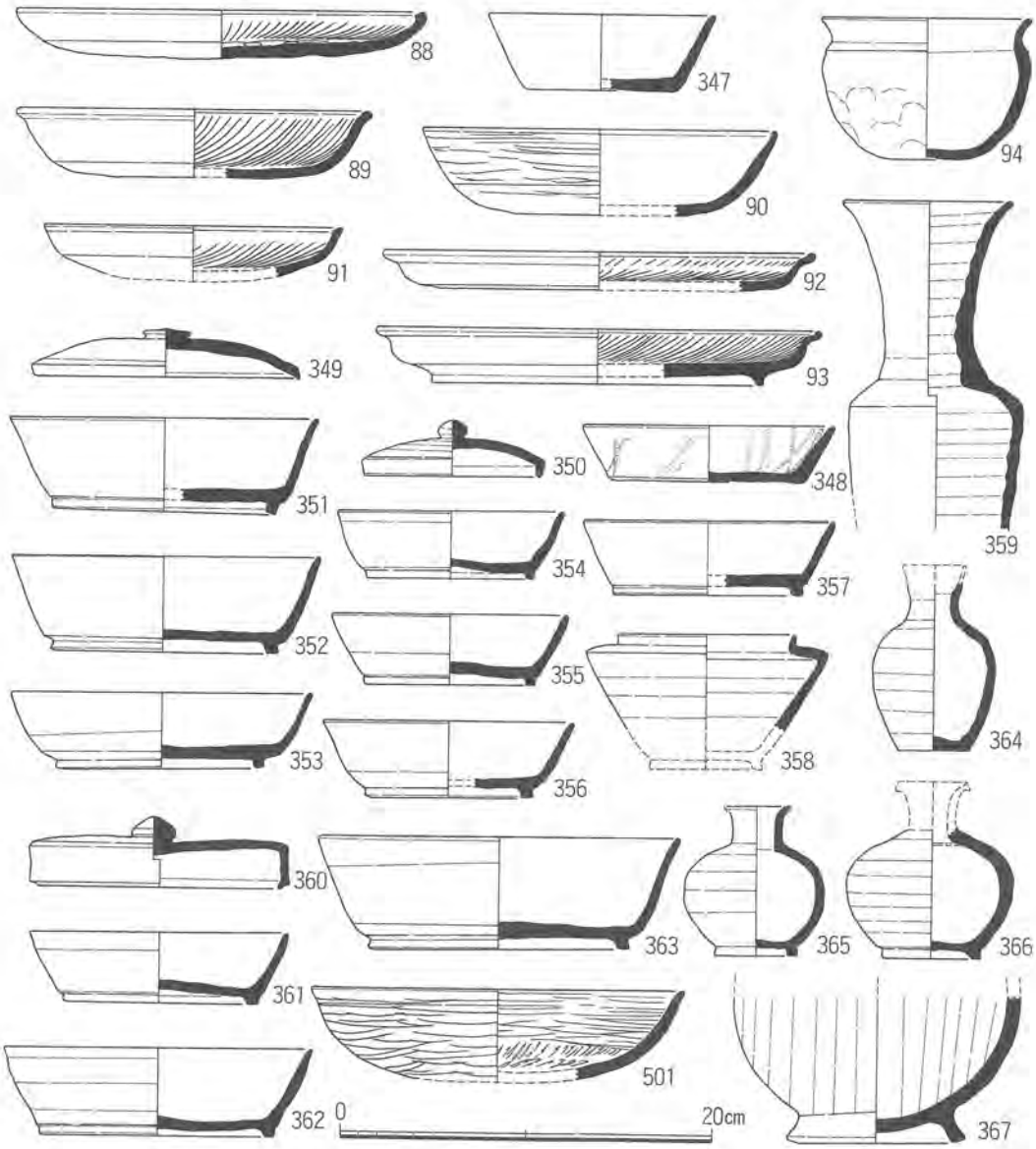


Fig. 19　SD6411・6449・6471・6472 出土土器　1：4

暗文がある。平城宮土器III古段階か。90は b_1 手法で調整するⅠ群土器で、平城宮土器IVに属する。91は a_0 手法で調整する杯CII。底部は小さな平底になると思われる。内外面ともに風化しているが、内面に放射暗文があり、連弧暗文は認められない。平城宮土器III。92は皿AI、93は皿BI。ともに b_0 手法で調整し、口縁端部は強く外反する。93は風化が著しいが、ともに内面に放射暗文を持ち、平城宮土器III新段階のものと思われる。94は壺B。内外面に粘土紐の継目が残る。風化しているが、人面は描いていない。

須恵器　349～353・356・359は下層、348・357は上層出土。348はⅠ群土器の杯AII。底部はヘラ切り不調整で、内外面に火襷がある。348は杯AIIIで、底部をロクロ削りする。351～353は杯BII、357は杯BIII、354～356は杯BIV。352がII群、354・356が群外の他はⅠ群土器。351～353・356は平城宮土器II～III、354・355は平城宮土器Vのものであろう。354の胎土には黒色粒子が目立ち、口縁部外面には降灰が見られる。底部外面を朱の硯として使用している。349は平城宮土器IIの杯BIII蓋、350は杯BV蓋。349はII群土器、350は群外の土器で、ともに頂部外面をロクロ削りする。349は漆のパレットとして使用したもので、内面に漆が付着しており、漆刷毛の痕跡も見られる。358は壺E。Ⅰ群土器で、底部を欠失する。359は壺G。底部を欠くが、それ以外はほぼ完形で出土した。内面にロクロ目が顕著に残る。口縁部の焼成は堅緻で、降灰が見られる。

朱　硯

b　北側溝SD6472出土土器(360～367・501)

北側溝SD6472は南側溝SD6471に比べて土器の出土量が少なく、特に土師器は小片で、風化も著しい。そのため、ここでは須恵器(360～367)と黒色土器(501)を図示する。

黒色土器

360・361・501は下層、362は中層、364～367は上層出土。363は杯BI、362は杯BII、361は杯BIV。361は群外の土器で、胎土に黒色粒子を含み、外面に降灰が見られる。362・363はⅠ群土器で、363は底部外面をロクロ削りする。363は平城宮土器III、361・362は平城宮土器IV～Vであろう。360はⅠ群土器の壺A蓋で、頂部外面をロクロ削りし、自然釉が降着する。364～366は壺M。ともに胴部は完形で、364・365は口縁部、366は口頸部を欠失する。365・366は胴部下半をロクロ削りし、降灰が見られる。365は長胴の器形で、平安時代まで降るものであろう。底部には糸切り痕が残り、焼成後の「×」形の線刻がある。367は壺X。高台を持つ胴部下半の破片で、全形は不明。底部内面の小範囲に降灰が見られるので、細い頸部を付していたものと思われる。胎土は灰白色で黒色粒子を含み、焼成は堅緻で外面に降灰が見られ、それが釉化している。胴部のロクロ目は垂直方向に走っており、提瓶の様に成形した後、高台を付していることがわかる(Ph. 36)。静岡県の浜名湖周辺の窯[9]の製品と考えられ、平城京での出土は、極めて珍しい例である。501は内面のみが黒い黒色土器A類の杯。e_3 手法で調整し、内面にも密な磨きを施す。9世紀前半のもの。SD6472出土土器は、下層が平城宮土器II～III、中・上層が平城宮土器IV～V・VIIにほぼ対応する。下層から型式的に新しい土器が出土している場合もあるが、部分的な掘り直しか、土坑が重複していたものであろう。また、平安時代初頭の土器も出土していることから、その時期まで凹みとして残っていたものと思われる。

湖西窯の製品

その他、東一坊坊間東小路SF6535の両側溝SD6534・6536も約10mにわたって検出したが、土器は殆ど出土していない。

C　井戸出土土器(Pl. 32・33, Ph. 37～40)

i　SE6653出土土器(Pl. 32—95～103・368～373)

十六坪西北部にある井戸で、井戸枠は全て抜き取られている。主に抜取りから大量の土器が出土した。95・96・101・368・369が掘形出土、それ以外が抜取り出土のものである。これらの土器は平城宮土器IIに属する。　平城宮土器II

土師器　杯A、皿A、皿C、高杯、壺A、甕A、甕Cがある。

95～98は杯AI。97はa_1手法、98はb_1手法で調整する。95・96は風化のため調整は不明。内面には連弧暗文を持つものが多いが、96は風化のため暗文の有無は不明。99はa_0手法で調整する皿C。100は壺Aで、両肩に把手が付く。胴部外面は横方向に密な磨きを施し、口縁部外面に放射暗文を持つ。胴部内面には細かいハケ目がある。把手の先端を欠失するだけで、ほぼ完形で出土した。101・102は甕A。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって調整する。外面に煤が付着する。103は甕C。長胴の器形で、口縁部は外反しながら開く。胴部外面に縦方向のハケ目を施し、口縁部外面にもナデ調整の下にハケ目が残る。内面はナデで調整するが、胴部には凹凸がある。　壺　A

須恵器　杯A、杯B、杯B蓋、鉢A、壺、平瓶、甕がある。

368・369は杯BIII。ともにI群土器。370は鉢A。胴部下半を欠失する。内外面をロクロナデする。371は胴部下半から底部にかけての破片で、壺と思われるが全形は不明。胴部外面はロクロ削りを施した後にロクロナデを加え、内面はロクロナデで調整する。内面に白色物が帯状に付着する。372は平瓶で、胴部下半をロクロ削りする。口縁部の一部と把手を欠失する。373は甕C。口縁部から肩部にかけての破片で、外面の叩き目はほとんどナデ消している。口縁部外面に降灰が見られる。　白色物付着土器

ii　SE6432出土土器(104～109・374・375)

十六坪東辺の中央やや北にある井戸。縦板組の方形の井戸枠が残る。土器は主に井戸枠内から出土したが、掘形からも少量出土した。105・107・374が掘形、それ以外が枠内のものである。これらの土器は平城宮土器II～IIIに属する。　平城宮土器II・III

土師器　杯A、皿A、椀C、椀X、甕Aが出土した。

107・108は杯A。107はb_0手法、108はb_1手法で調整し、108は放射暗文を持つ。104は皿A。a_0手法で調整し、内面には放射暗文がある。106は椀C。a_0手法で調整し、灯火器として使用している。105は椀Xで、椀Cを小型にした器形。109は甕A。胴部外面に縦方向、口縁部内面には横方向のハケ目を施す。胴部内面下半にはヘラ削りがある。

須恵器　杯A、杯B蓋、皿B蓋、横瓶、甕が出土した。

374は皿B蓋。つまみ部を欠失する。外面にロクロ削りを施し、内面に重ね焼きの痕跡がある。375は横瓶。口縁先端を欠失する以外は、ほぼ完形。内外面にロクロナデを施すが、外面の一部に不定方向のハケ目が残る。外面の一端には焼き台とした杯の痕跡があり、全面に自然釉が降着する。　横　瓶

iii　SE6657出土土器(Pl. 33—110～133・376～386・502)

井戸SE6653のやや東北にある井戸。曲物、木櫃の転用品と縦板を方形に組み合わせた井戸枠が残存する。枠内、掘形ともに多量の土器が出土した。110・111・376～378が掘形、それ以外が枠内から出土した。これらの土器は平城宮土器Ⅳ・Ⅴに属する。

平城宮土器Ⅳ・Ⅴ

土師器　杯A、杯B、杯C、皿A、皿B、皿C、椀A、壺A蓋、壺B、甕Aがある。

112・113は杯AI、114は杯AII。112はa_0手法、113はb_3手法、114はb_0手法で調整する。いずれも内面に暗文は持たない。112の底部外面には「×」を針書きする。120は杯BII。内外面ともに風化のため、調整は不明。110・115～118は杯CI。深い器形と浅い器形のものがある。115はb_0手法で調整し、他はa_0手法で調整する。115は「言」、116は「大」を底部外面に墨書する。116・117は灯火器として使用する。121～124は皿AI。121・122・124はa_0手法、123はb_0手法で調整する。124の底部外面には墨書があるが、判読できない。125は皿BI。内外面ともに風化のため、調整は不明。130は皿C。a_0手法で調整し、底部は小さな平底となる。126は椀AI、127～129は椀AII。126・129はc_3手法、127・128はe_3手法で調整する。119は壺A蓋で、外面を丁寧にヘラ磨きする。板状のつまみが付いていた痕跡がある。口縁部に煤が付着し、倒立させて灯火器として使用したのであろう。131は壺B。外面は口縁部のみをヨコナデし、内面は全面にナデ調整を行なう。口径に比して高さが低い。口縁部内面には浅い沈線がある。111・132・133は甕A。いずれも口縁部内外面をヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって調整する。111は内面に板状工具の痕跡がある。132の外面のハケ目は、口縁部付近が粗いもの、胴部はやや細かいものの2種の原体を使い分けている。内面には横方向のハケ目がかすかに残る。133の外面のハケ目は、ほとんどがナデ消されている。133の外面全体には煤が付着している。

墨書土器

2種類のハケ目

須恵器　杯A、杯B、杯B蓋、皿C、鉢D、壺A蓋、壺K、平瓶、提瓶、甕がある。

376は杯BII1、383・384は杯BIII2。383・384は底部外面をロクロ削りする。379～381は杯B蓋。完形に復せるものはない。379・381は口縁部が屈曲するA形態である。381は外面に降灰が見られる。385は皿C。底部はヘラ切り不調整で、外面に重ね焼きの痕跡がある。386は椀A。焼成の堅緻なⅠ群土器で、外面の一部に降灰がある。382は壺A蓋。口縁端部は下方に鈍く突出する。外面には降灰が見られる。377・378は鉢D。胴部下半を欠失する。胴部はロクロ削りし、その後肩部のみにロクロナデを加える。

製塩土器　502は製塩土器。逆円錐形の器形で、外面は不調整、内面にはナデ調整を加える。形態から見て、筑後地方のものか、底部に棒状の突起を持つ、東海地方のものであろう。

iv　SE6561出土土器(134・135・387・388)

十六坪の南辺中央やや西にある井戸。ヒノキの大木をくり抜いた井戸枠が残る。出土した土器は、枠内、掘形ともに少量である。掘形の土器は平城宮土器Ⅴ、枠内の土器は平城宮土器Ⅴ・Ⅶであり、平安時代まで存続していた。

平城宮土器Ⅴ・Ⅶ

388は掘形出土の須恵器皿CIで、底部はヘラ切り不調整。134・135・387は枠内出土。134は土師器椀Aで、e手法で調整したものを削ったc_3手法で調整する。135は土師器杯B。c_0手法

で調整する。133・134ともに平城宮土器VIIに属する。387は須恵器皿C。焼成は堅緻で、底部はヘラ切り不調整。

D　土坑出土土器(Pl. 34, Ph. 40)

十六坪内では多くの土坑を検出し、多量の土器が出土した。それらには注目すべき資料を含むが、ここでは20個体以上の漆運搬具を出土した土坑SK6423出土土器について述べる。　漆運搬具

SK6423は十六坪の東北隅にある南北に細長い土坑で、南北約5.1 m、東西約1.5 m、深さ約0.8 mを測る。堆積層は2層に分かれるが、出土土器は層を越えて接合し、一括して廃棄したものである。

土師器　杯A、杯C、皿A、鉢B、盤、甕が出土した。風化がかなり進み、食器では暗文の観察が困難なものが多い。

137・138は杯AII、139は杯AI。ともにa_0手法で調整し、内面に放射暗文を持つ。136は杯CII。浅い器形で、底部は大きな平底になる。a_0手法で調整し、内面に放射暗文を施す。140は甕。風化が著しいが、口縁部外面に縦方向、内面に横方向のハケ目が残る。

須恵器　杯A、杯B、杯B蓋、杯L蓋、鉢A、壺K、甕がある。食器類は397がII群土器、476が群外である以外は、全てI群土器である。

391は杯AII2、392は杯AII1。391は焼成が不良で風化も著しいため、細部の調整は不明な点が多いが、底部にロクロ削りを施すと思われる。392の底部はヘラ切り不調整。393は杯BII、394～396は杯BI。全て底部外面をロクロ削りし、394のみ削りが体部下半まで及ぶ。390は杯BI蓋。黒色粒子を多く含む群外の土器で、外面に降灰が見られ、重ね焼きの痕跡がある。焼けひずみが大きい。内面を硯として使用する。389は杯L蓋。環状のつまみを持つが、つまみはほとんど欠失する。肩部に2条の鋭い沈線を入れる。外面に降灰が見られ、内面を硯として使用する。397は鉢A。外面をロクロ削りし、内面には細かいハケ目状の痕跡がある。

398～409は壺K。398～408は内面、および断面に漆が付着し、漆の運搬具として用いたもの。　壺　K
409は漆が付着していない。ほとんどの個体が口頸部の付け根や肩部と体部の境などで意識的に打ち割られており、398のみ完形に復原できる。これらは特記したものを除いて、形態、胎土の面で非常に類似した点が多い。口縁端部は大きくラッパ状に開き、高台は断面三角形で下端が鋭く突出する。体部外面にはロクロ削りを施し、口頸部の中ほどに2条、肩部に1条の凹線を施すものが多い。胎土は黒色粒子を多く含み、灰褐色～青灰褐色を呈する。焼成は堅緻で、降灰が見られ、一部は釉化している。403は胎土に黒色粒子を含まず、やや粗い長石粒が目立つ。頸部の径は他に比べて太く、凹線はごく浅い。404の胎土も403と同様の特徴を持ち、同一個体の可能性がある。409は灰褐色の胎土で、少量の黒色粒子を含む。胴部下半をロクロ削りする。

SK6423出土土器は、土師器食器類の調整がa_0手法を主体とし、放射暗文の間隔が密で、かつ明確な連弧暗文が見られないこと、および須恵器杯Bの法量から、長屋王邸北の溝状土坑　平城宮土器III古段階
SD5100出土土器に類似したもので、平城宮土器III古段階の年代が与えられる。出土土器には、およそ20個体に及ぶ漆運搬具を含むことから、この時期に坪内で漆工を行なっていた可能性が高く、漆工関係の遺物はSD6400からも出土している。しかし、その量は官営工房と考えられている右京八条一坊十三・十四坪[10]やその周辺の西一坊坊間路西側溝SD920[11]に比べると少な

く、大規模な工房であったとは考えにくい。運搬具として用いた須恵器壺Kが器形、胎土の面で画一的な様相を示すことから、ある特定の産地から漆を持ってきたと考えられ、そこには国家権力の直接的な介在は認め難い。また、漆運搬具の構成を見ると、須恵器壺Kに限られ、右京八条一坊十四坪のSK2001では須恵器壺L、壺Pを含むのに対し、一段階古い様相を示すものとして興味深い。

私的な工房

E　埋納遺構・木棺墓出土土器(Pl. 35•36, Ph. 41•42)

十六坪とその周囲の条坊遺構からは、祭祀土坑や多くの土器埋納遺構、および平安時代前半の木棺墓を検出し、当調査地の著しい特徴となっている。特に、条坊側溝内に掘った祭祀土坑や、側溝に近接した位置にある土器埋納遺構は平城京の調査では初めて発見したものであり、注目される。

初の検出例

i　SX6530出土土器(141～143•410～413)

七条条間北小路南側溝SD6472内に掘られた細長い土坑で、長さ約6.4m、幅約1.2m、深さは検出面から約0.5mを測る。土師器の杯B、皿A、甕A、甕C、須恵器では杯A、杯E、壺Q、壺Xが出土した。土器は埋納された原位置を保ち、ほぼ完形で出土したものも多い。

土師器　141は杯Bで、a_1手法で調整する。風化が著しいが、内面に密な放射暗文を施し、出土時には連弧暗文も確認できた。この土器は平城宮土器IIに属する。142は甕A。口縁部の約四分の三と底部を欠失する。球形の胴部の外面に不定方向のハケ目を施し、内面には細かい凹凸が残る。外面の2ケ所に黒斑がある。143は長胴の器形となる甕C。底部と胴部の一部を欠くが、ほぼ完形。口縁部内外面にナデ調整を施し、内面にハケ目が一部残る。胴部外面上半には縦方向のハケ目、底部付近は横方向のハケ目を施す。胴部内面はナデ調整を行なうが、凹凸が残る。外面に黒斑があるが、二次的な加熱の痕跡はない。胎土には長石、石英粒と少量のくさり礫を含む。この土器は墨書人面土器であり、出土時には墨痕を確認できたが、墨の残存状況が悪く、図示することはできない。

墨書人面土器

須恵器　411は杯AIII。やや離れた位置から出土した3点が接合した。I群土器で底部はヘラ切り不調整。底部外面に「元」の墨書がある。灯火器として使用する。410は杯E。I群土器で、口縁端部を鋭く面取りする。内外面にロクロナデを施す。412は壺Q。口縁部を欠く以外は完形。I群土器で体部下半にロクロ削りを施し、肩部に降灰が見られる。413は壺X。長胴になる器形で、体部外面はロクロ削りする。内面と断面に漆が付着し、漆の運搬具として用いたもの。灰褐色のやや粗放な胎土で、焼成もややあまい。

土器の年代

以上、SX6530出土土器の年代であるが、土師器杯B(140)の形態や甕C(142)と同様の土器がSE6653から出土していることなどから、奈良時代初頭、平城宮土器IIであると考えられる。ただし、須恵器杯A(411)の墨書銘「元」は、後述するSK6608、SB6510からも出土しており、SB6510出土土器の年代は奈良時代末の平城宮土器Vに置ける。この3点の「元」銘墨書土器が一連の関連を持っていたのであるならば、SX6530出土土器の年代も奈良時代末まで下がり、土師器杯Bは七条条間北小路南側溝SD6472に既に堆積していた土器が混入したものと見ることもできる。しかし、土器群全体の構成を見ると、やはり平城宮土器IIであるとするのが妥当であろう。

ii　SX6448・6485・6460・6461・6533出土土器(144～152)

条坊遺構に接して設けられた土器埋納遺構を5基検出した。SX6448・6485・6460・6461は2個の甕を合わせ口にし、SX6533は1個の甕を単独で埋納したもので、いずれも主軸は南北方向にとる。図では、合わせ口のものは北側の土器を左、南側の土器を右に並べてある。埋納された土器は151を除いて長胴の甕Cで、いずれも斉一性が強く、口縁部は強く外反し、端部はやや肥厚する。胴部外面に縦方向のハケ目を施し、胴部内面、口縁部内外面にはナデ調整を加える。151のみが甕Aで、胴部内面にもハケ目が残る。これらの甕は風化が著しいが、二次的に火を受けた痕跡は認めにくい。　長胴の甕C

こうした、条坊側溝に接して甕を埋納した例は平城京では初めて検出した。脂肪酸分析の結果から見ても、小児を埋葬した甕棺墓であった可能性が高い。その分布を見ると、坪の北辺の六条大路上に1ケ所、東辺の東一坊大路付近に3ケ所、南西隅の坪境小路の交差点に1ケ所で、特にある地点に集中しているわけではない。坪の北辺、西辺はほとんど調査していないので、そこにも埋納遺構が存在する可能性もある。また、どれにも同じ様な土器を使用していることを考え合わせると、これらの土器は、十六坪の居住者がそれほど時間を置かずに埋納した可能性が高い。この点に関しては、後に考察する。　甕棺墓

iii　SX6428出土土器(153・414・503)

坪内の東北部にある木棺墓から、3点の土器が出土した。153は土師器杯Bで、e手法で調整したものを削ったc0手法で調整する。保存が極めて不良で、口縁端部や高台をほとんど欠失し、表面の剝落も著しい。平面形は楕円形を呈し、焼け歪んだとも考えられるが、高台も同様に平面楕円形になることから、本来楕円形に作った可能性がある。414は須恵器平瓶。胴径約13 cmの小型品で、口縁部の一部を欠く他は完形。把手と高台を持つ。胴部下半にロクロ削りを施し、上面に降灰が見られる。水滴として使用したものであろう。503は黒色土器A類の甕。内面に密な磨きを施す。外面は風化が著しいため調整は不明であるが、胴部にハケ目らしい痕跡が見られる。これらの土器は、9世紀前半のものである。　平安時代

F　柱穴出土土器(Fig. 20, Ph. 36)

坪内の建物の柱穴から、少量の土器が出土した。ここでは、年代のわかるものや、完形に復せるものを紹介する。

415～417はSB6601の柱抜取穴から出土した須恵器。415はⅠ群土器の杯B蓋、416はⅠ群土器の杯B、417は甕Aで、杯B蓋は縁部が屈曲するA形態、杯Bは高台が底部外周に接して付くもので、ともに平城宮土器Vであろう。419はSB6425の柱抜取穴出土の須恵器杯B蓋で、つまみ部を欠失する。頂部外面をロクロ削りする。縁部が屈曲しないB形態で、端部は鋭く下方に突出し、平城宮土器IIに属する。418・154・155はSB6510出土のもの。418は柱掘形出土の須恵器Ⅰ群土器の杯Bで、平城宮土器Vに属し、底部外面に「元」の墨書がある。154は土師器皿AIIで、風化が著しいが、c0手法で調整すると思われ、平城宮土器Vのものであろう。155は土師器甕で、風化が著しく、調整は不明。外面に黒斑があり、内面に茶褐色の付着物が残る。156は　墨書土器

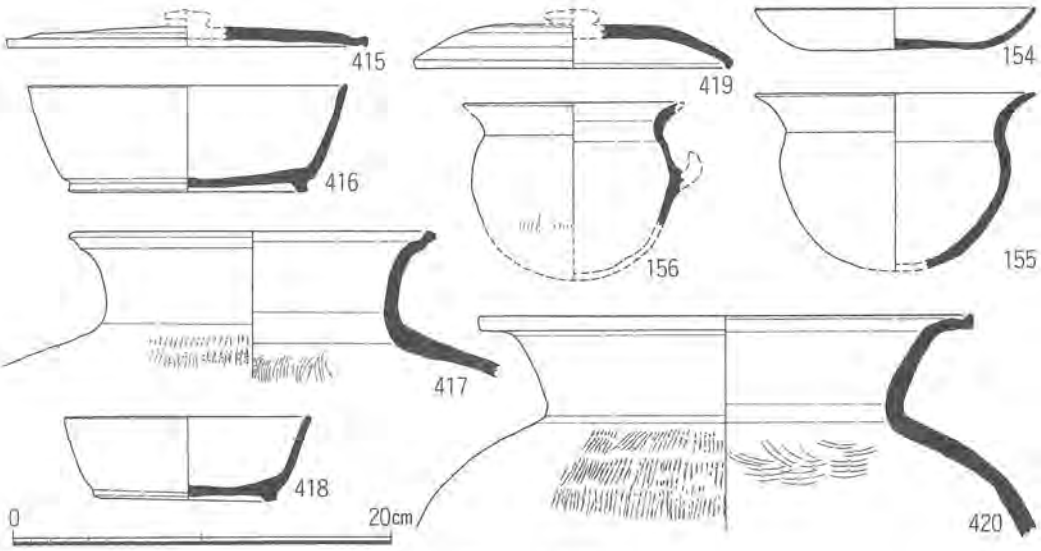


Fig. 20　柱穴出土土器　1：4

甕　B　SB6663の柱抜取穴出土の土師器甕B。風化が著しいが、外面にハケ目がわずかに残る。把手が付くが、1個のみであろう。420はSB6651出土の須恵器甕A。胴部外面に平行叩き目、内面には当て具の痕跡が残る。灰白色に堅く焼け締まり、外面に降灰が見られる。156・420ともに所属時期は不詳であるが、SB6651からは土師器椀Aと思われる破片が出土しており、平城宮土器Ⅲ中段階以降である。

G　平城京造営以前の土器・10世紀以降の土器

i　平城京造営以前の土器(Fig. 21, Ph. 43)

SD6400から縄文時代～古墳時代の土器が少量出土した。すべて二次的な堆積で風化も著しく、完形に復せるものはない。

縄文時代中期末　504～506は縄文土器で、中期末の北白川C式の深鉢形土器。胎土から見て、すべて別個体である。504～506は胴部の破片で、垂下沈線と蛇行沈線による文様を入れる。506は地文にLR縄文を持ち、505は沈線間にLRの充填縄文を施す。奈良盆地北部における該期の土器の出土は、左京三条四坊七坪と東紀寺遺跡に2例ある[12]。

弥生土器　507～511は弥生土器で、507は口縁部、508～511は底部の破片。507は第Ⅲ様式の壺で、口縁端部は面をなし、そこに櫛描波状文を入れる。内面には同一工具による扇形の圧痕文を施す。508は大きな平底で、胴部は強く外反して立ち上がるもので、第1様式の壺の可能性がある。509は底部外周をヘラ削りし、第Ⅲ様式の壺か。510は小さな平底で、外面に縦方向、内面に横方向のハケ目を持ち、第Ⅰ様式の甕の底部であろう。511はごく小さな平底で、外面に叩きがあり、第Ⅴ様式の壺か甕と思われる。

古墳時代の土器　その他、完形に復せなかったため図示はできなかったが、古墳時代の土器としては、布留式土器の高杯の脚部や、内面に炭化物を顕著に残し、脚台を持つ東海地方のS字状口縁甕の底部などが出土している。

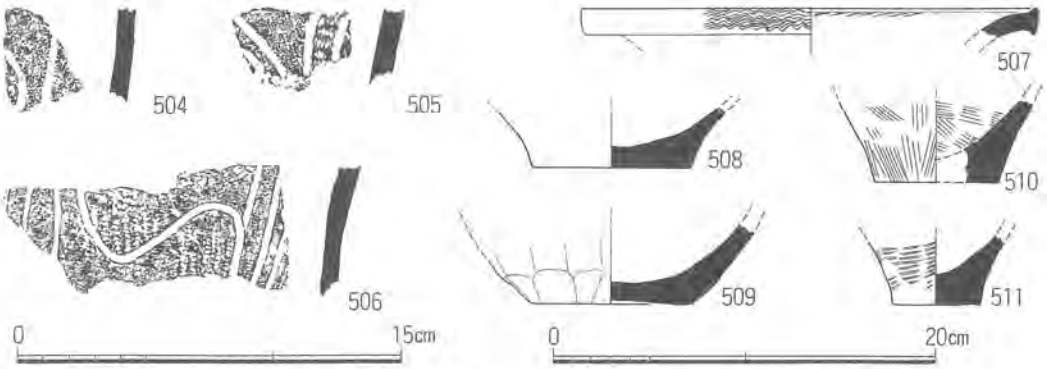


Fig. 21 縄文・弥生土器 504～506 1：3 507～511 1：4

ii 平城京廃絶以降の土器(Fig. 22, Ph. 43)

SD6400およびその後身のSD6414からは、平安時代の土器も少量出土している。これらは、SD6400の最終的な埋没年代を示すものとして注目される。

黒色土器

512～521は黒色土器A類。516～518は杯Aで、e手法を削ったと見られるc_3手法で調整し、内面には密な磨きを施す。516・517は内面に暗文を持つが、518は小破片のため、暗文の有無は不明。519は杯B。胴部が内弯しながらきつく立ち上がる、あまり例を見ない器形である。内面の口縁端部に、凹線状の強いナデを加える。c_3手法で調整し、内面に密な磨きを施す。512～517は椀B。512・513はやや深い形態で、高台は細く、鋭く下方に突出する。514・515はやや浅い器形で、高台は断面三角形となる。全てe_3手法で調整するが、514・515の磨きは512・513に比べて粗い。520は皿。底部は欠失するが、高台が付くものと思われる。e_0手法で調整するが、部分的に削りを施している。内面は横方向に丁寧に磨き、6ケ所に暗文風の縦方向の磨きを施す。外面は上半部も黒色化している。521は鉢A。雲母の目立つ胎土で、内外面ともに丁寧な磨きを施す。外面には、黒漆状の付着物が残る。これらの黒色土器は大きく3時期に分けられ、516～521は東三坊大路西側溝SD650A出土土器[13]、512・513は西隆寺の井戸SE491出土土器[14]、514・515は薬師寺西僧坊出土土器[15]の直後に対応でき、それぞれ9世紀中葉、10世紀前半、10世紀後半の年代が与えられる。

瓦 器

522～524は瓦器。522・523は椀で、内外面に密な磨きを施し、外面の磨きは高台直上まで及んでいる。高台は断面三角形のしっかりとしたもので、鋭く下方に突出する。524は皿で、a_1手法で調整する。内面は見込み部にのみ平行線状の暗文を施す。これらの瓦器は、11世紀後半のものであろう。

土 師 器

157～159は土師器。157は杯Aで、底部を欠失する。e_0手法で調整し、SD650A出土土器に並行するもの。158は皿で、完形で出土した。e_0手法で調整し、口縁端部は小さく肥厚する。11世紀後半の年代が与えられる。159は羽釜。口縁部の破片で、口縁端部は外面に段を持って肥厚する。外面に煤が付着する。

須 恵 器

421～423は須恵器。421は壺の胴部下半から底部にかけての破片で、胴部上半と口縁部は欠失する。外面にロクロ削りを施し、内面はロクロナデで調整する。底部外面は不調整で、外周部に植物繊維状の圧痕が残る。胎土は若干の石英粒を含む緻密なもので、赤褐色を呈する。これ

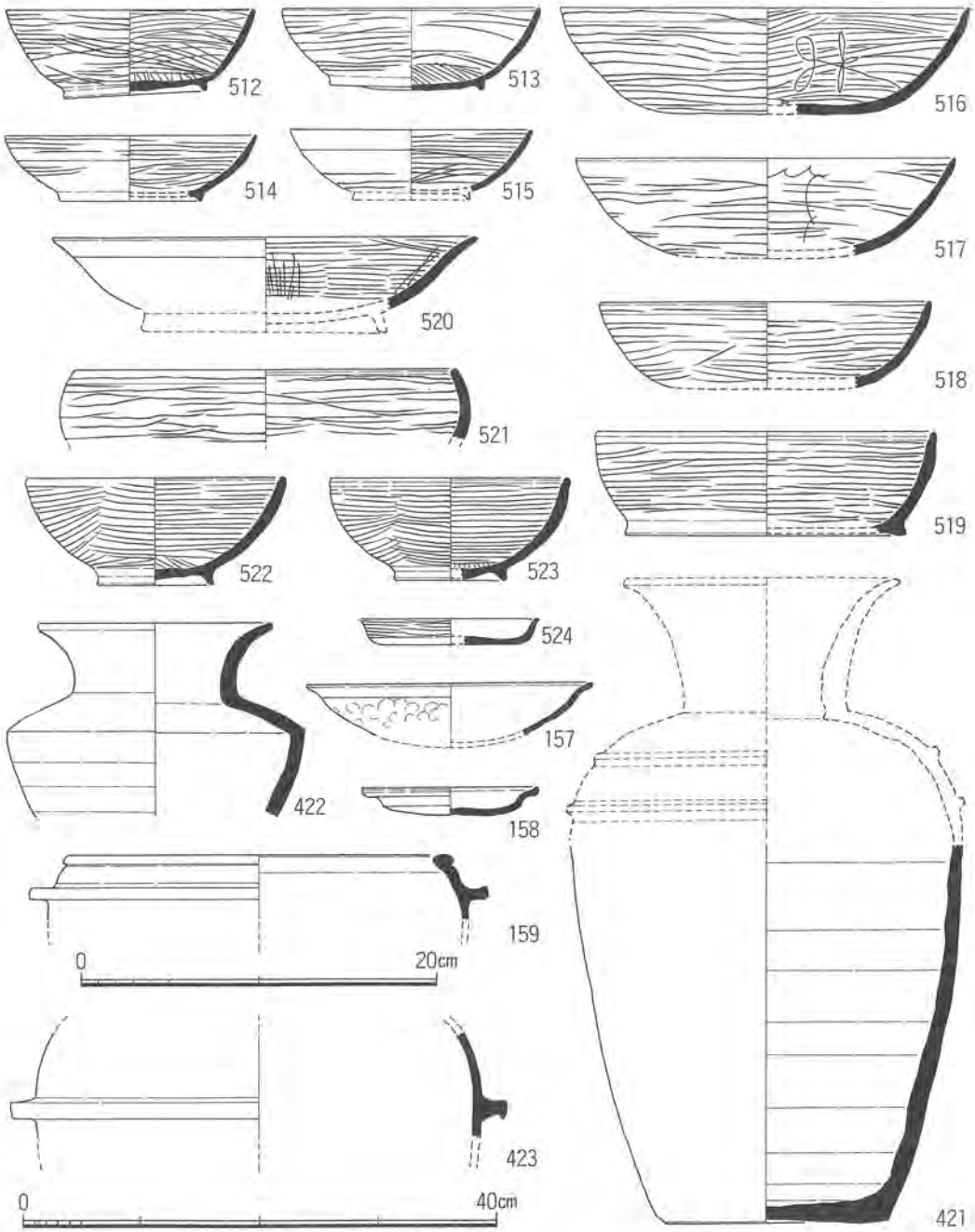


Fig. 22　平城京廃絶以降の土器　1：4　　423のみ1：6

播磨地方の製品

らの特徴から、薬師寺西僧坊で出土している様な、肩部に2条の突帯を持つ壺になると考えられ、兵庫県の西播地方、相生周辺の窯[16]の製品である。10世紀後半のものであろう。422は壺で、口縁部から胴部上半の破片。口縁部はやや広口で曲線的に外反し、胴部は肩部で稜を持って屈曲する。胴部外面にはロクロ削りを施し、それ以外はロクロナデで調整する。胎土、焼成ともに421に類似し、西播地方の製品の可能性がある。423は胴部の破片で、全形は不明であるが、羽釜状のものになるか、あるいは421の様な肩部に突帯を持つ壺になるかと考えられる。直径40 cm 以上に復原できる大型品で、胎土は灰褐色を呈し、外面に降灰が見られる。

以上に図示したもの以外では、SD6414から12世紀に属する瓦器椀の小片が出土しており、そ

の上面の包含層として取り上げたものには、12世紀の越州窯の青磁椀を含んでいる。これらのことから、SD6414は11世紀前半にはほぼ埋没し、浅いくぼみとして残っていたが、それも12世紀代には埋まったものと考えられる。

H　施釉陶器・特殊土製品(Pl. 37，Fig. 23，Ph. 44)

i　施 釉 陶 器(Pl. 37—525～529)

525は奈良三彩の鉢A。底部を欠くが、全周の約三分の一が残存する。胴部下半をロクロ削りし、それ以外はロクロナデで調整する。緑釉を鹿の子状にかけ、その上に褐釉を点状に配する。釉が銀化して黒色を呈する破片もある。これらは西側溝のQJ区からRE区にかけての約45 mの範囲にわたって散在し、また褐色粗砂、暗灰砂、暗灰粘土の複数の層位から出土しており、水流により流されていると考えられるが、それほど磨滅を受けた状況ではない。526は灰釉陶器の段皿。口縁部の破片で、内面に釉を薄く漬けがけする。猿投窯の製品で、黒笹90号窯期のものであろう。GJ49区遺物包含層出土。527・528は緑釉陶器。527は白色の胎土をした軟陶であるが、焼成は非常に堅緻である。底部外面には糸切り痕が残り、貼付け高台を持つ。釉は濃緑色で、底部内面に三叉トチンの痕跡がある。西側溝QJ97区の最上層の出土。528は須恵質の胎土の硬陶である。高台は削り出しで成形し、淡緑色の釉をかける。IG44区の遺物包含層出土。527・528ともに近江地方の製品で、527は10世紀後半、528は10世紀中頃のものであろう。529は青磁の壺。胴部上半の破片で、口縁端部は欠失する。肩部には半環状の耳を持つが、耳の上半は欠失する。耳は4ケ所に付き、四耳壺となるものであろう。胎土は赤褐色で硬質に焼き上がり、濃緑色の釉を外面と口縁部内面に厚くかける。化粧土は施さず、素地の色が透けるため、釉調は褐色に近くなる。西側溝IJ10区の暗灰砂層出土。

奈良三彩

緑　　釉

青　　磁

ii　硯(Pl. 37—530～537)

調査区の全域から29個体が出土した。そのうち、SD6400から出土したのは10個体ある。他は、SD6415から3個体、SD6472から1個体出土した以外は、ほとんどが坪内の遺物包含層から出土したものである。坪内での硯の分布を見ると、SB6575やSB6600周辺の坪の南西部のみに集中しており、ここに家政機関に類する施設が存在したことをうかがわせる。

坪内での分布

530は獣脚円面硯。獣脚は、硯部に貼り付けた後に削りで成形する。底面に降灰が見られ、硯面は使用により磨滅している。獣脚は1個のみの残存であるが、3単位に復原した。8世紀中頃のもので、HN14区の遺物包含層出土。531～533は圏足円面圏。531は脚部にヘラで刻みを入れ、透しとするが、内面までは貫通しない。同一個体の2片が、SD6415PM97区の暗灰粘土層とSD6472上層から出土した。532・533は脚部をほとんど欠失する。脚部の透しの数は、532は38個、533は21個に復原できる。532の陸部は海部から垂直に立ち上がり、外堤部と同じ高さに達する。外周には突帯を持たず、上部に1条、下部に2条の沈線を施す。外面と底面には濃緑色の自然釉が降着し、硯面は平滑に磨滅している。猿投窯の製品で、8世紀初頭のもの[17]。GO40区の遺物包含層出土。533は海部が幅広で、陸部の立ち上がりも弱い。外周に1条の突帯を持ち、硯面は平滑に磨滅している。HD15区の遺物包含層出土。534は低圏足円面硯。硯面の周囲が突帯状

に立ち上がり、低い高台を持つ器形で、硯面の一部をくぼませて海部とする。硯面の中央部には布の圧痕が見られ、光沢を持つほどに磨滅する(Ph. 28)。少量の黒色粒子を含む灰白色の緻密な胎土で、底面には濃緑色の自然釉が降着する。猿投窯の製品で、8世紀後半のもの。HA37区の遺物包含層出土。535は宝珠硯。先端部の破片で、約三分の一が残存する。硯面の周囲に外堤部を立ち上げ、中央付近に突帯によって海部と陸部を区別する。外周部は削りにより丁寧に面取りをし、1ケ所に刳り込みが残る。刳り込みは全体で4ケ所にあったと推定され、底面には2個の脚がつくものと思われる。底面は粗い削りで調整し、先端部には稜を表出しており、重ね焼きをした痕跡がある。猿投窯の製品で、宝珠硯としては古い形態を示し、760年頃のものである。SD6609、SK6579、GS37区の遺物包含層から出土した3片が接合した。356は鳥形硯で、頸部から硯部の一部にかけてのみ残存する。頸部の断面形は偏平で、全面を削りにより調整する。内面の下端には墨が付着する。微細な黒色粒子を含む胎土で2種類の陶土を用いており、それが縞状になる部分もある。焼成は堅緻で、降灰が見られる。猿投窯の製品と思われ、8世紀後半のものである。西側溝PR97区褐色粗砂層出土。537は形象硯の尾部の右半部で、鳥形硯か獣形硯であろう。側縁は垂直に近く立ち上がるが、末端部はゆるやかに立ち上がる。側縁には削りによる面取りを施す。残存している部分には脚の表現はない。硯面は使用により磨滅し、墨痕が見られる。砂粒をあまり含まない灰白色の精良な胎土で、堅く焼き締り、底面には降灰が見られる。十六坪の北面築地雨落溝SD6446出土。

宝珠硯

鳥形硯

iii　特殊土製品(Fig. 23)

灯火器の専用品

538は須恵器の灯火器で、専用品として製作したもの。他に類例は京都府内里八丁遺跡[18]で出土しているのみで、極めて珍しい器形である。胴部は垂直に立ち上がり、口縁部は幅広の面を持ち、内外両端が立ち上がる。底部外周は高台状に下方に突出する。口縁端部の外周に1条、胴部に2条の鋭い沈線を入れ、胴部外面を磨く。底部内外面と口縁部上端の面には螺旋暗文を施す。図では、上面の平面図で左側に口縁部、右側に底部内面の暗文を示してある。底部内面

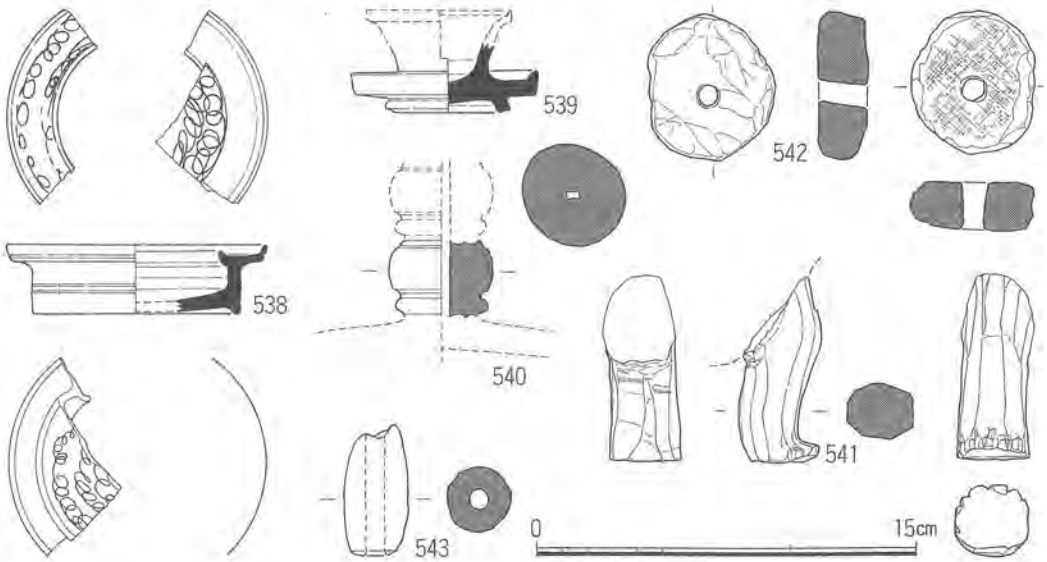


Fig. 23　特殊土製品　1：3

と口縁部には煤が付着する。西側溝 GM10区の暗灰砂層出土。539は須恵器托。口縁部を欠くが、他はほぼ完形。胎土は緻密で青灰色を呈し、底部に降灰が見られる。西側溝 GM10区の暗灰砂層出土。540は須恵器蓋のつまみ部。宝塔形になるものの第一段部だけ残存しており、中央部には小孔が上下に貫通している。灰白色の胎土で、焼成はやや不良。火舎の蓋になるものであろう。西側溝 IL10区の褐色粗砂層出土。541は須恵器の獣脚。やや長めのもので、全体を削りによって面取りし、刳り込みによって4本の指を表現する。形状と器面との剝離角から見て、火舎の脚と考えられる。IF42区の遺物包含層出土。542は紡錘車。周縁は打ち欠いた後に粗く擦って整形し、中央部に穿孔を施す。平瓦を転用したもので、一面に布目がある。西側溝 QN97区の暗灰砂層出土。543は土錘。砲弾形の器形で、径約7mmの孔が貫通する。砂粒を多く含む胎土で土師質に焼き上がり、黒斑がある。西側溝 QO97区の褐色粗砂層出土。

火　　舎

平瓦の転用

I　祭祀用土器・土製品

西側溝 SD6400からは、墨書人面土器が427点、小型模造土器が233点、土馬が123点と、大量の祭祀用土器・土製品が出土し、その他七条条間北小路北側溝 SD6472や坪内の柱穴、包含層からも少量が出土している。平城京内でこれほど多くの祭祀関係の土器・土製品がまとまって出土したのは、右京八条一坊十一坪の西一坊坊間路西側溝[19]、左京八条三坊九坪[20]や左京六条三坊十四坪の東堀河[21]などしかなく、京内における祭祀のありかたを示す重要な例であると言える。西側溝内でのこれらの出土状況は、西側溝出土土器の項でも述べた通り層位的なものではなく、混在した状況を示す。そのため、ここでも層位的に記述することはせず、類別ごとに記すこととしたい。また、西側溝内での平面的な分布では数ケ所に集中する地点が認められるが、それについては後に考察する。なお、これらの祭祀用土器・土製品の分類は、基本的に西一坊坊間路西側溝の報告[24]の分類に従うこととした。特記したもの以外は西側溝 SD6400出土のものであり、図示したものの出土地点、層位を別表3に記してある。

多量の祭祀関係遺物

i　墨書人面土器(Pl. 38～41，Ph. 45～56)

人面を描くのに用いた土器は主として土師器壺B、壺Cであるが、土師器甕を用いた例もある。SD6400から419点出土し、それ以外の出土が8点ある。完形品に復せるものは少ないが、判明した限りでは、顔は2面に描くもののみで、4面に描く例はない。2面に描いたものは、両面の顔ともに同じ表情を示す。また、人面の他に墨線を組み合わせた文様を描くものもある。この様に、土器の形態、顔の表情などには様々な類型があるため、ここでは、破片についても墨書があるものは可能な限り写真図版に収録することとした。掲載にあたっては、実測図は類別ごと、写真図版で破片の集合のものは基本的に層位を優先させて配列した。また、図では黒斑上に描いた墨線や墨痕の不鮮明な部分については薄墨で表現してある。

器　　種

類別の際は、全形を知ることのできるものは少ないので、主として口縁部の形態と頸部の屈曲の度合、および法量を基準とした。以下の類別は、A類～H類が壺B、I類が壺C、J類が甕である。壺B、壺Cの調整は口縁部と頸部をヨコナデし、胴部は不調整で、粘土紐の接合痕が残るものが多い。底部には、成形の際の台の痕跡を残すものもある。内面には粗いナデ調整を加えるが、ハケ目や整形の際のコテの痕跡が残るものも見られる。色調は、ほとんどのもの

分類の基準

が淡褐色を呈する。以下、類別ごとに主なものの記述を行なうこととする。

A類(601～606・635・636)　大型で、頸部で強く屈曲し、外反する口縁部を持つ。口縁端部は小さく肥厚する。器壁は比較的薄いものが多い。

601はほぼ完形に復せるもので、2面に人面を描く。どちらも同じ表情を示し、山形の眉、2本の短線で瞳を表す目、鼻、耳と、歯の表現のある口、頬ヒゲ、顎ヒゲを描く。底部には成形の際の台の痕跡がある。602は顔の左半分の破片で、把手が1ケ所に残る。頸部にはおそらく一周する墨線を入れ、半円形の眉、墨点で瞳を示し、1筆による目を描き、弧線で顔の輪郭や口を表現する。把手は顔の部分にはなく、耳に見立てたものか。口縁端部には強いナデを加え、外面が凹線状にややくぼむ。底部に成形の台の痕跡があり、内面には細かいハケ目が残る。603は円形の顔の輪郭の中に、目尻が下がり墨点で瞳を表した目と、鼻を描く。口の有無は不明であるが、眉、耳の表現はない。604は欠損部が多いが、数条の墨線で描く眉、墨点の瞳を持つ目、半円形の鼻、頬ヒゲが残る。他のA類に比べて器壁が厚く、暗褐色の色調を呈するやや特殊な土器を用いている。605は同一個体の2片から図上復原した。眉、瞳を墨点で表す目と、耳、頬ヒゲ、顎ヒゲの表現がある。606は完形で出土した唯一のもので、1面のみに描く。2筆で円形の顔の輪郭を描き、その中の中央やや右上に3本の短い横方向の墨線があり、これは左の眉と目を表現したものであろう。顔のその他の部分は描いておらず、省略したものか。底部に成形の台の痕跡があり、胴部内面には粗いハケ目を施す。底部内面には茶褐色の付着物が見られる。635・636は墨線により直線や弧状のモチーフを描いたもので、小破片のために全体の構成が不明であるが、顔の表現とは見られない。635は小さな把手を持つ。

把手

完形品

B類(607～614・637～644)　A類に比べてやや小型で、頸部の屈曲も弱い。口縁端部にはナデによる凹みがある。

607はほぼ完形に復せるもので、2面に人面を描く。眉はなく、目は2筆で輪郭を描くだけで、瞳の表現を欠く。鼻は長い縦線と短い横線を組み合わせて表し、口は2筆で目と同様な形で描いている。縦の墨線で、耳と頬ヒゲ、顎ヒゲを表現する。色調は赤褐色～灰白色を呈し、黒斑がある。608は607と同形、同表情のもので、出土地点、層位も同じである。破片であるが、607の例から見て、2面に顔を描くものであろう。Ph. 54-842も胎土や墨線の状況から見てこれらと同様のものであり、あるいは608と同一個体であるかも知れない。609は顔の右半分の破片で、弧線による眉、目と耳の表現がある。目は墨点による瞳を持つが、下のまぶたは描いていない。内面にはハケ目と工具痕が残る。610は口縁部を欠失するが、頸部の屈曲の度合からB類に含めた。水平に近い眉と2筆による目、瞳、鼻と口、口ヒゲ、頬ヒゲ、顎ヒゲを描く。耳の有無は不詳。底部に成形の台の痕跡がかすかに残る。611は小さな把手を鼻に見立て、その両側に太い墨線を2条ずつ入れる。眉と目を表現したものであろう。把手の下には3筆による口を描き、内部には墨線で歯を表す。612は2筆による円形の目と墨線の瞳を描くのみで、他の部分の表現はない。目と目の間には横方向のヘラによる沈線があり、鼻として意識したものか。613は黒斑があり、その上に描いているために、墨線が不鮮明な部分もある。鍵の手状に曲がる線で眉を表し、縦の長い墨線で鼻を描く。目は上まぶたを直線で引き、全体は丸い形となる。他に、耳かと思われる墨線が認められる。614は弧線で眉または上まぶたを表し、その下に墨点で目を表現する。鼻は、2本の墨線で描く。胴部内面にはハケ目がある。640は細い墨線で眉、目、鼻、

同巧の土器

黒斑

口を描き、瞳の表現はない。底部に製作の台の痕跡がある。637・639・641は眉と目の部分を描いた破片。637の目の内部には墨点と3本の墨線があり、瞳とまつ毛を表したものか。639・641の内面には工具の末端の刺突痕がある。638は頸部に墨線を入れるもので、642は眉と鼻、643は眉と目を表現したものか。644の弧線は顔の輪郭であろうが、縦の墨線については不明。

C類(615・616・646)　頸部の屈曲はやや強く、口縁端部は大きく肥厚する。

615は小さい把手を持ち、把手の周囲を丸く墨線で囲み、その脇に墨点で瞳を表現する目を描く。口縁端部は肥厚するが、肥厚の著しくない部分もある。胴部外面にはヘラによる数条の縦線を焼成前に入れており、口縁部は数ケ所に圧痕があり、歪みが著しい。胴部内面は一部に細かいハケ目がある。同一個体の破片が3片あり、うち2片は接合する。616は顔の輪郭を丸く描き、眉、目、鼻、耳と2筆による口の表現がある。小さな把手を持つが、顔は把手を避けて描いている。646は眉と瞳を持つ丸い目、鼻、口、耳を描く。　把　　手

D類(617～619・647～649)　頸部の屈曲はやや弱く、口縁部の外反も弱い。口縁端部は外側に肥厚する。

617は同一個体の2片であるが、接合はしない。小さな突起を鼻とし、2筆により目を描き、墨点で瞳を入れる。口は大きく、2筆で描き、短い墨線で歯を入れて恐ろしげな表情となる。618は同一個体が4片あり、そのうち3片を図示した。全体の構図は不明な点があるが、顔の輪郭を丸く描き、墨線で目、鼻、口を描いているものと思われる。小さな把手を持つが、顔の部分にはこない。口縁部内面には縦や斜めの墨線を施す。内面に墨線を入れたものは、他に716・775の2点が出土している。619は突起を鼻と見立て、太い墨線で眉、目などを描くもので、全体の構成は611と似る。突起上には相対する2本の弧線で鼻の輪郭を描き、中央に垂下する太い墨線がある。647は眉と瞳を墨点で表す目の部分で、胴部内面にはハケ目がある。648は把手を持ち、把手の上方の頸部と把手の下端に短い縦の墨線を入れるのみで、顔の表現はない。口縁部内面にハケ目がある。649は眉、目、鼻を描くもの。眉と鼻は直線的で、鍵の手状に末端がつながる。　内面施文

E類(620・621・645)　頸部の屈曲がやや弱く、口縁端部が尖るもの。

620は眉と墨点で瞳を示す目、三角形の鼻、1筆による楕円形の口を描く。眉と目尻は若干垂れ気味である。頸部には強いナデを施す。621は顔の輪郭部に墨線を重ね合わせたモチーフを描き、眉、耳や頭髪、頬ヒゲを示すものと思われ、他とは異なる特殊な表現法をとる。目は2筆で楕円形に描き、内部に弧線による瞳を入れ、瞳内には縦の細い墨線がある。胴部内面には細かいハケ目がある。645は眉と墨点で瞳を示す目を描いており、鼻の墨線が一部残る。　特殊な表現

F類(650・651)　口縁部が水平に外反し、端部は丸い。

650は眉、目、鼻と顔の輪郭と思われる墨線を描く。眉は長い弧線で、顔の輪郭を兼ねるものであろう。目は1筆で丸く描き、瞳を入れる。口縁端部に1ケ所圧痕がある。651は把手を持つもので、把手を中心に縦横の墨線を描き、把手の上方には、円弧状に対向する2本の短い墨線を入れる。色調は暗褐色を呈する。

G類(652)　頸部のくびれが著しく、口縁端部は上方に突出する。口径に比べて器高が低い。

652は1本の横方向の墨線と、2本の縦方向の弧線が残る。眉と鼻の表現か。

H類(622・623・653～656)　直線的に外反しながら立ち上がる胴部で、頸部の屈曲は弱く、口径

が胴径よりも大きい。口縁端部は内面がわずかに凹む。口径に比して器高が低い。

622は顔の残存部が少ないが、眉、目、頬ヒゲと見られる墨線を描く。623は眉、墨点で瞳を表す目を描き、鼻、口と見られる墨線もある。653は眉を短い墨線を連ねて表現し、目は円形で、墨点で大きな瞳を入れる。目の右の墨線は、鼻か耳であろう。654は長い眉と楕円形の目を持ち、目の内部には墨点で瞳を表現し、目の左側には弧状の墨線を描く。鼻、口、耳と見られる墨線も残る。665はボタン状の突起を鼻とし、その周囲に眉、墨点を瞳とする目、口を描き、短い墨線を連ねて顔の輪郭を表現する。内面の一部にハケ目が残る。656は眉と目の部分。目は円形で、丸い墨線の瞳を持つ。他に、鼻や頬ヒゲと見られる墨線もある。

小型品　**I類**(624～629・657・658)　口径10 cm 程度の小型品で、丸みを持つ胴部と外反する短い口縁部からなる。口縁端部はわずかに肥厚するものが多いが、丸みを持つものもある。器高は口径の半分程度である。

624は弧状の眉、2筆による目、鼻と頬ヒゲを描く。左目だけに、顔の中央に著しく寄せて小さな墨点で瞳を入れる。625は同一個体の2片で、接合はしない。すべて1筆の墨線で眉、目、鼻、口を描く。626は頸部に一周しない墨線と縦の短い墨線を入れ、眉、目、鼻と見られる円形や弧状の墨線を描くが、顔を表現したものかは判然としない。627は直線的な墨線で眉、目、鼻、口、耳を描き、墨点で鼻孔を表現する。顔の横には長い縦方向の墨線を配し、顔の輪郭を示したものか。そうであれば、4面に顔を描いていた可能性もある。628は眉、目、鼻、口を描く。目は上まぶただけを描き、墨点で瞳を表現する。629は頸部に1条の墨線を施し、胴部には斜め方向の墨線を描いたもので、顔は表現しない。657は横方向の墨線のみを用い、眉、目、鼻、口を表現する。658は眉、目、鼻の表現であると思われるが、残存部が少なく、詳細は不明である。

J類(633・634・664～672)　一般の土師器甕に描いたもの。法量によりさらに細分できるが、ここでは一括した。

甕　**B**　633は口縁部から胴部上半の破片で、眉と墨点で瞳を表した目、鼻の付け根部が残る。眉間部には仏像の白毫の様な墨点を入れ、その上方には逆ハの字状の墨線がある。634は甕Bを用いたもの。口径約34 cm におよぶ大型品で、顔は2面に描く。同一個体の破片から図上復原した。把手を鼻として用い、把手上に鼻尖部を描き、胴部に2本の墨線を入れて鼻の付け根部を表す。目は2筆で描き、瞳を持つ。目の上に眉、把手の下に口を描き、口には歯の表現がある。顔の輪郭には短い墨線を連続的に施し、頭髪、頬ヒゲを表しており、胴部の破片に残る墨線から、顎ヒゲも描いていたと思われる。外面の一部には黒斑がある。本例の様に大型の甕Bを用い、把手を鼻に見立てる例は、極めて珍しい。664は中型の甕の胴部の破片。墨線で眉、目、鼻、口を描く。外面のハケ目はほとんどナデ消され、内面には叩きの当て具痕がある。665は口縁部から胴部上半の破片で、復原口径は約15 cm。眉と墨点で瞳を表した目、鼻、口を描いている。口縁部外面には縦方向、内面には横方向のハケ目が残る。666は頸部から胴部にかけての破片で、眉と目を描く。口縁部内面にもハケ目がある。667は胴部上半の破片で、眉、墨線の瞳を持つ目が残る。668は胴部の破片で、目は瞳を墨点で表す。その上には弧状の墨線を連ねており、眉や頭髪を表しているものであろう。669は頸部から胴部の破片で、数本の墨線で眉を表現し、目の一部が残る。666～669は大型の甕であろう。670は中型の甕の胴部で、目、鼻、口、顎ヒゲと見られる墨線を描く。外面のハケ目はかなり粗く、擦痕状のものであり、特殊な原体を用いた可

叩き成形の甕

能性がある。内面には叩きの当て具痕がある。671は大型の甕の胴部で、口と口ヒゲ、顎ヒゲを描いているものであろう。672も大型の甕の胴部で、墨点の瞳がある目を描き、目の右下には2本の斜方向の墨線がある。外面に黒斑があり、内面には圧痕とハケ目が一部にある。

その他、口縁部を欠失する等の理由で類別が不能なものがあるが、特徴的なものについて図示した。630は底部で、鼻、口、顎ヒゲ、顔の輪郭を描いていると判断できる。鼻は縦の長い墨線で表し、墨点で鼻孔を表現する。口は1筆で円形に描き、内部に歯かと思われる墨線を入れる。成形の台の痕跡がある。631は胴部の破片。眉、目、鼻と思われる墨線を描き、他にも意味不明な墨線がある。内面には漆が付着し、漆容器として使用していた土器を転用したもの。632は底部から胴部の一部にかけての破片。墨書は2ケ所に残り、1ケ所は鼻、口、顎ヒゲ、もう1ケ所には耳、顔の輪郭と見られる線を描く。成形の台の痕跡がある。659は頸部から胴部の破片。眉、目、鼻、耳を描き、目は2筆の墨線で表現する。660は頸部から胴部の破片。眉、目、鼻、口、顎ヒゲを描き、目は2筆の墨線で表現し、墨点で瞳を入れる。661は胴部の破片で、眉、目、鼻が残る。目は2筆で描き、墨線、墨点による瞳を入れる。鼻には鼻孔を描いており、顔の表現は最も写実的である。662・663は底部。662には鼻の下端部、口、口ヒゲ、顎ヒゲが見られる。成形の台の痕跡がある。663は径約4mmの小孔を焼成前にあけている。

漆壺の転用

底部に小孔

ii　小型模造土器(Pl. 42, Ph. 57・58)

SD6400出土の233点を中心に、SD6471・6472、坪内の包含層などから計243点が出土した。特記したもの以外はSD6400の出土で、出土地点、層位は別表3に記してある。甕、甑、竈、高杯、蓋、壺の器種がある。ほとんどが土師器で、須恵器が少量見られ、甕、甑、竈は全て土師器である。土師器の色調は、墨書人面土器同様、淡褐色を呈するものが多い。以下、器種ごとに記述を行なう。

土　師　器

a　甕(926～931)

12点出土し、10点がSD6400から出土している。口縁部内外面をヨコナデ、胴部内面はナデで調整する。胴部外面は不調整で、粘土紐の継目や指頭圧痕を残す。やや大型で深いもの(926)、やや偏平な球形の体部に短い口縁部を付すもの(927～930)、小型のもの(931)の3つの類が認められるが、出土量が多くはないため、詳細な分類は保留しておく。926の口縁部内面にはハケ目がある。928～930は完形で出土した。931はSD6400の出土ではなく、SB6570の西側柱の北から2番目の柱穴から出土した。

甕の出土量は甑、竈に比べて著しく少なく、墨書人面土器のⅠ類として使用する壺Cを、小型模造土器の甕として転用した例が多くあったと考えられる。

壺Cの転用

b　甑(901～925)

55点出土し、すべてSD6400のものである。内面と口縁部外面をヨコナデで調整し、胴部外面は不調整で、粘土紐の継目や指頭圧痕が見られる。口縁部外面のヨコナデを省略するものもある。大きく5つに分類でき、さらに法量によって細分できる。

A類(901～906)　底部から口縁部に向かって直線的に外反して開く、実用の甑を模した器形で、

底部には穿孔がある。法量により、AI類(901～903)、AII類(904～906)に分かれる。破片のものが多いため把手の有無は不詳であるが、確実に把手が付く例はない。904は完形で出土し、906は半周以上が残存するが、いずれも把手を持たない。口縁部外面のヨコナデの範囲は幅広で、AI類は胴部の半ばほどまで及ぶが、AII類では若干幅が狭くなる。901の底部の穿孔は、焼成後に打ち欠いたものである。904・906には黒斑がある。

底部穿孔

B類(908～911)　口縁部がやや内弯しながら開く器形で、口縁端部は尖るものが多い。器高は口径の半分程度となる。確認できたものでは、底部に焼成前に穿孔する例はないが、908には焼成後の穿孔がある。911は口縁端部が内屈し、色調は暗褐色に近い。口縁の一部を欠く他は完形で出土した。

C類(920～925)　小さな底部から胴部が大きく開く器形で、口縁端部は外反する。底部に穿孔するものがある。法量により、CI類(920～924)、CII類(925)に分けられる。920は胴部に痕跡的な小さな把手を貼付け、底部に焼成後に穿孔を行なう。底部の一部に黒斑がある。923の底部には、焼成前の穿孔がある。925は完形で出土し、胴部に小孔があるが、これは意図的なものかは不明。

D類(912～915・917～919)　胴部がやや内弯しながら開く器形で、底部は丸底に近い。口縁端部は丸みを帯びる。法量により、DI類(914・915)、DII類(912・913)、DIII類(917～919)に分けられる。914には底部に焼成前の穿孔があるが、他には穿孔した例はない。913・914はナデ調整を省略し、全面不調整のままである。913は完形品に復原できる。DIII類は直径4cm程度の小型品で、全面不調整であり、外面には指頭圧痕が顕著に残る。3点ともに完形で出土し、918は歪みが著しい。

ヨコナデの省略

E類(907・916)　A～D類以外のものを一括した。907は半球形の胴部に水平に外反する口縁部を付す器形。底部に穿孔はない。916は墨書人面土器のI類に似た器形だが、頸部へのナデ調整の加え方や、頸部の屈曲の度合がやや異なる。完形品で出土し、墨書はない。外面には指頭圧痕が顕著に残る。

c　竈(941～944)

小型模造土器では最も多く、107点出土した。うち105点がSD6400出土である。941のみ完形で出土し、完形品に復せるものも図示した4点のみである。これらは、実用の竈を忠実に模したものである。口径約8cm、器高約11cmの大型品(942・944)と、口径約7cm、器高約9cmの中型品(941・943)、口径約5cmで器高約4cmの小型品がある。なお、口径約20cmのものも出土しているが、これには煤が付着しており、小型模造土器というよりは、実用品の小型のものであろう。胴部外面は不調整で、粘土紐の継目を残し、口縁部は幅の狭いヨコナデで調整し、胴部内面に粗いヨコナデを加える。廂はすべて貼付けで、丁寧なナデ調整を行なう。廂部の断面は曲率を持つが、941では右側面と左側面では曲率が逆となる。基部下端と焚口は削りで調整する。941の焚口は2回に分けて削り取ったもので、右上隅部は直角の面をなし、左上隅部は丸みを帯びる。また、944の基部左下隅部には墨書人面土器と同様な成形の際の台の痕跡がわずかに残る。これらのことから、竈の製作技法が復原でき、その点に関しては後に考察する。

製作技法

d　食器・壺(932～940)

9点出土し、土師器(932・933)と須恵器(934～940)がある。須恵器は、SD6400から出土したものは938の1点のみで、他は西側溝以外の出土である。

西側溝以外の出土

932～934は高杯。932・933は土師器で、脚部から杯部の一部にかけての破片。脚柱部は面取りをせず、裾はあまり開かない。脚柱部は心棒成形で、裾部内面との境に稜を持つ。杯部内面のみをヨコナデし、他は不調整である。934は須恵器で、脚部のみ残存する。杯部と脚部は別に成形したものを接合しており、脚柱部にロクロ目が残る。SD6471上層出土。

935は蓋で、完形品で出土した。短い口縁部が鋭く下方に突出し、宝珠形のつまみを持つ。壺A蓋を模したものであろう。頂部には軽いロクロ削りを施し、全面に降灰が見られる。SD6472出土。936・937はIL42区の遺物包含層出土の壺K。936は底部と胴部が半分程度残存する。全面ロクロナデで調整し、内外面の一部に自然釉が降着する。937は口頸部を欠く他は完形で、頸部は意識的に打ち割った可能性がある。胴部外面をロクロ削りで調整する。肩部には緑色の自然釉が降着する。938は壺D。底部はヘラ切り不調整で、胴部外面にロクロ削りを施し、他はロクロナデで調整する。肩部に降灰が見られる。939はSD6472出土の壺H。口縁の一部を欠く他は、完形で出土した。胴部外面のみにロクロ削りを施す。高台は貼付けによるもので、全面にわずかに降灰が見られる。940はIL44区の遺物包含層出土の壺M。全面ロクロナデで調整し、肩部には降灰が見られる。頸部は意識的に打ち割ったものであろう。

頸部打欠き

iii　土　　馬(Pl. 43・44, Ph. 59～61)

164点出土した。そのうち123点がSD6400の出土であり、次いでSD6471・6472にやや多く認められる。それ以外では坪内の土坑、溝、柱穴、包含層などで、SE6657の枠内からも1点出土している。ほとんどが破片で出土し、全形がわかる資料は少ない。完形品で出土したものは、小型のものに3点あるだけである。SD6400出土のもの以外は、保存状況が不良である。土馬の類別と層位は対応しないため、類別ごとに説明することとし、出土地点、層位は別表3に記した。

出土遺構

I類(945)　頸部に比べ頭部が小さく、背に粘土をつまみ出して表現する鞍を持つ。尾は下方に垂れ下がる。前肢、後肢の側面への開きは小さく、正面形が逆U字形を呈する。

945は他の例に比べて長胴で、顔、脚を欠くが、類例から、顔が小さく、脚も短いと思われる。7世紀末から8世紀初頭のものであろう。

II類(946・947・959)　顔の側面形が大きく彎曲し、下顎と頸部を明瞭に区別する。頸部はやや短く、尾は下降する。背には強いナデにより鞍を表現する。前肢、後肢の開きが大きくなり、正面形は逆V字形となる。製作手法は、まず棒状の粘土で胴部と尾部を作り、それに別に成形した四肢と頸部を接合する。その後、たずなと顔を貼付け、全面にナデ調整を加えるとともに鞍を表現し、竹管の刺突で目を表す。この手法は、基本的にI類～IV類にかけて採用される。

定型化

946は頭部から頸部、胴部にかけての破片。背にナデにより鞍を表現する。口は平坦な面をなすが、刻みはない。947は左後脚と尾の一部の破片。959は頭部と頸部の破片。顔、頸部の形態から、II類に含めた。

III類(948～955)　II類に近い形態を取るが、全体に大型になり、頸部と四肢も長くなる。尾はほぼ水平に延びて先端部が上を向く。背にはナデにより鞍を表現するものとしないものとがある。土馬としては、最も発達し、洗練された形態である。

鞍の表現

SD6400からは、III類の土馬が最も多く出土した。完形品に復せるものはないが、全体の形状を比較的良く知ることができる。949～952は背にナデによる鞍の表現を持つが、953～955にはない。955はヘラ状の工具による刻みで口を表現する。

953・954は最も残りの良いもので、953は左後脚と尾部先端、954は左前脚と胴部の一部を欠く他は完形である。この2点の土馬は、双子とでも称せるほど、形態と大きさが酷似している。製作手法の点でも、顔の側面に強い指頭圧痕が残ることや、顔の前面は型を当てながらのナデによって整形したために同じ断面形をし、工具痕が筋になって付いていること(Ph. 28)、両前脚の分岐部を縦にナデることなど細部にわたっても一致しており、おそらく同一工人が同じ時に作ったものと考えられる。出土地点、層位もIN10区の暗灰砂層と同一であり、ここからは同形、同大の土馬の破片がもう1個体分出土しており、計3個体あったことが知られる。これらの土馬は、一括して入手した人物が同時に投棄した可能性が高い。

双子の土馬

IV類(956)　III類に比べて小型化し、頸部、四肢が短くなる。背に鞍は表現しなくなり、尾は斜め上方に反り上がる。

956の手綱は、頭部の粘土板と一体にして貼付けている。この土馬の製作手法はやや特殊で、頭部、頸部、前脚部の前半部と胴部、後脚部、尾部の後半部とに分け、それぞれ脚部を1本の棒状にしたものを折り曲げて2本の脚部を成形し、それを貼合わせるという手順をとる。

V類(957・958)　製作手法がIV類までとは大きく変化する。粘土板から直接頸部、尾部、四肢をつまみ出した後に中央で折り返し、腹部から尾部にかけて折り返した面をナデ調整する。そのため、胴部の断面形は腹部の下面がへこむ形となる。尾は上方に反り上がるが、偏平で平面が三角形となり、側面形で前肢、後肢のなす角は、IV類までの逆U字形から逆V字形に変わる。

製作手法の変化

957は右前脚、左後脚を欠く他は完形。頭頂部が上方に長く立ち上がる。958は全面に比較的丁寧なナデ調整を施す。そのため、頸部や尾部は稜を持つ形でやや角張る。

VI類(960・961・988)　V類よりさらに小型化し、全体の調整も粗雑になる。尾は上方に反り上がるが、横断面形はV類とは異なり、円形である。

960は左後脚を欠く以外は完形、961は完形品で出土した。この2点も、大きさを除けばIII類の953・954と同様に形態、製作手法ともに酷似しており、出土地点もほぼ同じである。988は七条条間北小路南側溝SD6471出土。顔と右の前・後脚を欠き、保存も不良であるが、たずなの表現が認められる。

VII類(962～964)　最も小型化し、退化した形態を示すもの。四肢、尾は短くつまみ出すのみで、顔は粘土を貼付けて作り、竹管で目を表現する。全体にナデ調整は省略する。

平安時代

963は右前脚の先端を欠く以外は完形、964は完形品で出土した。ともに顔は粘土板を貼付けて成形し、顔の前面は平坦な面をなす。たずなの表現はない。962は胴後半部を欠く。頭部は小さな粘土板を貼付けて成形し、大きさの割には太い竹管の刺突により目を表現する。脚は偏平で、おそらく前脚、後脚一体に成形したものを貼付けたと思われる。土馬としては、最も退化した形態である。数ケ所に、爪の痕跡がある。

J　墨書・刻書土器(Pl. 45～47，Ph.62～64)

西側溝 SD6400を中心に、坪内の井戸、包含層などから約100点が出土した。記載方法は墨書が主体であるが、刻書も少量あり、両者を組み合わせたものも見られる。記載内容は、人名、土器の内容物、習書など多岐にわたるが、坪の性格を示すような内容は見受けられない。これらの器種、釈文、出土遺構、地点、層位などについては別表 4 に記した。　記載内容

160～180・424～432・434～447は SD6400出土のもの。160は土師器杯 AI で、底部内面に習書があり、一部を硯として使用している。底部外面には記号を記す。425は人名、427は土器の用途を記したものである。163は土師器皿 AI で、内面に「夜」を刻書で記す。434は須恵器杯 BII 蓋。頂部外面に「神明膏」と墨書し、内容物を示している。神明膏とは薬の名前で、『医心方』によると数種類の薬草や苦酒と猪の脂肪を調合するものという。眼病や中風に効果があるとされている[22]。180は実用品の竈。437は須恵器甕の胴部破片を用いたもので、内面に数字を習書した後、猿面硯として使用している。　神明膏　猿面硯

116は SE6657出土の土師器杯 CI で、底部外面に「大」を墨書し、その周囲を刻書で囲む。411・418・433は「元」を墨書したもの。SD6400からも「元」と記した土器(170・171)が出土しており、全て同筆ではないものの、出土点数が多いことが一つの特徴である。

1）奈文研『平城宮報告VII』1976、『平城宮報告 XI』1982、『平城宮報告 XIII』1991
2）奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘報告』1995
3）京都市『史料京都の歴史 2　考古』1983
4）富山県教育委員会『小杉流通業務団地内遺跡群第 6 次緊急発掘調査概要』1987
5）五泉市教育委員会『山崎須恵窯跡緊急発掘調査報告書』1981
6）岐阜市教育委員会『老洞古窯址群発掘調査報告書』1981
7）秋本真澄「伊豆長岡町花坂島橋窯址発掘調査報告」『駿豆の遺跡研究(2)』1976など。
8）西弘海「丸底の土器・平底の土器」『土器様式の成立とその背景』1987
9）後藤健一「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』1989
10）奈文研『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989
11）奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』1984
12）奈文研『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980、奈文研『東紀寺遺跡』1994
13）奈文研『平城宮報告VI』1975
14）奈文研『西隆寺発掘調査報告』1993
15）奈文研『薬師寺発掘調査報告』1987
16）森内秀造・永井信弘「播磨とその周辺の須恵器」『古代の土器研究2』1993
17）硯の産地や年代に関しては、楢崎彰一氏のご教示を得た。
18）京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第56冊 1994
19）奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』1984
20）奈文研『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976
21）奈良市教委『奈良市概要 昭和59年度』1985
22）立木修氏の教示による(丹波康頼『医心方』巻 3 、巻 5　984)。

3　木製品・漆塗製品

今回の調査では、道路側溝、井戸、木棺墓から計1,142点にのぼる木製品・漆塗製品が出土した。それらの遺構別集計は別表2に示した。以下遺構別に代表的な遺物について報告する。木製品の分類・型式は原則として『木器集成図録　近畿古代篇』(奈良国立文化財研究所『史料』第27冊　1985)に準じる。また、樹種の記載のないものはヒノキであり、樹種が不明のものはすべて広葉樹である。

A　東一坊大路西側溝出土木製品(Pl. 48～52, Ph. 65～68)

東一坊大路西側溝からは、1,130点の木製品が出土したが、その大半は板状品・棒状品である。ここでは遺存状態の良好な農工具、祭祀具等の71点について報告する。

i　農 工 具(Pl. 48—13, Ph. 67—3・4・6～8・10～13)

楔(1・2)　材を斧頭状に加工した楔は4点出土した。1は横幅が広く、全面を削りで丁寧に加工する。縦長5.7 cm、横幅7.1 cm、厚1.7 cm。ツゲ。褐色粗砂層出土。2は割材の先端を削り、斧頭状に作る。長さ10.2 cm、幅2.3 cm。厚1.1 cm。暗灰砂層出土。

工具柄(3～5)　工具柄は、装着孔断面が方形あるいは杏仁形で鑿などに用いられたと思われるものが2点、刀子の柄が3点出土した。3は心持材を断面楕円形の筒状に成形し、木口に断面杏仁形の装着孔をあける。工具の茎を一回り大きな木製の中子に挿入し、さらにそれごと柄の装着孔に挿入する。長さ8.4 cm、断面径3.2×2.8 cm。アカガシ亜属。暗灰砂層出土。4・5は刀子柄。4は鉄製刀子を装着した状態で出土した。細い心持材を利用した断面円形の円筒状の柄で、焼込みにより装着する。柄は柄頭から約6 cm分が残る。刀子は全体が屈曲するが、全長約19 cmに復原できる。柄径1.3 cm。刀子身幅1.2 cm、厚さ0.4 cm。樹種不明。灰色砂質粘土層出土。5は断面楕円形。焼込みで装着する。現存長7.1 cm、径1.3×1.1 cm。樹種不明。灰色粗砂層出土。

箆(6～8)　身と柄から成る匙状を呈するが、身が狭く食事用とは考えられないものを工具の箆とした。6は身が長く、先端は剣先状。長さ13.7 cm、身幅1.2 cm、厚さ0.4 cm。暗灰砂層出土。7は全体が細長いS字状を呈し、細長い身の先端は剣先状にする。長さ14.6 cm、幅1.3 cm、厚さ0.6 cm。褐色粗砂層出土。8は身を刀身状に作る。長さ19.7 cm、幅1.3 cm、厚0.6 cm。暗灰粘土層出土。

木釘(9)　角棒の先端を尖らせた木釘。頭部は特に加工してはいない。長さ8.6 cm、幅0.9 cm、厚さ0.7 cm。褐色粗砂層出土。

漆刷毛(10・11)　板状の柄元に漆が付着した平刷毛が2点出土した。10は板目材から棒状の握りと板状の柄元を作り出し、柄元に木口面の長辺と平行する割目を入れる。そこに毛をはさみ、糸を巻いて留める。柄元の先端に漆が付着し、毛と糸が一部遺存する。握り端を欠損する。現存長17.9 cm、幅1.8 cm、厚さ0.6 cm。暗灰砂層出土。11は柾目材から板状の握りと柄元を作り出す。柄元から割りさいて同形品を2枚作り、その間に毛をはさみ、紐などで巻いて留めたら

しい。柄元の両側に2ケ所ずつV字状の切り欠きをいれる。握りは先端に向け徐々に細く作る。内面は割面のままだが、握り端部のみ内面にも削りを施す。柄元内面に毛が遺存する。長さ22.0 cm、幅1.9 cm、厚さ0.5 cm。褐色粗砂層出土。

木槌(12)　組合せ式木槌の頭部。心持材を円筒形に成形し、側面に柄を挿入する方形孔をあける。孔には柄の一部が遺存する。長さ13.6 cm、径7.7×6.8 cm。ヤブツバキ。暗灰砂層出土。

横槌(13)　円柱状の身と棒状の柄から成る横槌は2点出土した。13は心持材から削り出す。長さ33.7 cm、径4.4×3.8 cm。サカキ。褐色粗砂層出土。

ii　紡 織 具(Pl. 48, Ph. 67—15・16)

糸巻枠木(14)　棒を断面蒲鉾状に整形し、両端は腹側を斜めに削り細くする。腹面は中央を浅く刳り込み、横木を挿し込む円形の枘孔を2ケ所あける。長さ26.9 cm、幅1.3 cm、厚さ1.7 cm。褐色粗砂層出土。

糸巻横木(15・16)　枠木を4本持つA形式の糸巻の横木が3点出土した。板材の両端を棒状に削り、幅広の中央部に相欠きの仕口を施し、軸孔をあける。15は完形。2ケ所に鼠刃錐でつけた円形の痕跡が残る。製作中に穿孔位置を変えたものか。長さ9.2 cm、幅1.7 cm、厚さ0.8 cm。褐色粗砂層出土。16は仕口の裏の平坦面に「大二両一分」の墨書がある。仕口部分で折損する。長さ10.1 cm、幅2.3cm、厚さ0.9 cm。暗灰砂層出土。　墨　　書

iii　食 事 具(Pl. 49, Ph. 65—17～19)

匙(17～20)　棒状の柄を持つ匙が3点、板状の柄を持つ匙が6点出土した。17・18は棒状の柄を持つ。17は狭小の身の先縁を直線に作る。先縁の両面は、片面を大きく、逆面を小さく斜めに面取りをする。柄頭は四角錐状に面取りをする。長さ17.0 cm、幅1.4 cm、厚さ0.8 cm。褐色粗砂層出土。18は身の先縁が半円状。柄頭はやや幅広になり山形を呈する。加工は荒く、部分的に割面が残る。身の片側縁を欠損する。長さ17.8 cm、現存身幅2.6 cm、厚さ0.4 cm。19・20は板状の柄をもつ。19は身の先縁が直線状を呈する。柄頭を欠損する。現存長14.0 cm、幅2.4 cm、厚さ0.3 cm。ツガ。木屑層出土。20は身の先縁が半円状を呈し、柄を短く作る。加工は荒く、割面が残る。身の片側縁を欠損する。長さ7.0 cm、厚さ0.4 cm。現存身幅2.6 cm。暗灰砂層出土。

この他に、板状の匙を大型にした形状の杓子の破片2点が出土した。

iv　容　　器(Pl. 49, Ph. 65—21・23・27)

挽物蓋(21)　黒漆塗りの半球状蓋小片1点、白木蓋が1点出土した。21はロクロ整形の白木で、小型容器の蓋。平坦な頂部と直立する低い口縁部からなる。内・外面ともにロクロ目が残るが、外面のロクロ目は荒い。約1/4が残る。縦木取り。推定径8.3 cm、器高1.3 cm。木屑層出土。

挽物皿(22)　白木の高台を持たない浅い皿が2点出土した。22は内面と口縁部外面にロクロ目が残る。底面には割面が残り、ロクロ整形していない。ロクロ爪痕が3ケ所残る。約1/3が残存する。横木取り。径16.0 cm。器高0.8 cm。暗灰粘土層出土。

曲物容器(23～26)　円形の柾目の底板に、薄い柾目板を円筒状に丸めた側板を結合した曲物容

器は、完形品が1点、側板片が9点(別個体)、底板が10点出土した。23は側板内面には不均等に、縦・斜平行線のケビキを施す。側板の綴じは1列。綴じの上部を欠損するが、おそらく4段綴じであろう。底部に、1列外2段綴じのたがをはめ、あわせて木釘で底板に結合する。木釘は6ケ所に打っている。径18.5 cm、器高11.2 cm。青灰砂質土層出土。24〜26は、いずれも柾目材を用いた円形底板。24は片面が加工が荒い。周縁を若干欠損する。側面に木釘孔が2ケ所残る。釘孔の位置から見て、さらに1ケ所存在したと思われる。径12.6 cm、厚さ0.6 cm。褐色粗砂層出土。25は周縁の約1/4を欠損する。釘孔は2ケ所残り、24と同様に3ケ所で結合したらしい。径15.5 cm、厚さ0.6 cm。暗灰砂層出土。26は約半分を欠損する。木釘孔は現状で2ケ所に残る。片面に放射状の刃傷が残り、中心に穿孔がある。蓋として使用されたものか。復原径10.4 cm、厚さ0.4 cm。褐色粗砂層出土。

蓋板(27)　円形の蓋板。中央に2ケ所、つまみ用の紐孔をあける。周縁は削りで斜めに面取りをする。周縁部に2つ1組の穿孔が数ケ所あり、一部には樺皮も遺存しているので、樺皮結合曲物の底板を転用したことがわかる。周縁を若干欠損する。径17.9 cm、厚さ0.9 cm。褐色粗砂層出土。

転用蓋板

v　祭祀具(Pl. 50•51—48•49, Ph. 65—31〜33•36•38•43•46, 66—34•35•39•40•48•49)

正面全身人形(28〜35)　板材を切り取り人の正面全身を表したもの。腕•足の表現を持つA型式と足を表現しないC型式がある。頸部の型式には、両側縁の二等辺三角形の切り欠きで表現するIと上辺の長い三角形の切り欠きで表現するIIがある。足の型式には長三角形の切り込みによるa、コ字形に切り込みを入れ折り取るbがある。全体がわかるものではAIa型式が2点、AIb型式が2点、AIIa型式が3点、C型式が2点ある。顔や胴に墨描きのあるものは9点ある。28は比較的大型のもの。浅い切り込みで手を作り、両側縁の二等辺三角形状の切り欠きで頸部を表現するAI型式。頭部は三角形。下半身を欠損する。現存長17.1 cm、幅4.0 cm、厚さ0.6 cm。暗灰砂層出土。29はAIb型式。頭部は三角形に作る。顔の半分と片足を欠損する。長さ20.5 cm、幅2.5 cm、厚さ0.4 cm。木屑層出土。30・31は両側縁の斜めの切り込みで手を表現し、足は長三角形に切り込んで作るAIa型式。30は頭部が台形。両足の端部を欠損する。現存長10.8 cm、幅1.8 cm、厚さ0.2 cm。暗灰砂層出土。31は顔全体が楕円形を呈する。顔を墨描きする。右肩部を欠損する。長さ12.9 cm、幅2.7 cm、厚さ0.2 cm。褐色粗砂層出土。32はAIIb型式。頭部が三角形。片足の端部を欠損する。長さ15.8 cm、幅2.2 cm、厚さ0.2 cm。暗灰砂層出土。33はAIIa型式。頭部は半円形。片側縁•足を欠損する。長さ17.4 cm、現存幅2.1 cm、厚さ0.3 cm。34・35は足を表現しないC型式。下端はともに剣先状に作る。34は頸部の切り欠きは二等辺三角形状。頭部は三角形。下端を若干欠損する。顔を墨描きする。現存長8.8 cm、幅2.0 cm、厚さ0.3 cm。スギ。暗灰砂層出土。35は頸部の切り欠きが上側が長い。両側縁に斜めに切り込みを入れ、手を表現する。頭部は台形。右肩を欠損する。顔を墨描きする。長さ8.4 cm、幅1.9 cm、厚さ0.3 cm。スギ。暗灰砂層出土。この34・35は共伴して出土しており、形態・表現も類似するので、同じ製作者によるものである可能性が高い。

対の人形

立体人形(36)　断面楕円形の棒状の材に人の表現を施したもの。材の端部近くに、周囲から刻みを入れ頸部を表現し、頭部に顔を刻む。頭頂部は正面から斜めに削り、細くする。被りものの

表現か。手足の表現は無い。長さ19.0 cm、径1.1×0.9 cm。木屑層出土。

弓形(37)　心持材の端部を細くして弭を表現し、中央部分は断面蒲鉾形に削る。片端は欠損しているが、形状からみて弓の形代と考える。現存長21.9 cm、幅1.2 cm、厚さ1.2 cm。マユミ。暗灰粘土層出土。

刀形(38)　柄と刀身を表現したA型式の刀形が1点、切先のみ遺存したものが3点出土した。切先部分だけでは刀子形との区別が難しいが、比較的大型のものを刀形とした。38は割面を残す板材を切って、刀の柄と刀身を表現する。柄頭は円頭状。切先部を欠損する。現存長20.5 cm、幅2.6 cm、厚さ0.4 cm。暗灰砂層出土。

矛形(39・40)　同形品2点が共伴して出土した。割面を残す板を切り、矛先を削りで尖らせ、片面に直線・波状線を墨描きする。39は長23.5 cm、幅1.6 cm、厚さ0.3 cm。スギ。40は長さ24.8 cm、幅1.6 cm、厚さ0.4 cm。スギ。ともに暗灰砂層出土。　墨描文様

刀子形(41・42)　4点出土した。41は棒状の割材を用い、切先と刃・背の一部を削りで整形する。長さ16.6 cm、幅1.9 cm、厚さ1.2 cm。暗灰砂層出土。42は板材から成形する。切先部分は片面を削って刃状に作る。長さ16.9 cm、幅1.3 cm、厚さ0.5 cm。スギ。褐色粗砂層出土。

斎串(43・44)　型式の判明するものはすべて、細板の上端を圭頭状、下端を剣先状に作るC型式。側縁に切り込みを持たないCI型式が1点。両側縁に1ケ所ずつ切り込みを持つCIII型式が5点出土した。43はCIII型式。長さ17.7 cm、幅2.1 cm、厚さ0.2 cm。暗灰砂層出土。44はCI型式。側縁下部を浅く刳り込んでいる。片側縁を欠損する。長さ15.3 cm、現存幅1.5 cm、厚さ0.3 cm。褐色粗砂層出土。

陽物(45)　2点出土した。45は断面偏円形の棒材の片端部を削りで亀頭状に加工する。他端部付近には、溝をめぐらせる。長さ10.2 cm、幅1.5 cm、厚さ1.2 cm。褐色粗砂層出土。

不明形代(46)　薄板を切り形代にしたと思われるものが4点出土した。46は薄板の両端を花弁状に成形し、一端に方形孔をあける。一方の端部付近を欠損する。長さ13.7 cm、幅2.9 cm、厚さ0.3 cm。

琴柱形(47)　薄板を切り取り、琴柱形に作る。片側の脚部を欠損する。縦高2.4 cm、現存幅6.4 cm、厚さ0.2 cm。

琴形(48・49)　共鳴槽を持つ琴の形代。同形品2点が近接して出土した。このような形状をした琴は、従来知られていなかったものである。共鳴槽は底板と側板を組み合わせて作る。底板の両端付近で槽の内面に横に切れ目を入れ折り曲げ、細長い台形の側板を側縁に木釘で留め、舟形にする。底部には2ケ所穿孔を施す。表板は、細板の一方の端部に5ケ所の切り込みを入れ琴尾を作り、琴頭付近に弦孔を5個あける。48は厚さ0.4 cm、1枚の習書木簡から底板と表板を切り出す。表・底板ともに墨書が残り、表板右長側縁の墨付きが底板の「道」字につながる。槽の外面には、前面に円文を横に2つ、両側板に鋸歯状文を墨描きする。長さ25.0 cm、幅3.7 cm、高さ1.6 cm。表・底板の厚さ0.4 cm、両側板の厚さ0.3 cm。スギ。49も表板・底板に習書木簡を利用する。48と共通する文字が見られ、やはり同筆・同一材を用いた可能性が高い。48と同様に、槽前面に円文、側板に鋸歯状文を墨描きする。側板・底板の破損が大きい。復原長25.4 cm、幅3.8 cm、復原高1.7 cm。表板の厚さ0.4 cm、底板・両側板の厚さ0.3 cm。スギ。ともに褐色粗砂層出土。　対の琴形

vi　服 飾 具(Pl. 51—50～56，Ph. 66—52・55・57～59，68—50・51)

一本歯の下駄

下駄(50・51)　50は一本歯の下駄。小判形の台と扇形に大きく開く歯を一木で作る。鼻緒孔は焼火箸であける。前壺は中央やや左よりに位置する。木取りは台上面が木表になる。歯の下部と台の後部を欠損し、部分的に火を受けている。台が小型で使用の痕跡も無いので、実用品とは考えにくい。現存長9.0 cm、台幅5.5 cm、現存高11.1 cm、歯現存幅11.9 cm。ムクロジ。灰色粘土層出土。51は、台は細長く前後縁が半円状を呈し、2本の歯を削り出す。木取りは、材の木表を台上面にする。鼻緒孔は刃物であける。前壺は中央やや左よりに位置し、前歯を若干彫り込む。後壺は後歯の前にあく。両歯ともよくすり減り、後歯は若干痕跡が残るのみである。右前部を欠損する。現存長19.5 cm、幅7.2 cm、高1.8 cm。ケヤキ。暗灰砂層出土。

留針(52～56)　被り物を留める木針。52は頭部を板状、身部を棒状に作るB型式。身の先端を斜めに削って尖らせる。部分的に割り面が残る。長さ16.3 cm、幅1.5 cm、厚さ0.8 cm。暗灰砂層出土。53～55は頭部に加工を加えず、先端が剣先状のC1型式。53は全体が細板状。長さ13.5 cm、幅1.1 cm、厚さ0.3 cm。54は角棒状の材を用い全体がやや湾曲する。長さ12.8 cm、幅0.8 cm、厚さ0.6 cm。暗灰砂層出土。55は、頭部付近がS字状に湾曲する。長さ20.1 cm、幅1.0 cm、厚さ0.6 cm。暗灰砂層出土。56は両端を尖らせるD型式。片端を若干欠損する。長さ17.0 cm、幅1.1 cm、厚さ0.8 cm。暗灰砂層出土。

横櫛(57～59)　出土した19点は、いずれも全体が長方形を呈するA型式。肩部が残るものは、肩の角張るAI型式が1点、肩に丸味のあるAII型式が6点ある。57はAI型式。断片であるが、1 cm中に9枚の歯を挽きだしている。現存幅3.9 cm、高さ5.0 cm、厚さ0.9 cm。イスノキ。褐色粗砂層出土。58・59はAII型式。58は小型品。2 cm中に20枚の歯を挽きだす。現存幅3.3 cm、高さ2.7 cm、厚さ0.4 cm。イスノキ。褐色粗砂層出土。59は大型品。3 cm中に26枚の歯を挽きだす。現存幅13.5 cm、高さ5.0 cm、厚さ1.0 cm。モッコク。褐色粗砂層出土。

この他に檜扇の小片2点が出土した。

vii　そ の 他(Pl. 51—60，52，Ph. 68—60)

「道」字木印

木印(60)　印面は方形で、「道」字を反転させずに陽刻する。捺印すると左文字となる。鈕は四角錐状で端部付近に円孔が貫通する。印面の一角が欠ける。印面幅3.7×3.5 cm、高さ3.8 cm。ツゲ。暗灰砂層出土。

組継ぎ部材(61・62)　長方形板の両短辺に、別材と直角に交互に組み合うように方形の切り欠きを入れ枘を作り出した組継ぎの部材が2点出土した。いずれも片長側縁を欠損しており、何枚継ぎであったかは不明。61は長辺に別材と上下にちきり留めするための台形の切り欠きが3ケ所にある。また、長辺に沿って7ケ所に径約0.3 cmの穿孔があるが、その用途は不明。長さ80.8 cm、現存幅12.4 cm、厚さ1.6 cm。スギ。暗灰粘土層出土。62は片側の木口に木釘が残り、組み合わせた後、組手の外側から木釘留めにしたらしい。長辺に沿って3ケ所に身部径約0.5 cmの木釘が残り、長辺側面にも釘孔が2ケ所ある。周縁に段を作り出した底板にはめ、外・下面から木釘で留めたものか。それとは別に4ケ所に身部径約0.3 cmの木釘が残り、うち3つは長辺に直交する形で並ぶ。用途は不明。横幅46.8 cm、現存高8.2 cm、厚さ1.3 cm。スギ。暗灰粘

土層出土。

不明品(63～66)　63は長方形の板目材の隅を斜めに落とし、中央に方形孔をあける。周縁は荒く削る。部材の一部か。長さ14.2 cm、幅7.0 cm、厚さ3.2 cm。アカガシ亜属。褐色粗砂層出土。64は長方形の板材の一方の端部付近に、刀子状の工具で荒く方形孔をあける。側縁を若干欠損する。長さ32.2 cm、幅4.4 cm、厚さ0.6 cm。褐色粗砂層出土。65は断面蒲鉾状の棒材の両端を圭頭状に作り、平坦面を3ケ所浅く刳りこむ。長さ23.3 cm、幅1.3 cm、厚さ0.8 cm。カヤ。褐色粗砂層出土。66は平たい棒材の片側端部付近に両側縁からV字状の切り欠きをいれ、さらに両側縁を対称に浅く刳り込む。形状から人形の一種の可能性もある。切り欠き付近を若干欠損する。長さ19.0 cm、幅1.7 cm、厚さ1.2 cm。

樺巻棒(67)　粗く加工した棒数本を樺皮で束ねたものが3点出土した。67は径0.5～0.6 cmの棒を3本、樺皮で束ねる。樺皮の一方の端部は1本の棒に切れ目をいれ差し留めている。綴じ部分の周辺のみが残存する。現存長12.8 cm。褐色粗砂層出土。

細板(68～71)　板状品は大量に出土したが、小片・破損品がほとんどである。ここでは完形の小型品を報告する。68～70は削りで整形した長方形の細板。部分的に割面が残る。68は若干湾曲する。長さ17.0 cm、幅1.4 cm、厚さ0.4 cm。暗灰粘土層出土。69は片端の隅を1ケ所切り落とす。径19.4 cm、幅1.0 cm。厚さ0.4 cm。暗灰砂層出土。70は両側縁を斜めに面取りし、断面八角形にする。長さ25.0 cm、幅1.8 cm、厚さ0.6 cm。木屑層出土。71は細板の両端を側縁から斜めに切り落とし圭頭状にする。加工は比較的丁寧。1ケ所に割目がはいる。長さ22.6 cm、幅0.8 cm、厚さ0.4 cm。スギ。暗灰砂層出土。

棒(72)　棒状品も大量に出土したが大半は破損品である。ここでは完形の1点を報告する。削りで整形した断面方形の棒。両端を両面から斜めに面取りする。全体が若干反る。長さ25.1 cm、幅1.0 cm、厚さ0.9 cm。暗灰砂層出土。

B　六条大路北側溝出土木製品(Pl. 53—73～75)

木製品は4点のみの出土である。ここでは、曲物底板小片を除く3点について報告する。

留針(73)　全体が扁平で身部を剣先状に作るCⅠ型式。加工は丁寧である。全体が若干湾曲する。身部端を欠損する。現存長16.4 cm、幅1.3 cm、厚さ0.6 cm。

尖端棒(74)　角棒の一端を削りで尖らせたもの。縦に割れている。長さ17.2 cm、幅0.7 cm、厚さ0.4 cm。

正面全身人形(75)　頭部のみ残存。頭頂部は三角形。頸部の切り欠きは上側が長いII型式。髭を持つ人面を墨描きしている。現存長5.4 cm、現存幅1.8 cm、厚さ0.3 cm。

C　井戸SE6657出土木製品(Pl. 53—76～79，Ph. 67—76，68—79)

不明品を含め木製品は7点出土した。ここでは、保存状態が良好な4点について報告する。

錐柄(76)　細い心持材を円筒形に加工し、刀子状の工具で一方の端部に装着孔をあけ、そこに鉄製の錐身を挿入する。錐身は先端を欠くが装着した状態で出土した。柄は中央付近で2つに折れている。長さ15.8 cm、径1.4 cm。樹種不明。井戸枠内最下層出土。

栓(77)　細い心持材を円筒形に削り、さらに一方の端部を周囲から削って細くする。先端部を欠

損する。現存長7.6 cm、径1.6 cm。樹種不明。井戸枠内最下層出土。

斎串(78)　上端が圭頭状で、上端付近の両側縁に1ケ所ずつ切り込みを入れるC III型式。長さ11.5 cm、幅1.3 cm、厚さ0.2 cm。井戸枠内出土。

立体鳥形(79)　鳥がとまっている姿を削りだした小型品。腹部に下からあけられた小孔があり、細い棒を挿入して用いたと思われる。長さ4.6 cm、幅1.2 cm、厚さ1.4 cm。樹種不明。井戸枠内最下層出土。

棒に挿した立体鳥形

D　遺構に関連する木製品(Pl. 53—80•81，Ph. 68—80•81)

曲物埋設遺構SX6422と井戸SE6657では、木製品を転用している。SX6422では径50 cm と径35 cm の曲物を上下に重ね、SE6657では曲物と組合わせの箱を井戸枠に転用していた。ここでは遺存状態の良いSE6657の2点について報告する。

曲物(80)　曲物の底板を取り、井戸の下から2段目に用いていた。側板には厚さ約0.8 cm の板目材を用い、内面全体に約1 cm 間隔で、刀子により縦のケビキを施す。部分的に斜行のケビキもおこなう。側板の綴合わせは2ケ所。外側端部で2列前内6段後内7段綴じ、内側の端部付近で1列内6段綴じにする。下部外側に、厚さ約0.3 cm の細い柾目材を1列外3段綴じにしたたがをはめ、ともに底板に木釘で留める。木釘孔は26ケ所あり、うち2つ近接するものが6ケ所ある。側板の下端から23〜24 cm の高さに木釘孔らしい7ケ所の穿孔が均等に配され、部分的にたがの痕跡があり、本来側板中央にも、たがをはめていたらしい。側板の内面下端に厚さ約3 cm の底板の痕跡が残る。底径57.6 cm、高さ38.4 cm。

箱(81)　井戸最下段に置かれていた、組合せの箱。4枚の同規模の長方形板の両短辺に方形の切り欠きを入れ枘を作りだし、組み合わせて5枚組継の側板とする。組み合わせた後、枘の部分に組手の外側から鉄釘を打って留める。向かい合う2面の側板内側に、水平に3ケ所ずつ方形の座金をおいて釘を打っており、本来は外側の向かい合う位置に持ち手がつけられていたらしい。側板の上面には、向かい合う側板のほぼ同じ位置に、方形の座金を置いて鉄釘を打っている。座金の機能は不明。下面にも同様に釘を打っているが、座金は用いていない。内・外面には各側板の両短辺の中心を通るように打った割付用の墨線が部分的に残る。一辺53.0 cm、高さ36.3 cm。

E　木棺墓SX6428出土品(Pl. 53—82•83)

平安時代前期の木棺墓SX6428には、土器、水晶玉、銭貨とともに2点の漆塗製品が副葬されていた。

挽物椀(82)　最大径12.4 cm、高さ3.6 cm で、口縁はやや外反する。素地が腐食・消失しているため、現状の最大厚は2 mm。漆膜裏面に木目の痕跡と粗い布が残っており、広葉樹を素材とした挽物を素地とし、布着せして黒漆を塗っていたことがわかる。

漆皮箱(83)　一辺16.5 cm、高さ1.5 cm の方形の漆皮箱。皮に粗い布を被せた後、黒漆を塗っている。口縁外面には幅0.5 cm の紐をつける。口縁内面は平坦である。器胎の皮が腐食・消失したため、現状の最大厚は3 mm 程度である。

4　金属製品

本調査出土の金属製品は、計169点にのぼる。内訳は、銅製品20点、鉄製品88点、鉛素材２点、銅銭59点である。小片等で原形不明なものを除いた集計はTab.５のとおりで、大半が東一坊大路西側溝SD6400からの出土である。以下では、遺存状態の良好な銅・鉄製品37点と銅銭20点について報告する。文中に出土遺構の記載がない場合はSD6400からの出土であり、SD6400出土品については、不明のものを除き出土層位を記してある。また、木柄の残存しているSD6400出土の刀子１点とSE6657出土の錐１点については、第IV章３で報告した。

A　銅製品(Pl.54—1～16，Ph.69—1～5・7～13，70—14)

銙帯金具（1～5）　SD6400から鉸具、丸鞆・巡方、鉈尾合わせて６点が出土した。１は鉸具板金具。本来は板金を２つに折り曲げ革帯端部をはさみ２ケ所で鋲留にしたものであるが、折り曲げ部分で折れて約半分を欠損する。表裏両面に鑢目が残り、周縁は斜めに面取りする。折り曲げ部には、外枠・刺金を固定するための切り込みがある。表面に漆の痕跡が残る。幅2.7cm、厚さ0.1cm、重量3.7g。２は巡方の表金具。表面と透し孔を鑢で整形する。裏面４隅に鋲足を鋳出す。表面には黒漆が部分的に残る。縦3.2cm、横3.4cm、厚さ0.2cm、重量14.6g。３は丸鞆裏金具。外面を鑢で整形し、周縁は鑢で面取り。鋲受けの小孔は３ケ所と思われる。約半分を欠損する。縦幅2.2cm、厚さ0.1cm、重量0.8g。表面にわずかに漆の痕跡が残る。４は丸鞆裏金具。表面と透し孔を鑢で整形、周縁は面取りする。鋲受けの小孔は３ケ所あり、１ケ所に鋲軸が残る。縦1.4cm、横2.3cm、厚さ0.1cm、重量1.1g。５は鉈尾表金具。先端の縁部を甲高につくる。裏面に３ケ所、高さ約0.3cmの鋲足を鋳出す。外面は鑢で整形し、周縁は面取りする。長さ2.3cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm、重量5.2g。

黒漆塗りの帯金具

Tab.5　遺構別出土金属製品集計表

遺構	SD6400	SE6657	SK6528	SX6428	その他
銅銙帯金具	6				
銅釘状金具	1				
銅責金具			1		
素文銅鏡	3				
佐波理容器	1				
佐波理瓔珞	2				
銅鈴	2	1			
銅人形	2				
鉄人形	15				
鉄鏃	2				
鉄刀子	17	1			1
鉄鑿	4				
鉄錐		1			
鉄鍬・鋤先	1				
鉄釘	32				4
海老錠牡金具	1				
鉄不明金具	2				
和同開珎	27				
萬年通寶	6				
神功開寶	20				
承和昌寶	1			1	
貞観永寶	1				
不明銭	1			2	

釘状金具（６）　片側に２孔をあけ

端部を曲げる。他端を尖らせる。当初曲げていたものを延ばしており、中央付近がやや波状に湾曲する。金具を再利用した釘の一種か。長4.9 cm、厚さ0.1 cm、重量1.7 g。褐色粗砂層出土。

素文小鏡（7～9）　SD6400から鋳造品2点、板金を用いたもの1点が出土した。7・8は鋳造の小鏡で、鏡縁をつくらない形式。いずれも鏡面を鋳造後に鑢で整形する。7は鏡背面を細いたがねで整形する。周縁は鑢で面取りする。径3.2 cm、鈕部高0.6 cm、厚さ0.1 cm、重量3.5 g。褐色粗砂層出土。8は鏡面・周縁を鋳造後に鑢で整形する。背面は湯だれの痕があり、全体をたがねで整形した後、鑢がけをしている。そのため、部分的にたがねの削痕も残る。径3.6 cm、鈕部高0.9 cm、厚さ0.1 cm、重量8.4 g。暗灰砂層出土。9は薄い板金を円形に切り取り、中央に小孔をあける。「凸」字状の金具を別に作り、突出部を小孔に通して留める。破損が激しく、全体が屈曲する。復原径4.2 cm、鈕部高0.4 cm、厚さ0.02 cm、重量3.7 g。

佐波理製垂飾

瓔珞（10・11）　佐波理容器の破片を切断し小孔を穿ち、垂飾としたもの。全体は緩やかに湾曲する。10は周縁を切断後に鑢で整形する。長さ3.2 cm、幅2.5 cm。厚さ0.1 cm、重量4.7 g。暗灰砂層出土。11は周縁に切断痕が残る。長さ3.2 cm、幅3.1 cm、厚さ0.1 cm、重量3.0 g。褐色粗砂層出土。

銅鈴（12・13）　SD6400から完形品2点、SE6657から破片が1点出土した。12・13はSD6400出土品。いずれも半球状の上半部と下半部からなる。上半部の下縁を若干外反させ、そこに下半部上縁を若干内湾させて被せ接合する。板状の鈕を上半部頂部の小孔に差し込み固定する。下半部には一文字の切り口を施す。ともに鉄製の丸が残る。12は高さ2.9 cm、径2.5 cm、重量9.3 g。褐色粗砂層出土。13は高さ3.8 cm、径3.1 cm、重量20.1 g。暗灰砂層出土。

銅製人形（14・15）　SD6400から2点出土した。いずれも銅の薄板を細長く切り、浅いV字形の切り込みにより、頸部・腰・足を表現する。14はほぼ完形。V字形の切り込みを両側縁に2ケ所ずつ、下端に1ケ所入れる。長さ14.2 cm、幅0.9 cm、厚さ0.03 cm、重量1.4 g。木屑層出土。15は腰の部分のみ残る。両側縁に下辺が長い三角形の切り込みを入れ腰を表現する。現存長6.4 cm、幅0.4 cm。厚さ0.04 cm、重量0.9 g。褐色粗砂層出土。

責金具(16)　全体が倒卵形を呈する鋳造の鞘責金具。外側面に螺旋状に溝を刻む。長径4.2 cm、短径2.6 cm、幅0.9 cm、厚さ0.1 cm、重量8.4 g。SK6278出土。

この他に注目すべき遺物としてSD6400出土の佐波理容器小片が1点ある。また、遺物包含層から江戸時代の小柄が1点出土した。

B　鉄製品(Pl.54—17～55—37，Ph. 69—34，70—17～33)

鉄製人形（17～21）　SD6400から15点出土した。いずれも短冊状の鉄の細板を用いる。顔面が残るものは9点あり、目・鼻・口をたがねで刻んでいる。体の表現は、浅いV字形の切り欠きで頸部・足を表現するものが1点、たがねの刻み・切り込みで腕・足を表現するものが14点ある。後者には足の残るものが8点ある。いずれも下端から縦にたがねで切り込みを入れ、左右に広げて足とする。また、後者には、縦にほぼ均等に4ケ所穿孔したものが2点ある。17は、銅人形と同様な作りのもの。しかし腰部には明確な切り込みはない。たがねで目・鼻・口を表現する。裏面には長さ約1 mmの短い刻みが両側縁に2ケ所ずつ、中央に1ケ所施されており、あるいは表現の異なる顔面なのかもしれない。長さ12.0 cm、幅1.0 cm、厚0.2 cm、重量7.0 g。

18～21はたがねの刻みで顔・腕を表現するもの。18は側縁下部から現状で斜めに左右４回ずつの連続したたがね彫りで、腕を表現する。頭端部、足を欠損する。現存長7.8 cm、幅1.4 cm、厚0.2 cm、重量3.7 g。褐色粗砂層出土。19は腕を斜め方向の刻みで表現する。足を広げた結果、左右の足が若干前後する。頭部を欠損する。現存長17.5 cm、胴部幅1.5 cm、厚0.2 cm。重量20.9 g。暗灰砂層出土。20は短い刻みで腕を表現する。足は欠損する。現存長7.0 cm、幅1.4 cm、厚0.1 cm、重量3.9 g。褐色粗砂層出土。21は穿孔を持つもの。４ケ所に円形の小孔をあけた短冊形の鉄板に顔・腕をたがねで表現し、下端はたがねで切り開き足を作る。全体がやや湾曲する。長さ10.8 cm、胴部幅1.5 cm、厚0.2 cm、重量9.4 g。褐色粗砂層出土。

鉄鏃（22・23）　SD6400から雁又式１点、方頭斧箭式２点、鏃身を欠損した長頸鏃が１点出土した。22は有茎で関篦被を持つ雁又式鉄鏃。身の股部に刃を研ぎだす。錆ぶくれが激しい。長さ13.1 cm、茎長6.8 cm、幅3.5 cm、重量22.5 g。灰色粘土層出土。23は有茎で関篦被の方頭斧箭式鉄鏃。茎端は斜めに切断している。長さ7.2 cm、茎長2.2 cm、幅2.5 cm、厚さ0.2 cm、重量7.2 g。暗灰砂層出土。

刀子（24～26）　SD6400から17点、SE6657から１点、遺物包含層から１点出土した。24は刀身の関付近には刃を研ぎださず、断面方形の鑢座を作る。刃には研ぎ減りがある。切先を欠損する。現存長12.4 cm、茎長6.9 cm、身幅1.2 cm、厚さ0.4 cm、重量15.5 g。褐色粗砂層出土。25は茎の刃側に段がつく。刃には研ぎ減りがある。全体に錆化が激しい。長さ17.5 cm、茎長7.5 cm、身幅1.3 cm、厚さ0.4 cm、重量16.5 g。褐色粗砂層出土。26は茎が背側に反る。造りが全体に薄い。刃には研ぎ減りがある。全長17.1 cm、茎長7.3 cm、身幅1.9 cm、厚さ0.2 cm、重量12.4 g。暗灰砂層出土。

鑿（27）　全体は角棒状を呈し、先端の片面を斜めに面取りし刃をつけ、他端は柄への挿入のために細くする。木柄に挿入した部分は錆化の様子が異なる。長さ9.0 cm、幅0.8 cm、厚さ0.4 cm、重量9.6 g。褐色粗砂層出土。

釘（28～33）　SD6400から32点、遺構外の包含層から４点出土した。頭部の形状で分類すると、環頭１点、円頭２点、方頭３点、折頭13点、半円頭２点があり、その他は頭部を欠損している。28は環頭釘。円環部・脚断面は偏円形を呈する。長さ4.2 cm。円環部径1.7 cm。脚部径0.5 cm、重量6.9 g。遺物包含層出土。29は円頭釘。断面方形の脚に円形の頭部がつく。脚はＳ字状に屈曲する。長さ6.2 cm、頭部径1.4 cm、脚部厚0.4 cm、重量3.2 g。褐色粗砂層出土。30は方頭釘。断面方形の脚に方形の頭部を鍛接する。長さ6.8 cm、頭部幅1.4×1.5 cm、脚部厚0.7 cm、重量8.8 g。褐色粗砂層出土。31は折頭釘。脚の上端を折り曲げ、そのまま釘頭とする。先端を若干欠損する。現存長7.4 cm、頭部幅0.8 cm、脚部厚0.5 cm。重量5.0 g。褐色粗砂層出土。32は折頭釘。脚の上端を薄くたたきのばし、折り曲げて頭部とする。脚端部は屈曲し、先端を欠損する。現存長11.0 cm、頭部幅1.6 cm、脚部厚0.7 cm、重量25.1 g。褐色粗砂層出土。33は半円頭釘。半月形の板状の頭部を脚に被せるように鍛接する。長さ9.7 cm、頭部幅2.4 cm、脚部厚0.8 cm、重量17.9 g。褐色粗砂層出土。

海老錠牡金具（34）　バネ軸を３本持つ形式で、縦に開くバネを上段に２ケ所、横に開くバネを下段に１ヶ所配する。弦受け部の端部をＬ字に折り曲げそこに弦通しの孔をあける。下段のバネは、区の下部の切り込みにはめ込み、Ｌ字状の端部を弦受け部平坦面の円孔に差し込んで留

３本のバネ軸

める。弦受部全体に漆塗り(生漆？)の痕跡が残る。長さ9.5 cm、幅1.5 cm、高さ3.2 cm、重量31.3 g。褐色粗砂層出土。

不明金具(35・36)　用途不明の金具が2点出土している。35は扇状をした鉄板の長辺の両端部の2ケ所に小孔をあけ、両側縁を折り曲げたもの。横幅4.3 cm、縦幅3.1 cm、厚0.1 cm。重量8.9 g。暗灰砂層出土。36は鉄板を円錐形に巻いて鍛接し、石突状にしたもの。端部を若干欠損する。現存長5.7 cm、径1.3 cm、厚0.1 cm。重量8.4 g。褐色粗砂層出土。

鋤鍬先(37)　木製の身にはめ込むための溝を持つ鍛造のU字形鋤鍬先。刃部を若干欠損し、片側側縁部が折れているが、本来の形状をよくとどめている。長さ24.5 cm、幅18.1 cm、刃部厚0.5 cm、溝部高1.4 cm、重量387.3 g。暗灰砂層出土。

C　銅　　銭(Ph. 71)

遺構別出土枚数はTab. 5、計測値と型式は銭種別に別表5にまとめた。型式は『平城宮報告VI』の分類に依拠している。以下では、銭種別に、SD6400出土品の中から代表的な20点について報告する。

和同開珎(1～9)　今回出土した和同開珎は、すべて「開」字の門構え上部が隷書風に開く。

新和同　1～3はもっとも通有なA型式。銭文は全体に角ばり、細字。4・5は「珎」字が他より小振りなC型式。6は背面の内郭縁が幅広いD型式。7は背面内郭縁の四隅が丸いE型式。全体に薄く、内郭穴のバリ取りも荒い。8・9は「和」字の第3画が短く全体が内郭よりになるF型式。8は表面に荒い鑢目が残る。

萬年通寶(10～12)　今回出土した萬年通寶はすべて「萬」字下部を「内」につくる。10は通有のA型式。11は背面の内郭の四隅が丸いC型式。この部分に荒い鑢目が残る。12は内郭穴にたがね痕を明瞭に残すD型式。全体に厚手で、重量も他より圧倒的に大きい。

神功開寶(13～18)　今回出土の神功開寶はすべて「功」字の旁が「刀」で、「開」字は隷書風。13は「寶」字の「貝」が小振りなD型式。14～16は「功」字の「刀」第2画が長く伸びるE型式。17・18は銭文はE型式と同様だが外郭が広めのF型式。

承和昌寶(19)　銭径により「大様」と「小様」があるが、今回の出土銭は「小様」。19は表面

小　　様　の劣化が激しく、銭文は肉眼では判然としないが、X線写真により承和昌寶と判別できた。全体がやや屈曲し、ひびが2ケ所に入る。なお、この他に木棺墓SX6428から出土した3枚の銅銭のうち1枚が承和昌寶(小様)であることを確認した。残り2枚は銭文が判読不能だが、銭径から見て承和昌寶の可能性が高い。

貞観永寶(20)　表面の劣化が激しく、銭文はX銭写真でも判然としないが、第3字がかろうじて「永」と読め、貞観永寶と判断した。

5　ガラス製品・鋳造関連遺物・石製品他

A　ガラス製品・鋳造関連遺物

i　ガラス製品関連遺物(Pl. 56—1～9，Ph. 72)

今回の調査では、東一坊大路西側溝 SD6400の奈良時代の各層から、ガラス小玉１点、ガラス小玉鋳型片５点、ガラス坩堝片６点が出土した。これらの多くは SD6400と六条大路南側溝 SD6449が合流する地点から出土したものである。なお、出土層位を記しているものは、SD6400からの出土品である。

ガラス小玉(５)　全面が風化、白濁している。直径５mm、高さ３mm、孔径2 mm。褐色粗砂層出土。

ガラス小玉鋳型(１～４)　土師質の粘土板に多数の小孔を穿ったもので、小孔の底面中央には、ガラス小玉の紐通し孔のために鉄芯を立てたと考えられる直径約１mm、深さ２mm の孔がみられる。胎土はいずれも長石粒を含み緻密である。小孔の大きさや表面の調整、形状などに差異が認められることから、複数個体のものであることがわかる。１は緩やかに弧を描く縁辺をもつ破片。小孔は直径３mm で他よりも小さく、現状で21個確認できる。配列は比較的雑然としている。裏面は布目圧痕。暗灰砂層出土。２は１とは異なり、隅丸の角部をもつ破片。表面には直径４mm の小孔13個を確認できる。表・裏面ともナデ調整を施すが、裏面はナデ調整の前に格子タタキ目を施している。褐色粗砂層出土。３・４は縁辺部の破片。３の表面には直径４mm の小孔22個を整然と配列している。隅の１個の小孔には黒色炭化物が詰まっている。裏面には布目圧痕が残る。褐色粗砂層出土。４は表面をヘラ削りした後、直径 4 mm の小孔をあける。小孔は11個確認できる。また、縁辺に並行して浅い沈線が入る。側面はヘラで切って形を整えている。裏面には布目圧痕が残る。褐色粗砂層出土。

複数個体

ガラス坩堝片(６～９)　これまでの出土例と同様、胴部から口縁にかけてわずかに内傾し、平坦な口縁端部をもつ砲弾形のものであったと推定できる。いずれも胎土は灰色を呈し、長石粒を含む。また、器壁外面には格子タタキ目がみられる。黒ないし緑色をした薄いガラス膜が内面全面と外面の一部を覆っている。底部の形や器壁の厚さの違いから、出土した坩堝片は複数の個体であることがわかる。６は口縁部の破片で厚さ1.0 cm、青灰色砂質土層出土。７も口縁部の破片で厚さ0.9 cm、褐色粗砂層出土。８は丸味をもつ底部の破片で、約40 m にわたって分散して出土した５片が接合した。厚さ1.5 cm、胴部径9.2 cm、暗灰砂層・褐色粗砂層出土。９は尖り気味の底部の破片で厚さ2.0 cm、褐色粗砂層出土。

Tab. 6　西側溝土層別出土ガラス関連遺物

	ガラス小玉	ガラス小玉鋳型	ガラス坩堝
暗　灰　砂		1	3
青灰色砂質土			1
褐 色 粗 砂	1	4	2
計	1	5	6

SD6400から出土したガラス工芸に関連する遺物は、一連の作業を示すような坩堝・鋳型・小玉といった遺物がまとまって出土した点や使用

済みの複数個体の遺物であるなどの特徴を持っている。こうした点から、これらは付近にあったガラス工房で使用されていたものが、一括してSD6400に投棄され、埋没過程で分散したと考えられよう。

ii　鋳造関連遺物(Pl. 56—10～57—15，Ph. 73)

鋳造関連遺物は、調査区南西隅などからも出土しているが、大半はSD6400から出土している。SD6400では、奈良時代前半～平安時代末の各層から、坩堝片10点、鞴羽口片32点、炉壁・壁体片109点、鉱滓69点が出土した。

坩堝(10)　椀形をした坩堝である。胎土は緻密で灰褐色を呈し、長石粒を若干含む。外面は凹凸があり、下半部には、指頭圧痕が認められる。手捏ねによるものであろう。内面から口縁外面にかけて厚く黒色の鉱滓が付着するともに、口縁外面に付着する鉱滓の下が約1.5 cm 幅で暗灰褐色に変色している。高さ4.6 cm、口縁部厚0.5 cm、底部厚0.8 cm で、復原口径は12.5 cm。暗灰砂層出土。

鞴羽口(11・12・14・15)　11は彎曲羽口。通風孔先端がやや内彎しながら、緩やかに下へ屈曲する。

彎曲羽口　長石を多く含む多孔質の胎土で、通風孔の周囲が淡橙色、周縁部が灰褐色を呈する。外表面全体に赤褐色から青紫色の鉱滓が付着し、通風孔先端では鉱滓が垂下して固まっている。鉱滓表面には粒状の銅が多数みられる。直径5.0 cm、通風孔径2.2 cm。装着角は20°前後。褐色粗砂層出土。

直線羽口　12は直線羽口。通風孔先端と胴部の径はほとんどかわらない。胴部は面取りされて、断面が多角形を呈している。胎土は長石を多く含んでいる。通風孔先端は黒褐色に変色し、所々溶融ガラス化している。直径6.0 cm、通風孔2.5 cm、装着角はほぼ水平である。暗灰砂層出土。

大形の鞴羽口　14・15は大形の鞴羽口。14は断片のため、直径は復原できないが、胎土には細かな砂粒を含む緻密な粘土を用い、通風孔周辺は灰褐色、外面は黄褐色を呈する。外面には厚さ 4 cm に及ぶ灰褐色の鉱滓が付着する。最大厚4.9 cm。SD6400上の遺物包含層出土。15は鞴羽口の先端部。外面は表面が溶融ガラス化した暗褐色の鉱滓に覆われ、内面先端は暗灰色に変色している。胎土は緻密で、比較的多量のスサを混入する。最大厚1.3 cm、通風孔径8.0 cm。暗灰砂層出土。

炉壁(13)　円筒形をした炉の側壁の破片。残存部が少ないため、大きさなどは判明しないが、極

炉の形状　めて緩い円弧を描いて内彎することから大形の炉であったと推定される。3.0 cm 前後の粘土帯を積んで構築したようで、現状では、4段の粘土帯を確認できる。胎土には長石を含む比較的緻密な粘土を用いており、スサを混入している。破面の色調は、内壁側から暗灰色、赤褐色、灰白色と変化する。内壁側には、木炭片が混じった鉱滓が一面に付着し、下に向け厚さを増し、下辺では厚さ 3 cm に達する。鞴羽口を装着するため炉壁の一部を刳り抜いた痕跡とみられる部分が残っており、内壁側は溶融ガラス化が他より進んでいる。こ

Tab. 7　西側溝鋳造関連遺物土層別出土量(g)

	羽　口	鉱　滓	炉　壁	坩　堝
灰　黄　土	79.4	49.6	626.6	
灰色粘土			223.2	
褐色粘土		110.0		
青灰細砂	200.9	1745.9		
暗灰粘土	648.4	1199.3	9630.7	
暗　灰　砂	1632.9	520.4	4879.5	204.3
木　屑　層	32.5	108.0		
褐色粗砂	401.0	718.2	810.3	38.7
ＳＸ6422	14.0			
不　　明		3.3		
計	3009.1	4454.7	16170.3	243.0

の場合、鞴羽口はほぼ水平の角度で装着されたと復原できる。暗灰砂層出土。

鋳造関連遺物も、ガラス工芸関連遺物と同様、一連の作業工程を示す遺物がまとまって出土した。SD6400から出土した炉壁の破片には、数条の粘土帯からなるものがあるほか、形状・胎土・厚さなどが類似するものが多い。さらに、針金状の鉄片を器壁表面・内部に残すものもある。これらのことから、炉は幅3～5cm前後の粘土帯を積み上げて構築したもので、補強のため、鉄線を巻き込んだり、外から巻くことを行っているようである。また、炉壁に比較的大形の羽口を水平に近い角度で装着したことも推測でき、こうした構造や外見は、いわゆる甑炉と類似する。第252次調査で出土した鉱滓33点中23点をランダムに採取して蛍光X線分析で成分分析したところ、おおむね鉄を主成分としており、15点が95～100重量%の割合で鉄が含まれていた。また、7点には鉄に次いで19～66重量%の銅が含まれていることが判明した。これからすれば、甑炉は鉄素材や不要になった鉄製品を中心とした金属製品を溶解し、鋳造に用いたものであろう。さらに、別項で取り上げたSD6400出土の砥石や鉄製品などの一部も、あるいはこうした生産活動と関連するものかもしれない。鋳造に関連していえば、銅を溶解した際に用いたと考えられる鞴羽口(11)も出土している。これは上記の甑炉に装着されたと推定される大形の直線羽口とは異なり、比較的小形の彎曲羽口である。鉄製品の鋳造とは別に、銅製品の鋳造を行う施設の存在を示していよう。

甑炉と類似

鉱滓の分析

銅製品の鋳造

このようにSD6400出土の鋳造やガラス製品と関連する遺物は、多種の生産活動を示している。このSD6400例と同様、ガラス関連遺物と鋳造関連遺物が共伴して出土した平城京右京八条一坊十三・十四坪間の条間小路側溝SD1499に面した十四坪内では、これらの作業を行った工房群が検出されいる[1]。SD6400出土の遺物もこうした複合的な工房群の存在を示す可能性はある。このことは、出土地点にもっとも近接する七条一坊十六坪内の建物群の性格を考える上でも参考になろう。しかし、道路側溝からの出土という点で、廃棄位置からの二次的移動や混入の可能性も考慮する必要もある。したがって、SD6400出土のガラス工芸・鋳造関連遺物の性格の詳細解明については、周辺地区の調査の進行を待つ必要があろう。

B　奈良・平安時代の石製品(Pl. 58, Ph. 74)

今回の調査で出土した奈良・平安時代の石製品には、砥石16点、石銙・玉・穿孔石製品各1点がある。これらのうち、砥石10点は東一坊大路西側溝SD6400から出土したが、六条大路南側溝や七条条間北小路との交差部に比較的集中している。それ以外の砥石は十六坪内外各所から出土したものである。このほか、穿孔石製品は井戸SE6561から出土し、玉は木棺墓SX6428に副葬されていたものである。

石銙(1)　黒色粘板岩製の鉈尾で、一辺を破損している。表面は平滑で光沢をもつとともに、多数の線状の研磨痕を観察できる。裏面には多くの二次的な剝離痕とやすりによる溝状の傷が残る。また、四隅には2孔一組の潜り穴があけられているが、そのうちの1組は、本来の潜り穴が破損した結果、横に新たに設けている。大形であることから平安時代のものと考えられる。長さ4.5cm、現存幅6.0cm、厚さ0.8cm。重さ41.1g。遺物包含層出土。

鉈　　尾

穿孔石製品(2)　滑石製で、半分を欠損する。ソラマメ形をした偏平な小礫に片側から直径約6mmの孔を穿ったもの。側面を研磨により仕上げている。長さ3.3cm、現存幅2.8cm、厚さ1.4

cm。重さ19.9 g。

玉(3)　水晶製。中央に直径1.5 mm、深さ3.5 mm の小孔があけられているが、貫通していない。細い棒状のものを挿入して、何らかの装飾品としたのであろうか。直径1.1 cm、重さ1.9 g。平安時代前半。

砥石(4～8)　4は方柱状のもので、小口面以外の狭長な4面がバチ形をした研磨面となっている。研磨面・小口面には深い線状痕を残している。表面には長石風化による細孔が多数認められる。長さ12 cm、幅4.3 cm、厚さ4.2 cm、重さ264 g。流紋岩製。暗灰砂層出土。5は扁平なもので、表裏両面の研磨面は幅の広い分銅形を呈す。表裏両面・小口面に多数の線状研磨痕がみられる。両側面も平滑であるが、線状の研磨痕はみられない。表面には長石風化による細孔が認められる。長さ11 cm、幅10 cm、厚さ4 cm、重さ548 g。流紋岩製。SK6507出土。6は扁平な直方体で、端部を欠損している。研磨面は1面で、研磨により緩やかに凹む。長石風化による細孔があく。長さ7.2 cm、幅4.2 cm、厚さ1.3 cm。重さ67 g。流紋岩製。六条大路出土。7は不整形な大形岩片を素材としたもので、研磨面は1面のみ。やや凹んだ研磨面には、研磨によると考えられる平行する深い線状痕跡が多数みられる。裏面は剝落が進んでいる。側面には、数ケ所、火を受けた時のような黒変部がみられる。長さ14 cm、幅15 cm、厚さ8 cm、重さ1,932 g。砂岩製。暗灰砂層出土。8は不整形な角礫を利用したもので、内彎した研磨面をもつ。研磨面は平滑で、極めて細かい線状の研磨痕が多数みられる。裏面は節理面であるが、一部に研磨痕が観察できる。長さ15.5 cm、幅8.8 cm、厚さ5.2 cm、重さ996 g。ホルンフェルス製。暗灰砂層出土。

奈良・平安時代の石製品では、石銙が注目されるであろう。石銙の存在は、平安時代にこの付近で律令官人が活動していた可能性が考えられ、長岡京遷都後の平城京の状況を知る手がかりとなるものである。比較的多数出土した砥石は、素材・形状とも平城京内でしばしば出土するものと同じである。また、その調査区内での分布も、SD6400を除くと散在した状況であり、SD6400からの出土も、他の遺物が多く出土した範囲からのものであり、特定の作業との関連等を検討するにはいたらなかった。

C　弥生時代以前の石器(Pl. 59)

調査区からは、計88点の旧石器時代から弥生時代までの石器が出土した。これらはいずれも後代の遺物包含層もしくは遺構埋土から出土した。特に記述するもの以外は、いずれもサヌカイトを素材とするものである。

角錐状石器(1)　分厚い横長剝片を素材とし、全周から粗い急角度の二次加工を施している。左側縁がやや肩を張る。旧石器時代。長さ3.5 cm、幅0.9 cm、厚さ0.7 cm、重さ2.5 g。

石鏃(2～7)　2は縄文時代晩期のいわゆる飛行機鏃。粗い加工で特徴的な形状を作り出している。長さ3.3 cm、幅1.8 cm、厚さ0.5 cm、重さ1.9 g。3は無茎凹基の小形の石鏃。縄文時代もしくは弥生時代。長さ2.5 cm、幅2.1 cm、厚さ0.3 cm、重さ1.1 g。4～7は有茎凸基の石鏃。茎部や側縁の形状に差異が見られるものの、いずれも弥生時代。4～6は上下端を欠損する。4は残存長4.5 cm、幅2.4 cm、厚さ0.9 cm、重さ6.8 g。5は残存長4.3 cm、幅2.4 cm、厚さ0.8 cm、重さ6.4 g。6は残存長5.4 cm、幅2.9 cm、厚さ0.6 cm、重さ6.7g。7は長さ7.3 cm、幅

2.1 cm、厚さ0.5 cm、重さ6.5 g。

石錐（8・9）　2点とも分厚い剝片を素材とし、両面からの加工で突出した刃部を作り出している。いずれも刃部先端を欠損する。弥生時代。8は残存長2.9 cm、幅2.1 cm、厚さ0.7 cm、重さ4.4 g。9は残存長2.7 cm、幅2.8 cm、厚さ1.0 cm、重さ7.8 g。

石匙(10)　薄い剝片を素材としている。ノッチ状を呈する緩い角度の両面加工で作りだされた摘まみ部のみが残存する。縄文時代もしくは弥生時代。残存長3.9 cm、幅5.2 cm、厚さ1.0 cm、重さ11.0 g。

楔形石器(11)　両極打法で剝離された薄い偏平な剝片を素材とし、その上下両端を緩い角度の剝離で二次加工している。弥生時代。長4.1 cm、幅5.1 cm、厚さ0.5 cm、重さ11.2 g。

スクレイパー(12～15)　いずれも弥生時代。12・13は直刃のもの。12は石刃状の縦長剝片を素材とし、両側縁に二次加工を施して直刃を形成している。13は横長剝片の下縁に緩い角度のインバースリタッチを施し、刃部を形成している。14・15は凸刃のもの。14は薄い横長剝片の下縁両面に緩い角度の二次加工を施している。15は握り拳大の礫を半裁した礫片の周縁に急角度の二次加工で刃部を形成している。12は長さ8.0 cm、幅3.7 cm、厚さ0.9 cm、重さ30.4 g。13は長さ4.8 cm、幅7.6 cm、厚さ1.3 cm、重さ39.7 g。14は長さ4.0 cm、幅6.6 cm、厚さ0.8 cm、重さ26.8 g。15は長さ4.5 cm、幅5.5 cm、厚さ2.1 cm、重さ61.7 g。

石庖丁(16・17)　いずれも弥生時代。16は板状の流紋岩を素材とした大形のもの。半分を欠損する。刃部縁に細かな剝離が連続している。背側に穿孔が施されていたが、大きく破損する。長さ5.8 cm、残存幅9.7 cm、厚さ0.9 cm、重さ69.9 g。17は板状の緑色片岩を素材とし小形のもの。16よりも磨滅が進む。片面の刃部縁に細かい線状の使用痕が認められる。背側に2ケ所穿孔していたが、1ケ所は破損する。長さ4.3 cm、残存幅4.5 cm、厚さ0.6 cm、重さ19.8 g。

石斧(18)　砂岩製の磨製石斧。弥生時代。両面から刃部を研ぎ出している。刃部にみられる欠損には再研磨が施されている。基部には打撃による潰れが目立つ。一方の面には、斜方向の線状痕が多数みられるとともに、柄との摩擦のためであろうか、中央が緩やかに窪む。長さ14.9 cm、幅6.3 cm、厚さ2.6 cm、重さ447.3 g。

今回の調査地では、遺構を検出することはなかったが、各種の石器が出土し、付近に弥生時代以前各期の遺跡があったことを想定できる。石器の中でも相対的に出土量の多かった弥生時代についていえば、本調査地の北約1 kmにある左京五条一坊十六坪の下層では、方形周溝墓を検出している[2)]。また、旧石器時代の遺物が出土したことは、いわゆる「地山」に旧石器の包含層があることを示唆するものであり、平城京域における今後の調査においても、注意していく必要があろう。

旧石器包含層の存在

1）奈文研『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989

2）奈良市教育委員会の御教示による。

6 木　簡

出土状況　木簡は、六条大路北側溝と東一坊大路西側溝から出土した。このうち六条大路北側溝からは3点が出土したのみであるが、同溝の堆積は6層に分かれ、最下層(灰褐砂層)から1点、その上の層(灰黒粘土層)から2点出土した。

一方、東一坊大路西側溝からは総計864点(うち削屑506点)と大量に出土した。同溝の堆積層は大きくは7層に分けられ、下3層が奈良時代、上4層が奈良時代末以降に属す。木簡は奈良時代に属する下から第一層(褐色粗砂層)・第二層(木屑層)と、奈良時代後半から12世紀までの遺物を含む第四層(暗灰砂層)から出土した。各地点・土層ごとの出土点数は別表8のとおりである。これによれば、木簡の出土状況は他の遺物と同様な傾向を示していることがわかる。すなわち六条大路南側溝との合流点付近、橋SX6420付近、十六坪の南北2分点付近、七条条間北小路との交差点付近に分布の山がある。

次に木簡に記された年紀には、天平2年(76・85)、天平20年(35)、天平勝宝5年(69)、天平宝字7年(8)、天平宝字(67)、宝亀3年(75)、(宝)亀7年(112)があり、奈良時代を通じてこの溝が機能し、また木簡が廃棄されていたことがわかる(各土層と紀年木簡の関係については、第III章2A参照)。

釈文については巻末に掲載した。以下、主なものについて解説を加える。

2は上下を欠損しているが、讃岐国寒川郡からの荷札であろう。3は短冊形ではなく、左辺は文字のある部分を斜めに切り、下半部も左右両側から斜めに切って細くするという二次的整形を受けている。しかし文章は1行目から2行目へとそのまま続いており、内容は解の事書き部分だけが書かれているものである。したがって長さは本来の法量を留めているとみられるが、文書木簡としては長さは12cm強と極端に短いから、正文ではなく習書ないしは落書であろう。

7の「松本宅」については、天平勝宝4年4月の「写経所請経文」(『大日本古文書(編年)』12巻264頁)、および、かつて平城宮南面西門(若犬養門)前の二条大路北側溝から出土した木簡[1]に見える「松本宮」との関連の有無が注意されよう。前者は造東大寺司写経所が花厳経1部80巻を松本宮から奉請したというもので、経典を所蔵していたことがわかる。

題籤軸　8は軸の頭部を板状に作りだした題籤軸である。表裏ともおそらく同じ内容の記載で、裏面1行目下端は損傷によって文字の有無が不明だが、「月」が書かれていたであろう。「諸司」から文書が届けられ、それらを貼り継いで保管するような部署で用いられたものである。11の日下はおそらく「案主」であろう。13は下端は折れ、左辺は割れている。右辺も上半部のみ原形をとどめ、下半部は割れているが、その境目の側面から孔が横に貫通している。これは考課・

考課・成選　成選に関わる木簡に特有の型式(6015型式)である。そうした木簡には官職・位階・姓名・年齢・本貫地が記されており、いわば官人の個人カードとなっているが、この木簡も表は位階と姓名部分が残り、裏は天地逆方向に叙位に関する記載がされているようである。考課のために上日等を記した6015型式木簡は、家令・帳内・資人等についても作成されたため、宮内で見つかっているだけでなく、長屋王家木簡中に含まれる[2]ように、京内でも出土している。

革　筥　18「革筥」の類例としては、『延喜式』に「納位記料革筥」(内記式)、鎮魂祭の日に用い「御

服案」に盛る「革筥一合」(中宮式)、5月5日の節会で宴会に文人を召す際に用いた「内宴儲料革筥」(内蔵式)、「諸司年料供進」の品目中の内匠寮が進める「革筥廿合」(同前)などがある。なお内匠寮が出す年料革筥20合の内訳は衾筥4合・衣筥6合・剣緒筥1合・巾筥2合・唾巾筥2合・櫛筥4合・刀子筥1合で、その作製に牛皮10張と鹿皮10張を用いる(内匠式)。

21は門の警備にあたる「列」の歴名を記したものである。これだけではどこの門かは不明であるが、それを探る手がかりとして、「中大伴門」の門号は注目される。弘仁陰陽寮式土牛条逸文(『年中行事秘抄』所引)には、大寒の日の前夜、宮城諸門に立てる土牛童子像の色を規定しているが、その中に大伴門の名が見える。そして『延喜式』の同条文と比較するとき、それが朱雀門に相当することは明白である。『続日本紀』天平6年2月癸巳朔条や平城宮跡出土木簡[3]などから、朱雀門の名が既に平城宮で用いられていたことは明らかであるが、一方で大伴門の名も使われていたことは、宮内出土の木簡にその名が見えることからわかる[4]。恐らく公的には朱雀門と呼んだが、古来の大伴門という呼称も並行して用いられていたのであろう。　中大伴門

したがって「中大伴門」は朱雀門に関連のある門号であり、平城宮内にあった門と考えるのがもっとも穏当であろう。そうすると「中」から想起されるのが、『続日本紀』天平神護2年5月戊午条に見える「中壬生門」である。それは大納言吉備真備が柱を中壬生門の西に立て、官司に抑屈された百姓にその下で訴えさせるようにしたという記事である。壬生門は先の『弘仁式』『延喜式』等によれば、二条大路に面する宮の南面東門である。それに対し「中壬生門」については、大きく2つに説が分かれている。すなわち「中」は宮内の門のランクである中門の意であるというのが1つ。宮内の門は内裏に近い方から、内裏の門である内門(養老令では閤門。宮衛令集解宮閤門条所引古記説参照)、その1つ外側の中門(宮門)、最外郭で宮の外回りの門である外門(宮城門)という3つのランクに分かれる。そこで中壬生門は壬生門の1つ内側の中門、すなわち第二次朝堂院の南にある朝集殿院南門にあてる[5]というものである。もう一つは、「訴えを直接聞くという本条の政策の趣旨からいえば、宮内よりはむしろ人々の往来の多い壬生門の前のほうが穏当であろう」として、中壬生門は壬生門と同じであると解する説[6]である。この場合は「中」の意味は、奈良時代後半には壬生門の北に朝堂院・大極殿院・内裏が並ぶことから、平城宮の中でいわば中心軸的な位置を占めるということになろうか。

しかしここでもう1つ「中＋宮城門」というタイプの門号の存在が明らかになると、それを宮城門と同じ門と解するよりは、その1つ内側の門にあてるほうが妥当ではなかろうか。そうであるなら「中大伴門」は朱雀門の北側の門ということになる。平城宮ではそこにはいわゆる第一次朝堂院があり、それには朝集殿院が付属しないから、朝堂院の南門が「中大伴門」であろう。このように朱雀門の北に「中大伴門」があったとすると、平安宮では朱雀門の北側にあたる朝集殿院南門が、「応天門」と呼ばれるようになることも、理解しやすいと思われる。この理解に大過なければ、中門(宮門)の警護にあたったのは、衛門府と衛士府であったから(宮衛令集解宮閤門条所引古記説)、「中大伴門」を守る「三龍列」は門部ないしは衛士であろう。もう1つ同じ木簡に見える「曽雅門」については、門号からは蘇我氏との関連が想起されるかもしれないが、他に所見なくその位置は不詳である。しかし「中大伴門」と並記されているから、やはり中門(宮門)にあたるのであろう。

25「府生」は衛府の官人で、神亀5年8月に設置された中衛府に6人置かれた(『続日本紀』同　衛　　府

月甲午(子の誤りか)条)のを初見に、同年11月には「衛府府生者兵部省補」との制が出されている(『同上』同月壬寅条)。26の「佐」は衛府の次官に使われる用字である。官位令によると、衛門佐と左右衛士佐は従5位下相当、左右兵衛佐は正6位下相当で、木簡の「正六位上」とはいずれも1階ずれる。その他令外の授刀衛では正5位上(『同上』天平宝字3年12月甲午条)であり、やはり合わない。また『続日本紀』(宮内庁書陵部所蔵谷森本)天平宝字3年7月丁丑条には「内薬佐」とある。これは内薬司の次官であり、木簡で「佐」の前が「司」とあるのに適合的であるかのようであるが、これは職員令によれば「内薬佑」とすべきもので、かつ相当位階は従7位下であるから、この木簡と関わらない。したがっていずれの官司に属するのかは不明である。

32と33とは同一木簡から生じた削屑の可能性が高い。35木簡の日付である天平20年12月18日は、『続日本紀』では同月で唯一記事のある日(甲寅条)で、それは「遣使鎮祭佐保山陵。度僧尼各一千」というものである。ただし木簡との関係は不明。48(紀伊国)名草郡上神郷は『和名抄』に見えない。51「取松」とは松明用の松の準備にかかわるのであろうか。54は盤・大盤の数量を記し、合点を付けてチェックしている。裏はそれとは関係なく、この木簡が不要になった段階で九九を書いたものである。57河内国大県郡の「家原」は、『和名抄』にはない。しかし旧紀伊医王寺所蔵「大般若経」の奥書に「家原邑」「家原里」と出てくる(『大日本古文書(編年文書)』25巻172～174頁)。そこには家原寺があり、天平勝宝8歳2月に孝謙天皇が行幸し、同寺をはじめ近辺にあった6寺で礼仏したことで知られる(『続日本紀』同月己酉条)。

61は銭の付札であるが、600文という額から判断すると、衛士ないし仕丁の養銭であろう。養銭は68にも見える。63三衆郷は上総国畔蒜郡に属する。『延喜式』主計上によれば、上総国の中男作物の品目中に熟麻が含まれる。66(越前国)敦賀郡返駅は、『延喜式』兵部省では鹿蒜駅と表記され、松原駅と淑羅駅の間、現在の福井県今庄町帰付近に比定される。同駅については、かつて平城宮第104次調査で東院地区西辺の南北溝SD3236から、「返駅子戸主大神部宿奈戸同菽太調三斗」という荷札が出土している[7]。なお平安時代には鹿蒜山は歌枕となり、「ゆきめぐりたれもみやこにかへる山いつはたときくほどのはるけさ」(『紫式部集』)のように、「帰る」と掛けた歌が多く詠まれた。

敦賀郡返駅

70は『和名抄』に見える讃岐国大内郡引田郷であろう。72伊与国浮穴郡井門郷も『和名抄』に見える。73の同国伊与郡桜井村は他に所見ないが、「伊与国越智郡朝倉村物部家公戸白米伍斗」(『長岡京木簡2』872号木簡)のように、『和名抄』に郷として見えるものを、村と表記する例が伊与にはある。74同国宇和郡海部郷も『和名抄』に見えない。75に見える大宰府の「交易油」に関連しては、『延喜式』民部下の交易雑物条に大宰府の貢納品の一つとして「雑油卅石」が見える。86「貽鮨」の「貽」は「貽貝」のことであろうか。それなら二条大路木簡中に「・若狭国遠敷郡木津郷御贄貽貝鮓一塡／・「木津里」」という類例[8]がある。

琴　　形

88から91までは、ほぼ同じ大きさの2点分の琴形に書かれたものである。88と90が上板で、上端に5つの小孔、下端には5カ所の切り込みがあり、糸をかけるようになっているが、実際にかけた痕跡はない。89と91は底板である。ともに下端に目玉状の丸を墨で描いた部分があるが(91は左半部が欠損)、上端のその部分は残存していない。本来の形は、底板の上下両端の部分に横に切れ目を入れて折り曲げ、前後の側板として斜めに立ち上げていたとみられる。また、これらとは別に逆台形の左右の側板があり、鋸歯状模様を墨線で描いている。それらを組み合

わせると、ちょうど船のような形になる。そうすると89・91下端の２つの丸は、船の舳先部分に描かれていることになるが、『吉備大臣入唐絵巻』に見える吉備真備の乗る遣唐使船の舳先には、眼が描かれている。この２つの丸がそうしたものであるとすると、底板の文字も外側に書かれたことになるが、上板の文字が外側になっていたのかどうかはわからない。なお89の墨円を描いた部分の裏側下端には、墨が塗られている。また底板の89には２ケ所、91には１ケ所、小さい孔がある。そこに棒を刺すというように、琴形の使用方法に関わるものである可能性もあろう。

89・90・91の墨書は習書であるが、「道」「郡」「隠」などの共通する字があるから、もとは同材であったとみてよい。また88は大和国忍海郡の名を書き、他の習書とは趣を異にするが、その「郡」字の右、材の右端にある墨付きは、89の3字目の「道」のしんにょうの左下に続くものとみられる。したがってすべて一括史料とみてよい。88を含めていずれの文字も、琴形の板の中に上下はおさまっている。左右もほぼおさまっているが、先ほど指摘したことからすると、少なくとも88・89は字を書いてから板を切ったとみられる。しかしその場合も、板の中での文字の位置からすると、切ることを意識して字を書いたのではなかろうか。あるいは既に切り整えた板を並べて、文字を書いたという可能性もないことはないが、その理由は考えにくい。また祭祀に用いる琴形に文字、それも多くは習書を記した意味はわからない。あるいは使用後に板を並べて書いた可能性も考えられようが、祭祀に用いた物の扱いとしては疑問が残る。なお88の郡名の意味ともども、今後の課題である。

封緘木簡

92は下半部の左右を削って羽子板の柄状に細くはしていないが、上下に切り込みがあり、かつ「封」字はちょうど上の切り込みの位置に書かれ、字の中間に墨が横に途切れている部分があることから判断して、これが封緘木簡であることは明らかである。裏面を調整していないのは、他の封緘木簡と共通している。

千　字　文

93異筆部分は「千字文　勅員外散騎侍郎周興嗣次韻」の習書。108「寒来暑往秋」はやはり『千字文』の一節「寒来暑往、秋収冬蔵」部分を記したものであろう。112は「宝亀七年」であろう。また116から121までは材を横向きに置いて書いているが、同一木簡から生じた削屑とみられる。３桁の数字と「夕」字が見えることからすると、上日数を書き上げたものであろう。こうした上日数は考課のためのものであろうが、113「六考中」は成選にかかわるものである。13の叙位に関する木簡との関連で注目されるところである。

1）奈文研『平城木簡概報』15 1982
2）奈文研『平城京木簡一』1995、同『平城宮木簡五』1996
3）奈文研『平城木簡概報』29 1994
4）奈文研　註３)前掲書
5）直木孝次郎「平城宮諸門の一考察」『日本書紀研究』15 1987
6）岩波新日本古典文学大系『続日本紀』４ 1995の本条に対する補注
7）奈文研『平城木簡概報』12 1978
8）奈文研『平城木簡概報』22 1990

7　動物遺存体

A　出土した動物遺存体

出土した動物遺存体の大部分は、東一坊大路西側溝 SD6400から出土したものである。その他に、七条条間北小路の北側溝 SD6472の底にさらに土坑を穿ち、ウマを複数頭収めた遺構 SX6530や、SE6432、SE6657などの井戸枠内埋土からの出土例が存在する。

動物種　同定できた動物遺存体はすべて哺乳類のもので、破片数734点を数え、種類と部位の判明した内訳はウマ202点、ウシ54点、ヒト９点、イヌ７点、イノシシ６点、ニホンジカ３点、原形はうかがうことが出来るが哺乳類として以外に判別のつかない破片400点の、６種、計681点で、その他は原形の判明しない細片であった。SD6400からの出土例のように、それぞれの個体が原形を保って出土する例が少ない場合は、古生物学、考古学で一般に用いられる最小個体数推定法[1)]は有効でないため、破片数を持ってそれぞれの種類ごとの量比とする。

SD6400から出土した動物遺存体は、１個体がまとまって出土した例は無く、総て散乱状態であった。ただし同一個体のものと思われる複数部位が同じ小地区、層位から出土する例はある。これは今回出土した動物遺存体が散乱状態ながらも、さほど移動することもなくこの溝に堆積したことを示している。また、細片となったものも含めて、骨に含まれるリン分が地下水に含まれる鉄分と化合して藍鉄鉱(ビビアナイト)を析出しているものが多い。これは、溝の堆積状態が常に水漬けの状態にあったことを示している。一般に平城京の溝の堆積土壌は、地下水を含んだ粒度の粗い砂層、礫層と粘土層が互層になり酸化状態になっていることが多い。そのような堆積環境では、リン酸とカルシウムを主成分とする骨のような有機遺物の保存に適さないため、大きく残りやす

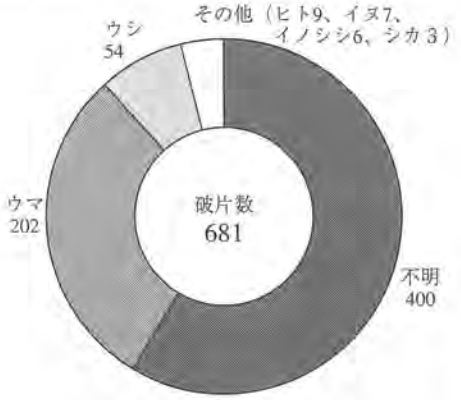


Fig. 24　動物遺存体破片割合

Tab. 8　遺構別出土動物遺存体

遺構番号	層　位	種　名	出土点数
SD6400	各層	イノシシ	5
		ウシ	53
		ウマ	187
		シカ	3
		イヌ	7
		ヒト	9
		不明	380
SD6411	青灰粘質土	不明	1
SD6449	暗灰砂	ウシ	1
		ウマ	3
		不明	4
	暗灰粘土	不明	1
	灰黄シルト	ウマ	4
		不明	3
SD6451	灰黒粘土	不明	2
SD6471	暗灰粘土	イノシシ	1
		ウマ	4
		不明	2
	底凹み	ウマ	2
		不明	2
SD6472	上層	ウマ	1
SE6432	井戸枠内	不明	1
SE6657	井戸枠内埋土	不明	1
SX6530		ウマ	1*
		不明	3
総点数			681

※他に一括して取り上げた頭部を含む資料があり、現在保存処理中である。

いウシやウマなどの大型哺乳類の骨だけが残って、その他の小型哺乳類、魚類、両生類などは腐朽して残らないことが従来からの傾向としてうかがえる。例外的に井戸枠内に堆積した肌理の細かな暗灰粘土(還元状態にある粘土)層などでは、小さなカエルの骨まで残る場合がある[2]。このような傾向は、平城京全体でうかがうことができる。ただし、平城京内でも平城宮付近や京の北方や西方の標高が高く地下水位の低い場所では、埋没している溝も埋土は乾燥していたことが多いようで、そうした地域の大路の側溝や土坑などでは、骨の痕跡すら残されないことが多い[3]。

Tab. 9　出土種名表

霊長目	PRIMATES		偶蹄目	ARTIODACTYLA	
	ヒト科	HOMONIDAE		イノシシ科	SUIDAE
		ヒト　*Homo sapiens*			イノシシ　*Sus scrofa*
食肉目	CARNIVORA			シカ科	CERVIDAE
	イヌ科	CANIDAE			ニホンジカ　*Cervus nippon*
		イヌ　*Canis familiaris*		ウシ科	BOVIDAE
奇蹄目	PERISSODACTYLA				ウシ　*Bos tauras*
	ウマ科	EQUIDAE			
		ウマ　*Equus caballus*			

B　種ごとの概要

ヒト　上腕骨が1点、大腿骨が7点、脛骨が1点で、大きく頑丈な骨に限られる。いずれも成人のものであろう。従来より平城京の東堀河でも他の動物骨に混じって人骨が出土している[4]、平城京でも、このような牛馬骨の中に人骨が含まれるような光景がごく普通にあったようである。いずれも表面の腐食が著しく、刃物傷や犬のかじり痕は観察できなかった。　成人の骨

イヌ　下顎骨3点、後臼歯2点、上腕骨2点が出土している。いずれも成獣の大きさである。平城京右京八条一坊十三・十四坪の調査[5]でも、イヌの下顎骨が3点出土していたように、ウシ

Tab. 10　種類・部位別動物遺存体出土量

	頭蓋骨		上顎骨		上顎臼歯		下顎骨		下顎臼歯		犬　歯		椎　骨		肩甲骨		上腕骨		橈　骨	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
イ　ヌ							2	1	2								1	1		
イノシシ								2									3	1		
ウ　シ				1	5	3	2		4								2	3	3	1
ウ　マ			2		28	37	4	5	26	30		1			1		6	4	2	2
シ　カ																				
ヒ　ト																				

	尺　骨		中手骨		寛　骨		大腿骨		脛　骨		中足骨		踵　骨		距　骨		足根骨		基節骨	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
イ　ヌ																				
イノシシ																				
ウ　シ		1	4	2		2	4	1	2	3	3	1	1		1					
ウ　マ			1	3	2	3		2	3	4	3	3								4
シ　カ											1						1	1		
ヒ　ト							2	3		1										

やウマの骨に混ざって、イヌの骨の中でも特に頑丈な下顎骨とその臼歯が少数出土する。イヌの骨はウシやウマに比べてたいへん小さく薄いため、平城京のような土壌では残らない場合が多いと考えられ、実際にはかなりのイヌの骨が存在したであろう[6]。

イノシシ　下顎骨2点、上腕骨4点が出土している。これが野生のイノシシか、家畜化されたブタかは、本資料からはいずれとも判別しがたい。『続日本紀』天平4(732)年の「放生」の記事に、「詔して畿内の百姓の私に畜いたる猪四十頭を和買いて、山野に放ち、性命を遂げ令む。」とあり、畿内には飼われていた猪がいたことがわかる。豚という漢字は近世に使われだした国字であるので、「猪」という1字では野猪とも家猪とも決しがたいが、弥生時代のブタの存在が明らかになるにつれて、この猪もブタであった可能性はある。

ウマ　本資料中、最多の出土を示す。ウマの部分骨のなかでも、上下の臼歯の出土がもっとも多い。これは、歯のエナメル質が骨の中でももっとも残りやすいからである。出土した臼歯にはエナメル高のほとんどなくなった老齢のものは少なく、壮齢のものが多く見られる。

ウシ　平安時代の絵巻物に描かれているように、古代では、貴族の乗り物として牛車が普及しており、貴族の屋敷内でウシが飼われていたようであるが(『左京記』の長和5(1016)年の記事ほか)、これまでの調査でも、平城京からのウシの出土は多くない。本地域からは主として臼歯の出土が多かった。本出土例も、古代都城ではウマが多く、ウシが少ないという、これまでの平城京や長岡京などでの所見と合致する。これが京内で使役されていたウマとウシの比率をそのまま示すものか、あるいは、斃牛馬処理の過程の違いでこのような差を生じたのかという2つの可能性を挙げることができるが、現時点では前者の可能性のほうが高いと考えられる。

C　考　　察

i　平城京における斃牛馬処理

今回の調査で出土した動物遺存体は、大部分がSD6400の埋土から出土したもので、埋土の地下水位が高いことが動物遺存体の保存を助けた。しかし、平城京でも、宮の周辺から五条あたりまでの側溝では、地下水位の高いところでも、動物遺存体の出土例が比較的少ないという傾向がある。ところが、平城京の東市、西市より下の条坊大路、条坊間路の側溝からは、地下水位の高いこともあって動物遺存体が出土する例が多い。特に、平城京左京九条三坊の東堀河[7]や、西市の東にあたる平城京右京八条一坊の西一坊坊間路の西側溝SD920[8]からは大量の動物遺存体が出土している。さらに西一坊坊間路西側溝からは、動物遺存体とともに金属製品、鋳造関連遺物が多く出土し、律令的生産体制のもとでさまざまな生産にかかわる工房が集まっていたと考えられる。

斃牛馬処理

生きている間は乗用、牽引、負荷などに供されたウマ、ウシも、死して後もさらに無駄無く利用されたことが『養老令』「厩牧令」の規定からわかる。そこには、「凡そ官の馬牛死なば、各皮、脳、角、膽を収れ。若し牛黄を得ば、別に進れ。」とあり、『令義解』には「脳とは、馬の脳也。膽とは牛の膽也。」と注釈がふられる。さらに「凡そ公事に因りて、官私の馬牛に乗りて理を以て死を致せしむ。証見分者。並に徴ること免せ。其れ皮宍は、所在官司出し売れ。価を送りて本司に納れよ。若し、非理に死失せば、徴り陪てしめよ。」ともある。このことから、

牛馬が死んだ場合、牛馬ともその皮と宍をとり、馬については脳、牛については膽(胆嚢)、角をとって納め、地方においては、牛馬とも皮と宍を売りさばき、代金を国庫に納めたことがわかる。このような史料から、古代の斃牛馬の利用法として、最後に解体した残滓(骨)の廃棄を伴ったことがわかり、本調査において出土した牛馬骨は、その結果生じた廃材であったこともわかる。このように斃牛馬、および屠殺された牛馬の再利用の資源として、牛馬の皮、肉、馬の脳、牛の角と胆嚢、牛黄があげられるが、それぞれの製品としての用途についての考察は十分にはなされておらず[9]、今後の研究を必要とする。

肉の利用については、『日本書紀』天武4(675)年には、四月朔日より九月卅日まで「牛馬犬猿鶏の宍を食らうこと莫れ」という詔が出され、続けてわざわざその期間以外は禁止しないと断っていることから、人間の食用としての肉の利用が考えられる。また、『続日本紀』天平13(741)年には、「馬・牛は人に代わり勤労して人を養う。ここに因して先に明制有りて屠殺を許さず。今聞くに、國郡は未だ禁止すること能はず。百姓は猶屠殺すること有り。」とあり、地方においても牛馬の屠殺が行われていたことを示している。この屠殺は、後に述べるように農業、干害に対処するための牛馬を犠牲にする可能性もあるが、儀式の一環としての肉食も含めて、古代には、現在、われわれが考えられている以上に肉食が広く行われていたことを充分想定できるであろう。　肉　食

イヌの骨が散乱状態で出土することについては、前述の『日本書紀』天武4(676)年の記事に犬が含まれ、イヌの肉も食べられていた可能性が高いと考える。縄文時代のイヌは埋葬されている例が少なくないうえ、散乱状態での出土例も刃物傷を持つものは少なく、原則的に食べられていなかったのであろう。ところが弥生時代になるとイヌの埋葬例は激減し、溝に投げ捨てられたり、食べられたりした例が増加する。これまで古墳時代から平安時代末までの良好な動物遺存体を出土する遺跡が少なかったが、広島県福山市草戸千軒町遺跡の鎌倉時代から室町時代にかけての層からは、明らかに食用とされたイヌの骨が多数出土している[10]。また、イヌの毛皮は防寒着にもよく、近年まで東北地方でも利用されていたという[11]。SD6400から出土したイヌも、皮を剝がれて肉もまた賞味された可能性が高い。　イ　ヌ

皮の利用については、『延喜式』に牛、馬、鹿についての別々の利用法が記されている。それは、牛や馬の皮は適度な堅さと耐久性を要求され、単純なもみ洗いと乾燥や油なめしで履き物や腰帯に加工され、さらに鹿皮はしなやかな手触り、弾力が要求されるため、馬の脳漿を使った脳漿なめしによってなめされるという。原皮のそれぞれの特性と用途に応じた加工法が確立されていたことがわかる。　皮　革

ii　土坑SX6530出土のウマ

七条条間北小路の南側溝SD6471の底に、さらに長さ6m、幅1.5m、深さ0.5mの長円形土坑SX6530を掘り、中に最少個体数3頭のウマの頭蓋骨および四肢骨の骨を収めた遺構がある。土坑の深さ、大きさからみて3頭の全身を収めるには規模が小さすぎるため、首を切った頭部と胴部の一部を収めた可能性が高い。骨質の大部分は腐朽し、頭蓋骨の骨質部は完全に消失して上下顎骨のエナメル質のみが土中に原位置で直立して残る。大きさはいずれも成獣のようである。四肢骨は腐食が著しく、部位のはっきりするものもほどんどなかった。　殺　馬

『日本書紀』「皇極紀」における殺牛馬の記事が干害への対処法として見られる。『続日本紀』延暦10年、『日本紀略』延暦20年にも、各地で牛を殺して神を祭ることを禁止すると見られる記事が存在する。また、『日本霊異記』の中巻第五説話、「漢の神の祟りに依り、牛七頭を殺し祭り、また放生の善を修して、もちて現に善悪の報いを得し縁。」にも見られるように、民間を基盤とした漢神信仰に対して、国家が仏教を拠り所に宗教の統制を行おうとする意図がうかがえる。また、前述の『続日本紀』天平13年には、国家として馬牛の屠殺を禁止している。このような度重なる禁止令にもかかわらず、古代、中世を通じて実際にさまざまな機会に殺牛殺馬が行われたことが発掘の成果からわかりつつある[12]。本例もこうした動物祭祀の遺構の一つとして捉えることができよう。長岡京でも左京二条二坊、二条条間大路・東二坊大路交差点付近での不明遺構SX16207では、雌のウマ1体の首を切断して、頭部を胴部の傍らに配置し、横たえた跡が検出されている。その周辺からは墨書人面土器が11点が出土し、そのウマの直下からは木製の鳴鏑が出土している[13]。このような例は、地方だけでなく古代都城の中心に近い場所においても、国家が禁止する殺牛馬信仰にともなう儀礼が執り行われたことを示しているだろう。

1）部位別、左右別に出土頻度を数えて、最大の出土頻度を示す数値を最少個体数とする。たとえば、下顎骨右2、左4、上腕骨右3、左1であれば、下顎骨左の4点を最少個体数と数えて、残りは、その4個体の中に含まれると仮定する方法。

2）松井　章「動物遺存体」『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989 pp. 135—137
3）たとえば松井　章「平城京左京三条二坊・二条二坊出土の動物遺存体」『平城京左京三条二坊・二条二坊発掘報告』1995 pp. 573—576
4）松井　章「動物遺存体」『平城京東堀河—左京九条三坊の発掘調査』1983 p. 32
5）松井　章　註2）前掲書
6）松井　章　註2）前掲書　pp. 54—56
7）松井　章　註4）前掲書　p. 32
8）松井　章「動物遺存体」『平城京右京九条一坊十一坪発掘調査報告書』1984 pp. 54—56
9）松井　章「養老厩牧令の考古学的考察—斃れ馬牛の処理をめぐって—」『信濃』Vol. 39、No. 4 1987 pp. 231—256
10）松井　章「草戸千軒町遺跡第36次調査出土の動物遺存体」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告II—北部地域南半部の調査』1994 pp. 343—364
11）大林太良「日本における狩猟の系譜」『狩猟と漁労』1992 p. 267
12）松井　章「古代・中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第61集 1995 pp. 55—71
13）清水みき・渡辺　博「長岡京左京第162次（7 ANEKD地区）～左京二条二坊、二条条間大路・東二坊大路交差点～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集 1989 pp. 187—233

第Ⅴ章　自然科学による分析

4　金属製品・ガラス関連遺物の分析調査

東一坊大路西側溝から出土した金属器、ガラス坩堝について、X線透過撮影およびX線CTによる構造調査と蛍光X線分析法による材質の調査などを実施したので、その結果を報告する。

A　分析資料と観察

出土した金属器は保存状態がきわめて良好で、その表面は黒色の数100 μmのごく薄いさびで覆われている程度で、腐蝕が進んでいる状態ではなかった。内部は黒色さびで保護された状態で、還元状態で埋蔵されていたことが推定された。

ガラス坩堝は坩堝内部に緑色ガラスの薄い層が全面に残存しており、風化変質により黒色に変質した部分が多く、また一部では虹彩(銀化)や白色に粉状を呈する部分もみられる。

ガラス小玉を製作するための鋳型と思われる破片も数点発見されており、その中の1点は孔部分に固く焼けた原料物質か、もしくは風化物質が充塡されていた。その表面は軟らかい黒色物質で薄く覆われているが内部は白色や淡茶色物質であった。

B　調査の結果

X線CTによる製作法の検討

鈴2点と鏡1点はX線CTによる調査をおこなった(Ph. 82)。鈴は上半部と下半部を個別に製作したのち上下をかしめてつくっている様子が観察された。また、鈴の鈕部分は予め鈴の頂部に孔をあけて鈕を差し込んで接合している様子が撮影されている。

鏡は鏡本体と鈕は個々に作られており、鈕部分を接合していることは明らかである。接合材料については今後検討する必要がある。

材質調査は非破壊法および一部の資料については金属部分の測定をおこなった(Tab. 20、21)。今回の資料はさび層がきわめて薄いため分析値が大きく変動することはなかった。鈴は銅を主成分とする銅製品で不純物は少なく、容易にかしめることは理解される。素文鏡は肉眼的には同じ材質と推定されたが、異なった材質のものであることが明らか

Tab. 20　錆部分定量分析結果(wt.%)　-：検出限界(0.1%)未満

No.	遺物名	Mn	Fe	Cu	As	Pb	Ag	Sn	Sb
1	鉸具	0.1	0.2	94.1	3.3	1.3	0.2	0.5	0.2
2	巡方表金具	-	0.1	94.6	2.4	2.3	0.1	0.2	0.1
5	鉈尾表金具	0.1	0.2	94.4	3.3	0.5	0.2	0.9	0.4
7	素文小鏡	0.1	0.2	91.7	4.0	2.4	0.3	0.9	0.3
8	素文小鏡	-	0.3	94.0	2.9	1.7	0.2	0.4	0.5
10	瓔珞	-	1.6	73.8	1.0	3.8	0.1	16.6	-
11	瓔珞	-	2.0	71.2	1.1	1.6	0.2	19.7	-
12	鈴	0.1	0.1	97.3	1.8	0.4	0.4	0.1	-
13	鈴	-	0.1	99.7	-	-	0.1	-	-
	鈴丸	3.2	94.1	2.6	-	-	-	-	-

Tab. 21　金属部分定量分析結果(wt.%)　-：検出限界(0.1%)未満

No.	遺物名	Mn	Fe	Cu	As	Pb	Ag	Sn	Sb
1	鉸具	0.1	0.1	94.2	2.9	2.1	0.1	0.4	0.1
2	巡方表金具	0.1	0.1	94.2	3.2	1.7	0.2	0.3	0.1
5	鉈尾表金具	-	0.1	94.3	2.7	1.4	0.2	0.9	0.3
7	素文小鏡	0.1	0.1	87.8	4.2	6.5	0.2	0.8	0.3
8	素文小鏡	-	0.1	91.9	5.0	1.9	0.2	0.3	0.5
10	瓔珞	-	0.3	83.9	0.6	2.9	-	12.2	-
11	瓔珞	-	0.3	80.6	0.7	1.8	0.1	16.3	0.1
12	鈴	-	0.2	98.7	0.9	-	0.2	-	-
13	鈴	0.1	0.1	99.7	-	-	0.1	-	-

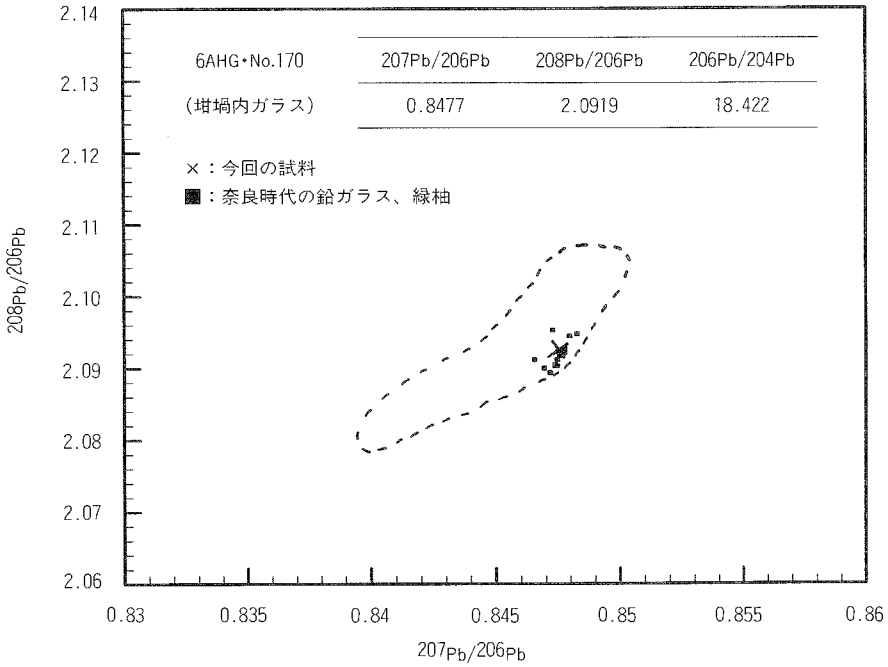


Fig. 41　坩堝に残存するガラスの鉛同位体比

となった。No. 73 は銅―鉛―ひ素を主成分とするのに対して、No. 124 は銅―ひ素が主成分であり、鉛はやや少ない結果となった。しかし、この 2 つの鏡はひ素の含有量が多いという特徴がある。瓔珞は 3 点あり、このうち 2 点(No. 71,53)は、銅―錫を主成分とし、鉛を若干含有する青銅製品である。他の 1 点(No. 47)は、銅を主成分とし鉛およびひ素が数%含有するもので、前 2 者とは材質がまったく異なる。金具の 2 点(No. 54, 74)は、いずれも同材質で作られており、銅を主成分とし鉛、ひ素が数%含有する。以上、今回の資料について大きく材質をまとめると、銅―錫を主成分とするタイプ、銅を主成分とし不純物が少ないタイプ、銅を主成分とし鉛、ひ素が数%含有するタイプになる。奈良時代の銅製品には錫の少ないものは鉛やひ素が含有しており、和同銭にもこのようなタイプのものが多く知られている[1)]。

蛍光X線分析による材質の調査

今回発見された坩堝には緑色ガラスが付着残存しており、それらを分析した結果、高鉛含有の $PbO-SiO_2$ 系のガラスであり、銅イオンによって緑色に着色されていた。また、高周波加熱分離―鉛同位体比法(測定：斎藤努氏)によってガラスの測定をおこなった結果、日本産鉛鉱石を原料としていたことが明らかになり、それは「奈良時代の鉛」の領域にプロットされた。また、坩堝に残存する黒色物質は X 線回析分析の結果、$Pb_5(PO_4)_3Cl$、PbS、$PbCO_3$、SiO_2 が同定された。SiO_2 は資料採取の際、坩堝から混入したもので、$PbCO_3$ は鉛ガラスの風化によって生じた白色の物質である(Fig. 41)。なお、鋳型に残存する物質からも同様な物質が検出されたが、鉛ガラス原料か風化物かの判定はできなかった。つまり、この鋳型で鉛ガラスの小玉が製作されたのかは不明である。奈良時代の鉛ガラスの小玉は溶融したガラスを巻き付ける方法で作られることが知られており、鋳型で製造されたかは今後詳細な調査が必要となる。

銅同位体比法による原料産地

1）町田　章「日本出土青銅器の材質分析による編年研究」『昭和63年度科学研究成果報告書』1988 pp. 37―93

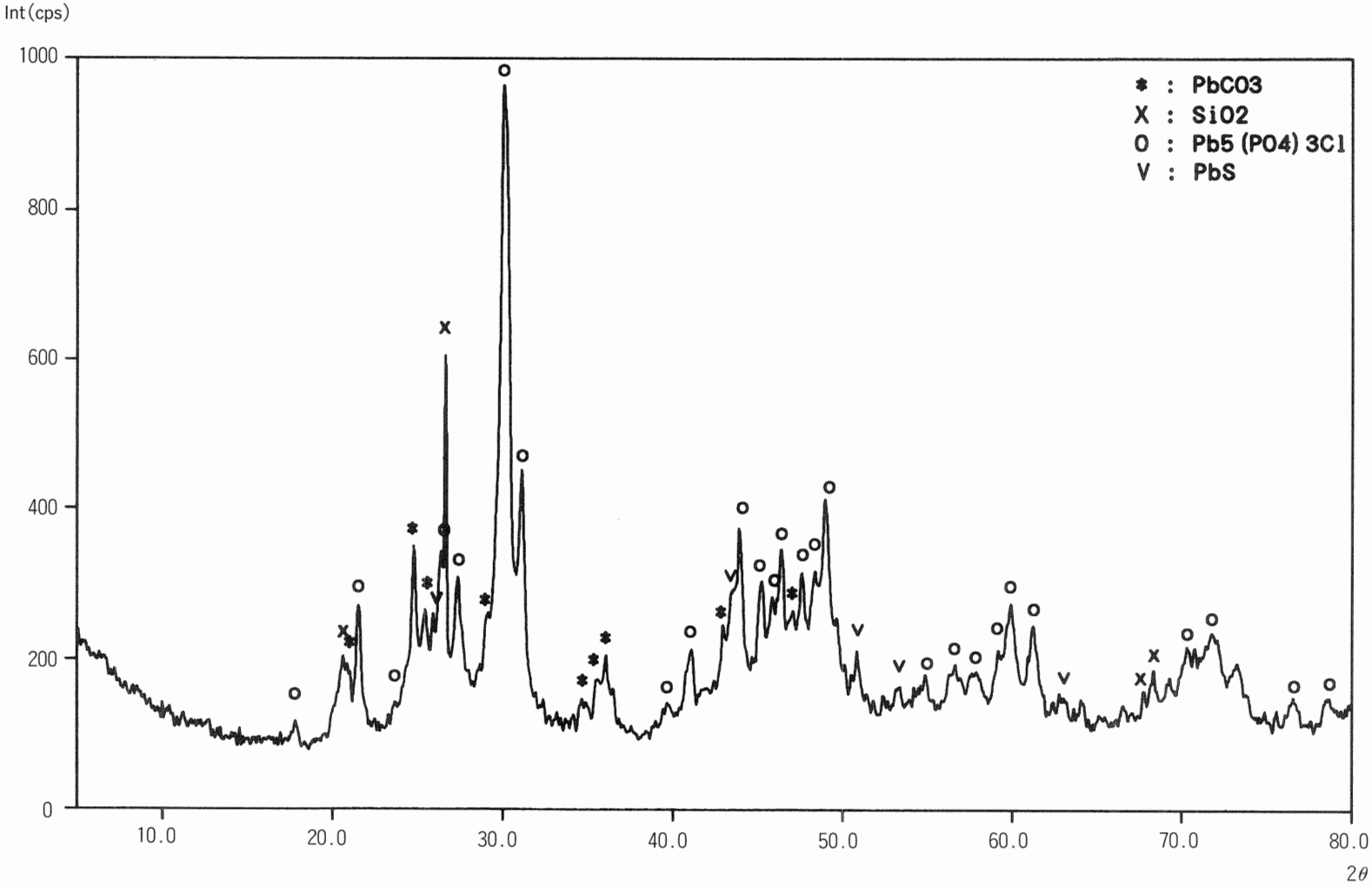


Fig. 42　坩堝 X 線回折分析

第VI章　考　　察

1　条坊復原

左京七条一坊十六坪の四周には、東に東一坊大路、西に東一坊坊間東小路、北に六条大路、南に七条条間北小路が通る。しかし、発掘調査で確認できた交差点は、北小路と東小路の交差点だけであるため、十六坪四周の道路や側溝の国土方眼座標に対する振れ、さらには、周辺における条坊関係遺構の発掘調査の成果等から、十六坪の一辺の長さ、平城京における位置関係等を検討する。関連する条坊関係遺構の計測座標値および推定値の一覧を Tab. 22 に、その位置を Fig. 43に示した。なお、奈良時代の尺度には、大宝令に定める大尺と小尺の２種類があり、平城京造営当初の条坊設定には、「度地」尺として規定されている大尺が基本的に用いられている[1]。造営に用いた１小尺の長さは、過去の調査成果から、0.294～0.297 m となるが、計測値等を小尺に換算するにあたっては、１小尺は0.296 m、１大尺はその1.2倍の0.355 m を用いる。

A　十六坪四周の道路復原

東一坊大路　平城宮小子部門位置、および東一坊大路と二条大路の交差点部分の調査成果では、東一坊大路の両側溝の心々距離は23.6 m で、80尺（以下、たんに尺と記す場合は大宝令小尺を指す）

東一坊大路の規模

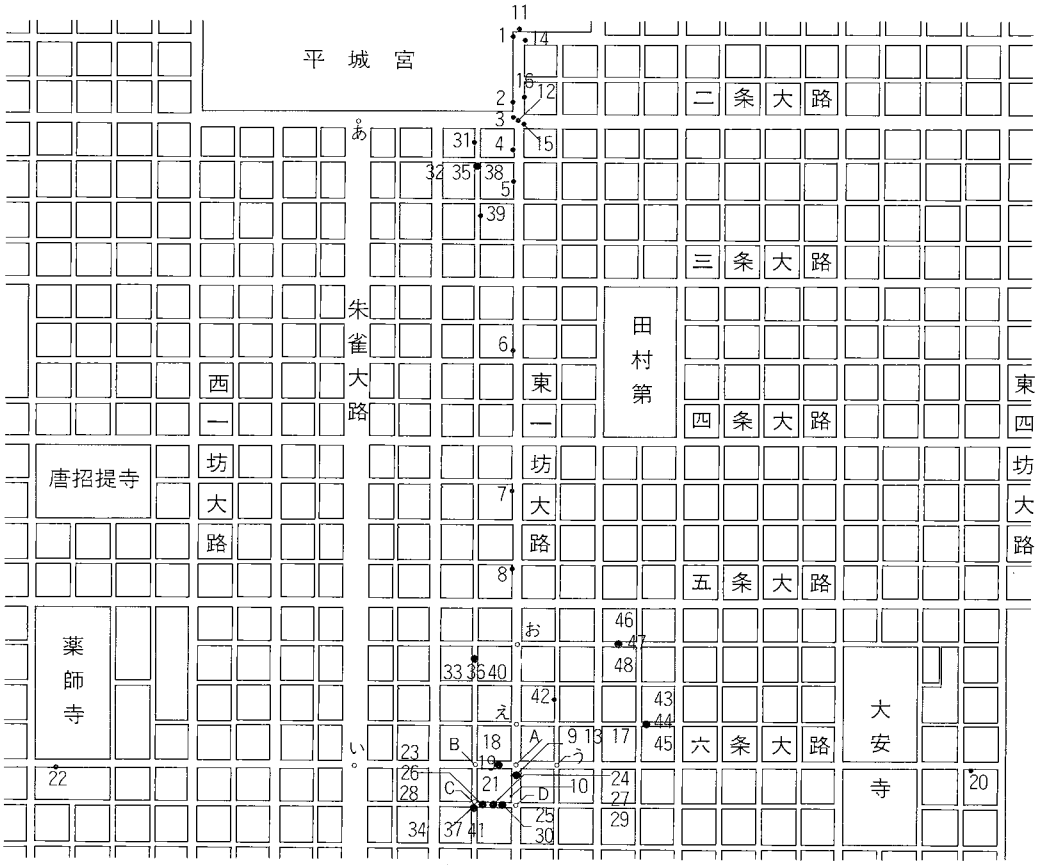


Fig. 43　関係条坊位置

Tab. 22　関係条坊計測座標一覧

地点	条　　坊	種　別	X 座 標	Y 座 標	調査機関と調査次数	文献
1	東一坊大路	西側溝心	−145,737.30	−18,066.81	奈文研第39次	1*
2	東一坊大路	西側溝心	−145,966.00	−18,065.70	奈文研248—13次	2*
3	東一坊大路	西側溝心	−146,021.43	−18,065.47	奈文研第32次	3*
4	東一坊大路	西側溝心	−146,122.00	−18,064.45	奈文研234—9次	4*
5	東一坊大路	西側溝推定心	−146,208.00	−18,064.00	奈文研第118—8次	5
6	東一坊大路	西側溝心	−146,791.98	−18,069.48	橿考研1985年度	6
7	東一坊大路	西側溝心	−147,235.00	−18,058.23	奈良市第316次	7
8	東一坊大路	西側溝西肩	−147,500.00	−18,060.80	奈良市第249次	8*
9	東一坊大路	西側溝心	−148,177.10	−18,052.80	奈文研第252次	
10	東一坊大路	西側溝心	−148,271.50	−18,052.10	奈文研第253次	
11	小子部門心	門心	−145,729.60	−18,054.90	奈文研第39次	9
12	東一坊大路・二条大路	交差点心	−146,018.49	−18,053.56	奈文研第32次	3
13	東一坊大路	道路心	−148,177.45	−18,042.34	奈文研第252次	
14	東一坊大路	東側溝心	−145,763.24	−18,043.13	奈文研第39次	10
15	東一坊大路	東側溝心	−146,039.49	−18,041.53	奈文研第32次	3*
16	東一坊大路	東側溝心	−145,959.80	−18,041.50	奈文研248—13次	2*
17	東一坊大路	東側溝心	−148,177.80	−18,030.50	奈文研第252次	
18	六条大路	北側溝心	−148,138.40	−18,097.60	奈文研第252次	
19	六条大路	道路心	−148,145.55	−18,097.60	奈文研第252次	
20	六条大路	南側溝心	−148,144.30	−16,540.07	橿考研1988年度	11
21	六条大路	南側溝心	−148,152.70	−18,097.60	奈文研第252次	
22	六条大路	南側溝心	−148,160.72	−19,554.76	奈文研昭和50年度薬師寺	12
23	七条条間北小路	北側溝心	−148,277.80	−18,170.00	奈文研第254次	
24	七条条間北小路	北側溝心	−148,277.65	−18,113.00	奈文研第254次	
25	七条条間北小路	北側溝心	−148,278.15	−18,083.00	奈文研第253次	
26	七条条間北小路	道路心	−148,281.25	−18,170.00	奈文研第254次	
27	七条条間北小路	道路心	−148,281.53	−18,083.00	奈文研第253次	
28	七条条間北小路	南側溝心	−148,284.70	−18,170.00	奈文研第254次	
29	七条条間北小路	南側溝心	−148,284.90	−18,083.00	奈文研第253次	
30	七条条間北小路	南側溝心	−148,284.35	−18,067.00	奈良市第253次	
31	東一坊坊間東小路	西側溝心	−146,096.00	−18,190.20	奈文研第242—9次	13*
32	東一坊坊間東小路	西側溝心	−146,215.00	−18,189.40	奈文研第230次	14
33	東一坊坊間東小路	西側溝心	−147,795.00	−18,182.35	奈良市第139次	15
34	東一坊坊間東小路	西側溝東肩	−148,282.00	−18,179.30	奈文研第254次	
35	東一坊坊間東小路	道路心	−146,215.00	−18,185.88	奈文研第230次	14
36	東一坊坊間東小路	道路心	−147,795.00	−18,179.11	奈良市第139次	15
37	東一坊坊間東小路	推定道路心	−148,282.00	−18,176.49	奈文研第254次	
38	東一坊坊間東小路	東側溝心	−146,215.00	−18,182.35	奈文研第230次	14
39	東一坊坊間東小路	東側溝心	−146,342.00	−18,182.00	奈文研第46次	16
40	東一坊坊間東小路	東側溝心	−147,795.00	−18,175.88	奈良市第139次	15
41	東一坊坊間東小路	東側溝心	−148,282.00	−18,173.23	奈文研第254次	
42	東二坊坊間西小路	西側溝心	−147,930.00	−17,914.00	奈良市第255次	17
43	六条条間南小路	北側溝心	−148,010.15	−17,621.80	橿考研1987年度	18*
44	六条条間南小路	道路心	−148,013.25	−17,621.80	橿考研1987年度	18*
45	六条条間南小路	南側溝心	−148,016.35	−17,621.80	橿考研1987年度	18*
46	六条条間北小路	北側溝心	−147,740.67	−17,701.00	奈良市1983年度(第45次)	19
47	六条条間北小路	道路心	−147,743.75	−17,701.00	奈良市1983年度(第45次)	19
48	六条条間北小路	南側溝心	−147,747.38	−17,701.00	奈良市1983年度(第45次)	19
あ	朱雀大路・二条大路	交差点心	−146,019.36	−18,586.32	朱雀門心の70大尺南	
い	朱雀大路・六条大路	交差点心	−148,148.14	−18,576.61	方程式9・3の交点	
う	六条大路・東二坊坊間西小路	推定交差点心	−148,144.55	−17,912.90	方程式3・10の交点	
え	東一坊大路・六条条間南小路	推定交差点心	−148,025.52	−18,043.18	方程式1・11の交点	
お	東一坊大路・六条条間北小路	推定交差点心	−147,745.60	−18,044.56	方程式1・12の交点	

座標値は小数第３位を四捨五入して記した。＊は当該調査の実測図または概要掲載図より計測した。

文　献

1 奈文研「第39次調査東面南門推定地東側」『年報1967』1967　pp. 42—45
2 奈文研「小子門および東一坊大路の調査」『1994年度平城概報』1995　pp. 21・22
3 奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995　p. 498
4 奈文研「東一坊大路西側溝の調査」『1992年度平城概報』1993　p. 73
5 奈文研『奈良国立文化財研究所三十年史』1982　p. 195
6 橿考研「平城京左京四条一坊十五坪」『1985年度奈良県概報』1986　p. 105
7 奈良市教委「平城京左京五条一坊十五坪・東一坊大路の調査　第316次」『奈良市概要平成６年度』1995　pp. 101—103
8 奈良市教委「平城京五条一坊十三・十四坪・柏木遺跡の調査　第249次」『奈良市概要平成４年度』1993　pp. 45—51
9 奈文研「平城宮小子門の再検討」『奈良国立文化財研究所年報1994』1994　pp. 66・67
10 奈文研「左京三条二坊四坪の調査　第215—16次」『1990年度平城概報』1991　p. 88
11 橿考研「平城京左京七条四坊十六坪調査報告」『奈良県概報1988年度（第２分冊）』1989　pp. 5—15
12 奈文研『薬師寺発掘調査報告』1987　p. 202
13 奈文研「左京三条一坊九・十六坪（境）の調査　第242—９次」『1993年度平城概報』1994　p. 74
14 奈文研「左京三条一坊十・十五・十六坪の調査　第230次」『1992年度平城概報』1993　pp. 57—66
15 奈良市教委「平城京左京六条一坊十・十五坪坪境小路の調査　第139次」『奈良市概要昭和62年度』1988　p. 49
16 小沢毅「条坊の復原」『平城京左京三条一坊十四坪発掘調査報告』1995　p. 38
17 奈良市教委「平城京左京六条二坊三坪の調査　第225次」『奈良市概要平成３年度』1992　pp. 68・69
18 橿考研「平城京左京六条二坊十三・十四坪発掘調査概報」『奈良県概報』別冊　1988　pp. 1—18
19 奈良市教委「平城京左京六条二坊九・十坪の調査」『昭和58年度奈良市概要』1984　pp. 44—47

に復原できる[2]。今回の調査成果では、両側溝の心々距離は22.3ｍで、75.3尺となる。ただ、西側溝は奈良時代末に改修しており、溝開削時の溝幅や溝心は明らかでない。一方、東側溝は、幅約３ｍで、堆積状況からみても、比較的高い確率で溝心を捉えることができる。そこで、東側溝心から40尺西を東一坊大路の道路心(地点13)として、平城宮小子部門(地点11)との間の方位の振れを計算すると、東一坊大路は国土方眼座標に対し、0°17′38″北で西に振れる。

六条大路の規模

六条大路　今回検出した六条大路の両側溝心々距離は14.3ｍであるので、40大尺で計画したとみることができる。しかし、国土方眼座標に対する六条大路の造営方位の振れは、わずか長さ約８ｍを検出したに過ぎないため明らかでない。七条条間北小路と平行とみることもできるが、後述するように、北小路両側溝の振れが一定でないため、ここでは、同じ左京域で検出した六条大路南側溝心(地点20)との間の振れを算出した。その結果、南側溝は、国土方眼座標に対して0°18′33″東で北に振れる。六条大路については、一応、これと同様の振れを持ち、南北両側溝の中点(地点19)を通るものと考える。

七条条間北小路　南北両側溝は完全に平行しているわけではなく、また、それぞれ一定の振れを示している状況ではないが、両側溝の心々距離は約7.1ｍ、20大尺とみることができる。両側溝を通る平行な２直線から割り出した道路中心線の方位は、国土方眼座標に対し、0°02′01″東で北に振れる。

十六坪各辺の規模

東一坊坊間東小路　七条条間北小路との交差点のみの検出であり、かつ、西側溝西岸が調査区外になるため、溝心々距離や方位の振れを明らかにしえなかった。しかし、左京六条一坊十・十五坪の調査[3]では両側溝を検出し、溝心々距離は約6.5ｍである。長さ約13ｍにわたり検出した東側溝の方位は、国土方眼座標に対して0°18′42″北で西に振れる。本調査地における溝心々距離もそれと同規模とし、両地点間の道路中心線の方位東側溝も同じ振れとする。

以上の作業から求められた道路中心線と十六坪四周の溝心計画線の方程式をTab. 23に、それらの交点の座標をTab. 24に、位置関係をFig. 44に示した。道路中心線の交点間は、A－B間が134.98ｍ、B－C間が135.36ｍ、C－D間が134.95ｍ、D－A間が136.01ｍとなり、いずれも、計画寸法である450尺(133.2ｍ)よりも大きい。また、仮にこれらが450尺であったとすると、１小尺は0.300～0.302ｍとなり、従来の成果からみると長すぎる。なお、溝心計画線の交点では、a－b間が119.89ｍ、b－c間が124.41ｍ、c－d間が119.86ｍ、d－a間が125.25ｍとなる。

Tab. 23　条坊遺構の関数化

	条坊遺構	方程式
1	東一坊大路　道路中心線	X＝-cot 0°17′38″ Y-3,664,494.49
2	東一坊大路　西側溝中心線	X＝-cot 0°17′38″ Y-3,667,940.83
3	六条大路　道路中心線	X＝ tan 0°18′33″ Y-148,047.89
4	六条大路　南側溝中心線	X＝ tan 0°18′33″ Y-148,055.31
5	七条条間北小路　道路中心線	X＝ tan 0°02′01″ Y-148,270.68
6	七条条間北小路　北側溝中心線	X＝ tan 0°02′01″ Y-148,267.13
7	東一坊坊間東小路　道路中心線	X＝-cot 0°18′42″ Y-3,488,640.12
8	東一坊坊間東小路　東側溝中心線	X＝-cot 0°18′42″ Y-2,488,041.57
9	朱雀大路　道路中心線	X＝-cot 0°15′41″ Y-4,220,065.16
10	東二坊坊間西小路　西側溝中心線	X＝-cot 0°17′38″ Y-3,639,257.38
11	六条条間南小路　道路中心線	X＝ tan 0°18′33″ Y-147,918.21
12	六条条間北小路　道路中心線	X＝ tan 0°18′33″ Y-147,648.23

Tab. 24　十六坪四隅の座標

交点	X	Y
A	−148,145.25	−18,042.51
B	−148,145.98	−18,177.49
C	−148,281.34	−18,176.76
D	−148,281.26	−18,041.81
a	−148,152.47	−18,054.31
b	−148,153.38	−18,174.20
c	−148,277.79	−18,173.52
d	−148,277.72	−18,053.66

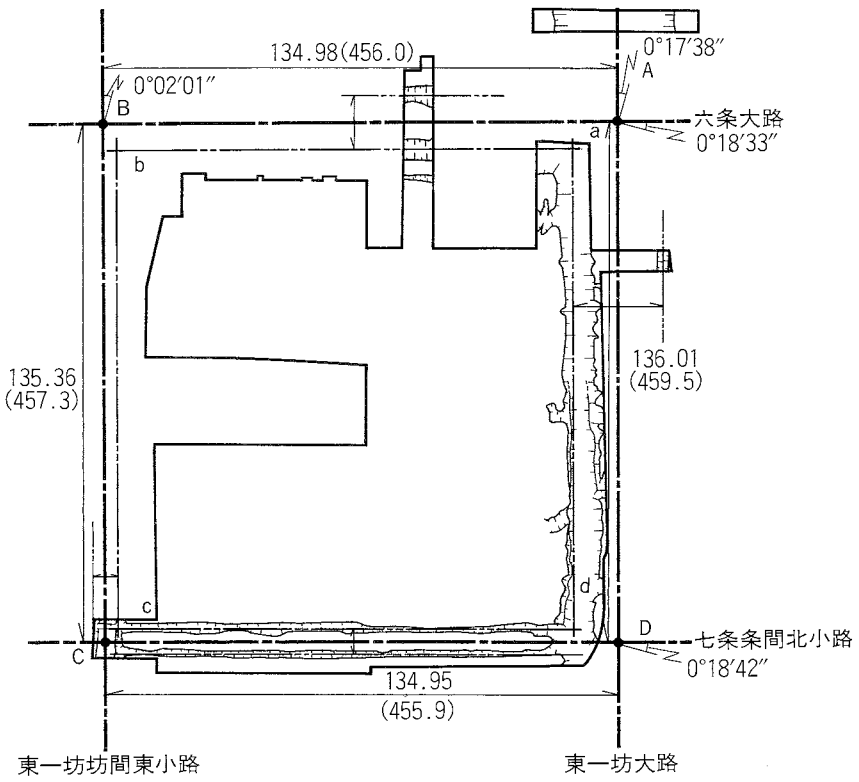


Fig. 44　十六坪四周の条坊復原

B　左京七条一坊十六坪の位置

上述したように、十六坪は東西・南北ともに従来の１坊より大きいことが明らかになった。そこで、十六坪の平城京における東西位置、南北位置を検討するために、これに関連する条坊遺構の方程式と推定した道路交差点の座標値も、それぞれ Tab. 23・24に記した。

十六坪の東西位置

まず、東一坊大路と東一坊坊間東小路の朱雀大路に対する位置関係を検討する。朱雀大路は国土方眼座標に対し、0°15′41″ 北で西に振れることが明らかになっている[4]。朱雀大路中心線と二条大路中心線との交点(地点あ・朱雀門心の70大尺南)から、朱雀大路中心線と六条大路中心線の交点(地点い)を算出し、い―Ｂ間の距離を求めると399.42 m(1,349.4尺)となる。これは、計画寸法の1,350尺に極めて近く、東一坊坊間東小路は朱雀大路中心線を基準として施工したとみて、まず間違いない。これに対し、Ａ―Ｂ間の距離は134.98 m(456.0尺)であり、計画寸法450尺より長い。二条大路では東一坊坊間東小路と東一坊大路は、ほぼ計画寸法通りに施工している[5]ので、この差は東一坊大路の振れが朱雀大路の振れより大きいことに起因しているのであろう。なお、東一坊大路の東を通る東二坊坊間西小路については、両側溝の心々距離は明らかではないが、左京六条二坊三坪の調査で西側溝を検出している[6]。東二坊坊間西小路が今回検出した東一坊大路と同じ振れとすると、六条大路との交点(地点う)と、この西側溝心の距離は129.61 m となる。これと１坪分の計画長133.2 m との差3.59 m は、道路の1/2の距離であるので、東二坊坊間西小路の側溝心々距離は7.18 m であったことになり、ほぼ20大尺の計画寸法であったことがわかる。したがって、十六坪の西辺はほぼ計画通りに施工され、東辺は東一坊大路が2.5～５

尺東へずれることになる。

十六坪の南北位置

次に、六条大路と七条条間北小路の位置関係について検討する。二条大路と東一坊大路の交差点心(地点12)から六条大路と東一坊大路の交点Aまでの距離は2,126.79 m(7,185.1尺)で、計画寸法より4.41 m(14.9尺)短い。つまり、その分、六条大路が北に位置していることになる。ただし、距離が長いため、7200尺で除した場合、1小尺は0.295 mとなり、基準尺の範囲に収まる。一方、左京六条二坊十三・十四坪の調査で明らかになった六条条間南小路[7]がその道路心(地点44)を通り、六条大路と平行とすると、東一坊大路との交点(地点え)とAの距離は129.74 m(438.3尺)となり、六条大路は約3.5 m北に位置することになる。ところが、左京六条二坊九・十坪の調査で検出した六条条間北小路[8]が道路心(地点47)を通り、六条大路と平行とすると、それぞれの東一坊大路との交点(地点お・地点A)の距離は、399.66 m(1,350.2尺)で、計画寸法(450尺×3)通りと考えられる。また、本調査の結果から、六条大路と七条条間北小路の距離は136.0 mであり、計画寸法より2.8 mほど長い。以上のような状況からは、六条大路・六条条間北小路と六条条間南小路・七条条間北小路の間で、条坊施工に相対的なずれのあったことが指摘できる。

Tab. 25　大路両側溝の心々距離

条坊道路	調査位置	計測値(m)	計画寸法	文献
朱雀大路	左京・右京六条	73.4—74.0	210大尺	1
東一坊坊間大路	左京三条	21.3	60大尺	2
東一坊大路	二条大路	23.69	80小尺	3※
東二坊坊間大路	左京二条	—	50大尺	4
東二坊坊間大路	左京二条	10.48	30大尺	5
東四坊大路	左京四条	15.7	45大尺	6
東五坊大路	左京五条	27.8	(80大尺か)	7
西一坊坊間大路	右京八条	24.550—25.725	70大尺	8
西一坊大路	右京一条	24.87	70大尺	3※※
西二坊大路	右京二条	15.9	(45大尺か)	9
西三坊大路	右京五条	21.3	60大尺	3※※※
一条条間大路	右京二坊	15.9	(45大尺か)	10
二条条間大路	左京二坊	17.2	(50大尺か)	11
二条条間大路	左京四坊	15.7	(45大尺か)	12
二条条間大路	右京三坊	14	(40大尺か)	13
二条大路	左京二坊	31.9	90大尺	3
二条大路	宮域南辺	37.31	105大尺	3※※
三条大路	右京四坊	22.7	65大尺	14
三条大路	左京四坊	15.7	45大尺	14
六条大路	左京一坊	14.2	40大尺	本報告

文　献
1 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974　p. 21
2 井上和人「都城の定型化」『季刊考古学』第22号　1988　p. 25
3 井上和人「古代都城制地割再考」『研究論集VII』1985（※ p. 68、※※ p. 57、※※※ p. 59）
4 本中真「道路と敷地」『長屋王邸宅と木簡』1991　p. 48
5 高瀬要一「条坊復原と建物配置計画」『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995　p. 499
6 奈良市教委「平城京左京（外京）四条五坊一坪の調査」『奈良市概要平成7年度』1996　p. 47
7 奈良市教委「平城京左京五条六坊二坪・東五坊大路の調査」『奈良市概要平成7年度』1996　p. 87
8 奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984　p. 5、p. 64
9 奈良市教委「平城京右京二条三坊二・三坪の調査　第283次」『奈良市概要平成5年度』1994　p. 66
(掲載図より測定)
10 奈良市教委「平城京右京一条二坊十四坪の調査」『奈良市概要平成2年度』1991　p. 25
11 奈文研「第39次調査東面南門推定地東側」『年報1967』1967（平城宮跡第39次調査実測図より測定）
12 奈良市教委「平城京左京二条四坊・二条条間路の調査」『奈良市概要平成7年度』1996　p. 71
(掲載図より測定)
13 奈良市教委「平城京右京二条三坊七坪の調査」『奈良市概要平成7年度』1996　p. 38
14 奈良市教委「平城京左京（外京）四条五坊一坪の調査」『奈良市概要平成7年度』1996　p. 49

C まとめ

十六坪は計画寸法に基づく1坪より広かった。ただ、東西方向については、溝の改修等により、西側溝心が当初計画より東になった結果として捉えることもできよう。一方、周辺の条坊の施工状況をみると、平城京全体の施工計画から逸脱していることを積極的に示すデータはない。とすれば、十六坪および十六坪に隣接した坪、とりわけ、南接する十五坪との間で、局所的に規格外の施工を実施したとみなければならない。その要因については、今回実施した十六坪の調査成果だけでは判断できない。

一方、六条大路については、今回の調査で初めてその両側溝を検出したのであるが、その位置もさることながら、従来想定されていた規模よりかなり小さいものであることが明らかになった。平城宮の大垣に開く門を起点とする条間大路、坊間大路も含め、現在までに明らかになっている大路の両側溝心々距離を Tab. 25に記したが、大路両側溝の心々距離には、いくつかの規格があり、東一坊大路を除くと、他の大路は、ほぼ5大尺の倍数であることがわかる。さらに、同じ大路でも、場所によって規模を異にする場合があるようで、今回検出した六条大路についても、同様の可能性を否定できない。しかし、六条大路が右京域においても40大尺の規模であれば、従来問題とされてきた薬師寺南門と六条大路の関係[9]については、解決をみることになる。また、二条大路は平城宮前面における路面を広くするために、北側溝を北に寄せ、道路計画線は南側溝から両側溝心々距離の1/3の位置にある[10]。薬師寺、大安寺の南門の前を通る六条大路についても、そういった特殊性を考えるべきなのか、あるいは、40大尺という規模が平城京南半の一般的傾向なのか、即断はできない。

5大尺の倍数

条坊道路の位置や規模は、平城京における位置や道路計画線との位置関係と密接に関係する。今後、平城京造営の計画手法や施工の実態等のなかで論じていかなければならないであろう。そのためにも、平城京の都市構造に関するさらなるデータの蓄積が求められる。

1）井上和人「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅶ』1985　p. 88
2）井上和人　註1）前掲書　p. 69
3）奈良市教委「平城京左京六条一坊十・十五坪坪境小路の調査 第139次」『奈良市概要昭和62年度』1988　p. 49
4）奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974　p. 21
5）奈文研「左京三条一坊十・十五・十六坪の調査 第230次」『1992年度平城概報』1993　pp. 65—66
6）奈良市教委「平城京左京六条二坊三坪発掘調査報告」『奈良市概要昭和56年度』1982　pp. 45—52
奈良市教委「平城京左京六条二坊三坪の調査 第225次」『奈良市概要平成3年度』1992　pp. 68—69
7）橿考研「平城京左京六条二坊十三・十四坪発掘調査概報」『奈良県概報1987年度』別冊　1988
8）奈良市教委「平城京左京六条二坊九・十坪の調査」『奈良市概要昭和58年度』1984　pp. 44—47
9）『薬師寺発掘調査報告』(奈文研 1987 p. 203)では、薬師寺南門の南の発掘調査で六条大路南側溝(地点18)を検出しており、六条大路両側溝心々距離を80尺(23.62 m)とすると、北側溝と門基壇が重なることが指摘されている。
10）井上和人　註1）前掲書　p. 57

2　遺構の変遷

A　はじめに

第III章３で述べたとおり、左京七条一坊十五・十六坪では、建物58棟、塀49条、溝15条、井戸11基などの遺構を検出している。しかし、十五坪については発掘区が坪北辺に限られており、遺構が少なく、時期を定める遺物も乏しく、遺構変遷の検討に至らなかった。

これに対し、左京七条一坊十六坪は、東一坊大路と六条大路の交差点の南西角に位置する。東一坊大路は、平城宮東南の入隅部に開く宮城門の一つである小子部門から南へ延びる大路で、その西側溝は平城宮・京の基幹排水路の一つにもなっている。また六条大路は薬師寺、大安寺という京内二大官寺の南門前を通る大路である。左京七条一坊十六坪は、このように京域でも重要な二大路の交差点の一隅を占める坪として注目される。十六坪についても、およそ1/4の未発掘部分があり、遺構の重複関係から新旧が判明するものは稀で、遺構の時期を示す遺物の出土も少ない状況である。ここでは十六坪の遺構について、乏しい手掛かりから想定される遺構の変遷を示す。

十六坪の遺構は、Ｉ期～VI期の６期に区分したが、ここでは遺構に伴って出土した土器の年代観をもとに、各時期の年代を想定した。Ｉ期は平城京造営期にあたる和銅年間(708～715年頃)、II期は恭仁京遷都まで(715～750年頃)、III期は平城還都後から神護景雲年間まで(745～770年頃)、IV期は奈良時代末から平安時代初頭(770～800年頃)、Ｖ期は平安時代前期(９世紀頃)、VI期は瓦器の時期で平安時代中頃(10世紀頃)という年代を与える。以下、左京七条一坊十六坪における各期の建築遺構の配置と、坪内の利用状況について考察する。　各期の年代

B　Ｉ期の遺構 (Fig. 45)

和銅年間の平城京造営期にあたる。Ｉ期の遺構は坪の西半で検出している。坪南辺の中央付近に桁行６間と比較的規模の大きい南北棟SB6555が建ち、その北西に一回り小さい南北棟SB6570が建つ。SB6555の西24ｍには東西棟SB6580が建つ。SB6555の西14.5ｍに南北塀SA6571があるが、全長４間と短く、SB6555・SB6570とSB6580の間を明瞭に区画するものではない。SB6570の東13.5ｍには南北塀SA6546とその北端でＴ字形に接続する東西塀SA6547があるが、いずれも２間のごく短い塀である。また坪の北西隅近くには東西棟SB6652が建ち、その南北両側に東西塀SA6644・SA6655があるが、どちらも短い塀である。坪東半で検出した東西溝SD6430だけが坪を南北に二分した可能性をもつ。これは道路側溝で囲まれた敷地を南北に二分するのではなく、六条大路と七条条間北小路の路面心々距離の二等分線に近い。ただし、付近に遺構がなく、後述するように、II期以降も必ずしも建物配置の基準となっていない。区画施設としても、果たして機能していたどうかは疑問である。　地割溝SD6430

また建物遺構の振れをみると、国土座標系に対して、北で西へ1°25′から2°00′の振れをもつものが多いが、SB6652は西へ3°00′と大きめの振れをもち、また坪南西隅に近いSB6580は逆に東へ4°30′の振れを測るなど、ばらつきが大きい。

この時期には2基の井戸が掘られる。坪南辺中央に近いSE6558が最も古いが、I期のうちにSB6555の建設に伴って、井戸SE6557に造り替えている。

このようにI期の建物遺構は、ある程度の規模をもつが、間隔を大きくとっており、坪内の利用密度は低い状況である。塀もごく小規模なものである。この時期には坪内を区画せず、一体として用いていたようである。坪外周の閉塞施設もまだ存在しない時期と考えられる。建物は坪西半に集中しており、比較的規模の大きい建物はあるが、中心的な建物を見いだすことができない。配置にも明瞭な規則性は認められず、官人等の一般的な宅地とは考えがたい状況である。

先にも述べたとおり、左京七条一坊十六坪は、東一坊大路と六条大路の二つの主要街路の交差点の一角に面しており、東には物資運搬にも利用しうる東一坊大路西側溝がある。このような地理的条件も考慮すると、I期の遺構は、宅地でないとすると、平城京の造営工事に関わる拠点施設の一つとして理解することも可能であろう。建物配置に規則性がない等の点も、工事の管理や物資の集積といった、京造営期の仮設的な施設であったためであり、坪の東半に広がる空閑地は、大量の物資を取り扱う場として機能したのであろう。

京造営に関わる施設

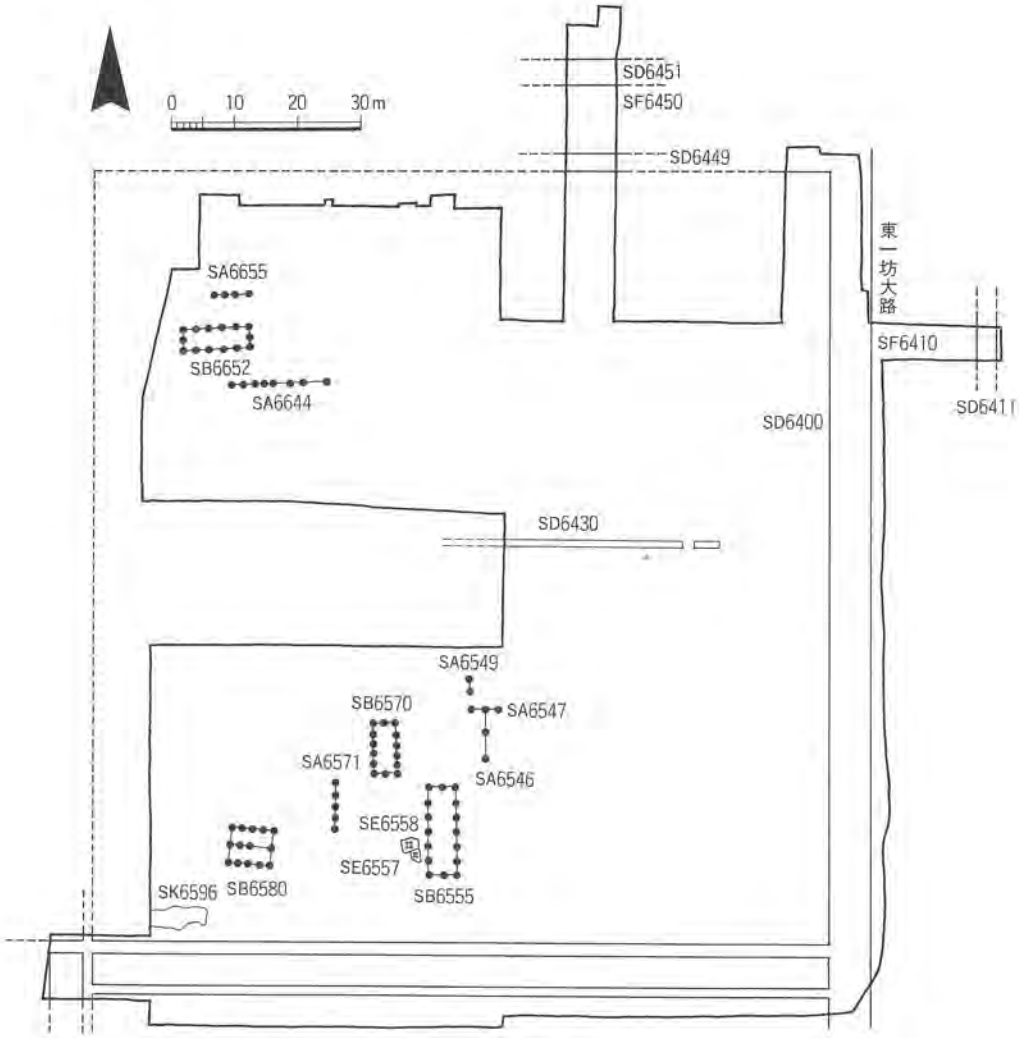


Fig. 45　I期の遺構

C　II期の遺構（Fig. 46）

坪内の建物整備が進行し、計画的な敷地利用が始まる。II期の建物遺構は国土座標系に対して、北で東へ0°20′から1°30′の振れをもつものが多い。坪の東西・南北での使い分けが認められるが、I期に設定した東西地割溝SD6430は建物配置の直接の基準には用いず、配置計画には別に基準を設けているようである。

SA6548による坪の東西二等分

坪は南北に分割したのち、南半を南北塀SA6548で東西に二分する。南西部ではさらに南北塀SA6576を設けて東西に二分する。SA6576はSA6548の西100尺にあり、さらに西へ100尺で、東一坊坊間東小路東側溝SD6614に至る。しかし、SA6576は柱間隔が間遠で区画施設にはなりえない。しかも同じII期の遺構であるSA6559・SB6575と重複しており、短期間で取り払われたことが明らかである。このSA6576は建物建設に際して目印とした仮設的な杭列であったと考えられる。また、南辺は七条条間北小路北側溝SD6472から北50尺にある東西塀SA6559で区画されている。

100尺を基準とする配置計画

一方、坪南東部では、中央北寄りにこの時期の正殿SB6425を、その南東に小規模な南北棟SB6495を置く。南北方向の位置は、SB6425の北側柱通りから100尺でSB6495の北妻柱通り、さらに南へ100尺でSD6472に至る。また東西方向には、SB6495の桁行中央をSA6548から95尺とする。SB6495は東側柱通りがその1.5倍の142.5尺、SA6548から離れる。

これらの遺構から、坪は南北方向には、七条条間北小路北側溝から50尺・100尺・200尺と分割していたと推定される。坪の南北長は200尺の倍の400尺となる。七条条間北小路北側溝から400尺の位置には北面築地南雨落溝SD6446を検出しており、北小路北側溝と築地南雨落溝の間が宅地として認識されていたことになるであろう。一方、東西方向は、SA6548から西へは100尺・200尺の寸法で割り付けられ、SA6548から東へ200尺は、ほぼ東一坊大路西側溝西岸の位置にあたる。SA6548は坪の東西長を道路側溝間の400尺とした、その二等分線上にある。したがって、宅地としての規模は400尺四方で、北は築地南雨落溝、南は北小路北側溝、東は大路西側溝、西は東小路東側溝となる。SA6548・SA6576はこの400尺四方に基づく配置計画の存在を示していよう。

宅地は400尺四方

坪南東部は東西190尺

しかしながら、坪南東部の建物遺構はSA6548から95尺、142.5尺にあることから、坪南東部については、東西長が190尺となる。つまり、東一坊大路西側溝西岸から10尺分を配置計画から除いている。このことは、そこに築地塀等の閉塞施設の存在を想定させるものである。

築地塀の施工順序

400尺を基準とする配置計画に190尺の寸法が採り入れられた状況は、外周閉塞施設の施工の順序も示している。すなわち、宅地班給の時点では、築地塀は六条大路に面した北辺のみが完成しており、宅地として400尺四方の広さがあった。この段階における配置計画に基づき、南北塀SA6548等を設けた後、東一坊大路側に築地塀を築造するため、宅地の東西長は390尺となった。その結果、正殿SB6425を含む南東部だけ、東西長を190尺とし、SB6425とSB6495は南北位置は当初計画のままに、東西位置のみ西にずらして建てられたのであろう。

十六坪においては、大路に面した築地塀は、北辺が先行し、東辺が遅れて造られたことになる。前項で述べたように、I期に京造営の拠点があったとすると、大路西側溝からの物資の搬入などのために、東側を開放していた可能性が考えられるであろう。

正　　殿　宅地内の建物配置をみると、坪南東部では既に述べたとおり、中央北寄りに南廂付の東西棟の正殿SB6425を置き、その南東に南北棟SB6495を配す。SB6425の南、SB6495の西には広く空閑地をとる。

坪南西部は南辺から八分の一を東西塀SA6559で区画し、その中央に東西棟SB6575を置く。SA6548とSA6559は接続しないが、南北棟SB6560がその間隙を塞ぐように建ち、南東部との間を区画している。西寄りには総柱建物SB6585があり、倉庫と考えられる。発掘区西辺の南北塀SA6604は建物になる可能性がある。

坪の北東部では2棟の東西棟建物SB6435・SB6440が西妻をほぼ揃えて南北に並ぶ。南東部との間にはSD6430があるだけで、明瞭な区画施設をもたない。あるいはSB6435南の東西塀SA6433が南東部との間の目隠しとなっていたのかもしれない。

井戸を中心にする建物配置　北西部では井戸SE6653を取り巻くように建物SB6647・SB6650・SB6660・SB6666を配し、坪中央寄りにはSB6625がある。北東部との間には区画施設がない。南西部との間には未発掘部分があり、区画施設の有無は確認できないが、坪東半での様相から考えて、明確には区画されていないであろう。

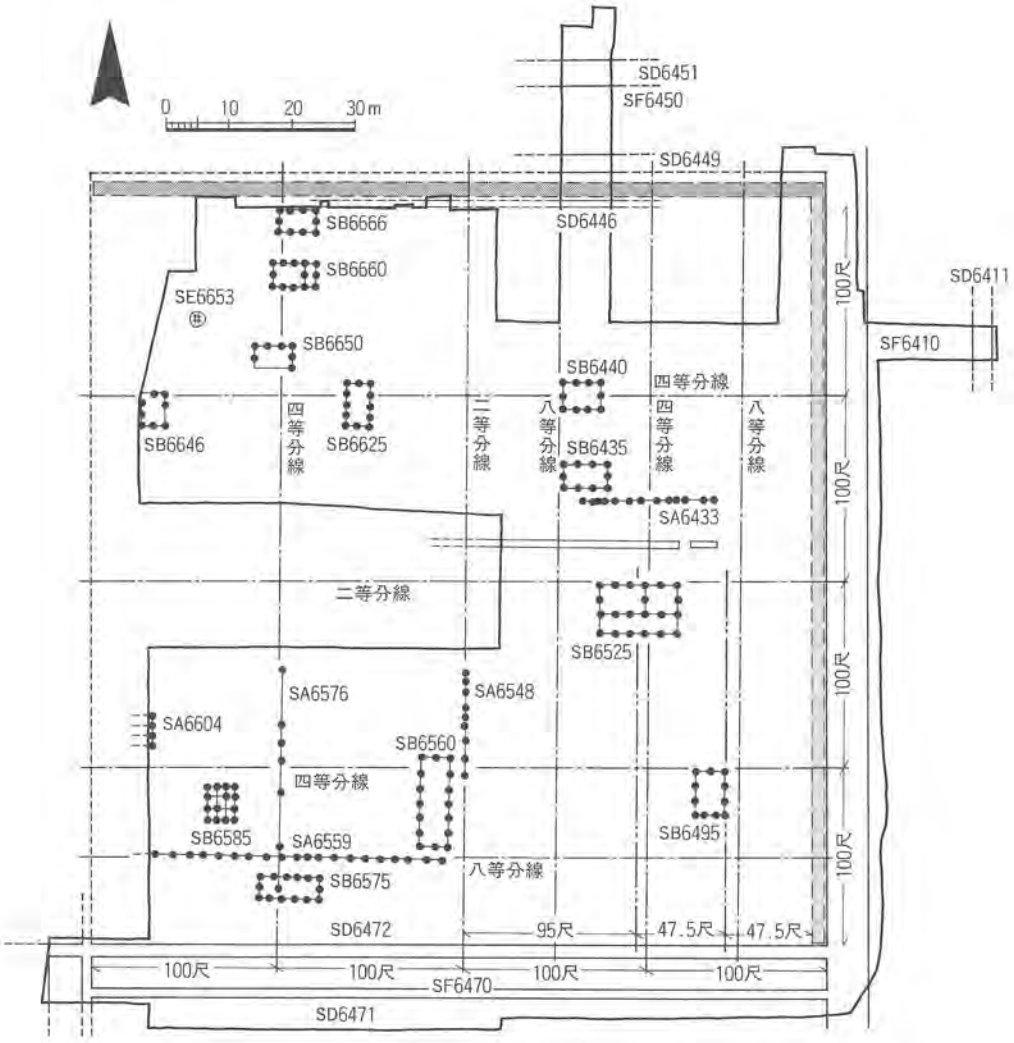


Fig. 46　II期の遺構

以上のような遺構の状況から、II期の十六坪は、坪全体を一体として用いていたと考えられる。官人の宅地であったとすると、坪内各部には、次のような空間の使い分けがあったと考えれる。南東部は正殿SB6425と小建物SB6490の2棟のみであるが、配置計画が厳密であり、坪内の生活の中心、表向きの空間と位置付けられる。これに対して西半は生活を支える内向きの空間と考えられる。建物配置から見て、南西部は特に事務・収蔵等の空間、北西部は井戸を中心とした作業空間とみることができる。また北東部は家人らの居住空間であろう。なお、坪の南辺・西辺には外周閉塞施設は未だ設けられていない。

一体利用の坪

ところでSA6559に区画された西半部の南辺の一郭については、その性格を想定し難い。北側の内向きの作業空間とは区画され、東側の表向きの空間とは明確に区画されていない点は注目される。条間北小路南側溝中の祭祀土坑SX6530がII期にあたる遺構であるとすれば、これとの関係で、何らかの儀式・儀礼と関わる場が想定される可能性もある。

D　III期の遺構 (Fig. 47)

平城京還都後の状況である。II期に引き続き十六坪は一体として使われており、南東部を表向きの空間、西半を内向きの作業空間、北東部を居住空間とする基本的な空間構成も、II期を踏襲する。やはり、官人の宅地として利用されたのであろう。この時期の建物遺構は北で西へ1°40′から北で東へ0°25′と、小さな振れを測り、振れのばらつきも少ない。

II期で坪の南半を東西に分けていた南北塀SA6548、南北棟建物SB6560を撤去し、南北塀SA6540によって東西に厳格に区画する。またII期には開放的であった坪南辺も、まず東半に外周閉塞施設を設け、門SX6475を開くようになる。この閉塞施設は、遺構として残っておらず、また周辺で瓦がほとんど出土していないことから、瓦を載せない、土塁状の構造であったと想定される。

塀で東西を二等分

南辺東半の閉塞

坪の南東部における建物配置は、東面築地塀と南北塀SA6540の間隔190尺に基づく二等分線・四等分線を東西方向の基準とする。四等分線の間隔は47.5尺となる。南北方向も同寸法で割り付ける。この時期の正殿SB6500は南廂柱通りを南北二等分線に揃え、桁行中心線を東西二等分線に置く。また付属の南北棟SB6490は、桁行中心線を南の四等分線上、西側柱通りを東の四等分線上に置いている。また門SX6475はその柱間中央が西の四等分線に位置する。SB6500の北背面には後殿SB6426があるが、これはII期の正殿SB6425の南廂を廃した形で、身舎の柱抜取穴を据付穴に用いて建て替えたもので、桁行中心線は東西二等分線に一致するが、南北の位置は四等分線には合わない。同様に二等分・四等分の割付は、坪の他の部分での配置計画には用いられず、坪の南東部だけが特に厳密な配置計画をもつ。

190尺四方の配置基準

坪南西部ではII期の建物は全て取り壊される。SA6540から5尺西に総柱建物SB6562を建てる。南辺近くにはSA6540から西へ40尺離して東西棟SB6567を建てる。南西隅には南北棟SB6599、西辺中央には小規模な総柱建物SB6602・SB6605が南北に並ぶ。なお、SB6599は七条条間北小路北側溝に近接しており、坪南面西半には北小路に面する外周の閉塞施設を想定し難い状況である。またSB6567から北へ延びる南北塀SA6568とその西50尺のSA6582以外に南西部を細区分する施設はない。SA6582の西30尺に南北溝SD6594があるが、北小路北側溝へは達していない。坪内の排水溝とは考えられず、これも地割溝になる可能性がある。

北西部でもII期の遺構のほとんどが取り壊される。新たに坪中心寄りに東西棟建物SB6620、その北西に総柱建物SB6628を建てる。SB6620の西80尺には、南北塀SA6637とその北端へT字形につながる東西塀SA6643があり、SA6637から西へ4尺離れて建物SB6639が建つ。SA6643の北30尺には南北棟SB6651が、またSA6643の西延長線上の坪西辺近くには南北棟SB6646が建つ。SB6651の北40尺に東西塀SA6662があり、その西延長線上の坪西辺近くに南北棟SB6663が建つ。このように北西部では小規模建物が散在しているが、明確な配置計画を認めることはできない。

一方、坪の北東部では東辺近くに井戸SE6432を設けるとともに、SB6435は少し規模を縮小したSB6436へ、逆にSB6440は柱抜取穴を利用しつつ桁行を1間延ばしたSB6441へと建て替え、両者の間には区画塀SA6439を設ける。さらに北辺近くにも小規模な建物SB6445が建つ。これらの建物は規模も不統一で、北東部については、計画性を認めにくい。

このようにIII期は、十六坪を細分することなく、官人の宅地として一体に用いている。外周の閉塞施設はII期までの北辺、東辺に加えて、南面の東半にも設けるようになる。建物の配置は、坪南東部だけが特に厳密な計画性をもっている。

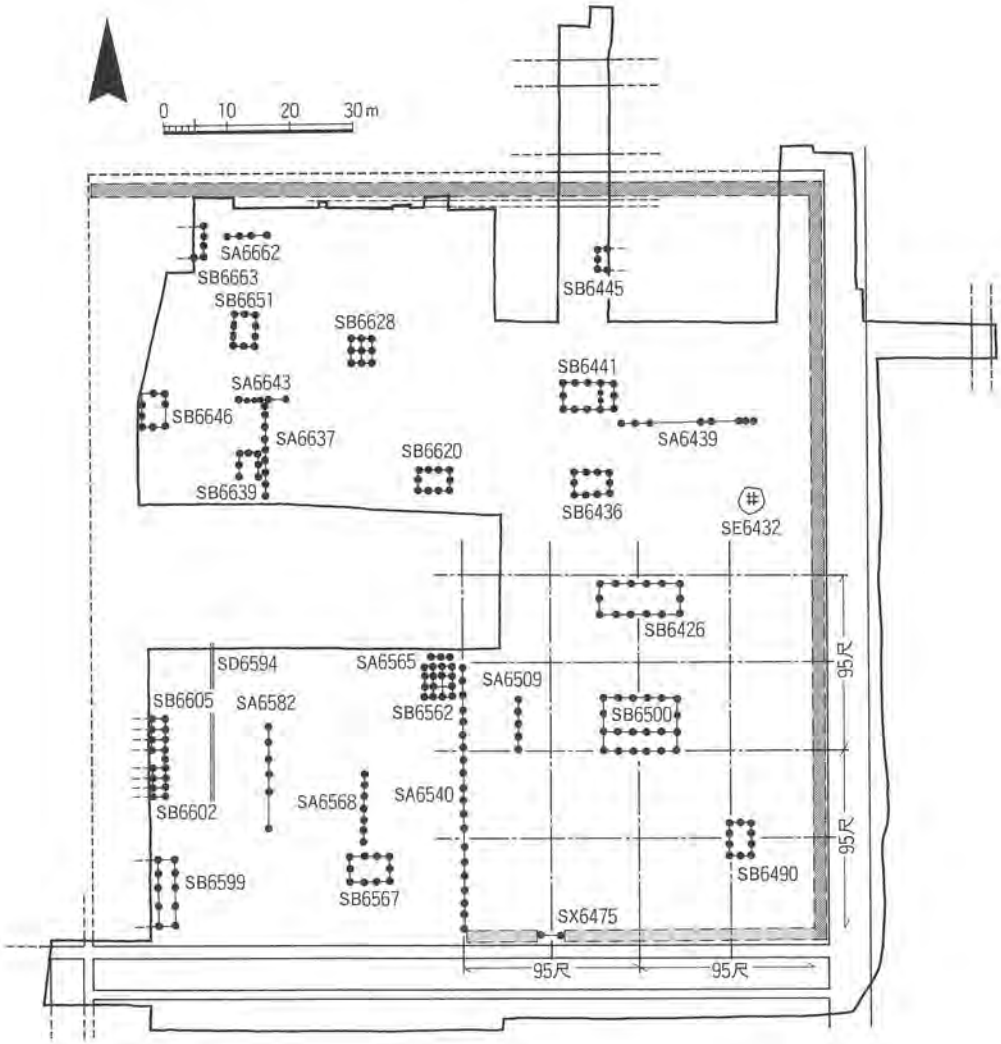


Fig. 47　III期の遺構

E　IV期の遺構 (Fig. 48)

奈良時代末から平安時代初頭の状況である。III期の建物を一部残しつつも、坪内の様相は一変する。坪は引き続き一体として利用しているが、空間の使い分けが変化したと考えられる。この時期の遺構は、振れが微小のものから北で東へ2°20′の振れを測るものが多い。

坪内の様相が一変

坪の南東部では正殿SB6500と後殿SB6426が存続するが、SB6500南東のSB6490を取り壊し、正殿SB6500の西に脇殿相当の東廂付南北棟SB6510が、南妻をSB6500南廂柱通りに揃えて建つ。SB6500の西妻からSB6510の東廂柱通りまでは35尺である。

坪の南半を東西に二等分する南北塀SA6540は、南へ柱間半分ずらしてSA6541に造り替えるが、北端はSB6510と北妻を揃える南北棟SB6550の南妻に達する。SB6510とSB6550の間隔は12尺である。その延長線上、建物のさらに北側に2条の南北塀SA6545・SA6551があり、この間を宅地内の通路としても用いたと考えられる。

南西部では、III期には空閑地としていた中央付近に中規模の建物を配置する。南西部ほぼ中央に東西棟SB6600が建ち、その北西に東西棟SB6590・SB6591が南北に並ぶ。SB6590と

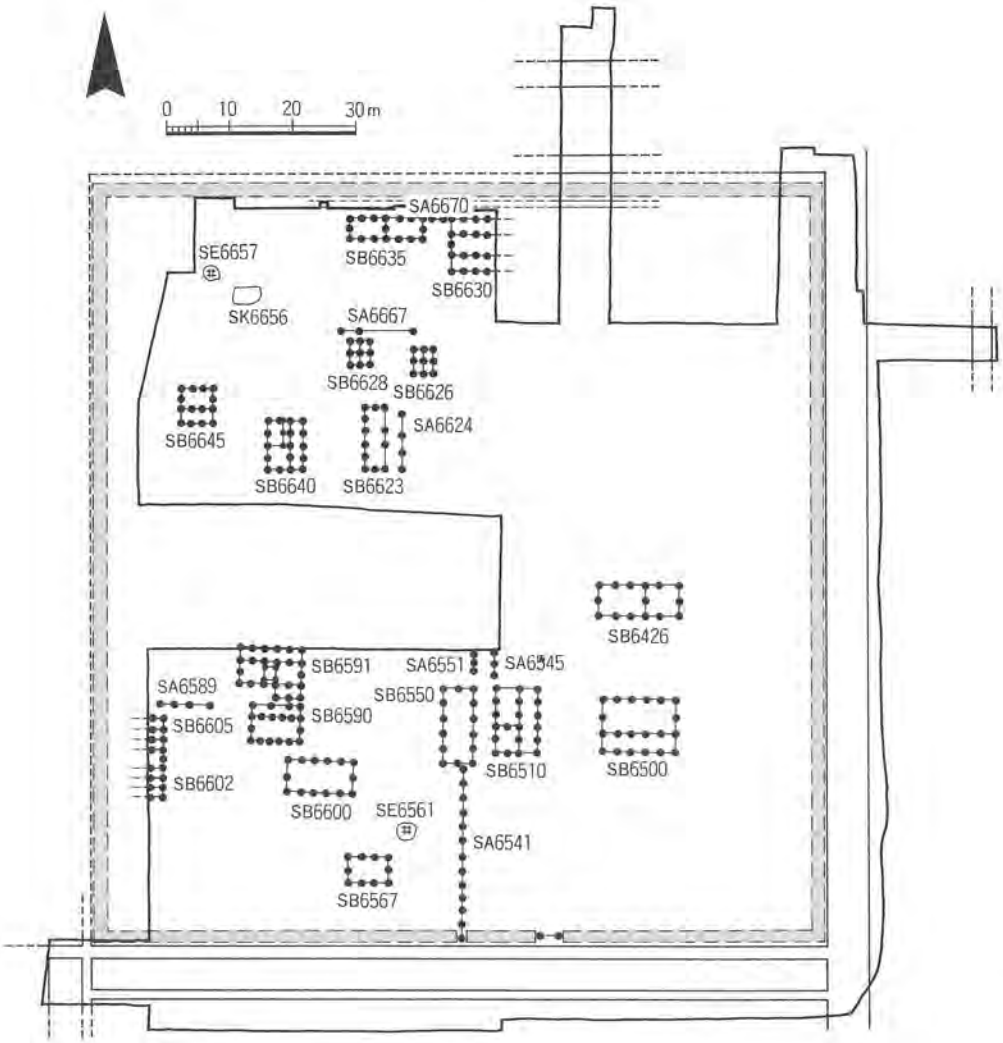


Fig. 48　IV期の遺構

SB6591は身舎柱どうしで30尺離れているが、SB6590北廂柱とSB6591南廂柱の間隔は4尺と極めて近接している。SB6590の北廂は土縁様の構造が想定され、またSB6591は内部に甕据付け穴と架台様の4柱穴SX6592をもつ。これらの遺構の特徴から、SB6590・SB6591については、倉庫または作業用建物を想定しうる。SB6600がその中心建物と位置づけられるであろう。これらの建物とSB6550で囲まれた空閑地は屋外の作業空間となる。SB6567の北東には井戸SE6561を新たに掘る。また、III期から存続する可能性のある建物として、南辺に近いSB6567と、西辺に近いSB6502・SB6505がある。

南辺西半の閉塞

このように坪の南半では、坪の中心部へ建物が集中していく様子がみられる。III期において坪南西部にあったSB6599が撤去されたことにより、III期までは開放していた坪南面西半にも、外周閉塞施設が築造可能な状況になる。ただし、これも遺構として明確な痕跡を残していない。南辺東半部では、瓦がほとんど出土しないことから土塁状のものを想定したが、西半部では周辺から瓦が出土していることから、築地塀であった可能性が高い。

一方、坪の北半は北辺中央に南北廂付の東西棟SB6630を置き、その西には東西棟SB6635がSB6630の北廂柱通りと北側柱通りを揃えて建つ。SB6630とSB6635の間隔は14.5尺で、両建物の北端をつなぐ形で東西塀SA6670を設ける。SB6635の南50尺には東西塀SA6667があり、その南10尺にSB6626、40尺に南北棟SB6623が建つ。SA6667の南にあるSB6628もIII期から存続している可能性がある。SB6623は東側柱のうち2柱を欠き、東面を開放とした可能性があるが、前面に南北塀SA6624を設けて目隠しとしている。このような平面形からは厩のような構造の建物も想定しうるであろう。SB6623の西には、南妻を揃えて東廂付南北棟SB6640が建つ。SB6523西側柱からSB6540東廂までは40尺離れている。SB6640の西30尺には南廂付東西棟SB6645を建てる。SB6635・SB6640・SB6645で囲まれた北西隅に井戸SE6652を新たに掘る。井戸のまわりには広く空閑地がある。これに対し、坪北東部には顕著な遺構がなく、SB6630の南東には空閑地が広がる。以後、北東部には建物は現われない。

坪内の生産活動

このようにIV期には、坪北東部を除いて、建物規模が拡大し、施設が充実した様子をみることができる。また坪南西部にあらわれる中規模の倉庫・作業棟の存在は、物品の扱い量が増加したことを示すものと考えられる。これは居住者の経済的な発展のあらわれとみることもできるが、建物遺構の配置は、一般の宅地としては理解しにくい状況である。一方で、東一坊大路西側溝のこの時期の堆積層から、甑炉の壁体や鞴羽口などが出土している。これらの遺物が十六坪から廃棄されたとすると、この坪で生産活動が行われていた可能性もある。

F　V期の遺構 (Fig. 49)

坪内の建物は多くが取り壊され、敷地の利用密度が低くなる。この時期まで「坪」の概念が残るかどうかは疑問であるが、十六坪は一体として利用されている。遺構の振れは、北で東へ1°00′から3°00′と、IV期に比べて若干大きい。

坪南東部では、IV期までの大規模建物が姿を消し、規模を縮小した東西棟SB6505と南北棟SB6502が建つ。SB6502はSB6505の西15尺にあり、北妻をSB6505の南側柱通りと揃えており、IV期のSB6500とSB6510の関係を継承している可能性もある。SB6502の南9尺には目隠しの東西塀SA6501がある。

坪南西部では、南北棟建物 SB6550を取り壊し、小規模な南北棟建物 SB6563を建てる。また東西棟建物 SB6600は柱抜取穴を利用して同規模の SB6601に建て替える。坪の西辺を区画する施設として新たに南北塀 SA6598を設ける。この塀は北で東へ3°30′と大きな振れをもち、東一坊坊間東小路東側溝想定位置から5ｍ東にある。坪の概念が薄れた状況を示しているのであろう。また SA6598の振れは、Ⅳ期の SB6590・SB6591の振れに近く、SA6598の建設時に SB6590・SB6591が存続していた可能性が高い。なお SA6598は、坪北西部では、その延長部分を検出していない。

その後 SB6590・SB6591を取り壊して、東西両廂付の南北棟 SB6595を建てる。Ⅴ期の建物では最も規模が大きく、この時期の中心施設と考えられる。SB6601の南に南北塀 SA6572があるが、坪内を区画するような施設ではない。井戸 SE6561はⅣ期から存続する。　中心建物

坪北西部では、建物は北西隅近くに SB6661・SB6666の２棟が建てられる。これらはⅣ期に空閑地となっていた部分にあり、Ⅳ期の建物のうちのいくつかは、この時期まで存続していた可能性がある。また、井戸 SE6657は井戸枠抜取穴に平城宮土器Ⅴを含み、この時期に廃絶した可能性が高い。

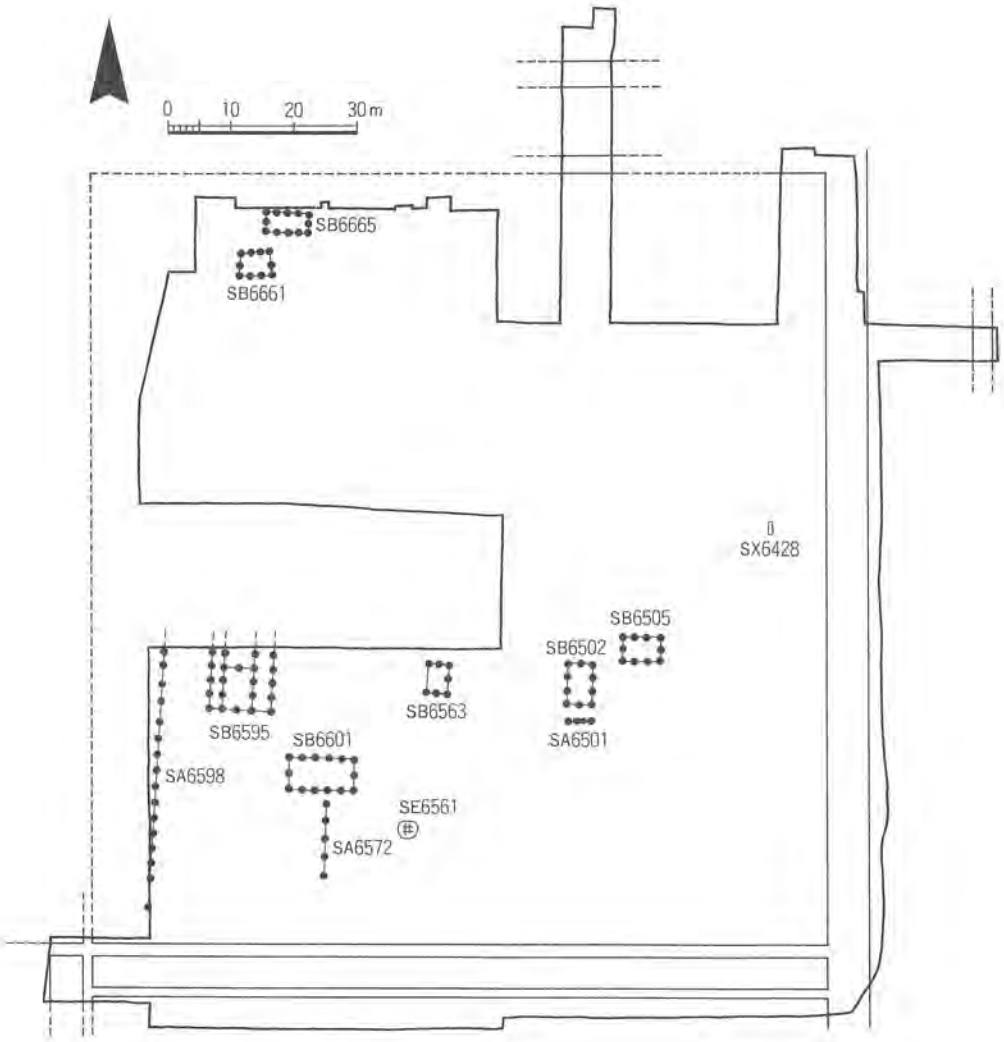


Fig. 49　Ⅴ期の遺構

木棺墓　坪東辺の東一坊大路西側溝寄りの木棺墓SX6428もこの時期の遺構である。東一坊大路西側溝は流路として存続しており、その西岸から8mほど離れている。SX6428の被葬者はこの宅地の居住者で、生活の中心である坪西半からは離れるが、敷地内である坪東辺中央が埋葬場所に選ばれたと考えられる。漆器・ガラス玉などの副葬品から経済的に裕福な階層であったと想定される。SB6595を中心居館とするV期の建物配置も考慮すれば、この時期は、在地の有力者の宅地であったと想定できるであろう。

G　VI期の遺構

敷地の利用密度はさらに低くなる。坪南東部では坪中心よりに規模の小さな建物SB6427が建つ。SB6502・SB6505は取り壊し、2条の東西塀SA6503・SA6506を設ける。坪西半では西辺の中央寄りにSB6606、北西隅にSB6664が建つ。SB6606はSA6598を撤去して建てている。SB6664の南東には井戸SE6658がある。

建物は3棟のみで、配置も散在している。おそらく、坪内の大部分は耕地化しているのであろう。都城制における「坪」の概念は、既に存在しないと考えられる。

H　ま　と　め

以上、十六坪における建物配置と坪内利用の状況の変遷について述べてきた。十六坪における遺構の変遷をまとめるにあたり、出土遺物との関係について検討しておくことにする。

坪内出土瓦　まず、坪内で出土瓦と建物の関係が問題になるであろう。大路に面した坪の北・東辺には瓦を用いた外周閉塞施設を想定したが、坪内での瓦の分布は、外周閉塞施設以外に、瓦を用いた建物が存在した可能性が高いことを示している。しかし、十六坪の建物遺構はすべて掘立柱建物で、基壇・礎石をもつ建物は確認できておらず、瓦葺の掘立柱建物を想定せざるを得ない。この場合、総瓦葺だけでなく、檜皮葺などの植物性の葺材を用いた屋根の棟部分のみに瓦を積んだ可能性もある。ただ、遺構の状況やその配置の検討からは、瓦を用いた建物を特定することはできなかった。

一方、十六坪の東では東一坊大路西側溝を坪の全長にわたって発掘し、多種多量の遺物が出土した。とりわけ祭祀関連遺物の豊富なことが指摘されているが、これらの遺物を用いた祭祀がどこで行われたかは、道路の側溝という遺構の状況から、明らかにすることはできなかった。また同側溝からは文書木簡も多数出土している。官司関連、なかでも衛府に関わる木簡が多く、これらは西側溝に沿った場所にある宮外官衙から投棄されたものと考えられる。十六坪も候補の一つとなるが、坪内の様相からはその適否を判断することはできなかった。

外周閉塞施設の変遷　今回の調査では、十六坪の四周の条坊街路を確認した。条坊街路に面する外周閉塞施設そのものは検出していないが、雨落溝・門などの存在から閉塞施設の状況を推測することにより、その築造過程をたどることができた。まず六条大路側の坪北辺に築地塀を築造している。これはI期の終りか、遅くともII期初頭までには完成していたであろう。大路に面する部分であっても、東一坊大路側の坪東辺は、II期の建物配置計画の状況からみて、北辺より遅く、宅地内の建築の造営途上に築地塀を施工した可能性が高い。七条条間北小路に面した坪南辺では、さらに外周閉塞施設の建設が遅れ、南辺東半を閉じるのは奈良時代後半のIII期である。門を伴う

閉塞施設であるが、周辺で瓦の出土が少ないことから土塁を想定した。南辺西半はIV期にようやく閉じられる。こちらは瓦の出土状況からみて築地塀であったと考えられる。坪西辺については調査が及んでおらず、外周閉塞施設の状況は不明である。ただしV期には坪の内側へ寄った位置に掘立柱塀があり、IV期までに東一坊坊間東小路東側溝に沿った閉塞施設が存在した可能性もあるが、南辺の状況からみて、III期以前には遡らないと考えられよう。このように外周閉塞施設は坪の全周を一律に整備したものではない。大路に面した北辺と東辺でも築造に時期差があるが、これが京域一般の状況であったのか、十六坪だけの特別な事情によるものかは、平城京域の発掘調査の進展を待って検討する必要があるであろう。

坪内利用状況の変遷

十六坪の坪内については、その3/4を発掘し、平城京域でも稀な調査例となった。1/4の未発掘部分はあるものの、坪のほぼ全域について利用状況とその変遷を知ることができた。

I期の十六坪は細区分せず一体の敷地として利用している。比較的規模の大きな建物があるが、その配置には計画性が認められない。こうした遺構の状況は官人の住宅とはみなしがたく、平城京造営に関わる拠点施設の一つであった可能性を指摘した。

II期には官人の宅地として建物を計画的に配置し、東南部を表向きの空間、西半を内向きの空間、北東部を居住空間と使い分けており、奈良時代の生活様式の一端をみることができる。十六坪は分割されることなく一体として利用している。配置計画は東西・南北の二等分線または四等分線を基準とする。当初敷地は400尺四方としたが、造営途上で東面築地のために東辺で10尺を減じて計画を修正した経緯を復原することができた。このII期の空間構成はIII期に継承され、官人の宅地として整備が進む状況が見られる。特に南東部では190尺を基準寸法とする整然とした配置計画があった。

IV期にはIII期の建物を一部残しつつ新たに建物を建て増し、坪内の状況が一変する。十六坪での活動がピークを迎えた時期である。建物とその配置からみて官人の宅地ではなく、東一坊大路西側溝出土の生産関連遺物と関連づけ、生産活動があった可能性を指摘した。

V期には徐々に建物の取り壊しが進み、坪西寄りの規模の大きな建物を中心として坪内が再編される。東一坊大路西側溝寄りの木棺墓の遺物などから、在地有力者の居館と位置づけた。これ以後、坪の概念が薄れ、VI期には大部分が耕地化し、小規模な建物が散在する状況となる。

一町規模の敷地利用

このように十六坪は、各期ごとに多様な活動の場となっていた。ここで注目されるのは、十六坪が奈良時代を通して、一体の敷地として一町規模で利用されたことである。従来一町規模以上の宅地は、五条大路以北に営まれる傾向があった。今回、六条大路以南に一町占地の宅地を確認したことは、平城京の全体像を考える上で重要である。朱雀大路に近い一坊で、六条大路・東一坊大路という主要大路に面した北東角であったから、一町占地がありえたのであろうか。平城京南半の発掘調査の進展によって明らかにされることを期待したい。

3　瓦　塼　類

本項では当調査地での瓦塼の使用状況、軒瓦の様相を検討する。まず各型式の編年的位置付けを述べておく(Tab. 26)。基本的には、『平城宮報告XIII』・『平城宮報告XIV』・『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告(以下、『長屋王邸報告』と略す)』に準拠するが、いくつかの型式については補足説明を要する。

6282Ca はIII期前半に置いた。6282C は『長屋王邸報告』において、6282D の一部から別笵として分離したもので、6282D と酷似する。6282D は E・H とともに恭仁宮所用の6320Aa と類似した外縁をもち、II期後半の末(恭仁宮期)に出現していたが、平城宮での使用は平城還都後と考えられている。C もDに準じIII期前半とした。

6346A は従来出土例がない型式であるがI期に置いた。根拠は、①中房の蓮子が二重にめぐり、外区の珠文が密で、藤原宮式と共通する古い様相である。②外区ないし外縁に唐草文をめぐらす型式は他に6345・6348があり、いずれもI期に置かれている。③外縁は上面をヘラケズリする傾斜縁IでI期に多い。

6668C も従来出土例がない型式であるが、II期前半に置いた。既存の6668A はI期前半に置かれており、花頭形の基部先端が左右に開き上外区界線につかず、段顎I Lである。それに対し6668C は、花頭形の基部が上外区界線につかないものの平行に伸び、段顎I Sであり、6664ではII期前半に置かれる6664D・F と共通する点から、II期前半に下げて考える。

6691A については、『平城宮報告XIV』と『長屋王邸報告』で見解に差がある。『平城宮報告XIV』では、738(天平10)年頃～天平宝字年間(757～765)まで製作され、曲線顎Iから曲線顎IIへの変化が、恭仁遷都後の740(天平12)～741(天平13)年頃に生じ、平城宮・京への供給は平城還都(745)後だと考えている(『平城宮報告XIV』)。しかし『長屋王邸報告』では、恭仁遷都直前に遡る可能性がある SD5100上層出土の6721に曲線顎IIがみられることから、6691A の曲線顎II も、恭

Tab. 26　出土軒瓦の時期

I　期	軒丸瓦	6272B・藤原宮式型式不明・6346Ab・6346Ab
	軒平瓦	6641J・藤原宮式型式不明
II期前半	軒丸瓦	6285A・6304L
	軒平瓦	6668C
II期後半	軒丸瓦	6012B・6291Ab・6308C・6314A
	軒平瓦	6681A・6710A・6710C・6716C・6721A・6721Gb
III期前半	軒丸瓦	6282Bb・6282Ca
	軒平瓦	6681C・6691A・6721C
III期後半	軒丸瓦	6143A
	軒平瓦	6703A
IV期前半	軒丸瓦	出土せず
	軒平瓦	6663F・6663J
IV期後半	軒丸瓦	出土せず
～ V 期	軒平瓦	出土せず

仁遷都以前に遡る可能性を示唆した。もっとも、「6691Aの笵傷からみて、左京三条二坊への供給が主に還都後であったことは動かない」とも述べている。SD5100上層から曲線顎IIの6691Aが1点出土しているのは注目されるが、ここでは平城京への供給が一般化する時期も考慮して、当調査地の6691A(曲線顎II)はIII期と考えておく。

6703AはIII期後半に置いた。6703Aは平城薬師寺で出土しており、天禄四(973)年の薬師寺の火災後に、伊予から搬入されたとの見解[1]があった。しかし、飛鳥・山田寺で6143Aと組む奈良時代の瓦であることが明らかとなった[2]ため、『平城宮報告XIII』での6143Aの年代観に基づいてIII期後半とする。

6710A・CはII期後半とした。ただし『平城宮報告XIII』ではIII期後半に置いている。根拠は、唐草第3単位の主葉が巻き込む特徴がIII期後半以降の6663や6702と共通すること、朱雀大路沿いの調査で6316G(III期後半)と組んだことであり、羅城門付近ではIV期前半にも使用されたと考えている。しかし『長屋王邸報告』では、恭仁遷都直前のSD5100木屑層から6710Cが出土したこと、縦に丁寧にケズリを施した直線顎が6721Gに近く、6721Gが恭仁遷都(740年)以前に遡り、II期後半でも末まで下らないことから、断定は避けたものの、6710Cも遡る可能性を示唆した。ここではSD5100木屑層での出土を重視して、II期後半とする。

6716CはII期後半に置いた。大安寺式に属し、道慈が主導した天平年間の大安寺造営に用いられた型式である。

6721の変遷と時期については、『平城宮報告XIII』と『長屋王邸報告』とで見解差がある。『平城宮報告XIII』ではG・Ha(II期後半)→A・C(恭仁宮期・II期後半末に出現)→D・E・F(平城還都後・III期前半に出現)→j・K・I(IV期)とした。これに対し『長屋王邸報告』では、G・Ha→Gb(曲線顎IIのもの)・Hc・E・F→A・C・Dとし、恭仁宮で新調したC以外を恭仁遷都以前と考えた。両報告で、直線顎のG・Haが他に先行し恭仁遷都以前に出現したこと、曲線顎IIのCが恭仁宮期であることは、見解が一致する。両者の変遷観の差は、曲線顎IIのA・D・E・FとCとの先後関係をどう見るかの差であり、その差の成因は、平城宮・京で曲線顎IIの6721が出現する時期を恭仁遷都以前と見るか、平城還都以後と見るかの差に帰される。文様の変化については、『平城宮報告XIII』ではA・C・D・E・F・Hを一括してGとI・Jの間に置いているが、『長屋王邸報告』では唐草と外区珠文の位置関係から、E・FをG・Hと近く見て古く位置付け、A・DをCとともにG・Hの配置原則が変化した段階と見ている。E・F・Hに比してA・C・Dに単位文様の崩れ・硬化が明瞭に見られるわけではないが、作笵の時間差が唐草と外区珠文の配置原則の差に現れると見たのである。ここでは『長屋王邸報告』の見解に従っておく。

A　瓦の使用状況の検討

ここでは、まず、十六坪とその周辺部における瓦の出土量と分布状況について、出土地別に検討する。

i　東一坊大路西側溝

丸瓦が209.7kg(全体の51%)、平瓦は691.5kg(同49%)が出土した。西側溝内での地点別出土量を知るため、東西方向に3mごとに区切って、出土した丸瓦・平瓦の重量比を調べた(別図3・

丸・平瓦の集中地

4)。その結果、丸瓦と平瓦の分布傾向はよく一致し、七条条間北小路との合流点、橋SX6480付近、坪東辺中央付近、橋SX6420付近、六条大路南側溝との合流点に集中する。またこの傾向は、人面墨書土器や人形など祭祀関連遺物の分布とも大勢で一致している。この分布傾向の成因について、祭祀関連遺物に限った場合には、道路の交差点や橋、あるいは坪を南北に2分する位置など、特定の場所から祭祀の過程で投棄された結果との解釈も可能だが、瓦類の場合は祭祀と無関係であるから、そうした解釈はできない。瓦自体は屋根からの落下物と投棄された廃棄物であって、その分布には、水流による二次的移動と、橋などの障害物による滞留といった原因が大きく作用していると考えるべきだろう。しかも遺物の分布傾向は層位を問わず類似するから、溝の存続期間を通じて堆積傾向は変わらなかったと言えよう。

瓦葺築地塀の存在

iiで述べるように、西側溝に面した十六坪東面には、瓦葺築地塀の存在を想定している。しかし、西側溝内の遺物分布の成因に上記のような事情を認め、現状の分布が水流と障害物の影響の結果とすれば、当調査区内の西側溝出土の瓦類を、十六坪東面築地に葺かれた瓦に限定する事はできず、上流から流れ込んだものも有ると考えるべきであろう。六条大路南側溝との合流部に特に多い点については、③で述べるように、六条大路付近から多量に瓦が出土する点を勘案して、六条大路側溝からの流れ込みが相当量あると考えられよう。

一方、軒瓦については、軒丸瓦が16点(全体の76%)、軒平瓦が18点(同75%)出土している。軒瓦の数が多いのは、六条大路南側溝との合流部であるRM～ROライン、およびそこから18～27m南下したRD～RGラインである。後者については、丸・平瓦が特に集中する地点ではないが、六条大路南側溝との合流部から橋SX6420にかけての遺物が多い範囲には含まれている。この二箇所の軒瓦集中箇所は坪の東北隅付近に偏るから、上流からの流れ込みの可能性もあり、絶対量も決して多くない。側溝沿いの築地に軒瓦を葺いたとすれば、さらに下流、とくに橋SX6480の上手や七条条間北小路との合流部にも集中しそうであるが、数点ずつ見られるに過ぎない。こうした状況から、築地には軒瓦を葺いていなかったと考えられる。軒瓦を用いない瓦葺築地の存在は、西隆寺[3]・平城京左京三条一坊十四坪[4]の報告でも指摘されている。

軒瓦を用いない築地

出土した軒瓦の内訳は、以下の通りである。なお、(　)内は出土点数を示す。

軒丸瓦：6012B(1)、6272B(1)、藤原宮式型式不明(1)、6282Bb(1)、6282Ca(1)、6285A(1)、6291Ab(1)、6304L(1)、6308C(1)、6314A(1)、6346Aa(1)、6346Ab(1)、型式不明(4)。

軒平瓦：6641J(1)、藤原宮式型式不明(1)、6663F(1)、6663J(1)、6668C(1)、6681C(1)、6691A(4)、6703A(1)、6710A(1)、6716C(1)、6721A(1)、6721C(1)、6721Gb(1)、型式不明(1)。

ほとんどが平城宮と共通する型式であるが、後述するように平城京域に多い型式を少数含む。時期はII期後半～III期前半が多いが、平城宮・京を通じてこの時期の瓦が種類・量ともに多いので、一般的傾向を反映しているに過ぎない。

ii　十六坪内

丸瓦・平瓦の出土地には、顕著な傾向がある。東一坊大路西側溝の西岸から9mの範囲、六条大路南側溝の南岸から7mの範囲、およびに坪の西半部にまとまり、坪の東半部には希薄である。

a）東一坊大路西側溝の西岸から9mの範囲には、丸瓦12.9kg(全体の3%)、平瓦63.56kg(同4.5%)が分布する。この出土量は多くはないが、大路に面した場所であること、瓦の分布が西側溝に沿った帯状を呈すること、西側溝内の丸・平瓦の出土量が多いことから、坪の東面には瓦葺の築地の存在を想定できよう。なお、この範囲の軒瓦は軒丸瓦1点、軒平瓦2点にすぎず、築地に軒瓦を葺いていなかったとする先の推定の根拠に加えられよう。

b）坪の西半部には、丸瓦85.0kg(全体の20.6%)、平瓦275.8kg(同19.6%)が分布する。細かくみると、坪の中央を心として中央寄りに少なく、同心円的に外に行くほど多くなる傾向があり、必ずしも検出した建物の疏密とは対応しないし、時期区分の最終段階の建物配置とも対応しない。しかしこれは当然で、ある建物を使用していた時には、その周囲に瓦が散乱しても清掃するであろうし、ゴミを片付けるのは敷地の周縁部に向かってであろう。あるいは、瓦の一部が条坊道路に面した区画施設に由来するのなら、坪の隅では南北と東西の2方向からの瓦が重複するため、多くなるといった事情が想定できる。つまり現状の分布には片付けなどの二次的移動の影響が当然加わっているとみなければならないであろう。

丸・平瓦の分布は建物の疎密と対応しない

一方、坪の西半部の東端に着目すると、坪の南西部では、丸・平瓦の分布範囲の東限が直線状をなし、それがSA6540の位置とよく一致する。北西部では、SB6630の西妻とSB6623をほぼ東限としつつも、分布範囲の境界線は不明瞭である。これもSA6540のような区画施設が存在しないことと対応する。そうすると、瓦の分布範囲の東限については、あまり撹乱されていない可能性が大きくなるから、先に考えた片付けなどの二次的移動の影響は、主として、坪の周縁部について考えるべきなのであろう。

丸・平瓦の出土量を見ると、南西部に比して北西部の方が多い。たとえば丸瓦は北西部に60.0kg(全体の14.6%)、南西部に25.0kg(同6.1%)、平瓦は北西部に165.6kg(同11.7%)、南西部には110.2kg(同7.8%)が分布する。建物の規模では、南西部の方に大きいものが多いのとは対応しない。とくに瓦が集中する北西部の西半には小規模な建物が多いのであるが、小さくても瓦を葺く必要があった建物を考えるべきであろうか。瓦葺建物の候補として倉庫があるが、北西部の高床建物2棟(SB6626・6628)は、いずれもかなり小規模で、瓦の分布範囲の東端寄りに位置するから、北西部の瓦の多くをこの2棟に帰するのは無理がある。高床ではない物品庫などを想定する必要があるであろう。

軒瓦は、坪の南西部南端から軒平瓦3点、坪の北西隅から型式不明軒丸瓦1点が出土したにすぎず、調査面積からみてきわめて少ない。築地と同様に、瓦葺の建物であっても軒瓦を用いていなかったのではなかろうか。坪の南西部南端出土の軒平瓦3点は、6710Aが1点、6710Cが2点であり、すぐ南側の七条条間北小路北側溝からも6710C1点が出土しており、同一型式がまとまる点が注目される。

c）坪の東半部では、条坊道路に面した区画施設に由来する瓦を除けば、ほとんど出土していない。ここには十六坪の中心施設と考えられる大規模な建物SB6425・6426・6500・6510があるが、これらの周囲にも瓦はほとんど無く、柱の抜き取り痕跡からも全く出土しない。格が高い建物群と考えられるから、これらの建物を桧皮葺と想定したい。

中心的な建物は桧皮葺

d）六条大路南側溝の南岸から7mの範囲については、iiiで六条大路に含めて述べる。第252次調査区の六条大路に延ばした北西拡張区では、この範囲まで瓦が分布し、それ以南には全く

無いことが確認されたため、六条大路沿いの築地に由来する瓦の分布範囲をそこまでと考えた。なお第255次調査区では六条大路南側溝は調査区外となるが、六条大路南側溝の南岸から7mの位置が、調査区北壁から1.5mとなるため、それ以北から出土した瓦は、六条大路沿いの築地に由来すると考え、b)の坪内出土瓦の集計から除外した。

iii　六条大路

第252次調査区の六条大路に延ばした北西拡張区では、六条大路を8m検出したにすぎないが、路面・側溝、その両側から、丸瓦が43.6kg(全体の10.6%)、平瓦が135.8kg(同9.6%)出土した。このうち南北両側溝で丸瓦の88%、平瓦の75%を占める。第255次調査区の北壁から1.5mの範囲で出土した分も含めると、丸瓦が49.9kg(同12.1%)、平瓦が153.4kg(同10.9%)となる。この出土量からみて六条大路の両側には瓦葺の築地が考えられるが、軒瓦はなく、十六坪の東面と同様に、軒瓦を用いない瓦葺築地であろう。

六条大路沿いには軒瓦を用いない築地

iv　七条条間北小路

北側溝からは丸瓦9.96kg(全体の2.4%)、平瓦39.1kg(同2.8%)、南側溝からは丸瓦16.52kg(同4.0%)、平瓦56.6kg(同4.0%)が出土した。南北両側溝ともに、その東半と西半で出土量に大きな差があり、北側溝では丸瓦の80%と平瓦の84%、南側溝では丸瓦の82%と平瓦の89%が、西半部から出土している。こうした偏りについて、側溝出土の瓦が側溝に面した区画施設に由来するのか、坪内の建物に由来するのかによって、考え方が違ってくる。

側溝出土の瓦がもっぱら坪内の建物に由来したとすると、瓦の出土量の東西での差は、単に坪内での状況を反映したに過ぎないことになる。

一方、側溝出土の瓦が、側溝に面した区画施設に由来するとすれば、十六坪の南面、十五坪の北面ともに、その西半と東半で区画施設での瓦の使用の有無が異なり、西半部では瓦を用いた可能性が強くなる。ただし瓦の量が少ないことを考慮すれば、総瓦葺ではなく、部分的な使用に留まるであろう。十六坪の南面、十五坪の北面ともに、掘立柱の区画施設は検出されていない。したがって、築地塀か土塁が区画施設の候補となる。十六坪については、西半が築地、東半が土塁であったと推定している(第V章2参照)。ただし、坪内で検出した遺構からみて、東半部の方が格が高いと想定できるから、東半により簡略な土塁を設けたか疑問はある。東半・西半を通じて土塁、ないし上げ土塀で、西半について何らかの形で部分的に瓦を使用した、と考える余地はある。

いずれにせよ、十五坪北面が十六坪南面と同じ様相を示すことが問題となる。十五坪でも東半に瓦葺建物が無かったのであろうか。十五・十六坪ともに、その東半が湿気などの原因によって居住に適さず、ある時点で放棄されたといった事情を想定すれば、東半の放棄後に、十五・十六坪西半に瓦葺の施設が作られるようになった可能性を考えねばなるまい。十六坪ではV期がそれに当たる可能性がある。

なお軒瓦では、七条条間北小路の東端部から型式不明軒丸瓦1点、西半部から6710C1点が出土したにすぎない。6710Cについてはii b)で述べたように、坪内出土の3点と共通した型式であり，出土地もまとまる。

B　出土軒瓦の問題点

当調査地で出土した軒瓦は僅かであるが、①寺院と共通する型式が見られる点、②平城宮に少なく京域に多い型式が見られる点、には注意を要する。

①寺院と共通する型式のなかで、6143A は平城薬師寺で10点出土している[5]。出土地別内訳は、西僧房７、東僧房１、東僧房北方１、本坊北トレンチ１である。飛鳥・山田寺でも東面回廊東外から４点、北面回廊内側で１点、講堂東側で１点出土し、奈良時代の修理の際に用いられたと考えられている[6]。ほかに飛鳥・川原寺で３点[7]、平城京右京六条一坊二坪沿いの朱雀大路で２点[8]、出土している。

6703A は平城薬師寺で８点出土している[9]。出土地別内訳は、講堂１、西僧房５、東僧房１、西回廊１である。飛鳥・山田寺では東面回廊付近で９点、飛鳥・川原寺で１点、愛媛県真導廃寺[10]でも15点見られる。山田寺では6143A と組むことが判明し、平城薬師寺・川原寺でも組み合うと推定されている[11]。6703A は、かつては愛媛県真導廃寺との同笵関係に基づき、薬師寺の天禄４(973)年の火災後に造寺国制によって伊豫国から運ばれたと推定されていた[12]。真導廃寺では6143A とはまったく異なる単弁蓮華文軒丸瓦と組む。今の所、6703A がどこで製作されたか不明であるが、薬師寺・山田寺・川原寺で6143A との組合せが成立するなら、伊豫ではなく「畿内」での製作の可能性が高まろう。ただし、何れの寺でも出土数が少なく、本来どこの所用瓦として製作されたのか、また同笵品が真導廃寺で出土する理由は問題として残る。真導廃寺例は薬師寺・山田寺・川原寺例と製作技法は共通するとされている[13]が、顎形態には差がある。また、6703A の瓦当文様は、平城宮・京出土の他の軒平瓦の瓦当文様に類例がない異質なものであり、文様の出自も今後の検討課題である。

6641J は今の所、当調査地と平城薬師寺のみで出土している。

6716C は大安寺の道慈造営期の瓦で、大安寺僧房で多数出土するほかは、大安寺の西に接した左京六条三坊十三坪で６点[14]、法華寺旧境内で１点[15]見られるに過ぎない。

薬師寺・大安寺と共通する型式

当調査地で見られる上記諸型式は薬師寺・大安寺と共通し、両寺の南大門前を結ぶ六条大路が当調査地の北を通る事を勘案すれば、両寺所用瓦の一部が六条大路沿いの京域に搬出・使用された可能性も考えられる。ただし6716C 以外の上記諸型式は、各寺院でも少量しか出土せず、主たる供給先が不明であるから、寺院から直接当地へ搬入されたと速断はできない。寺院と共通する型式が京内の宅地で見られる背景は、一様・単純ではないと推定されるから、今後のさらなる検討を要する。

②平城京域に多い型式として、6272―6644、6663F・J、6710A・C を取り上げ、まず平城京域での出土傾向を調べた(別表14, 別図５・６)[16]。これらの諸型式の分布状況には、どのような背景が考えられるであろうか。出土地の性格も併せて検討することにする。

6272A・B の分布

6272A・B は、左京三条二坊一・二・七・八坪を占める長屋王邸、右京九条一坊十二坪付近の観世音寺推定地の周辺部で集中するほか、長屋王邸と法華寺の間に多い。他は散発的である。6272と組む6644の分布も、平城宮とその周辺、京内寺院でわずかに増えるほかは、大勢として一致する。

6272―6644について岸本直文は、6272―6644の本来の供給先を奈良時代以前に遡る寺院と推

6272—6644出土地の性格

定し、高市皇子—長屋王との関係を示唆しつつも、まとまった出土量をもつ観世音寺の性格や長屋王との関係が不明であるため、断定するには至らなかった[17]。長屋王邸・観世音寺推定地以外では、長屋王邸に隣接する坪と左京二条二坊の南東部に目立つが、これらの場所が長屋王邸と何らかの関係があったのかは不明である。左京二条五坊九・十六坪北郊は「佐保楼」の候補地とする説もある。

6710A・C出土地の性格

6710A・Cは、かつて右京六条一坊二坪沿いの朱雀大路(1974年度)で8点発見され、6316との組合せが判明し、主として造京用の瓦の可能性が提議されている[18]。左京二条二坊五坪では遺構変遷の「e期」に、二条大路に面した築地塀に用いられた。「e期」の五坪は三・四・六坪を含めて梨原宮であった可能性が考えられている[19]。西隆寺では8点出土したが、西隆寺の創建は神護景雲元(767)年であり、6710A・Cはそれに先行する。寺地は右京一条二坊九・十・十五・十六の4坪を占め、出土地点は散在するから、坪あたりの出土数は決して多くはない。注目すべきは、奈良市教育委員会が調査した右京二条三坊四坪で52点、隣接した三・六坪でもそれぞれ3点・5点出土し、四坪を中心とした一郭が、6710A・Cの主要供給地と見られる点である。四坪は奈良時代後半には公的施設であったと考えられている[20]。なお、6710A・Cの系譜を引く6710Dは、6316Mと組んで称徳天皇山荘推定地[21]、6319Aと組んで行基建立の長岡院推定地(菅原遺跡)[22]から出土している。

6710A・Cと組み合う軒丸瓦は、多量に出土した右京二条三坊四坪では、それに見合う出土比率を持つ型式が無いため不明とされているが、朱雀大路などでは6316と組んでいることから、6316の分布も調べた。なお、6316の年代観については、外縁の形態などにかなりのヴァラエティーがあることからA・E・GをIII期後半、B・C・D・I・M・NをIV期前半、F・H・KをIV期後半とする『平城宮報告XIII』と、A・E・D・Sなどが6710A・CとともにII期後半まで遡る可能性を示唆する『長屋王邸報告』の見解があり、6710A・Cと同時期のものが特定しにくいが、A・E・Gについて調べた結果、右京二条三坊で1点しか出土していない点を除けば、6710A・Cの出土傾向と一致する。

6663F・Jの分布

6663F・Jは時期が同じで文様が類似するため一括して扱う。6663F・Jは、左京二条二坊五坪に19点と多く、他には左京三条二坊六坪、左京四条二坊一・十五・十六坪にまとまる。左京二条二坊五坪では6710A・Cと同様に、遺構変遷の「e期」に、二条大路に開く南門や南面築地塀に用いられた。「e期」の五坪に梨原宮の可能性があることは先に述べた。左京三条二坊一・二・七・八坪の「E期」は、官衙か邸宅か確定し難いとされている。左京三条二坊六坪は、奈良時代後半には園池を中心とする「離宮施設または親王などの邸宅」であったと推定されている[23]。左京四条二坊一坪は、奈良時代後半には大きな正殿を回廊で囲む遺構があり、市原王の邸宅の可能性も考えられている[24]。左京四条二坊十五・十六坪は藤原仲麻呂の田村第推定地で、6663F・Jの製作時期(IV期前半：天平宝字年間)は、仲麻呂の存命期にあたる。

6663F・Jと組む6227A・Dの分布は、6663F・Jが多い左京二条二坊五坪で2点、左京三条二坊六坪で0点と少なく、相違もあるが、左京四条二坊一坪で4点、左京四条二坊七坪で6点、左京四条二坊十五坪で7点と、大勢として6663F・Jと出土傾向を等しくする。

このほか6346Aa・6668Cは、新型式であって現状では平城宮から出土していないが、今後の出土傾向に注意する必要があるであろう。

かつて、6316—6710の組合せが、右京六条一坊二坪沿いの朱雀大路で、また6316—6711の組合せが羅城門付近で確認され、主として造京用の瓦の可能性が提議されている[25]。造京用と言っても、京域で瓦を葺いた対象には、大路沿いの築地や羅城門のような条坊に関わる施設、京内に設けられた官衙や離宮などの公的施設のほか、貴族の私邸などが考えられ一様ではない。『続日本紀』には、724(神亀4)年に、五位以上の貴族と六位以下や無位でも裕福な庶民に、屋根に瓦を葺き、軒や柱に朱を塗り、壁は白い漆喰仕上げにすることを奨励した。実際に庶民が瓦、とくに軒瓦を葺いた可能性は低いから、庶民はおくとしても、貴族がいかにして瓦を調達したのか、たとえば、官が宮用・京用に製作した瓦の一部を何らかの手段で入手したのか、貴族が独自に製作させたのか、検討の要がある。

すでに述べたように、6272—6644、6663F・J—6227A・D、6710A・C—6316A・E・Gの京内での分布は、漫然と広がっているのではなく、いくつかの集中地があり、まとまって出土した場所は、いずれも高位の貴族の邸宅あるいは公的施設と推定されている。したがって、これらの型式は条坊関連施設での使用を主目的に製作されたのではなかろう。可能性として、複数の集中地のうちで特定の施設の造営を契機に製作され、余所へは二次的に供給された場合と、最初から複数の供給先を想定して製作された場合が考えられる。何れの場合でも製作の主体が官であったのか、貴族であったのかが問題となるが、6663F・J—6227A・D、6710A・C—6316A・E・Gの場合、集中地の中に官の施設が含まれること、貴族の邸宅で出土する場合には、氏が異なる複数の邸宅で共有すると推定できる点からみて、製作主体が単一の貴族であったとは考え難い。平城宮での出土がないか非常に少ない型式ではあるが、その製作には官の関与を考えたい。複数の貴族の邸宅に共有されている点からみて、他の平城宮で多く出土する型式と同様に、官が製作した瓦の一部を複数の貴族が入手する途が開かれていたのであろう。ただその場合、平城宮でほとんど出土しない京用とみられる型式が出現した原因が問題となるが、6663F・J—6227A・D、6710A・C—6316A・E・Gについては、離宮・宮外官衙などの宮外施設への供給を主目的に製作されたからだと考えたい。もちろん、「京の瓦」全般にこれが適用できるとは考えられず、今後、他の型式についても同様の検討を行う必要があろう。

製作には官が関与

1）山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集VI』1980
2）花谷　浩「山田寺軒平瓦の概要と主要堂塔の造営・修理」『山田寺学報検討会記録Ⅰ』1995
3）小沢　毅「西隆寺創建期の軒瓦」『西隆寺発掘調査報告書』1993
4）小沢　毅「瓦塼」『平城京左京三条一坊十四坪発掘調査報告』1995
5）山崎信二「瓦塼」『薬師寺発掘調査報告』1987
6）佐川正敏「山田寺出土軒丸瓦の概要と堂塔の造営・修理」『山田寺学報検討会記録II』1995
7）奈文研『川原寺発掘調査報告』1960
8）奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974
9）山崎信二「瓦塼」『薬師寺発掘調査報告』1987
10）愛媛県教育委員会『伊豫国真導廃寺跡発掘調査報告書』1977
11）花谷　浩「山田寺軒平瓦の概要と主要堂塔の造営・修理」『山田寺学報検討会記録Ⅰ』1995
12）山崎信二　註1)前掲書

13) 花谷　浩　註２)前掲書

14) 奈良市教委『奈良市概要昭和58年度』1984

15) 奈文研『昭和57年度平城概報』1983

16) 1994年度以前調査分について集計した。奈文研調査分は未報告資料も含み、奈良市調査分は既報告の数字のみを記した。条坊関係施設からの出土品は近接した坪に含めた場合がある。

17) 岸本直文「考察　瓦塼類」『長屋王邸報告』1995

18) 奈良市　註８)前掲書

19) 渡辺晃宏「二条大路木簡と皇后宮―二つの木簡群をめぐって―」『長屋王邸報告』1995

20) 奈良市教委「平城京右京二条三坊四坪・菅原東遺跡の調査　第293次」『奈良市概要平成６年度』1995

21) 奈文研『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』1984

22) 菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室『菅原遺跡』1982

23) 奈文研『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』1986

24) 奈文研『平城京左京四条二坊一坪』1987

25) 奈良市　註８)前掲書

4　土　　器

A　十六坪周辺の土器埋納遺構

i　埋納遺構の概要と分析

今回の調査では、坪の周辺部に土師器甕を横位に納置した土器埋納遺構を計５基検出した。六条大路の路面上にSX6448、東一坊大路では、SD6400の西岸部にSX6485が１基と、七条条間北小路との交差点付近では、SD6400の東岸部にSX6460・6461が近接して２基あり、東一坊坊間東小路の路面上で、七条条間北小路との交差点にSX6533がある。土器の周辺には掘形を持ち、意識的に埋納したことは明らかで、主軸をほぼ南北にとる点で一致している。埋納した土器はSX6461に球形の胴部を持つ甕Ａが１点ある他は全て長胴の甕Ｃであり、SX6533が単体であるのを除き、２個の甕の口縁部を合わせ口にして用いている。こうした埋納遺構は平城京では初めて検出したもので、全て条坊に関連した場所に設けている点が注目される。

埋納遺構の分布

合わせ口

甕Ｃは今回の調査では、他に七条条間北小路南側溝に掘られた祭祀土坑SX6530と、坪内の井戸SE6653からも各１点出土している。SX6530出土のものは墨の残存が不良だったものの、墨書人面土器として用いていた。また、SE6653の年代は平城宮土器IIに属するもので、これらの甕Ｃの年代の一端を推測することができる。甕Ｃは年代による差が食器類に比べてあまり顕著ではないとは言え、出土した甕Ｃは形態、技法的に極めて類似している。口縁部はやや内彎しながら外に大きく開き、端部が内側に肥厚する。胴部は卵形をした長胴であるが、口径と器高の比率はおよそ１：1～1：1.2の範囲に収まる。胴部最大径は中ほどにあり、口径と同じか、やや小さい。底部は丸底である。調整は、外面にはハケ目を施し、胴部はそのまま残すが、口縁部は後にヨコナデを加える。内面は口縁部、胴部ともにヨコナデで調整するが、口縁部にハケ目を残すものも１点だけ見られる。胴部内面にハケ目や削りを持つものはない。

土坑を掘って甕を埋納した例は、畿内およびその周辺で、管見に触れた限りでは40遺跡、48例(別表９)ある[1]。長岡京と平安京の例は、同じ都城遺跡の条坊に近接して設けたものとして特に注目される。埋納した土器は甕を合わせ口にしたものが最も多く、16例ある。恭仁宮下層の例では、甕Ｃと竈を合わせ口にしていた。甕を単体で用いるのは７例あるが、土師器皿、鉢や須恵器の甕片で蓋をするものもある。東大阪市や八尾市周辺の河内地方中・南部では、甕Ｃの代わりに羽釜を使用する例が多い。

都城での例

こうした土師器甕を埋納する方法は、器種と甕の置き方によって大きく３つの類型に分けられる。第一の類型は１～５・７・９～11・16・26・27・33の例であり、甕Ａを正位に埋納する。これらは長原遺跡例を除いて、すべて蓋を伴うと考えられ、分布は藤原京、平城京、長岡京の都城遺跡が主体である。長岡京のSK12では内部に曲物を入れ、銭貨と横櫛を埋納していた。また、西隆寺のSK499は、回廊の東北隅の中央間の礎石据付穴に納置したもので、内部には銭貨を織物でくるんで入れていた。第二の類型は甕を逆位に置くもので、６・８・12～15がこれにあたり、甕自体が蓋となる。使用する土器は球形の体部を持つ甕Ａ・Ｂに限られ、平城京のみで

埋納遺構の分類

検出している。甕の下には土師器皿Cを置き、金箔やガラス小玉などを納置しているものが多く、奈良三彩の小壺を持つものもある。こうした状況を考えると、第一、第二の類型はすべて地鎮に関するものと考えられる。長原遺跡例はやや特殊であるが、地割りの境界を示すものと解釈されており、その際の祭祀に関わるものであろう。その他が第三の類型で、使用する土器は甕Cや羽釜という長胴の器形が多く、埋納法は横位である。

地　鎮

縄文時代には深鉢を土坑内に埋納した例が多くあり、墓であると考えられている。土器内から成人の骨が出土した例もあるが、多くは小児埋葬であろう。この習俗は後の時代にも見られ、甕や埴輪を棺とし、口縁部に他の土器等で蓋をして埋葬することが行なわれていた。今回検出した埋納遺構も、こうした事例や合わせ口にしている点を考えると、人間の遺体を埋葬した墓であると考えられる。第Ⅴ章1に記してある様に、甕の内部の土壌を脂肪酸分析した結果、人間に起因する脂肪酸を検出したこともこの想定を裏付ける。問題は被葬者の年齢であるが、土器の大きさから、成人をそのまま埋葬することは不可能である。また、火葬墓の場合は骨が内部に残っていることが多く、使用する土器の器種は須恵器壺Aが最も多い。他には土師器甕A・Bが見られる程度で、今回検出した埋納遺構の土器とは明らかに異なる。この様な点から、第三の類型は小児をそのまま埋葬した可能性が最も高い。

脂肪酸分析

小児埋葬

ii　古代における埋葬の特質

奈良時代の埋葬は、『喪葬令』によって平城京内に遺体を埋葬することは禁じられており、調査事例から平城京の北方、東方、南方に葬地があったと考えられている[2]。そうすると、京内の条坊に埋葬することは令の規定に反することになるが、佐保川の河川敷から人骨が出土し、死体を放置したと考えられる例[3]もあり、厳密な運用をしなかった場合もあったのであろう。特に、今回検出した埋納遺構は小児を埋葬した可能性が高いものであり、社会の一員となる前に死亡した人間[4]については、特殊な取り扱いをしたとも考えられる。

再生の思想

埋納遺構をわざわざ条坊に選地して設けている点については、死者の再生を願う思想に関連するものであろう。縄文時代の埋甕葬は竪穴住居の入口に設けることが多く、人が出入りの際に踏むことによって再び胎内に宿り、生まれ変わることを願ったと考えられている。同じ様な事例は民俗例にも見られ[5]、奈良時代にもこうした思想があったことは十分に考えられる。また、仏教には輪廻転生の思想があり、死んでから他の生物に生まれ変わるという話が仏教説話の中に多く出てくる。再び人間として生まれ変わることを願ったために、人間が多く通行する条坊に死んだ小児を埋葬したのであろうか。

平城宮、および平城京では長胴の甕Cの出土はそれほど多くはなく、宮内のSK219[6]・820[7]、SD1900[8]や、京内では左京三条二坊のSD5100[9]や左京八条一坊六坪のSG3500[10]、右京八条一坊のSD920[11]などで少量が出土しているに過ぎない。出土した甕Cを見ると、器形、調整などは千差万別で、客体的な存在であったことが知られる。平城宮や平城京では、球形の体部を持った「都城型」[12]と呼ばれる甕A・Bをもっぱら煮炊きに使用していたのである。

それでは、今回検出した甕Cは、どの地域との関連を想定すべきなのであろうか。8世紀代にも甕Cを用いた埋葬を行なっている地域は、河内地方、山城地方、伊勢地方に限られる。甕Cは古墳時代の土器の系譜を引くもので、6世紀の段階では各地で多く見られるが、7世紀に

甕Cの分布

なると量を減じ、飛鳥時代を経て奈良時代まで連続し、9世紀には殆ど姿を消す。8世紀の段階で甕Cが多く分布する地域を見ると、近江地方、伊勢・伊賀地方、和泉・紀伊地方があげられる。近江地方のものは従来「近江型」[13]と呼ばれているものにあたり、口縁部が内彎しながら開き、胴部内面にもハケ目を持つ。伊勢・伊賀地方の甕Cは胴長の器形で、口縁端部が肥厚せず、内面にもハケ目がある。和泉・紀伊地方の甕Cは、内面に削り痕をそのまま残す点が特徴的である。今回出土した甕Cはこうした土器とは明らかに異なり、関連性は薄い。一方、各地で少量ながら出土している甕Cの中から器形、調整手法等で一致する土器を探すと、大和の神木坂遺跡、山城南部の上津遺跡、上人ヶ平遺跡、摂津東部の梶原南遺跡、河内中部の墓尾古墳隣接地、播磨の本町遺跡、丹波の篠窯址群西長尾A地区遺跡が挙げられる[14]。その中で、墓尾古墳隣接地の甕Cは土器棺として用いていたもので、土器の形態、用途ともに一致する点で注目される。

河内地方

奈良時代の社会には、律令制の運用に伴って多くの官人が居り、彼らは出身地を離れて地方や中央で勤務することも多かった。こうした官人が任地で死亡した際には、埋葬地は出身地を重視する傾向が見られ、火葬墓の墓誌等からいくつかの例が判明している。越後の国司であった伊奈大村は任地で死亡し、大和に帰葬している。逆に、中央に出仕した伊福部徳足比売は、出身地の因幡国に葬っている[15]。また、飛鳥浄御原で死亡し、摂津国を本貫地とする藤原鎌足の墓は、高槻市の阿武山古墳であることが有力[16]で、これも出身地重視の思想の現れである。古墳時代においても、琵琶湖西岸に数多く存在する群集墳は、この地に住み着いた後、各地に散って活動していた渡来人系の氏族が帰葬したものという考えがあり[17]、古くからこうした思想が存在したことをうかがわせる。一方、小児に関しては帰葬したと考えられる例はなく、死亡した場所で埋葬したのであろう。しかし、その際にも出身地の習俗を重視しており、左京七条一坊十六坪の居住者は長胴の甕Cを土器棺として用いたものと考えられる。

出身地への帰葬

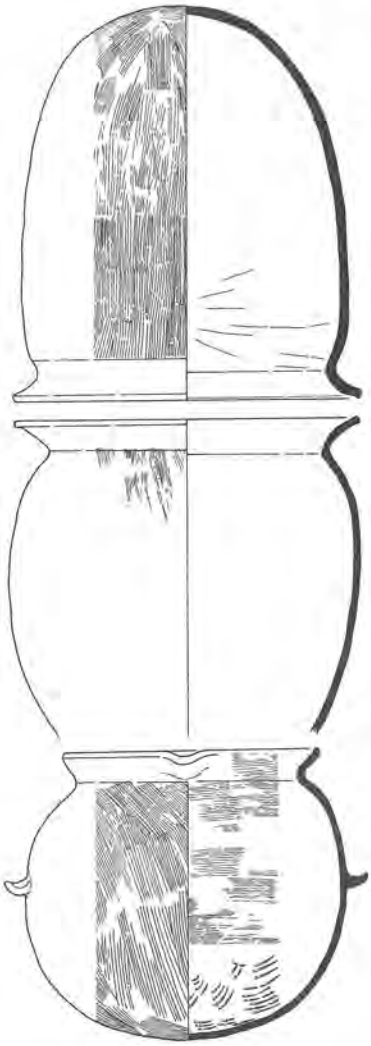


Fig. 50　墓尾古墳隣接地甕棺墓出土土器
1：6

今回検出した土器埋納遺構は、使用した甕Cの分析から、河内中部、あるいは摂津東部から山城南部にかけての地域との関連性が強いと考えられ、これはひいては十六坪の居住者がこの地方のどこかに本貫地を持っていたということになろう。都市型の生活を営んでいた平城京の住民であっても、人間の死亡、埋葬という根源的な部分では、まだ出身地の習俗を残している面が見られるのである。今回の例は平城京で初めて明らかになったもので、現状では左京七条一坊十六坪周辺のみでの特殊な事例ではあるが、京内での生活を考える上で、興味深い一例である。

本貫地の推定

B　出土遺物から見た奈良時代の祭祀

i　祭祀用土器・土製品の生産と使用法

ここでは、SD6400出土の祭祀用土器・土製品を中心に、祭祀用木製品、金属製品も含めて左京七条一坊十六坪における祭祀の状況を明らかにするとともに、平城京内での祭祀のあり方についても分析することにしたい。まず、その前段階として、祭祀用土器・土製品の製作技法と使用法について興味深い事例が明らかになったので、それについて見ていくことにする。

祭祀用土器・土製品の製作技法については、既にいくつかの分析がある[18]。人面土器に用いる壺Bの製作技法は、球形の体部を持つ甕A・Bが当初平底に作ったものを叩いて丸底にする工程を取るのに対し、杯、皿などを製作台としてその上に粘土紐を巻き上げて成形するという工程が復原されている。SD6400から出土した祭祀用土製品のうちで、土師器小型模造竈の製作技法を復原できる好例があった。

壺Bの製作技法

小型模造竈の製作技法

小型模造竈の基本的な製作技法は、粘土紐の巻き上げによって形をつくるもので、外面、内面に巻き上げ痕がある。Pl. 42 に示した竈のうち、944には左の裾部の外面に凹みが残っていた(Ph. 28-944)。これは底部に対しては傾斜しているが、口縁部に対しては平行するもので、土師器壺Bに通有な製作台の痕跡と全く同じものである。このことから、小型模造竈においても粘土紐を巻き上げる際には成形台にのせて行なうことがわかる。即ち、小型模造竈は、①土師器皿Cなどを成形台として、その上に粘土紐を巻き上げて形を作り、②成形台をはずし、口縁部にヨコナデを加え、③その後、底部を口縁に対して傾斜させて切り取って竈の底部を作り、焚き口を削り取り、④廂を貼り付けて細部のナデ調整を行なうという工程が復原できるのである(Fig. 51)。この様に、小型模造竈は土師器壺Bと途中までは同じ製作工程を採るということは、壺Bの製作者が小型模造竈をも製作していたことであり、祭祀用土器・土製品を製作する特定の工人集団が居たことをうかがわせる。

壺Bと同一工人

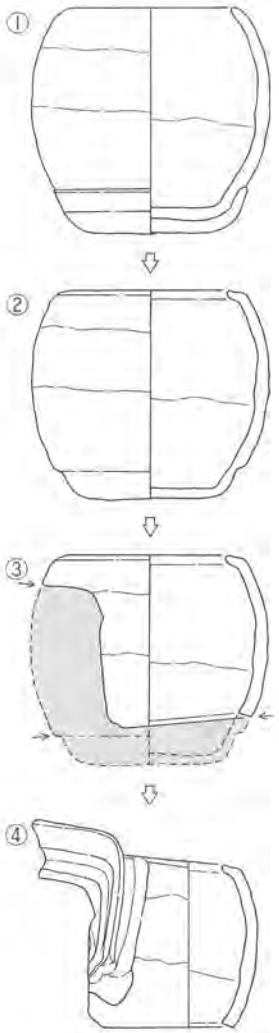


Fig. 51　竈の製作技法

また、SD6400からは、同巧の土馬が2組5点出土している。それはPl. 44 の953・954および957・960であり、特に953・954は製作技法までも共通している(Ph. 28)。この様に、同巧の土馬を複数用いて祭祀を行なった例は左京三条一坊七坪の SK17でも確認している[19]。また、墨書人面土器でも、Pl. 38 の607・608は土器の形態、顔の表情について瓜二つであり、祭祀用土器・土製品はいくつかを組にして使用する例があったことがわかる。斎串は、文献の記載から何枚かをセットで使用したことが復原されており、墨書人面土器もそうしたことが想定されている[20]。今回の調査結果においても、それを裏付けることとなった。

セットでの使用

ii　東一坊大路西側溝における分布

SD6400から出土した祭祀用土器・土製品の分布は別図７に示したが、側溝内にまんべんなく分布するわけではなく、集中する部分が６ケ所に認められる。それは北からR・IK区～R・IO区、R・IH区周辺、Q・HT区周辺、Q・HJ区周辺、Q・HB区周辺、P・GJ区～P・GL区であり、順に第１～第６地点と呼称しておく。第１地点は東一坊大路と六条大路の交差点、第６地点は東一坊大路と七条条間北小路との交差点であり、第３地点は橋SX6420がかかる場所にあたる。第２地点は第１地点同様、交差点に関わるものと見られるが、第４・第５地点の性格は不明である。出土量が特に多いのは、条坊の交差点と橋SX6420がかかる場所で、第１地点では墨書人面土器が96点、土馬が30点、小型模造土器が36点出土し、第６地点では墨書人面土器が81点、土馬が19点、小型模造土器が37点出土した。第３地点では墨書人面土器が55点、土馬が21点、小型模造土器が23点出土した。層位的な面では、褐色粗砂層と暗灰砂層から出土したものが大半を占める。SD6400の層位は再堆積層が多いために、時期の比定が容易ではないが、第１地点では殆どが褐色粗砂層からの出土で、奈良時代前半に集中的に祭祀を行なった傾向がうかがえる。一方、第６地点と第３地点では褐色粗砂層と暗灰砂層からの出土量がほぼ等しく、時期的な偏りは認めにくい。　出土層位

SD6400は条坊の側溝という性格上、出土した遺物は水流によって流されている可能性を考慮する必要がある。しかし、墨書人面土器と小型模造土器、土馬は一致した分布を示すことと、他の木製品、木簡の出土状況を見ても水流の影響はあまりなかったと言って良く、ほぼ原位置を保って出土したものと考えられる[21]。祭祀用土器・土製品の分布は人形、斎串などの祭祀用木製品、金属製品の分布とも一致し、左京七条一坊十六坪の周辺では、条坊の交差点と橋の周辺が主に祭祀を行なう場であったことが知られる。長岡京では交差点周辺を祭祀の場として重要視していた状況がうかがわれ、交差点そのものが祭祀の場として重視されていたという指摘もある[22]。今回の第１地点、第６地点の事例も、まさにこうした状況を反映しているものと言える。また、橋は溝をまたぐという性格から、祭祀遺物の出土量が多いものと考えられる。しかし、こうした出土傾向は、SD6400では祭祀遺物以外の土師器、須恵器、製塩土器や瓦の分布（別図７）も同じ様相を示しており、祭祀用品のみを特定の場所に集中して遺棄していたというわけではなさそうである。祭祀を行なう場が、日常の塵芥を廃棄する場とある事情により一致しているのか、あるいは、やはり水流が影響を及ぼしているのか、などの理由が考えられるが、今回の分析では判断するに至らなかった。条坊の側溝を用いた祭祀遺跡の場合は、他の遺物の分布とも重ね合わせて分析する必要があり、今後の検討課題である。　交差点と橋

iii　京内祭祀の特質

ここで、平城京内での祭祀のあり方を見るため、同じ様に祭祀用土器・土製品がまとまって出土した遺構と、祭祀関連遺跡と考えられる遺構の出土土器を取り上げ、SD6400との比較を行なってみることとしたい。対象とするのは、右京八条一坊十一坪の西一坊坊間路西側溝SD920[23]、左京八条三坊九坪の東堀河SD1300[24]と、左京九条一坊、九条大路上の前川遺跡[25]、および平城宮壬生門前面の二条大路北側溝SD1250[26]の例である。　比較の対象

a　SD920

坪の東辺部で、北から約75ｍにわたって調査した。調査区の北端は八条条間路との交差点までは達しないものの、そのすぐ南までは及んでおり、全長は坪東辺部のおよそ三分の二にあたる。SD920の規模は幅が上面で5.5～11.0ｍ、底で3.0～8.0ｍ、深さが1.5～1.75ｍを測る大規模なもので、東一坊大路西側溝SD6400と同様に京内における基幹排水路であった。その点で、左京域のSD6400に対する右京域の事例として注目される。

左京と右京

SD920からは、墨書人面土器、小型模造土器、土馬をはじめ、人形、斎串、矢形、刀形、馬形の木製品、小型素文鏡、銅鈴、土器に記した呪符と、馬に乗る疫神を描いた墨画土器という多種多彩な祭祀遺物が出土している。祭祀用土器・土製品の出土点数は、墨書人面土器が509点、小型模造土器が110点、土馬が142点である。墨書人面土器の分布を見ると、全域からまんべんなく出土する傾向にあるが、八条条間路との交差点付近、調査区南端にあたる坪の南北二等分線付近、および両地点の中間部の３ケ所にやや集中する部分が認められる。その中で、交差点付近からの出土量が最も多い。SD920の堆積は、上から灰色砂質土、黒灰粘土、灰色粗砂、暗灰粘土の４層に大きく分けられる。堆積層はSD6400と同様にかなり乱れがあるが、最下層の暗灰粘土層から出土した土器は、ほぼ平城宮土器Ⅱ・Ⅲの範囲に収まる。墨書人面土器は第３層の灰色粗砂層から殆どの個体が出土しており、中央の集中部では暗灰粘土層出土のものがやや多い。こうした傾向は、小型模造土器、土馬ともに基本的に認められる。この様に、SD920においても、条坊の交差点付近に祭祀遺物が集中して出土する現象が認められる。なお、調査区の南端に集中する地点があるのは、この部分にはしがらみによる護岸があり、それに関連するものであろう。

交差点

b　SD1300

東堀河

坪の北半部に、南北幅が約５ｍのトレンチを17ｍの間隔で２ケ所に入れたのみで、SD6400・SD920に比べて検出長は短い。墨書人面土器45点、土馬118点、人形２点、斎串４点の祭祀遺物が出土し、小型模造土器は出土していない。墨書人面土器、土馬ともに、北と南のトレンチからほぼ同数ずつ出土しており、調査面積の制約もあって地点における特徴は認めることができない。しかし、検出長の割には出土量が多いと言え、東堀河が祭祀の場として重要視されていたことはうかがえる。

東堀河は他にも数ケ所で調査を行なっており、祭祀遺物が出土している。1983年度の奈良市教育委員会による六条三坊十坪における調査では、坪の南端部で東堀河を約45ｍにわたって検出し、破片数にして138点におよぶ墨書人面土器の他、小型模造土器、土馬が出土している[27]。墨書人面土器の分布は、調査区の中央部に集まる傾向を示し、六条条間路との交差部付近には集中していない。これは、六条条間路との交差部そのものまで調査区が及んでいないことと、堀川が道路側溝ではなく、宅地内を南北に貫流することによるのであろう。

c　前川遺跡

左京九条一坊十三坪の南方、九条大路の路面上に位置し、調査地は朱雀大路との交差点から

東方に約500 m、東一坊大路との交差点から西に約50 m の地点にあたる。河川改修工事の際に２基の井戸と８基の土坑を検出した。祭祀遺物は、井戸から墨書人面土器１点、小型模造甑１点と土馬２点、土坑からは土師器の小型模造横瓶１点、土馬１点が出土した。他には多量の土器が井戸、土坑から出土している。土器の年代は平城宮土器III中段階に属し、平城京還都前後の頃にあたる。

祭祀遺物は少ない

出土した土器を見ると、土師器は杯A、杯B蓋、杯C、皿A、皿B、皿C、椀A、椀C、盤A、鉢A、鉢B、鉢C、鉢X、高杯、壺B、甕A、甕B、甕C、竈があり、須恵器は杯A、杯B、杯B蓋、杯C、皿B、鉢A、壺A、壺A蓋、壺H、壺L、壺P、双耳瓶がある。土師器は井戸、土坑の双方から出土したが、土坑出土の土器は食器類が中心で、他には壺Bが１点あるだけである。一方、須恵器は殆どが井戸からの出土で、土坑からは杯Bが１点と壺の破片が数点出土しているに過ぎない。土師器、須恵器ともに完形で出土したものが多く、須恵器壺類は口縁部を意識的に打ち欠いていることが特徴的である。これらの土器には使用痕がほとんど認められず、特に土師器甕では二次的に火を受けているものはなく、竈も５個体出土したうちで煤が付着するものは１個体だけである。こうしたことから、出土した土器は何らかの祭祀に使用した後、一括して廃棄されたものと考えられる。この祭祀については、平城京の南限を限る九条大路上に位置することから、京内に侵入しようとする疫神をここで饗応し、帰ってもらう道饗祭だという可能性が考えられている[28]。

南京極での祭祀

d　SD1250

平城宮壬生門の調査で検出した二条大路北側溝で、門の前面にあたる部分は奈良時代後半に埋め立てられる。その場所から、200点以上に及ぶ人形をはじめとして、大量の祭祀用木製品が出土した。これらの祭祀遺物は、文献に見られる、宮中で年２回行なった大祓の際に使用したものと考えられる。出土した土器は土師器、須恵器の食器が主体で、少量の土師器の煮炊具、須恵器の壺、甕を含み、祭祀用土器・土製品は出土していない。土器の年代は平城宮土器II～III古段階で、神亀年間～天平年間前半の木簡を共伴している。

大　　祓

報告書では出土土器の詳しい記載がなされていないので、ここで代表的な土器を一部図示し、様相を概観しておくこととする(Fig. 52)。土師器は杯A(２・３)、杯B(７)、杯B蓋、杯C(１)、皿A(８)、皿B(９)、椀C(６)、鉢B(４)、鉢E(５)、壺A(11)、鍋(10)甕A、甕B(12)があり、須恵器には杯A(23・24)、杯B(22・25)、杯B蓋(21)、杯C(26)、杯E、鉢A(27)、鉢D、高杯、壺A、壺蓋、壺H、壺K(28)がある。土師器、須恵器の食器ともに、杯、皿が主体であるが、盤、鉢、高杯も見られ、基本的な器種をそろえる。杯類は口径、器高による法量の区分が存在し、その面でも基本的な食膳具のセットであると考えられる。なかでも、土師器食器類にI群土器が一定量見られ、須恵器食器類で器高が高い一群(24・25)が比較的多いことと合わせ、宮内で使用した土器の特徴を備えている。土師器煮炊具は甕の量が多いものの、甑、竈と思われる破片も出土している。甕は実際に火にかけて使用した痕跡があるものも少量見られるが、甕B(12)をはじめ、火にかけた痕跡がなく未使用のものが多く存在している。これらの土器の中でも、土師器、須恵器の杯、皿類は完形品の割合が非常に高く、特徴的である。図示したものでは、須恵器壺K(28)は漆運搬具として使用したもので、他にも兵部省関係の墨書土器も見られること

使用痕のない土器

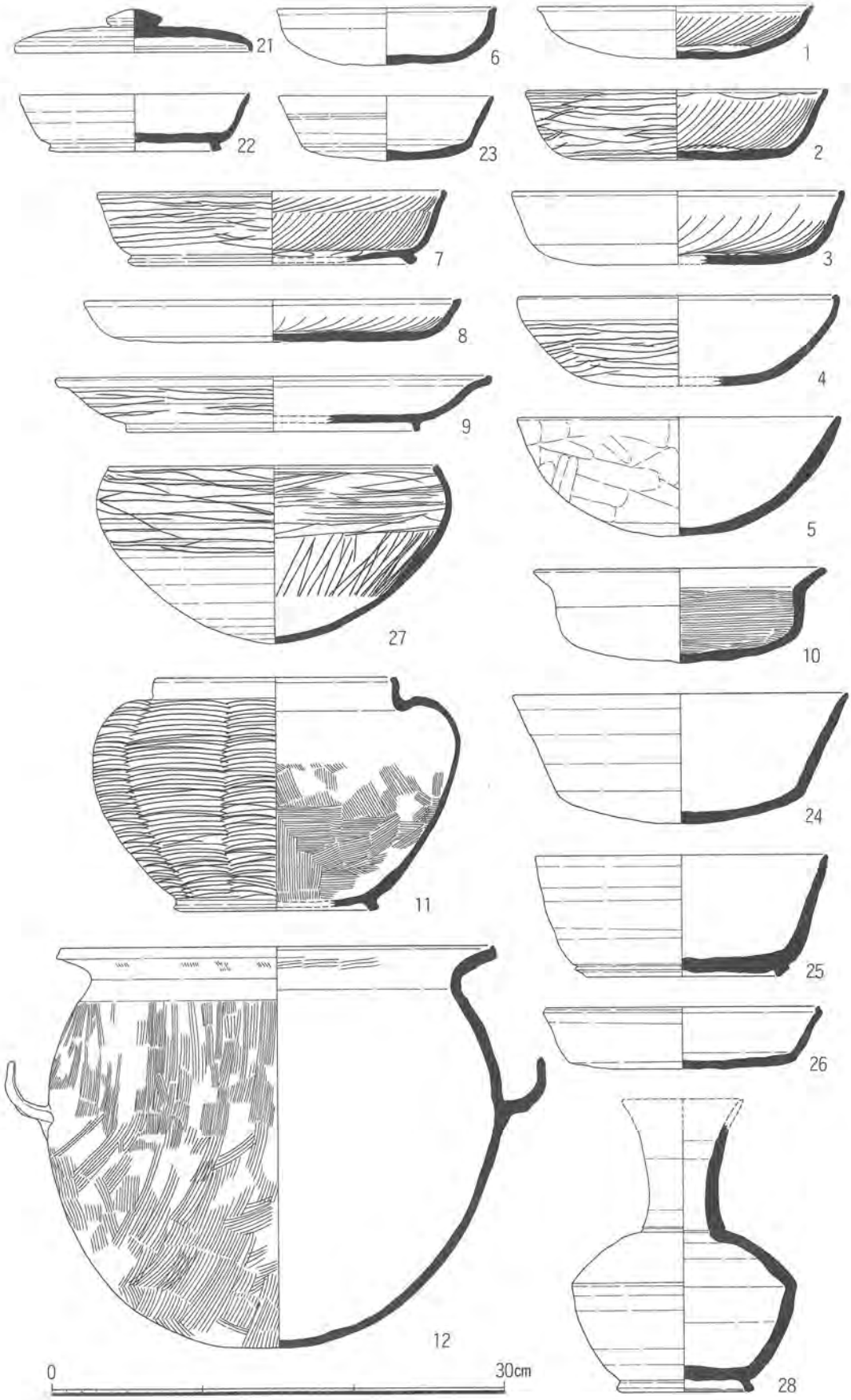


Fig. 52　SD1250 出土土器　1：4

から、出土土器全てが一括というわけではない。また、大祓の際に土器を用いたという文献上の記録もないが、先に記した特徴を持つ土器群は前川遺跡出土土器に通じるもので、何らかの行為の後にまとめて廃棄した可能性がある。

e　土器・土製品を用いた祭祀

祭祀用土器・土製品の用途については、墨書人面土器は土器の中に息を吹き込んでから蓋をして流し、身の汚れをはらうものと考えられ、人形の使用法と通じるものがある。小型模造土器のうちで甑、甕、竈のセットは実用品の形代で、用途については『日本霊異記』の以下の記述が参考となろう[29]。

用　　途

「讃岐国山田郡、有布敷臣衣女。聖武天皇代、衣女忽得病。時偉備百味、祭門左右、賂於疫神而饗之也。閻羅王使鬼、来召衣女。其鬼走疲、見祭食、飄就而受之。(後略)」

これは、急病にかかった人が門の両側にご馳走を置いたところ、閻魔王の使いの鬼がそれを食べて帰り、そのために後に利益を得たという話で、奈良時代にこうした思想、風習があったことをうかがわせる。その面で、甑、甕、竈のセットは、まさに疫神を饗応するための道具であると言える。須恵器壺類などは、寺院の鎮壇具として出土する例も多く、地鎮に関わる道具であろう。土馬は、水に関わる祭祀に使用したというのが通説であるが、馬は疫神の乗り物であり、その形代を破壊することによって疫神の活動を封じるという説[30]も有力である。

疫神の饗応

小型模造土器の中で、甕、甑、竈のセットは、6世紀から7世紀にかけて近江の大津市北郊や南大和・紀伊地方などの古墳に副葬されている例[31]があるが、これは7世紀後半になると姿を消してしまい、平城京での小型模造土器とは直接系譜関係はたどりにくい。小型模造土器は墨書人面土器とともに確実に7世紀段階に遡る資料はまだ出土しておらず[32]、8世紀になって新たに成立した祭祀の形態であると言える。また、土馬は古墳時代から例が見られるが、7世紀段階までの多彩な形態から、8世紀には都城遺跡出土の土馬は、定型化する傾向がうかがわれ、新たな祭祀形態に移行したと見ることができる。

8世紀の祭祀形態

なお、今回の調査ではSD6400と坪内では異なった祭祀の状況を示す例がある。SD6400出土の小型模造土器はほとんど甑、甕、竈に限られ、それ以外には土師器の高杯が2点と須恵器の壺Dが1点あるのみである。すなわち、SD6400においては、小型模造土器を用いる祭祀は食物を疫神に饗応する祭祀に限定されると考えてよい。一方、IL42・44区からは936・937・940の計3点の須恵器壺が集中して出土している。これらは包含層の出土であるが、この位置は十六坪の北面築地の南雨落溝が東西に通る場所にあたり、遺構としては検出していないものの、本来雨落溝に属するものであった可能性が高い。その場合、3点ともに須恵器壺であり、かつ頸部を欠く状況で出土したことが注意される。SD6400の様な甑、甕、竈の3点セットを用いる祭祀とは異なったあり方が想定され、興味深い。

坪内の祭祀

f　宮内祭祀と京内祭祀

先に5ケ所の例において、平城京内の祭祀遺跡から出土した遺物の概観をしてきたが、出土土器・土製品の様相を見ると、2つの類型に分けることができる。第一の類型は墨書人面土器、小型模造土器、土馬の祭祀用土器・土製品が大量に出土するもので、SD6400、SD920、SD1300

がこれにあたる。第二の類型がSD1250と前川遺跡で、祭祀用土器・土製品は出土しないか、極めて少量の場合である。平城宮内での祭祀用土器、土製品の分布は、宮中央部を流れる基幹排水路SD3715から少量の墨書人面土器が出土したり、全域で土馬が散見される程度である。現状では、宮内で墨書人面土器、小型模造土器を用いた大規模な祭祀を行なった形跡は認められず、

民間の祭祀

祭祀用土器・土製品は基本的に宮外における祭祀に関わる遺物である可能性が高い。即ち、第一類型のSD6400、SD920、SD1300の事例は、京内祭祀の典型であると言える。

一方、SD1250と前川遺跡の場合は、異なった事情が考えられる。両遺跡の出土土器は、基本的な器種を揃え、明確な使用痕は認められず、かつ完形品で出土するものが多いという共通点を持っている。SD1250例は平城宮南面の壬生門の前面から出土したもので、宮中の大祓の際に使用した遺物である可能性がある。前川遺跡の場合は、平城京域ではあるが、京の南限を画す

国家の祭祀

る九条大路上であり、疫神から京を防衛するために国家が祭祀をとり行なった可能性が高い。即ち、国家が主導する祭祀では実用品の土師器、須恵器をそのまま用い[33]、民間の祭祀では祭祀用土器・土製品を用いるという、祭祀を行なう主体者の違いによる差の図式が浮かび上がってくるのである。

1）ここで扱うのは古墳時代～古代の例に限り、縄文時代、弥生時代、および10世紀以降のものは除外した。なお、多賀城周辺でも9～10世紀代のものを検出しているが、それに関しては註22)文献を参照されたい。また、近畿地方でも古墳の石室内から出土し、主体部の埋葬に関わると考えられるものについては除外している。

2）金子裕之「平城京と葬地」『奈良大学文化財学報』第3集 1984

3）中井一夫「稗田遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1977年度』1978

4）令の規定では口分田を班給するのは6歳からであり、少なくともこれ以下の小児は共同体の成員とは見なされなかったであろう。

5）金関丈夫「魂の再生―子供墓考」『発掘から推理する』1975

6）奈文研『平城宮報告II』1962

7）奈文研『平城宮報告VII』1976

8）奈文研『平城宮報告IX』1978

9）奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995

10）奈文研『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』1985

11）奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984

12）従来「大和型」と呼称していたものであるが、都城に寄生した製作集団が専業的に生産し、それは遷都と共に移動していく状況が明らかになった。そのため、地域名を関することは適当ではなく、「都城型」と呼び変える(古代の土器研究会『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東4　煮炊具―』1996)。

13）小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27巻2号 1980

14）古代の土器研究会『古代の土器4　煮炊具(近畿編)』1996

15）上原真人「火葬が始まった理由」『古都発掘』1996

16）牟田口章人ほか『蘇った古代の木乃伊―藤原鎌足―』1988

17）水野正好「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書第4冊』1970

18) 上村和直「人面土器の製作技術の検討」『長岡京古文化論集』II 1992
巽淳一郎「煮炊具の生産と供給」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4　煮炊具—』1996
19) 奈文研『1995年度平城概報』1996
20) 奈文研　註11）前掲書
21) 奈良三彩の鉢A(Pl.37-525)は約45mの範囲から出土したが、水流により流れて磨滅した状況ではない。
22) 久保康博「辻の祭祀考」『(京都市埋蔵文化財研究所)研究紀要』第2号 1995
23) 奈文研　註11）前掲書
24) 奈文研『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976
25) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974
26) 奈文研『昭和55年度平城概報』1981
27) 墨書人面土器の出土点数については、奈良市教育委員会より提供を受けた。また、ここでの点数のみ破片数であるが、他の点数は個体数である。
28) 巽淳一郎『まじないの世界II』『日本の美術』第361号　1996
29) 中田祝夫注・訳『日本霊異記』(日本古典文学全集10) 1995
30) 水野正好「馬・馬・馬—その語りの考古学」『奈良大学文化財学報』第2号　1983
31) 大通寺3号墳(滋賀県教委『一般国道161号バイパス建設にともなう発掘調査発掘調査報告書　大通寺古墳群』1995)、福王子2号墳(滋賀県教委『滋賀県文化財調査報告書第4冊』1970)、沼山古墳(橿考研『橿原市沼山古墳　益田池堤』1985)など。
32) 最近橿原市の下ツ道西側溝、藤原宮西面外濠などの藤原京域からの出土例があるが、確実に7世紀代のものとは言い切れない。
33) 前川遺跡出土土器のセットの用途をもとに、祭祀形態を推測してみると、土師器煮炊具は食物を調理するもので、土師器、須恵器の食器に盛り付けるものである。須恵器壺、瓶類は液体、おそらくは酒の容器で、土師器杯Cを酒杯とするものと考えられる。こうした状況は基本的にSD1250でも同じであろう。

5　金属製人形について

東一坊大路西側溝からは、多種多様な祭祀用具が出土した。そのなかで、金属製人形については、天皇・中宮・東宮の使用した祭料と推定されている遺物[1]である。今回の調査では橋SX6420付近に集中して分布し、祭祀に用いられた後、これらが橋の付近から溝へ投棄されたと推測される。このような強い集中は、土馬など他の祭祀遺物には見られず、金属製人形の特異性を示している。ところで、金属製人形は従来、主に平城宮とその周辺に分布の中心があったが、今回は宮から離れた地域で、銅製・鉄製合わせて17点と多量に出土した。また、金属製人形は藤原京でも出土例が増加しており、これらも含め、あらためて金属製人形の性格を検討する必要が出てきている。ここでは、別表11にまとめた平城京・藤原京など21地点から出土した計76点を対象に、金属製人形を考察する。なお、金属製人形の素材としては、金銅製、銅製、鉄製が知られているが、金銅は銅に鍍金したものであるから、以下の考察では、銅製に含めて検討する。

A　分　　類

金属製人形のなかで、銅製については分類がある[2]が、銅製・鉄製とも、形態・製作技術に共通点が多く、あらためて両者を含めて分類・整理する必要がある。

ここでは金属製人形の分類基準として、腕の表現をとりあげる。腕以外に頸部や脚部など外形分類の基準になりうる要素があるが、金属製人形の外形は、短冊状の素材から、工具を変えることなく一連の工程で製作しており、実際は腕の表現方法によってそれぞれの要素も規定されてくる。

腕の表現は次の３種に分類できる。

切刻腕式　両側縁の斜めの切り込みで腕を表現する切込腕式。

無腕式　側縁と下端の小さな三角形の切り欠きで腰を表現し、明瞭な腕の表現が無い無腕式。

刻腕式　たがねによる刻みで腕を表現する刻腕式。

切込腕式は、頸部は両側縁の三角形の切り欠きで表現し、脚は下端を長三角形に切り欠くか、縦に切り開いて作る。無腕式は、脚や頸部も腰と同様小さな三角形の切り欠きで表現する。切込腕式と無腕式には、工具にはさみを用いる場合が多いが、素材が厚い場合にはたがねを用いる。刻腕式は、頸部の切り欠きが無く、脚は縦の刻みか切り開くことによって表現する。工具はたがねを用いる。

別表11にまとめたように、素材別では銅製人形は切込腕式と無腕式、鉄製人形は刻腕式が多い。これは、銅は鉄よりも容易に薄く延ばすことができるという素材の特徴を反映したものと考えられる。つまり、薄ければ、はさみを用いて切り欠きをいれることができるが、厚くなると、はさみが使えないため、

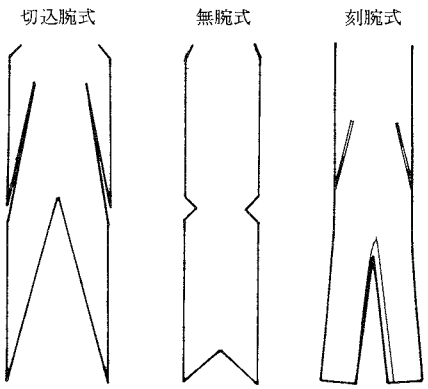


Fig. 52　金属製人形の形式

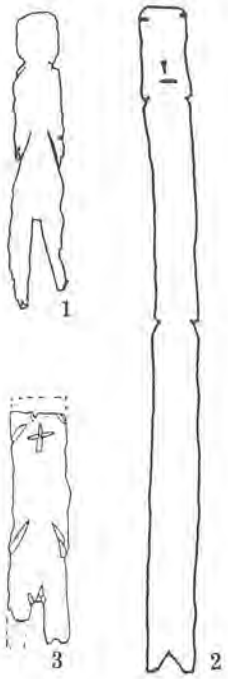


Fig. 54　銅製人形の実例
1．切込腕式・飛鳥池
2．無腕式・平城宮東南隅
3．刻腕式・藤原京右京七条一坊

たがねで刻みをいれることになる。ちなみにたがねを用いて腕・脚を表現した銅製人形も、素材が厚くなる傾向がうかがえる。

なお、顔の表現は銅・鉄ともに通常たがねを用いるが、銅製人形には針書したものもある。銅切込腕式は、ほとんどに顔の表現があるが、銅無腕式には無いものが多い。鉄製人形は頭部の残るものすべてに顔の表現があり、顔を表現することが原則だったのであろう。

B　年代・出土遺構

各金属製人形の年代は別表11のように考えられる。沖の島例についても、藤原京期を含む7世紀代後半としてよいであろう。銅製人形では、切込腕式がその頃に盛行したことは明らかである。また、平城宮東大溝出土の切込腕式2点は、出土層位から奈良時代初頭～前半の時期におさまり、そこでは無腕式も共伴している。一方、無腕式が3点出土した二条大路上濠状遺構SD5100は、平城宮土器Ⅲの古段階(天平年間前半)に時期を限定できる資料である。以上より、銅製人形は、当初、切込腕式が主流であったが、天平年間前半には無腕式に変化していたと考えられるであろう。なお、刻腕式は、藤原京で1点出土しているのみで、銅製人形の主要形式ではなかったようである。

一方、鉄製人形は銅製人形以上に類例に乏しく、推移を確実にとらえるのが困難である。切込腕式は山梨県釈迦堂遺跡に見られる。ここでは美濃須衛古窯の老洞1号窯や高蔵2号窯の製品に近い特徴を持つ須恵器が共伴し、年代は8世紀第1四半期に位置づけられる[3]。また、無腕式は1例のみであるが、銅製人形と形態がまったく同じである。類例は少ないが、鉄製人形の切込腕式・無腕式については、一応、銅製人形と同様な年代観を想定しうるであろう。刻腕式の古い例になる沖の島の鉄製人形は、手の表現が残っていないが、足をたがねで切り開いており、腰の切れ込みも浅いので、この形式と考えた。したがって、鉄製人形の刻腕式についても、銅製人形同様、7世紀後半から存在したと考えて間違いなかろう。刻腕式には確実な奈良時代前半の例がないが、出土点数や上述したような素材の特徴から、奈良時代になると鉄製人形の主流は刻腕式となったと考えられよう。

金属製人形の出土地は、現在のところ藤原京・平城京以外では、沖の島と釈迦堂に限られる。ただし、これらの年代は、ほぼ藤原京期～奈良時代初頭頃と考えられ、その後は平城京のみの出土となっている。また、藤原京では藤原宮の発掘面積が平城宮ほどの割合に達していないこともあって、宮内の出土例がまだないためもあるが、京からの出土が顕著である。さらに藤原京期では、祭祀遺構・井戸・土坑などの溝以外の遺構からの出土例が平城京よりも顕著な傾向がある。一方、平城京では、宮外からの出土も増えているが、宮内およびその周辺が分布の中心である点は変わらない。出土遺構はほとんどが溝である。また、銅製人形は宮内外で出土しているが、鉄製人形は、現在のところ、宮内では出土していない。

C 法　量

次に法量の特徴に関して検討する。別表12は銅製人形の完形もしくはそれに近いものの計測値をまとめたものである。切込腕式は、類例が少ないので一般的な傾向といえるか疑問もあるが、奈良時代にはいると大型化する傾向があるようである。切込腕式と無腕式の比較でも、おおむね無腕式の方が、幅は狭いが全長は長い傾向がある。刻腕式の1例についても考慮すると、藤原京期までは全長が10 cm 以下で、奈良時代に全長が伸びるといえよう。

しかし、切込腕式と無腕式との違いは、単純な全長・幅の差だけではない。両者の各計測値のばらつきの程度を見るために、それぞれの平均・標準偏差・変動係数(標準偏差／平均)をまとめたのが Tab. 27 である。変動係数により、異なる母集団のばらつきの程度を相対的に比較することができ、変動係数が小さいほどばらつきの程度が小さいといえる。特に全長に注目すると、無腕式は平均長が切込腕式より長いにも関わらず標準偏差は小さく、変動係数は切込腕式の3分の1程度になっている。幅にも同様な傾向があり、全体として無腕式は切込腕式に比べ計測値のばらつきが小さく、より規格化されているといえよう。全長については、ほとんどの製品が11.7～15.0 cm の範囲にはいり、おそらく4～5寸の規格で作られたと考えられる。なお、宮東南隅の例を見ると、法量や顔の表現がほぼ一致するものが3枚あり、木製人形について指摘された2枚1組の最低単位の原則[4]は、銅無腕式には認められそうである。また、厚さについて平均値で比較すると、無腕式が切込腕式より薄い傾向がある。これは、はさみによる加工をより容易にするためと考えられる。

銅無腕式の規格性

一方、鉄製人形は銅より銹化・破損しやすく、全長を推定できる製品が少ない。また、全長が推定できる製品は小型品が多くなるので、統計的な処理ができない。ここでは、破損品からの予測を述べておく。Tab. 28 は、完形に近いものを参考に、残存部の法量から大まかに破損

Tab. 27　銅製人形形式別計測値比較

	切込腕	無　腕
(長さ：cm)		
平　均	6.9	13.0
標準偏差	2.5	1.6
変動係数	36.1%	12.3%
(幅：cm)		
平　均	1.3	0.9
標準偏差	0.4	0.1
変動係数	28.0%	13.5%
(厚さ：mm)		
平　均	0.65	0.44
標準偏差	0.24	0.11
変動係数	37.6%	25.1%
(重量：g)		
平　均	3.2	2.5
標準偏差	3.4	1.2
変動係数	104.2%	46.0%

Tab. 28　鉄製人形形式別・時期別全長分布（推定値含む）

	＜10 cm	＜15 cm	約20 cm	約30 cm
(切込腕式)				
釈迦堂		2		
(無腕式)				
平城京左京七条一坊		1		
(刻腕式)				
沖の島5号祭祀遺構	2			
平城宮東南隅	2			1
東堀河	1			
平城京左京七条一坊		3	11	
(時期別)				
藤原～奈良初頭	2	2		
奈良	3	4	11	1

Tab. 29　時期別計測値比較

	藤　原	奈　良
(長さ：cm)		
平　均	5.6	13.0
標準偏差	1.7	2.4
変動係数	30.4%	18.5%
(幅：mm)		
平　均	1.2	1.0
標準偏差	0.30	0.31
変動係数	25.0%	30.2%
(厚さ：mm)		
平　均	0.65	0.47
標準偏差	0.30	0.13
変動係数	46.9%	28.1%

品の全長を推定して作成した表である。切込腕式と無腕式は類例が少なく、一般的な傾向を知ることはできない。時期別にまとめてみると、奈良時代にはいると、銅製人形同様に長いものが増える傾向は見てとれる。また、無腕式については、銅無腕式の4～5寸の範囲にはいり、銅無腕式と同様の規格が存在したと考えられる。主要形式である刻腕式には、奈良時代のものに限っても、様々な法量のものが製作されている。銅無腕式のような規格がないのか、あるいは複数の規格が存在したのであろう。破片からの推定がほとんどなので断定はできないが、左京七条一坊の例では、18～22 cm程度に復原できるものが多く、6～7寸の規格が考えられ、宮東南隅出土例では1尺と推定されるものもある[5]ので、ここでは後者の可能性が高いと考える。なお、SD6400出土品の有孔の鉄刻腕式に同巧品が2枚あり、鉄刻腕式にも2枚1組の最低単位が存在した可能性がある。

鉄刻腕式の規格

D　金属製人形の特性

金属製人形については銅・鉄ともに『延喜式』に見える金人・銀人・鉄人に対応させる説が一般的である。金・銀人とは、鉄製人形に箔を被せる、あるいは木製人形に金・銀泥を塗ったものと考えられている[6]。なお、『延喜式』の記載に銅製人形がない点については、銅生産の衰退によるものと考えられている[7]。また、平城宮東南隅で出土した鉄製人形が『延喜式』記載の長さ一尺に合致することから、『延喜式』の祭祀内容が8世紀に遡りうるとされている[8]。しかし、平城京出土の金属製人形は『延喜式』の規定に合致しないものがほとんどであり、むしろ9世紀末～10世紀とは別の原則に基づいて製作・使用されていた可能性が高い。既に指摘されている[9]ように、『延喜式』の内容を奈良時代の考古遺物にそのまま対応させるのは問題がある。ここでは、銅製人形と鉄製人形の変遷と比較から、天武朝から奈良時代の人形のあり方を探ってみよう。

金属製人形の変遷を再度まとめてみよう。金属製人形は7世紀後半に登場した。おそらく天武・持統朝に人形や馬形などの木製形代とともに導入され、道教などの中国の影響を強く受けている[10]。官営工房と考えられる飛鳥池からの出土により、この時期から公的に使用されたと想定できる。奈良時代初頭までは、形態的には木製人形と共通する切込腕式が主流であった。ただし、藤原京期には概して金属製人形のほうが木製人形に比べ小振りであり、法量によって両者の違いを際だたせていたのかもしれない。また、当初は藤原京以外の地でも使用され、出土遺構を参考にするとそれらを用いた祭祀自体も多様であったらしい。

しかし、平城遷都後まもなくして、製作技術面で大きな画期がある。それは銅製人形では無腕式が採用され、鉄製人形では刻腕式が主流となった点である。特に、銅製人形では、表現がより簡素で製作も簡単となり、量産化に対応できる形式が採用されたと評価できる。一方、鉄製人形が刻腕式になった要因には、短冊形の形状という点で銅製人形と歩調を合わせたということもあろうが、同時に、製作の容易さという点もあったであろう。そして、この段階から形態的に木製人形との違いがはっきりする。さらに、出土地が平城京に限られるという点は注目すべきであろう。これと関連して、沖の島では、奈良時代以降、祭祀の場所や遺物の組成が変わり、人形の素材も金属から滑石に変わる点が参考になる[11]。この変化の理由を素材の入手しやすさに求める考え[12]もあるが、この時期の代表的な1号祭祀遺構では金銅製品も多数出土して

金属製人形の量産化

いるので、それだけでは説明ができない。むしろ、金属製人形を使用できない理由があるので、滑石に変えたと考えるべきであろう。奈良時代になって、金属製人形は都城祭祀の祭料として位置づけられたと考える。

都城祭祀の祭料

また、奈良時代になると、銅製人形と鉄製人形の違いがはっきりとしてくる。ここでは主要形式である銅無腕式と鉄刻腕式を比較してみよう。上述したように、銅無腕式には4～5寸という一定の規格があるが、奈良時代の鉄刻腕式には数種類の規格があったらしい。また、顔面の表現も前者にはない場合が多いが、後者には必ず伴う。そして、銅無腕式は宮内とその周辺が分布の中心であるが、鉄刻腕式が出土したのは宮外のみである。さらに、これらを木製人形と比べてみると、木製人形は銅無腕式のような一定の規格はなく、顔面の表現もあるものとないものがある。ただし、墨書とたがねという方法の違いはあるが、木製人形では表情や表現が多彩であるのに比べ、金属製人形では変化に乏しい。木製人形の出土地点も宮内外から広く出土し、都城遺跡以外からも出土する。全体の形状は、すでに述べたように、奈良時代には金属製と木製人形の違いは顕著になっている。全体として、銅・鉄・木の人形には、それぞれに独自の特性があり、奈良時代においては、使用における意味の違いがあったと考えられるのである。

このような差がなにに基づくのかは定かではない。道教教典の『赤松子章暦』に記された金・銀・錫の人形には、安全祈願や鎮墓などそれぞれ異なった機能があるらしい[13]。木製人形に、呪い・病気治療など、明らかに祓え以外の用途で用いられた例が存在することは、奈良時代の日本の人形にも、材質による機能差が存在したことの例証となるかもしれない。あるいは、道教との関連からすれば、隠陽思想や五行思想などに基づく意味の違いがあるのであろうか。また、道教教典に記された機能とは異なり、日本では材質の差は使用者の階級を象徴し、金属製人形の使用は天皇・中宮・東宮に限定されると考えられている[14]。この指摘も含め、7世紀後半の導入以後、人形祭祀には様々な形で日本独自の信仰・思想の影響が加わり変化していったと考えるべきであろう。

E まとめ

金属製人形の画期

上述してきたように、7世紀後半に導入された金属製人形には、奈良時代初頭に大きな画期がある。これは生産面からいえば量産化と規格化であり、同様の現象は専用品ができる人面墨書土器や土馬にもいえそうである。金属製人形に限っていえば、水野正好の試算では『延喜式』に記された天皇の金属製人形の使用量は1年に約800枚であり[15]、奈良時代にすでにこのような大量使用が始まっていた可能性が高い。また、金属製人形を含めた祭祀用具の規格化は、祭祀制度の整備と関連するのであろう。平城京遷都後に、あらためて都城祭祀の制度が整備され、これは律令祭祀における一つの画期と考えられるであろう。現在、長岡京・平安京で金属製人形の出土例がなく、奈良時代の金属製人形における原則がその後どのように変遷したかを考古学的に追うことはできないが、やはり何度かの画期があって『延喜式』に記された形態へと至るのであろう。

1）金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985 p.250

2）巽淳一郎「まじないの世界II」『日本の美術』第361号 1996 p.32

3）坂本美夫・末木　健・堀内　真「シンポジウム奈良平安時代土器の諸問題　甲斐地域」『神奈川考古』第14号 1983
4）金子裕之「日本における人形の起源」『道教と東アジア』1989 p. 41
5）松村恵司「平城宮出土金属製人形」『年報1984』1984 p. 63
6）巽淳一郎　註2）前掲書 p. 33
7）巽淳一郎　註2）前掲書 p. 33
8）松村恵司　註5）前掲書 p. 63
9）泉　　武「律令祭祀論の一視点」『道教と東アジア』1989 pp. 73—76
10）金子裕之「古代の木製模造品」『研究論集VI』1980、註4）前掲書　p. 51
11）佐田　茂「沖の島祭祀の変遷」『古代を考える　沖の島と古代祭祀』1988
12）佐田　茂　註11）前掲書　p. 129
13）福永光司「道教における「醮」と「章」—『延喜式』の「祭祀」と「祝詞」によせて」『道教と東アジア』1989 pp. 25—34
14）金子裕之　註1）前掲書 pp. 219—289、註4）前掲書 p. 51
15）水野正好「招福・除災—その心の考古学」『文化財学報』第1集 1982、「人形—その世界」『古代の顔』『福岡市立歴史資料館図録』第7集 1982

6 木　簡

ここでは特に東一坊大路西側溝出土の木簡について、考察を加える。それらの全体的な特色を挙げてみると、まず文書木簡の中に、官司に関係するとみられるものが多いことを指摘することができる。

官司関係木簡

3は正本ではなく、習書とみられるが「皇后宮職解」の文書木簡である。4は中務省から衛門府に宛てた移、6は衛門府からの牒。7は「松本□［宅ヵ］」宛の牒だが、差出所は不詳。8は文書木簡ではなく題籤軸であるが、「諸司」からの「文」を継いでいるから、やはり官司で用いたものであろう。11・12・14にはいずれも「案主」が見える。13は6015型式であり、「可授新□位」という叙位にかかわる文言からして、式部省ないしは兵部省で作製されたものであろう。

第2に、衛府にかかわるものが目立つ。4・6・20は衛門府にかかわり、24には右兵衛府、15・23・33には「府」という語が見える。26「佐」は衛府の次官に使われる用字である。

また荷札木簡が目につくのも特徴の1つである。ただし61・68は、衛士ないし仕丁あてに国元から送られた養銭の荷札である。したがってこれらも衛府関係木簡が多いという、先に指摘した特徴にかかわる可能性がある。

このように内容的に注目される木簡が多く出土したが、それらの性格を考える時、大路の側溝からの出土という状況から、これらを一括史料として扱ってよいのか、さらにそれに関連してどこで捨てたのかという問題が生じてくる。十六坪の遺構には官衙的様相はあまり見られず、宅地の可能性が大きく、これらの木簡と直接結びつくとは考えがたいのである。すなわち十六坪から東隣の溝に捨てたとは考えにくく、上流部ないしは東一坊大路を挟んだ東側から捨てられた可能性が大きいとみられる。

廃棄場所はどこか

その場合、西側溝は大規模な溝であるから、かなり上流から流れてきたということも考えられる。極端に言えば、溝を遡っていくと、平城宮東南隅に行き着く。木簡の記載内容からすると、これらが平城宮内で用いられた木簡であり、廃棄後ここまで流れてきたという可能性も捨てきれない。しかしまた木簡の出土状況から判断すると、出土地点の偏りの傾向が、土器や祭祀遺物などの他の遺物と同じ傾向を示すことから、そう遠くから流れてきたものではなく、重量のある他の物と同じ場所(出土地点の近く)で廃棄されたのかもしれない。さらには廃棄場所は1カ所とは限らず、複数箇所で廃棄されたものが混じっている可能性も大きい。

南北溝での出土例

こうした問題に見通しを得るために、京内における南北道路側溝からの木簡出土例を見ると、Tab. 30のようになる。これによると、本調査区を除くと、東二坊坊間大路西側溝からの出土点数が多いことがわかる。そのなかでもとりわけ二条二坊五坪・十坪と三条二坊七坪部分からの出土が著しい。このうち左京二条二坊十坪は、平城宮東院の東面築地大垣南端部に近く、木簡のほとんどは、大垣を暗渠で抜けた東西溝が西側溝に合流する付近が、窪みになっている地点から出土した。したがって宮内で廃棄されたものが、宮外の西側溝へ流出したものとみられる。そのすぐ南に位置する六坪の東で出た木簡も、陰陽寮官人の考課木簡や戸令条文を書いたもの、荷札などが含まれていることから、同じく宮内から流出したものと判断してよかろう。

また二条二坊五坪は天平年間に藤原麻呂邸があったとみられ、三条二坊は一・二・七・八坪

Tab. 30　平城京内の南北道路側溝における木簡の出土事例

溝　　名	調　査　地　点	調　査　次　数	点　数	検出長	出　典
東一坊大路西側溝	左京三条一坊十五坪	118—8次	18	24	城13
	左京三条一坊十六坪	234—9次	8	5	城27
	左京五条一坊十五坪	市教委316次	9	3	木17
	左京七条一坊十六坪	252次・253次	852	140	本書
東一坊坊間大路西側溝	左京三条一坊十二坪	橿考研	2	14	木17
東二坊坊間大路西側溝	左京二条二坊五坪・二条大路	123—26次 198A・B・C次 202—13次 223—13次	276	82	城14 城23 城23 城26
	左京二条二坊六坪	44次	88	64	城6
	左京二条二坊六坪	68次	79	50	城8
	左京二条二坊十坪	99次	550	43	城11
	左京三条二坊七坪	118—23次 178次・193A次	348	113	城13・20・23
	左京三条二坊八坪	193B次	131	42	城23
	左京四条二坊七坪	市教委80次	2	14	木7
東二坊坊間大路東側溝	左京三条二坊七坪	193A次	7	1.5	城22
東二坊坊間東小路東側溝	左京二条二坊十三坪	151—11次	3	23	城17
	左京二条二坊十一・十四坪	市教委151次	22	20	木11
東二坊坊間東小路西側溝	左京二条二坊十一・十四坪	市教委151次	9	20	木11
東二坊坊間東小路東側溝想定位置の溝	法華寺北方	242—13次	1	1	城29
東三坊大路東側溝	左京一条三坊十五・十六坪	55次・56次・57次	33	240	城7
東堀河	左京四条三坊十坪	市教委314次	3	32	木17
	左京八条三坊九坪	93次	5	4	城11
	左京八条三坊十一坪	市教委東市4次	6	6	木6
	左京九条三坊五坪	141—23次	5	6	城16
朱雀大路西側溝	右京三条一坊一坪	143次	2	4	城16
西一坊坊間大路西側溝	右京八条一坊十一坪	149次	18	74	城17

＊調査次数欄の「橿考研」は奈良県立橿原考古学研究所の調査、「市教委」は奈良市教育委員会の平城京の調査次数を示す。また、「検出長」の単位はm。出典欄の「城」は「平城宮発掘調査出土木簡概報」、「木」は「木簡研究」の意。

は奈良時代初頭には長屋王邸があり、天平年間には光明子の皇后宮職が置かれるようになっていたと考えられている。その脇の、二条二坊五坪、三条二坊七・八坪部分の側溝から出土した木簡については、上の施設から廃棄されたものが多く含まれている可能性が大きかろう。それは、皇后宮職関係木簡は二条大路上に掘られた濠状遺構から大量に出土しているが、七・八坪脇の西側溝出土の木簡にも内容的に共通するものが多いこと[1]、少し南の四条二坊七坪になると、出土点数が極端に減ることからも窺える。そのことは木簡が実際にはそれほど流れず、廃

棄地点の近くから出土することを示すものである。

これ以外の側溝を見ても、東市の位置する左京八条三坊付近を除き、二条・三条といった宮近辺からの出土が目立ち、それより南ではあまり出土していないという傾向を見て取ることができる。そうした中で、本書で扱っている左京七条一坊は出土点数が突出しているのである。しかも東一坊大路西側溝を見ても、これまで三条と五条で木簡が出土してはいるが、量的に言って今回の比ではない。もっともいずれも今回ほどの長さにわたっては発掘していないから、量的に少ないのは当然ではあるが、長さ1m当たりの出土点数を比べても、今回の出土点数は他を圧倒している。今回のそれは、宮内から流れ出たとみられる、左京二条二坊十坪における東二坊坊間大路西側溝出土木簡(第99次調査)に次ぐ、高い数値となっているのである。

出土地の近くで廃棄

こうした出土傾向を勘案すれば、ここで扱っている東一坊大路西側溝出土木簡は、たとえその内容が官衙的なものであったとしても、宮内から流出してそこまで流れていったものが主流を占めるとは考えがたいのではなかろうか。すなわちその多くは、出土地点の近くで廃棄されたものと考えるのが妥当であろう。それではそれは何であろうか。

宮外官衙

宮外で官衙的な文書木簡が使用された可能性がある所として考えられるのは、宮外官衙と諸司厨町である。前者の例としては、京内を管轄するため宮外にあるのが当然の左・右京職、東・西市司、それにそれとは性格を異にする大蔵省・大学寮、それに光明皇后の皇后宮職などがある。大学寮は平安京では左京三条一坊一・二・七・八町にあることが知られるが、平城京でも左京三条一坊七坪にあった可能性が指摘されている[2]。しかし東一坊大路西側溝出土木簡には、3を除いて、これらにかかわるとみられるものはない。あるいは3は長屋王邸跡に置かれた皇后宮職から廃棄されたものかもしれないが、その場合は2km程流れてきたことになる。

諸司厨町

それに対し諸司厨町は、諸国から各官衙に上番した課役民や下級官人のために、京内に設けられた官衙付属の宿所である[3]。『拾芥抄』中、宮城部第19には「諸司厨町」として、「神祇官町」「官厨家」「外記町」「大舎人町」以下、「左近四町」「左衛門府」「右衛門府四町」「使庁」「左兵衛町」「内竪町」「左獄」等が列挙されている。このうち「官厨家」(太政官厨家)、「使庁」(検非違使庁)、「左獄」などは京内に置かれた官衙そのものであるので、ここでは除外する。それ以外は各官衙に属する非番の人達が居住した場であった。そしてたとえば「内蔵一町」が「近衛南、堀河西」とあることから、左京一条二坊六町全体を占めたことがわかるように、官衙ごとに町(坪)単位で宿所を形成していた。厨町と言われる所以である。

こうした諸司厨町の史料上の初見は、『日本後紀』大同3年10月丙辰条の「左衛士坊失火、焼百八十家、賜物有差」であるから、その存在は平安時代初めから確認することができる。しかし諸国からの上番によって官衙の運営が支えられるという体制は、平安時代になって始まったわけではない。したがってそれ以前の都城においても存在した可能性は大きい。長岡京については、木簡や墨書土器から官衙町・宿所町の存在が指摘されるようになっている[4]。

それに対し、平城京ではいまだ確かな史料をもって、その存否を確言できるような状況にはなかった。だがそうした施設は不可欠であったはずである。こうした観点から、東一坊大路西側溝から出土した木簡を見ると、衛府にかかわるものが多いことが注目される。先の『拾芥抄』にも見えるように、各衛府は多数の衛士や兵衛等をかかえており、その宿所を確保する必要があった。したがって木簡の中には衛府の諸司厨町にかかわるものがあった可能性があるのでは

衛府の諸司厨町か

なかろうか。ただし、諸司厨町という用語自体は平安時代のものであるから、正確には、それに類似する施設と言うべきである。

平安京における衛府の厨町の位置を『拾芥抄』及びその東・西京図によって見ると、諸本により差異があるが、左兵衛府は左京一条二坊と右京三条四坊、左近衛府は左京一条二坊、左衛門府は左京一条二坊と右京二条二坊・右京三条四坊、右兵衛府・右近衛府は右京一条二坊、右衛門府は左京一条三坊と右京三条四坊、となる。これによれば左・右京の一条・二条という宮城の東西に、接近して多くあったことがわかる。ただしこれは衛府の厨町のみの特色ではなく、諸司厨町全体の傾向である。宮内への上番の便宜を考えれば当然のことと言えよう。もっとも宮城からやや離れた右京三条四坊には左兵衛府・左衛門府・右衛門府町が集中しているが、長岡京では右京四条二坊から「衛門」「衛」「右」と書いた墨書土器が出土しており、同京でもほぼ似たような配置を取った可能性がある[5]。

これに対し本書で扱う木簡は、左京七条一坊からの出土であって、平安京の諸司厨町の立地に比べると、かなり宮城からは離れている。しかし平安京における立地をもって、平城京のそれを考えることはできないであろう。なぜならそこでは、左京一条二坊・二条二坊には平城宮が張り出し(東院)、その東にすぐ接して法華寺(前身は藤原不比等邸)・阿弥陀浄土院・海竜王寺があり、右京でも西大寺・西隆寺が四坊まで広がり、平安京のように諸司厨町が展開する十分な場がないからである。したがって平城京における諸司厨町の立地は平安京とは異なったものとならざるをえない。積極的に七条ないしそれに近い場所に諸司厨町があったということを証明することはできないが、それがあった可能性を否定することはできないであろう。

それ故、ここでは木簡の内容から、それらの中には近辺にあった衛府の厨町から廃棄されたものがかなり含まれていたのではないかという可能性を提示しておきたい。なおさらに絞り込めば、衛府の中では衛門府の可能性が最も高いのではなかろうか。

諸司厨町の機能と木簡

諸司厨町の大きな機能は、もちろん寝食の場ということである。食の材料は当然官給されたから、荷札木簡が多く含まれることは理解できる。そしてそこに多くの門部や衛士がいたとすれば、そこで彼らの上番・下番などに関する事務手続きが行われたり、本府から事務伝達があったりしても不思議ではない。したがって文書木簡が使われたことであろう。

もちろんすべての木簡を一律に諸司厨町ということで理解することができないことは、その内容の幅や時間的長さからも窺えるところである。たとえば先に述べたように「皇后宮職解」の文書木簡などは、これとは関係ないものである。平城宮の辺りから流れてきたものも含まれているのであろう。しかしながら平城京における諸司厨町の存在を示唆しているところに、本遺跡の木簡の重要性があると考えられるのではなかろうか。

1）奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995
2）奈文研『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993
3）諸司厨町については村井康彦「官衙町の形成と変質」『古代国家解体過程の研究』1965
4）山中　章「初期平安京の造営と構造」『古代文化』46—1 1994
5）山中　章　註4)前掲書

7　木棺墓 SX6428について

A　SX6428の概要

東一坊大路西側溝 SD6400の西方約 8 m、奈良時代の井戸 SE6432の東南方約 5 m で平安時代の木棺墓 1 基を検出した。主軸はほぼ南北であるが、わずかに北で西に振れる。墓坑の掘形は、長さ202 cm、北端幅65 cm、南端幅58 cm で、深さ19 cm が残る。棺材は遺存していなかったが、その痕跡から、長さ175 cm、北端幅56 cm、南端幅49 cm と推定できる。木棺の北端と中央の下には、主軸と直交して木材の痕跡があり、角材をわたして桟としていたと考えられる。副葬品には、土師器杯、黒色土器甕、須恵器平瓶、水晶玉、漆器椀、方形漆皮箱各 1 、承和昌宝(承和 2 年：835年初鋳) 2 枚があり、木棺墓の年代は 9 世紀前半と考えられる。

B　木棺墓の集成と SX6428の分析

SX6428と時期的に前後する畿内中枢部である奈良・京都・大阪地域の 8 世紀から10世紀初頭の木棺墓は、別表13の通りで、現在のところ30例を数える。

Fig. 55 に各木棺墓の墓坑・木棺の規模を示したが、これをみると、墓坑の大小は槨などの施設の有無とも関係する可能性がある。特に、幅100 cm 以下の墓坑には槨を伴わない。木棺については、小型のものを除けば、この時期のものは、墓坑の大小にかかわらず、長さ170～200 cm、幅40～60 cm の範囲にまとまる。おそらく、当時の木棺は、規模に多少のばらつきはあるものの、成人を伸展して葬るのに必要な大きさで製作したのであろう。

被葬者は成人か

SX6428の墓坑は、土師の里 9 号墓、長岡京六条大路など特に小型の例を除けば、比較的小型のもので、上記の幅100 cm 以下のものである。SX6428では槨は検出していないが、墓坑の規模からも、槨を設けていなかったことは確実であろう。また、木棺の規模は他の木棺が集中する範囲に入り、SX6428の被葬者も成人であったと考えることができよう。

SX6428では副葬品は北端に集中している。このように墓坑・棺の長軸端部に遺物が集中する例は、他でもしばしばみられる。こうした場合、現在のところ、歯や骨、身につけていた装飾品の位置で検証された事例

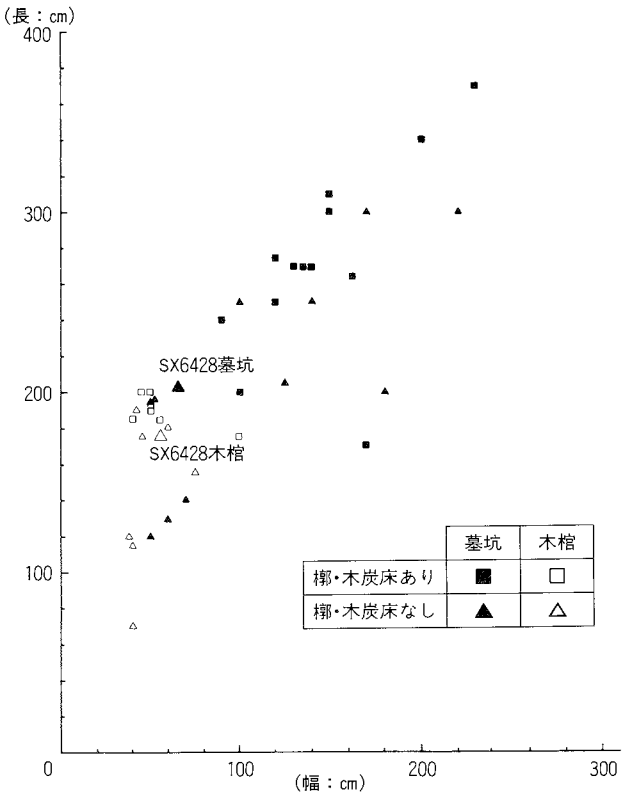


Fig. 55　木棺墓の規模

はないが、副葬品が集中する端部のほうに埋葬頭位を求めている。本例の場合も、副葬品の集中と棺幅が南より北の方が広いことから、北側に頭位を求めることができる。　頭位は北

副葬品のうち、平瓶、漆皮箱は棺底にほぼ接して出土したことから、棺内に副葬したとみることができる。一方、甕、漆器椀は棺底から遊離して出土しており、棺外に置いていた可能性が高い。また、杯と漆器椀は重ねていたと考えられる。つまり、北枕に安置された遺体の枕元に平瓶、漆皮箱を納め、棺蓋上に甕と重ねた杯、漆器椀を置いていたと推定できる。棺内のものは水滴と考えられる平瓶や方形漆皮箱など属人器的な色彩の強いものであるのに対し、棺蓋上に置いたと考えられるものは、椀、杯、甕など供膳に用いたものである。棺内に納めたものと棺外に置いたものの間で、意味を異にしていたのであろう。　副葬品配置に見る違い

SX6428では、銭貨、漆器椀、方形漆皮箱、水晶製小玉なども副葬されていたが、これらは8世紀後半から9世紀中葉にかけての木棺墓にしばしばみられるものである。こうした遺物が偶然選択されて副葬されたとは考えがたい。各木棺墓に、これらを副葬することに対して、共通した意味があった可能性がある。また、石帯、冠など、被葬者の階層を想定させるような副葬品はない。しかし、漆器や水晶玉などの当時にあっては高価と考えられるものを副葬していることから、SX6428の被葬者は、こうした高価なものを購入あるいは使用できるほど経済的に富裕な階層であったとみることができよう。十六坪の遺構変遷によれば、SX6428の属するV期では、この地は依然、宅地として機能しており、南西部の両廂付建物SB6595を中心に7棟以上の建物がある。SX6428とこうした建物群を明確に分離する塀などは検出していない。したがって、建物からやや離れるとはいえ、これらと同一宅地内に設けていることがわかるとともに、被葬者とその家族は十六坪の住人と関わりがあった可能性が強く、宅地内に何らかの意図をもってSX6428を構築したと考えることができる。また、建物規模もSX6428の被葬者もしくはその家族は経済的に裕福な階層という先の想定とも矛盾しないものといえよう。　被葬者は経済的に裕福

C　畿内中枢部における古代木棺墓

次に、集成した木棺墓を分析することにより、この時期の木棺墓について考察を加えてみたい。まず、槨の有無、副葬品の差を基準にすると、別表13の木棺墓はTab. 31のように分類できる。ここでいう官人的副葬品とは、被葬者が官人であることを推定しうる石帯、冠を指す。　木棺墓の分類

8世紀から9世紀にかけての木棺墓は、従来から律令官人の墓と指摘されてきた[1]ところであるが、今回の分類では、官人的副葬品をもつB類・C類・G類のほか、D類のなかで、奈良時代の墳墓としては珍しい磚槨をもつ高安城30号墓、官人の墓とされるものにしばしば伴う墓誌・買地券とされる鉄板が出土した高安城10号墓、また当時貴族しか使用できなかったと考えられている金属製食器が副葬されていた杳掛墓も官人墓の可能性が高いとみなせよう。したがって、官人墓と考えることができるのは、B・C・G類とD類の一部となるが、これらの多くのものが、槨をもつことは注目できる。しかし、同時に木棺墓には官人的な副葬品をもたず、被葬者が官人とは把握しかねるものが多数存在することがわかる。そして、これらの多くは、E類に代表されるように、槨をもたず、構造的にも官人墓とは差異があることが判明する。

次いで、副葬品をみると、漆器、鏡、土器、玉など、様々なものの副葬が8世紀末に始まり、官人的な副葬品は9世紀後半に入ると激減するなどの変遷をたどる。また、槨についても副葬

Tab. 31　木棺墓の分類

分　類	槨	土器の副葬	官人的副葬品	木　　棺　　墓
A　類	有	有	無	能峠１号墳、長野、安祥寺下寺下層
B　類	有	有	有	平吉、岡本山１
C　類	有	無	有	木津西山、西野山、伽山、土師の里１
D　類	有	無	無	高安城10、高安城30、沓掛、岡本山２
E　類	無	有	無	平城京 SX6428、飛火野、池上、西山Ｉ号墓、西山II号墓、石光山11号、石光山12号、丹切第２床面、丹切第３床面、能峠３号墳、杣屋、土師の里９、大坂城三の丸墓１
F　類	無	有	有	
G　類	無	無	有	笹尾
H　類	無	無	無	長岡京六条大路、箸尾

品同様、８世紀末以降、槨を伴わないものが増加していくといった変遷をみることができる。

木棺墓の変遷

こうした状況をもとにすれば、木棺墓の変遷には以下の３つの段階があることが判明する。

①奈良時代後半の段階：木棺墓の出現期である。当初はC・D類が中心であった。

②８世紀末から９世紀中頃までの段階：木棺墓が増加するとともに、多様化する時期である。従来あったC・D類に加え、槨のないE類など、多くの類型のものが出現する。また、鏡や玉などの奢侈品をもつものも多く、土器の副葬が始まるのもこの時期からである。

③９世紀後半以降の段階：主流となる類型がE類になる時期。槨や官人的副葬品をもつ類型は数が激減したり、あるいはかつてなかったような多量の土器を副葬するB類がみられるなどの現象がみられる。

木棺墓変遷の背景

この変遷については、副葬品などから以下のような背景があると想定できるであろう。

①段階で出現したものが、いずれも律令官人の墓とみなせるものであることから、木棺墓は律令官人層の墓として出現したと考えることができよう。また、この段階の木棺墓は、いずれも槨をもつ構造であることから、当初は、槨と木棺は一体のものであったと想定できる。火葬墓にあっても、8世紀から9世紀に、蔵骨器を納める外容器をもつものや木炭で蔵骨器を覆う例が多数知られているが、これなども蔵骨器は木棺、外容器・木炭は槨に対応させることができ、木棺墓は本来、槨を伴うものであったという想定を傍証しよう。また、時代は下るが、承和９(842)年の嵯峨上皇遺詔にある「重以棺槨、繞以松炭」(『続日本後紀』同年７月丁未条)という語句も、これが漢文修飾であっても、その一端をあらわしたものとみることができるとともに、当時、遺骸は棺・槨で丁重に葬るものと考えられていたこともうかがうことができる。また、後にしばしば副葬される土器は、当初は副葬されることがなかったようである。

②段階に入っても官人墓とみられるC・D類は存続している。先にあげた嵯峨上皇遺詔のように官人層では、棺と槨は一体とみなす考えは綿々と継続していたとみることができよう。その一方で、A・E類などが出現し、木棺墓は多様化していく。これらは官人的な副葬品をもたない点や槨を設けないなど、従来の木棺墓とは異なる面をもっており、従来からの木棺墓受容層であった官人の意識の変化とともに、官人層とは別の階層の人々が、新たに木棺墓を受容し始めたことを示している可能性が高い。また、奢侈品の副葬が目立つことは、木棺墓受容層が経済的に富裕な階層であったことを示していよう。さらに、棺外に土器を副葬するようになったことは、この時期から埋葬時に土器などの埋納を行なうような儀礼や習俗が広まったとみること

	8世紀（後半）	9世紀		10世紀
A		◆長野	◆能峰南山 I	
B		◆岡本山 I	◆平吉 SX16	
C	◆伽山	◆西野山 ◆土師の里 I		
D	◆高安城30　◆沓掛	◆高安城10		
E	◆土師の里 9	◆池上 平城京 SX6428 ◆大坂城三の丸 I	◆能峰南山 3	◆飛火野 ◆西山 I・II ◆石光山11・12 ◆丹切43
G				◆笹尾

Fig. 56　木棺墓の変遷

ができよう。副葬した土器には、長頸壺、皿、椀など供膳形態が多く、こうした儀礼や習俗に被葬者への供物や埋葬時の飲食などが含まれていたと想定できる。裕福な階層の葬儀については、延暦11(792)年7月27日太政官符に「豪富之室、市郭之人、猶競奢靡不遵典法、遂敢妄結隊伍仮設幡鐘、諸如此類不可勝言、貴賤既無等差、資財空為損耗、既窀之後酣醉而帰」(『類聚三代格』巻19禁制事)とあり、都市部での状況をうかがうことができる。②段階でみられるようになる土器や漆器を副葬する習俗も、こうした奢侈の流行と関わりがあるかもしれない。また官人を含め、この時期から槨を設けなくなり、かわりに副葬品が増えていくことは、埋葬が簡素化していくのに反比例して葬儀が重視されていったことを反映しているのであろう。

③段階にみられるE類の主流化や多量の土器を副葬するB類の出現は、前段階にあらわれた埋葬時の土器埋納をともなう習俗の定着を示していよう。これとともに、槨を伴い、土器を副葬しないといった初期の木棺墓にみられる状況は、ほとんど形骸化したと指摘できるであろう。また、同時に、官人墓とみられるものの激減は、官人層が木棺墓から離れたなどの木棺墓受容層の変化も想定させる。平安時代に入ると火葬がしばしば行われ、平安京では鳥辺野、深草などの火葬の場も成立する。官人層は、火葬墓へ回帰した[2]とすれば、この想定に合致する。このように、この時期に木棺墓自体の性格や木棺墓受容層の変質が進行したといえよう。

以上3段階を通してみると、官人層は比較的、棺・槨の組み合わせを保持してようであるが、木棺墓を受容する層が広がる中で、槨を設けずに簡略化していく様相が認められる。最終的には、官人層が木棺墓から離れることで、棺・槨の組み合わせが廃れたとみることができる。

D　ま　と　め

SX6428は、槨がなく、土器を副葬するという特徴と9世紀前半という年代から、E類では8世紀末から9世紀初頭のものと、9世紀末から10世紀初頭のもの間に入るものであることがわかる。木棺墓全体の分析で述べたように、この類型は官人以外の階層の墓である可能性が高い。では、実際、SX6428は、どのような階層であり、どのような背景をもっていたと想定できるのであろうか。脂肪酸分析の結果をもとに被葬者を男性として考えていきたい。

被葬者層の想定

副葬品からは、経済的に裕福な階層であったと想定できた。藤原宮跡出土の宮所庄木簡[3]には宮所庄に必要な物品を奈良の市場で購入したり、物資を運送業者を雇って運搬したことが記されている。このように奈良では、商人や運搬業者が活躍していたことがうかがえ、彼らも被葬者層の候補となろう。

一方、当時の平城京跡の状況をみると、『類聚国史』巻31に大同4(809)年12月に平城上皇が右京二条に残存していた故右大臣大中臣清麻呂邸を使用したことが記録されており、貴族の邸宅

が遷都後も残存していたことが判明する。実際、十六坪でもSX6428と同時期の建物群を検出している。それとともに、『日本三代実録』貞観6(864)年11月7日条の「大和国言(中略)延暦七年遷都長岡、其後七十七年、都城道路、変為墹田畝、内蔵寮田百六十町、其外私竊墾開、往々有数」をはじめ、旧平城京内の土地、田畑がしばしば、官司・皇族・貴族・寺院に下賜された記録があるように、開墾活動が盛んであったことがうかがえる。ここから、土着化した官人、貴族・官司・寺院の邸宅・田地を管理する管理人や遷都後の土地を「私竊に墾開」し、私有していた有力農民層(力田の輩)などもSX6428の被葬者の候補として想定できよう。ここで注目できることは、 廃絶後の難波京・長岡京域や9世紀後半の宇陀地域など、田畑の開墾・山地開発が盛んに行われていた地域でも、E類の木棺墓がしばしばみられる点である。

さらに、立地についてみると、他の墓がしばしば集団墓中や古墳周辺・石室内に設けているのに対して、SX6428は、宅地の片隅に設けるという比較的特殊なあり方を示している。先に、被葬者を十六坪の住人と関連するものと想定したが、この宅地内に墓を設けるといった行為には土地への執着すら看取できる。

土地開墾・私有に関連する階層か

以上の点を考慮すると、先に上げた階層では土着化した官人、有力農民層など土地の開墾・私有に関連する階層が最も適合すると考えられよう。この点では、『朝野群載』巻17に収められた寛平2(890)年の従四位上藤原良尚蔭子菅根等連署荘園施入帳に記載された、父から伝領した上総国藻原荘内に墳墓を作るとともに、子孫が遺志に背いて同荘を他人に手放し、「令牛羊践我墳墓」を恐れ、興福寺にこの藻原荘を施入・保全しようとした9世紀前半の常陸介藤原春継の事例が、土地の私有を永続させるために墓が果たす機能をうかがわせており、興味深い。

さらに、『日本後紀』延暦16(797)年正月壬子条にみえる勅に、「山城国愛宕葛野郡人、毎有死者、便葬家側、積習為常」とあり、家の側に死者を葬る風習が存在していたことを知ることができる。SX6428は、こうした宅地・家の傍に墓を設ける風習が畿内の他の地域でも行われていたことや、その実態を示しているのではないだろうか。

以上の推定に立てば、先にあげた木棺墓の変遷は、律令官人の墓制の変化とともに、SX6428にみられるような非官人的で経済的に富裕な階層、具体的には有力農民層などの出現・展開と密接に関わるとみることができる。E類に代表される非官人墓的な木棺墓が増加していくことは、8世紀末以降、こうした階層が近畿各地で活動を盛んにしていったことを示していると考えられよう。これに対し、官人的な木棺墓の減少は、上級官人の薄葬化[4]や、中・下級官人の没落などといった状況と関連してくるのであろう。

今後、資料が増加し、多方面からの分析が可能になれば、この時期の墳墓研究は、様々な面での成果が期待されるであろう。

1) 黒崎　直「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集』VI 1980
地村邦夫「大阪府における古代・中世の木棺墓について」『大阪府埋蔵文化財協会　研究紀要』3 1995
2) 黒崎　直　註1)前掲書
3) 奈文研『藤原宮出土木簡』6　1983
4) 黒崎　直　註1)前掲書

8　結　　語

平城京左京七条一坊十五・十六坪の発掘調査の成果については、以上の各章で詳細に述べた。ここでは、その内容を要約し、あわせていくつかの課題について触れておく。

i　遺　　構

今回の発掘調査では、左京七条一坊十六坪のほぼ3/4を調査するとともに、東一坊大路西側溝等の条坊関連遺構が明らかになった。

条坊関連遺構　東一坊大路西側溝と七条条間北小路および両側溝については、１坪分にわたり調査し、さらに拡張区を設けて、東一坊大路東側溝、六条大路と東一坊坊間東小路、それぞれの両側溝を確認した。東一坊大路は、溝心々距離22.5ｍで、大尺、小尺のいずれも完数を得られなかったが、これは、おそらく奈良時代末に、西側溝が大規模に改修されて、溝心が本来の位置より東になった結果と考えられよう。西側溝は幅7.5～8.6ｍ、深さ1.5～1.7ｍで、平城京の基幹排水路にふさわしい規模を有していた。大きく３時期の変遷をたどり、最終的には、調査地の中ほどで検出した堰によって、東へ流れる用水路として機能していた。また、西側溝に架かる橋を検出した。十六坪への出入りのためと考えると、大路側溝に架かる橋であることから、坪の性格や居住者とも関係してくるが、外周閉塞施設が存在していた時期には併存しがたいものである。今回の調査では、時期を確定するにはいたらなかったが、Ｉ期の平城京造営の拠点施設への物資の搬入にともなう、仮設的な橋であったとも考えられよう。

大路側溝に架かる橋

一方、六条大路の両側溝を一度に検出した調査は今回がはじめてで、当初想定していた位置より南で検出するとともに、溝心々距離14.3ｍ(40大尺)と、他の大路より規模が狭いことが明らかになった。これが、当調査地のみの状況であるのかは、今後の調査の進展を待たねばならないが、右京域においても、同規模であったとすると、従来、問題にされてきた薬師寺南門と六条大路北側溝の位置関係については、一応の解決をみることになった。さらに、十六坪の四周を取り囲む条坊の位置を確認したことにより、十六坪は、道路心々間が東西・南北ともに450尺より長い、広めの坪であり、平城京の街区割が、必ずしも条坊計画の規格通りではない場合もあることが明らかになった。

六条大路の規模

十六坪の遺構　坪のほぼ3/4を調査した十六坪の遺構は、時期を示す遺物の出土は少なかったが、主として重複関係と位置関係により、奈良時代から平安時代におよぶ６時期の変遷をたどることが明らかになった。また、その間、敷地が細分されることもなく、１町規模の利用形態であった。

平城京造営当初のＩ期は、坪西半に遺構が集中し、東半は空閑地となっている。建物配置の規則性や中心的な建物が認められず、地理的条件も考慮すると、一般的な宅地というよりも、平城京造営にともなう仮設的な施設であった可能性が考えられた。

仮設的な施設

これに対し、II期とIII期は、計画的な敷地利用が認められ、官人の宅地と考えられる。坪の中枢は、正殿と脇殿風の建物を規則的に配置した南東部にある。南北塀で区画した西半は厨的空間になるのであろう。

奈良時代末から平安時代にかけてのⅣ期には、坪西半に建物が集中する。倉庫等の存在も含め、建物配置からは、一般の宅地とは考えにくく、東一坊大路西側溝出土の鞴羽口片や甑炉片、鉱滓等を考慮すると、この坪において、生産活動が行われていた可能性も考えられよう。

Ⅴ期の平安時代になっても、敷地の利用密度が低くなるとはいうものの、宅地として利用されており、平城京廃都後も、人々が住み続けていたことが確認された。また、敷地の一郭には墓が営まれていた。しかし、Ⅵ期になると、小規模建物が散在するのみで、大半は耕地化していたと思われる。東一坊大路西側溝が最終的に水田の用水路として利用されていた時期がこれにあたる。

祭己坑

なお、七条条間北小路南側溝の溝底で検出した土坑は、溝に水が流れていない段階で掘られたものである。墨書人面土器やウマの頭蓋骨、四肢骨等を納めており、出土した土器から奈良時代初頭に位置づけられる動物祭祀の遺構である。また、大路上等で検出した5基の土器埋納遺構は、脂肪酸分析の結果、いずれもヒトを埋葬したもので、その大きさからは、小児埋葬と考えられるものである。これらは、いずれも平城京で初めて検出された例として、注目されるであろう。

小児埋葬

ii 遺　物

遺物は東一坊大路西側溝を中心に、土器・土製品、瓦磚類、木製品、金属製品、石製品、木簡が出土し、平安時代の木棺墓からは承和昌寶、漆器、土器が出土した。

瓦塼類の出土は、調査面積からみて、軒瓦類を含めてそれほど多くはない。坪内においては、部分的にせよ、瓦葺であったと考えられる建物は検出していない。未調査地に想定することも不可能ではないが、これらは、主として外周閉塞施設にともなうものであったと考えられよう。また、土器埋納遺構に使用していた甕は、河内中部、あるいは摂津東部から山城南部にかけての地域との関連性が強いものであることから、それらの地域と居住者の間に何らかの関係を想定しうるであろう。甕は平城宮土器Ⅱに属すとみられることから、遺構変遷では、官人の宅地としたⅡ期にあたることになる。

祭祀関連の遺物

一方、西側溝から出土した金属製人形、琴形等の木製形代類、墨書人面土器、小型模造土器、土馬等の祭祀関連遺物は、祭祀土坑とともに、平城京における祭祀の様相を知る、良好な資料となるものである。琴形は、従来知られていなかった形の琴の存在を暗示するものであり、墨で波線を描いた矛形も類例の少ないものとして注目されるであろう。

鉄製人形

また、平城京では、平城宮およびその周辺から多く出土していた金属製人形が、平城京南半から数多く出土した。しかも、その大半が鉄製であり、今回の鉄人形の出土量は、従来の点数を上回るものであった。銅人形と同じ作りの1点を除くと、左右に緩く蛇行する体と「人」字形に両脚を開く特異な形態をしているものと顔から腰にかけて円孔を4個穿っているものとになる。前者は、これまでの金属製人形になかった形態をしており、後者については、目、鼻、口をタガネで刻んだ後に穿孔し、脚はタガネで切り込みを入れて左右に開くという順で製作している状況がうかがえる。

なお、石帯（蛇尾）は、木棺墓の存在とともに、平安時代になっても、人々が活動していたことを物語るものであり、遺構変遷とも矛盾しない。

iii　課題と展望

十六坪の遺構は、奈良時代から平安時代にかけて、6時期にわたって変遷することが明らかになったのであるが、その中で、II期とIII期の間に恭仁宮遷都を想定している。近年、平城京の調査が進展するなか、恭仁宮遷都の前後の時期で、基本的な建物配置に大きな変化が見られず、一部の建物は残しつつ、建て替えを行っていると考えられる例も認められるようになってきており、遷都に伴う平城京の動向を具体的に知る手がかりが増加しつつある。本調査地においても、敷地利用形態が基本的に踏襲されている点は注意すべきであろう。また、これまで、小面積の調査等では、築地等の存在は雨落溝を検出することによって想定していたが、広い面積を調査し、遺構と遺物を合わせ検討することにより、坪の外周閉塞施設が、ある程度の期間をおいて成立した状況が考えられるにいたった。すなわち、北面より遅れて東面、次いで南面が施工された状況を窺うことができ、宅地に外周閉塞施設が必ずしもともなわない場合のあることが明らかになった。さらに、小規模宅地が多いと考えられてきた平城京南半において、奈良時代前半から1町規模の宅地を確認したことは、従来の見解が確定的なものではなく、今後の調査の進展により、再検討する必要があることを示していよう。

敷地利用形態の踏襲

1町の宅地

今回の調査では、東一坊大路西側溝から大量の遺物が出土した。道路側溝出土遺物については、それらがどこで投棄されたものであるか確定しがたいという問題が常に伴う。東一坊大路西側溝は平城宮から南流する平城京の基幹排水路の一つであり、特に、今回の調査地付近は、地形的にも溝の傾斜が緩くなったところであるだけに、上流域から流下してきた可能性も捨てがたい。したがって、今後、こうした道路側溝から出土した遺物については、平城京における排水系統・集水域に関しての検討も必要になってくるであろう。しかし、今回の調査では、矛形や琴形木製品のみならず、木簡や土器、動物遺存体などの出土状況からは、これらの遺物が比較的出土地に近いところから投棄されたものと考えられる。その観点にたつと、西側溝出土から出土した木簡は、その内容から京域における諸司厨町に類似する施設が、調査地を含めた近辺に存在していた可能性を示唆している。そのような施設が十六坪にあったとすると、木簡の出土層位からは、官人の宅地とした遺構変遷のII・III期にあたることになる。しかし、土器埋納遺構について述べた点と果して整合性を持ちうるのか、明確な解答を得られないのが現状であり、また、上述したような施設がどのような遺構配置となって現れるのか、いまだ不明な部分が多い。これらの点については、今後、平城京の発掘調査が進展していくなかで、明らかになってくることが期待されるであろう。

諸司厨町か

別　表

別表１　建築遺構一覧

時期	遺構番号	桁行×梁行	方位	桁行柱間寸法(尺)	梁行柱間寸法(尺)	廂の付き方	廂柱間寸法(尺)	造営尺(尺)	振れ	掘形出土土器	抜取穴出土土器
I	SB6555	6×2	南北	8	7.5			29.4	−1°25′		
I	SB6570	5×2	南北	5.5	6			29.5	−1°50′		
I	SB6580	4×2	東西	5.5	9.5			30.0？	+4°30′		
I	SB6652	5×2	東西	7	6			30.0？	−3°00′		
I	SA6546	2	南北	15・12				29.5	≒0°		
I	SA6547	2	東西	8.5？				29.5？	−1°40′		
I	SA6549	1	南北	7.5				29.5？	−4°30′		
I	SA6571	5	南北	6～7				30.0？	+1°30′		
I	SA6644	7	東西	6～13				30.0？	−2°10′		
I	SA6655	3	東西	5				30.0？	−1°00′		
II	SB6425	5×2	東西	8・端8.5	8	南	10.5	29.5？	+0°25′		
II	SB6435	3×2	東西	8	6			30.0？	−2°00′		
II	SB6440	3×2	東西	7	7			29.5？	≒0°		
II	SB6495	3×2	南北	8	8（南面4.5+7+4.5）			29.5？	+0°30′？		
II	SB6560	6×2	南北	8	7.5			29.5？	+1°20′？		
II	SB6575	5×2	東西	6	6・7			29.5？	+1°30′		
II	SB6585	3×3	南北	6.5・5	5			30.0？	+1°30′		II～III
II	SB6625	4×2	南北	5.5・6	6.5			30.0？	+2°00′		
II	SB6647	3×2	南北	17÷3	6			29.5？	≒0°		
II	SB6650	3×2	東西	6・7	5.5			30.5？	*		
II	SB6660	4×2	東西	5.5・6	6.5			30.0？	+1°30′		
II	SB6666	3×2	東西	20÷3	6			29.5？	+1°10′		
II	SA6433	12	東西	5～11				*	−0°50′		
II	SA6548	6α	南北	8.5～10				29.5？	+0°20′		
II	SA6559	19α	東西	7～10				*	+1°20′		
II	SA6566	2	東西	9+10				*	+0°25′		
II	SA6576	7	南北	9～28				29.5	+0°40′		
II	SA6604	3	南北	5.5				30.0？	+0°20′		
III	SB6426	5×2	東西	8・端9	8			30.0	≒0°		II～III古
III	SB6436	3×2	東西	6・6.5	6			30.0？	−1°40′		
III	SB6441	4×2	東西	6.5・端7	7			30.0？	−1°30′		
III	SB6445	2α×2	東西	6	6			30.0？	≒0°		
III	SB6490	3×2	南北	6	6			29.4	+0°25′		
III	SB6500	5×2	東西	8	9	南	10	29.5	+0°25′		
III	SB6562	3×3	南北	5.5	5			30.0？	−0°40′？		
III	SB6567	3×2	東西	7	7			29.6	−0°30′		
III	SB6599	4×2α	南北	10・8	8？	東	9	30.0？	−1°10′	II～III古	
III	SB6602	3×2α	南北	5.5	6.5			29.5？	≒0°		
III	SB6605	3×2α	南北	5.5	7.5			30.0？	−0°20′		
III	SB6620	3×2	東西	5.5	6			29.5？	−0°30′		
III	SB6628	2×2	南北	6.5	5・6			30.0？	−1°30′		
III	SB6639	2×2	南北	7	5？			*	−1°40′		
III	SB6646	3×2	南北	6	6			30.0？	−0°30′		
III	SB6651	3×2	南北	6	6			30.0？	+2°20′	III中～	
III	SB6663	3×2α	南北	5.5	5			30.0？	*		
III	SA6439	7α	東西	西端2間は8				30.0？	−1°20′		
III	SA6509	4	南北	7・6				30.0？	+0°50′		
III	SA6540	20α	南北	7				29.5	−0°25′		

時期	遺構番号	桁行×梁行	方位	桁行柱間寸法(尺)	梁行柱間寸法(尺)	廂の付き方	廂柱間寸法(尺)	造営尺(尺)	振れ	掘形出土土器	抜取穴出土土器
III	SA6565	2α	東西	5				30.0？	≒0°		
III	SA6568	6	南北	5・6.5				29.7？	+0°45′		
III	SA6582	6	南北	10・8				30.0？	+0°20′		
III	SA6586	5	東西	7～14				30.0？	−0°10′		
III	SA6603	2	南北	1.3m・1.6m				30.0？	*		
III	SA6637	8	南北	4.5～8				*	≒0°		
III	SA6641	2α	東西	5				30.0？	≒0°		
III	SA6643	2	東西	10・15				30.0？	≒0°		
III	SA6662	3	東西	5～9				30.0？	−2°30′		
IV	SB6510	5×2	南北	6.5・7	6.5	東	9.5	29.7？	−0°40′		
IV	SB6550	5×2	南北	8	8			30.0	+1°00′		
IV	SB6590	5×2	東西	5	6.5	北	6	30.5？	+2°10′		
IV	SB6591	5×2	東西	6.5	6	南・北	7	30.0？	+2°20′	V	
IV	SB6600	5×2	東西	7	8.5			29.5？	+2°20′		
IV	SB6623	5×2	南北	6.5・中央7	5.5			30.0？	−0°30′		
IV	SB6626	2×2	南北	6.5	5			30.0	≒0°		
IV	SB6630	5α×2	東西	6.5	5.5	南・北	8	30.0？	≒0°		
IV	SB6635	6×2	東西	6.5	10.5÷2			30.0？	≒0°		
IV	SB6640	4×2	南北	6.5・7	6	東	7	29.5？	≒0°		
IV	SB6645	3×2	東西	6	5.5	南	8	29.5？	+1°30′		
IV	SA6541	12	南北	6～8				30.0？	+0°15′		
IV	SA6545	2α	南北	6.5・7				30.0？	+0°35′		
IV	SA6551	2α	南北	5.5				30.0？	+1°00′		
IV	SA6588	3	南北	6～8				*	+2°20′		
IV	SA6624	3	南北	9～12				*	−0°30′		
IV	SA6667	4	東西	両端9				*	−0°30′		
IV	SA6670	1	東西	6				30.0？	≒0°		
V	SB6502	3×2	南北	7.5	6.5			30.0？	+1°25′		
V	SB6505	3×2	東西	7	7			30.0？	+1°30′		
V	SB6563	2×2	南北	8	5.5			29.7？	+3°30′		
V	SB6595	5α×2	南北	7.5	8	東・西	東9.5・西7	30.5？	+3°30′		
V	SB6601	5×2	東西	7	8.5			29.5？	+1°20′		V
V	SB6661	3×2	東西	4.5～6	5+8、5+7			*	*		
V	SB6665	4×2	東西	6・東端4.5	5.5			30.0？	+2°30′		
V	SA6501	4	東西	全長13				30.0？	+1°25′		
V	SA6572	4	南北	10				29.5	+1°20′		
V	SA6598	16α	南北	6.5～8・9～12				30.0？	+3°30′		
VI	SB6427	3×2	南北	5・中央6	8・5			30.0？	+1°30′		
VI	SB6606	1α×3	東西	5.5	6			30.0？	−0°40′		
VI	SB6664	2α×2	東西	6	6.5			30.0？	*		
VI	SA6503	5	東西	6				30.0？	+2°45′		
VI	SA6506	5	東西	6				30.0？	+2°25′		
VI	SA6597	3	南北	5				29.5？	−3°50′		
不明	SA6424	7	南北	5.5～8				*	+2°00′		
不明	SA6564	2	東西	7・5				29.5？	≒0°		
不明	SA6573	3	南北	8				30.0？	−5°50′		
不明	SA6583	3	東西	7				30.0？	−0°20′		
不明	SA6584	3	東西	9				29.5？	−2°00′		

時期	遺構番号	桁行×梁行	方位	桁行柱間寸法(尺)	梁行柱間寸法(尺)	廂の付き方	廂柱間寸法(尺)	造営尺(尺)	振れ	掘形出土土器	抜取穴出土土器
不明	SA6587	2	南北	8				30.0？	−2°50′		
不明	SA6638	2	南北	7				29.5	+3°20′		
不明	SA6648	5	東西	7.5・両端6.5				30.0？	+2°20′		
不明	SA6654	2	東西	5.5				30.0？	+2°00′		
15坪	SB6469	7×2	東西	6・7・8	6	北	4	29.5？	−2°00′		
15坪	SB6522	2α×2	南北	5	6			30.0？	+0°30′		
15坪	SB6523	3×2α	東西	6	6			29.5？	+2°30′		
15坪	SB6524	3×2	東西	6・西端4	6			30.0？	+3°00′		
15坪	SA6526	2	東西	4.5				30.0？	+1°50′		
15坪	SA6527	2	東西	4.5・6.5				30.0？	−2°10′		

桁行×梁行の〔nα〕はn間以上を示す
造営尺・振れの〔＊〕は測定不能を示す
振れは時計回りを＋で示す

別表２　遺構別出土木製品一覧表

遺構	SD6400	SD6451	SD6472	SE6657	SX6428	遺構	SD6400	SD6451	SD6472	SE6657	SX6428
楔	4					人形	17	1			
工具柄	5			1		鳥形				1	
箆	4					弓形	1				
木釘	2					刀形	4				
漆刷毛	2					矛形	2				
木槌	1					刀子形	4				
横槌	2					斎串	8			1	
糸巻	4					陽物	2				
匙	9					琴柱形	1				
杓子	2					琴形	2				
挽物	4				1	不明形代	4				
曲物	1					下駄	3				
曲物側板	10	1				留針	10	1			
組合箱	1					櫛	19		1		
漆皮箱					1	檜扇	2				
蓋板	1					木印	1				
栓				1		部材	26			1	
板状品	177					棒状品	795	1			

別表３　東一坊大路西側溝他出土土器・土製品一覧

番号	地　区	層　　位
1	ＰＳ97	褐色粗砂
2	ＲＨ97	木屑層
3	ＰＪ97	褐色粗砂
4	ＰＳ97	暗灰砂
5	ＲＡ97	暗灰砂
6	ＩＫ10	褐色粗砂
7	ＩＩ10	暗灰粘土
8	ＲＩ97	灰白砂
9	ＩＬ10	褐色粗砂
10	ＲＭ97	褐色粗砂
11	ＩＨ10	暗灰砂
12	ＩＩ10	暗灰粘土
13	ＰＳ97	暗灰砂
14	ＲＬ97	暗灰砂
15	ＲＩ97	暗灰砂
16	ＲＥ97	暗灰砂
17	ＰＭ96	褐色粗砂
18	ＰＬ96	褐色粗砂
19	ＰＭ96	褐色粗砂
20	ＰＭ96	褐色粗砂
21	ＩＮ10	褐色粗砂
22	ＲＬ97	褐色粗砂
23	ＲＢ97	褐色粗砂
24	ＲＫ97	褐色粗砂
25	ＲＨ97	灰色粘土
26	ＨＳ10	木屑層
27	ＱＨ97	木屑層
28	ＲＩ97	灰白砂
29	ＲＥ96	青灰砂質土
30	ＲＮ97	褐色粗砂
31	ＱＥ97	木屑層
32	ＱＬ97	暗灰粘土
33	ＰＬ96	褐色粗砂
34	ＰＬ96	褐色粗砂
35	ＱＢ97	褐色粗砂
36	ＰＬ97	褐色粗砂
37	ＰＪ97	褐色粗砂
38	ＩＮ10	褐色粗砂
39	ＲＧ97	褐色粗砂
40	ＩＨ10	灰白砂粘
41	ＲＡ97	暗灰砂
42	ＩＩ10	暗灰粘土
43	ＩＭ10	褐色粗砂
44	ＱＤ97	褐色粗砂
45	ＰＪ97	暗灰砂
46	ＲＡ97	木屑層

番号	地　区	層　　位
47	ＧＬ10	暗灰砂
48	ＩＭ10	暗灰砂
49	ＲＧ97	淡灰砂質土
50	ＩＩ10	暗灰粘土
51	ＲＦ97	褐色粗砂
52	ＱＪ97	褐色粗砂
53	ＲＩ97	灰白砂
54	ＰＳ97	暗灰砂
55	ＰＳ97	暗灰砂
56	ＩＨ10	灰色砂粘
57	ＲＩ97	暗灰砂
58	ＲＧ97	淡灰砂質土
59	ＰＭ96	褐色粗砂
60	ＱＤ97	暗灰砂
61	ＱＤ97	木屑層
62	ＱＢ97	暗灰砂
63	ＰＳ97	暗灰砂
64	ＰＫ96	褐色粗砂
65	ＲＨ97	木屑層
66	ＲＮ97	褐色粗砂
67	ＰＪ97	褐色粗砂
68	ＩＬ10	褐色粗砂
69	Ｒ地区	SD6400　層不明
70	ＲＥ97	木屑層・淡灰砂質土
71	ＰＬ97	褐色粗砂
72	ＰＬ97	褐色粗砂
73	ＱＭ97	暗灰砂
74	ＰＮ96	褐色粗砂
75	ＱＪ97	暗灰粘土
76	ＲＨ97	褐色粗砂
77	ＰＮ97	褐色粗砂
78	ＩＬ10	褐色粗砂
79	ＲＩ97	木屑層
80	ＰＬ97	褐色粗砂
	ＧＬ10	褐色粗砂
81	ＩＫ10	暗灰砂
82	ＰＮ96	褐色粗砂
83	ＰＬ96	褐色粗砂
84	ＰＳ97	褐色粗砂
85	ＰＳ97	暗灰粘土
86	ＨＳ97	暗灰砂
87	ＰＳ97	暗灰粘土
157	ＲＦ97	暗灰砂
158	ＱＪ97	SD6414　暗灰粘土
159	ＨＭ12	SX6402　暗灰粘質土
201	ＱＡ97	暗灰砂

番号	地　区	層　　位
202	ＲＨ97	灰白砂
	ＲＩ97	褐色粗砂
	ＲＩ97	暗灰砂
203	ＲＬ97	褐色粗砂
204	ＲＤ97	暗灰粘土
205	ＱＧ97	褐色粗砂
206	ＱＤ97	褐色粗砂
207	ＧＪ10	暗灰砂
208	ＱＥ96	暗灰砂
209	ＰＭ97	暗灰砂
210	ＰＲ96	暗灰砂
211	ＩＮ10	褐色粗砂
212	ＲＮ97	褐色粗砂
213	ＨＳ10	木屑層
214	ＱＥ96	暗灰砂
215	ＰＮ96	暗灰砂
216	ＲＩ97	暗灰砂
217	ＱＫ97	暗灰砂
218	ＲＡ97	暗灰砂
	ＲＢ97	暗灰砂
219	ＱＲ97	暗灰砂
220	ＱＰ97	暗灰砂
221	ＱＬ97	褐色粗砂
222	ＰＪ96	褐色粗砂
223	ＰＨ97	暗灰砂
224	ＲＡ97	暗灰砂
225	ＧＬ10	褐色粗砂
226	ＰＬ97	褐色粗砂
227	ＲＢ97	褐色粗砂
228	ＱＢ97	褐色粗砂
229	ＰＭ96	褐色粗砂
230	ＲＡ97	暗灰砂
	ＲＤ97	暗灰砂
231	ＱＤ97	暗灰粘土
232	ＰＱ96	暗灰砂
233	ＰＭ97	暗灰砂
234	ＧＭ10	暗灰粘土
235	ＰＪ97	暗灰砂
236	ＲＫ97	暗灰砂
237	ＰＬ96	褐色粗砂
238	ＰＥ97	褐色粗砂
239	ＱＪ97	暗灰砂
240	ＱＡ97	暗灰砂
241	ＰＯ97	暗灰砂
242	ＰＭ97	暗灰砂
	ＱＫ97	褐色粗砂

番号	地　区	層　　位
243	ＲＤ97	褐色粗砂
244	ＰＪ97	褐色粗砂
245	ＩＬ10	褐色粗砂
246	ＰＫ97	褐色粗砂
247	ＱＧ97	暗灰砂
248	ＲＧ97	灰白砂
249	ＱＤ97	褐色粗砂
250	ＱＤ96	暗灰砂
251	ＨＱ10	褐色粗砂
252	ＰＭ96	褐色粗砂
253	ＨＳ10	木屑層
254	ＲＬ97	褐色粗砂
255	ＲＩ97	褐色粗砂
256	ＲＬ97	褐色粗砂
257	ＱＢ97	暗灰砂
258	ＰＳ96	暗灰砂
259	ＱＣ96	褐色粗砂
260	ＱＪ97	暗灰砂
261	Ｉ地区	褐色粗砂
262	ＱＳ97	暗灰砂
263	ＲＥ97	木屑層
264	ＲＩ97	褐色粗砂
	ＲＮ97	褐色粗砂
	ＩＭ10	褐色粗砂
265	ＰＲ96	暗灰砂
266	ＨＱ10	木屑層
267	ＰＮ96	褐色粗砂
	ＱＣ96	褐色粗砂
268	ＰＬ97	褐色粗砂
269	ＱＬ97	褐色粗砂
270	ＩＬ10	褐色粗砂
271	ＰＳ96	暗灰砂
272	ＱＭ97	褐色粗砂
273	ＲＬ97	褐色粗砂
274	ＰＬ96	暗灰粘土
275	ＱＧ97	褐色粗砂
276	ＱＦ97	褐色粗砂
277	ＰＫ97	暗灰砂
278	ＱＢ97	褐色粗砂
279	ＧＪ10	暗灰砂
280	ＱＥ96	暗灰砂
281	ＱＲ97	暗灰砂
282	ＱＳ97	褐色粗砂
283	ＱＤ97	褐色粗砂
284	ＰＫ97	暗灰砂
285	ＲＨ97	木屑層

番号	地　区	層　　位
286	ＰＪ97	暗灰砂
287	ＲＨ97	木屑層
288	Ｒ地区	SD6400　層不明
289	ＰＴ97	暗灰粘土
290	ＰＪ97	褐色粗砂
291	ＲＦ97	褐色粗砂
292	ＱＥ97	木屑層
293	ＱＩ97	木屑層
294	ＰＬ97	褐色粗砂
295	ＩＮ10	暗灰砂
296	ＰＴ97	褐色粗砂
297	ＩＲ10	暗灰砂
298	ＱＱ97	暗灰砂
299	ＱＪ10	暗灰砂
300	ＱＥ96	暗灰砂
301	ＱＤ97	暗灰砂
302	ＱＴ97	褐色粗砂
303	ＱＤ97	暗灰粘土
304	ＰＭ96	褐色粗砂
305	ＲＯ97	暗灰粘土
306	ＱＣ97	褐色粗砂
307	ＰＰ97	暗灰砂
308	ＰＰ97	暗灰粘土
309	ＱＣ97	褐色粗砂
310	ＰＧ96	暗灰砂
311	ＲＯ97	褐色粗砂
312	ＰＯ97	褐色粗砂
313	ＱＨ97	木屑層
314	ＰＪ97	暗灰粘土
315	ＩＮ10	暗灰砂
316	ＱＤ97	木屑層
317	ＲＭ97	褐色粗砂
318	ＧＬ10	暗灰粘土
319	ＱＧ97	木屑層
320	ＧＬ10	暗灰砂
321	ＩＬ10	褐色粗砂
	ＨＱ10	暗灰砂
322	ＲＦ97	木屑層
	ＲＧ97	灰白砂
	ＲＨ97	灰色粘砂・青灰細砂・暗灰粘土
323	ＱＫ97	褐色粗砂
324	ＩＯ10	暗灰砂
325	ＰＳ97	暗灰砂
326	ＱＲ97	暗灰砂
327	ＲＢ96	褐色粗砂
328	ＩＮ10	褐色粗砂

番号	地　区	層　　位
329	ＱＴ97	暗灰粘土
330	ＰＬ96	褐色粗砂
331	ＰＬ96	褐色粗砂
	ＩＬ10	青灰細砂
332	ＲＡ97	褐色粗砂
333	ＰＤ97	暗灰砂
	ＱＧ97	暗灰砂
	ＱＥ97	褐色粗砂
	ＱＩ97	褐色粗砂
	ＱＮ97	褐色粗砂
	ＲＭ97	褐色粗砂
334	ＩＡ10	木屑層
335	ＩＭ10	暗灰砂
	ＩＭ10	褐色粗砂
	ＰＫ97	褐色粗砂
	ＰＮ97	褐色粗砂
	ＱＥ97	褐色粗砂
	ＲＥ97	褐色粗砂
	ＲＦ97	褐色粗砂
	ＲＧ97	褐色粗砂
	ＲＬ97	褐色粗砂
336	ＱＦ96	暗灰粘土
	ＱＴ97	暗灰砂
	ＲＤ97	暗灰砂
	ＲＦ96	暗灰砂
	ＲＦ96	褐色粗砂
	ＲＦ97	灰色粘砂
337	ＱＨ97	木屑層
338	ＲＦ97	木屑層
339	ＧＪ10	暗灰砂
340	ＰＪ97	褐色粗砂
341	ＰＫ97	暗灰砂
342	ＧＫ10	暗灰粘土
	ＰＪ97	暗灰粘土
343	ＱＩ97	暗灰砂
344	ＩＬ10	褐色粗砂
	ＲＤ97	褐色粗砂
	ＲＭ97	褐色粗砂
345	ＱＩ97	木屑層
346	ＲＤ97	暗灰粘土
421	ＱＢ97	暗灰粘土
	ＱＪ97	暗灰粘土
	ＱＴ97	暗灰粘土
422	ＨＱ13	SX6402　暗灰粘質土
423	ＲＥ97	暗灰砂
512	ＰＮ97	暗灰粘土

番号	地　区	層　　位
513	ＰＮ97	暗灰粘土
514	ＰＮ97	暗灰粘土
515	ＰＮ97	暗灰粘土
516	ＩＩ10	暗灰粘土
517	ＱＱ97	暗灰砂
	ＲＥ97	暗灰砂
518	ＱＤ97	木屑層
519	ＱＧ97	木屑層
520	ＱＡ96	暗灰砂
	ＱＤ96	暗灰砂
521	ＨＱ10	暗灰砂
522	ＱＩ96	SD6414　暗褐粘質土
523	ＰＲ96	SD6414　暗灰粘質土
524	ＨＴ12	SX6402　暗灰粘質土
601	ＲＡ97	暗灰砂
602	ＱＨ97	木屑層
603	ＨＱ10	木屑層
604	ＰＫ97	暗灰砂
605	ＧＫ10	褐色粗砂
606	ＨＰ10	木屑層
607	ＰＪ97	暗灰砂
	ＰＫ97	暗灰砂
608	ＰＫ97	暗灰砂
	ＰＪ97	暗灰砂
609	ＲＬ97	褐色粗砂
610	ＰＪ97	暗灰砂
611	ＱＥ97	褐色粗砂
612	ＩＮ10	褐色粗砂
613	ＲＨ97	木屑層
	ＲＦ97	褐色粗砂
614	ＰＲ97	褐色粗砂
615a	ＲＨ97	木屑層
615b	ＩＯ10	褐色粗砂
615c	ＩＮ10	暗灰砂
616	ＱＴ97	褐色粗砂・暗灰砂
617a	ＲＮ97	暗灰砂
617b	ＲＯ97	褐色粗砂
618	ＲＧ97	木屑層
619	ＰＳ97	暗灰砂
620	ＰＯ96	暗灰砂
621	ＲＧ97	木屑層
622	ＱＥ97	褐色粗砂
623	ＲＩ97	暗灰砂
	ＲＬ97	暗灰砂
624	ＲＭ97	褐色粗砂
625a	ＲＮ97	褐色粗砂

番号	地　区	層　　位
625b	ＲＬ97	褐色粗砂
626	ＲＢ97	暗灰砂
627	ＰＲ97	暗灰粘土
628	ＱＰ96	褐色粗砂
629	ＱＴ97	褐色粗砂
630	ＲＩ97	暗灰砂
631	ＰＪ97	褐色粗砂
632	ＩＫ10	暗灰砂・褐色粗砂
633	ＲＦ97	褐色粗砂
634	ＱＤ97	褐色粗砂
635	ＲＩ97	褐色粗砂
636	ＩＮ10	暗灰砂
637	ＰＯ97	暗灰砂
638	ＲＡ97	褐色粗砂
639	ＰＪ97	褐色粗砂
640	ＲＯ97	褐色粗砂
641	ＲＩ97	暗灰砂
642	ＰＫ97	暗灰砂
643	不明	SD6400　層不明
644	ＰＫ97	暗灰砂
645	ＲＫ97	褐色粗砂
646	ＲＬ97	褐色粗砂
647	ＰＲ97	褐色粗砂
648	ＱＭ97	暗灰砂
649	ＱＴ97	褐色粗砂
650	ＰＫ97	暗灰砂
651	ＲＨ97	木屑層
652	ＩＬ10	褐色粗砂
653	ＲＪ97	褐色粗砂
654	ＰＫ96	褐色粗砂
655	ＩＬ10	褐色粗砂
656	ＰＪ97	暗灰砂
657a	ＱＦ97	木屑層
657b	ＱＥ97	木屑層
658	ＲＭ97	褐色粗砂
659	ＰＪ97	褐色粗砂
660	ＲＭ97	褐色粗砂
661	ＱＥ97	褐色粗砂
662	ＩＮ10	褐色粗砂
663	ＩＪ10	暗灰砂
664	ＱＴ97	暗灰砂
665	ＱＢ97	暗灰砂
666	ＰＰ97	暗灰砂
667	ＲＡ97	暗灰砂
668	ＱＰ97	褐色粗砂
669	ＰＪ97	暗灰砂

番号	地　区	層　　位
670	ＲＭ97	褐色粗砂
671	ＲＮ97	褐色粗砂
672	ＲＯ97	褐色粗砂
673	ＲＫ97	褐色粗砂
674	ＲＭ97	褐色粗砂
675	ＲＬ97	褐色粗砂
676	ＲＭ97	褐色粗砂
677	ＲＬ97	褐色粗砂
678	ＲＫ97	褐色粗砂
679	ＲＭ97	褐色粗砂
680	ＱＥ97	褐色粗砂
681	ＱＢ97	褐色粗砂
682	ＱＢ97	褐色粗砂
683	ＨＱ10	褐色粗砂
684	ＩＭ10	褐色粗砂
685	ＨＴ10	褐色粗砂
686	ＱＤ97	褐色粗砂
687	ＱＱ97	褐色粗砂
688	ＱＣ97	褐色粗砂
689	ＱＫ97	褐色粗砂
690	ＱＤ97	褐色粗砂
691	ＩＯ10	暗灰砂・褐色粗砂
692	ＱＤ97	褐色粗砂
693	ＩＬ10	褐色粗砂
694	ＩＬ10	褐色粗砂
695	ＩＫ10	褐色粗砂
696	ＩＭ10	褐色粗砂
697	ＩＫ10	褐色粗砂
698	ＩＮ10	褐色粗砂
699	ＩＬ10	褐色粗砂
700	ＩＬ10	褐色粗砂
701	ＩＮ10	褐色粗砂
702	ＰＪ97	褐色粗砂
703	ＰＪ97	褐色粗砂
704	ＰＬ97	褐色粗砂
705	ＰＳ97	褐色粗砂
706	ＰＪ97	褐色粗砂
707	ＧＫ10	褐色粗砂
708	ＰＳ96	褐色粗砂
709	ＰＪ97	褐色粗砂
710	ＰＪ97	褐色粗砂
711	ＰＪ97	褐色粗砂
712	ＰＪ97	褐色粗砂
713	ＰＫ97	褐色粗砂
714	ＰＪ97	褐色粗砂
715	ＧＫ10	褐色粗砂

番号	地　区	層　　位
716	GN10	暗灰砂
717	PK97	褐色粗砂
718	PK96	暗灰砂
719	PK97	褐色粗砂
720	PS97	褐色粗砂
721	RO97	褐色粗砂
722	RN97	褐色粗砂
723	RN97	褐色粗砂
724	RM97	褐色粗砂
725	RF97	褐色粗砂
726	RN97	褐色粗砂
727	RN97	褐色粗砂
728	不明	SD6400　層不明
729	RO97	褐色粗砂
730	RN97	褐色粗砂
731	RE97	褐色粗砂
732	RB97	暗灰砂
733	RL97	褐色粗砂
734	RJ97	褐色粗砂
735	RN97	褐色粗砂
736	RI97	褐色粗砂
737	RN97	褐色粗砂
738	RH97	褐色粗砂
739	RN97	褐色粗砂
740	RK97	褐色粗砂
741	RA97	褐色粗砂
742	RE97	褐色粗砂
743	QD97	褐色粗砂
744	QT97	褐色粗砂
745	QA97	木屑層
746	QE97	褐色粗砂
747	QD97	褐色粗砂
748	QT97	褐色粗砂
749	QT97	褐色粗砂
750	QK97	褐色粗砂
751	QB97	褐色粗砂
752	QT97	褐色粗砂
753	RG97	木屑層
754	RH97	灰白砂
755	RE97	木屑層
756	RH97	木屑層
757	RF97	木屑層
758	RH97	木屑層
759	RH97	木屑層
760	RG97	木屑層
761	RE97	淡灰砂質土

番号	地　区	層　　位
762	RH97	木屑層
763	RF96	木屑層
764	RH97	木屑層
765	RH97	灰白砂
766	QJ97	木屑層
767	QB97	木屑層
768	QA97	木屑層
769	QE97	木屑層
770	HR10	木屑層
771	QA97	木屑層
772	QF97	木屑層
773	HR10	木屑層
774	RL97	褐色粗砂
775	RH97	暗灰砂
776	RA97	暗灰砂
777	RI97	暗灰砂
778	RB97	暗灰砂
779	RK97	暗灰砂
780	RK97	暗灰砂
781	RB97	暗灰砂
782	RL97	暗灰砂
783	RJ97	暗灰砂
784	RI97	暗灰砂
785	RA97	暗灰砂
786	RH97	暗灰砂
787	RD97	暗灰砂
788	RB97	暗灰砂
789	RI97	暗灰砂
790	RI97	暗灰砂
791	RA97	暗灰砂
792	RB97	暗灰砂
793	RB97	暗灰砂
794	RI97	暗灰砂
795	IO10	暗灰砂
796	IK10	暗灰砂
797	IK10	暗灰砂
798	RJ97	褐色粗砂
799	IK10	暗灰砂
800	RN97	褐色粗砂
801	IK10	暗灰砂
802	IJ10	暗灰砂
803	QB97	暗灰砂
804	QA97	暗灰砂
805	QB97	暗灰砂
806	QQ97	暗灰砂
807	QT97	暗灰砂

番号	地　区	層　　位
808	QM97	暗灰砂
809	QS97	暗灰粘土
810	QS97	木屑層
811	QJ97	暗灰砂
812	QJ97	暗灰砂
813	QR97	暗灰砂
814	QJ97	暗灰砂
815	QJ97	暗灰砂
816	QT97	暗灰砂
817	GM10	暗灰砂
818	QJ97	暗灰砂
819	QR97	暗灰砂
820	PN96	暗灰砂
821	GJ10	暗灰砂
822	PK97	暗灰砂
823	PK97	暗灰砂
824	GK10	SD6400　層不明
825	PJ97	暗灰砂
826	GK10	暗灰砂
827	GH10	暗灰砂
828	PJ97	暗灰砂
829	GK10	暗灰砂
830	PS97	暗灰砂
831	PJ97	暗灰砂
832	PJ97	暗灰砂
833	PM97	暗灰砂
834	PJ97	暗灰砂
835	PM97	暗灰砂
836	PJ97	暗灰砂
837	PK97	暗灰砂
838	PK97	暗灰砂
839	PO97	暗灰砂
840	PM97	暗灰砂
841	PK97	暗灰砂
842	PJ97	暗灰砂
843	PJ97	暗灰砂
844	GJ10	暗灰砂
845	PJ97	暗灰砂
846	PO97	暗灰砂
847	PJ97	暗灰砂
848	PJ97	暗灰砂
849	PK97	暗灰砂
850	PK97	暗灰砂
851	P地区	SD6400　層不明
852	PK97	暗灰砂
853	PK97	暗灰砂

番号	地　区	層　　位
854a	ＰＪ97	暗灰砂
854b	ＰＫ97	暗灰砂
854c	ＰＫ97	暗灰砂
855	ＧＬ11	暗灰粘土
856	ＱＴ97	暗灰粘土
857	ＩＬ10	暗灰粘土
858	ＱＬ97	褐色粗砂
859	ＧＪ14	SD6471　層不明
860a	ＩＮ10	褐色粗砂
860b･c	ＩＭ10	褐色粗砂
861	ＱＤ97	褐色粗砂
862a･b	ＲＡ97	褐色粗砂
862c	ＲＩ97	褐色粗砂
863	ＱＮ97	褐色粗砂
864a	ＱＯ97	褐色粗砂
864b	ＩＬ10	褐色粗砂
864c･d	ＲＯ97	褐色粗砂
864e	ＲＮ97	褐色粗砂
865	ＲＭ97	褐色粗砂
866	ＨＴ10	褐色粗砂
867a	ＨＲ10	褐色粗砂
867b	ＨＴ10	褐色粗砂
868	ＩＮ10	褐色粗砂
869	ＰＫ97	褐色粗砂
870	ＰＳ97	褐色粗砂
871	ＰＫ97	褐色粗砂
872	ＰＪ97	褐色粗砂
873	ＩＮ10	褐色粗砂
874	ＰＪ97	褐色粗砂
875	ＲＡ97	木屑層
876	ＲＨ97	木屑層
877	ＲＨ97	灰白砂
878	ＩＡ10	木屑層
879	ＲＩ97	暗灰砂
880	ＰＫ97	暗灰砂
881	ＱＭ97	暗灰砂
882a	ＲＧ97	褐色粗砂
882b	ＱＳ97	褐色粗砂
882c	ＲＢ97	暗灰砂
901	ＰＰ97	暗灰砂
902	ＲＨ97	木屑層
903	ＰＯ97	褐色粗砂
904	ＰＰ97	暗灰砂
905	ＩＯ10	褐色粗砂
906	ＰＯ97	暗灰砂
907	ＩＮ10	褐色粗砂

番号	地　区	層　　位
908	ＰＪ97	暗灰砂
	ＰＫ97	暗灰砂
909	ＩＮ10	暗灰砂
910	ＲＥ97	褐色粗砂
911	ＨＱ10	木屑層
912	ＲＢ96	褐色粗砂
913	ＲＢ97	褐色粗砂
	ＲＣ97	暗灰砂
914	ＲＫ97	暗灰砂
915	ＲＢ97	褐色粗砂
916	ＩＬ10	褐色粗砂
917	Ｒ地区	SD6400　層不明
918	ＲＪ97	褐色粗砂
919	ＲＮ97	褐色粗砂
920	ＱＴ97	褐色粗砂
921	ＰＭ97	暗灰砂
	ＱＪ97	暗灰砂
922	ＩＮ10	暗灰砂
923	ＩＮ10	暗灰砂
924	ＲＢ96	褐色粗砂
925	ＱＴ96	暗灰砂
926	ＰＱ97	褐色粗砂
927	ＰＮ96	褐色粗砂
928	ＰＬ97	褐色粗砂
929	ＰＬ97	褐色粗砂
930	ＰＬ97	褐色粗砂
931	ＨＰ35	ＳＢ6570
932	ＱＤ96	暗灰砂
933	ＰＴ97	暗灰砂
934	ＧＪ30	SD6471　上層
935	ＧＬ44	SD6472　層不明
936	ＩＬ42	遺物包含層
937	ＩＬ42	遺物包含層
938	ＧＬ10	褐色粗砂
939	ＧＬ15	SD6472　層不明
940	ＩＬ42	遺物包含層
941	ＰＪ97	暗灰砂
942	ＧＬ10	暗灰砂
943	ＲＨ97	褐色粗砂
944	ＩＮ10	暗灰砂
945	ＩＢ10	褐色粗砂
946	ＰＯ97	暗灰砂
947	ＰＬ96	褐色粗砂
948	ＲＫ97	褐色粗砂
949	ＲＤ97	暗灰粘土
950	ＧＪ10	褐色粗砂

番号	地　区	層　　位
951	ＰＪ97	暗灰砂
	ＰＬ97	褐色粗砂
952	ＩＬ10	褐色粗砂
953	ＩＮ10	暗灰砂・褐色粘土
954	ＩＮ10	暗灰砂
955	ＰＮ96	暗灰粘土
956	ＲＡ97	褐色粗砂
957	ＧＭ41	SD6472　層不明
958	ＱＪ97	暗灰粘土
959	ＰＫ97	暗灰砂
960	ＲＬ97	暗灰砂・褐色粗砂
961	ＲＫ97	褐色砂
962	ＱＡ97	木屑層
963	ＲＩ97	暗灰砂
964	ＲＩ97	褐色粗砂
965	ＱＴ97	暗灰砂
966	ＱＩ97	木屑層
967	ＩＮ10	暗灰砂
968	ＩＫ10	褐色粗砂
969	ＧＪ10	褐色粗砂
970	ＨＴ10	暗灰粘質土
971	ＲＡ97	暗灰砂
972	ＱＴ97	褐色粗砂
973	ＧＭ34	SD6472　下層
974	ＲＫ97	暗灰砂
975	ＩＫ10	褐色粗砂
976	ＩＮ10	褐色粗砂
977	ＲＫ97	褐色粗砂
978	ＩＭ10	暗灰砂
979	ＰＫ96	暗灰粘土
980	ＱＴ97	暗灰粘土
981	ＱＢ97	褐色粗砂
982	ＲＢ96	青灰細砂
983	ＩＩ43	遺物包含層
984	ＰＴ97	暗灰砂
985	ＧＮ10	暗灰砂
986	ＰＰ97	褐色粗砂
987	ＧＪ11	暗灰粘土
988	ＧＭ39	SD6472　層不明

＊層位のみ示したものはSD6400の出土

別表４　墨書土器一覧

番号	土器種別	遺構	地区	層位	器種	記載部位	記載内容	備考	図面(Pl.)	写真(Ph.)
115	土師器	SE6657	ＩＨ43	最下層	杯Ｃ	底外	言		47	64
116	土師器	SE6657	ＩＨ48	最下層	杯Ｃ	底外	大	刻書あり	47	64
160	土師器	SD6400	ＰＪ96	褐色粗砂	杯Ａ	底内	［ ］		45	62
						底外	⊕（記号）			
161	土師器	SD6400	ＲＡ97	暗灰砂	高杯	裾内	廿（記号ヵ）		46	63
162	土師器	SD6400	ＨＳ10	木屑層	椀Ａ	底外	木/林		46	62
163	土師器	SD6400	ＱＬ97	暗灰粘土	杯Ａ	底内	□/夜/夜(別筆で[夜ヵ])	刻　書	46	64
164	土師器	SD6400	ＱＮ97	暗灰砂	杯Ａ	底外	木		—	62
165	土師器	SD6400	ＨＴ10	褐色砂	椀Ｃ	底外	木		—	62
166	土師器	SD6400	ＲＨ97	褐色粗砂	杯 or 皿	底外	木		—	62
167	土師器	SD6400	ＱＤ97	褐色粗砂	杯 or 皿	底外	□［大ヵ］		—	62
168	土師器	SD6400	ＲＩ97	灰白砂	杯Ａ	底外	供		—	63
169	土師器	SD6400	ＲＦ97	褐色粗砂	杯Ａ	底外	廿（記号ヵ）		—	63
170	土師器	SD6400	ＰＬ96	褐色粗砂	杯Ａ	底外	□［元ヵ］		—	63
171	土師器	SD6400	ＰＬ97	褐色粗砂	杯Ａ	底外	□［元ヵ］		—	63
172	土師器	SD6400	ＰＬ96	褐色粗砂	杯Ａ	底外	元		—	63
173	土師器	SD6400	ＰＯ97	暗灰砂	杯 or 皿	底外	□知□		—	63
174	土師器	SD6400	ＰＪ97	褐色粗砂	杯 or 皿	底外	廿		—	63
175	土師器	SD6400	ＰＪ97	褐色粗砂	杯Ａ	底外	□［賀ヵ］		—	63
176	土師器	SD6400	ＰＬ97	褐色粗砂	椀Ａ	底外	□		—	63
177	土師器	SD6400	ＱＬ97	褐色粗砂	杯 or 皿	底外	⊖（絵ヵ）		—	63
178	土師器	SD6400	ＩＮ10	褐色粗砂	壺Ｂ	体外	○（記号）		—	63
179	土師器	SD6400	ＰＫ97	暗灰砂	杯 or 皿	底外	□［×ヵ］		—	63
180	土師器	SD6400	ＧＬ10	褐色粗砂	竈	脚外	(墨線)		—	63
181	土師器	SD6400	ＲＬ97	暗灰砂	高杯	裾内	□（刻書ヵ）		—	64
286	須恵器	SD6400	ＰＪ97	暗灰砂	壺Ｇ	底外	□合□□		28	34
411	須恵器	SX6530	ＧＪ47	—	杯Ａ	底外	□［元ヵ］		47	64
418	須恵器	SB6475	ＨＤ25	—	杯Ｂ	底外	元		47	64
424	須恵器	SD6400	ＰＭ97	褐色粗砂	皿Ｂ蓋	頂内	廿（記号ヵ）		45	63
425	須恵器	SD6400	ＩＮ10	褐色粗砂	杯Ｂ蓋	頂外	道麻		45	62
426	須恵器	SD6400	ＩＩ10	暗灰粘土	杯Ｂ	底外	□		45	63
427	須恵器	SD6400	ＲＬ97	褐色粗砂	杯Ａ	底外	酒杯		45	62
428	土師器	SD6400	ＲＡ97	暗灰砂	杯Ａ	体外	廾（記号ヵ）		46	63
429	須恵器	SD6400	ＲＦ97	木屑層	杯Ｂ	底外	×（記号）		46	63
430	須恵器	SD6400	ＰＭ97	暗灰砂	杯Ｂ蓋	頂内	カ□［賀ヵ］		46	63
431	須恵器	SD6400	ＱＪ97	木屑層	杯Ａ	底外	東		46	63
432	須恵器	SD6400	ＲＮ97	褐色粗砂	杯Ｂ蓋	頂外	大		46	62
433	須恵器	SK6608	ＧＭ38	—	杯Ｂ蓋	頂内	元		47	64
434	須恵器	SD6400	ＰＭ96	褐色粗砂	杯Ｂ蓋	頂外	神明膏		47	64
435	須恵器	SD6400	ＲＡ97	暗灰砂	杯	体外	□［大ヵ］		—	62
436	須恵器	SD6400	ＲＮ97	褐色粗砂	杯Ｂ	底外	□□［気ヵ］志□		—	62
437	須恵器	SD6400	ＰＴ97	褐色粗砂	甕	体内	[九] などの習書多数	猿面硯	—	62
438	須恵器	SD6400	ＲＯ97	褐色粗砂	杯Ｂ	底外	麻イ□		—	63
439	須恵器	SD6400	ＩＭ11	青灰粘質土	杯Ｂ	底外	集		—	63
440	須恵器	SD6400	ＨＴ10	褐色粗砂	杯Ｂ	底外	集□		—	63
441	須恵器	SD6400	ＰＪ97	褐色砂	杯Ａ	底外	□［土ヵ］		—	63
442	須恵器	SD6400	ＰＲ97	暗灰粘土	杯Ｂ蓋	頂外	大刀		—	63
443	須恵器	SD6400	ＩＮ10	褐色粗砂	甕	体内	□印		—	63
444	須恵器	SD6400	ＩＬ10	褐色粗砂	杯Ｂ	底外	□［＋＋ヵ］		—	63
445	須恵器	SD6400	ＲＨ97	木屑層	杯Ｂ	底外	○（記号）		—	63
446	須恵器	SD6400	ＩＫ10	褐色粗砂	甕	体外	□		—	63
447	須恵器	SD6400	ＲＬ97	暗灰砂	杯Ｂ蓋	つまみ上	十		—	63
448	須恵器	SD6400	ＧＭ47	上層	杯	底外	十/□		—	64
449	須恵器	SD6400	ＲＮ97	褐色粗砂	杯Ｂ	底外	大	刻　書	—	64
450	須恵器	SD6400	ＨＴ10	褐色砂	甕	体外	×（記号）	刻　書	—	64
451	須恵器	SD6472	ＧＬ45	中層	甕	口外	⊠（記号）	刻　書	—	64
452	須恵器	包含層	ＧＫ19	黄灰土	杯Ｂ	底外	×（記号）	刻　書	—	64

別表５　銭貨計測表

銭　種	番　号	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重 量	型　式	写真番号
和同開珎	945	24.54	21.35	8.16	6.87	1.28	0.52	2.70	D	
	946	25.23	21.39	7.78	6.52	1.65	0.65	3.96	A	
	947	24.37	21.41	8.28	6.49	1.21	0.58	2.92	A	1
	948	24.83	20.90	8.08	6.44	1.12	0.46	2.76	F	8
	949	24.47	20.81	7.79	6.60	1.51	0.65	3.67	A	
	950	25.82	21.77	8.08	6.37	1.32	0.72	2.71	A	
	951	24.59	21.73	8.07	6.82	1.19	0.50	2.63	A	
	952	24.35	20.99	7.66	6.44	1.43	0.56	3.26	A	
	953	24.67	21.12	7.60	6.62	1.44	0.68	3.40	A	2
	954	24.58	20.93	7.72	6.45	1.49	0.44	3.16	A	
	955	24.67	21.04	8.05	6.58	1.31	0.44	2.76	A	
	956	24.38	21.44	7.89	6.46	1.33	0.74	3.16	A	
	957	24.55	21.05	7.94	6.57	1.26	0.42	2.47	A	
	958	25.69	21.46	7.96	6.32	1.55	0.41	3.11	A	
	959	24.16	20.71	7.80	6.03	0.87	0.36	1.85	D	6
	960	25.02	21.01	7.71	6.31	1.66	0.37	3.04	A	
	961	24.70	21.35	8.25	6.36	1.37	0.37	2.06	A	3
	962	23.97	20.84	8.39	6.45	1.18	0.35	2.09	C	4
	963	24.11	20.72	8.21	6.40	1.41	0.62	3.18	A	
	964	24.26	20.48	8.23	6.41	1.08	0.36	2.21	F	9
	965	24.72	21.68	7.88	6.10	1.31	0.45	2.07	E	7
	966	25.04	21.47	8.11	6.24	1.29	0.53	3.25	A	
	967	24.64	21.31	8.21	6.25	1.39	0.53	3.18	A	
	968	23.98	20.88	7.96	6.39	1.11	0.45	2.53	D	
	969	24.32	21.40	7.51	5.64	1.22	0.47	2.91	C	
	971	24.81	21.07	7.83	5.94	1.30	0.61	2.93	A	
	平　均	24.63	21.17	7.97	6.39	1.32	0.51	2.85		
	標準偏差	0.45	0.34	0.23	0.26	0.17	0.12	0.52		
萬年通寶	150	26.29	22.4	8.71	6.56	1.73	0.73	4.58	A	10
	151	26.40	21.64	8.43	7.19	1.80	1.11	5.89	A	
	152	26.27	21.95	8.49	6.74	2.37	1.55	8.53	D	12
	153	25.85	21.60	8.40	5.95	1.16	0.37	3.84	A	
	154	26.57	22.37	8.42	6.29	1.70	0.45	3.08	C	
	155	26.01	22.08	7.81	5.92	1.30	0.71	3.91	C	11
	平　均	26.23	22.01	8.38	6.44	1.68	0.82	4.97		
	標準偏差	0.26	0.35	0.30	0.49	0.43	0.44	1.98		

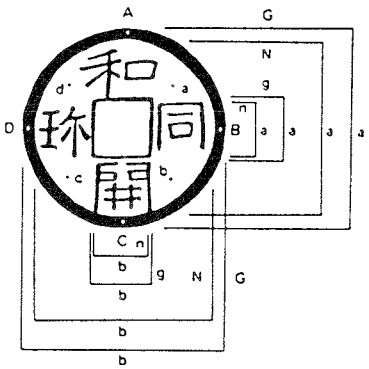
銭　種	番　号*	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重 量	型　式	写真番号
神功開寶	482	24.62	20.76	8.50	6.31	1.53	0.69	3.19	F	
	483	24.95	21.11	8.24	6.31	1.36	0.57	3.24	E	
	484	24.97	20.96	8.20	6.15	1.52	0.65	3.74	F	
	485	24.80	21.18	8.31	6.39	1.34	0.60	3.21	E	
	486	24.85	21.49	8.18	6.11	1.59	0.83	4.58	E	
	487	24.70	21.52	8.53	6.02	1.24	0.47	2.89	E	
	488	24.89	21.30	8.36	6.22	1.19	0.34	2.95	E	14
	489	24.53	21.37	8.13	5.82	1.45	0.74	3.65	E	15
	490	25.05	21.54	8.26	6.08	1.48	0.69	3.97	E	16
	491	24.61	21.01	8.18	6.12	1.97	1.18	2.38	D	13
	492	24.52	20.34	8.41	5.96	1.32	0.50	2.89	F	
	493	24.89	21.31	8.09	6.13	1.24	0.47	2.90	E	
	494	24.75	21.60	8.37	6.30	1.15	0.58	2.93	E	
	495	24.89	20.81	8.56	5.95	1.43	0.64	3.35	F	
	496	24.52	21.19	8.34	6.33	1.07	0.54	2.74	F	
	498	25.47	21.03	8.42	6.38	1.95	1.03	4.32	F	
	499	24.72	20.74	7.70	5.83	1.70	0.85	4.48	F	17
	500	24.27	19.45	7.75	6.12	1.10	0.52	2.75	F	18
	501	24.99	20.83	8.11	6.54	1.56	0.91	4.20	F	
	平　均	24.79	21.03	8.24	6.16	1.43	0.67	3.39		
	標準偏差	0.26	0.50	0.23	0.19	0.25	0.21	0.66		

番号は皇朝銭データベースにおける銭種別 ID 番号である。
銭貨各部の計測値単位は重量（g）以外はすべて mm である。
銭貨の各部測点については下のとおりである。

外縁外径 $G=\frac{Ga+Gb}{2}$，外縁内経 $N=\frac{Na+Nb}{2}$，

内郭外径 $g=\frac{ga+gb}{2}$，内郭内径 $n=\frac{na+nb}{2}$，

外縁厚 $T=\frac{A+B+C+D}{4}$，文字面厚 $t=\frac{a+b+c+d}{4}$



別表６　石製品一覧表

遺　物	小地区	遺　構	層　位	重量(g)	法　量(cm)	石　材	図面番号
石銙（鉈尾）	ＧＱ12		遺物包含層	41.1	L4.5、W(6.0)、T0.8	黒色粘板岩	58—1
有孔石製品	ＧＳ32	SE6561	井戸枠内埋土	19.9	L3.3、W(2.8)、T1.4	滑石	58—2
玉	ＨＯ13	SX6428		1.9	直径1.1	水晶	58—3
砥石	ＲＧ97	SD6400	褐色粗砂	830.0	L13.1、W8.5、T5.5	両輝石安山岩	
砥石	ＱＣ97	SD6400	褐色粗砂	114.3	L5.5、W4.0、T2.9	流紋岩	
砥石	ＱＴ97	SD6400	暗灰砂	1932.0	L14.0、W15.0、T8.0	砂岩	58—7
砥石	ＰＯ97	SD6400	暗灰砂	368.4	L8.4、W6.1、T6.5	流紋岩	
砥石	ＰＬ96	SD6400	暗灰砂	996.0	L15.5、W8.8、T5.2	ホルンフェルス	58—8
砥石	ＰＮ96	SD6400	暗灰砂	264.0	L12.0、W4.3、T4.2	流紋岩	58—4
砥石	ＰＫ97	SD6400	暗灰砂	147.3	L6.2、W4.4、T(3.9)	流紋岩	
砥石	ＧＪ25	SD6741	層不明	731.0	L11.0、W5.7、T7.0	細粒黒雲母片麻岩	
砥石	ＧＩ43		遺物包含層	581.3	L7.6、W7.4、T6.4	流紋岩	
砥石	ＨＧ27	SK6507		548.0	L11.0、W10.0、T4.0	流紋岩	58—5
砥石	ＡＤ22		遺物包含層	149.7	L6.7、W5.1、T3.1	流紋岩	
砥石	ＩＱ22		排水溝	67.0	L7.2、W4.2、T1.3	流紋岩	58—6
砥石	不　明		排水溝	161.5	L11.4、W2.2、T3.1	縞状片麻岩	
砥石	不　明			358.2	L9.1、W9.5、T5.6	流紋岩	
角錐状石器	ＨＱ10	SD6400	木屑層	2.5	L3.5、W0.9、T0.7	サヌカイト	59—1
石錐	ＱＮ97	SD6400	褐色粗砂	4.4	L(2.9)、W2.1、T0.7	サヌカイト	59—8
石錐	ＱＫ97	SD6400	木屑層	7.8	L(2.7)、W2.8、T1.0	サヌカイト	59—9
石鏃	ＧＲ42		遺物包含層	6.5	L7.3、W2.1、T0.5	サヌカイト	59—7
石鏃	ＨＧ42		遺物包含層	1.1	L2.5、W2.1、T0.3	サヌカイト	59—3
石鏃	ＩＣ37		遺物包含層	6.7	L(5.4)、W2.9、T0.6	サヌカイト	59—6
石鏃	ＩＥ38		遺物包含層	6.4	L(4.3)、W2.4、T0.8	サヌカイト	59—5
石鏃	ＨＲ22		遺物包含層	1.9	L3.3、W1.8、T0.5	サヌカイト	59—2
石鏃	ＧＩ43		排水溝	6.8	L(4.5)、W2.4、T0.9	サヌカイト	59—4
石匙	ＨＡ11		遺物包含層	11.0	L(3.9)、W5.2、T1.0	サヌカイト	59—10
楔形石器	ＨＥ27		遺物包含層	11.2	L4.1、W5.1、T0.5	サヌカイト	59—11
スクレイパー	ＩＫ10	SD6400	褐色粗砂	7.0	L(3.3)、W2.8、T0.5	サヌカイト	
スクレイパー	ＰＪ97	SD6400	褐色粗砂	26.8	L4.0、W6.6、T0.8	サヌカイト	59—14
スクレイパー	ＰＪ97	SD6400	褐色粗砂	8.9	L2.9、W3.8、T1.1	サヌカイト	
スクレイパー	ＱＡ97	SD6400	木屑層	20.2	L5.0、W4.5、T1.1	サヌカイト	
スクレイパー	ＲＦ97	SD6400	暗灰砂	5.8	L(3.0)、W2.5、T8.6	サヌカイト	
スクレイパー	ＱＢ97	SD6400	暗灰砂	30.4	L8.0、W3.7、T0.9	サヌカイト	59—12
スクレイパー	ＰＳ97	SD6400	暗灰砂	25.8	L6.8、W2.7、T1.0	サヌカイト	
スクレイパー	ＰＲ97	SD6400	暗灰粘土	61.7	L4.5、W5.5、T2.1	サヌカイト	59—15
スクレイパー	ＩＡ12			39.7	L4.8、W7.6、T1.3	サヌカイト	59—13
スクレイパー	ＩＡ12			16.7	L5.0、W3.3、T0.8	サヌカイト	
スクレイパー	ＨＪ11		遺物包含層	51.2	L4.8、W7.9、T1.5	サヌカイト	
スクレイパー	ＨＦ12		遺物包含層	59.0	L9.6、W4.6、T1.4	サヌカイト	
石庖丁	ＩＡ39		遺物包含層	69.9	L5.8、W(9.7)、T0.9	流紋岩	59—16
石庖丁	ＨＦ37		遺物包含層	19.8	L4.3、W(4.5)、T0.6	緑色片岩	59—17
石斧	ＧＭ10	SD6400	暗灰砂	450.2	L(11.3)、W5.2、T4.7	輝緑岩	
石斧	ＲＦ96		遺物包含層	447.3	L14.9、W6.3、T2.6	砂岩	59—18
石剣未製品	ＨＴ13		遺物包含層		L7.8、W4.7、T2.0	サヌカイト	

遺　物	小地区	遺　構	層　位	重量(g)	法　量(cm)	石　材	図面番号
礫器	GM10	SD6400	暗灰色	72.2	L9.1、W4.8、T1.0	黒色頁岩	
石核	PO97	SD6400	暗灰砂	33.3	L5.2、W4.5、T1.8	サヌカイト	
石核	PN96	SD6400	暗灰砂	34.8	L3.3、W5.2、T2.9	チャート	
石核	RE96	SD6400	暗茶灰粘質土	27.9	L3.5、W4.2、T2.4	サヌカイト	
石核	IN10	SD6400	灰色砂粘土	23.5	L3.5、W4.8、T1.5	サヌカイト	
石核	GJ47	SD6742	下層	84.3	L7.3、W5.1、T1.5	サヌカイト	
剥片	QN97	SD6400	褐色粗砂	9.2	L3.4、W3.1、T0.8	サヌカイト	
剥片	QL97	SD6400	褐色粗砂	1.2	L1.6、W2.7、T0.3	サヌカイト	
剥片	QL97	SD6400	褐色粗砂	32.2	L6.6、W4.9、T0.8	サヌカイト	
剥片	QD97	SD6400	褐色粗砂	13.9	L3.4、W5.6、T0.9	サヌカイト	
剥片	QD97	SD6400	褐色粗砂	23.5	L5.4、W3.6、T1.2	サヌカイト	
剥片	QD97	SD6400	褐色粗砂	3.5	L2.8、W3.3、T0.6	サヌカイト	
剥片	QD97	SD6400	褐色粗砂	5.1	L3.4、W3.4、T0.6	サヌカイト	
剥片	QD97	SD6400	褐色粗砂	8.2	L2.1、W3.7、T1.1	サヌカイト	
剥片	QB97	SD6400	褐色粗砂	2.0	L2.0、W2.7、T0.3	サヌカイト	
剥片	PM96	SD6400	褐色粗砂	24.9	L6.5、W4.5、T0.7	サヌカイト	
剥片	PM96	SD6400	褐色粗砂	11.6	L4.1、W4.5、T0.9	サヌカイト	
剥片	PK97	SD6400	褐色粗砂	20.8	L3.0、W3.1、T1.2	サヌカイト	
剥片	PJ97	SD6400	褐色粗砂	8.3	L3.2、W3.7、T1.0	サヌカイト	
剥片	HT10	SD6400	木屑層	5.3	L2.1、W4.5、T5.2	サヌカイト	
剥片	HT10	SD6400	木屑層	25.5	L7.8、W2.2、T1.0	サヌカイト	
剥片	RF97	SD6400	暗灰砂	5.9	L5.8、W1.8、T0.6	サヌカイト	
剥片	QD97	SD6400	暗灰砂	15.8	L4.0、W2.7、T1.3	サヌカイト	
剥片	QD96	SD6400	暗灰砂	4.1	L2.1、W3.3、T0.6	サヌカイト	
剥片	QD96	SD6400	暗灰砂	15.2	L3.3、W3.5、T0.9	サヌカイト	
剥片	QD96	SD6400	暗灰砂	5.6	L2.0、W2.4、T0.8	サヌカイト	
剥片	PL96	SD6400	暗灰砂	12.3	L2.6、W5.1、T1.2	サヌカイト	
剥片	PS97	SD6400	暗灰粘土	4.0	L4.4、W2.7、T0.4	サヌカイト	
剥片	PS97	SD6400	暗灰粘土	16.7	L3.6、W5.8、T1.0	サヌカイト	
剥片	IB11		遺物包含層	12.4	L2.7、W3.9、T1.3	サヌカイト	
剥片	IA11		遺物包含層	87.3	L6.8、W8.4、T1.2	サヌカイト	
剥片	HL14		遺物包含層	2.3	L2.6、W2.7、T0.4	サヌカイト	
剥片	GM18	SD6742		70.0	L9.5、W4.6、T1.4	サヌカイト	
剥片	HE38	SB6590	柱穴1抜取穴	9.9	L4.5、W3.6、T8.7	サヌカイト	
剥片	IF17		遺物包含層	25.8	L6.5、W4.0、T1.3	サヌカイト	
剥片	HR42		遺物包含層	2.8	L3.4、W3.4、T0.5	サヌカイト	
剥片	GN46		遺物包含層	35.1	L8.0、W4.6、T1.1	サヌカイト	
剥片	GK19		遺物包含層	21.5	L4.0、W6.3、T0.8	サヌカイト	
剥片	HS10		排水溝	47.0	L6.9、W6.3、T1.1	サヌカイト	
剥片	不　明	SD6400	層不明	12.5	L3.2、W4.8、T1.2	サヌカイト	
たたき石	QG97	SD6400	褐色粗砂	40.7	L12.1、W2.3、T(1.0)	黒色片岩	
水晶	QE97	SD6400	褐色粗砂	15.7	L2.9、W2.2、T2.1	水晶	
メノウ	PK10	SD6400	暗灰砂	3.6	L2.3、W1.2、T1.1	メノウ	

L：長さ、W：幅、T：厚さ
（　）は残存寸法

別表７　動物遺存体一覧表

大地区	小地区	遺構番号	層　位	和　名	学　名	部　位	左右	その他	重量(g)
6AHG	PM96	SD6400	褐色粗砂	イヌ	*Canis familiaris*	臼歯下	左	M_1	
6AHG	PM96	SD6400	褐色粗砂	イヌ	*Canis familiaris*	臼歯下	左	M_2	29.2
6AHG	PM96	SD6400	褐色粗砂	イヌ	*Canis familiaris*	下顎	左	破片	20.5
6AHG	PM96	SD6400	褐色粗砂	イヌ	*Canis familiaris*	下顎	左	破片	13.3
6AHG	PM96	SD6400	褐色粗砂	イヌ	*Canis familiaris*	下顎	右	破片	
6AHG	QS97	SD6400	褐色粗砂	イヌ	*Canis familiaris*	上腕骨	左	体部	
6AHG	QT97	SD6400	褐色粗砂	イヌ	*Canis familiaris*	上腕骨	右	体部	
6AHG	GK10	SD6400	暗灰粘土	イノシシ	*Sus scrofa*	下顎	右	破片	113.7
6AHG	QS97	SD6400	暗灰砂	イノシシ	*Sus scrofa*	下顎	右	破片	21.6
6AHG	QQ97	SD6400	褐色粗砂	イノシシ	*Sus scrofa*	上腕骨	左	遠位	
6AHG	QT97	SD6400	褐色粗砂	イノシシ	*Sus scrofa*	上腕骨	左	体部	
6AHH	IK10	SD6400	暗灰砂	イノシシ	*Sus scrofa*	上腕骨	左	体部	
6AHH	GL11	SD6471	暗灰粘土	イノシシ	*Sus scrofa*	上腕骨	右	体部	
6AHG	PK97	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	臼歯上	左	不明	23.9
6AHH	HR10	SD6400	木屑層	ウシ	*Bos tauras*	臼歯上	左	不明	70.7
6AHH	II10	SD6400	青灰細砂	ウシ	*Bos tauras*	臼歯上	左	不明	30.5
6AHG	GL10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	臼歯上	右	M^2	20.5
6AHG	QQ97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	臼歯上	右	不明	52.5
6AHD	AB22		遺物包含層	ウシ	*Bos tauras*	臼歯上	不明	不明	
6AHG	RN97	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	臼歯下	左	不明	35.0
6AHH	IN10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	臼歯下	左	不明	
6AHG	QT97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	臼歯下	不明	不明	22.8
6AHG	RM97	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	臼歯下	不明	2本	
6AHH	IN12	SD6449	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	臼歯下	不明	不明	
6AHG	GL10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	後臼歯上	左	M^1	
6AHH	IM10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	後臼歯上	左	不明	180.3
6AHG	RE97	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	後臼歯上	右	不明	
6AHG	RM97	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	後臼歯上	右	M^3	
6AHG	GK10	SD6400	暗灰粘土	ウシ	*Bos tauras*	後臼歯下	左	M_3	68.3
6AHG	GL10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	後臼歯下	左	M_2	131.2
6AHG	QB97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	後臼歯下	右	M_2M_3	
6AHG	GL10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	上顎	右	破片	211.8
6AHG	QT97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	下顎	左	破片	37.7
6AHG	RI97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	下顎	左	破片	83.2
6AHG	QT97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	肋骨	不明	破片	61.3
6AHG	QT97	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	上腕骨	左	体部	
6AHG	RA96	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	上腕骨	左	体部	
6AHG	GK10	SD6400	暗灰粘土	ウシ	*Bos tauras*	上腕骨	右	体部	
6AHG	QQ96	SD6400	灰色粘土	ウシ	*Bos tauras*	上腕骨	右	体部	189.8
6AHH	IL10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	上腕骨	右	体部	
6AHG	QT97	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	橈骨	左	体部	696.7
6AHG	RD97	SD6400	暗灰粘土	ウシ	*Bos tauras*	橈骨	左	遠位	163.9
6AHH	IL10	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	橈骨	左	体部	438.3
6AHH	IK10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	橈骨	右	体部	
6AHG	RE97	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	尺骨	右	体部	204.3
6AHG	QK97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	中手骨	左	近位	121.2
6AHG	QO97	SD6400	暗灰粘土	ウシ	*Bos tauras*	中手骨	左	近位	70.8
6AHG	QS97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	中手骨	左	体部	
6AHG	RJ97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	中手骨	左	体部	81.6
6AHG	RD97	SD6400	暗灰粘土	ウシ	*Bos tauras*	中手骨	右	体部	
6AHH	不　明	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	中手骨	右	近位	139.2
6AHG	QE97	SD6400	層不明	ウシ	*Bos tauras*	中手骨	不明	体部	194.4
6AHG	QQ97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	寛骨	右	座骨	717.4
6AHG	QQ97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	寛骨	右	腸骨	183.5
6AHG	PJ97	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	大腿骨	左	体部	55.9
6AHG	GJ10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	大腿骨	左	体部	113.1
6AHG	QK97	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	大腿骨	左	近位	635.4
6AHG	RE97	SD6400	淡灰砂質土	ウシ	*Bos tauras*	大腿骨	左	体部	
不　明	不　明			ウシ	*Bos tauras*	大腿骨	右	体部	
6AHG	QQ96	SD6400	灰色粘土	ウシ	*Bos tauras*	脛骨	左	体部	
6AHG	RD97	SD6400	暗灰粘土	ウシ	*Bos tauras*	脛骨	左	体部	257.9
6AHG	QQ96	SD6400	灰色粘土	ウシ	*Bos tauras*	脛骨	右	体部	235.2
6AHG	RE97	SD6400	淡灰砂質土	ウシ	*Bos tauras*	脛骨	右	体部	
6AHG	RG97	SD6400	褐色粗砂	ウシ	*Bos tauras*	脛骨	右	体部	362.1
6AHH	HP10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	踵骨	左	破片	
6AHH	HP10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	距骨	左	破片	
6AHH	HK13	SD6401	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	中足骨	左	体部	
6AHH	HP10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	中足骨	左	遠位	55.1
6AHH	HP10	SD6400	暗灰砂	ウシ	*Bos tauras*	中足骨	左	近位	298.8

大地区	小地区	遺構番号	層　位	和　名	学　　名	部　位	左右	その他	重量(g)
不　明	不　明			ウシ	*Bos tauras*	中足骨	右	体部	130.3
6AHG	ＰＳ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	切歯	不明	不明	39.8
6AHH	ＨＧ09	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	切歯	不明	不明	156.2
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	切歯	不明	不明	
6AHG	ＱＴ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	切歯	不明	3本	22.7
6AHH	ＩＬ10	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	切歯	不明	不明	17.7
6AHH	ＱＬ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	切歯下	左右	I_1	34.2
6AHH	ＧＭ49	SD6472	上層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯	不明	不明	
6AHG	ＱＰ97	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯	不明	不明	
6AHG	ＱＰ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯	不明	不明	16.1
6AHG	ＲＪ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯	不明	不明	27.8
6AHH	ＩＮ24	SD6449	灰黄シルト	ウマ	*Equus caballus*	臼歯	不明	4本	2.3
不　明	不　明			ウマ	*Equus caballus*	臼歯	不明	3本	
6AHG	ＰＪ96	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
6AHG	ＰＭ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
6AHG	ＱＪ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
6AHG	ＱＪ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
6AHH	ＨＰ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
6AHG	ＱＲ97	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	老	266.6
6AHG	ＱＴ96	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	57.8
6AHG	ＲＡ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	2本	
6AHH	ＩＡ10	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
6AHG	ＲＢ96	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
6AHG	ＲＩ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	M^3	
6AHG	ＲＫ97	SD6400	灰色粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	PM^2	
6AHH	ＩＫ10	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	54.9
6AHH	ＩＬ10	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	6本	
6AHG	ＲＭ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
6AHH	ＩＭ10	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	53.4
6AHH	ＩＭ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
6AHH	ＩＮ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	5本	
6AHH	ＩＮ12	SD6449	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
6AHH	ＩＮ12	SD6449	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
不　明	不　明			ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	不明	
不　明	不　明			ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	左	M^3	67.8
6AHG	ＰＫ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	
6AHG	ＰＫ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	PM^2	314.4
6AHG	ＰＳ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	2本	
6AHG	ＱＢ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	57.0
6AHG	ＱＢ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	7.8
6AHG	ＱＥ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	
6AHG	ＱＪ97	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	38.7
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	2本	
6AHG	ＱＳ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	96.2
6AHG	ＱＳ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	老	
6AHG	ＲＡ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	3本	
6AHH	ＩＡ10	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	
6AHG	ＲＢ96	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	3本	
6AHG	ＲＢ96	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	PM^2	455.6
6AHG	ＲＥ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	2本	42.7
6AHG	ＲＦ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	250.9
6AHG	ＲＩ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	400.2
6AHG	ＲＩ97	SD6400	灰色砂粘	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	
6AHH	ＩＪ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	132.6
6AHG	ＲＫ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	
6AHH	ＩＫ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	
6AHH	ＩＬ10	SD6400	青灰細砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	
6AHH	ＩＬ10	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	PM^2	38.9
6AHH	ＩＭ10	SD6400	青灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	
6AHH	ＩＭ10	SD6400	層不明	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	
6AHG	ＲＮ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	
6AHG	ＲＮ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	M^3	
6AHH	ＩＮ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	3本	
6AHH	ＩＮ12	SD6449	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	不明	49.4
不　明	不　明			ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	右	2本	
6AHH	ＧＪ46	SD6471	下層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	不明	不明	
6AHG	ＱＤ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	不明	不明	450.2
6AHG	ＱＴ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	不明	不明	
6AHG	ＲＪ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	不明	不明	566.3

大地区	小地区	遺構番号	層　位	和　名	学　名	部　位	左右	その他	重量(g)
6AHH	ＩＪ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	不明	不明	
不　明	不　明			ウマ	*Equus caballus*	臼歯上	不明	不明	
6AHG	ＰＪ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	不明	
6AHG	ＰＪ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	不明	34.5
6AHG	ＰＳ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	3本	68.4
6AHG	ＱＡ96	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	不明	94.3
6AHG	ＱＡ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	M_3	
6AHG	ＱＣ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	M_3	50.1
6AHH	ＨＰ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	不明	
6AHG	ＲＣ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	不明	28.8
6AHG	ＲＤ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	不明	
6AHG	ＲＦ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	M_3	
6AHG	ＲＩ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	3本	55.7
6AHG	ＲＩ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	不明	19.0
6AHG	ＲＩ97	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	M_3	
6AHH	ＩＩ10	SD6400	青灰細砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	不明	99.7
6AHG	ＲＪ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	不明	710.3
6AHG	ＲＬ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	不明	
6AHG	ＲＮ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	3本	
不　明	不　明			ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	左	2本	
6AHH	ＧＬ11	SD6471	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	2本	30.8
6AHH	ＧＬ11	SD6471	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	M_2	35.2
6AHH	ＧＬ11	SD6471	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	M_3	106.2
6AHG	ＰＭ96	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	不明	
6AHG	ＰＳ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	M_3	
6AHG	ＱＡ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	3本	
6AHG	ＱＤ96	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	不明	
6AHG	ＱＧ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	PM_2	
6AHG	ＱＪ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	M_3	
6AHG	ＱＬ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	M_3	
6AHG	ＱＬ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	M_3	22.7
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	2本	
6AHG	ＱＳ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	不明	13.6
6AHG	ＱＴ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	不明	155.8
6AHG	ＲＡ96	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	不明	146.5
6AHG	ＲＡ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	不明	38.3
6AHG	ＲＡ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	M_2	
6AHG	ＲＡ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	M_3	
6AHH	ＩＨ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	2本	
6AHG	ＲＩ97	SD6400	灰色砂粘	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	2本	
6AHG	ＲＩ97	SD6400	灰色砂粘	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	M_3	22.4
6AHG	ＲＬ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	M_3	23.5
6AHH	ＩＭ10	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	不明	
6AHG	ＲＯ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	4本	
6AHG	ＲＱ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	右	4本	23.6
6AHH	ＧＪ47	SX6530		ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	不明	不明	
6AHG	ＰＭ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	不明	M_3	32.1
6AHH	ＧＭ50	SD6612	層不明	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	不明	不明	
6AHG	ＱＥ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	不明	不明	716.7
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	不明	2本	
6AHG	ＲＭ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	不明	不明	56.5
不　明	不　明			ウマ	*Equus caballus*	臼歯下	不明	不明	69.1
6AHG	ＲＢ96	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	上顎	左	破片	
6AHG	ＲＢ96	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	上顎	左	破片	6.5
6AHG	ＰＪ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	下顎	左	PM_2～M_3	
6AHG	ＱＡ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	下顎	左	PM_2～PM_4	59.7
6AHG	ＱＧ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	下顎	左	M_2M_3	
6AHG	ＲＢ97	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	下顎	左	破片	153.3
6AHH	ＱＬ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	下顎	右	破片	47.3
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	下顎	右	M_2M_3	33.1
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	下顎	右	PM_2	
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	下顎	右	外側	162.2
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	下顎	右	破片	46.3
6AHG	ＲＡ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	下顎	右	PM_3～M_2	123.5
6AHG	ＲＢ96	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	下顎	右	C	
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	下顎	破片	破片	76.3
6AHG	ＱＪ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	肩胛骨	左	遠位	41.6
6AHG	ＱＣ96	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	上腕骨	左	体部	

大地区	小地区	遺構番号	層　位	和　名	学　　名	部　位	左右	その他	重量(g)
6AHG	ＱＬ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	上腕骨	左	体部	24.2
6AHG	ＲＡ96	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	上腕骨	左	体部	
6AHG	ＲＥ96	SD6400	青灰粘質土	ウマ	*Equus caballus*	上腕骨	左	体部	144.7
6AHG	ＲＭ97	SD6400	青灰細砂	ウマ	*Equus caballus*	上腕骨	左	体部	
6AHG	ＲＮ97	SD6400	灰色砂粘	ウマ	*Equus caballus*	上腕骨	左	体部	41.5
6AHG	ＱＪ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	上腕骨	右	体部	264.5
6AHG	ＱＲ97	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	上腕骨	右	体部	815.0
6AHG	ＲＡ96	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	上腕骨	右	遠位	
6AHG	ＲＪ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	上腕骨	右	体部	
6AHG	ＱＳ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	橈骨	左	体部	
6AHG	ＲＩ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	橈骨	左	体部	149.8
6AHH	ＩＭ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	橈骨	右	体部	195.1
不　明	不　明			ウマ	*Equus caballus*	橈骨	右	体部	563.3
6AHG	ＰＯ96	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	中手骨	左	体部	100.8
6AHH	ＧＪ46	SD6471	底凹み	ウマ	*Equus caballus*	中手骨	右	近位	97.5
6AHH	ＨＯ10	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	中手骨	右	体部	
6AHG	ＲＤ96	SD6400	青灰砂質土	ウマ	*Equus caballus*	中手骨	右	体部	101.9
6AHH	ＨＱ10	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	寛骨	左	破片	133.7
6AHG	ＲＦ97	SD6400	灰色砂粘	ウマ	*Equus caballus*	寛骨	左	破片	
6AHG	ＱＡ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	寛骨	右	破片	189.7
6AHG	ＱＳ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	寛骨	右	破片	146.3
6AHH	ＩＪ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	寛骨	右	破片	261.0
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	大腿骨	右	体部	257.8
6AHG	ＲＤ97	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	大腿骨	右	体部	
6AHG	ＱＢ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	脛骨	左	体部	249.0
6AHG	ＱＱ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	脛骨	左	体部	365.1
6AHG	ＱＱ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	脛骨	左	体部	
6AHG	ＰＬ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	脛骨	右	体部	128.2
6AHG	ＱＪ97	SD6400	木屑層	ウマ	*Equus caballus*	脛骨	右	体部	215.8
6AHG	ＱＴ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	脛骨	右	体部	
6AHH	ＩＭ10	SD6400	層不明	ウマ	*Equus caballus*	脛骨	右	体部	
6AHG	ＱＲ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	脛骨	不明	体部	471.3
6AHG	ＲＬ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	中足骨	左	体部	555.4
6AHH	ＩＬ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	中足骨	左	体部	117.9
6AHH	ＩＭ10	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	中足骨	左	近位	60.0
6AHG	ＱＫ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	中足骨	右	近位・遠位	
不　明	不　明			ウマ	*Equus caballus*	中足骨	右	体部2点	
6AHG	ＱＪ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	中足骨	不明	体部	5.6
6AHG	ＱＲ97	SD6400	暗灰粘土	ウマ	*Equus caballus*	中足骨	不明	体部	318.6
6AHG	ＱＬ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	基節骨	右	破片	113.0
6AHG	ＱＱ97	SD6400	褐色粗砂	ウマ	*Equus caballus*	基節骨	右	破片	186.5
6AHG	ＱＲ97	SD6400	暗灰砂	ウマ	*Equus caballus*	基節骨	右	破片	52.7
不　明	不　明			ウマ	*Equus caballus*	基節骨	右	破片	
6AHG	ＱＬ97	SD6400	木屑層	ウシ・ウマ？		上腕骨	右	体部	123.4
不　明	不　明			ウシ・ウマ？		上腕骨	不明	体部	
6AHG	ＱＬ97	SD6400	木屑層	ウシ・ウマ？		橈骨	左	体部	353.4
6AHG	ＱＳ97	SD6400	灰色細砂	ウシ・ウマ？		橈骨	左	体部	72.2
6AHG	ＱＲ97	SD6400	暗灰砂	ウシ・ウマ？		橈骨	右	近位	174.6
6AHG	ＲＥ97	SD6400	暗灰砂	ウシ・ウマ？		橈骨	不明	不明	
6AHG	ＱＮ97	SD6400	暗灰粘土	ウシ・ウマ？		尺骨	左	体部	136.3
6AHG	ＱＥ96	SD6400	暗灰砂	ウシ・ウマ？		大腿骨	不明	体部	42.6
6AHG	ＱＳ97	SD6400	灰色細砂	ウシ・ウマ？		脛骨	左	近位/斧痕	143.6
不　明	不　明			ウシ・ウマ？		脛骨	左	不明	
6AHG	ＱＨ97	SD6400	木屑層	ウシ・ウマ？		脛骨	右	不明	121.2
6AHG	ＰＭ97	SD6400	暗灰砂	シカ	*Cervus nippon*	足根骨	左	破片	12.0
6AHG	ＱＰ97	SD6400	褐色粗砂	シカ	*Cervus nippon*	中足骨	左	体部	
6AHG	ＲＭ97	SD6400	暗灰砂	シカ	*Cervus nippon*	橈骨	右	体部	31.5
6AHG	ＱＳ97	SD6400	暗灰粘土	シカ・イノシシ？		四肢骨	右	体部	
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	シカ・イノシシ？		四肢骨	不明	体部	102.6
6AHH	ＩＮ10	SD6400	暗灰砂	ヒト	*Homo sapiens*	上腕骨	不明	体部	138.5
6AHG	ＲＥ97	SD6400	暗灰砂	ヒト	*Homo sapiens*	大腿骨	左	体部	104.7
6AHG	ＲＨ97	SD6400	灰色砂粘	ヒト	*Homo sapiens*	大腿骨	左	体部	
6AHG	ＱＢ97	SD6400	木屑層	ヒト	*Homo sapiens*	大腿骨	右	体部	246.8
6AHG	ＱＱ96	SD6400	暗灰砂	ヒト	*Homo sapiens*	大腿骨	右	体部	78.5
6AHH	ＩＪ10	SD6400	灰色砂粘	ヒト	*Homo sapiens*	大腿骨	右	体部	170.7
6AHG	ＧＰ10	SD6400	暗灰粘土	ヒト	*Homo sapiens*	大腿骨	不明	体部	39.5
6AHG	ＱＥ97	SD6400	層不明	ヒト	*Homo sapiens*	大腿骨	不明	体部	717.0
6AHG	ＱＱ97	SD6400	暗灰砂	ヒト	*Homo sapiens*	脛骨	右	体部	15.2

別表８　東一坊大路西側溝地区別木簡出土点数

地区	褐色粗砂層		木屑層		暗灰砂層		その他・不明		計	
	木簡	削屑	木簡	削屑	木簡	削屑	木簡	削屑	木簡	削屑
RO・IO	3	2			4	1			7	3
RN・IN	7	5	1		9	16	6		23	21
RM・IM	4	2	3		7		1		15	2
RL・IL	5	19			1				6	19
RK・IK	3	1			1		3		7	1
RJ・IJ	2		1		3				6	
RI・II	1		5	1	1				7	1
RH・IH	2		1	3	2		2		7	3
RG・IG			3	8					3	8
RF・IF		1	4	25			1		5	26
RE・IE			1				1		2	
RD・ID					1				1	
RC・IC										
RB・IB					5	1			5	1
RA・IA			1	3					1	3
QT・HT	2		5	46	2				9	46
QS・HS	1	2	9	16					10	18
QR・HR				1						1
QQ・HQ	1		2	1	3	12			6	13
QP・HP										
QO・HO			2						2	
QN・HN										
QM・HM					3	1			3	1
QL・HL	1								1	
QK・HK			2						2	
QJ・HJ	1		1		4				6	
QI・HI			12	9					12	9
QH・HH			3	1					3	1
QG・HG			3						3	
QF・HF			4	1					4	1
QE・HE	1		10	3					11	3
QD・HD	2	3			1				3	3
QC・HC			2						2	
QB・HB	1	2			2				3	2
QA・HA			1	5					1	5
PT・GT		5			4	3			4	8
PS・GS					7				7	
PR・GR	5	1			2				7	1
PQ・GQ	2								2	
PP・GP										
PO・GO					3				3	
PN・GN	1	2			1	2			2	4
PM・GM	7	7			20	10	5		32	17
PL・GL	8	67			6	18		1	14	86
PK・GK	6	4			20	9	3	1	29	14
PJ・GJ	24	18			44	115			68	133
不明			1				13	52	14	52
小計	90	141	77	123	156	188	35	54	358	506
計	231		200		344		89		864	

別表９　畿内及び周辺の土師器甕埋納遺構

番号	遺跡名	所在地	遺構	器種	埋納方法	主軸方向	時期	内容物／備考	文献
	奈良県								
1	藤原京左12-5	高市郡明日香村雷	SK3315	甕A	正・単体	―	7c後	土・皿で蓋	1
2	平城京左3-2-16	奈良市二条大路南1丁目	SX38	甕A	正・単体	―	8c	墨／須・杯B蓋で蓋	2
3	左4-2-16	奈良市四条大路1丁目	SX07	甕A	正・単体	―	8c前	須・杯B蓋で蓋	3
4	左4-4-14	奈良市三条大宮町	SX130	甕A	正・単体	―	8c	須・杯B蓋で蓋	4
5	左5-2-14	奈良市大安寺町	SB18	甕A	正・単体	―	8c	銭／土・杯B蓋で蓋	5・6
6	左6-2-14	奈良市八条町	SK97	甕A	逆・単体	―	8c	土・皿C、三彩小壺、金箔、ガラス小玉	7
7	左8-1-3	奈良市杏町	SX3388	甕A	正・単体	―	8c中	須・杯B蓋で蓋	8
8	右2-3-4	奈良市菅原町	SX801	甕A	逆・単体	―	8c	土・椀	9
9	右2-3-6		SX801	甕A	正・単体	―	8c		10
10	右2-3-11		SX801	甕A	正・単体	―	8c	土・皿で蓋	10
11	右3-3-3	奈良市菅原東町	SX164	甕A	正・単体	―	8c	甕の下に布・銭／土・皿Aで蓋	11
12	右8-1-13	大和郡山市九条町	SX1310	甕B	逆・単体	―	8c	金箔	12
13	右8-1-14		SX1578	甕B	逆・単体	―	8c	土・皿C	12
14	右8-1-14		SX1579	甕A	逆・単体	―	8c	土・皿C	12
15	右8-1-14		SX1592	甕A	逆・単体	―	8c	土・皿C	12
16	西隆寺	奈良市西大寺東町	SK449	甕A	正・単体	―	8c後	銭、織物、土・皿C／土・甕片で蓋	13
17	石光山39号墳	御所市元町	埋葬施設3	甕C	横・合口	北西	6c前	古墳墳丘内	14
17	39号墳		埋葬施設4	甕C	横・合口	北西	6c前	古墳墳丘内	14
19	40号墳		埋葬施設5	甕C	横・合口	北西	6c前	墳丘なし	14
20	41号墳		埋葬施設3	甕C	横・合口	北北西	6c前	古墳墳丘内	14
21	引ノ山2号墳	五条市近内町	埋葬施設	甕A・C	横・合口	北西	6c	古墳墳丘裾	15
22	寅石支群	宇陀郡榛原町沢	2号土器棺	甕B・C	横・合口	東西	6c中	古墳墳丘内	16
23	神木坂	宇陀郡榛原町萩原	SK12	甕C	横・単体	南北	8c前		17
24	イノヲク1号墳	高市郡高取町藤井	土器棺	甕C	横・単体	北西	6c	須・甕片で蓋	18
	京都府								
25	長岡京左6-3	京都市伏見区淀水垂町	土器棺墓	甕	横・合口	南北	8c末	河川内に3個体	19・20
26	左6-3		SK12	甕A	正・単体	―	8c末	曲物、銭、横櫛	19・20
27	左6-3		SK15	甕A	正・単体	―	8c末		19・20
28	平安京右7-4	京都市右京区西京極豆田町		甕A	横・合口	不明	9c前	七条条間北小路路面上か	21
29	旭山古墳群	京都市山科区上花山鳴山町	SK1	甕C	横・単体	東西	7c前	古墳墳丘内	22
30	平川廃寺	城陽市平川古宮	甕棺	甕A・C	横・合口	北東	6c		23
31	芝山	城陽市寺田南中ノ芝	土壙墓1	甕C	横・合口	南北	7c		24
32	恭仁宮下層	相楽郡加茂町大字例幣	SK5406	甕C・竈	横・合口	東西	7c～8c前		25
	大阪府								
33	長原	大阪市平野区長吉		壺B・甕A	正・単体	―	8c末～9c初	単独埋納が11基、線状に並ぶ	26
34	鬼虎川	東大阪市西石切町	羽釜棺	羽釜	横・単体	南北	6c末～7c初		27
35	神並	東大阪市東石切町	羽釜棺1	羽釜・鍋	横・合口	北西	8c		28
36	神並		羽釜棺2	羽釜	横・単体	南北	8c前	土・皿Aで蓋	28
37	皿池	東大阪市河内町	羽釜棺	羽釜・甕C	横・合口	南北			29
38	墓尾古墳群隣接地	東大阪市	甕棺	甕B・C	横・合口	南北	8c		30
39	太子堂	八尾市東太子	土器棺	羽釜	横・単体	不明	7c前	掘形不詳	31
40	太平寺古墳群	柏原市新堂町	土器棺1	羽釜・鉢	横・合口	東西	7c前		32
	滋賀県								
41	中沢	神崎郡能登川町佐野・種	土器棺墓	甕C	横・単体	南北	6c		33
42	中沢		甕棺墓	甕C	横・合口	北西	6c		34
43	南滋賀	大津市南滋賀	SK01	甕C	横・合口	東西	6c後		35
44	大谷	大津市滋賀里	SK18	甕C	横・合口	東西	6c		36
45	大谷		SK19	甕C	横・合口	東西	6c		36
46	大伴	大津市南滋賀	SK1	甕C	横・単体	南北	6c後		37
	三重県								
47	伊勢寺廃寺	松阪市伊勢寺町	SX13	甕C	横・合口	東西	8c		38
48	外山大坪	上野市外山	SX8	甕C・鉢	横・合口	南北	7c末～8c前		39

文献

1　奈文研『藤原概報』25　1995
2　奈良市教育委員会の御教示による（奈良市教委『奈良市概要平成8年度』1997　刊行予定）
3　奈良市教委『奈良市概要昭和58年度』1984
4　奈良市教委『奈良市概要平成3年度』1992
5　奈良市教委『奈良市概要昭和54年度』1980
6　奈文研『地鎮』（平城宮跡資料館1986年春期特別公開資料）1986
7　橿考研『奈良市平城京左京六条二坊十三・十四坪発掘調査概報』『奈良県概報1987年度』別刷　1988
8　奈文研『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』1985
9　奈良市教委『奈良市概要平成5年度』1994
10　奈良市教委『奈良市概要平成6年度』1995
11　奈良市教委『奈良市概要平成4年度』1993
12　奈文研『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989
13　奈文研『西隆寺発掘調査報告』1993
14　橿考研『葛城・石光山古墳群』1976
15　五條市教育委員会『引ノ山古墳群』1980
16　橿考研『野山遺跡群Ⅰ』1988
17　榛原町教育委員会『神木坂古墳群』1986
18　高取町教育委員会『高取町イノヲク古墳群第4次発掘調査報告』1992
19　京都市埋蔵文化財研究所他『平成2年度京都市内遺跡立会・試掘調査報告書』1994
20　久世康博「辻の祭祀考」『研究紀要』第2号　1995
21　京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』1994
22　京都市埋蔵文化財研究所『旭山古墳群発掘調査報告書』1981
23　城陽市教育委員会『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第3集　1975
24　京都府埋蔵文化財研究センター『京都府遺跡調査概報』第25冊　1987
25　京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報1980-1』1980
26　辻美紀「埋められた土器が語ること」『華火』第56号　1995
27　下村晴文「鬼虎川遺跡出土の羽釜新資料―第17次調査」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol. 1、No. 1　1985
28　東大阪市教育委員会他『神並遺跡Ⅰ』1986
29　東大阪市遺跡保護調査会『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告書』1979
30　上野利明「宅地造成工事に伴う墓尾古墳群隣接地の試掘調査」『調査会ニュース』No. 11・12　1979
31　八尾市文化財調査研究会『太子堂遺跡第1次調査・第2次調査報告書』1993
32　柏原市教育委員会『太平寺古墳』1983
33　能登川町教育委員会『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第15集　1990
34　能登川町教育委員会『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第21集　1991
35　滋賀県教育委員会他『南滋賀遺跡』1993
36　大津市教育委員会『大谷遺跡発掘調査報告書』　1994
37　滋賀県教育委員会他『大伴遺跡発掘調査報告書』1983
38　三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』1990
39　三重県教育委員会他『平成3年農業基盤整備事業埋蔵文化財発掘調査報告―第1分冊』1992

別表 10　金属製人形出土例

出土地点	遺構	銅			鉄			時期	文献
		切込腕	無腕	刻腕	切込腕	無腕	刻腕		
(飛鳥・藤原京)									
飛鳥池		1						藤原	1
藤原京右京五条四坊	下つ道東側溝	2						藤原	2
藤原京右京六条四坊	下つ道東側溝	2						藤原	2
藤原京右京六条五坊	井戸 SE01	1						藤原	3
藤原京右京七条一坊	井戸 SE1850			1				藤原	3
藤原京右京十一条四坊	東西溝（運河）	1						藤原	4
(平城宮・京)									
第一次大極殿西	西大溝 SD3825		1					奈良	5・6
内裏東方	東大溝 SD2700	2	5					奈良	5・6・7
内裏東方	東西溝 SD11600		1					奈良	5・7
小子門北	土坑		1					奈良	5・6
小子門西	東一坊大路西側溝 SD4951		13					奈良	5・6
宮東南隅	東一坊大路西側溝 SD4951		3				3	奈良	5・6
朱雀門西	二条大路北側溝 SD1250		1					奈良	5・6
左京一条三坊	東三坊大路東側溝 SD650		3					奈良	5・6・8
左京三条二坊	二条大路上濠状遺構 SD5100		3					奈良	9
左京七条一坊	東一坊大路西側溝 SD6400		2			1	14	奈良	
左京八条条間路交差点	東堀河						1	奈良	10
右京八条一坊	井戸 SE1555		1					奈良	11
(その他)									
沖ノ島	5号祭祀遺構	4					2	7世紀	12・13
沖ノ島	22号祭祀遺構	1						7世紀	12・13
釈迦堂 N-II区	土坑 SX01				6			8世紀初	14
計		14	34	1	6	1	20	総計 76	

文献

1　奈文研「飛鳥池遺跡の調査」『藤原概報22』 1992
2　斎藤明彦「藤原京（右京五条四坊、右京六・七条四坊）」『日本考古学協会1996年度三重大会 シンポジウム1 水辺の祭祀』1996
3　奈文研「藤原京出土銅製人形の1例」『藤原概報26 』1996
4　橿原市千塚資料館「藤原京右京十一条四坊（第5次）」『かしはらの歴史をさぐる4 平成7年度埋蔵文化財発掘調査概報』1996
5　金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985
6　金子裕之「律令期祭祀遺物集成」『律令制祭祀論考』1988
7　奈文研「内裏東方東大溝地区の調査」『昭和61年度平城概報』1987
8　奈文研『平城宮報告VI』 1974
9　奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995
10　中井　公「平城京東堀河」『日本考古学協会1996年度三重大会　シンポジウム1　水辺の祭祀』1996
11　奈文研『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989
12　佐田　茂「沖の島祭祀の変遷」『古代を考える　沖の島と古代祭祀』1988
13　第三次沖の島学術調査隊『宗像沖の島』1979
14　山梨県教育委員会他『釈迦堂Ⅰ』『山梨県埋蔵文化財センター調査報告』第17条　1986

別表 11　銅製人形計測表

出土地点	遺構	形式	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	顔	時期	備考
飛鳥池		切込腕	5.9	1.1	0.25	0.8	無	藤原	
藤原京右京五条四坊	下つ道東側溝	切込腕	4.9	1.1	0.45	1.2	有	藤原	
藤原京右京六条四坊	下つ道東側溝	切込腕	7.0	1.5	0.53	2.6	有	藤原	
藤原京右京六条四坊	下つ道東側溝	切込腕	5.0	1.0	0.44	1.4	有	藤原	
藤原京右京六条五坊	井戸 SE01	切込腕	8.5	1.7	0.65	3.9	有	藤原	
藤原京右京七条一坊	井戸 SE1850	刻腕	4.6	1.2	1.17	3.2	有	藤原	
藤原京右京十一条四坊	東西溝	切込腕	3.5	1.5	0.52	1.2	有	藤原	
藤原京右京十一条四坊	東西溝	切込腕	3.0	1.0	0.57	0.7	無	藤原	
沖の島	5号祭祀遺構	切込腕	5.9	0.8	1.00	—	有	7世紀	金銅
沖の島	5号祭祀遺構	切込腕	7.8	1.4	1.00	—	有	7世紀	金銅
沖の島	22号祭祀遺構	切込腕	5.1	0.8	1.00	—	有	7世紀	
平城宮第一次大極殿西	西大溝 SD3825	無腕	12.4	0.7	0.49	2.0	無	奈良	
平城宮内裏東大溝	東大溝 SD2700	切込腕	8.0	1.8	0.70	2.2	有	奈良	
平城宮内裏東大溝	東大溝 SD2700	切込腕	18.1	1.7	0.67	10.5	無	奈良	
平城宮内裏東方	東大溝 SD2700	無腕	11.8	0.7	0.42	1.6	無	奈良	
平城宮内裏東方	東西溝 SD11600	無腕	13.7	0.9	0.4	2.7	無	奈良	銀痕跡
平城宮小子門北	土坑	無腕	11.7	1.0	0.25	1.5	無	奈良	銀痕跡
平城宮小子門西	東一坊大路西側溝 SD4951	無腕	13.3	1.1	0.53	3.6	有	奈良	鍍金？
平城宮小子門西	東一坊大路西側溝 SD4951	無腕	13.2	1.0	0.53	5.4	有	奈良	
平城宮小子門西	東一坊大路西側溝 SD4951	無腕	13.0	1.0	0.48	2.9	無	奈良	
平城宮小子門西	東一坊大路西側溝 SD4951	無腕	13.7	0.9	0.45	2.2	無	奈良	
平城宮小子門西	東一坊大路西側溝 SD4951	無腕	13.6	0.8	0.40	2.3	無	奈良	
平城宮東南隅	東一坊大路西側溝 SD4951	無腕	14.4	1.0	0.52	2.9	無	奈良	
平城宮朱雀門西	二条大路北側溝 SD1250	無腕	8.5	0.8	0.35	1.2	有	奈良	鍍金？
平城京左京三条二坊	濠状遺構 SD5100	無腕	13.6	1.0	0.69	4.0	無	奈良	
平城京左京三条二坊	濠状遺構 SD5100	無腕	15.0	1.0	0.35	1.6	無	奈良	
平城京左京七条一坊	東一坊大路西側溝 SD6400	無腕	14.4	0.9	0.32	1.6	無	奈良	

別表 12　木棺墓一覧表

遺　　跡	所　在　地	墓　坑 長×幅	木　棺 長×幅	年　　代	備　　考	文献
奈良県						
平城京左京七条一坊　SX6428	奈良市八条町	202× 65	175× 56	9c 前半	桟あり	
飛火野	奈良市春日野	300×220	—	9c 後半～10c 初頭		1
笹尾古墳	大和郡山市小泉町	—	—	9c 中頃？	古墳石室再利用	2
高安城第10号墓	生駒郡三郷町南畑	300×150	—	奈良時代末	炭層あり	3
高安城第30号墓	生駒郡三郷町南畑	270×130	—	奈良時代	磚槨	3
西山Ⅰ号墓	天理市岩屋町	195× 50	—	9c 末～10c 初頭	古墳石室正面	4
西山Ⅱ号墓	天理市岩屋町	196× 52	190× 42	9c 末～10c 初頭	Ⅰ号墓の6m西	4
箸尾　SK324	北葛城郡広陵町箸尾	200×180	—	8c～10c		5
池上	北葛城郡広陵町大野	300×170	175× 45	8c 末～9c 初頭		6
平吉　SX16	高市郡明日香村豊浦	270×140	186× 40	9c 後半～10c 初頭	棺台・木槨あり	7
石光山古墳群　11号地点	御所市元町	— × 70	—	9c 末～10c 初頭		8
石光山古墳群　12号地点	御所市元町	205×125	115× 40	9c 末～10c 初頭		8
丹切43号墳　第2次床	宇陀郡榛原町下井足	—	—	9c 末～10c 初頭	古墳石室再利用	9
丹切43号墳　第3次床	宇陀郡榛原町下井足	—	—	9c 末～10c 初頭	同上	9
能峠南山1号墳	宇陀郡榛原町上井足	310×150	175×100	9c 末～10c 初頭	同上・木炭層あり	10
能峠南山3号墳	宇陀郡榛原町上井足	250×140	180× 60	9c 後半	古墳石室再利用	10
杣屋	宇陀郡榛原町栗谷	—	—	平安時代		11
京都府						
沓掛	京都市西京区大枝	250×120	185× 55	8c 後半	木炭槨	12
安祥寺下寺跡	京都市山科区安朱中小路町	340×200	195× 50	9c 後半	同上・木槨	13
西野山	京都市山科区岩ヶ谷	270×135	—	9c 前半	同上	14
長岡京左京東二坊大路　SK25	伏見区淀水垂町	120× 50	—	8c 末	他に小型木棺3例	15
長岡京左京六条大路	長岡京市神足木寺町	140× 70	120× 38	8c 末	桟あり	16
長野	向日市物集女	200×100	—	9c 前半	木炭槨	17
西山　SX9124	相楽郡木津町市坂	370×230	200× 50	8c 後半～9c 前半	木槨・桟あり	18
大阪府						
岡本山木棺墓1	高槻市岡本町	240× 90	200× 45	9c 前半	木炭床	19
岡本山木棺墓2	高槻市岡本町	170×170	—	平安時代	木炭槨	19
大坂城三の丸地点　墓1	大阪市中央区大手前	250×100	155× 75	9c 初頭	桟あり	20
大坂城三の丸地点　墓3	大阪市中央区大手前	—	—	9c 末		20
土師の里　墓1	藤井寺市道明寺	275×120	180× 50	9c 前半？	木炭床	21
土師の里　墓9	藤井寺市道明寺	130× 60	70× 40	8c 後半		21
伽山	南河内郡太子町	265×163	— × 70	8c 初頭～前半	石槨・木炭槨	22

（単位は cm）

文　献

1　橿考研「飛火野発掘調査報告書」『奈良県概報1987年度（第二分冊）』1990
2　橿考研「笹尾古墳発掘調査概報」『奈良県概報1981年度（第一分冊）』1983
3　橿考研「高安城遺跡確認調査2」『奈良県概報1882年度（第二分冊）』1983
4　埋蔵文化財天理教調査団『奈良県天理市岩屋町西山・ヲイハナ地区の調査』『考古学調査研究中間報告』18 1992
5　橿考研「箸尾遺跡第7・9次発掘調査概報」『奈良県概報1990年度（第二分冊）』1991
6　橿考研「池上古墳周辺発掘調査概報」『奈良県概報1990年度（第二分冊）』1991
7　奈文研「平吉遺跡の調査」『藤原概報』8 1978
8　橿考研『葛城・石光山古墳群』『奈良県報告』第31冊 1976
9　橿考研『宇陀・丹切古墳群』『奈良県報告』第30冊 1975
10　橿考研『能峠遺跡群Ⅰ（南山編）』『奈良県報告』第48冊 1986
11　橿考研「宇陀地方の遺跡調査―昭和54年度 大和高原南郊地区パイロット事業地内の発掘調査概要」『奈良県概報1979年度』1981
12　梅原末治「山城大枝の奈良時代の一古墓」『史迹と美術』418号 1971
13　京都市埋蔵文化財研究所「安祥寺下寺跡1」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概報』1996
14　梅原末治「山科村西野山ノ墳墓ト其ノ発見ノ遺物」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 1920
15　久世康博「辻の祭祀考」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第2号 1995
16　長岡京市埋蔵文化財センター「左京第245次（7ANMKC―3地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成2年度』1992
17　梅原末治「向日町長野ノ墳墓」『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊 1923
18　京都府埋蔵文化財調査研究センター「木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第51冊 1992
19　森田克行「大阪府・岡本山古墓群」『歴史手帖』14巻11号 1986
20　新海正博「大坂城跡三の丸地点出土の隆平永寶について」『出土銭貨』5号 1996
21　大阪府教育委員会『大阪府藤井寺市所在土師の里遺跡　盾塚・珠金塚・鞍塚古墳他発掘調査概要Ⅰ』1990
22　大阪府教育委員会『主要地方道富田林―太子線に伴う伽山遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1982

別表１３　木棺墓出土遺物一覧表

遺　跡	皿	杯	椀	鉢	甕	壺	平瓶	漆　器	石　帯	鏡	玉	銭・その他
奈良県												
平城京　SX6428	—	土1	—	—	黒1	—	須1	箱・椀1	—	—	1	承和２
飛火野	—	—	—	—	—	須2	—	—	—	—	—	—
笹尾古墳	—	—	—	—	—	—	—	—	方3	—	—	黒色土器あり
高安城第10号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	和同、神功、萬年・鉄板
西山Ｉ号墓	土8	—	—	黒2	—	須・灰1	—	箱・椀1	—	—	—	—
西山II号墓	土5	—	土2	—	—	灰2	—	—	—	—	—	—
池上	土6	—	土3	—	—	—	—	—	—	1	—	—
平吉　SX16	—	土6	—	黒1	—	須1	—	箱・椀1	丸1	—	—	砥石・漆冠
石光山11号地点	—	—	土4・黒1	—	—	—	—	—	—	—	—	黒色土器耳杯１
石光山12号地点	土2	—	黒1	—	—	須2	—	—	—	—	—	土師羽釜１
丹切43号墳　第2次床	土3	—	黒1	—	—	須1	—	—	—	—	—	刀子
丹切43号墳　第3次床	—	—	—	—	—	須2	—	—	—	—	—	紡錘車
能峠南山1号墳	—	土3	黒8・緑1	土1	—	—	—	—	—	—	—	刀子
能峠南山3号墳	—	土・黒3	—	—	—	須1	須1	—	—	—	1	刀子・鋏
杣屋	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—
京都府												
沓掛	—	—	—	—	—	—	—	箱・椀1	—	—	5	銅水瓶・銅小鋺
安祥寺下寺跡	土2	土2	土5	—	—	—	—	箱？・帯1	—	1	—	富寿２・不明鉄器
西野山	—	—	—	—	—	—	須1	箱・椀1	方・丸	1	—	硯・太刀・刀子・鉄鏃・鉄板
長岡京東二坊　SK25	—	土1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
長岡京六条大路	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	神功１、萬年１・檜扇
長野	—	—	—	—	—	須2	—	—	—	1	2	笄
西山　SX9124	—	—	—	—	—	—	—	漆沙冠1	—	—	—	鉄板
大阪府												
岡本山木棺墓1	土1	—	—	—	—	須1	—	—	方4・丸6	—	—	刀子
岡本山木棺墓2	土1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大坂城三の丸　墓1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	隆平29・曲物
土師の里　墓1	—	—	—	—	—	—	—	○	方2・丸7	—	—	—
土師の里　墓9	—	土2	—	—	—	須2	—	—	—	—	—	—
伽山	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	銀帯飾（方4、丸6、鉸具、鉈尾1）

土：土師器、須：須恵器、黒：黒色土器、緑：緑釉陶器、灰：灰釉陶器
方：巡方、丸：丸鞆、○：出土しているが、点数などは不明

別表１４　6272A・B、6710A・C、6663F・Jの平城京域での出土一覧表

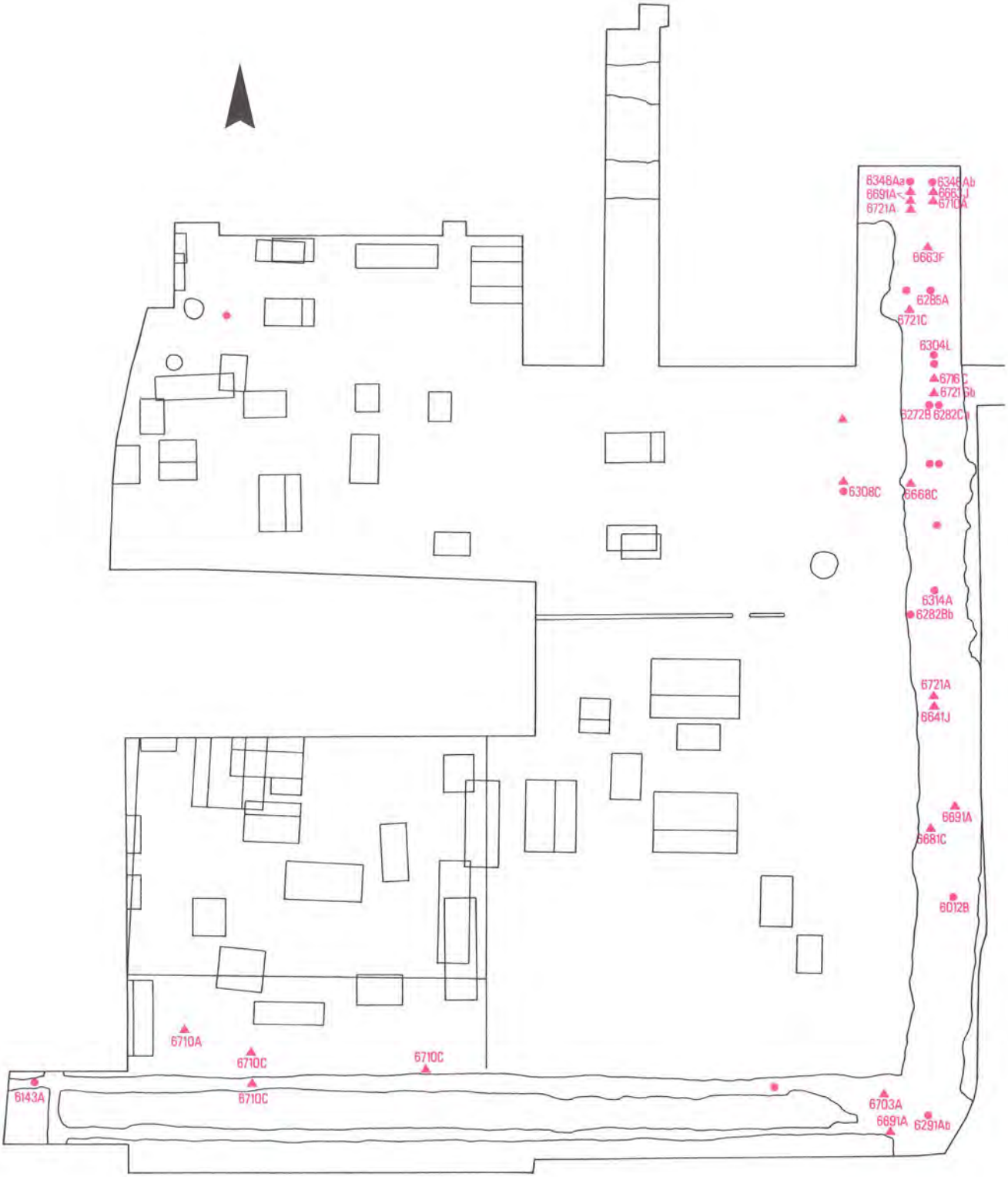
出　土　地	6272A・B	6710A・C	6663F・J	発　掘　調　査	文　献
平城宮北方			1	奈文研126	1
東三坊大路			3	奈文研57	2
左1—4—5			1	奈良市307	3
左2—2—5	1	7	19	奈文研198・204・223—13	4・5
左2—2—12	3			奈良市28	6
左2—2—13	7			奈文研151—11	7
左2—5—9・16北郊	3		2	奈文研1969年調査	
左3—2—1・2・7・8	47		9	奈文研178・184・186・193・197・200	4
左3—2—6	1		8	奈文研96・109	8
左3—2—8		2		奈文研200	9
左3—2—9	1			奈良市2	10
左3—2—15		1		奈文研86	11
左3—2—16		2		奈良市231	12
左3—4—6			1	奈良市63	13
左4—1—16			1	奈良市309	3
左4—2—1			7	奈文研151—1・174—12	14
左4—2—7			2	奈良市42・59	15
左4—2—15			5	奈文研156—8・191—3	9・16
左4—2—16			4	奈文研223—20	5
左4—3—10			1	奈良市314	3
左6—1—12		2		奈良市57	13
左7—1—16	1	5	2	奈文研251・252・253・254・255	本報告
左8—1—6		1		奈文研160	17
左8—3—9		1		奈文研93・94	18
右1—北辺4—6	1			奈文研151—26	19
右2—3—3		3		奈良市273—2・283・310	3・20
右2—3—4		52		奈良市273—1・276・293	3・20
右2—3—6	1	5	1	奈良市286—2・292—1・310・316	3・20
右2—3—7		2		奈良市326	21
右2—3—11			2	奈良市292—1・2	3
右6—1—2 沿い朱雀大路		8		奈文研1974年調査	22
右8—1—11		1	1	奈文研149	23
右9—1—4		1		奈文研1970年調査	24
法華寺			1	奈文研151—16	7
大安寺	1			奈良市25・26・27・28	25
西隆寺		8	1		26
薬師寺	1		5		27
観世音寺推定地	35				28

文　献

1　奈文研『平城宮北辺地域発掘調査報告書』1981
2　奈文研『平城宮報告VI』1975
3　奈良市教委『奈良市概要平成6年度』1995
4　奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995
5　奈文研『1991年度平城概報』1992
6　奈良市教委『平城京左京二条二坊十二坪奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告』1984
7　奈文研『昭和58年度平城概報』1983
8　奈文研『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』1986
9　奈文研『昭和63年度平城概報』1988
10　奈良市教委『奈良市概要昭和54年度』1979
11　奈文研『平城京左京三条二坊』1975
12　奈良市教委『奈良市概要平成3年度』1992
13　奈良市教委『奈良市概要昭和58年度』1983
14　奈文研『平城京左京四条二坊一坪』1987
15　奈良市教委『奈良市概要昭和59年度』1984
16　奈文研『平城京左京四条二坊十五坪発掘報告』1985
17　奈文研『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』1985
18　奈文研『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976
19　奈文研『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』1984
20　奈良市教委『奈良市概要平成5年度』1994
21　奈良市教委『奈良市概要平成7年度』1996
22　奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974
23　奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1989
24　大和郡山市『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972
25　奈良市教委『奈良市概要昭和61年度』1986
26　奈文研『西隆寺発掘調査報告書』1993
27　奈文研『薬師寺発掘調査報告』1987
28　奈文研『平城京九条大路』1981

別　図

別図１　軒瓦の分布

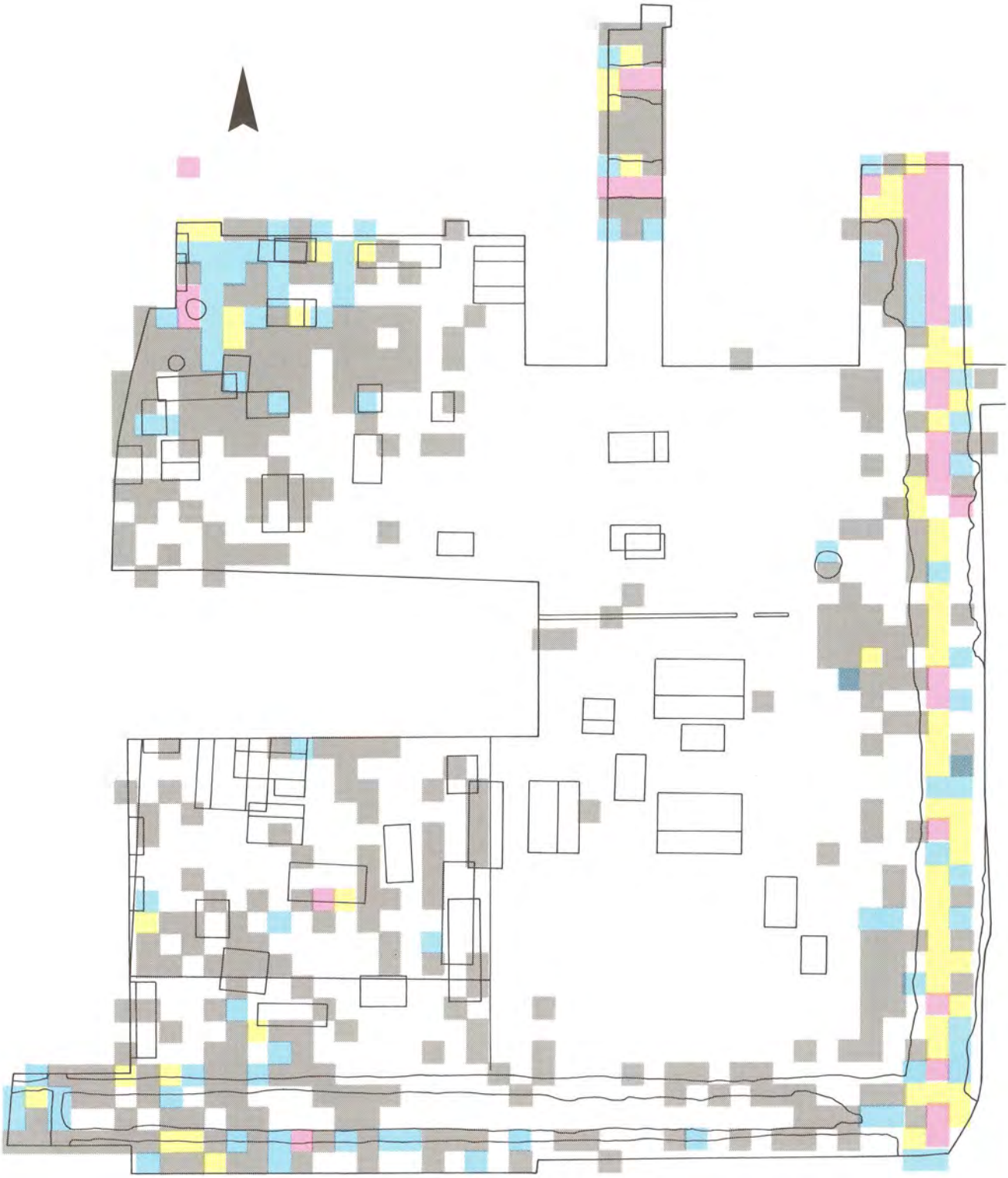


● 軒丸瓦
▲ 軒平瓦
型式番号無記載は型式不明

別図２　塼の分布

～0.5kg未満
0.5kg～1　kg未満
1　kg～3　kg未満
3　kg以上

別図３　丸瓦の分布

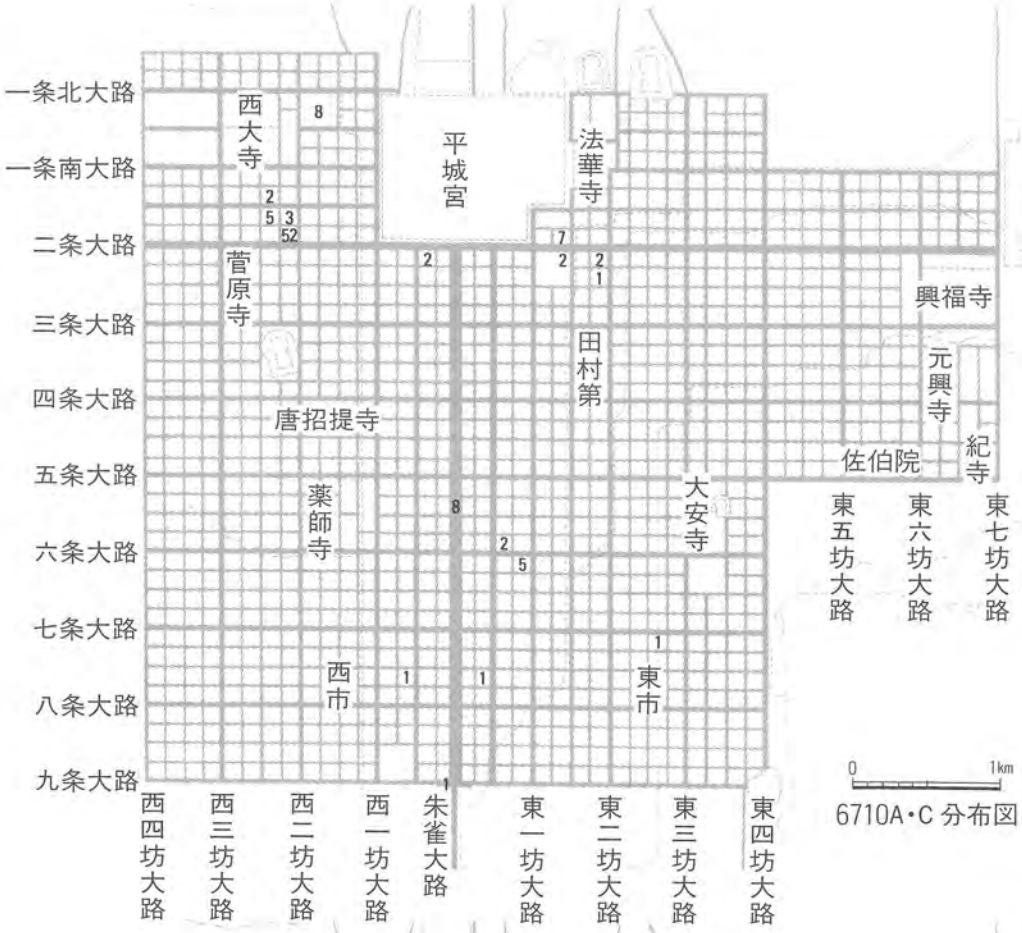


～0.5kg未満
0.5kg～1　kg未満
1　kg～3　kg未満
3　kg以上

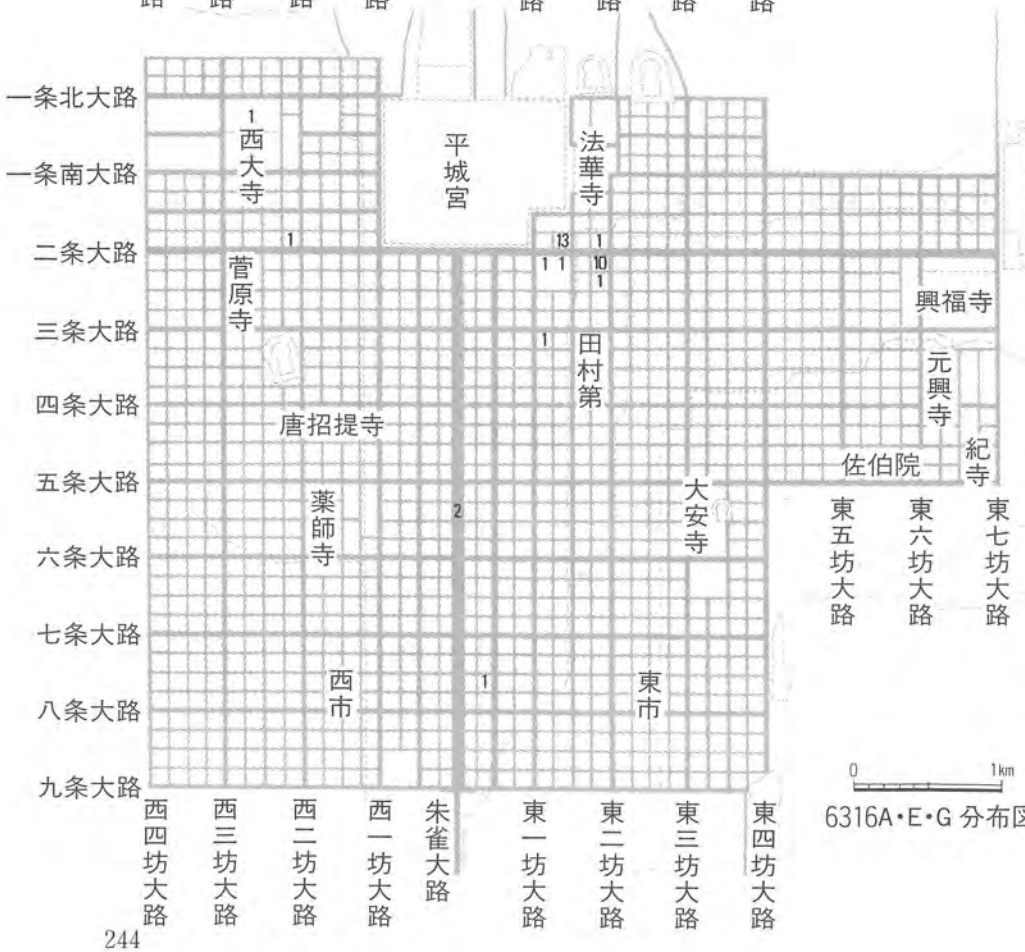
別図４　平瓦の分布

～0.5kg未満
0.5kg～1　kg未満
1　kg～3　kg未満
3　kg以上

別図5　6316A・E・G、6710A・C分布図

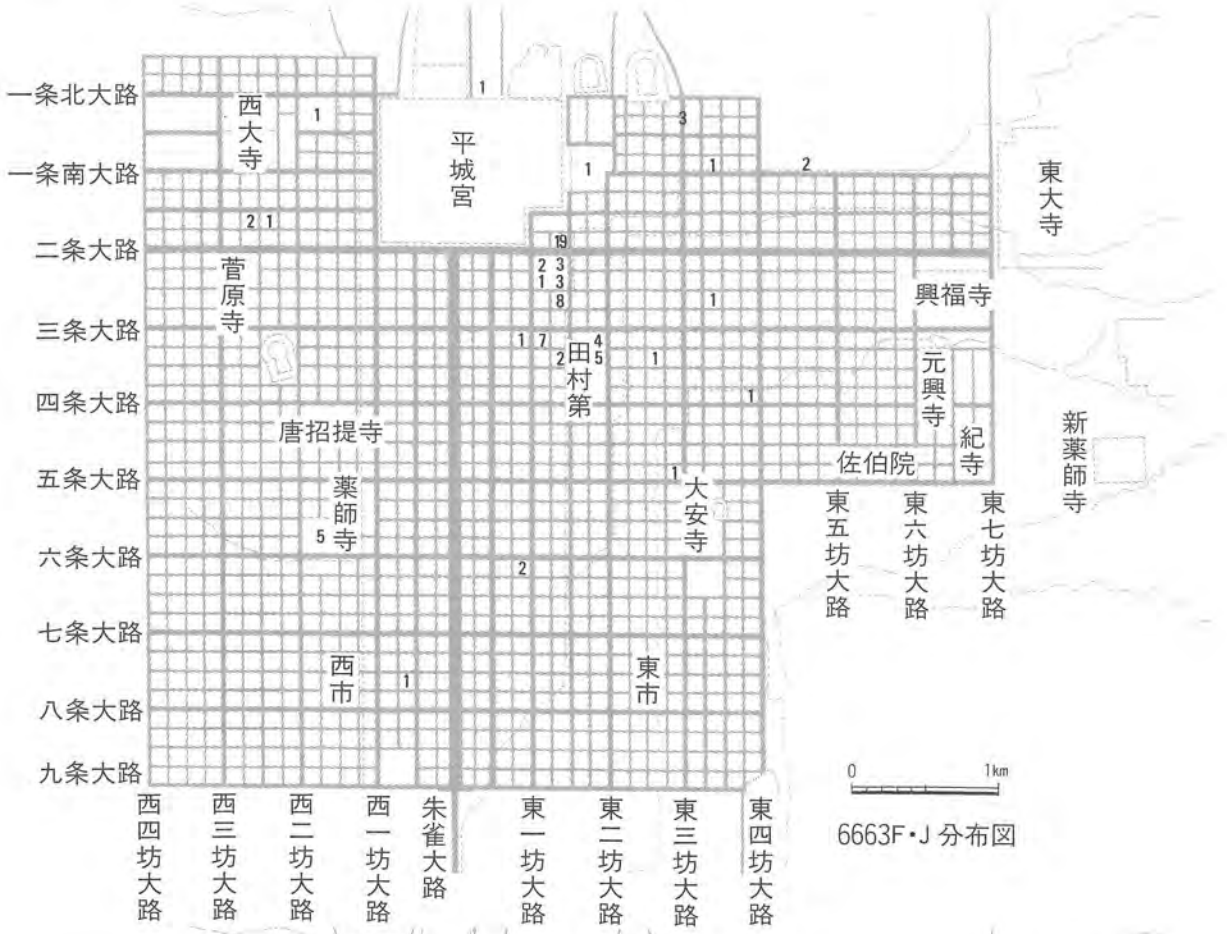


6710A・C 分布図

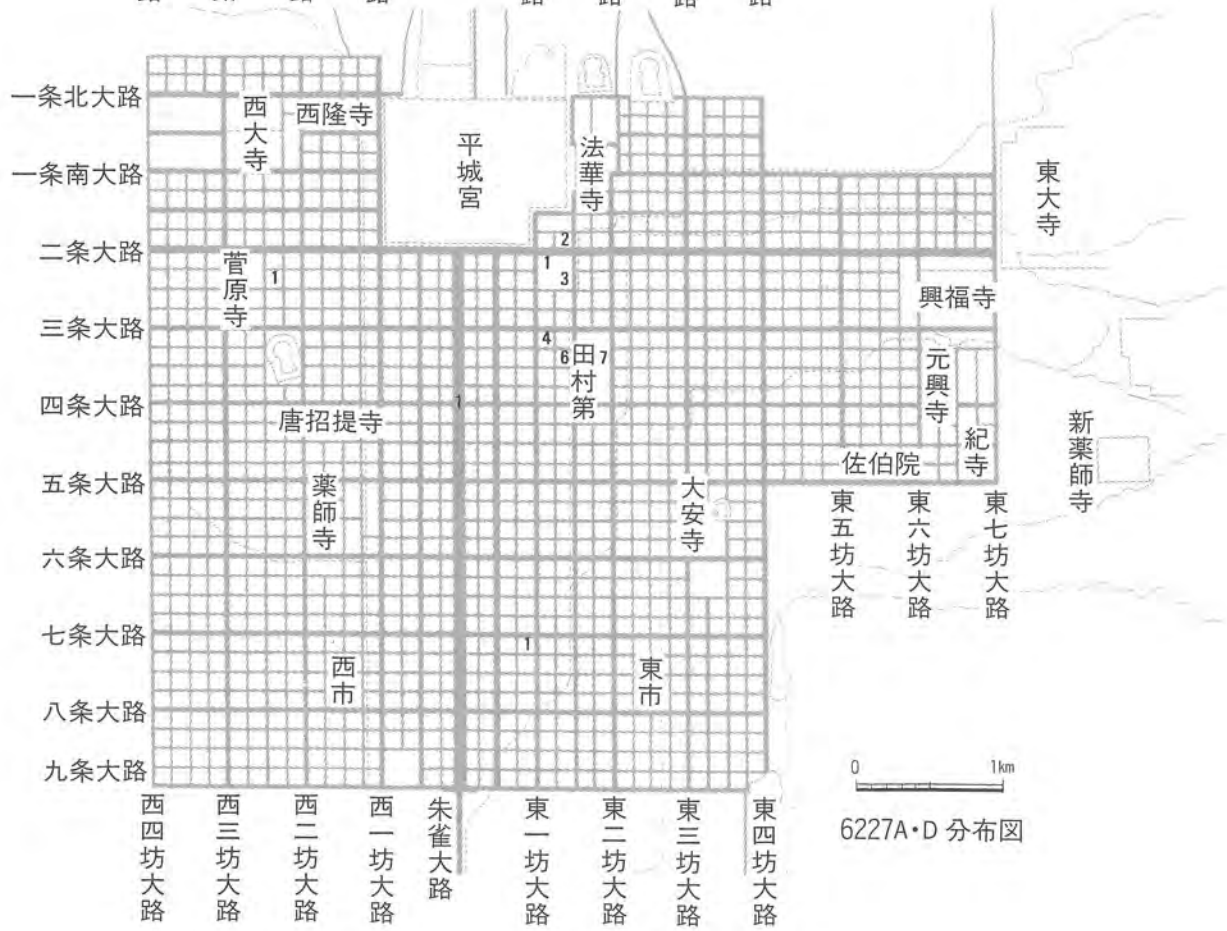


6316A・E・G 分布図

別図6　6227A・D、6663F・J分布図

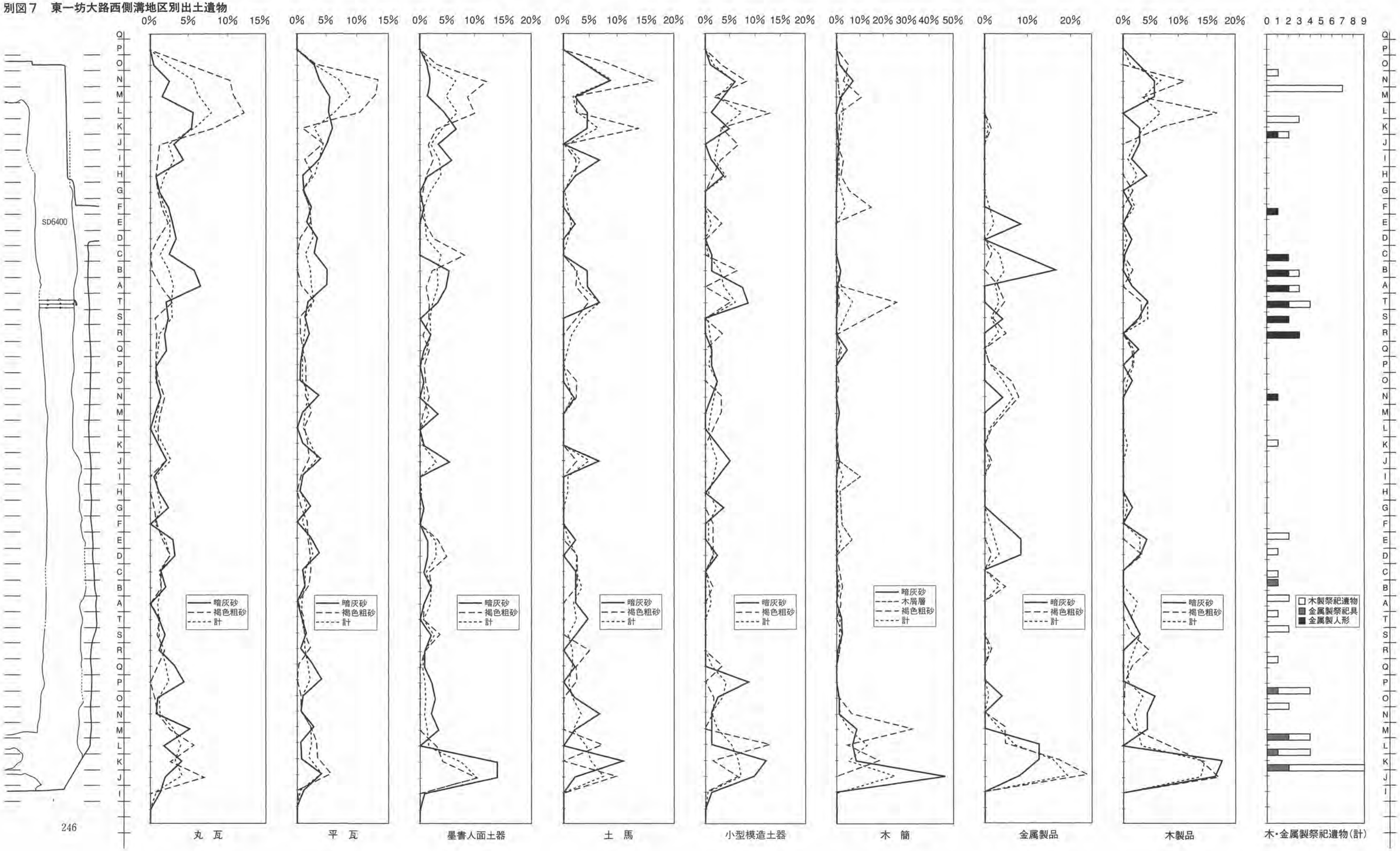


6663F・J 分布図



6227A・D 分布図

別図７　東一坊大路西側溝地区別出土遺物



RESEARCH REPORT, NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES
RESEARCH INSTITUTE NO. 56

REPORT OF EXCAVATIONS AT BLOCKS 15-16, EAST FIRST WARD ON SEVENTH STREET, NARA CAPITAL

TABLE OF CONTENTS AND ENGLISH SUMMARY

NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES
RESEARCH INSTITUTE (NABUNKEN) 1997

CONTENTS

Chapter I Introduction 1
1. Excavations at the Nara Capital 1
A. Investigations of Block 16, East First Ward on Seventh Street 1
B. Excavations and improvements to the grounds at the Nara Palace site 2
2. Publication of this report 3
Chapter II Outline of the excavations 5
1. Progress of the excavations 5
2. Excavated areas 7
A. Location and environs 7
B. Division into sectors and surveying 9
3. Outline of each excavation 11
A. Excavation no. 251 11
B. Excavation no. 252 11
C. Excavation no. 253 12
D. Excavation no. 254 12
E. Excavation no. 255 13
4. Excavation logs 14
A. Excavation no. 251 14
B. Excavation no. 252 14
C. Excavation no. 253 19
D. Excavation no. 254 23
E. Excavation no. 255 27
Chapter III Site description 29
1. General overview 29
A. Natural topography prior to the construction of the Nara capital 29
B. Topography after abandonment of the capital 31
2. Features of the city street plan 32
A. East First Avenue 32
B. Sixth Street 35
C. Block boundary streets 35
3. Features of Blocks 15-16 37
A. Features antedating the Nara period 38

B. Features from the Nara and later periods 38
C. Ritual-related and other features 60
Chapter IV Artifacts 65
1. Roof tiles and bricks 65
A. Round eave tiles 65
B. Flat eave tiles 67
C. Round and flat tiles 69
D. Other tiles and bricks 70
2. Pottery 71
A. Pottery from the western ditch of East First Avenue ... 72
B. Pottery from other roadside ditches 78
C. Pottery from wells 81
D. Pottery from pits 83
E. Pottery from coffin burials and other interments 84
F. Pottery from postholes 85
G. Pottery from prior to the construction of Nara capital and from the 10th century and later 86
H. Glazed stoneware and special ceramic objects 89
I. Pottery and other ceramic items for ceremonial use 91
J. Pottery with ink or etched inscriptions. 99
3. Wooden implements and lacquered items. 100
A. Wooden implements from the western ditch of East First Avenue. 100
B. Wooden implements from the northern ditch lining Sixth Street 105
C. Wooden implements recovered from well SE6657 105
D. Wooden implements re-utilized at well SE6657 106
E. Items recovered from wooden coffin burial SX6428 106
4. Metal objects 107
A. Copper objects 107
B. Iron objects 108
C. Copper coins 110
5. Glass objects, artifacts related to casting, and stone objects 111
A. Glass objects and artifacts related to casting 111
B. Stone objects from the Nara and Heian periods 113
C. Stone tools from the Yayoi period and before 114
6. *Mokkan* 116
7. Faunal remains 120

A. Faunal remains recovered in the investigations ……120
B. Descriptions of faunal remains, by type of item ……121
C. Interpretations of the remains ……122
Chapter V Analyses based on the natural sciences ……125
1. Analysis of fat residues recovered from artifacts and features in Block 16, East First Ward on Seventh Street ……125
A. Soil samples ……125
B. Extraction of fat residues ……126
C. Fatty acid compositions of fat residues ……127
D. Steroid compositions of fat residues ……130
E. Mathematical analysis of fatty acid compositions ……133
F. Singularity correlations by type of fatty acid composition ……135
G. Summary ……136
2. Diatom analysis of the fill in the western ditch of East First Avenue ……138
A. Samples ……138
B. Method of analysis ……140
C. Results ……140
D. Conditions affecting sedimentation of the ditch ……148
3. Pollen analysis of the fill in the western ditch of East First Avenue ……151
A. Samples ……151
B. Method of analysis ……151
C. Results ……151
D. Observations ……154
4. Analysis of metal objects, glass, and items related to glass making ……156
A. Materials for analysis and observations ……156
B. Results ……156
Chapter VI Interpretations ……159
1. Reconstruction of the city street grid ……159
A. Reconstruction of the city street grid on the four sides of Block 16 ……159
B. The position of Block 16, East First Ward on Seventh Street ……162
C. Summary ……164
2. Evolution of structural features ……165

A. Introduction ····· 165
B. Features of Phase I ····· 165
C. Features of Phase II ····· 167
D. Features of Phase III ····· 169
E. Features of Phase IV ····· 171
F. Features of Phase V ····· 172
G. Features of Phase VI ····· 174
H. Summary ····· 174
3. Bricks and roof tiles ····· 176
A. Consideration of factors in the utilization of roof tiles ····· 177
B. Problems presented by roof tiles unearthed in the investigations ····· 181
4. Pottery ····· 185
A. Pottery interments in the vicinity of Block 16 ····· 185
B. Nara period ceremonies as seen through unearthed pottery ····· 188
5. Observations on metal human effigies ····· 196
A. Classification ····· 196
B. Age and features from which these materials were recovered ····· 197
C. Measurements ····· 198
D. Characteristics of metal human effigies ····· 199
E. Summary ····· 200
6. *Mokkan* ····· 202
7. Wooden coffin burial SX6428 ····· 206
A. Resume of SX6428 ····· 206
B. Compilation of wooden coffin burials and analysis of SX6428 ····· 206
C. Ancient wooden coffin burials in the central part of the Kinai region ····· 207
D. Summary ····· 209
8. Conclusion ····· 211
Supplementary Tables ····· 214
Supplementary Figures ····· 239
English Table of Contents ····· 248
English Summary ····· 260
Transcriptions of *mokkan* inscriptions ····· (back matter)

FIGURES

Figure

1 Map of the excavations and excavation units 6
2 Map of the grid system 10
3 Features of Excavation no. 251 14
4 Features of Excavation no. 252 15
5 Features of Excavation no. 253 20
6 Features of Excavation no. 254 23
7 Features of Excavation no. 255 27
8 Topography of the period prior to the construction of Nara capital 29
9 Points where ancient waterways have been detected in the vicinity of the site .. 30
10 Remnants of the ancient land division in the vicinity of the site 31
11 Strata of roadside ditches 33
12 Western ditch of East First Avenue 34
13 Dam SX6413 and dike SX6452 34
14 Inclination of the western ditch of East First Avenue 35
15 Pottery interments 61
16 Wooden coffin burial SX6428 62
17 Bridge-like feature SX6420 63
18 Feature SX6422, with interment of boxes made with bent wood 64
19 Pottery from ditches SD6411, SD6449, SD6471, SD6472 79
20 Pottery unearthed from postholes 86
21 Jomon and Yayoi pottery 87
22 Pottery postdating the abandonment of the Nara capital 88
23 Miscellaneous baked clay objects 90
24 Relative proportions of different types of faunal remains 120
25 Sampling points for soil samples from wooden coffin burial SX6428 126
26 Sampling points for soil samples from pottery interment SX6448 126
27 Sampling points for soil samples from pottery interments SX6460, SX6461 126
28 Fatty acid composition of fat residues in samples (1) 128
29 Fatty acid composition of fat residues in samples (2) 129
30 Steroid composition of fat residues in samples (1) 130
31 Steroid composition of fat residues in samples (2) 131
32 Dendrogram of fatty acid composition of fat residues in samples 134
33 Dendrogram of fatty acid composition of samples 135
34 Singularity correlations of fatty acid composition of fat residues in samples 136

35 Strata in section at Line L, on west side of western ditch of East First Avenue, showing sampling points for diatom analysis ····· 138
36 Strata of Line R, western ditch of East First Avenue, showing sampling points for diatom analysis ····· 138
37 Strata of Line A, western ditch, showing sampling points for diatom analysis ·· 138
38 Main clusters of diatom fossils, Line R, western ditch ····· 144
39 Main clusters of diatom fossils, Line A, western ditch ····· 147
40 Clusters of fossilized pollen, Lines A and R, western ditch ····· 153
41 Lead isotope ratios of lead-glass in the crucible ····· 157
42 XRD analysis of weathering products in the glass crucible ····· 158
43 Map of streets and avenues related to the investigations ····· 159
44 Reconstruction of the streets and avenues forming the four sides of Block 16 ··· 162
45 Features of Phase I ····· 166
46 Features of Phase II ····· 168
47 Features of Phase III ····· 170
48 Features of Phase IV ····· 171
49 Features of Phase V ····· 173
50 Pottery from the jar burial bordering Hakao Kofun ····· 187
51 Method of constructing an earthen stove ····· 188
52 Pottery from ditch SD1250 ····· 192
53 Types of metal human effigies ····· 196
54 Examples of bronze human effigies ····· 197
55 Scatter plot of wooden coffin burial dimensions ····· 206
56 Temporal changes in wooden coffin burials ····· 209

TABLES

Table

1 Aerial photography of the site ····· 9
2 Relations between Excavation numbers and the grid system ····· 10
3 Waterways in the vicinity of the site ····· 30
4 Chronological relationships of features ····· 37
5 Unearthed metal objects, by feature ····· 107
6 Numbers of glass-related items unearthed from the western ditch of

East First Avenue, by stratum ····· 111
7 Amounts (by weight in grams) of items related to casting recovered from the western ditch of East First Avenue, by stratum ····· 112
8 Numbers of unearthed faunal specimens, by feature ····· 120
9 Species names of unearthed faunal specimens ····· 121
10 Numbers of unearthed faunal specimens, by species and locus on body ····· 121
11 Amounts of fatty acids extracted from soil samples ····· 127
12 Proportions of cholesterol and sitosterol distributed in the samples ····· 132
13 Ecology of diatoms ····· 139
14 Results of diatomaceous earth analysis, west side of western ditch of East First Avenue, Line L ····· 140
15 Results of diatomaceous earth analysis, western ditch of East First avenue, Line R (1) ····· 142
16 Results of diatomaceous earth analysis, western ditch of East First avenue, Line R (2) ····· 143
17 Results of diatomaceous earth analysis, western ditch of East First avenue, Line A (1) ····· 145
18 Results of diatomaceous earth analysis, western ditch of East First avenue, Line A (2) ····· 146
19 Results of pollen analysis ····· 152
20 Results of metallic composition analysis of the patinated portions of bronze items ····· 156
21 Results of metallic composition analysis of the unpatinated portions of bronze items ····· 156
22 Geographic coordinates as measured for streets and avenues related to the investigations ····· 160
23 Equations for the geographic coordinates of street and avenue features ····· 161
24 Geographic coordinates of the four corners of Block 16 ····· 161
25 Distances between the centers of ditches on both sides of major roads ····· 163
26 Chronological periods of unearthed roof tiles ····· 176
27 Statistical comparisons of measurements of bronze human effigies, by type of shape ····· 198
28 Lengths of iron human effigies, by shape and period ····· 198
29 Statistical comparisons of measurements of human effigies, by chronological period ····· 198
30 Examples of *mokkan* unearthed from ditches running north-south in the Nara capital ····· 203
31 Classification of wooden coffin burials ····· 208

SUPPLEMENTARY TABLES

Table

1 Architectural features ····· 215
2 Unearthed wooden implements, by feature ····· 217
3 Pottery and ceramic objects recovered from the western ditch of East First Avenue ····· 218
4 Pottery with ink inscriptions ····· 223
5 Measurements of coins ····· 224
6 Stone implements ····· 226
7 Faunal remains ····· 228
8 Numbers of *mokkan* recovered from the western ditch of East First Avenue, by sector and stratum ····· 232
9 Haji ware jar burials in Kinai and surrounding regions ····· 233
10 Examples of archaeologically recovered metal human effigies ····· 234
11 Measurements of bronze human effigies ····· 235
12 Wooden coffin burials ····· 236
13 Items recovered from wooden coffin burials ····· 237
14 Recoveries of eave tiles of styles 6272A and B, 6710A and C, 6663F and J from the Nara capital region ····· 238

SUPPLEMENTARY FIGURES

Figure

1 Distribution of eave tiles ····· 240
2 Distribution of bricks ····· 241
3 Distribution of round roof tiles ····· 242
4 Distribution of flat roof tiles ····· 243
5 Distribution of eave tiles of styles 6316A, E and G, and 6710A and C in the Nara capital ····· 244
6 Distribution of eave tiles of styles 6227A and D, and 6663F and J in the Nara capital ····· 245
7 Distributional densities of items recovered from the western ditch of East First Avenue, by sector and stratum ····· 246

PLANS

Plan

1	Mapping of the features	
2	6AHC-J 6AHD-A	East First Avenue
3	6AHD-A 6AHH-I	Sixth Street
4	6AHG-R 6AHH-I	Western roadside ditch, East First Avenue
5	6AHH-H, I	Western half of the northwest area of Block 16
6	6AHH-H, I	Eastern half of the northwest area of Block 16
7	6AHH-H, I	Western half of the northeast area of Block 16
8	6AHG-Q, R 6AHH-H, I	Eastern half of the northeast area of Block 16 and the western ditch of East First Avenue
9	6AHG-Q, R	East First Avenue
10	6AHH-G, H	Western periphery of Block 16
11	6AHH-G, H	Western half of the central area of Block 16
12	6AHH-G, H	Eastern half of the central area of Block 16
13	6AHG-P, Q 6AHH-G, H	Eastern periphery of Block 16 and the western ditch of East First Avenue
14	6AHH-G, H	Northern block-boundary street and eastern block-boundary avenue, East First Ward on Seventh Street
15	6AHH-G, H	Northern periphery of Block 15, western half of the southwest area of Block 16, northern block-boundary street
16	6AHH-G, H	Northern periphery of Block 15, eastern half of the southwest area of Block 16, northern block-boundary street
17	6AHH-G, H	Northern periphery of Block 15, western half of the southeast area of Block 16, northern block-boundary street
18	6AHG-O, P 6AHH-G, H	Northern periphery of Block 15, eastern half of the southeast area of Block 16, western ditch of East First Avenue, northern block-boundary street
19	Wells in Block 16	
20	Ritual pit SX6530	
21	Round eave tiles (1)	
22	Round eave tiles (2), specially-shaped roof tiles	
23,24	Flat eave tiles (1, 2)	

25,26 Haji ware recovered from ditch SD6400 (1, 2)
27-31 Sue ware recovered from ditch SD6400 (1-5)
32,33 Pottery recovered from wells (1, 2)
34 Pottery recovered from pits
35 Pottery unearthed from ritual pits and burials
36 Burial features, wooden coffin burial
37 Glazed stoneware, inkstone
38-41 Pottery bearing human faces drawn in ink (1-4)
42 Ceramic miniatures
43,44 Horse-shaped clay figurines (1, 2)
45 Ink-inscribed pottery (1)
46 Ink-inscribed pottery (2), pottery with etched inscription
47 Ink-inscribed pottery (3)
48-52 Wooden implements unearthed from ditch SD6400 (1-5)
53 Wooden implements from ditch SD6451, well SE6457, wooden coffin burial SX6428
54 Bronze and iron items from ditch SD6400
55 Iron items from ditch SD6400
56 Glass objects, items related to casting from ditch SD6400
57 Items related to casting
58 Stone implements from the Nara and Heian periods
59 Stone implements from the Yayoi period and earlier

SUPPLEMENTARY PLAN (In envelope inside back cover)

Features of Blocks 15-16, East First Ward on Seventh Street, Nara Capital

COLOR PHOTOGRAPHS

Frontispiece : Ritual use items from ditch SD6400

Photo

1 (top) Area of investigation, Excavation no. 252
(bottom) Area of investigation, Excavation no. 254
2 Ritual pit SX6530
3 Wooden coffin burial SX6428
4 (top) Wooden human effigies
(bottom) *Geta* (wooden clog), wooden seal
5 (top) Metal human effigies
(bottom) Padlock
6 (top) Glass-related items
(bottom) Casting-related items
7 (top) Items fashioned from stone
(bottom) Stone tools
8 Wooden *koto* effigies

MONOCHROME PHOTOGRAPHS

Photo

1 Topography of the vicinity of the area of investigation (1-2)
2 Western ditch, East First Avenue (1-2)
3 East First Avenue and eastern ditch
4 Sixth Street (1-3)
5 Northern block-boundary street and eastern block-boundary avenue, East First Ward on Seventh Street
6 Area of investigation, Excavation no. 251
7-8 Area of investigation, Excavation no. 252 (1-2)
9-10 Area of investigation, Excavation no. 253 (1-2)
11-16 Area of investigation, Excavation no. 254 (1-6)
17-20 Area of investigation, Excavation no. 255 (1-4)
21 Bridges, pits
22 Ditch, ritual pit, wooden coffin burial

23	Wells, interment of boxes made with bent wood
24	Pottery interments
25	Round eave tiles, design-bearing bricks
26	Flat eave tiles
27	Round tiles, flat tiles, clay drainage pipe
28	Ritual use pottery, baked clay objects, inkstone showing traces of manufacturing techniques
29-31	Haji ware unearthed from ditch SD6400 (1-3)
32-35	Sue ware unearthed from ditch SD6400 (1-4)
36	Pottery recovered from roadside ditches and postholes
37-39	Pottery recovered from wells (1-3)
40	Pottery recovered from wells (4), pottery unearthed from pits
41,42	Pottery from burials (1, 2)
43	Pottery preceding the construction of the Nara capital, pottery postdating its abandonment
44	Glazed stoneware, special ceramic items
45-56	Pottery bearing human faces drawn in ink (1-12)
57,58	Ceramic miniatures (1, 2)
59-61	Horse-shaped clay figurines (1-3)
62,63	Ink-inscribed pottery from ditch SD6400 (1, 2)
64	Ink-inscribed pottery, pottery with etched inscriptions
65,66	Wooden implements recovered from ditch SD6400 (1, 2)
67,68	Wooden implements recovered from ditch SD6400 and well SE6657 (1, 2)
69,70	Metal items recovered from ditch SD6400 (1, 2)
71	Coins recovered from ditch SD6400 and burial SX6428
72	Glass-related items from ditch SD6400
73	Items related to casting
74	Items fashioned from stone in the Nara and Heian periods
75-79	*Mokkan* (1-5)
80	*Mokkan* (6, reutilized as wooden *koto* effigies)
81	Faunal remains unearthed from ditch SD6400 and pit SX6530
82	CT scan X-ray photographs (bronze bells, mirror)
83,84	Diatom fossils from ditch SD6400 (1, 2)
85	Fossilized pollen from ditch SD6400

ENGLISH SUMMARY

I FOREWORD

This work is the report of archaeological excavations conducted by the Nara National Cultural Properties Research Institute at the request of the Nara Prefectural Board of Education, prior to the construction of a large-scale retail outlet in Shichijō-chō, Nara City.

Within the total area scheduled for development, extending over 31,500 m² of Block 13 of East First Ward on Sixth Street and Blocks 15 and 16 of East First Ward on Seventh Street, excavations were conducted five times between May 1994 and April 1995, focusing mainly on Block 16, which contains the major portion of area to be developed and includes the planned site of the retail store itself. The total area excavated was approximately 14,200 m².

II ARCHAEOLOGICAL FEATURES

A Features related to the city street grid

Remains of the city street grid on all four sides of Block 16 of East First Ward on Seventh Street were confirmed in this series of excavations. Within this ward, the drainage ditch forming the western side of East First Avenue, and the northern block-boundary street along with the ditches on both sides, were investigated over the length of an entire block; extending the area of excavation, the eastern ditch of East First Avenue, Sixth Street and the eastern block-boundary avenue within East First Ward on Seventh Street, together with ditches on both sides of the latter two roads, were confirmed. The interval between the centers of the ditches bordering East First Avenue was 22.5 m, which fails to yield a round number when calculated as either *taishaku* (long-scaled *shaku*, approximately 33.5 cm) or *shōshaku* (short-scaled *shaku*, approximately 29.6 cm) ; this is thought to result from repairs to the western ditch, which led to a shift in its position to the east. The western ditch ranged from 7.5 to 8.6 m in width and from 1.5 to 1.7 m in depth, similar in scale to findings for its upper reaches and suitable for a major drainage facility of the Nara capital. The sediments in the ditch are divisible into seven strata, tracing changes over three broad temporal periods. At the end of the Nara period the ditch underwent large-scale repair, and eventually, by means of a dam discovered in the center of the area of excavation, provided water for an irrigation channel flowing to the east. A bridge over the western ditch was also discovered. When considered as an entranceway for Block 16, at times when a barrier was erected around the perimeter of the block the bridge would serve as an opening onto a major road, and would thus bear some relation to the nature of the Block and its inhabitants. While it was not possible to determine with certainty the age of the bridge in these investigations, it is conceivable that it was a temporary structure, built

to accommodate the inflow of materials to a base which was used for the construction of the Nara capital during Phase I of the site.

Further, this was the first time both ditches bordering Sixth Street were uncovered simultaneously, and along with the discovery that the road lies south of its anticipated position, it became clear that the road's width was 14.3 m (40 *taishaku*) as measured from the centers of the ditches, narrower than other major roads of the capital. It must be left to subsequent research to determine whether this is true only for the excavated region, but if West Sixth Street was built to the same proportions, then a provisional solution may be seen concerning the positions of the southern gate of Yakushiji and the northern ditch of Sixth Street, as yet undetected in that area, which have been suggested as possibly overlapping. Further, as a result of the verification of the roads surrounding Block 16 on all four sides, it has become clear that the Block is relatively large in size, being slightly more than 450 *shōshaku* in both the north-south and east-west directions, and that the city street grid of the Nara capital accordingly contained irregularities in block dimensions.

B Temporal changes in the archaeological features

The remains of 58 buildings, 49 fences, 15 ditches, and 11 wells were detected in Blocks 15 and 16 together with pits and other features. Only a small portion of the northern part of Block 15 was investigated, however, yielding but four buildings and two fences, so that it was not feasible to evaluate the temporal sequence of these features. By contrast, whereas few artifacts indicating the age of features were unearthed in Block 16, a sequence of six phases from the Nara to the Heian periods was established, based mainly on relationships of overlap and on the relative positions of the features. Over the entire span, moreover, the site was not subdivided but used on the scale of a single city block.

In Phase I, at the beginning of the construction of the Nara capital, features concentrated in the western half of the block, with the eastern half remaining vacant. No regularity in the layout of the buildings could be detected, nor did any particular structure appear to be central, and judging from the geographical position of the block, it seems possible that it was used as a temporary facility related to the construction of the capital, rather than as an ordinary site for housing.

By contrast, in Phases II and III, planned use as a building site is evident, thought to have been for housing government officials. Buildings were arranged in orderly fashion in the southeastern portion of the block in the pattern of a main and secondary halls; the western half of the block, marked off by a north-south fence, may thus have served as an area for food preparation.

In Phase IV, which extended from the end of the Nara into the Heian period, buildings concentrated in the western half of the block. It is difficult to regard these as ordinary houses, however, judging from the arrangement of the buildings and the existence of warehouses and

other structures, and considering the recovery from the western ditch of East First Avenue of slag, and of fragments of clay bellows nozzles and shaft furnaces, it is thought that some kind of manufacturing activity was conducted in the block.

Even during the Heian period, in Phase V, although the site was less intensely utilized, it nonetheless served as the locus of housing, thus verifying the continuing occupation of the site even subsequent to the abandonment of the Nara capital. Also, a wooden coffin burial was conducted in one corner of the site. In Phase VI, however, only small-scale buildings existed in scattered fashion, and it appears that the bulk of the site was turned into cultivated land. It was at this time that the western ditch of East First Avenue served as an irrigation ditch.

From a pit discovered at the base of the southern ditch of the northern block-boundary street of East First Ward on Seventh Street, crania and long bones of horses were recovered, together with pottery bearing human faces drawn in ink and other objects. Datable from the pottery to the start of the Nara period, this pit, associated with animal-related ritual, was dug at a stage when water was not flowing through the ditch. Also, from the result of fatty acid analysis, the five pottery interments discovered at road surfaces and elsewhere were all determined to have held human remains, and judging from their sizes, are believed to have been the graves of children. The above discoveries will likely draw attention as the first examples known for the Nara palace site. In addition, pit dwellings from the Kofun period were detected at the surface of East First Avenue.

III ARTIFACTS

Artifacts yielded mainly by the western ditch of East First Avenue included pottery and other baked clay objects, roof tiles and bricks, wooden implements, metal goods, stone objects, and *mokkan* (inscribed wooden tablets) ; Jōwa *shōhō* copper coins, lacquer ware, and pottery were also recovered from the wooden coffin burial. Among these items, ritual-related articles such as metal human effigies, wooden objects serving as effigies for *koto* and other objects, pottery bearing human faces drawn in ink, and ceramic miniature table and cooking ware, will receive attention as materials bearing on rituals in the Nara capital. The *koto* effigies suggest the existence of a prototype heretofore not known among *koto*, and spear effigies with wavy lines drawn in ink are also likely to receive notice for their rarity.

A large number of metal human effigies have been recovered from the southern half of the Nara capital, with the bulk of these being made of iron. Some of these have wavy bodies formed with gently meandering curves, others are upright figures with the legs spreading outward, still others are perforated with four round holes from the face down to the abdomen. With regard to the latter type, it can be seen that they were made by first drawing the eyes, nose, and mouth with a burin, then executing the holes, and finally cutting the legs apart with a burin and spreading them to the right and left.

The recovery of a stone belt fitting, together with the existence of a wooden coffin burial, indicates that even in the Heian period human activity was conducted at this locus, a finding not inconsistent with the temporal change in archaeological features.

From the perspective of scientific analysis, it has become clear from examinations of fatty acid residues that pottery interments, made in the roadway and elsewhere, were jar burials of humans, and also that offerings placed in the lacquer ware and pottery included in the wooden coffin burial possibly contained animal products. Further, pollen analysis and diatom analysis of the fill from the western ditch of East First Avenue have clarified the manner of sedimentation of the ditch.

IV ISSUES FOR FUTURE RESEARCH

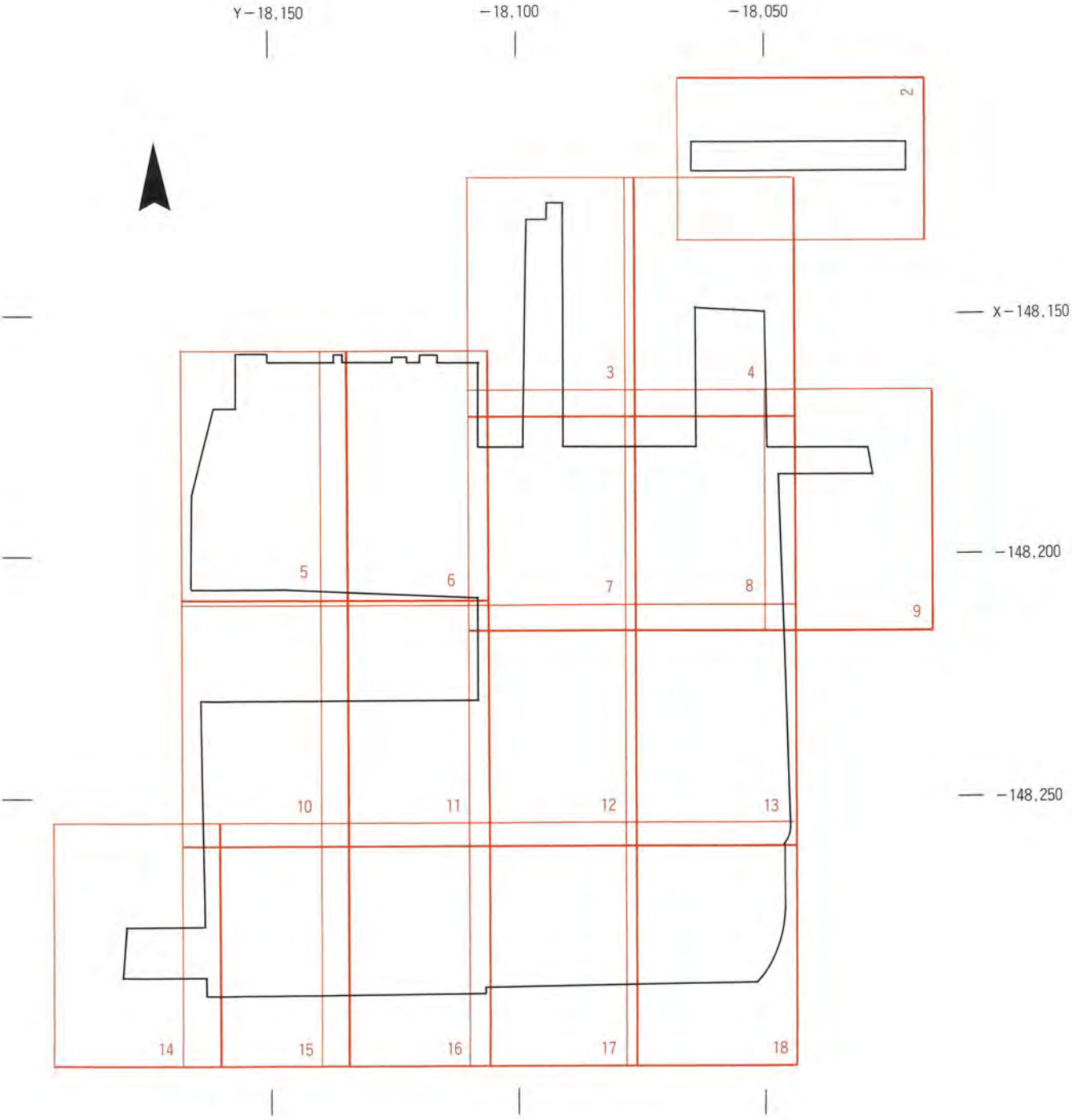
It is now evident, with regard to the archaeological features of Block 16, that temporal change occurred in six phases; it is thought that the move of the capital to Kuni took place between the second and third phases. Whereas this move been regarded as an epoch-making event with regard to changes in archaeological features, as investigations of the Nara capital have proceeded in recent years and clues for concrete knowledge of the trends at Nara at the time of the move gradually increase, examples have been recognized for the period encompassing the move to Kuni in which the basic arrangement of buildings did not greatly change, with one portion of the structures remaining while others were rebuilt. In the current investigations as well, the basic continuity in the shape of utilization of the site should be noted. In addition, on the basis of previous smaller-scaled excavations, the existence of roofed earthen walls has been deduced from the detection of ground-level gutters to catch the runoff from the roof; in the current investigations a broader-scaled area was investigated, and from a consideration of the features together with the recovered artifacts, it is now conceivable that the construction of the outer enclosure of the block took a certain span of time to complete. In other words, it can be seen in this case that construction of the eastern side took place after the northern, and was followed by that of the southern side, and it has accordingly become clear that housing sites were not always accompanied by facilities forming an outer enclosure. Further, the discovery of a housing site, from the first half of the Nara period, on the scale of an entire block, in the southern half of the capital where small-scaled house sites were regarded as common, shows that traditional views in this regard are not definitive, and that reexamination based on advances made in subsequent investigations will be necessary.

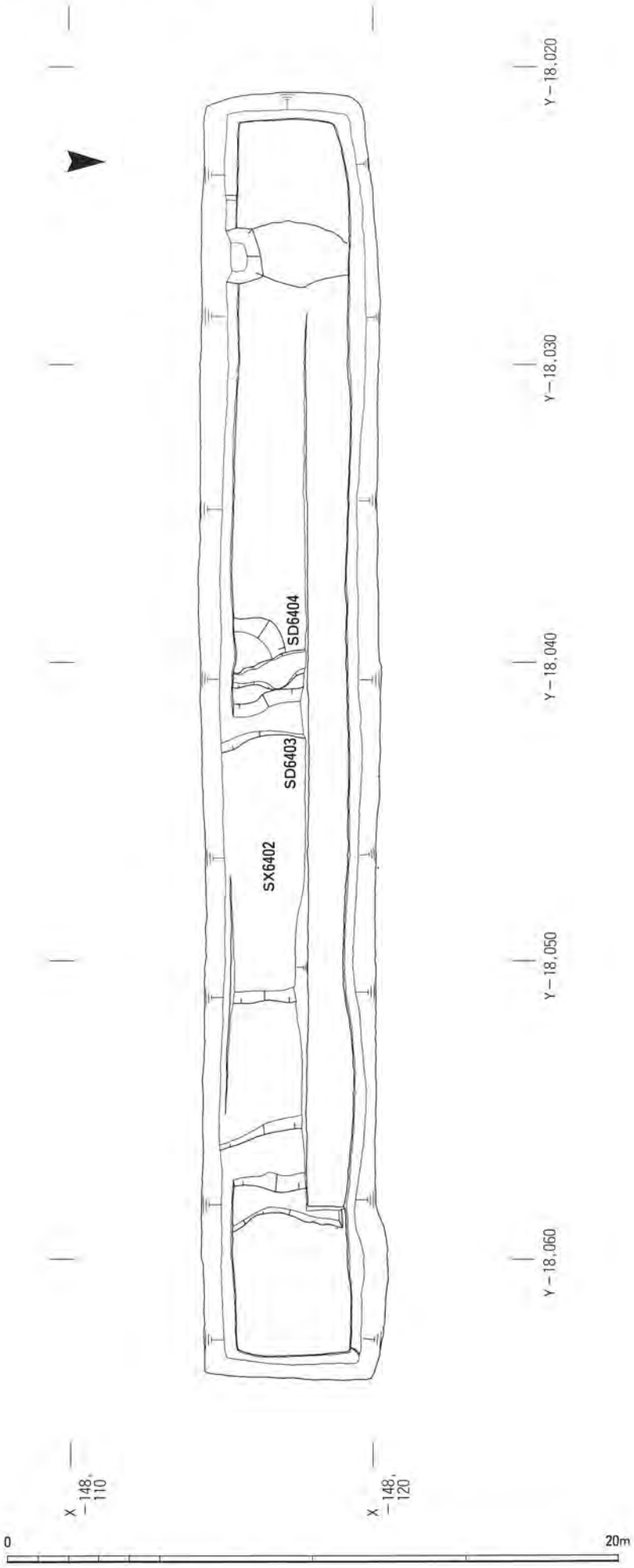
With regard to artifacts recovered from roadside ditches, these involve the problem of uncertainty about the place where they were discarded. The western ditch of East First Avenue was a major drainage route of the capital, flowing south from the Nara palace, and as the ditch assumes a gentle inclination at this point for topographical reasons, it is hard to rule out the possibility that these artifacts flowed down from the upper reaches of the ditch. But unlike the

wooden spear and *koto* effigies, judging from the conditions in which *mokkan*, pottery, an-danimal remains are found, and from the states of preservation of these items themselves, it is thought that they were discarded at places not far removed from the point of discovery. From this perspective, the *mokkan* from the western ditch of East First Avenue suggest, by their contents, that a facility similar in nature to a dormitory for lower government officials existed in the nearby area, including the excavation site itself. If such a facility was indeed located in Block 16, from the position of the strata yielding the *mokkan*, it would correspond with Phases II and III of the sequence of archaeological features, thought to represent a housing site for government officials. On the other hand, the jar used in the pottery interment appears strongly related to the central Kawachi region, or the area extending from eastern Setsu to southern Yamashiro, and is thought to belong to the Heijōkyū 2 style; some kind of relationship may therefore be assumed between these regions and the residents of Phase II. Whether the two interpretations just given are compatible cannot be clearly resolved at present, and the form in which the facility mentioned above will reveal itself in terms of archaeological features is also uncertain. It is hoped that these issues will become clear through subsequent developments in the archaeological investigation of the Nara capital.

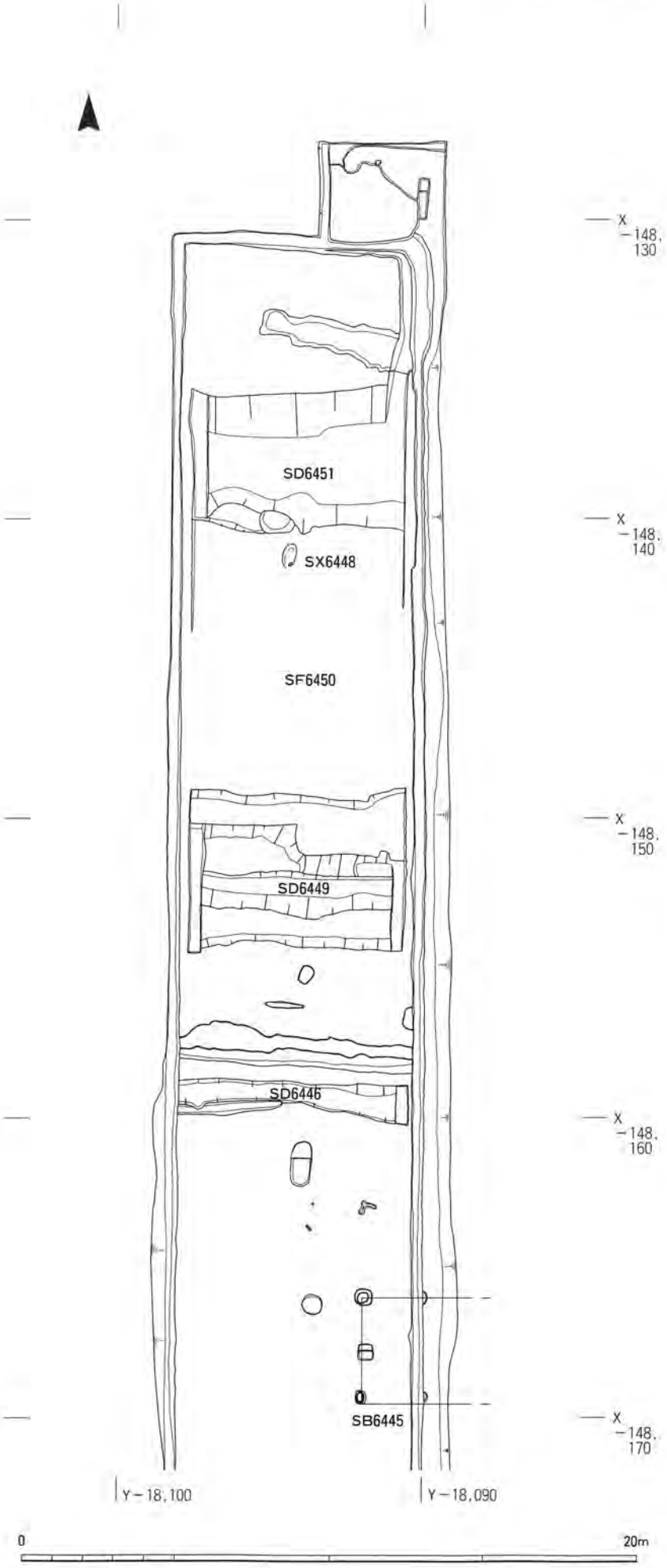
図　面

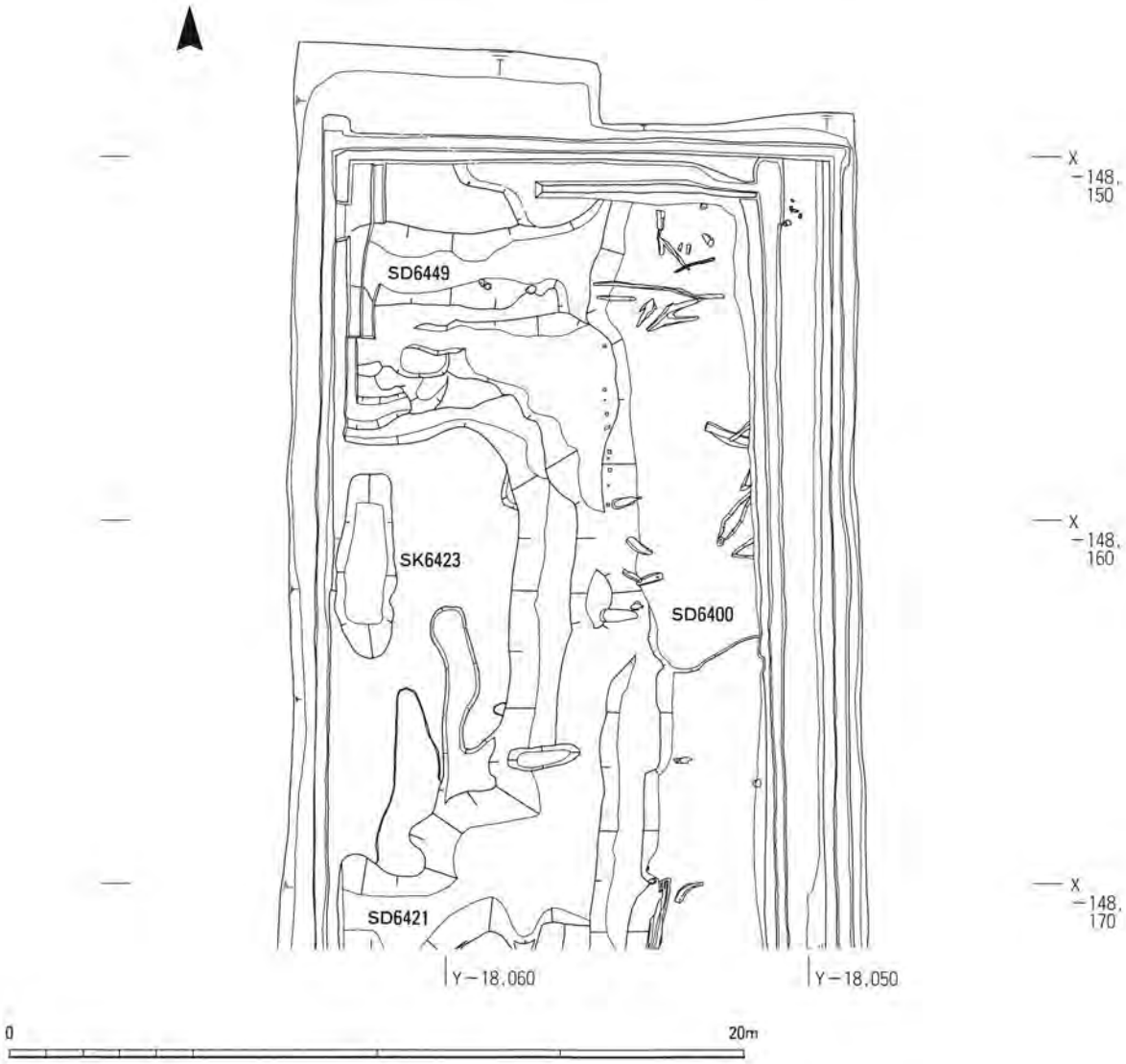
遺構実測図の割付け


Y−18,150
−18,100
−18,050
X−148,150
−148,200
−148,250
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18

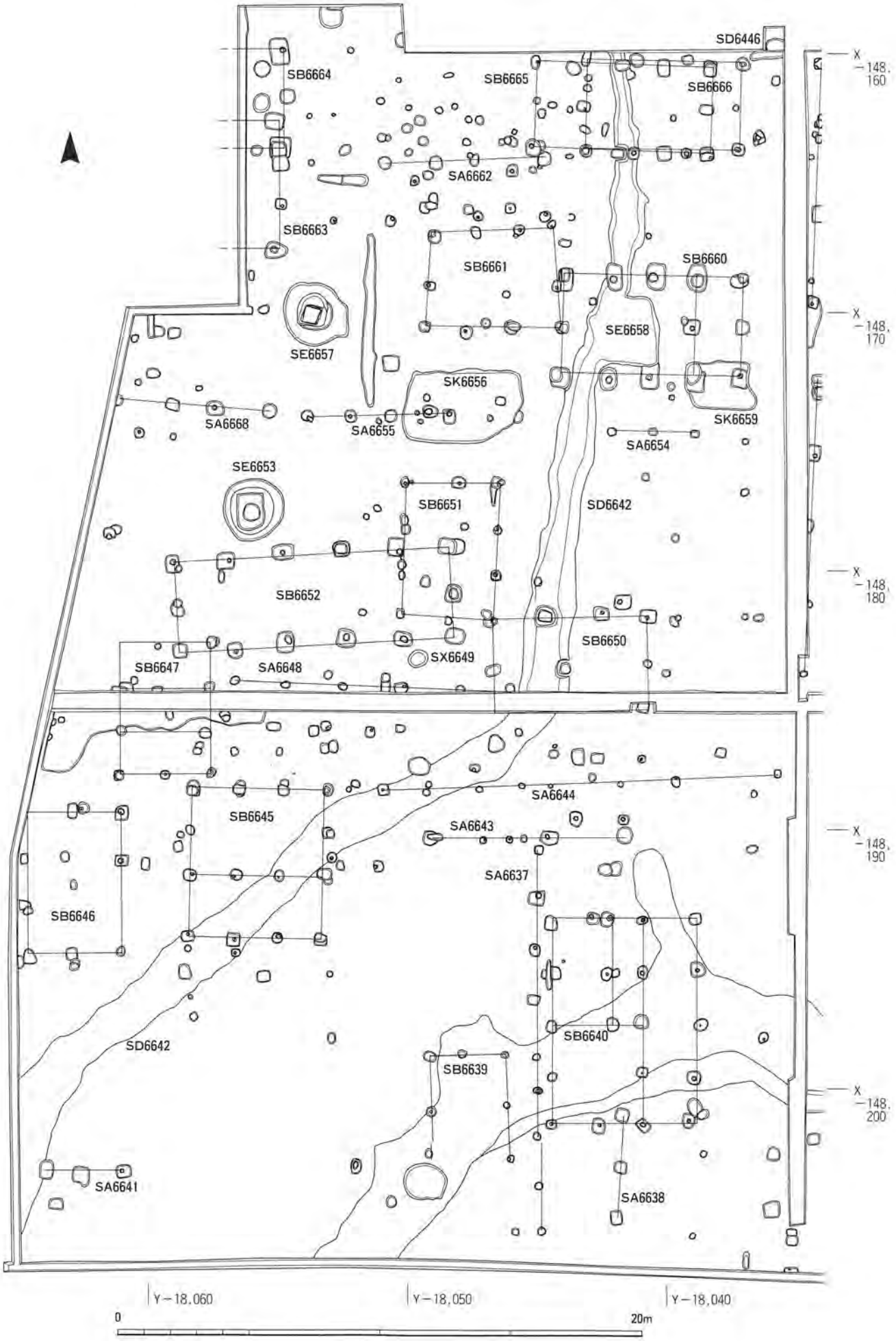

SD6404
SD6403
SX6402
Y−18,020
Y−18,030
Y−18,040
Y−18,050
Y−18,060
X −148,110
X −148,120
0
20m

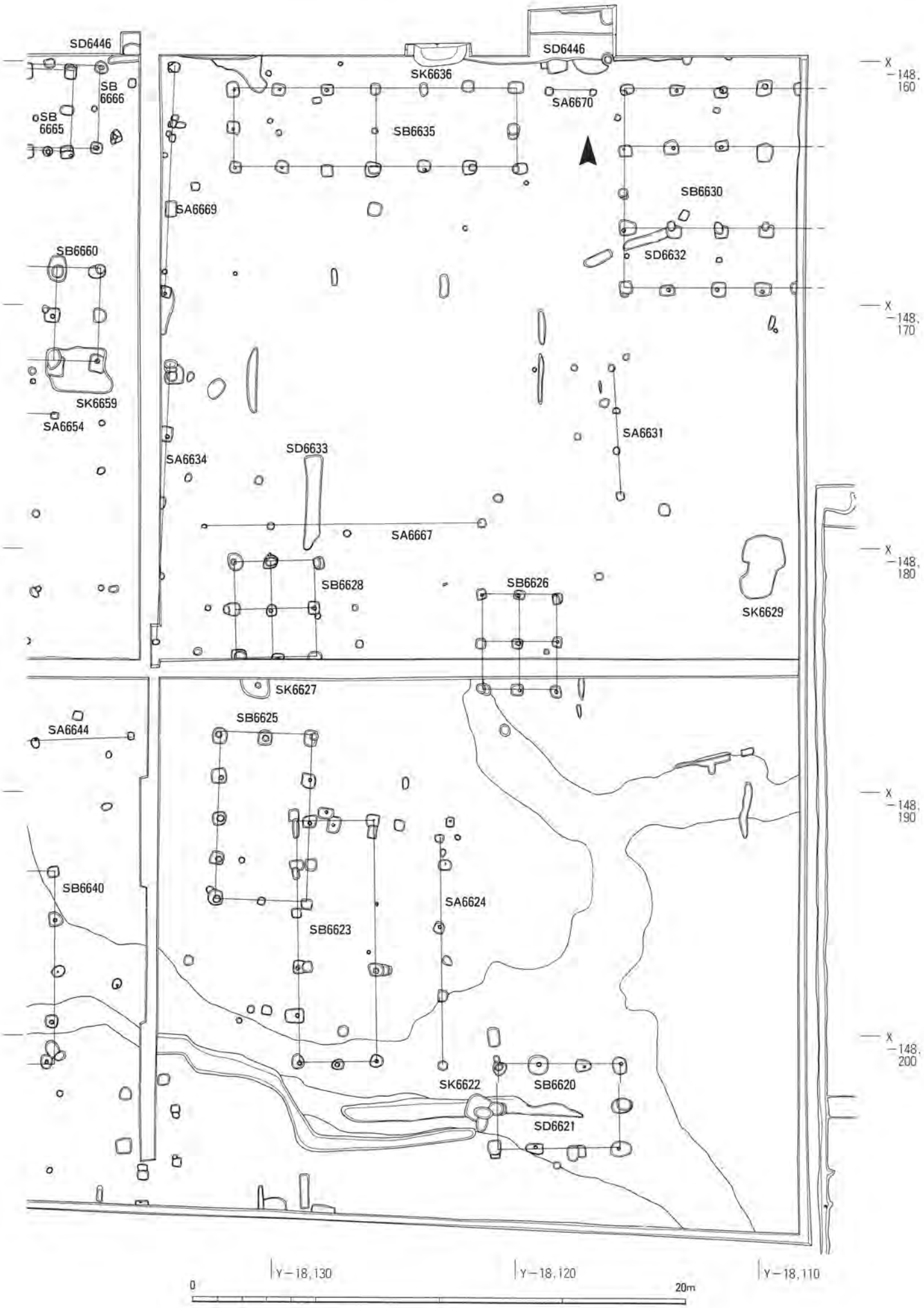
6AHD-A　6AHH-I　六条大路実測図



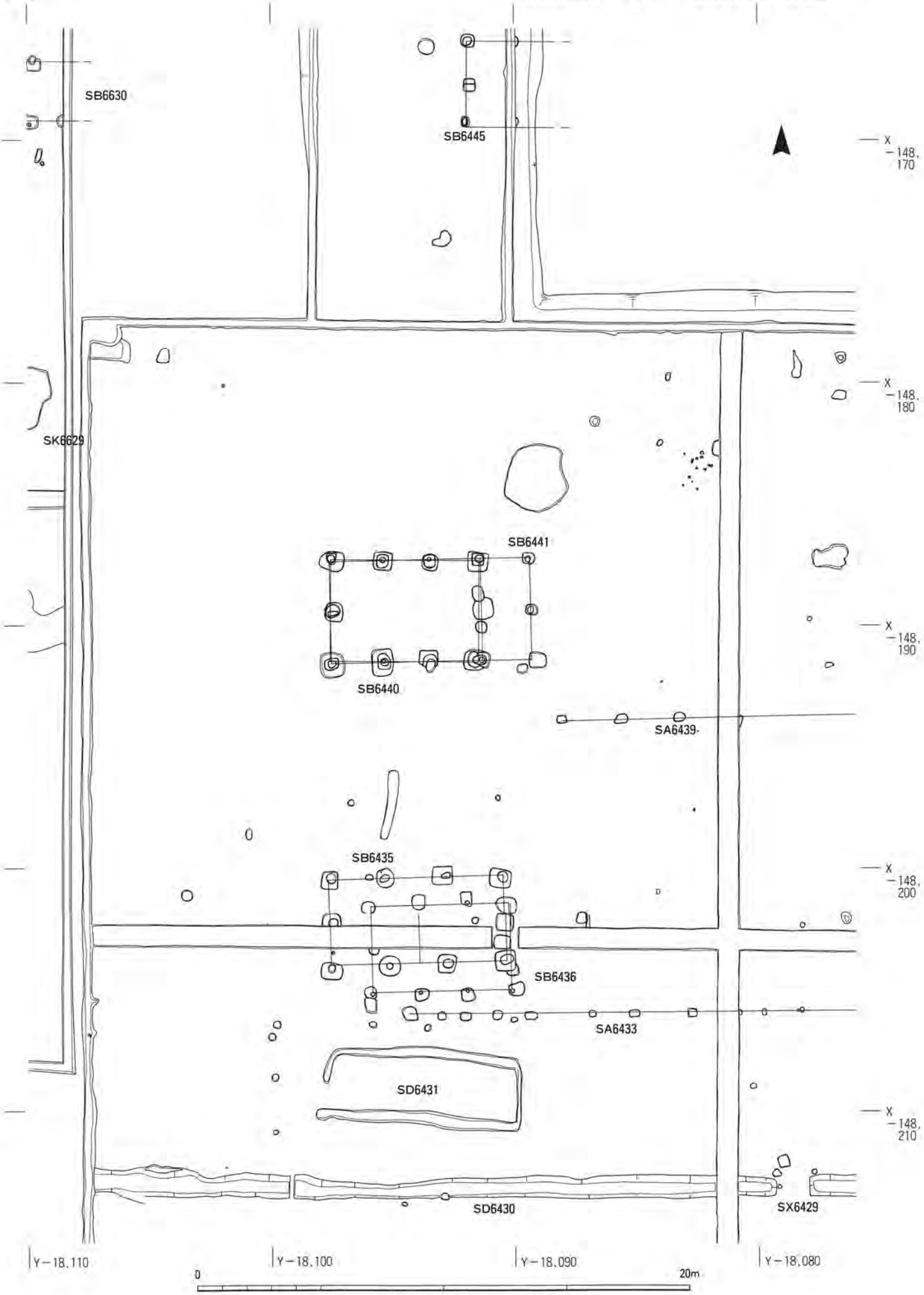

SD6449
SK6423
SD6400
SD6421
X −148.150
X −148.160
X −148.170
Y−18.060
Y−18.050
0
20m

6AHH-H・I 十六坪北西部西半実測図

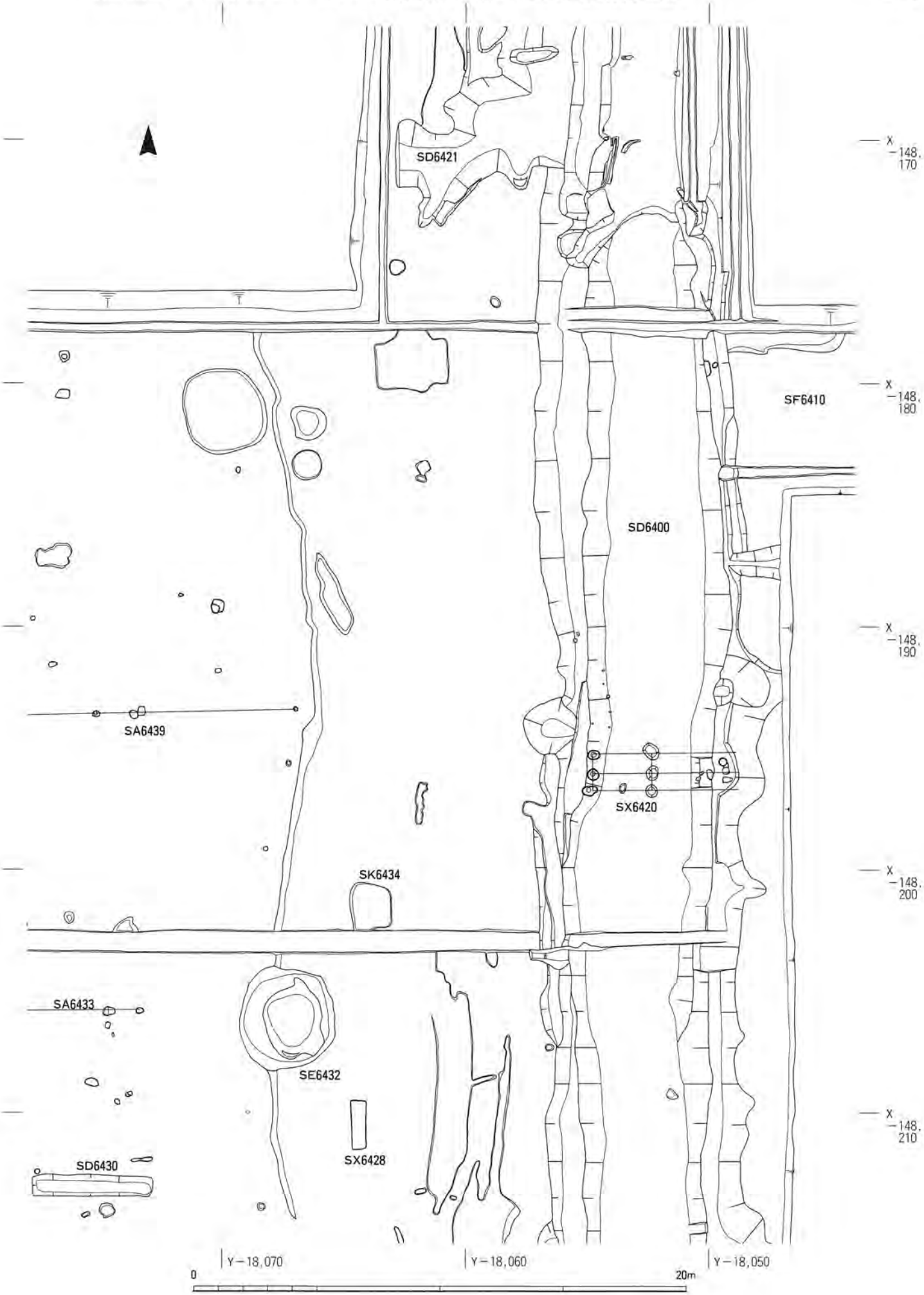



SD6446
SB 6666
SB 6665
SK6636
SD6446
SA6670
SB6635
SB6630
SA6669
SD6632
SB6660
SK6659
SA6654
SA6631
SD6633
SA6634
SA6667
SB6628
SB6626
SK6629
SK6627
SA6644
SB6625
SB6640
SA6624
SB6623
SK6622
SB6620
SD6621
X −148,160
X −148,170
X −148,180
X −148,190
X −148,200
Y−18,130
Y−18,120
Y−18,110
0
20m

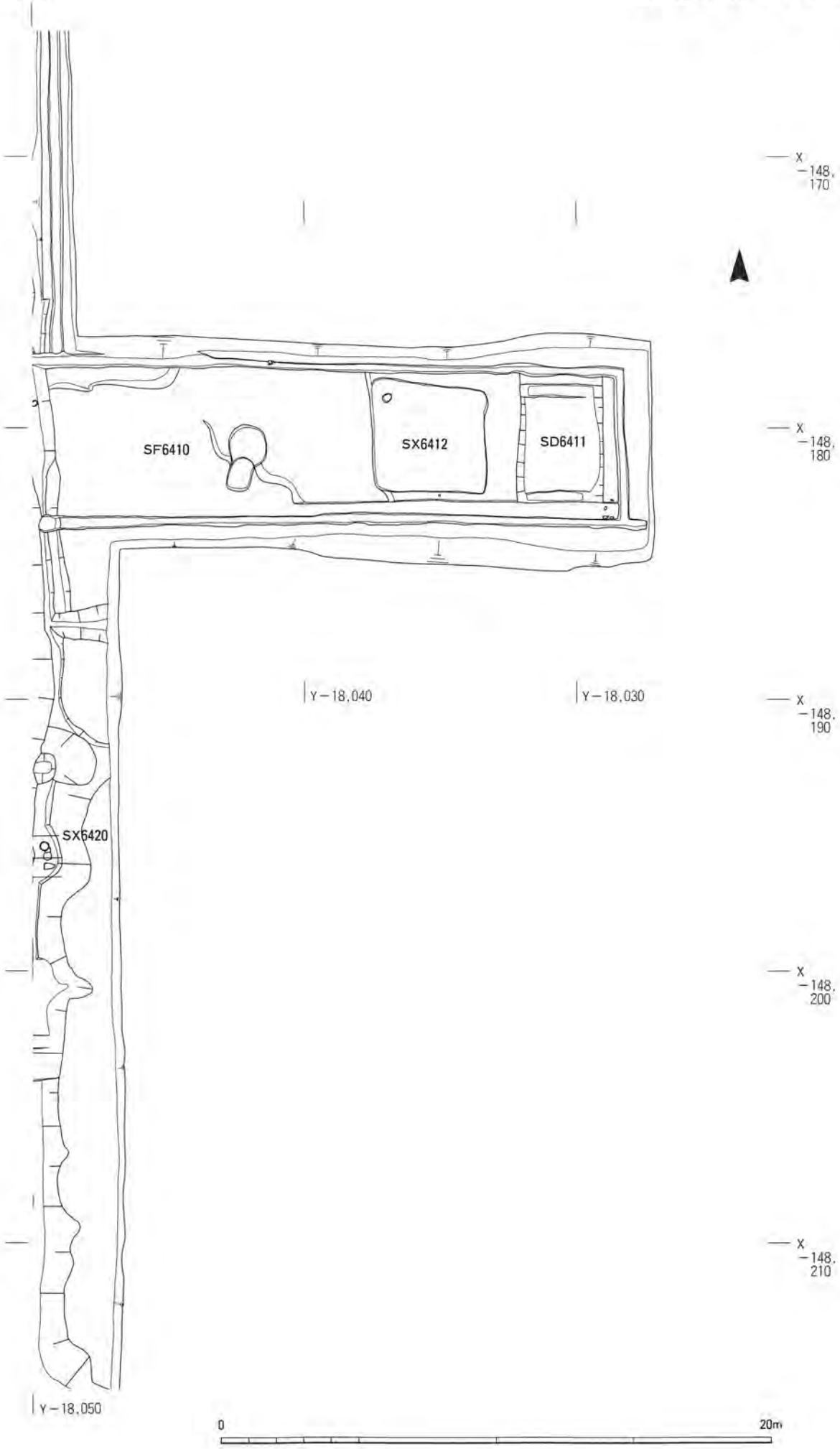
6AHH-H・I　十六坪北東部西半実測図

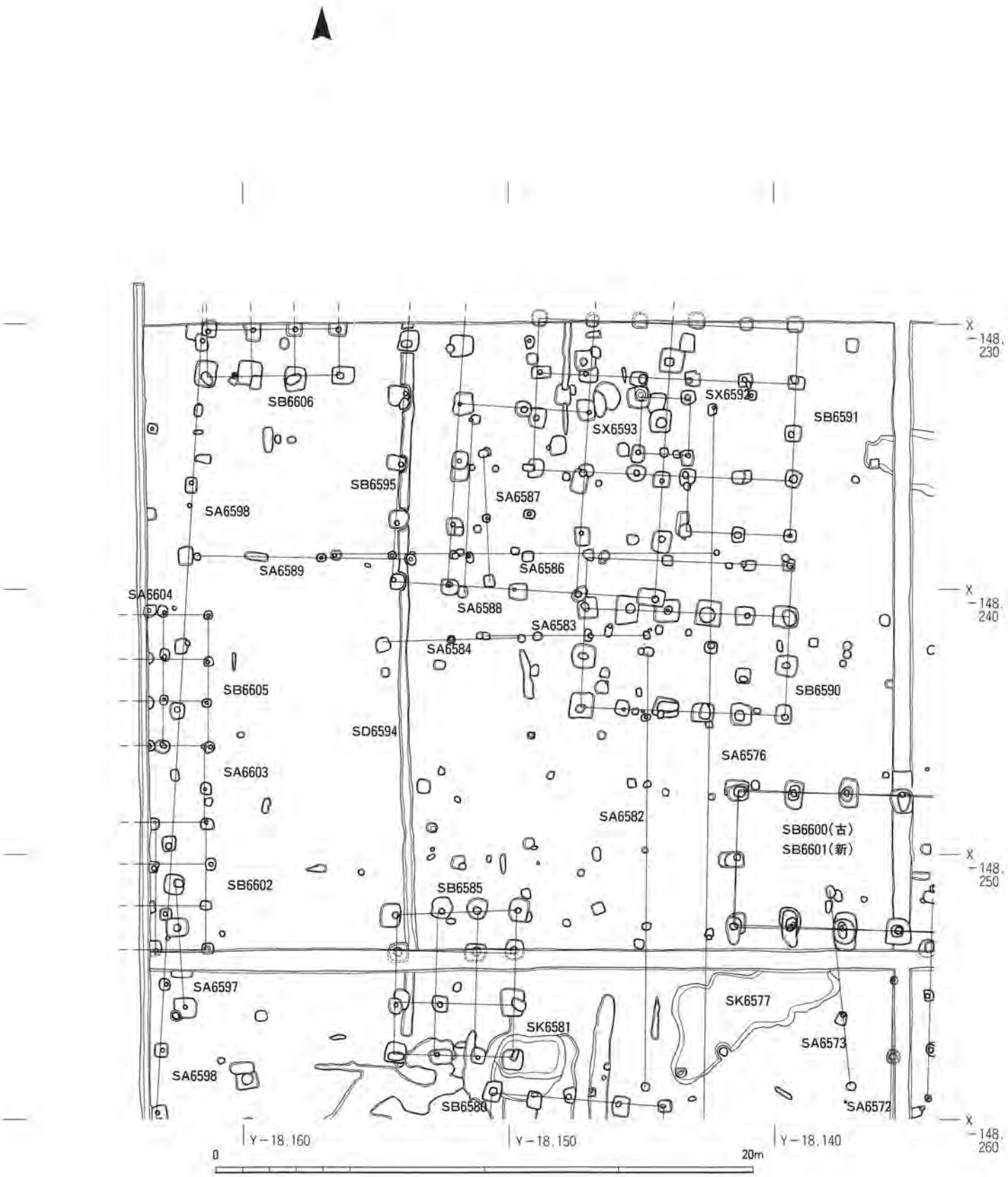


6AHG-Q・R　6AHH-H・I　十六坪北東部東半・東一坊大路西側溝実測図

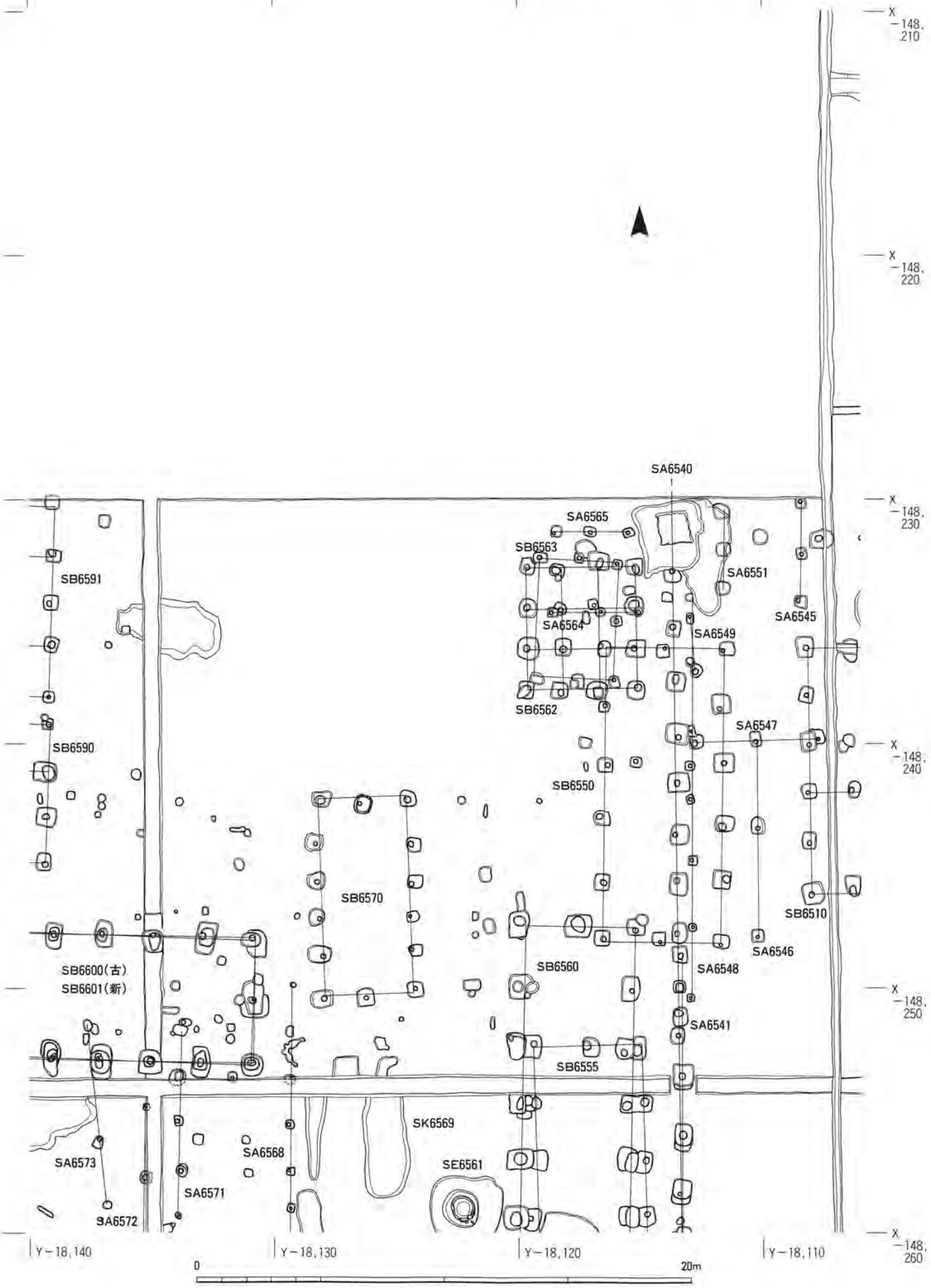


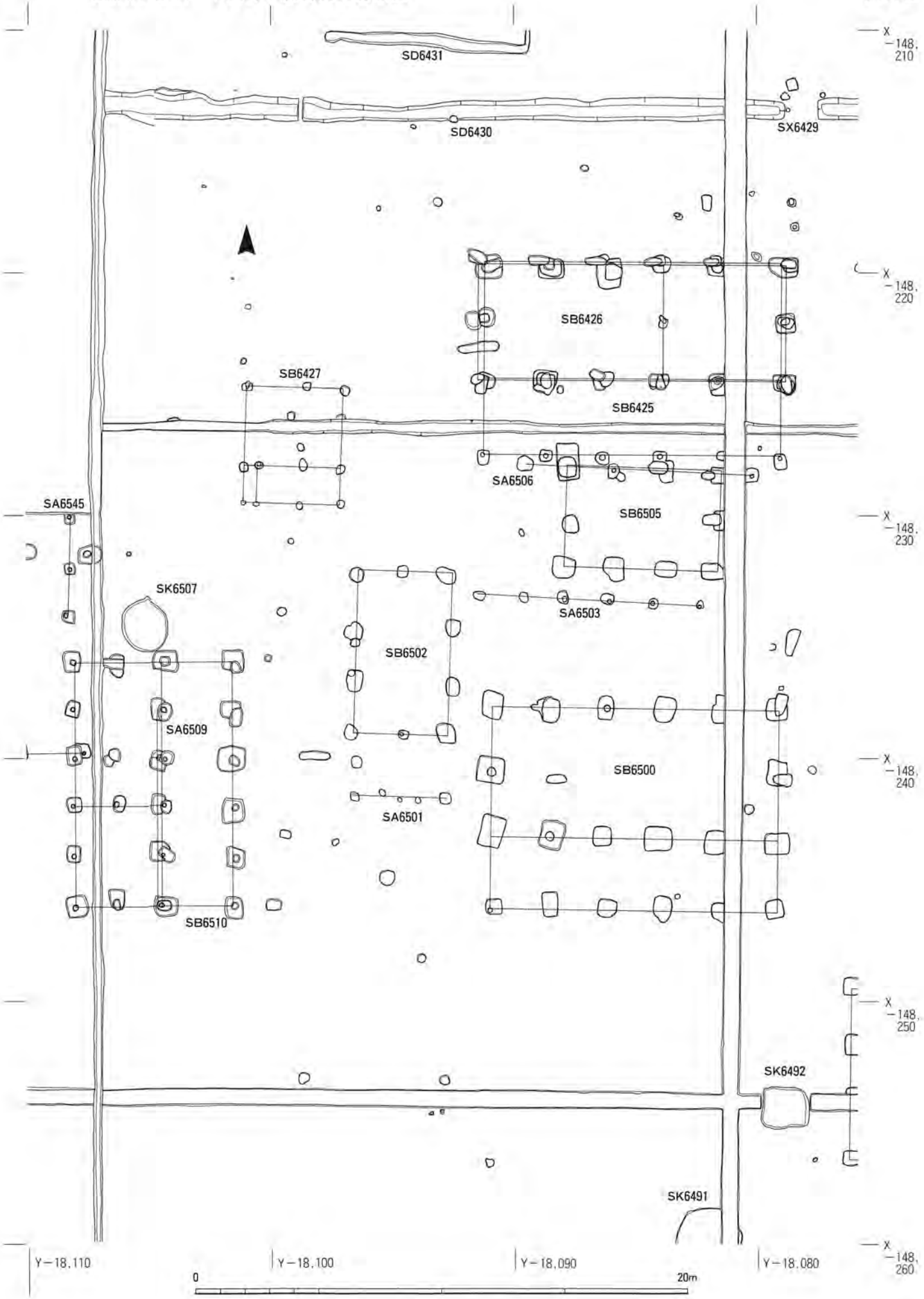
6AHG-Q・R　東一坊大路実測図



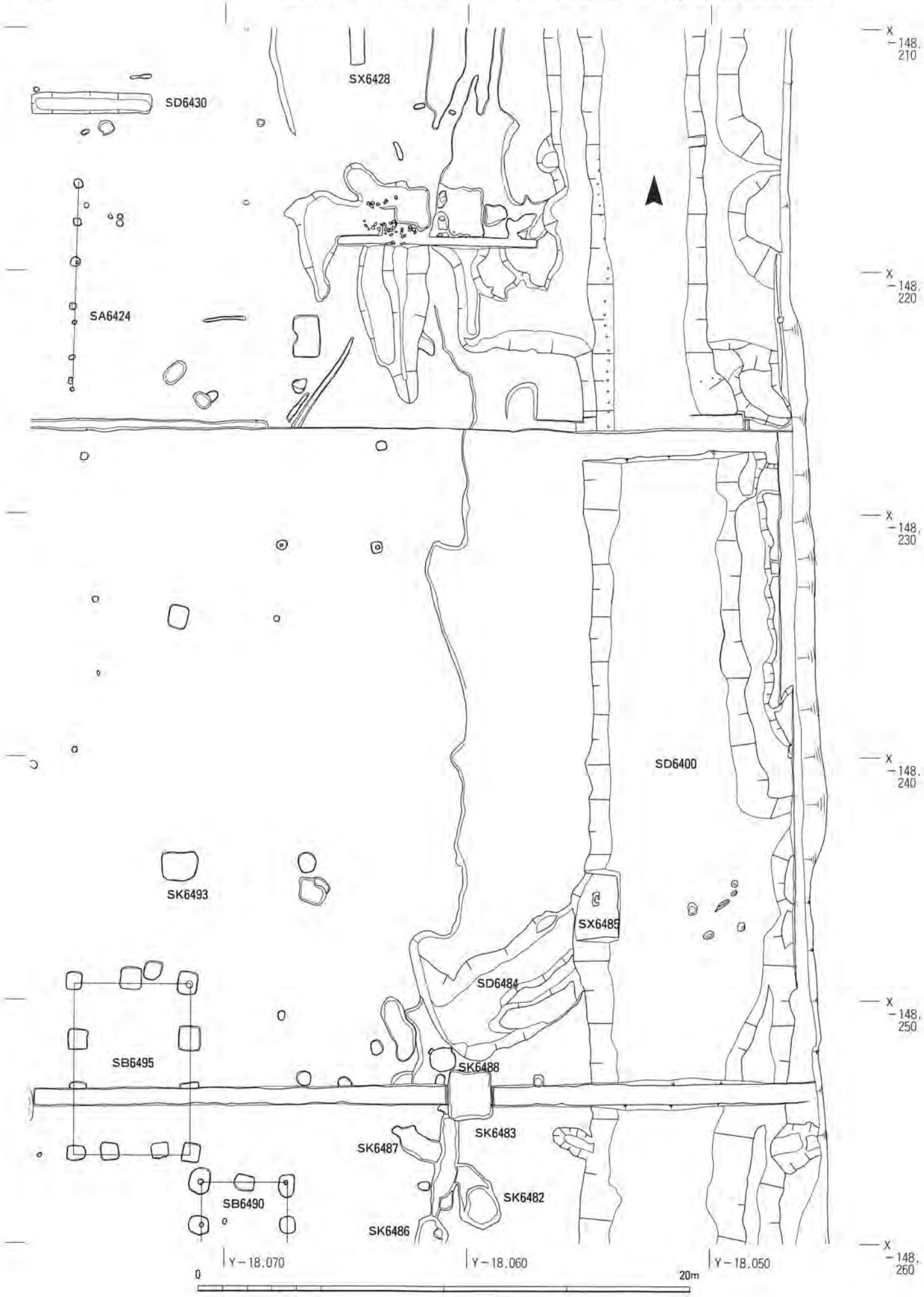

SB6606
SX6592
SX6593
SB6591
SB6595
SA6587
SA6598
SA6589
SA6586
SA6604
SA6588
SA6583
SA6584
SB6605
SB6590
SD6594
SA6576
SA6603
SA6582
SB6600(古)
SB6601(新)
SB6602
SB6585
SA6597
SK6577
SK6581
SA6573
SA6598
SB6580
SA6572
X -148.230
X -148.240
X -148.250
X -148.260
Y-18.160
Y-18.150
Y-18.140
0
20m

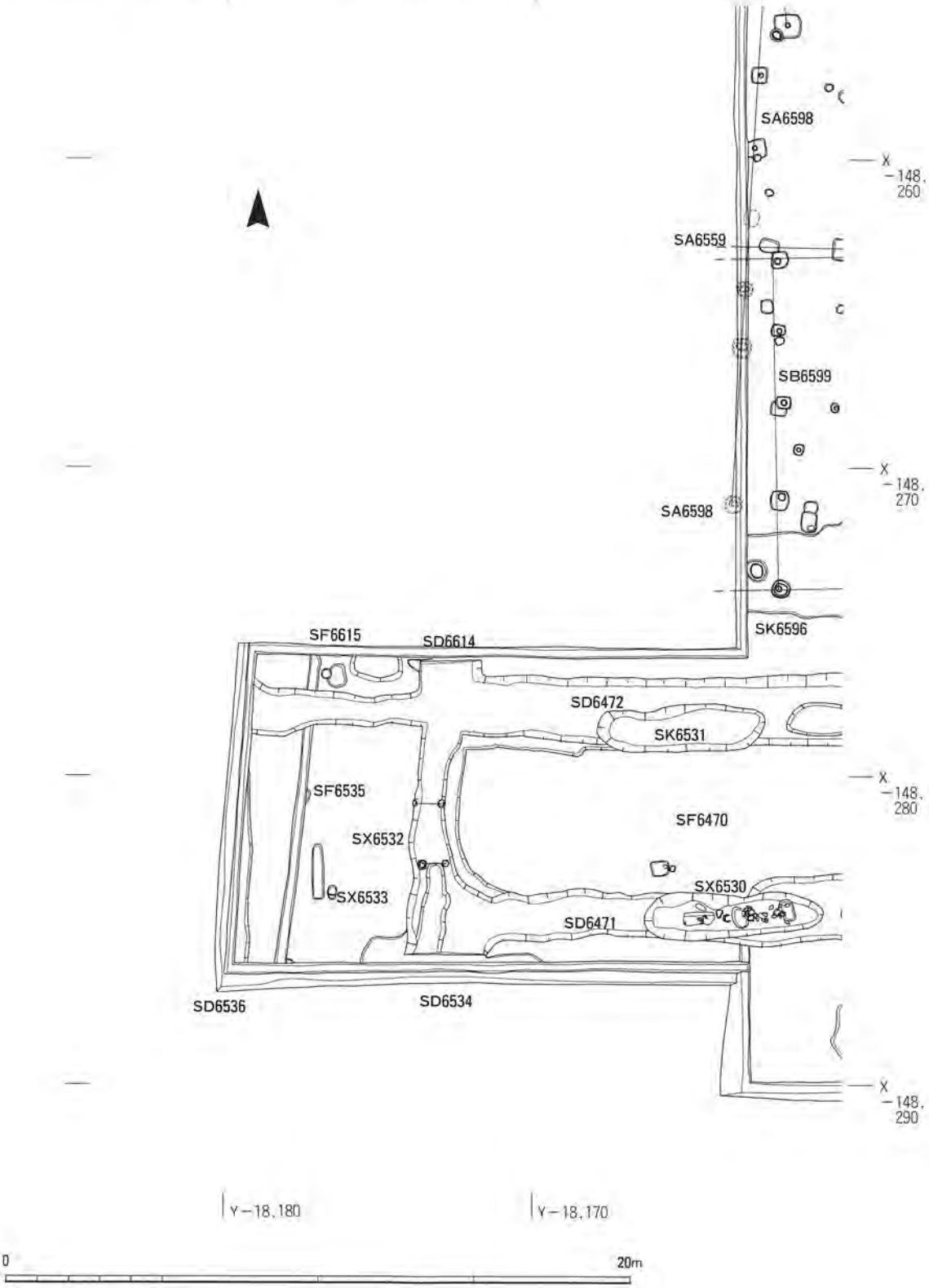
6AHH-G・H　十六坪中央部西半実測図



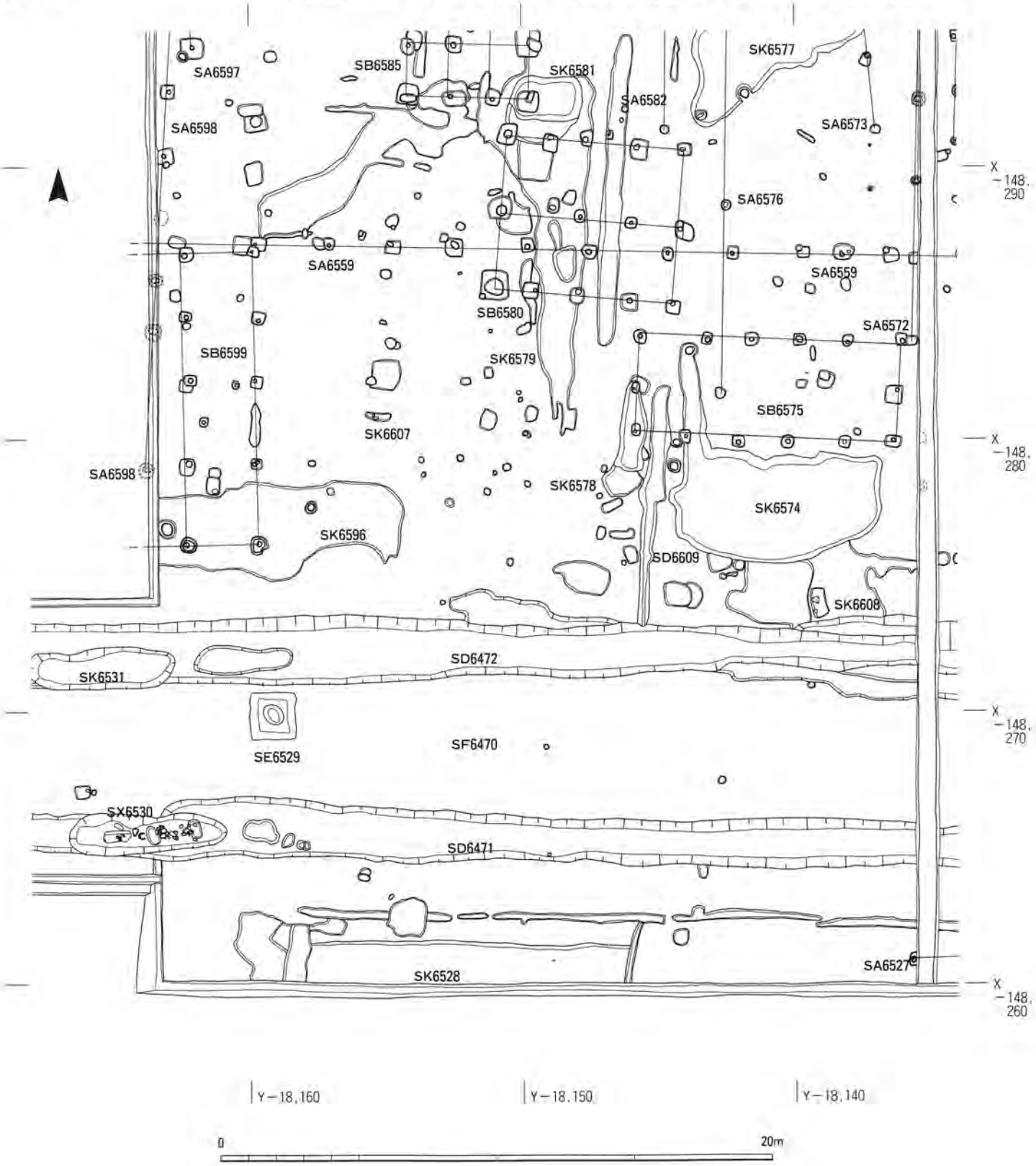

SD6431
SD6430
SX6429
SB6426
SB6427
SB6425
SA6506
SB6505
SA6545
SK6507
SA6503
SB6502
SA6509
SB6500
SA6501
SB6510
SK6492
SK6491
X −148,210
X −148,220
X −148,230
X −148,240
X −148,250
X −148,260
Y−18,110
Y−18,100
Y−18,090
Y−18,080
0
20m

6AHG-P・Q　6AHH-G・H　十六坪東辺部・東一坊大路西側溝実測図

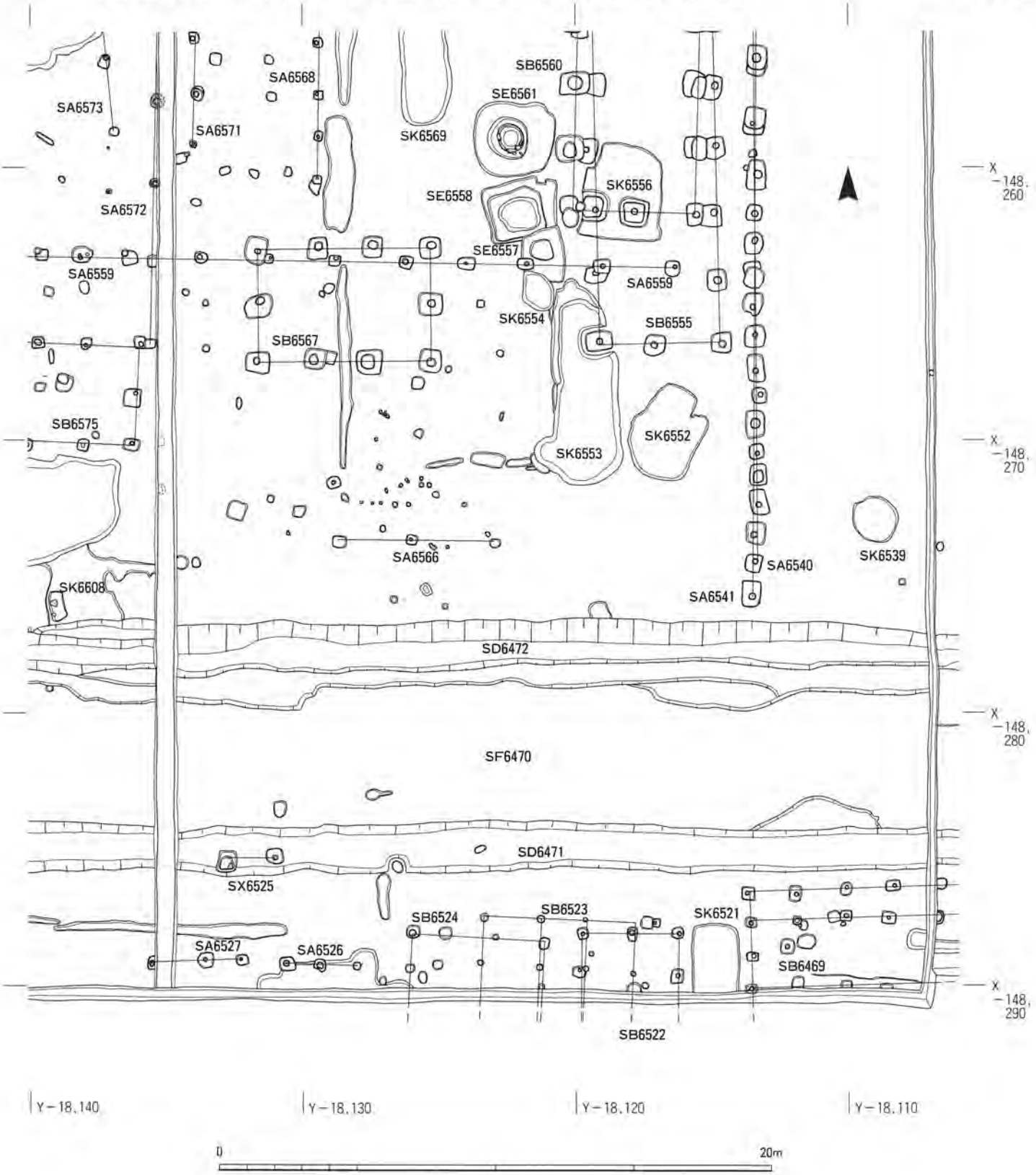



SA6598
X
-148,
260
SA6559
SB6599
X
-148,
270
SA6598
SK6596
SF6615
SD6614
SD6472
SK6531
X
-148,
280
SF6535
SF6470
SX6532
SX6530
SX6533
SD6471
SD6536
SD6534
X
-148,
290
Y-18,180
Y-18,170
0
20m

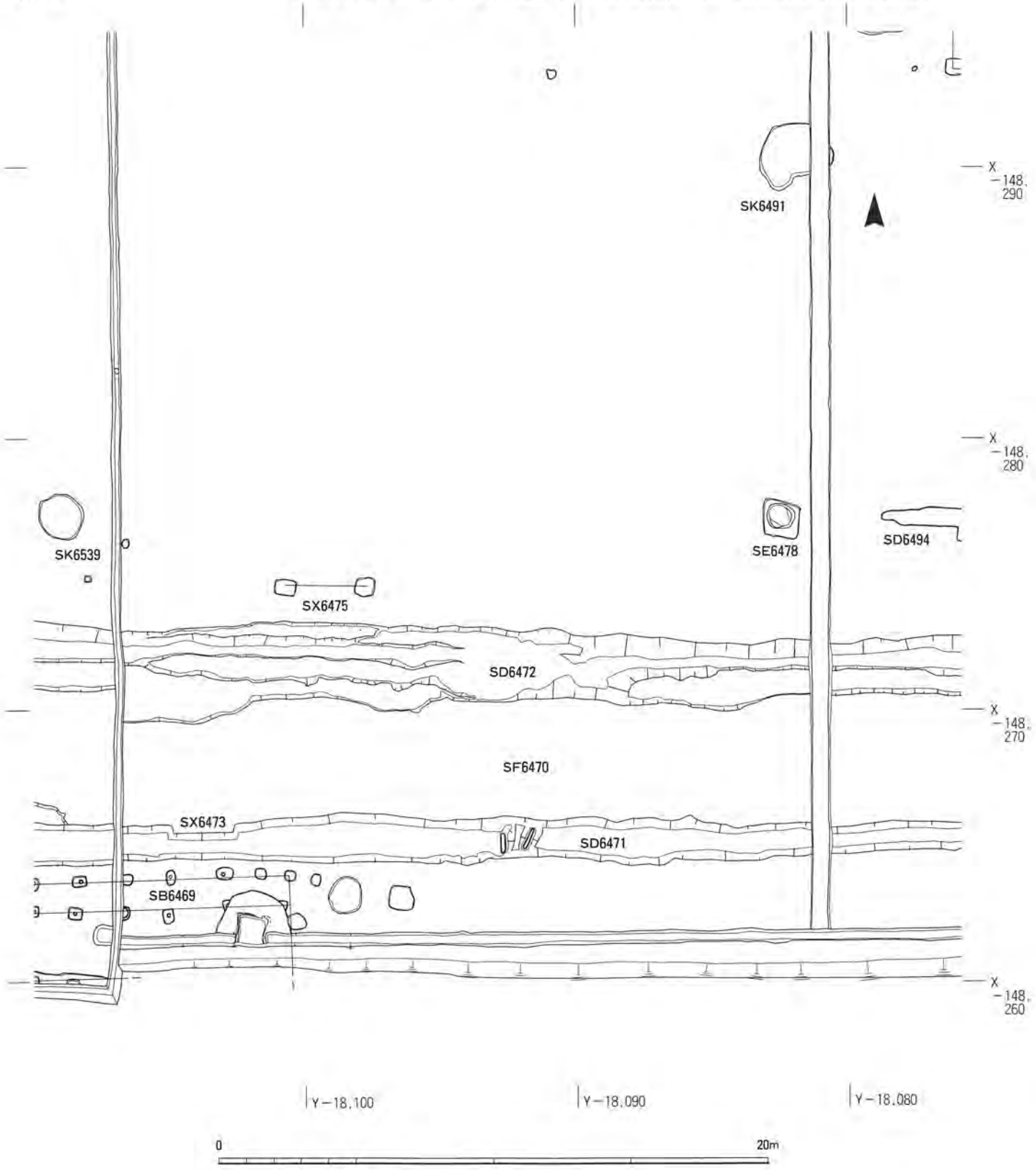
6AHH-G・H　十五坪北辺部・十六坪南西部西半・七条条間北小路実測図



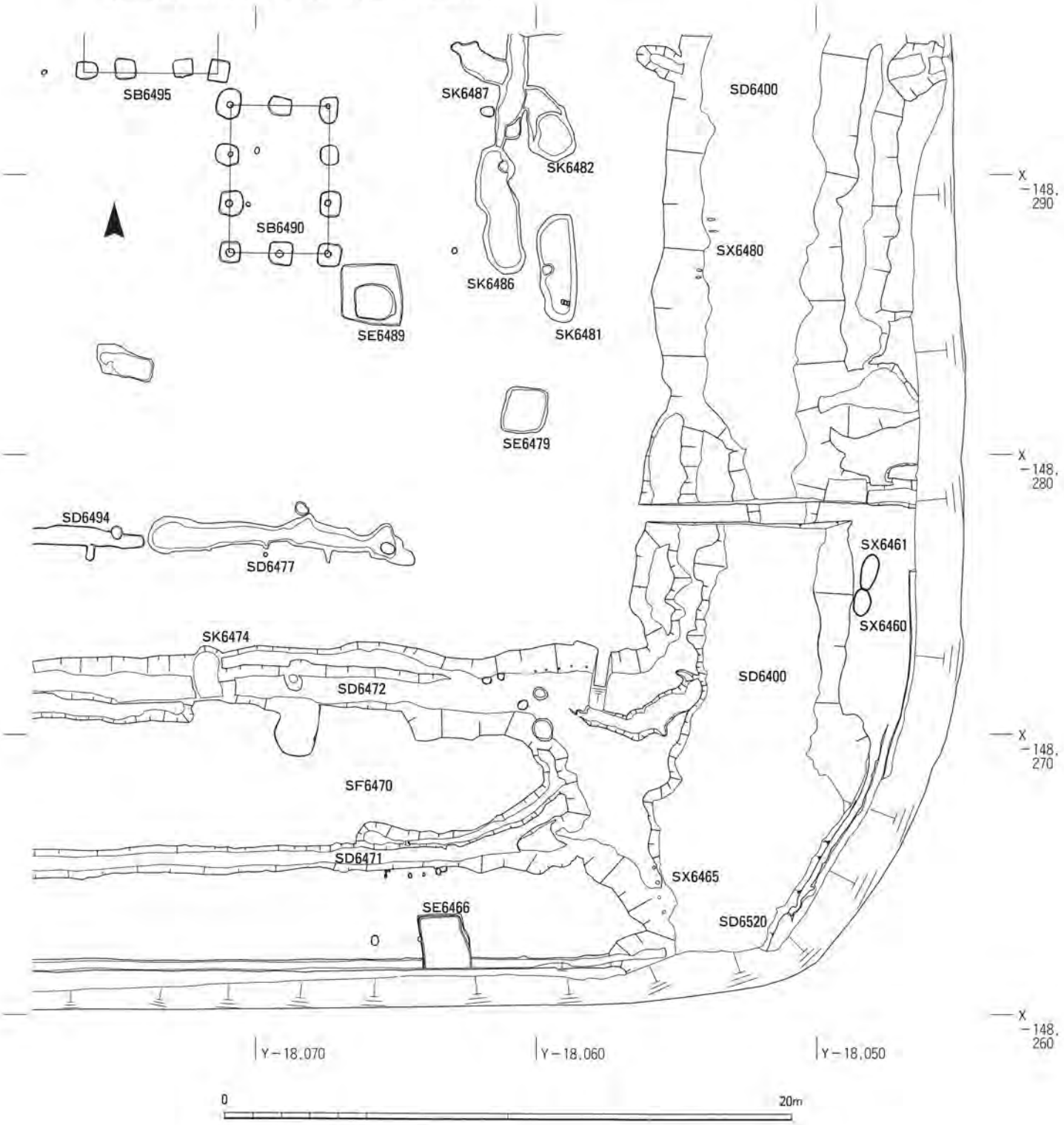
6AHH-G・H　十五坪北辺部・十六坪南西部東半・七条条間北小路実測図



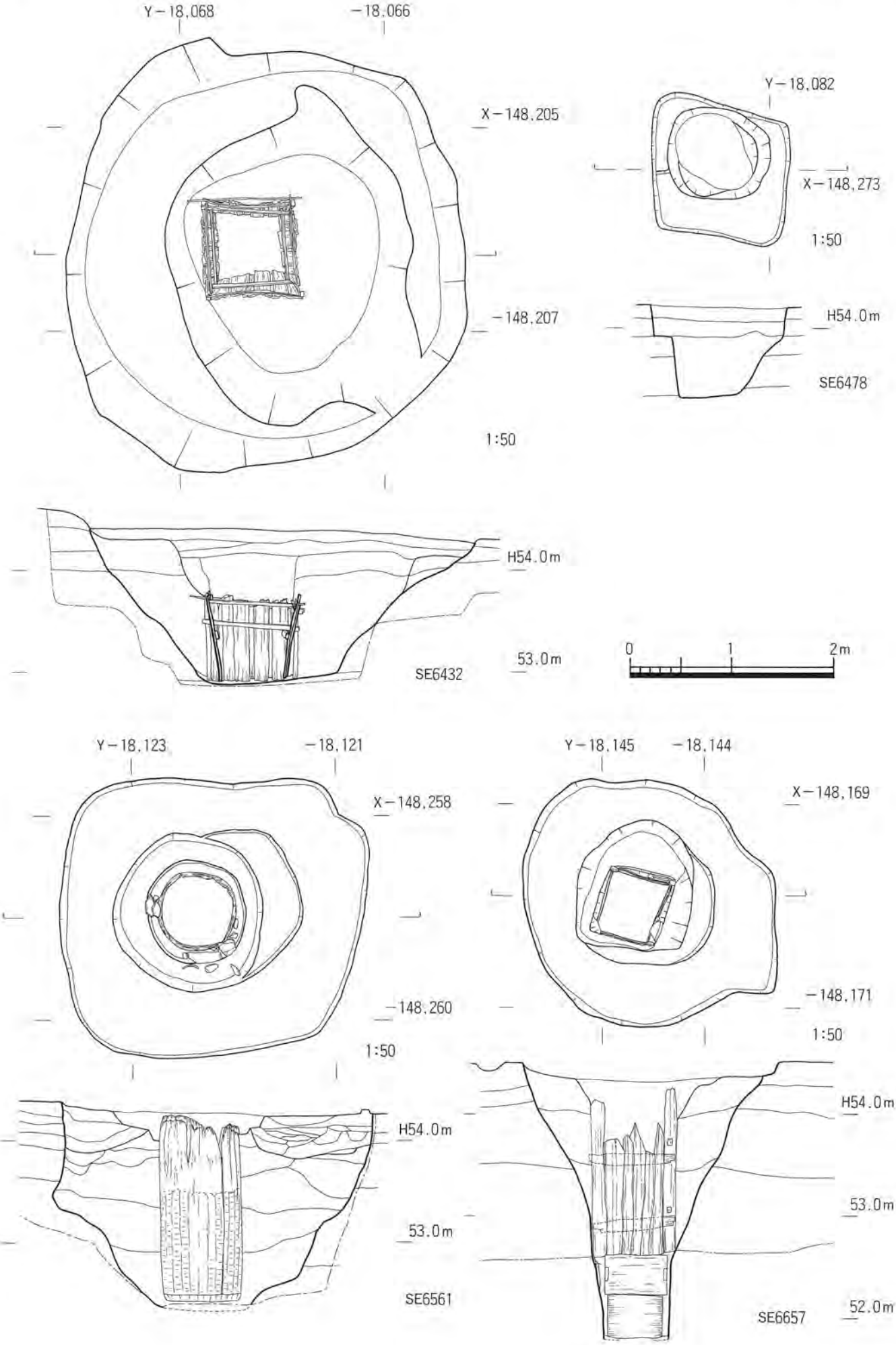
6AHH-G・H　十五坪北辺部・十六坪南東部西半・七条条間北小路実測図



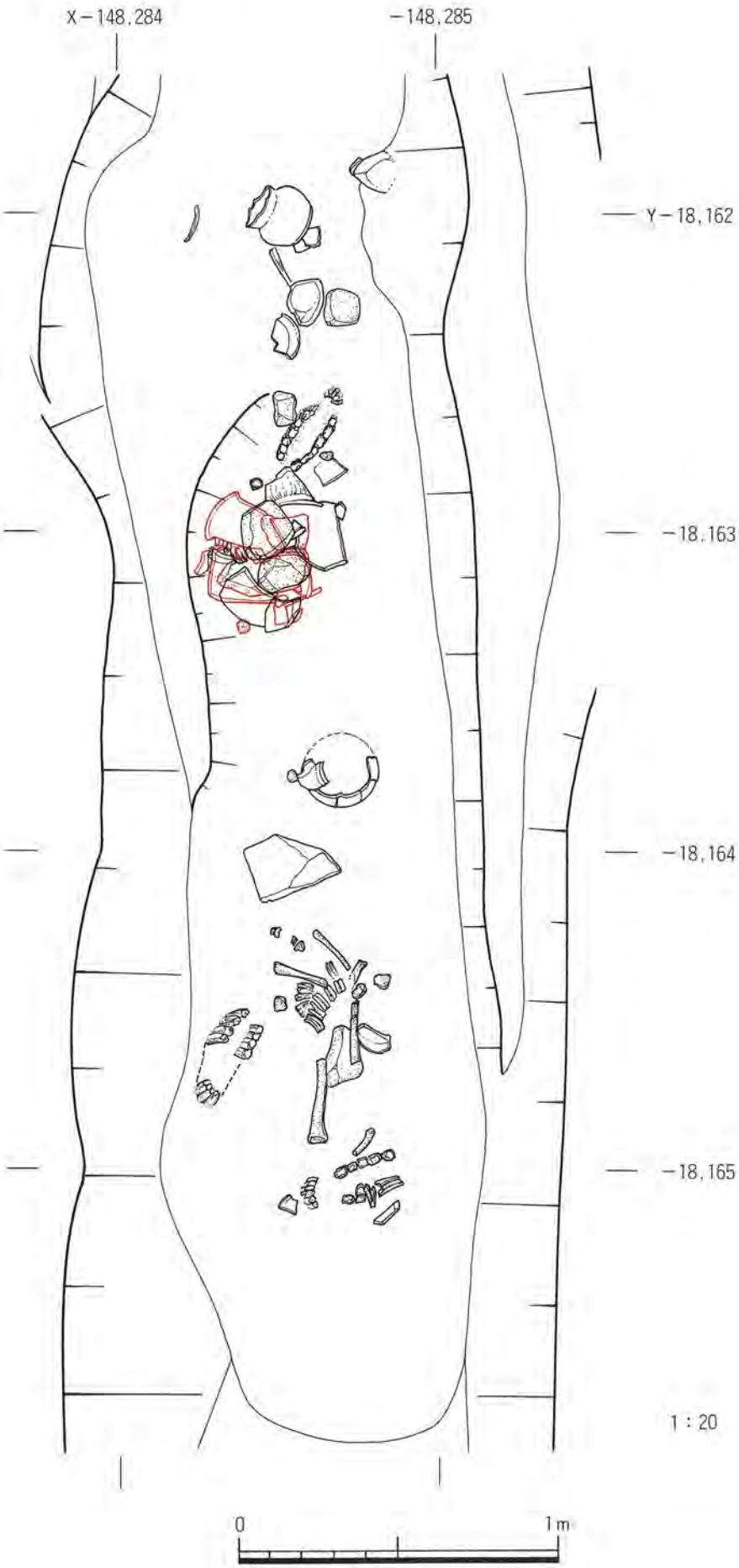
6AHG-O・P　6AHH-G・H　十五坪北辺部・十六坪南東部東半・
東一坊大路西側溝・七条条間北小路実測図

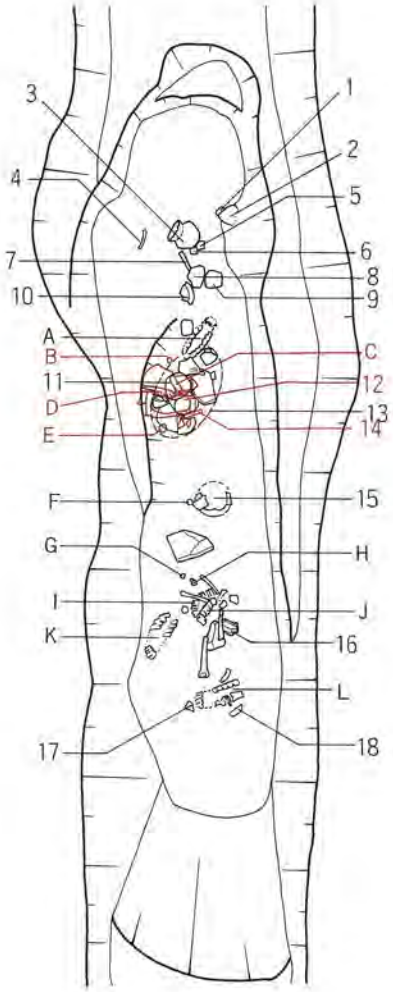


井戸実測図


Y−18.068
−18.066
X−148.205
−148.207
1:50
H54.0m
53.0m
SE6432
Y−18.082
X−148.273
1:50
H54.0m
SE6478
0
1
2m
Y−18.123
−18.121
X−148.258
−148.260
1:50
H54.0m
53.0m
SE6561
Y−18.145
−18.144
X−148.169
−148.171
1:50
H54.0m
53.0m
52.0m
SE6657

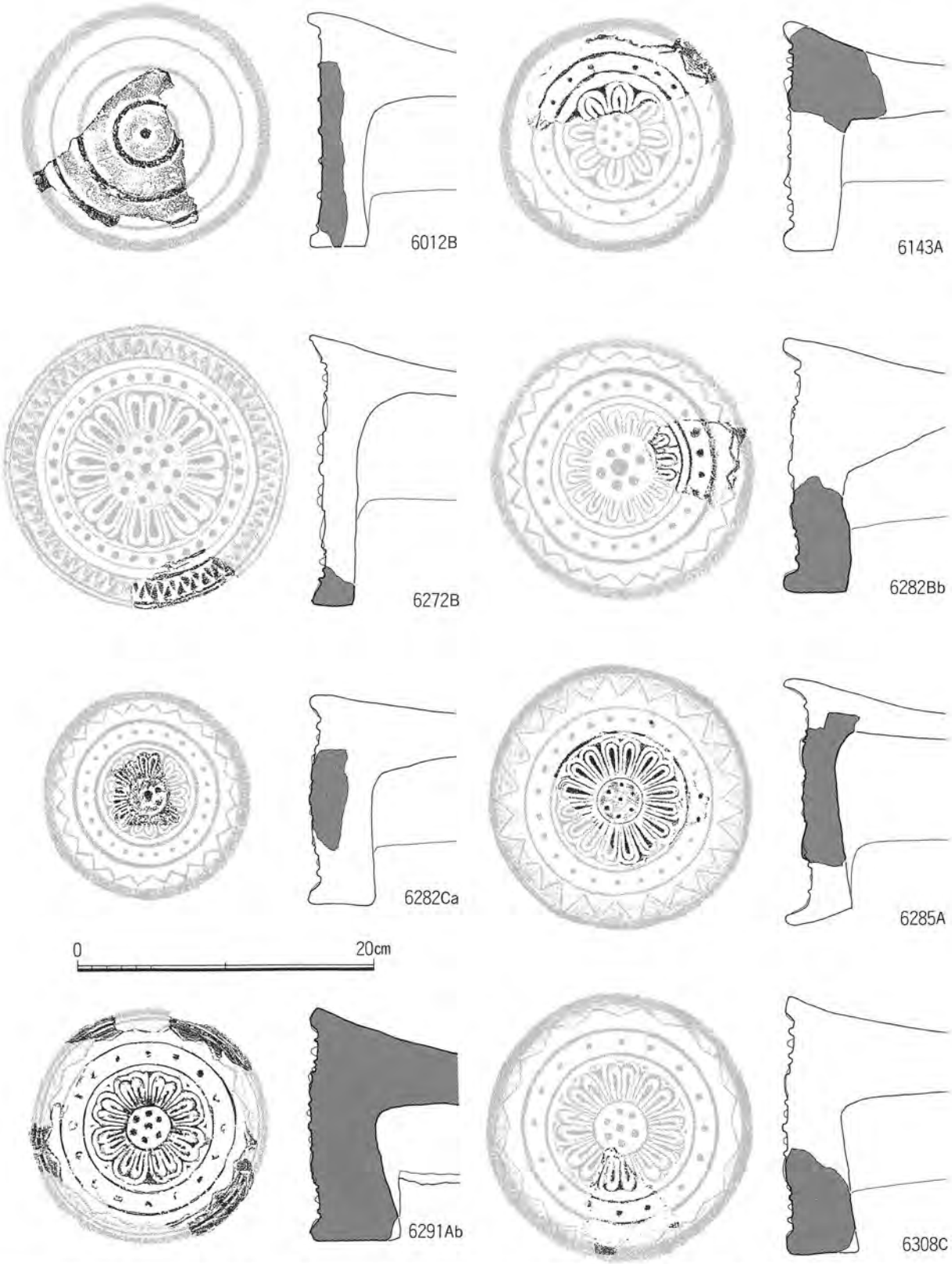
祭祀土坑SX6530実測図



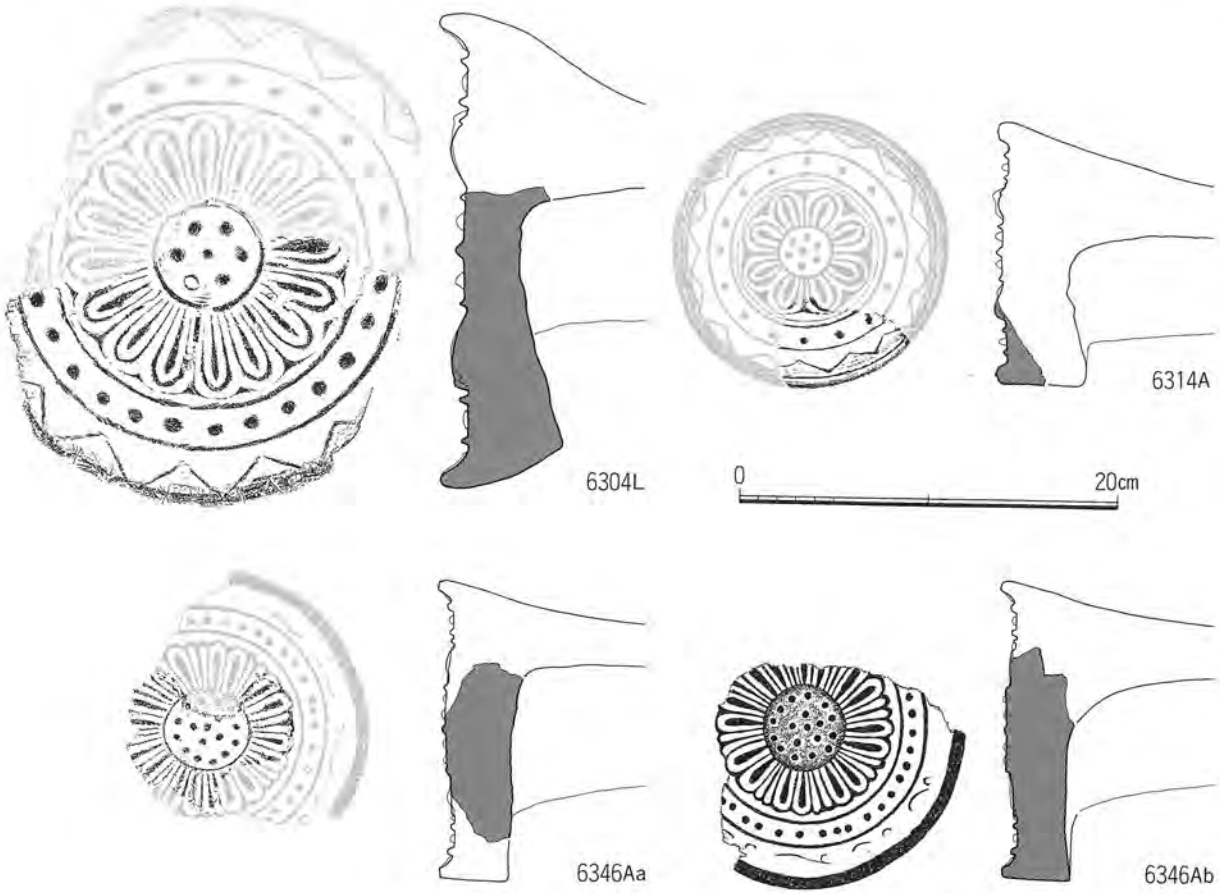


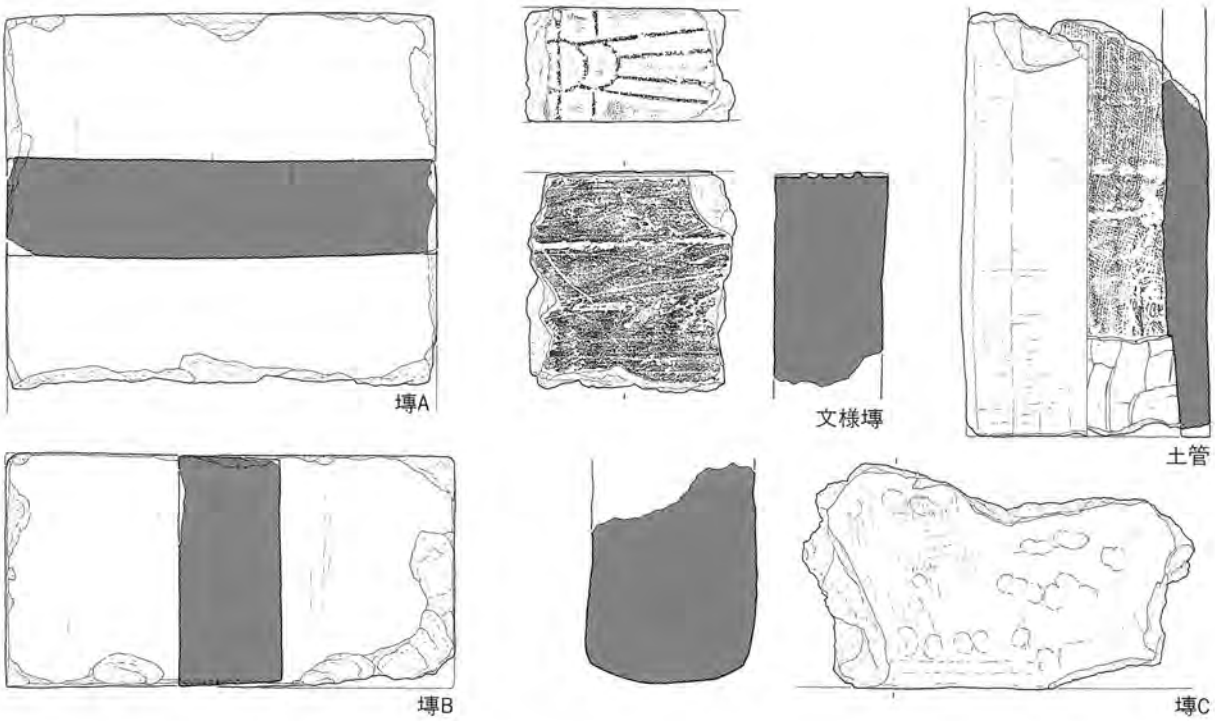
A	下顎	1	須恵器杯 A
B	骨	2	自然石
C	骨	3	須恵器壺 Q
D	歯集合	4	木(松明片)
E	骨	5	須恵器甕
F	上腕骨右遠位	6	須恵器甕
G	指骨	7	木片
H	顎	8	須恵器壺 X (漆運搬具)
I	左下顎	9	自然石
J	右下顎	10	土師器杯 C
K	上顎	11	自然石
L	上顎	12	自然石
		13	土師器甕 C (墨書人面)
		14	箸状木製品
		15	土師器甕 A
		16	土師器杯 B
		17	土師器甕
		18	須恵器杯 B

軒丸瓦実測図1



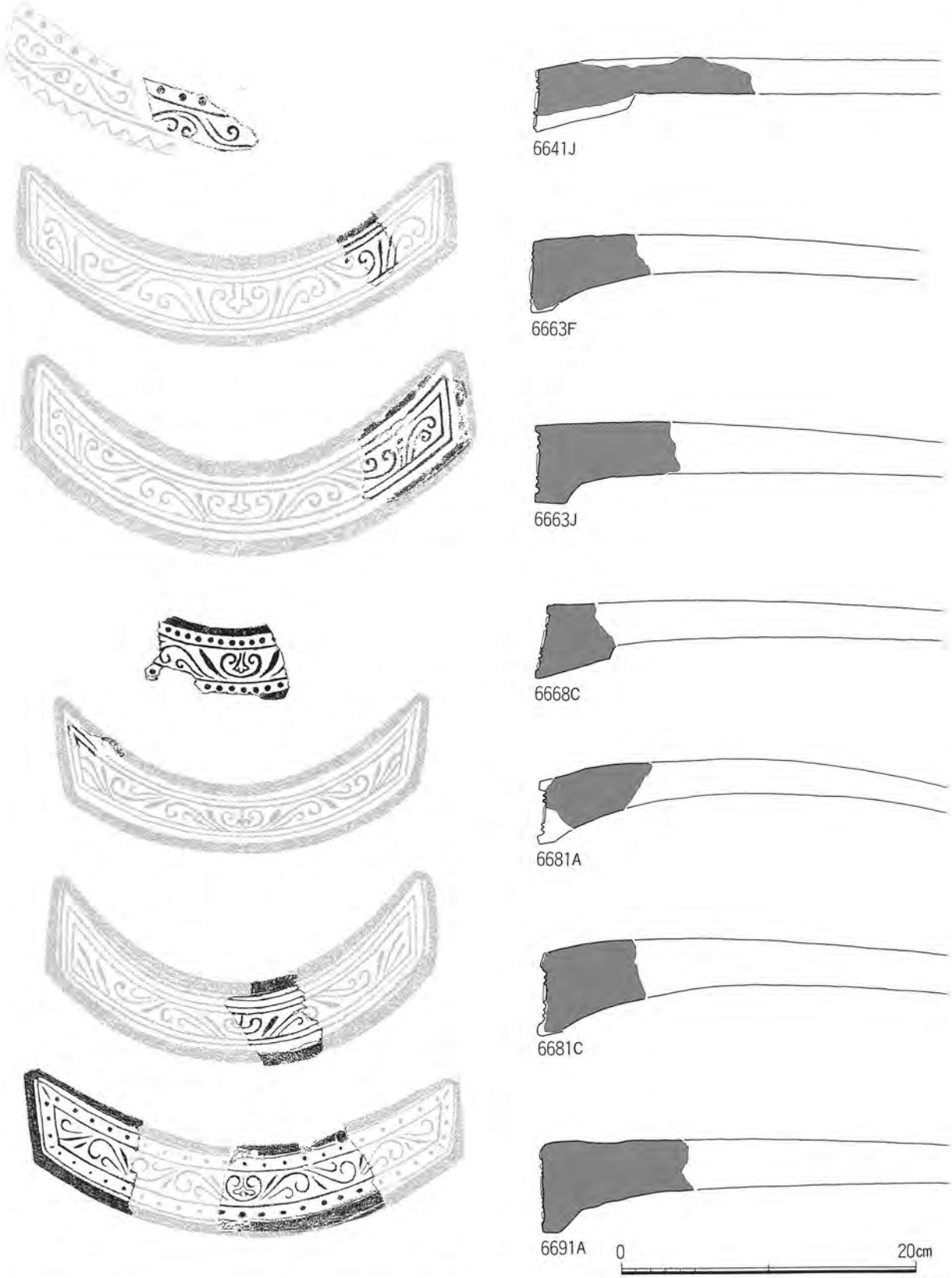
形式・種	直径	内区						外区		外縁				全長	玉縁長
		中房径	圏線	蓮子数	弁区径	弁数	間弁	幅	文様	幅	高さ	文様	形態		
		第一圏径		第二圏径	第三圏径	第四圏径									
6012B	160	42		90	127	139				11	8		傾斜縁Ⅰ		
6143A	155	33	あり	1+6	87	T8	B	12	S18	20	8	LV	傾斜縁Ⅰ		
6272B	185	54	なし	1+4+8	113	F8	A	11	S33	26	10	MV58	三角縁		
6282Bb	167	43	あり	1+6	90	F8	B	16	S24	23	10	LV24	傾斜縁Ⅰ		
6282Ca	138	28	あり	1+6	69	F8	B	17	S24	21	10	LV24	傾斜縁Ⅲ		
6285A	161	31	あり	1+6	89	F8	B	17	S23	19	15	LV22	傾斜縁Ⅱ	371	54
6291Ab	154	29	あり	1+6	85	F8	B	14	S16	21	6	LV16	傾斜縁Ⅲ		
6308C	174	35	あり	1+6	96	F8	A	16	S16	23	7	LV	傾斜縁Ⅰ		



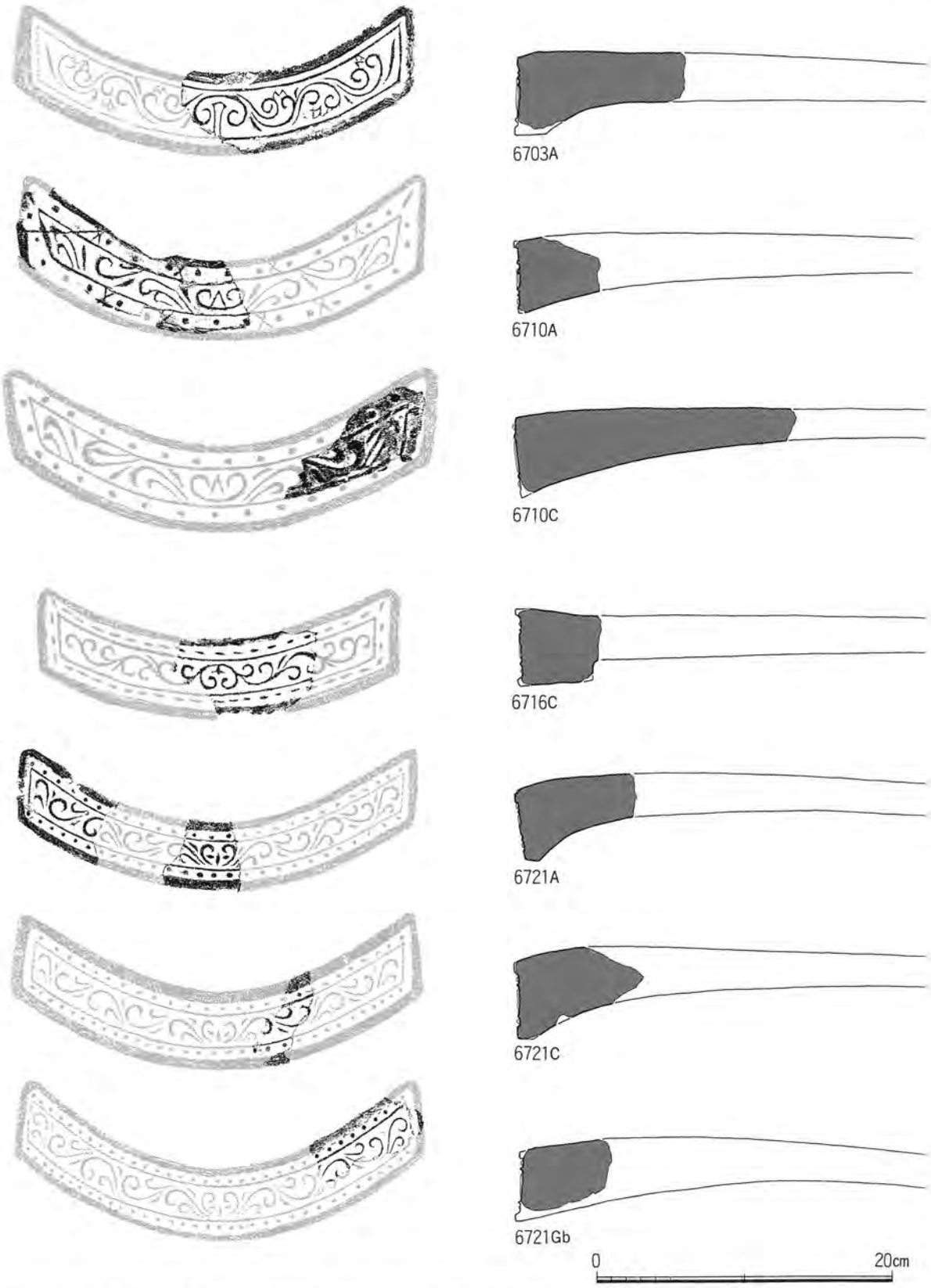


形式・種	直径	内区						外区		外縁				全長	玉縁長
		中房径	圏線	蓮子数	弁区径	弁数	間弁	幅	文様	幅	高さ	文様	形態		
6304L	248	55	あり	1+6	163	F8	B	20	S27	20	15	LV17	傾斜縁Ⅲ		
6314A	134	28	あり	1+6	78	F4	B	12	S16	12	5	LV16	直立縁	364	52
6346Aa		44	あり	1+5+12		F8	A		S			唐草	傾斜縁Ⅰ		
6346Ab	157	43	あり	1+5+12	102	F8	A	13	S	13	7	唐草	傾斜縁Ⅰ		

軒平瓦実測図1

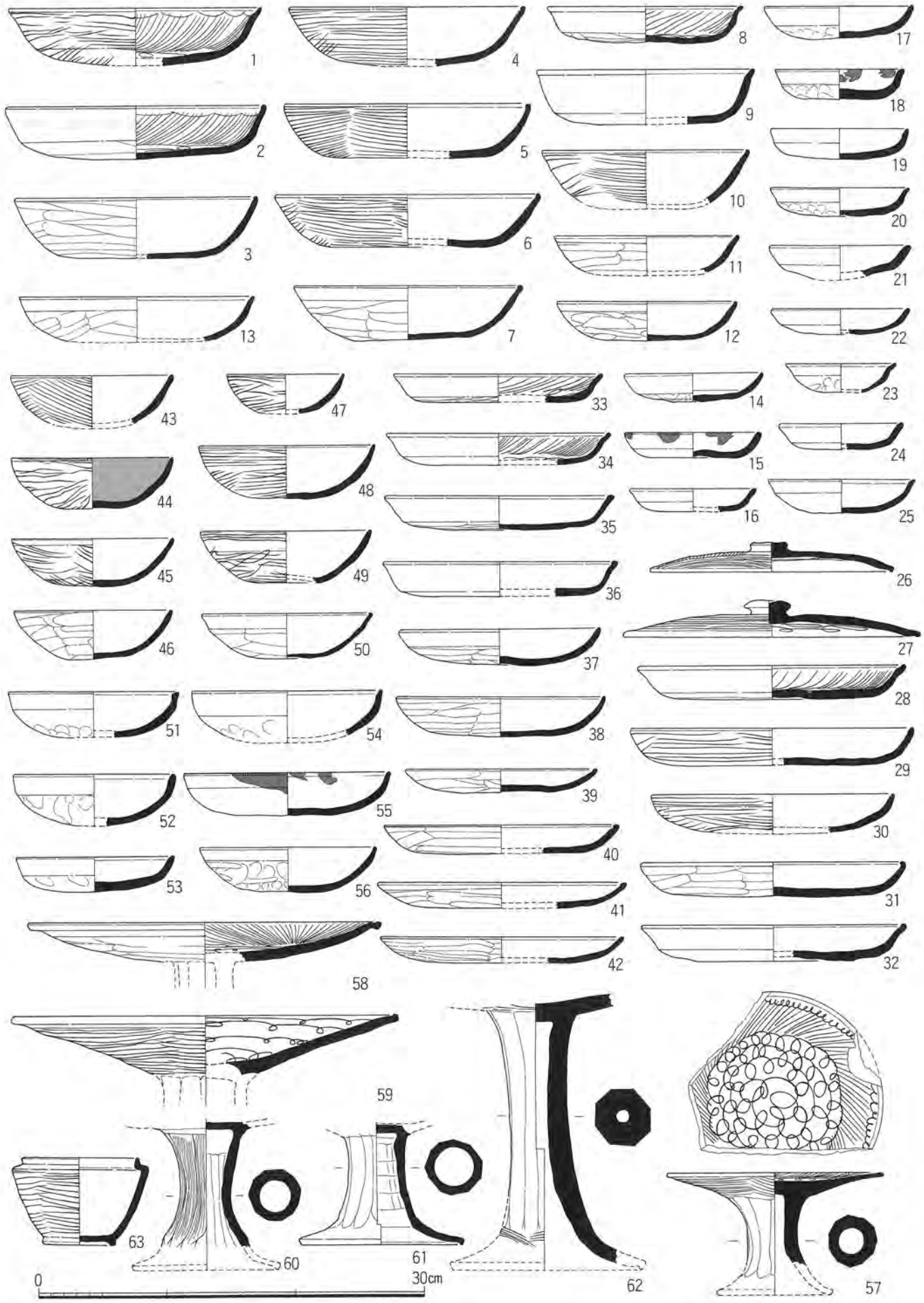


形式・種	最大幅	厚さ	内区		上外区		下外区		脇区		顎形態	全長
			厚	文様	厚	文様	厚	文様	厚	文様		
6641J		43	21	HK	10	S	11	LV	−	−	段	
6663F	280	40	23	KK	8	K	10	K	8	K	曲II	
6663J		40	23	KK	9	K	12	K	10	K	曲II	
6668C		37	23	KK	8	S	8	S		S	段	
6681A	232	28	16	KK	5	K	5	K	7	K	曲I	
6681C	240	31	17	KK	6	K	6	K	10	K	曲I	
6691A	265	39	23	KK	7	S21	8	S21	7	S3	曲II	344

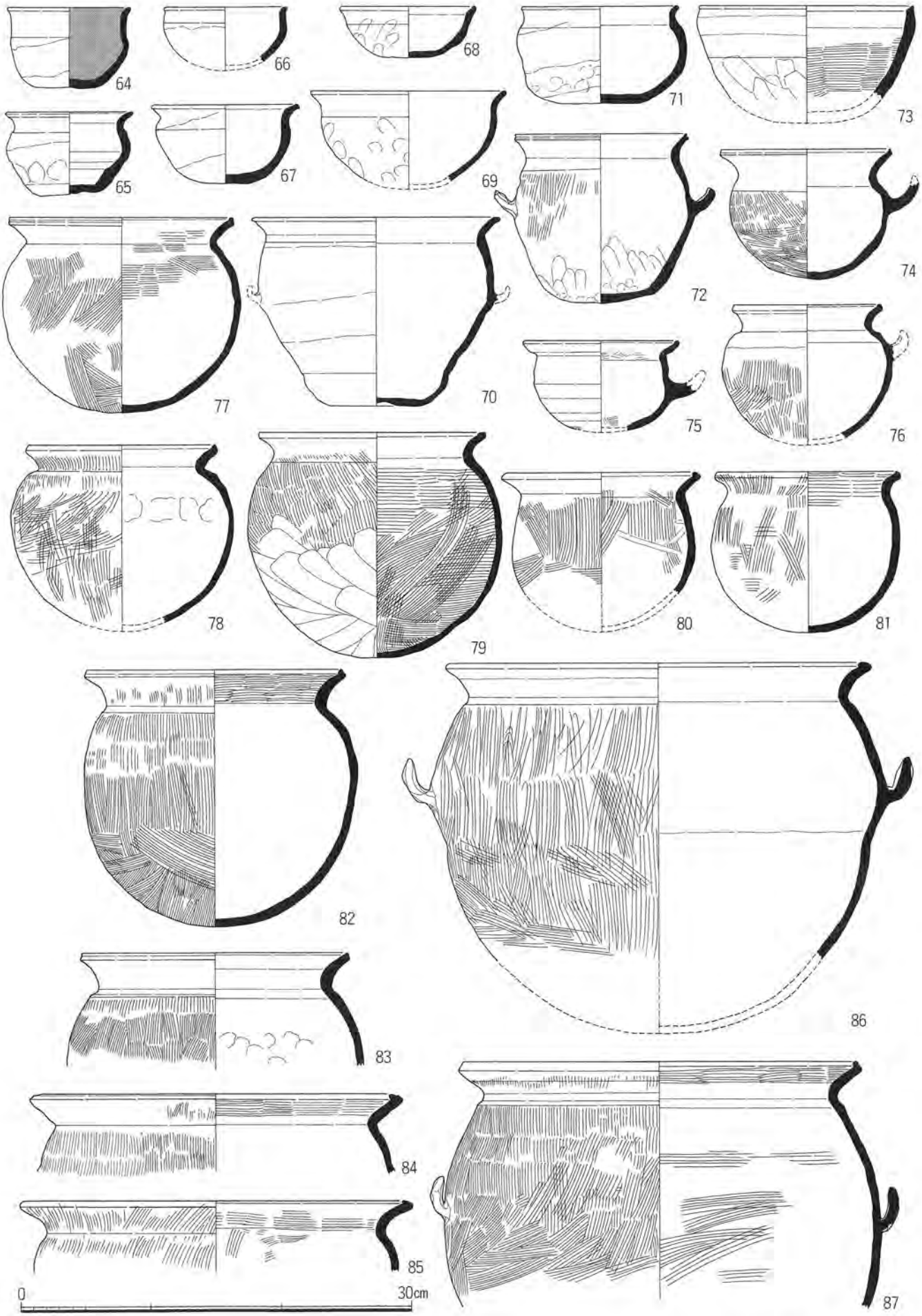


形式・種	最大幅	厚さ	内区		上外区		下外区		脇区		顎形態	全長
			厚	文様	厚	文様	厚	文様	厚	文様		
6703A	270	51	31	KK	9	−	12	−	2	−	曲II	
6710A	263	41	22	KK	8	S13 X4	10	S11 X4	13	S2	直	344
6710C	270	43	25	KK	9	S13	9	S11	10	S3	直	355
6716C	228	44	41	KK	8	GS18	8	GS19	8	GS4	段	
6721A	256	33	20	KK	6	S26	6	S27	3		曲II	
6721C	257	33	22	KK	6	S26	6	S32	4		曲II	358
6721Gb	263	35	23	KK	5	S34	6	S35	3		直	350

SD6400出土土師器実測図1

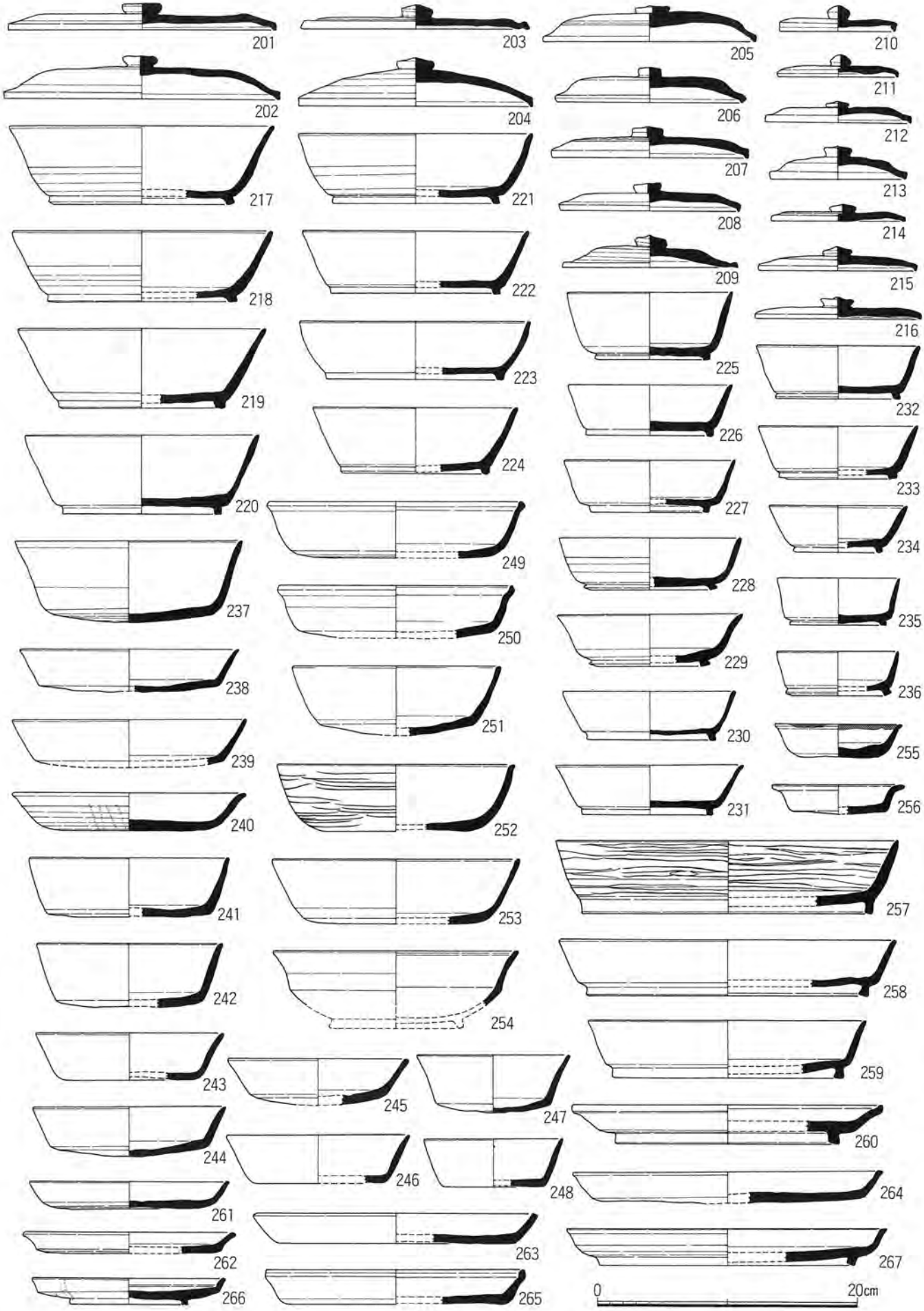


15・18・55は煤付着　44は漆付着　1：4

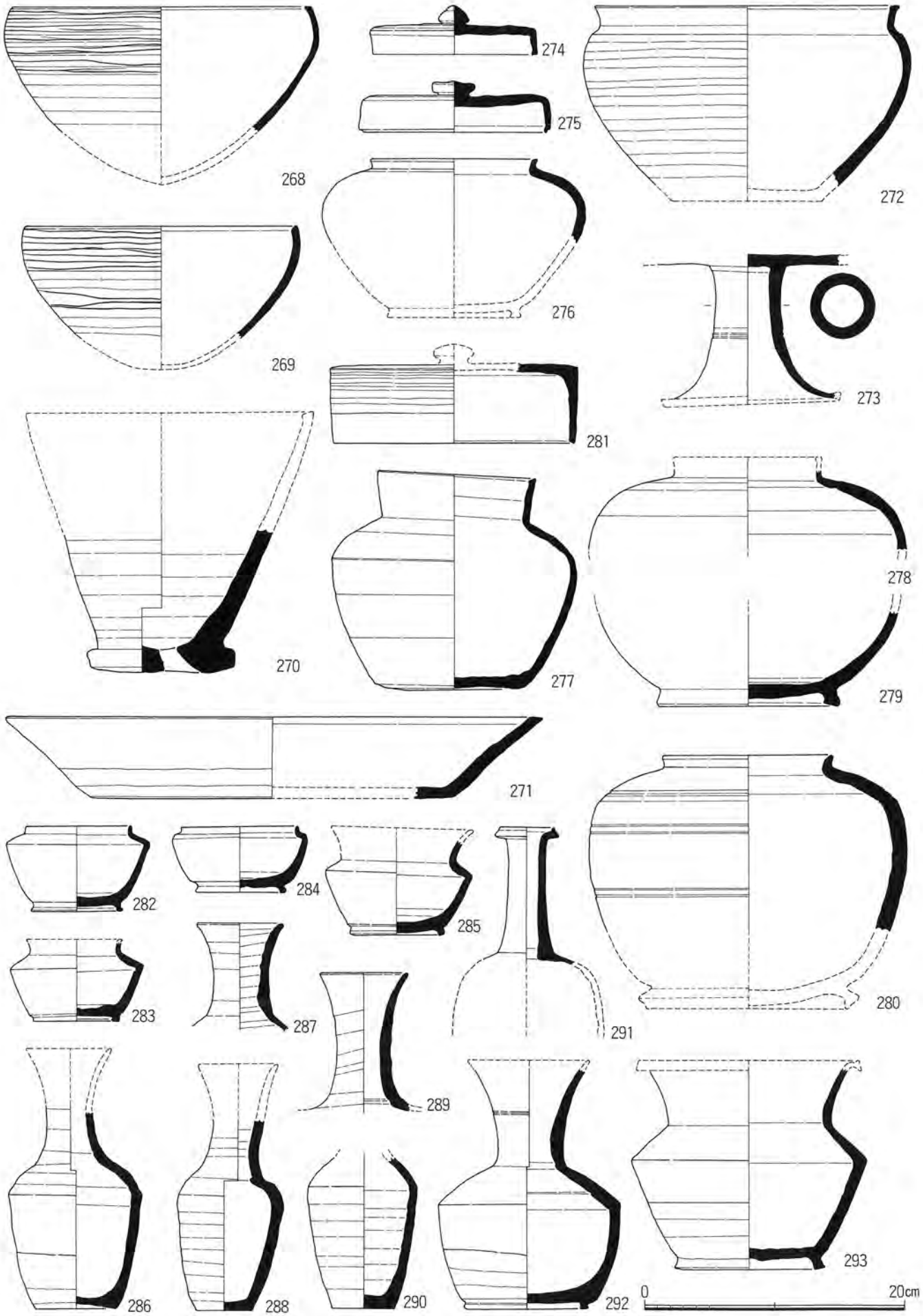

64
66
68
71
73
65
67
69
72
74
77
70
75
76
78
79
80
81
82
86
83
84
85
87
0
30cm

64は漆付着　1：4

SD6400出土須恵器実測図1

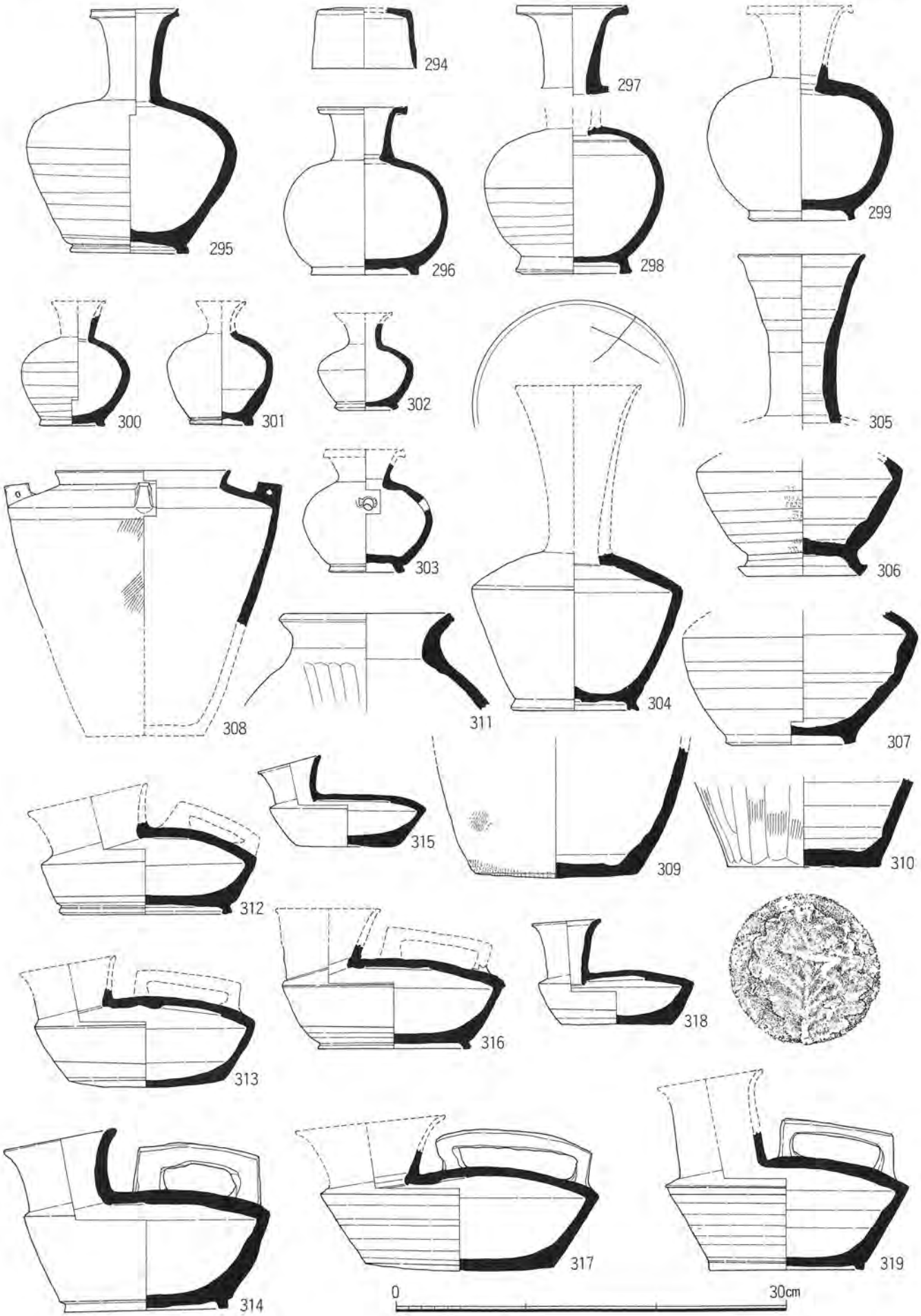


255は煤付着　　1：4

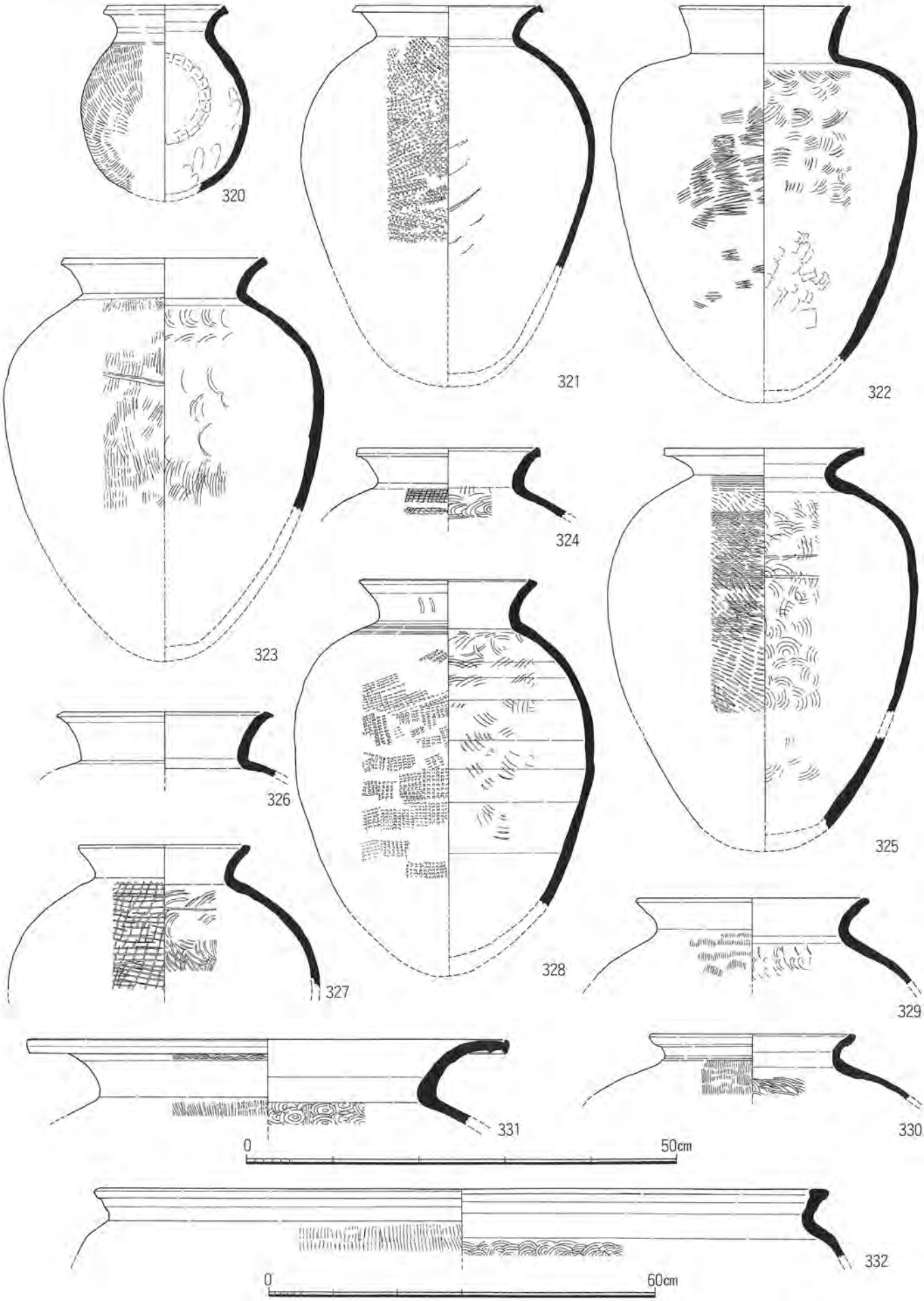

268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
0
20cm

1：4

SD6400出土須恵器実測図3

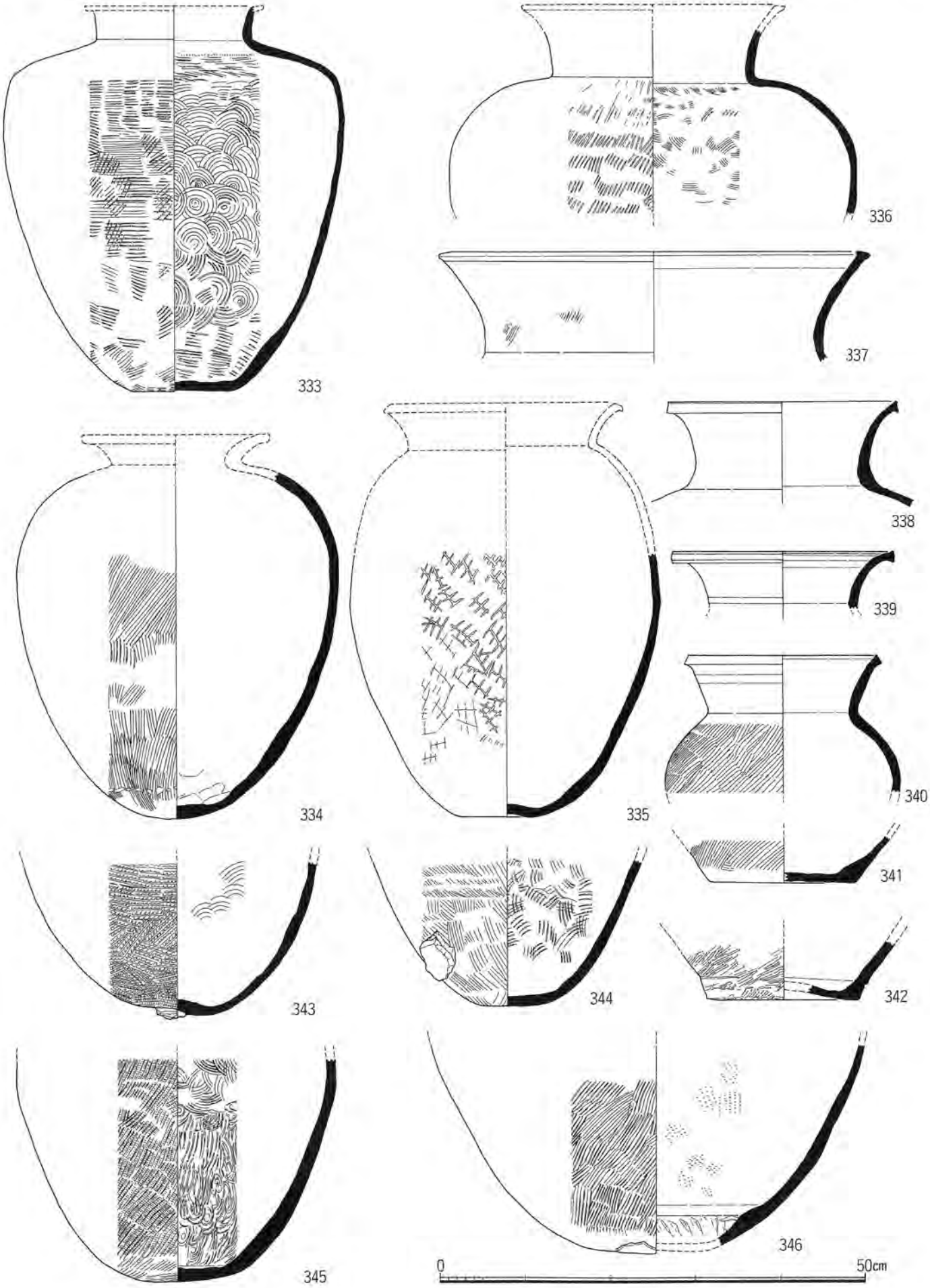


1：4

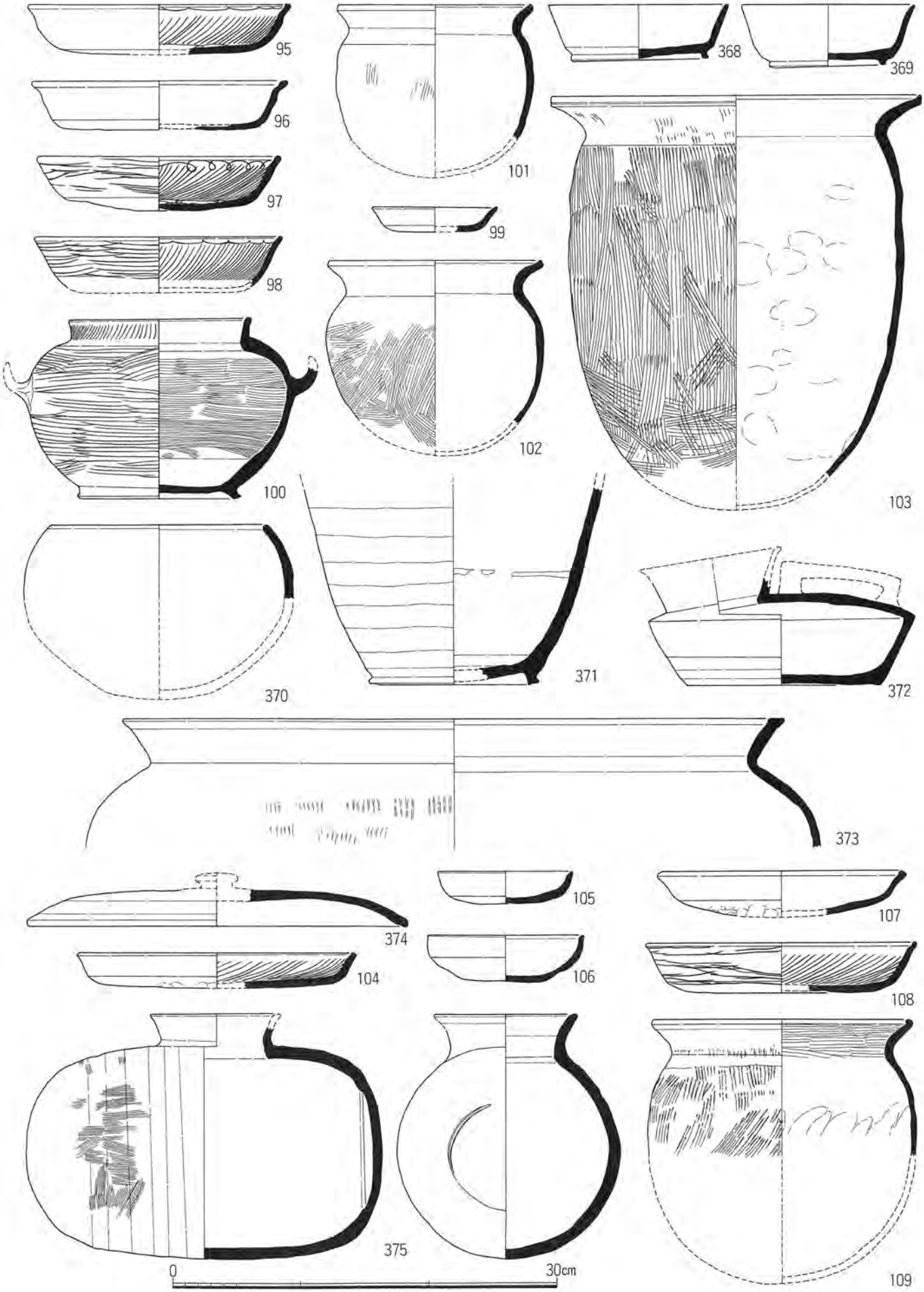


332 1：8　その他 1：6

SD6400出土須恵器実測図5

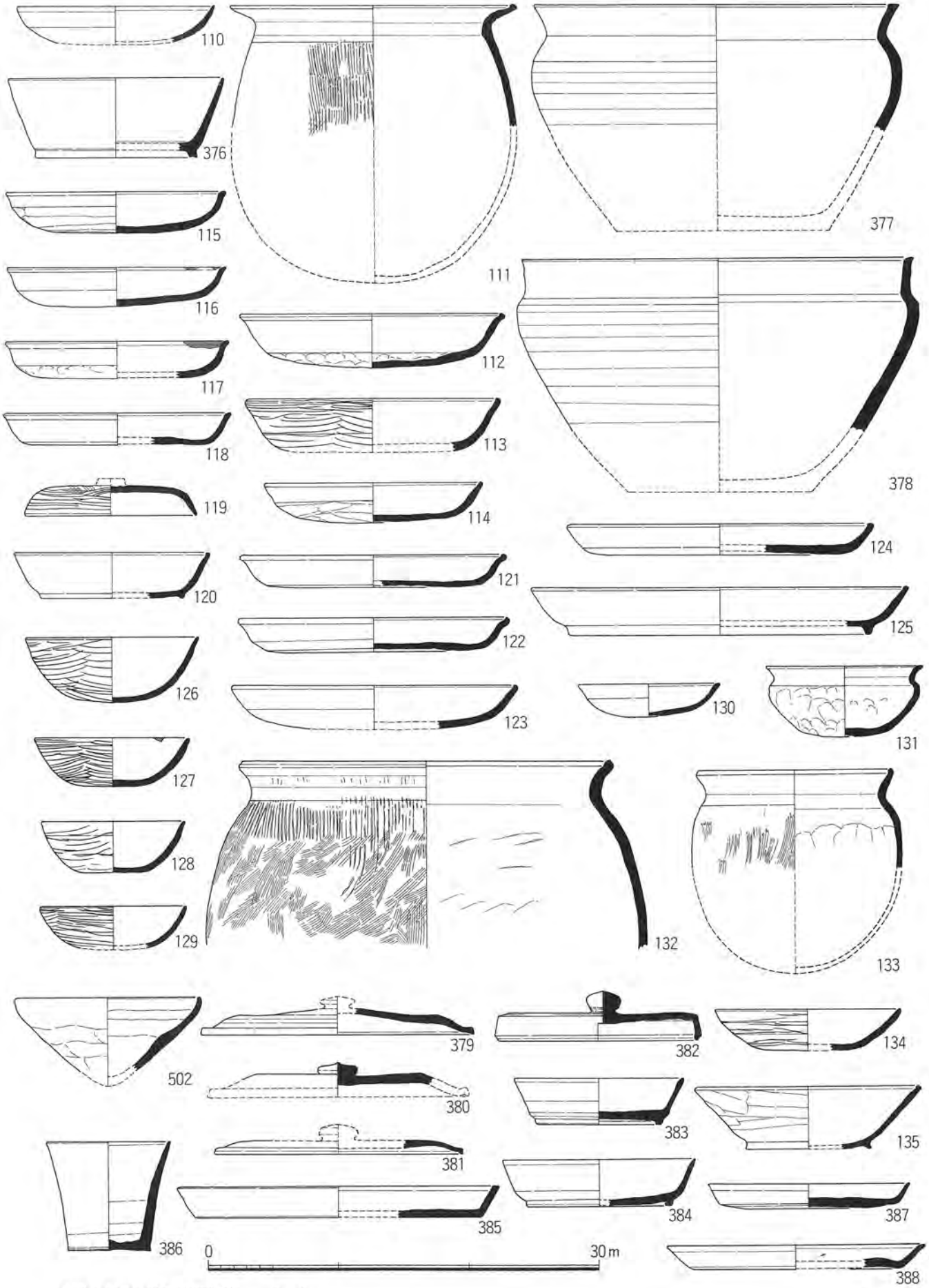


1：6

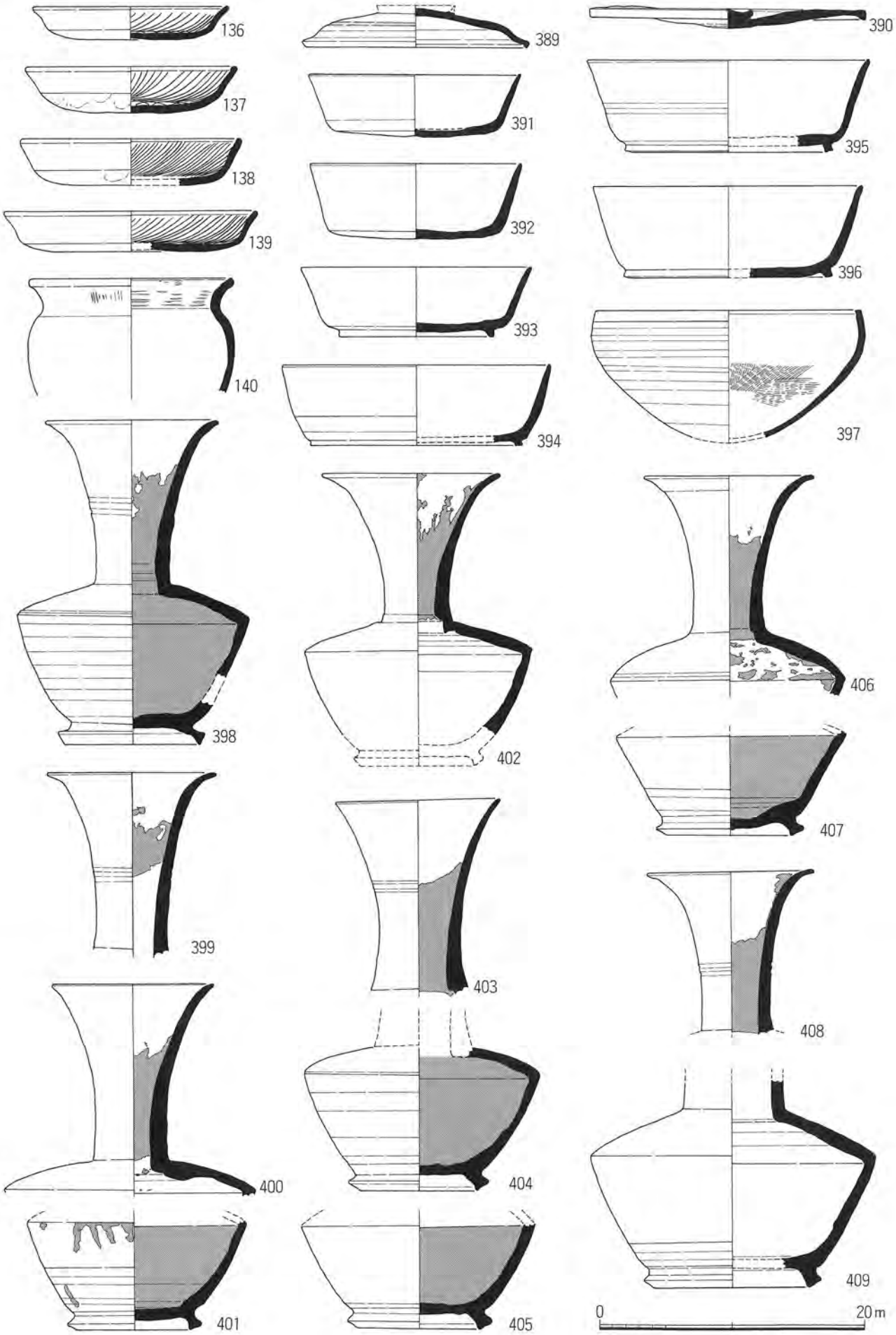

95
96
97
98
100
101
99
102
368
369
103
370
371
372
373
374
105
107
104
106
108
375
109
0
30cm

1：4

井戸出土土器実測図2

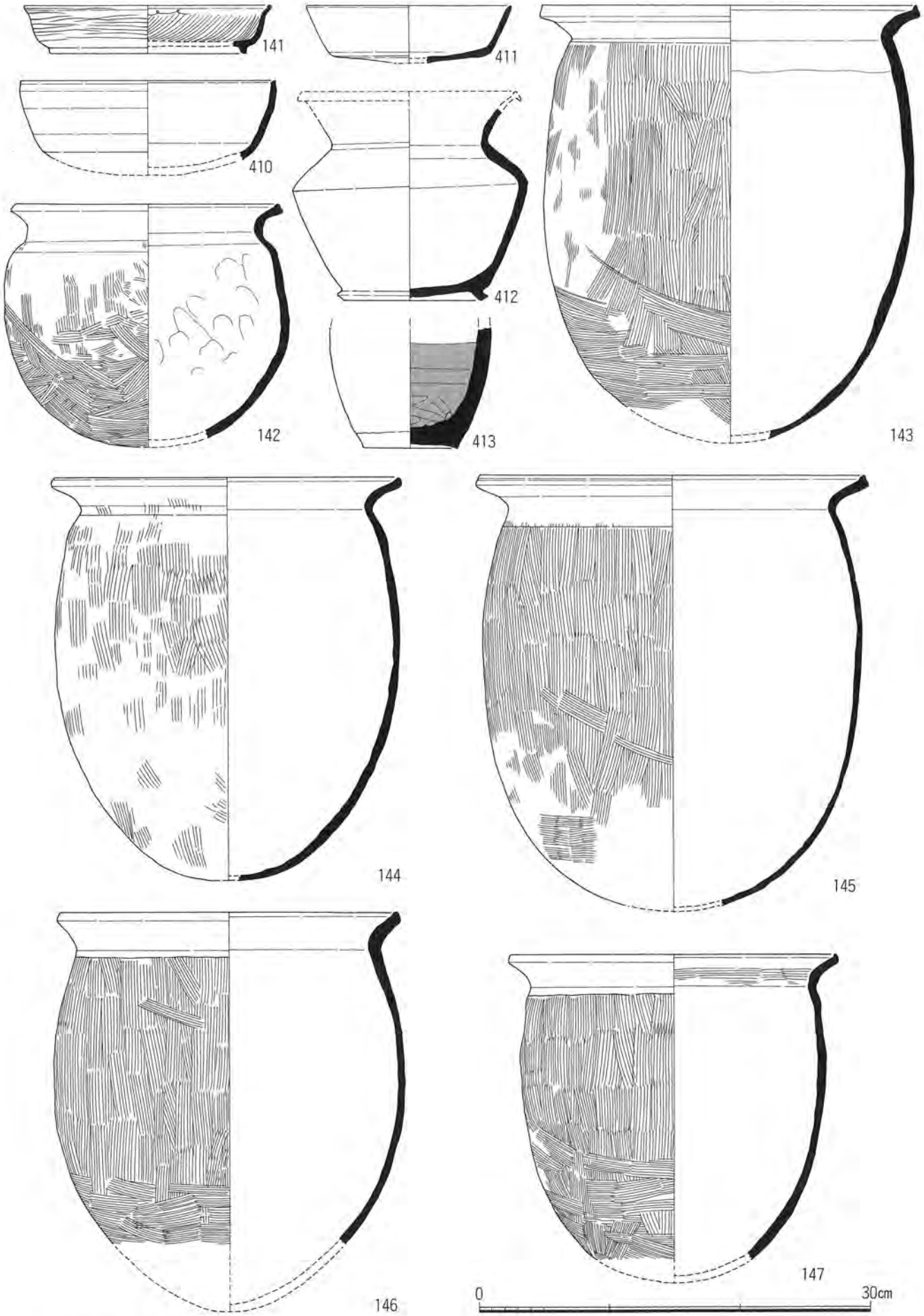


116・117・127は煤付着　　1：4

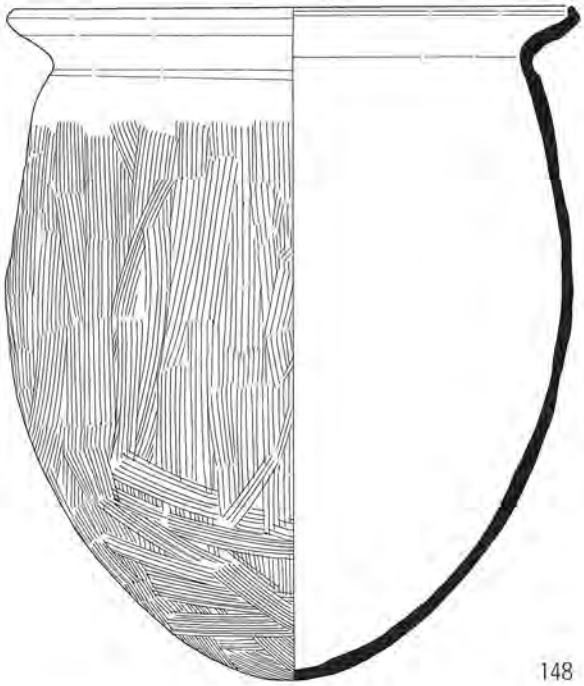


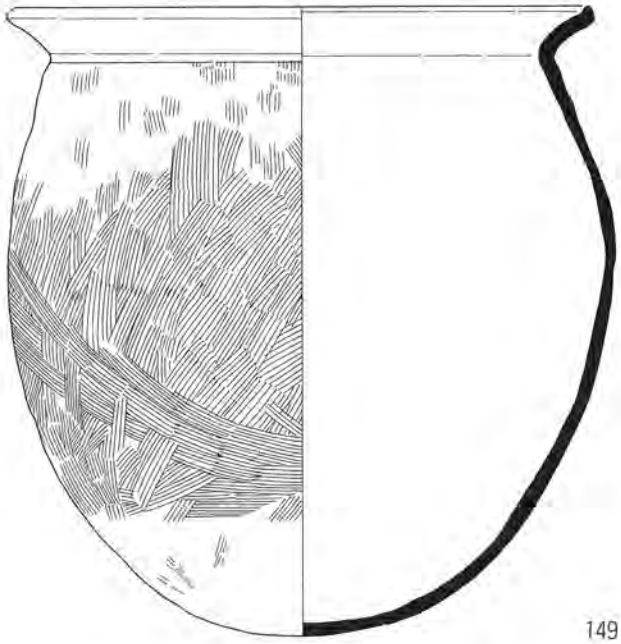
398～408は漆付着　1：4

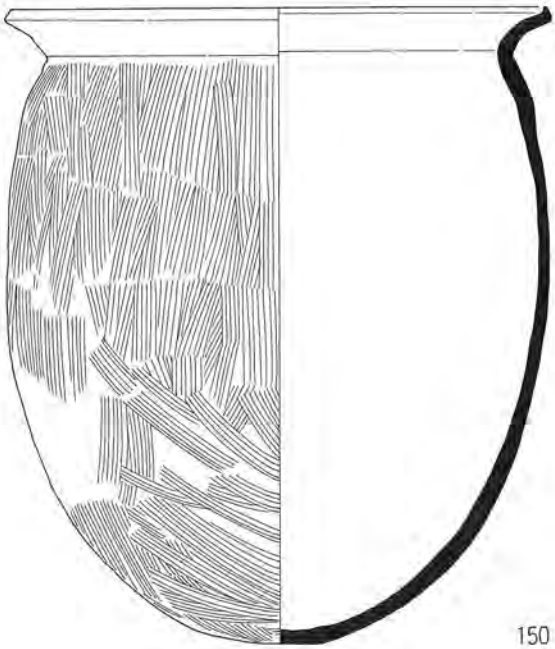
祭祀土坑・埋納遺構出土土器実測図

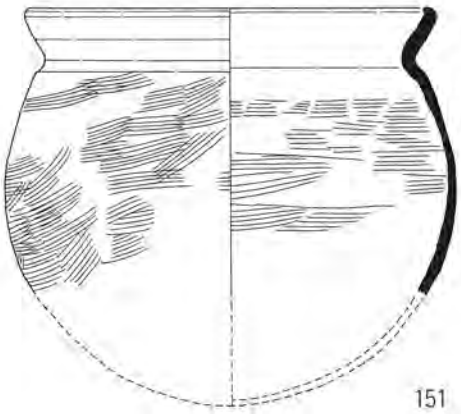


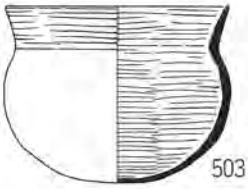
413は漆付着　1：4

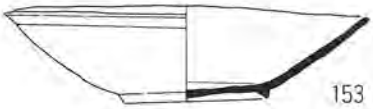


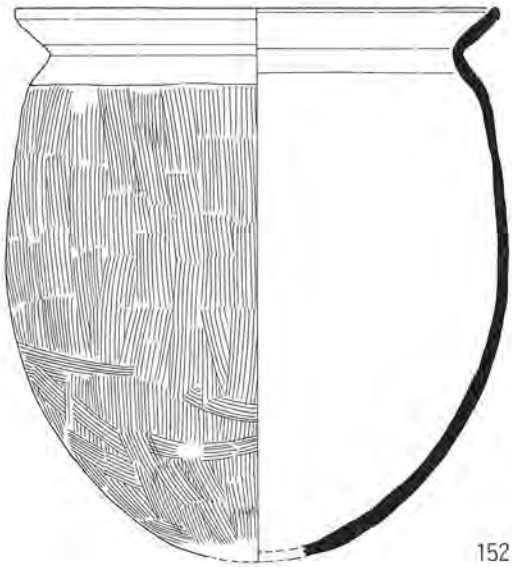








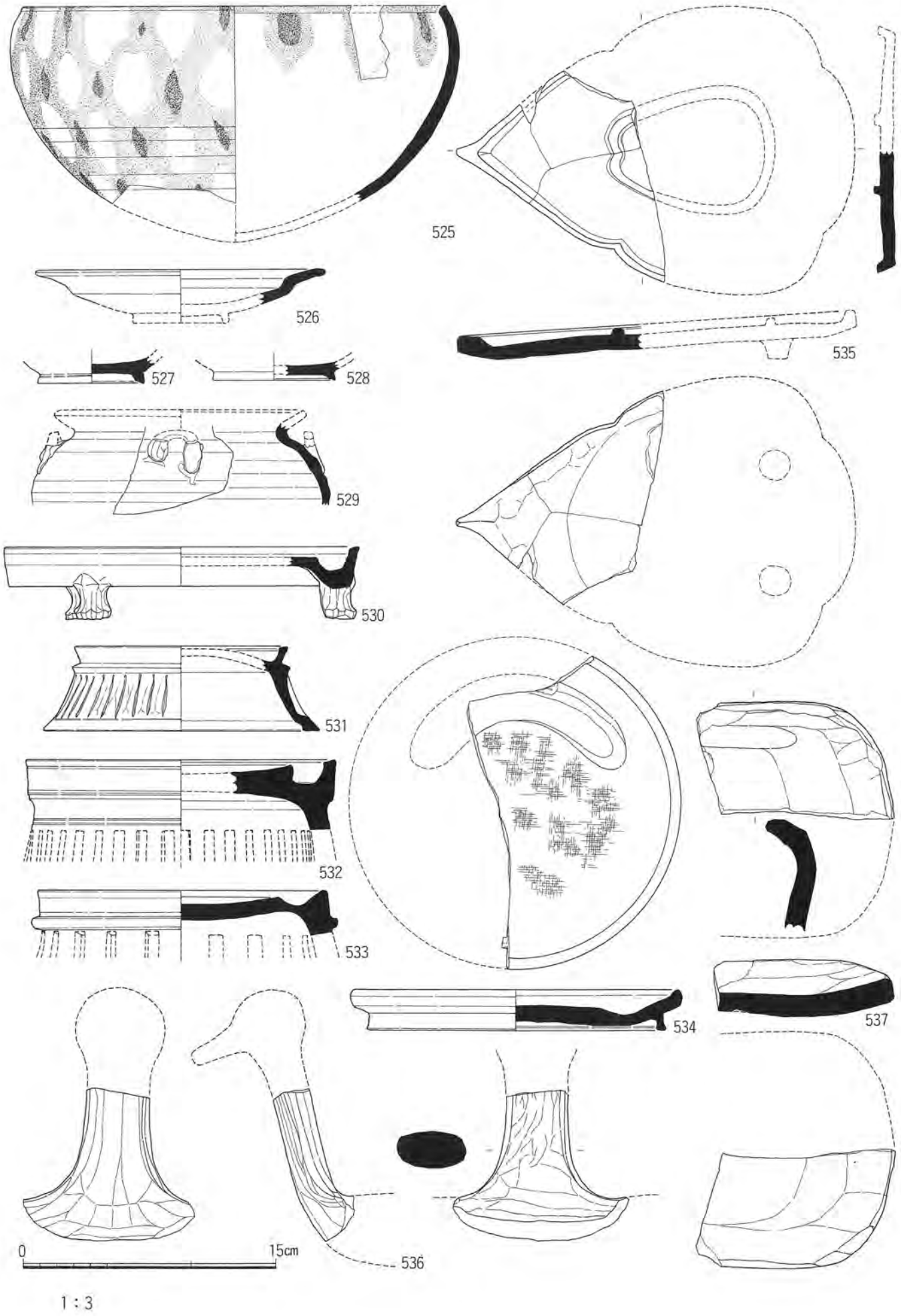


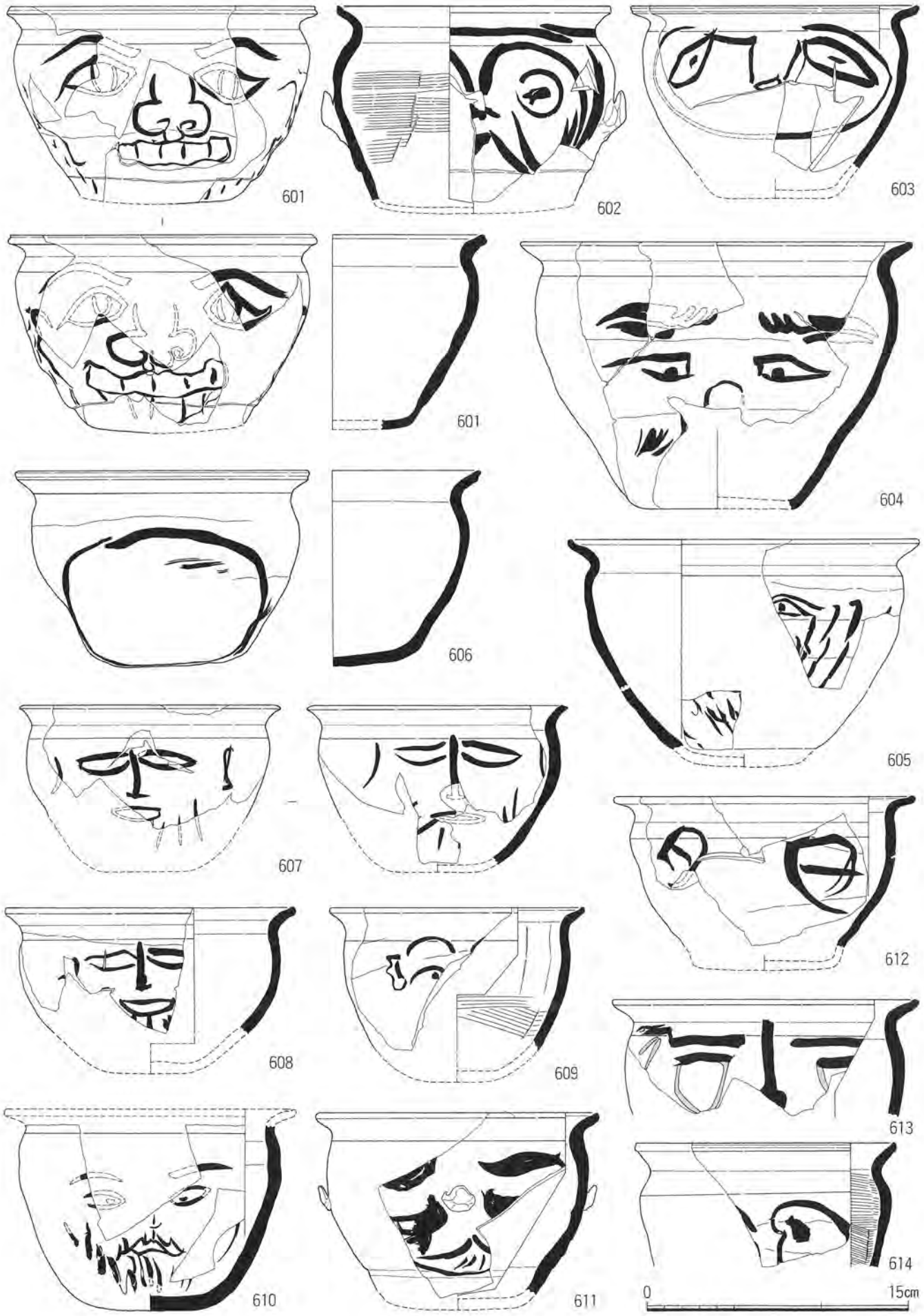


0 30cm

1：4

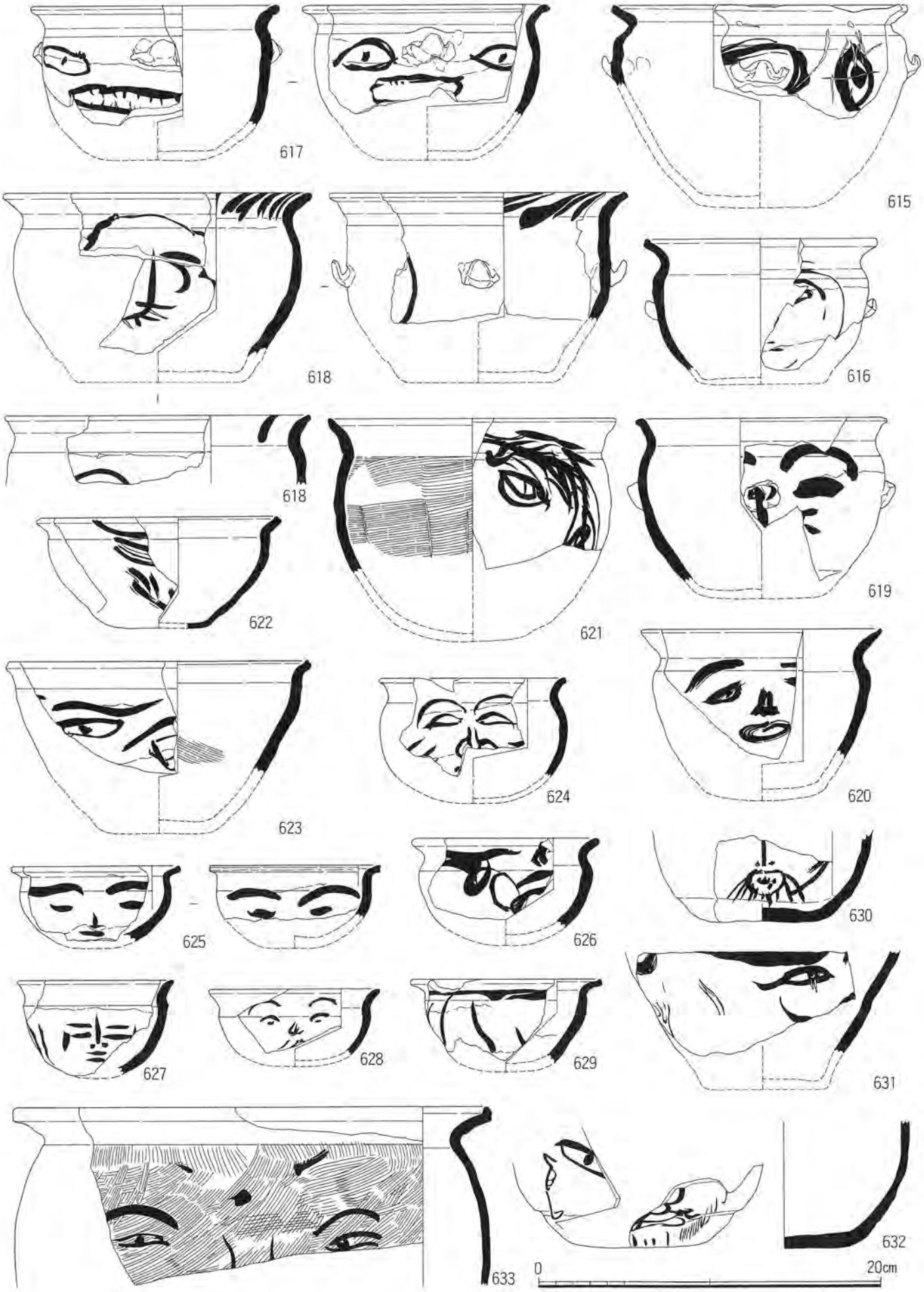
施釉陶器・硯実測図



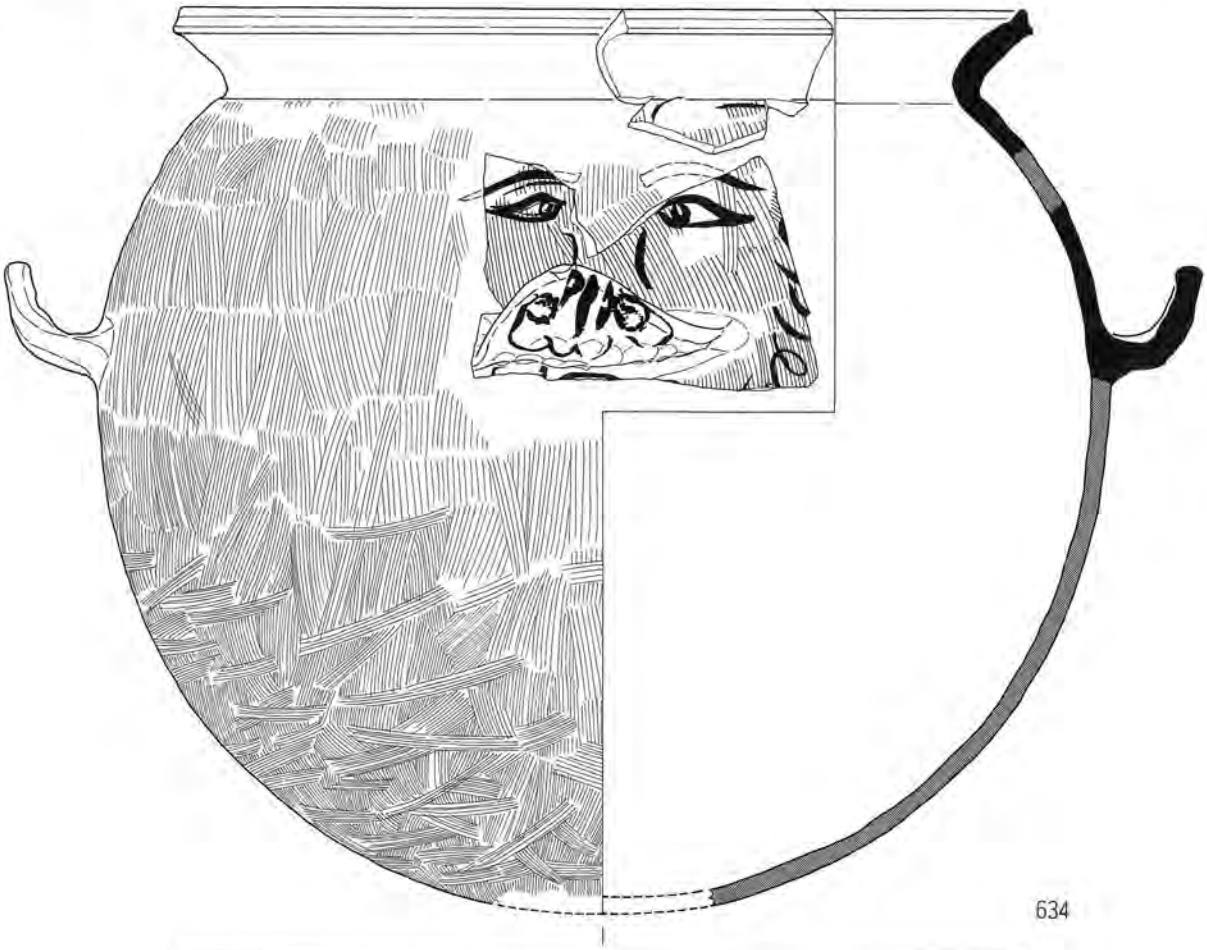

601
602
603
601
604
606
605
607
612
608
609
613
610
611
614
0
15cm

1 : 3

墨書人面土器実測図2



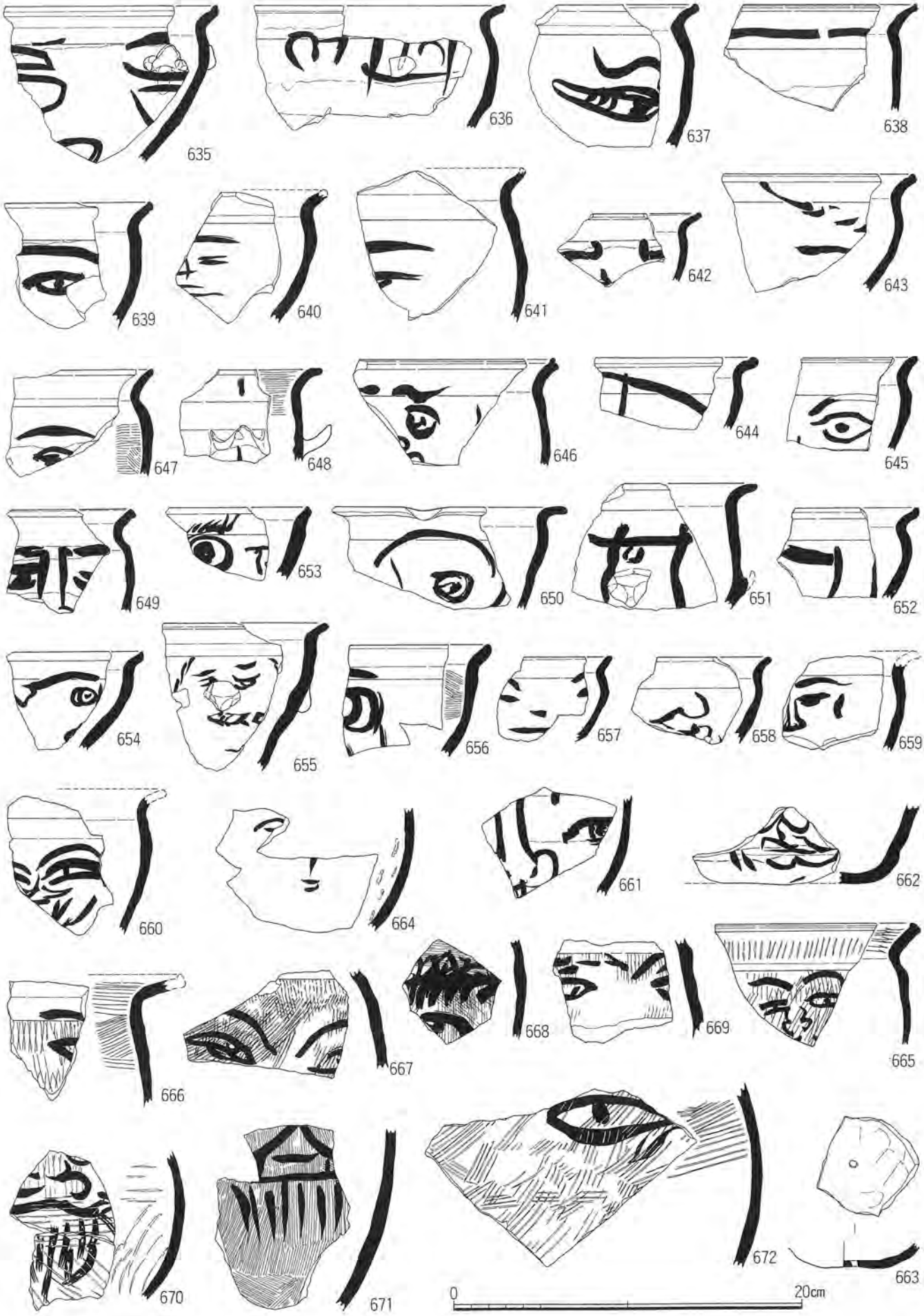
1：3



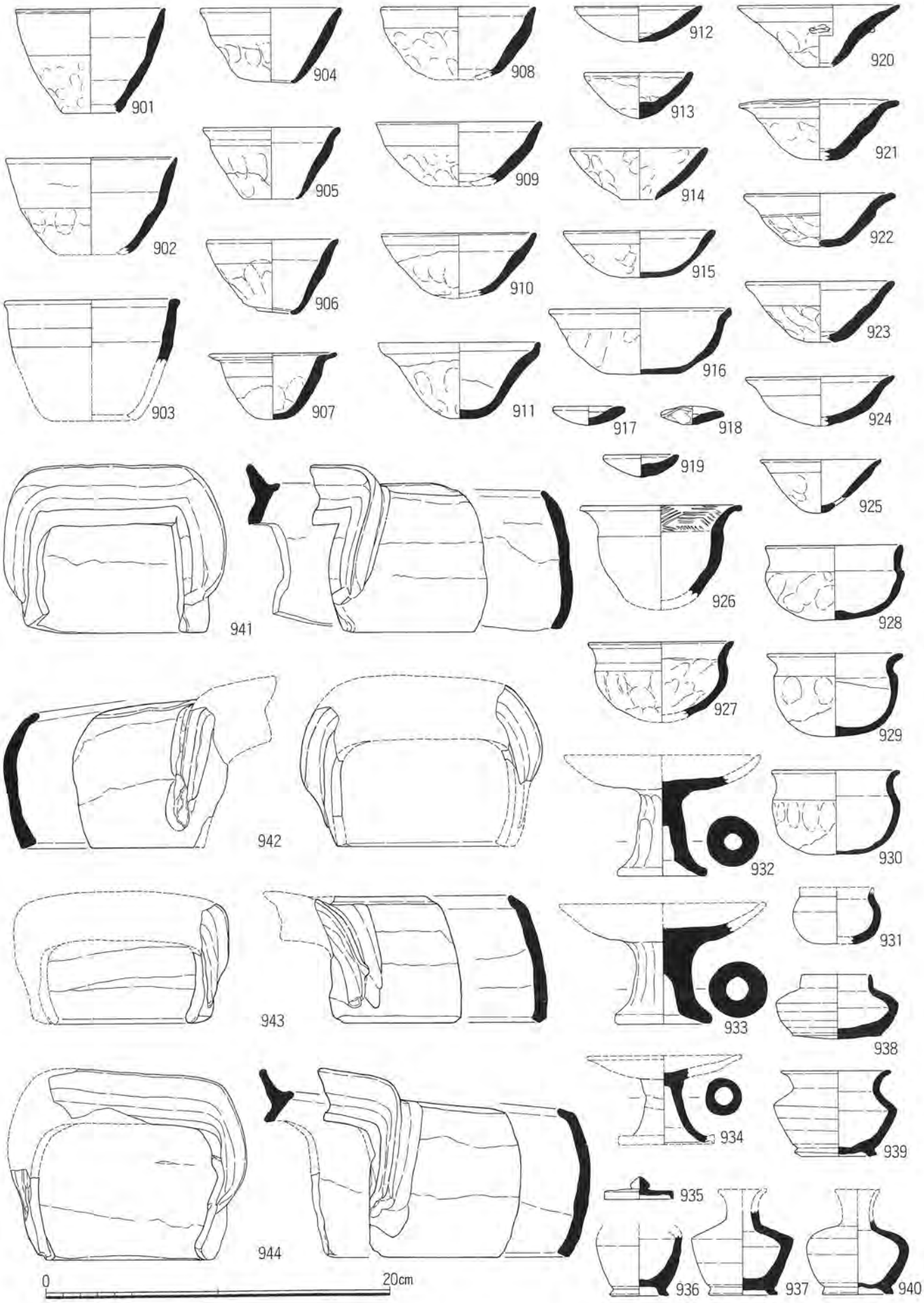
634

1：3

墨書人面土器実測図4

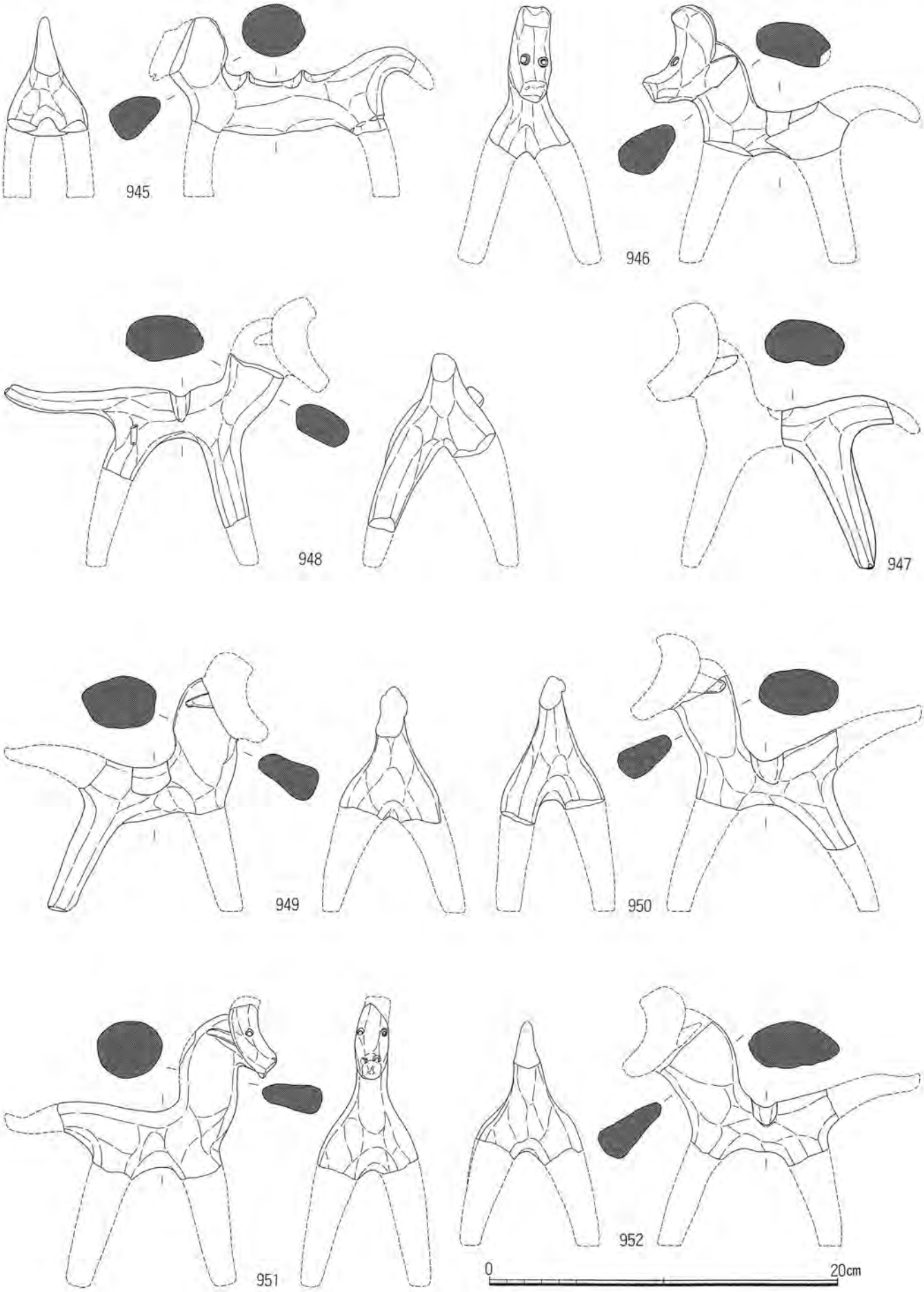


1：3

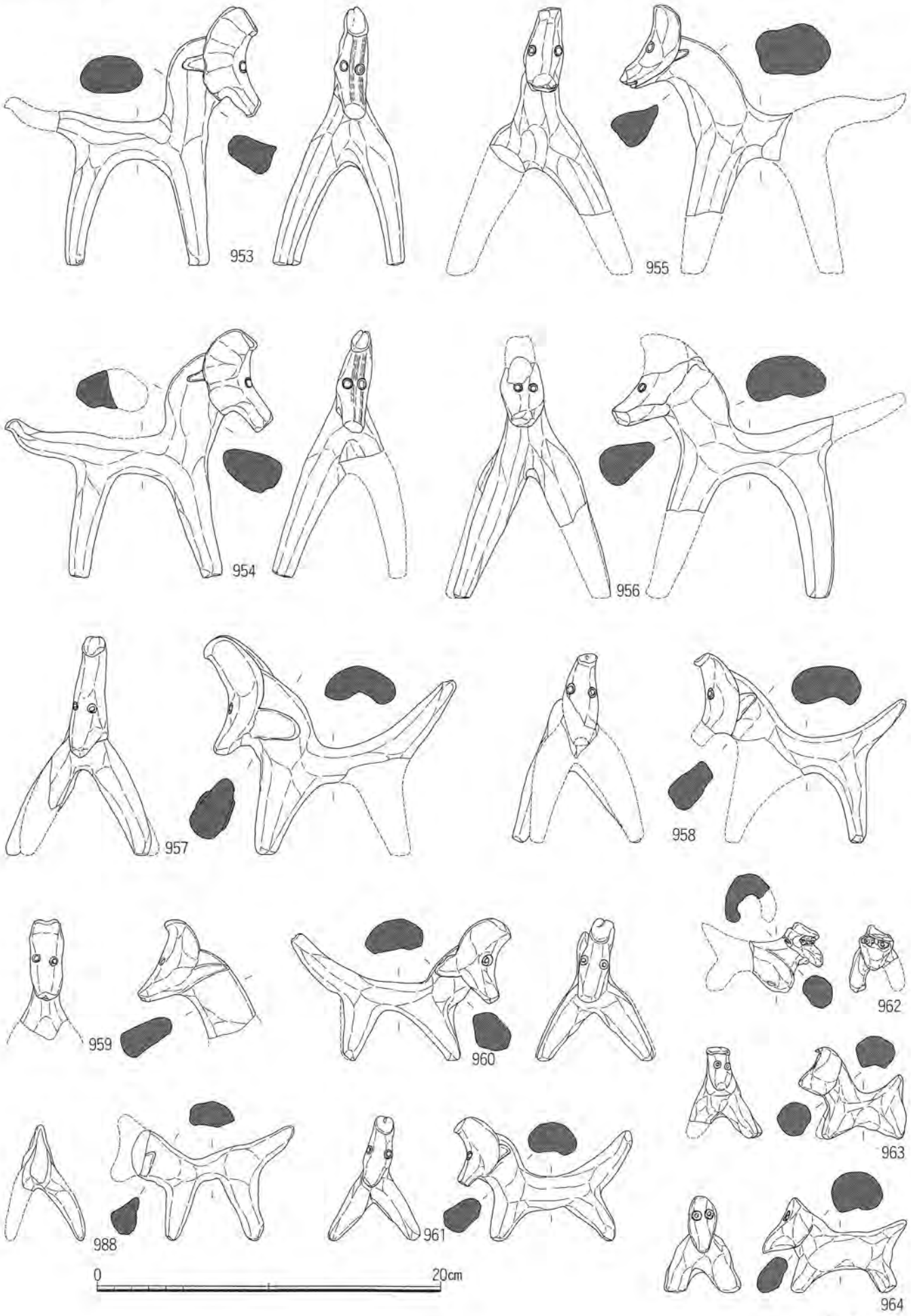

901
902
903
904
905
906
907
908
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942
943
944
0
20cm

1：3

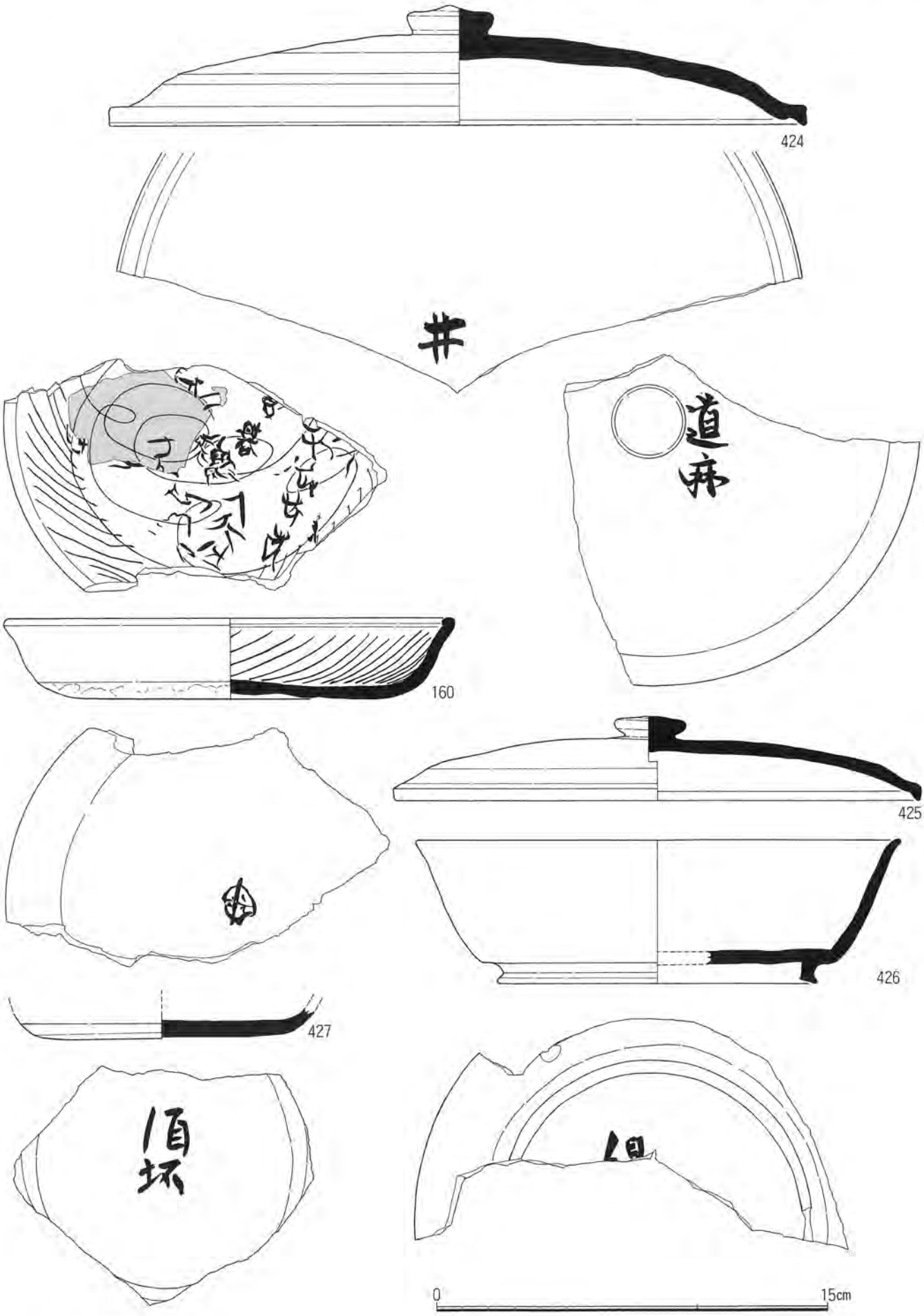
土馬実測図 1



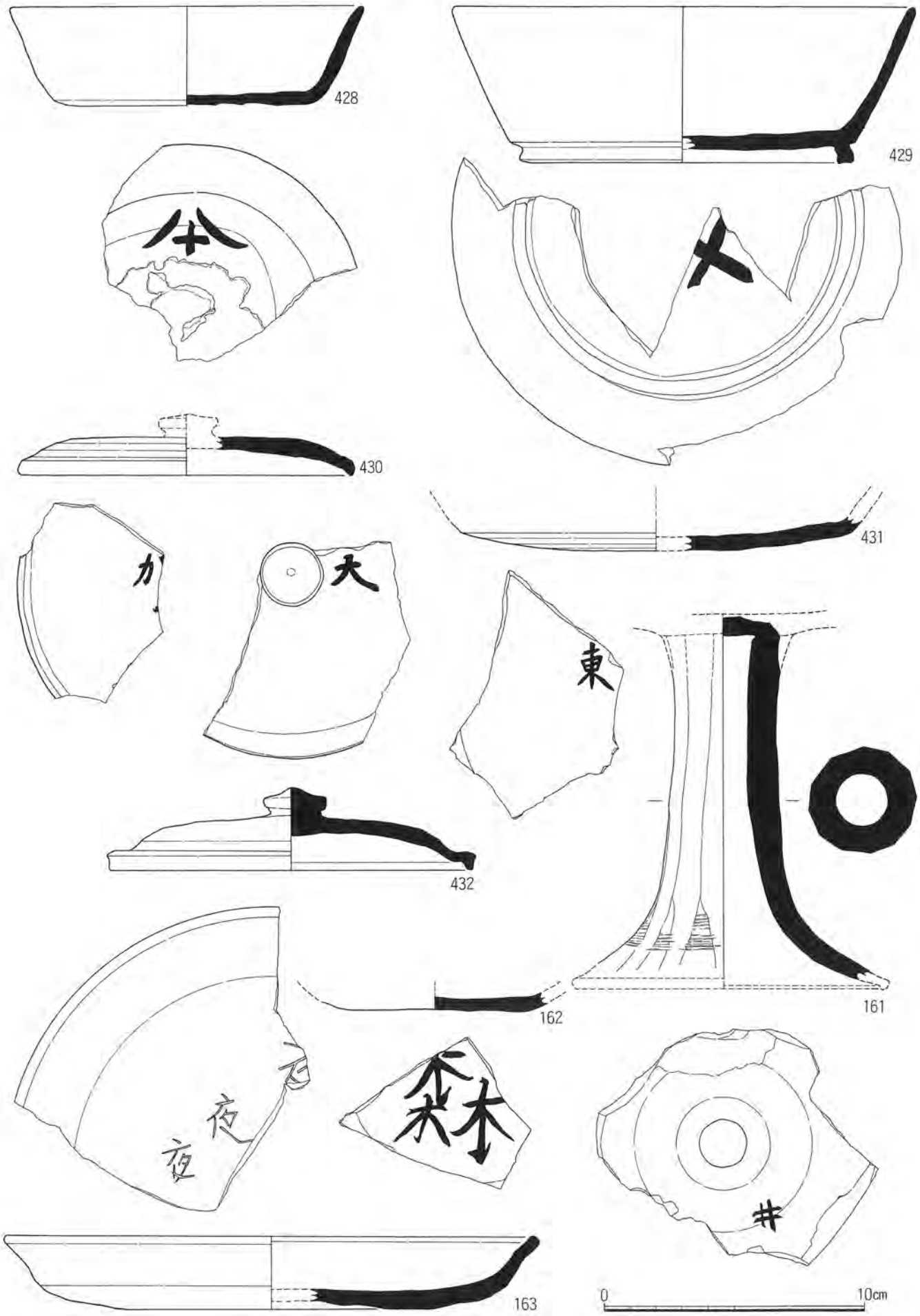
1：3


953
955
954
956
957
958
959
960
962
963
988
961
964
0
20cm
1：3

墨書土器実測図1

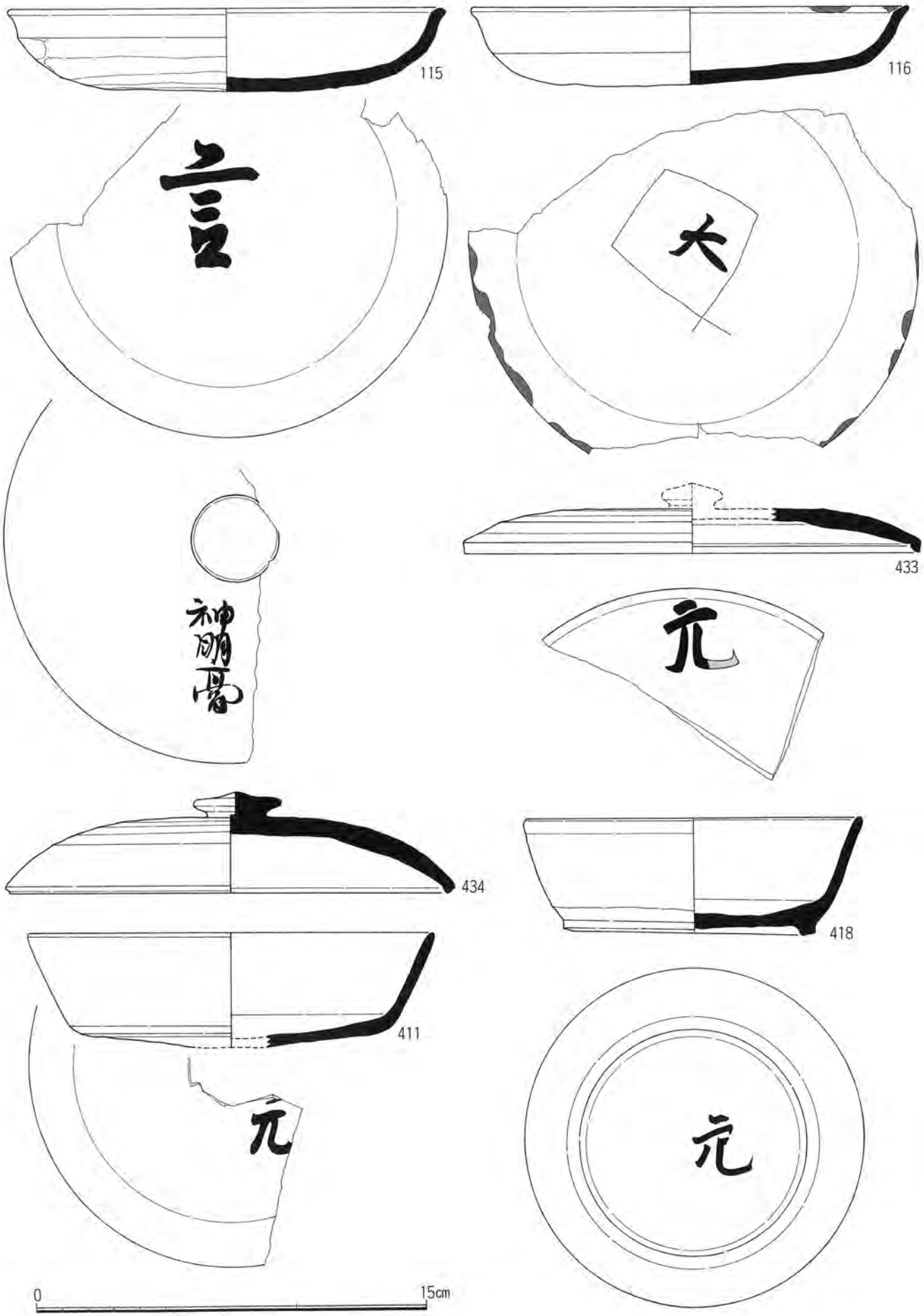


160は墨痕　1：2



1：2

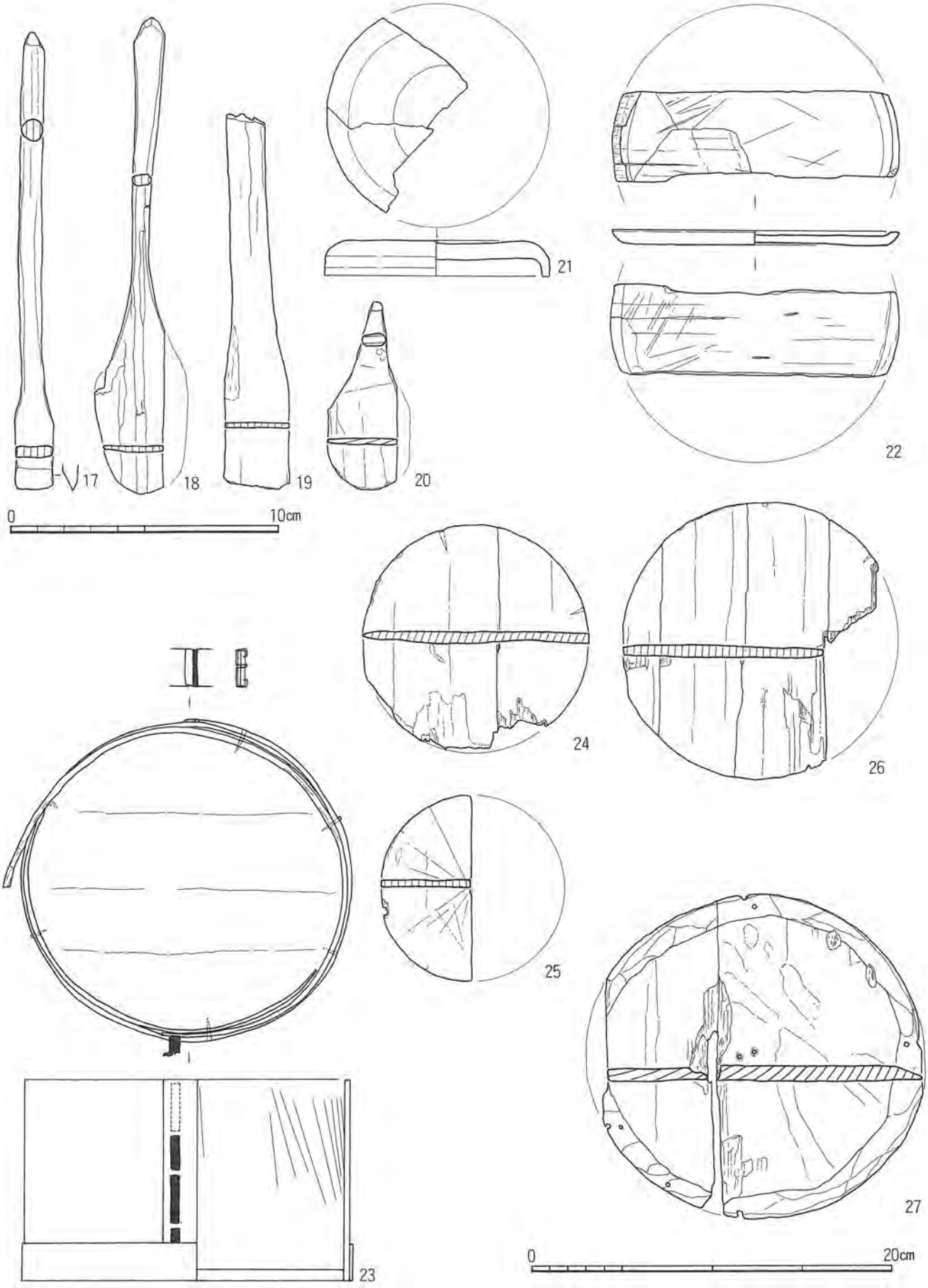
墨書土器実測図3



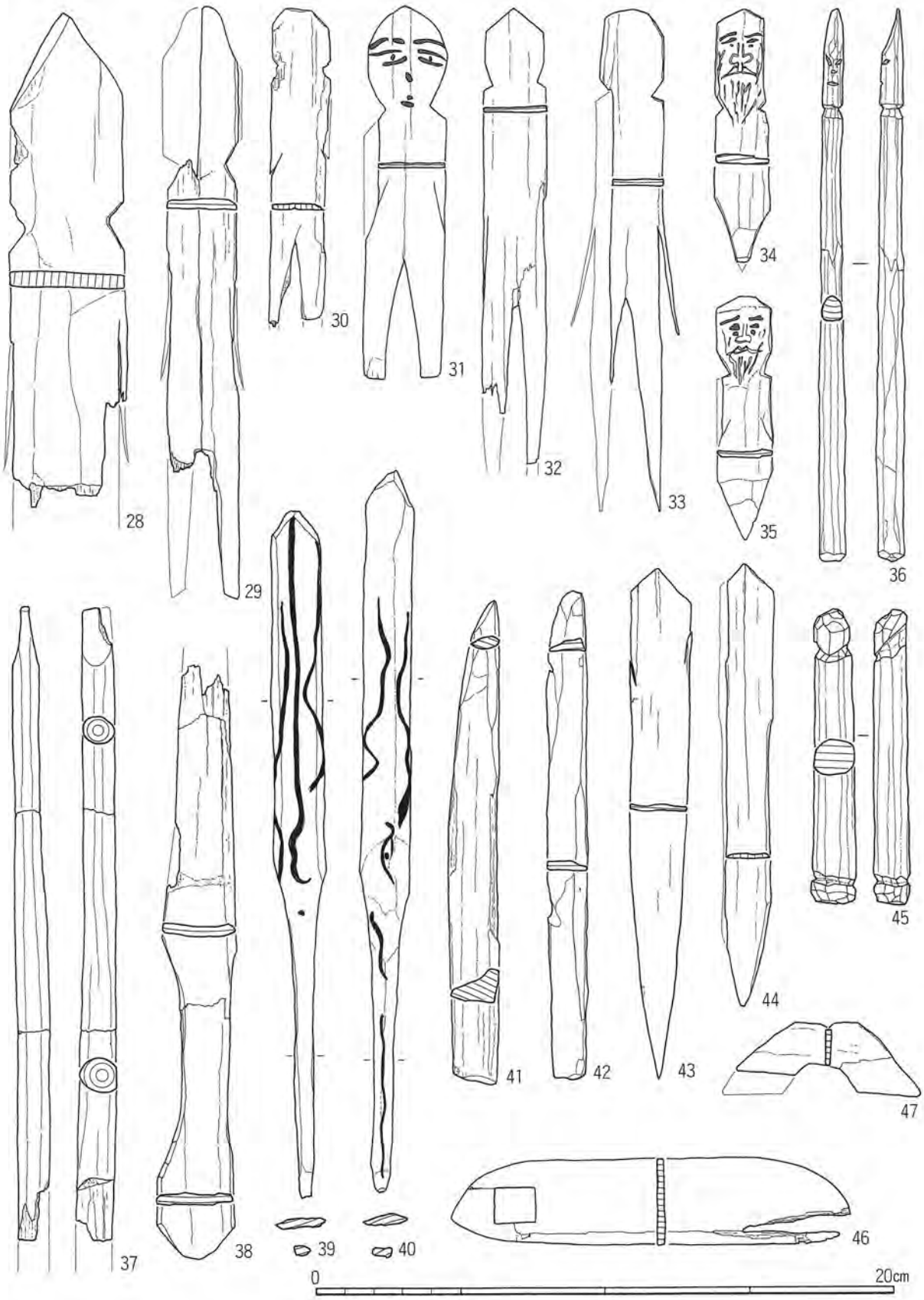
116は煤付着　1：2

1～11・14～16 1：2　12・13 1：3

SD6400出土木製品実測図2

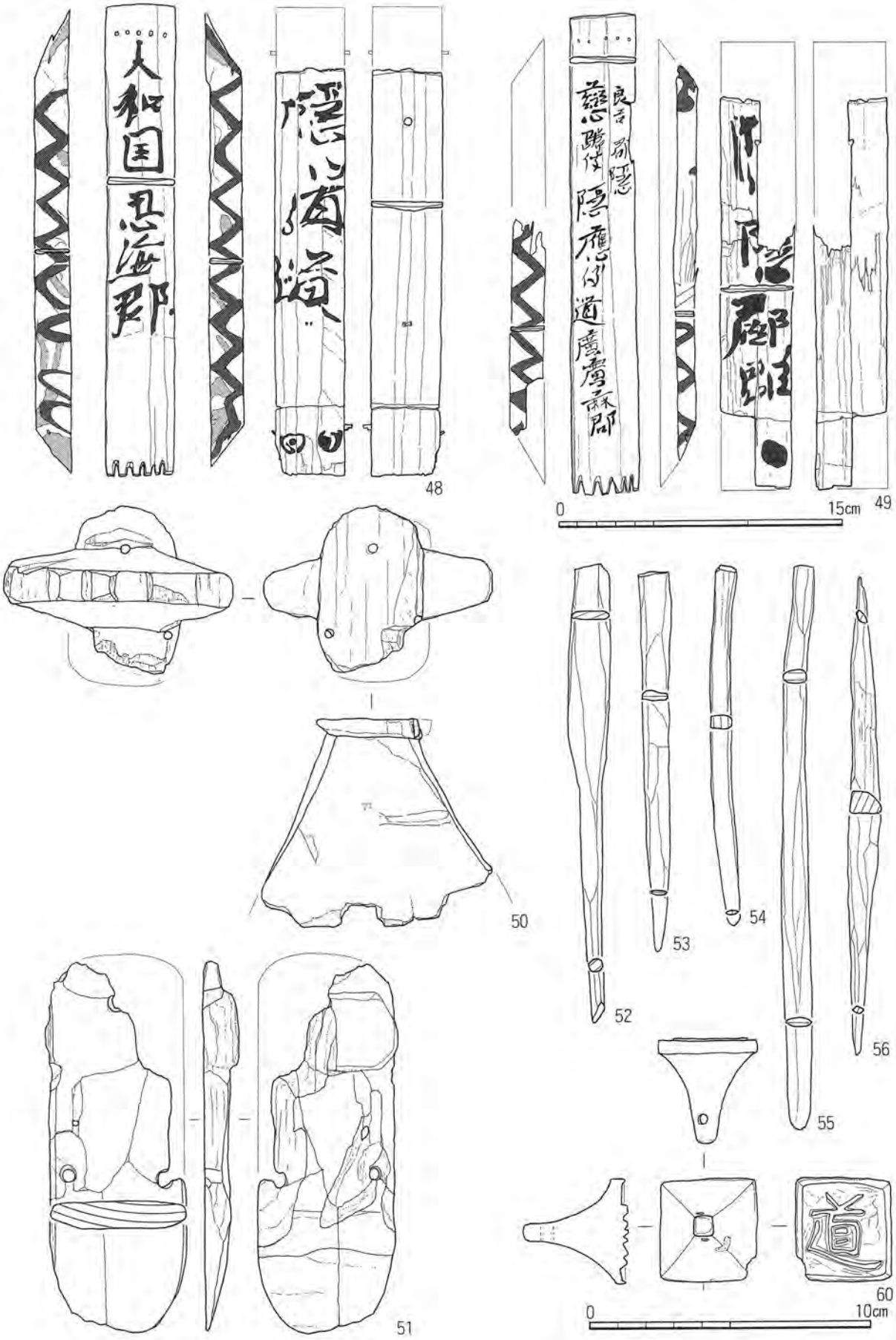


17～21　1：2　　22～27　1：3

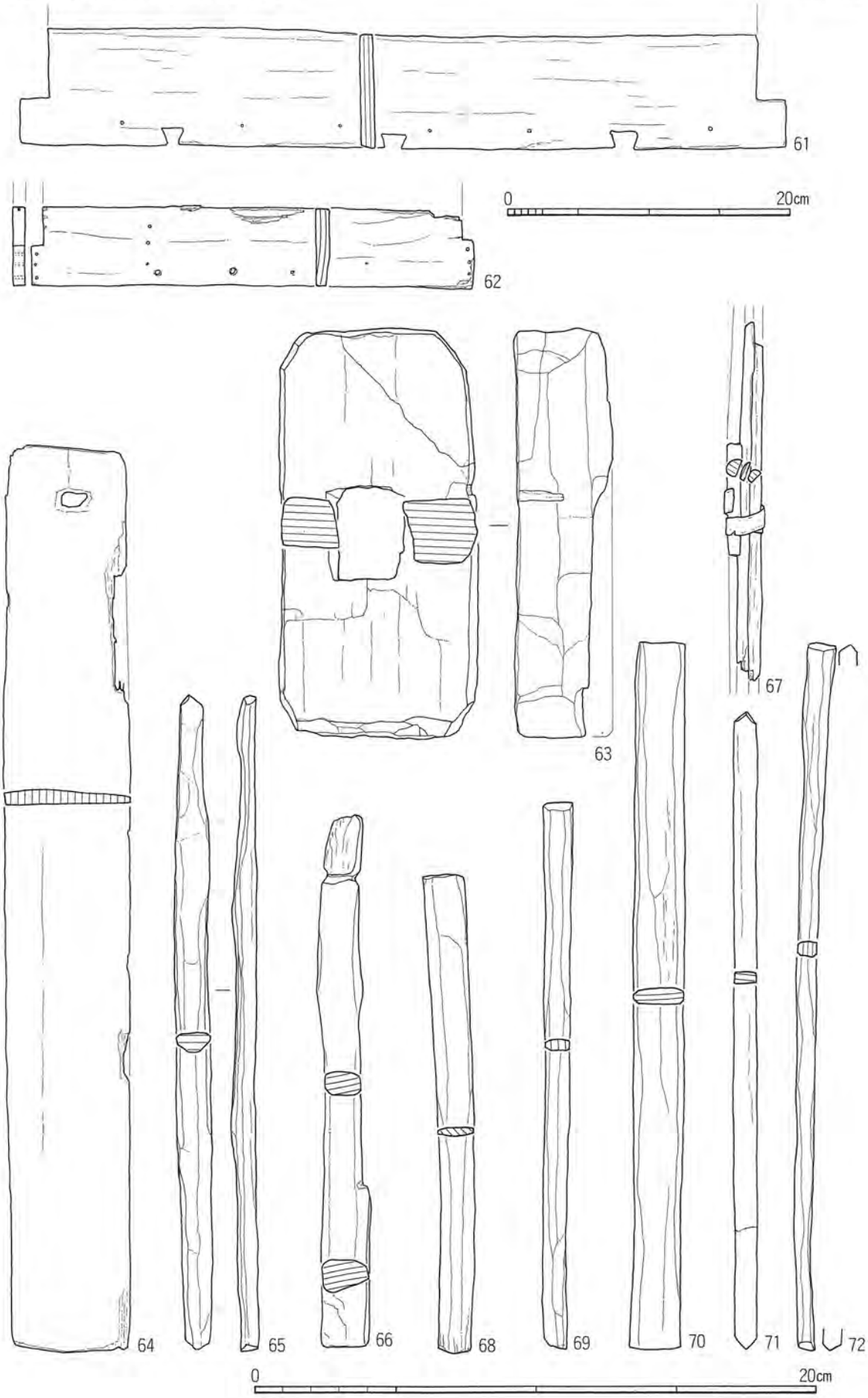


1：2

SD6400出土木製品実測図4

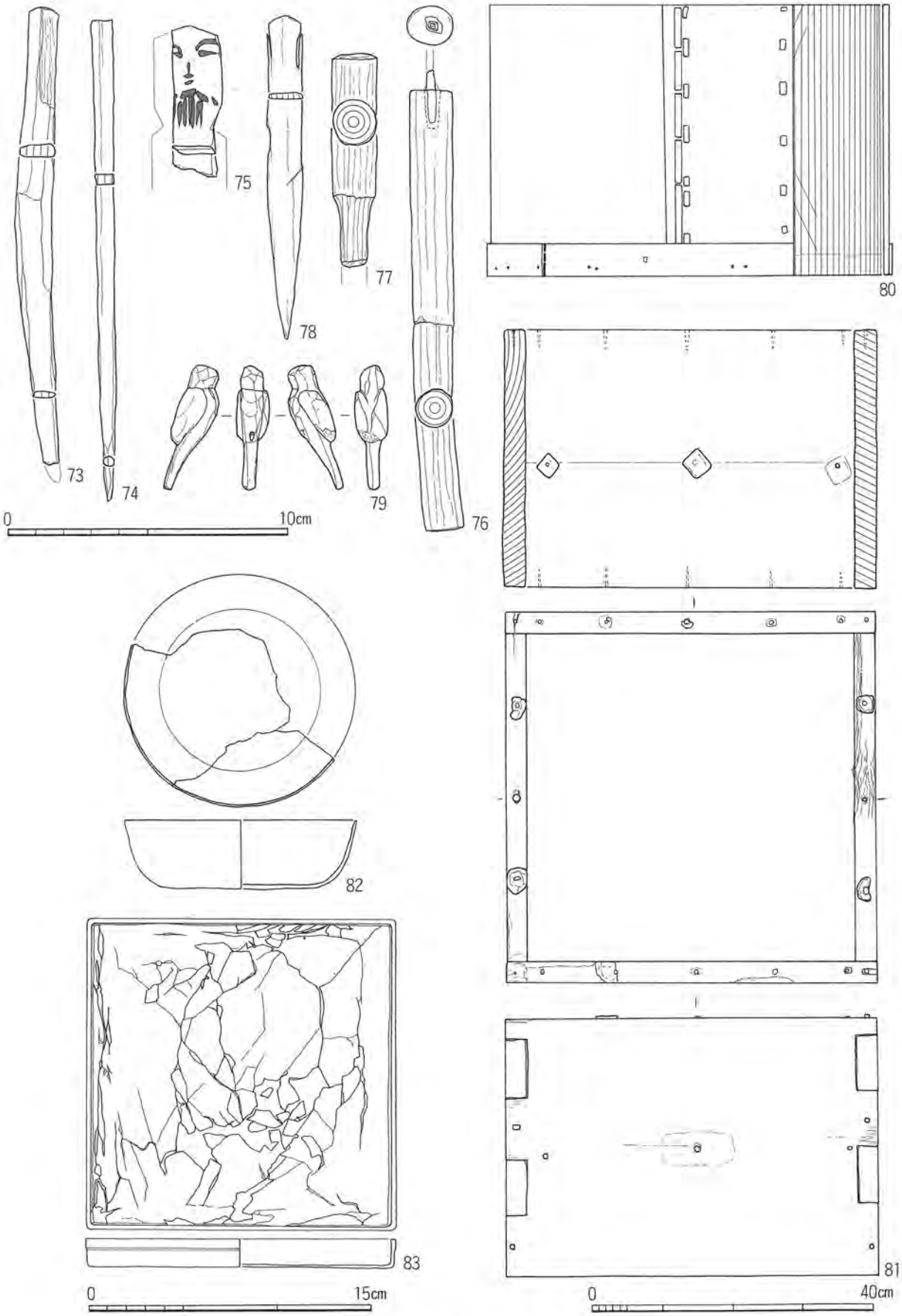


48～51　1：3　　52～56・60　1：2

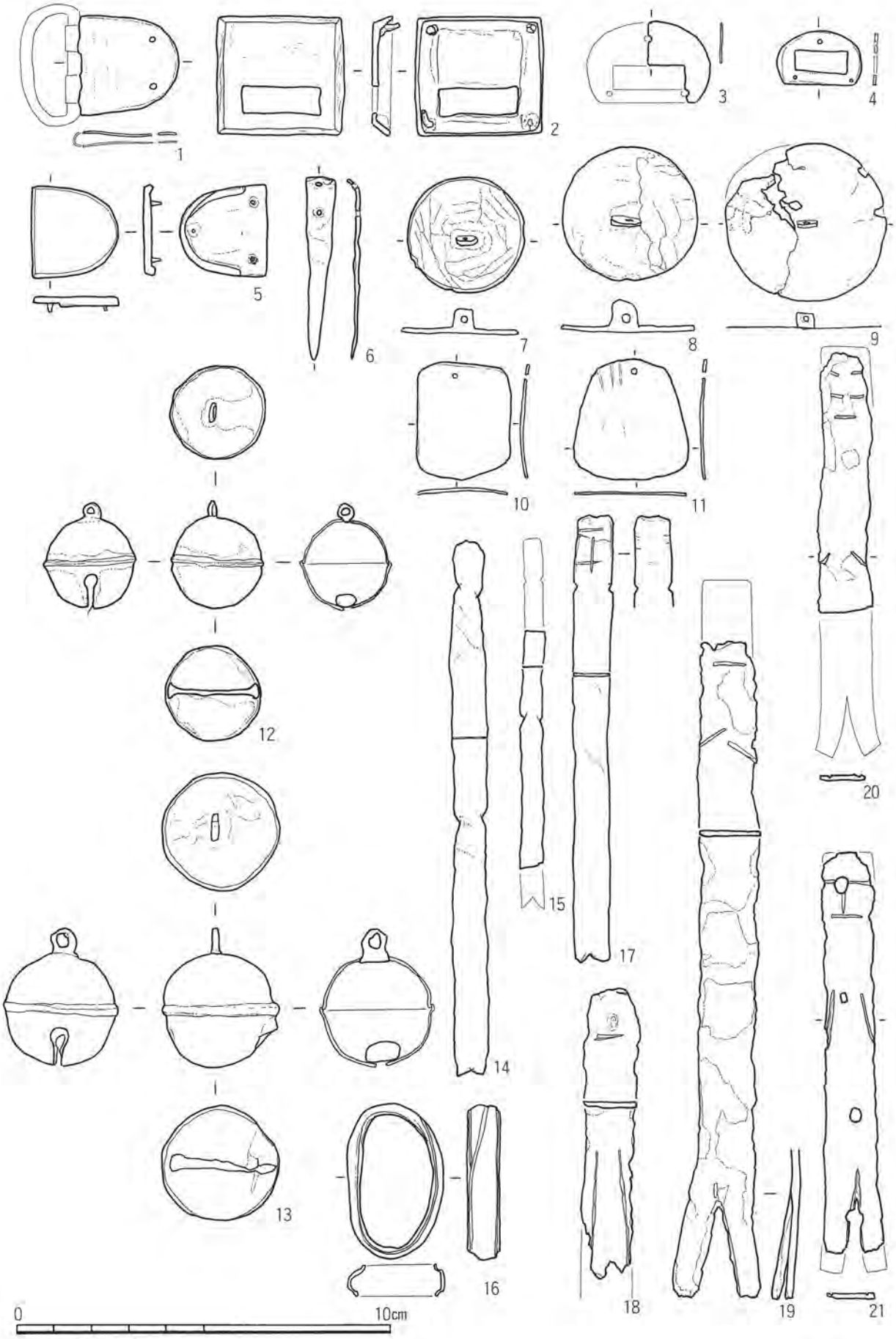


61・62 1：4　63～72 1：2

SD6451・SE6657・SX6428出土木製品等実測図

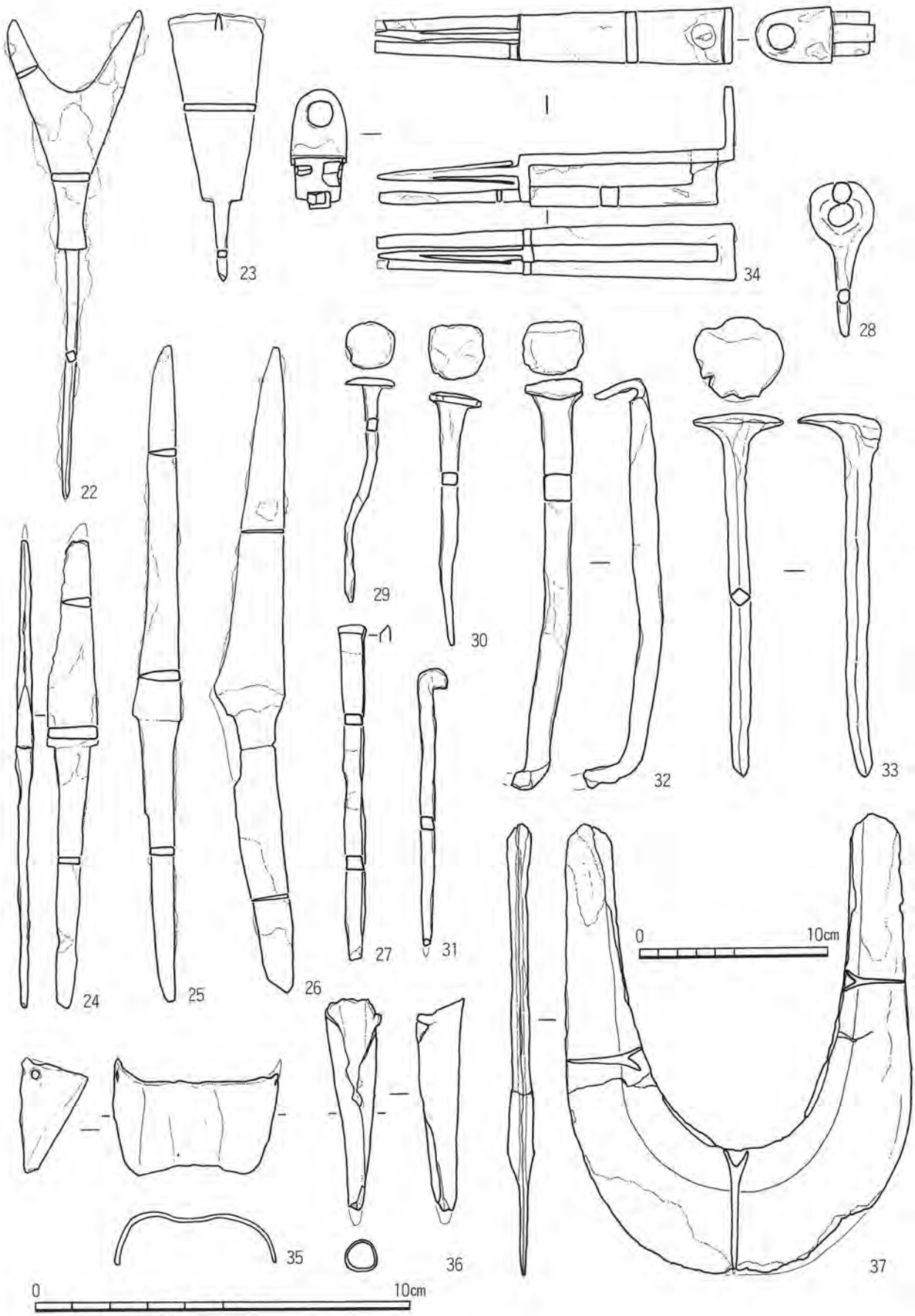


73～75－SD6451　76～81－SE6657　82・83－SX6428
73～79　1：2　80・81　1：8　82・83　1：3

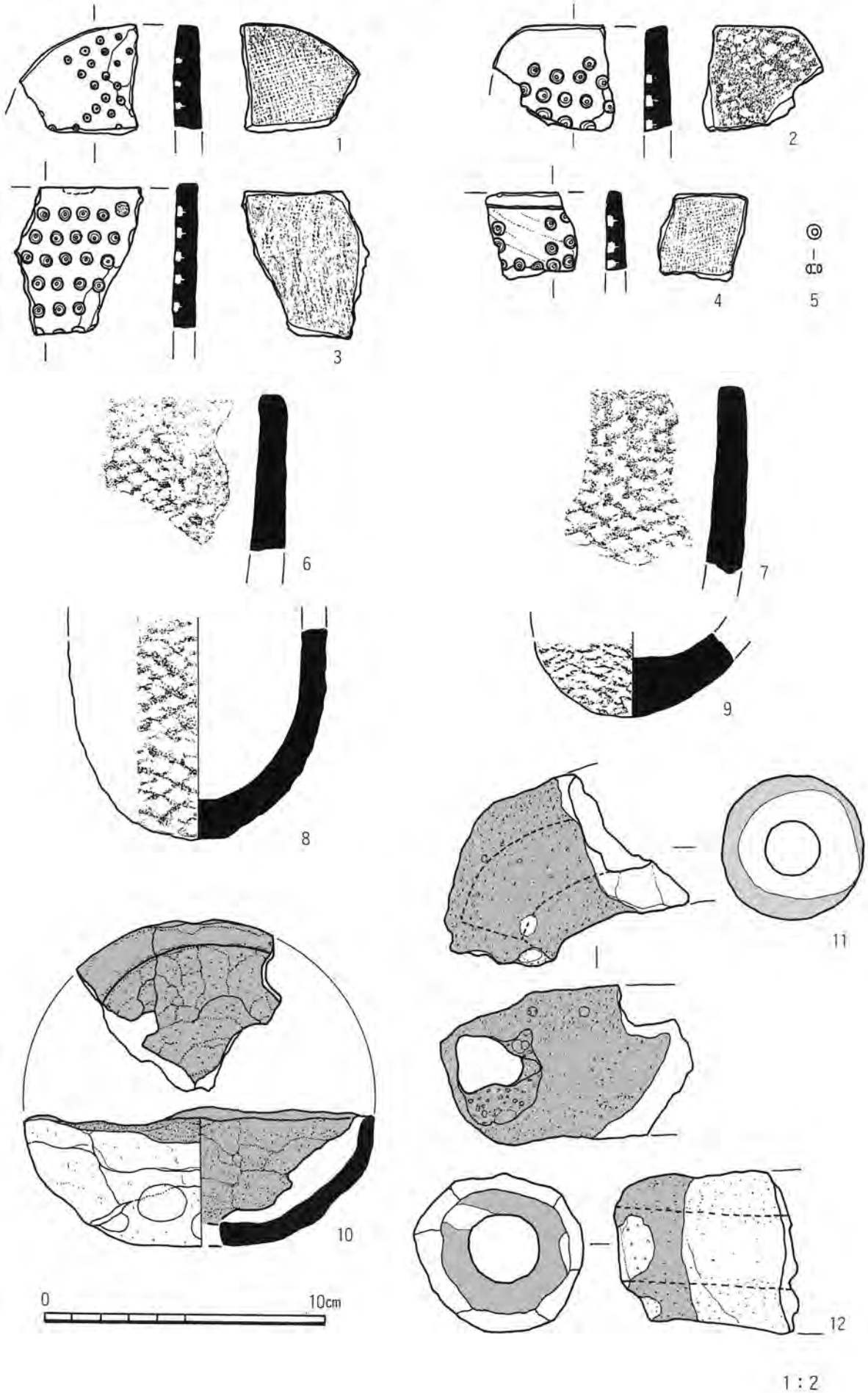


2：3

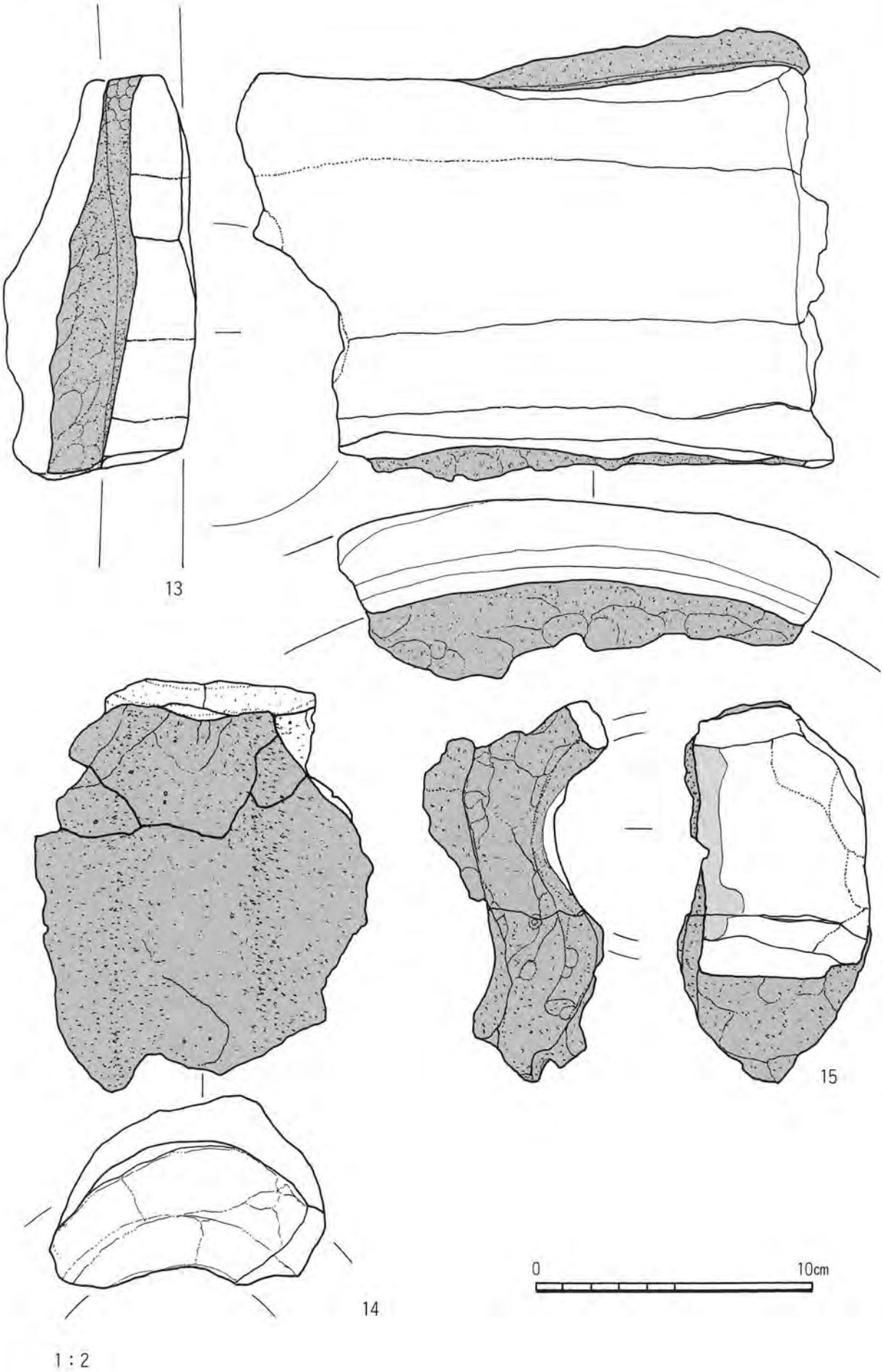
SD6400出土鉄製品実測図



22～27・29～37－SD6400　28－遺物包含層　22～36　2：3　37　1：3

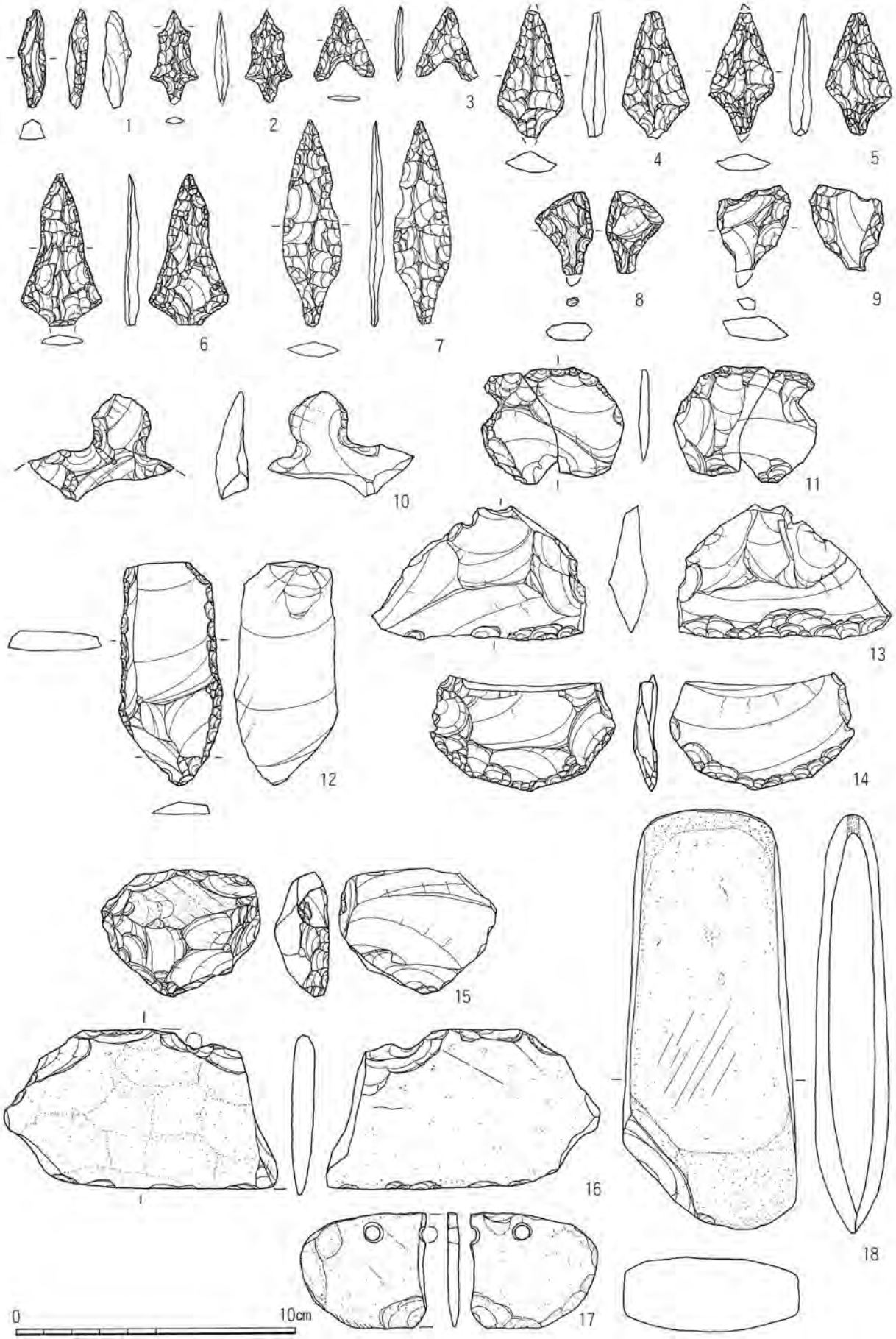

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
0
10cm
1:2

鋳造関連遺物実測図



1:2

弥生時代以前の石器実測図



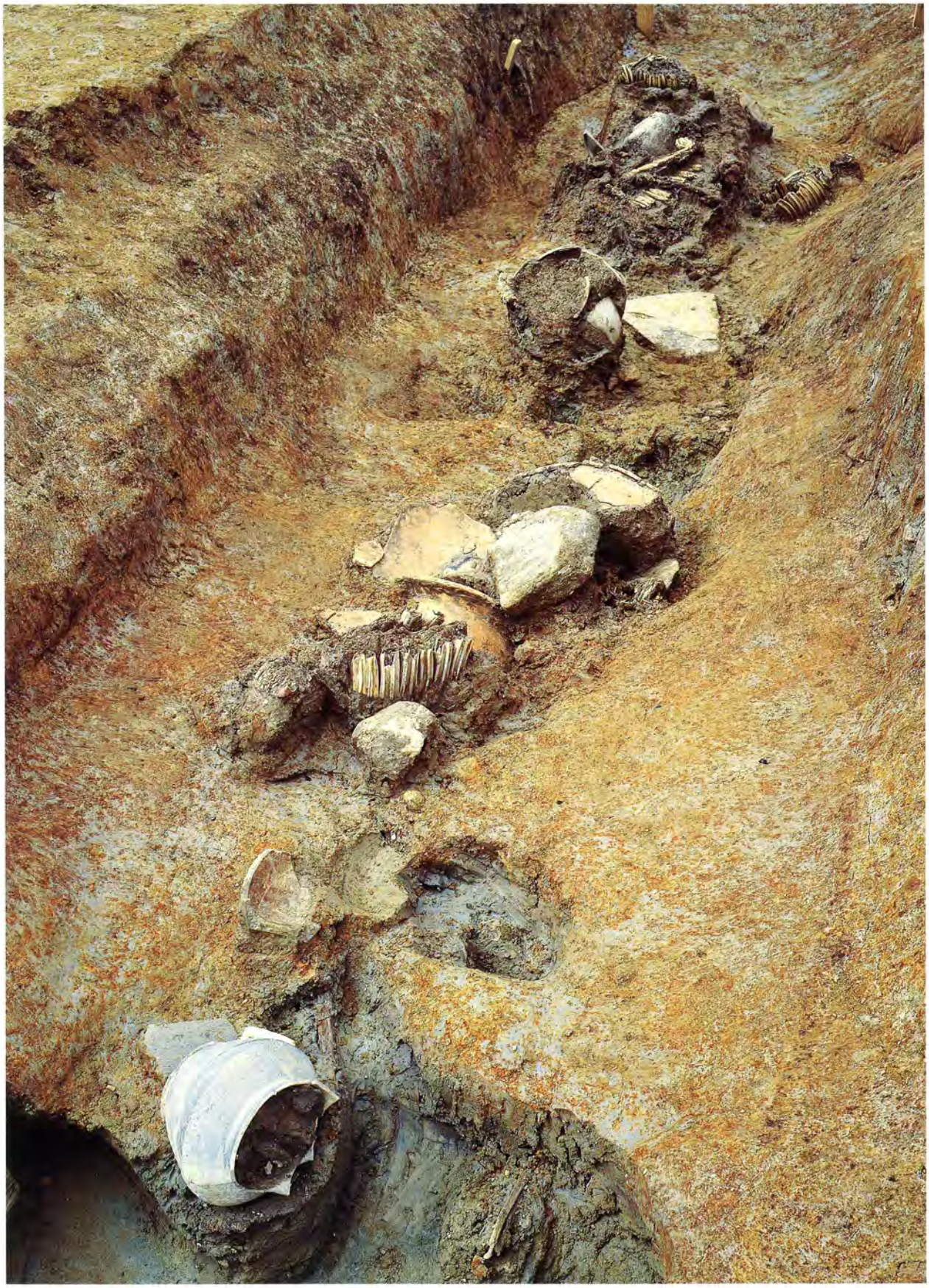
1：2

原　色　写　真

第252次調査区　北東上空から

第254次調査区　北東上空から

Color Ph. 2



祭祀土坑SX6530　東から

木棺墓SX6428　北から

木製人形

下　駄

木　印

金属製人形

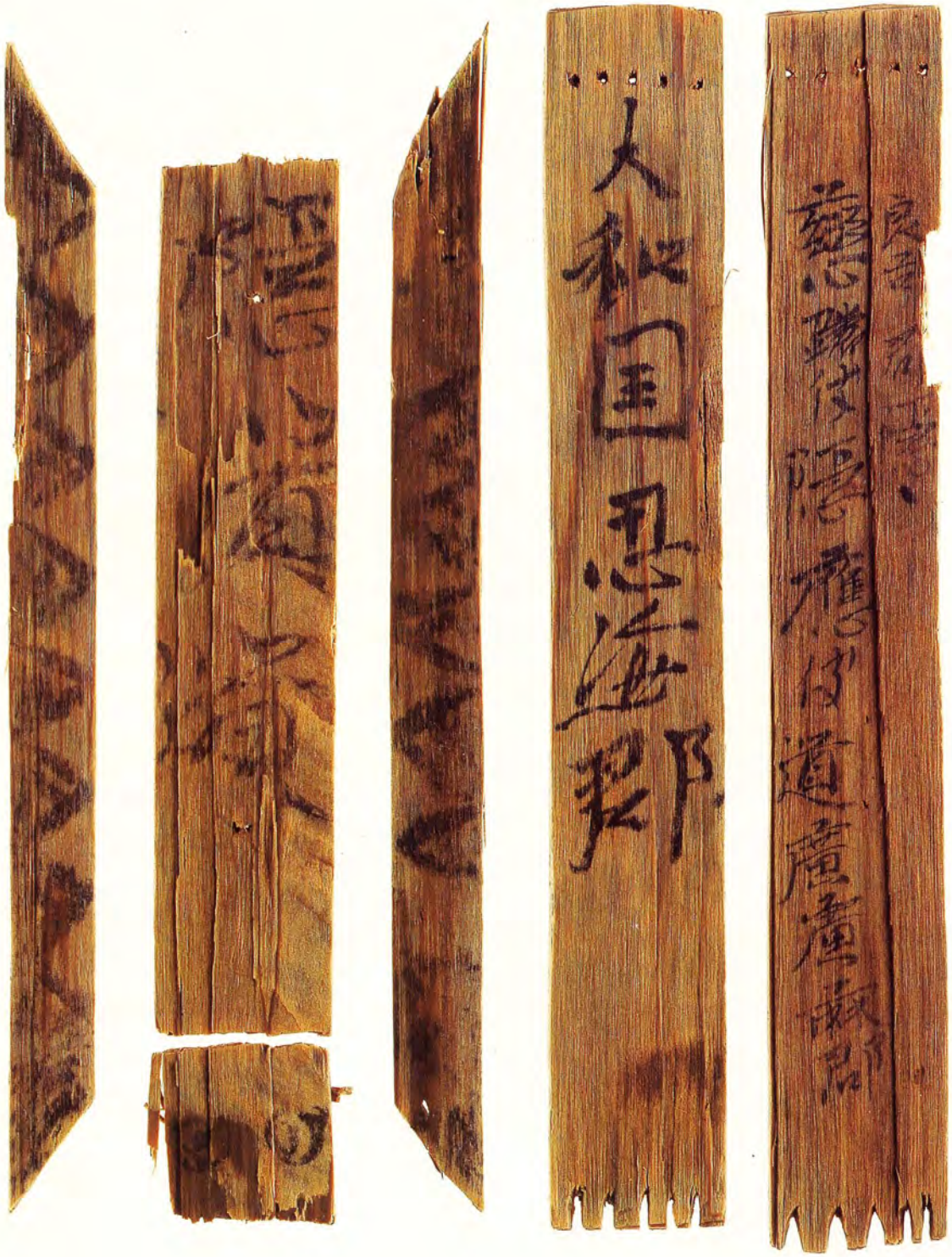
海老錠

ガラス製品関連遺物

鋳造関連遺物

石製品

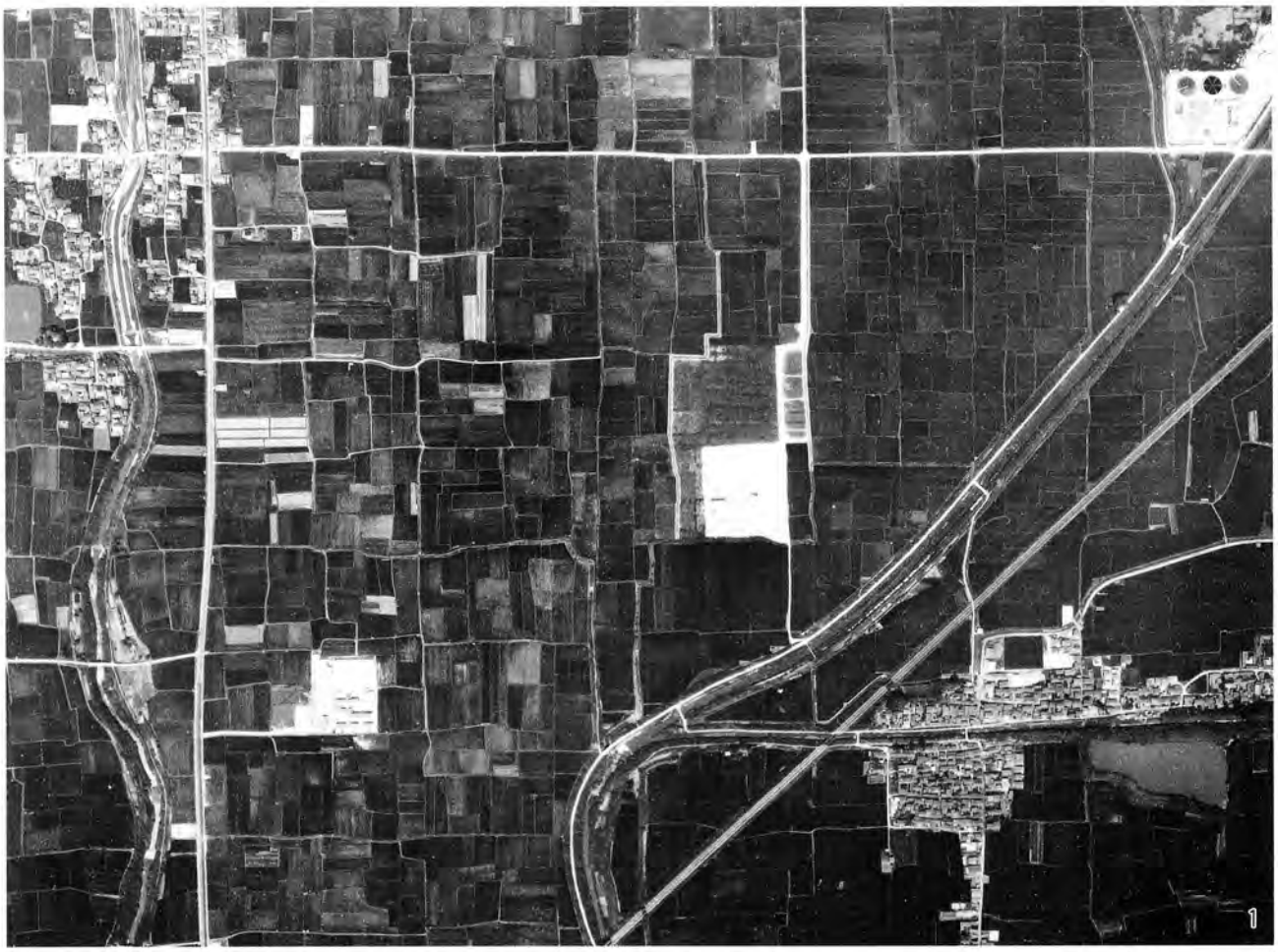
石　器



琴形木製品

写　真

調査地周辺の地形



1　1964年撮影　　2　1994年撮影

1：10,000

1 SD6400北半
南から

2 SD6400南半
南から

東一坊大路・東一坊大路東側溝

1　東一坊大路
SF6410
東側溝SD6411
西から

2　SD6411　南から

1　六条大路SF6450
北側溝SD6451
南側溝SD6449
雨落溝SD6446
南から

2　SD6449　東から

3　SD6451　東から

七条条間北小路・東一坊坊間東小路

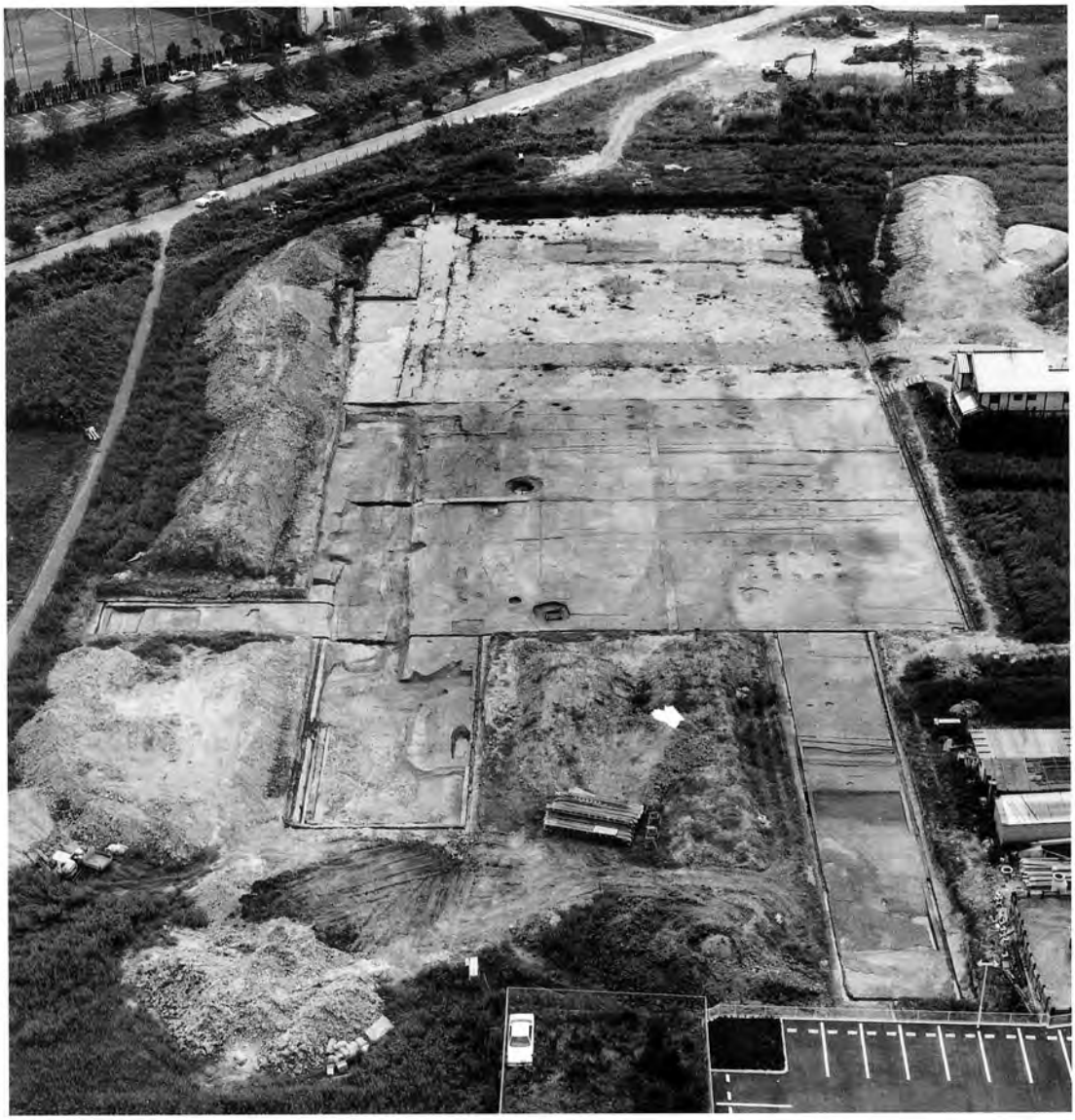
1　七条条間北小路
SF6470
南側溝SD6471
北側溝SD6472
西から

2　東一坊坊間東小路
SF6535
東側溝SD6534
七条条間北小路
北側溝SD6472
北から

1　調査区全景
東から

2　斜行溝
SD6403・6404
北から

第252次調査区1



1　調査区全景
北上空から

2　調査区全景
南から

1 SB6440・6441
北から

2 SB6435・6436
西から

3 SB6425・6426
西から

第253次調査区1

1　調査区全景
北上空から

2　調査区全景
南東から

3　SB6490・6495
北から

1 SB6500・6502
東から

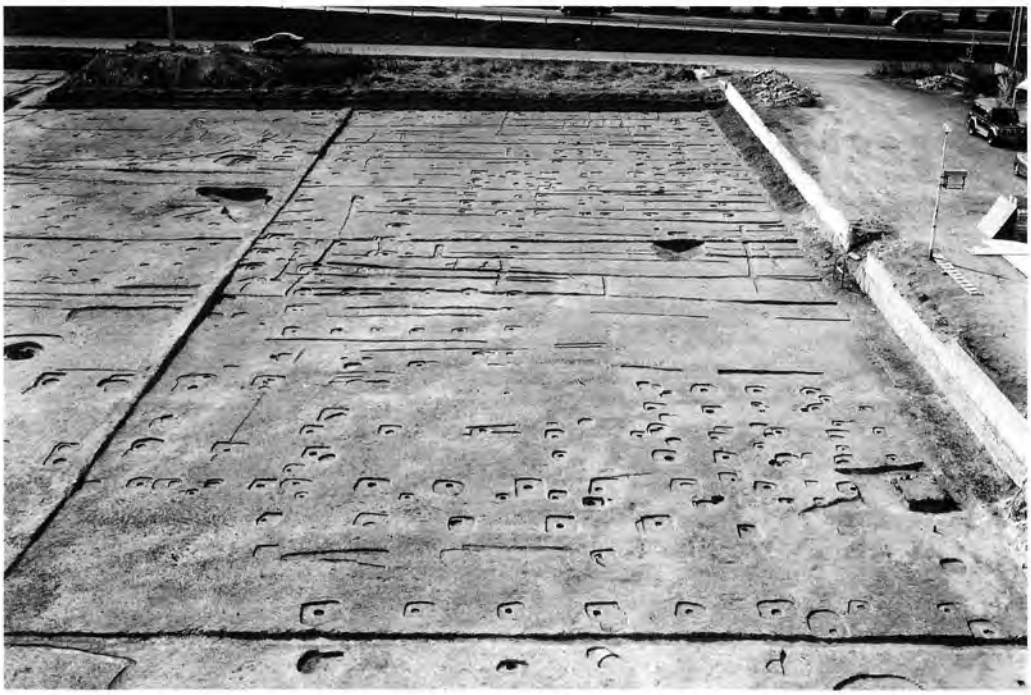
2 SB6505・SA6506
南から

3 SB6510 北から

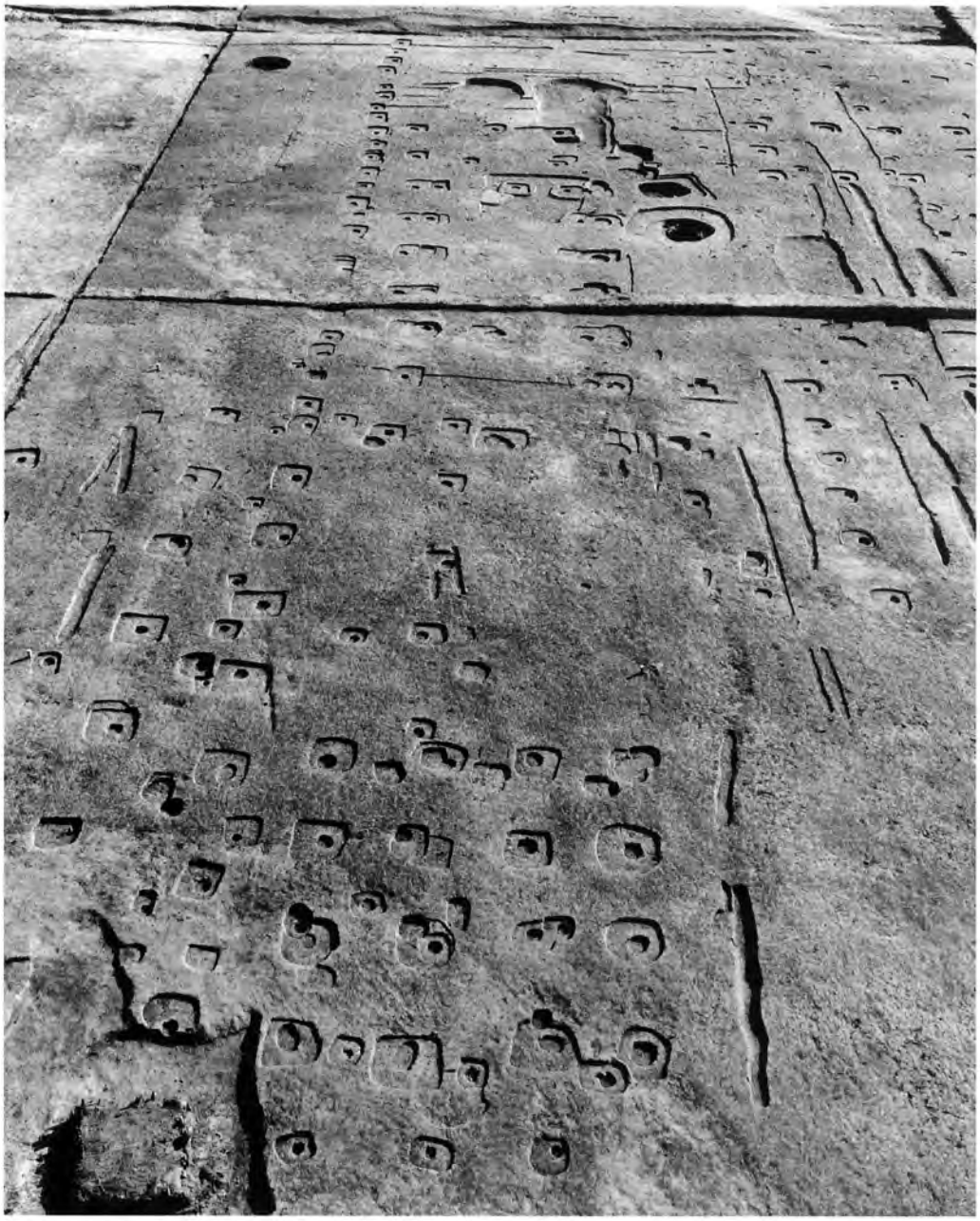
第254次調査区1

1　調査区全景
南西上空から

2　調査区全景
東から



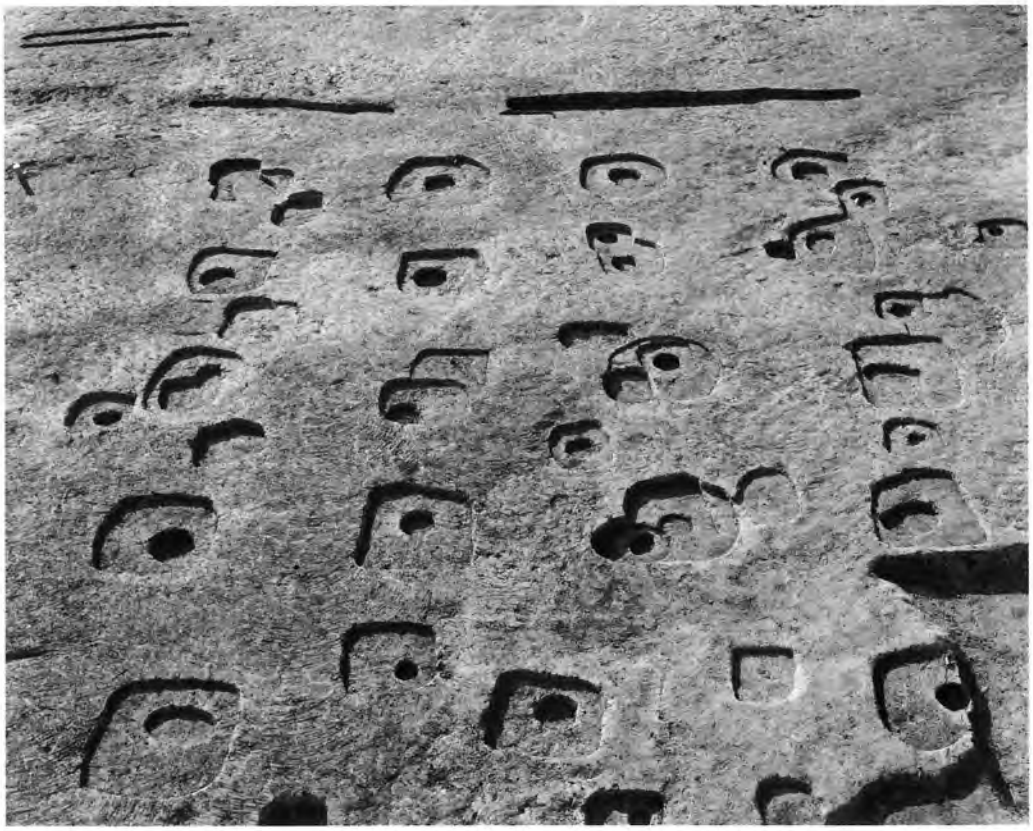
3　調査区北半
東から



1　調査区東半
北から

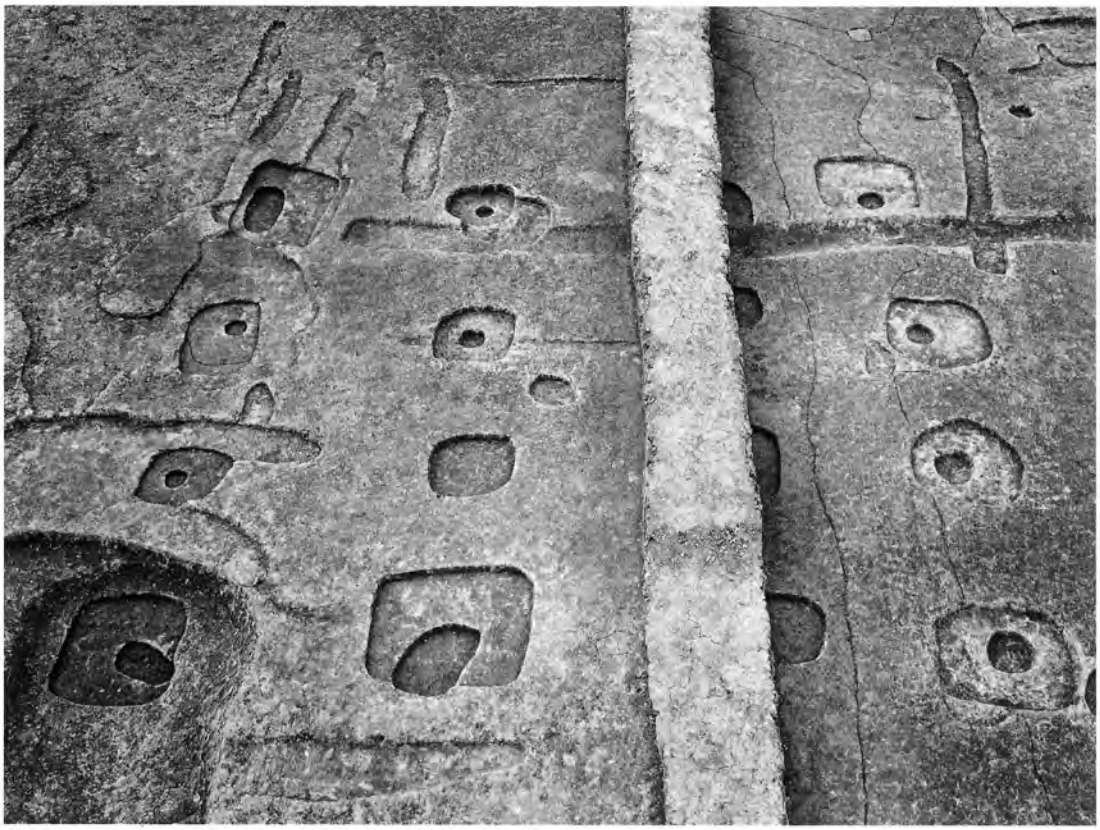
2　SB6570　北東から

1　SB6555・6560
SA6540・6541
北から



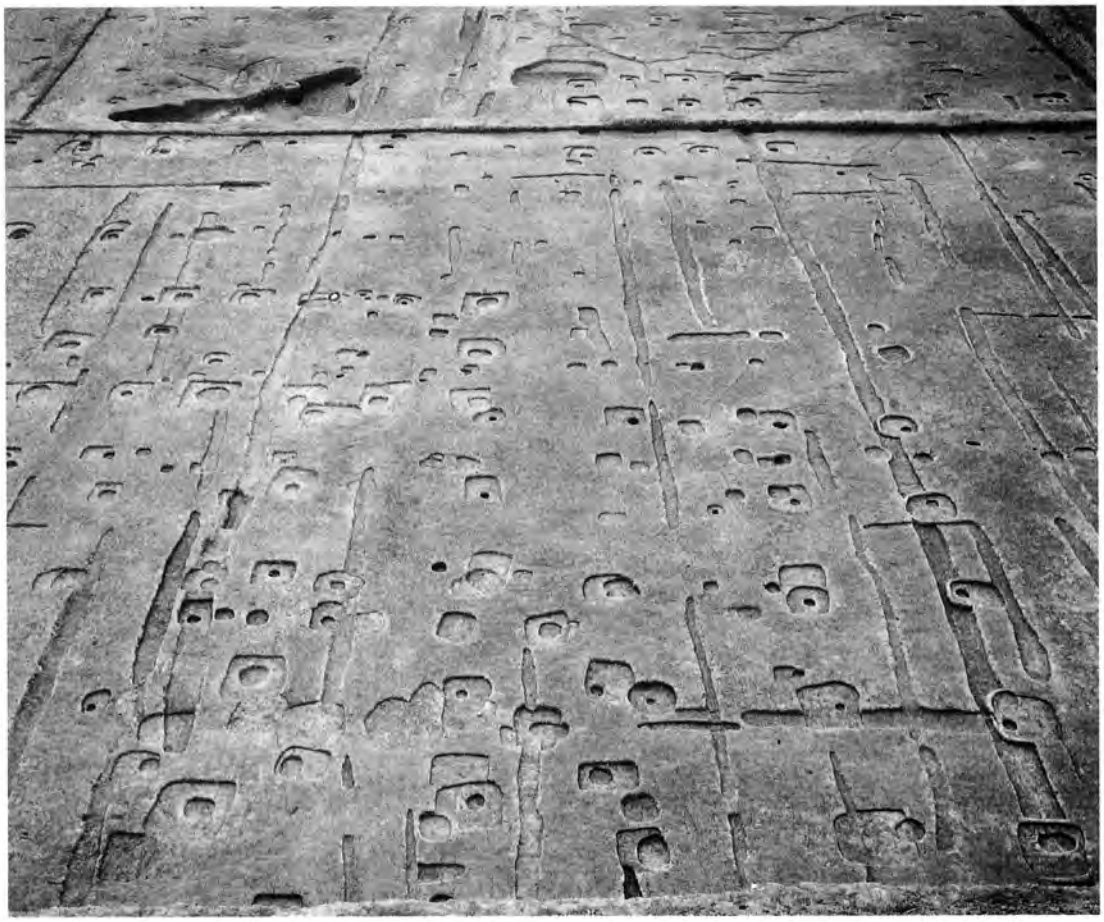
2　SB6562・6563
東から

1 SA6575・6567・6559 西から



2 SB6585 東から

第254次調査区5



1　SB6590・6591・6595　北から

2　SB6600・6601　西から

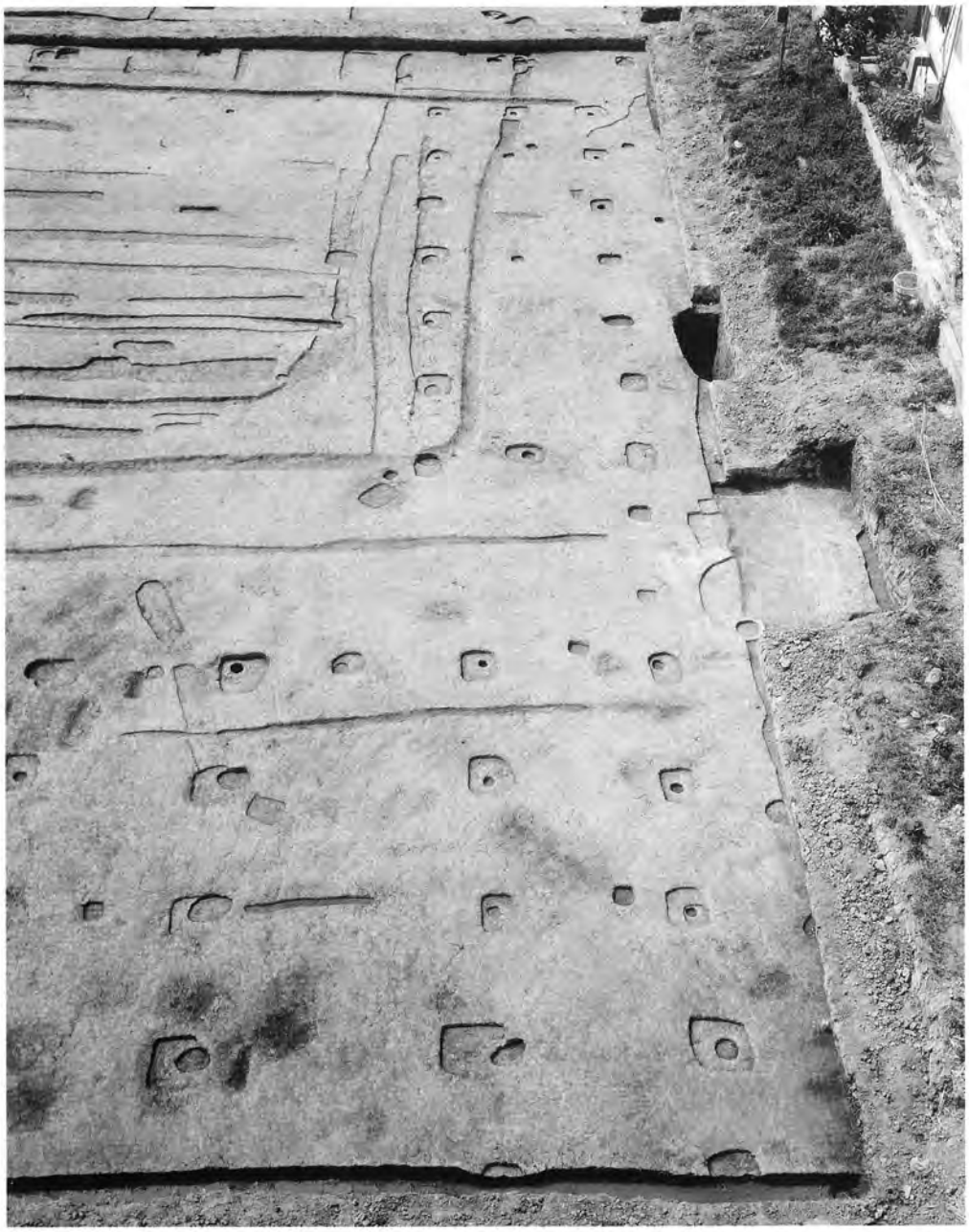
1　SB6602・6605　南東から　　2　SB6606　南東から　　3　SB6469・6522　西から

第255次調査区1

1　調査区全景
北から

2　調査区全景
東から

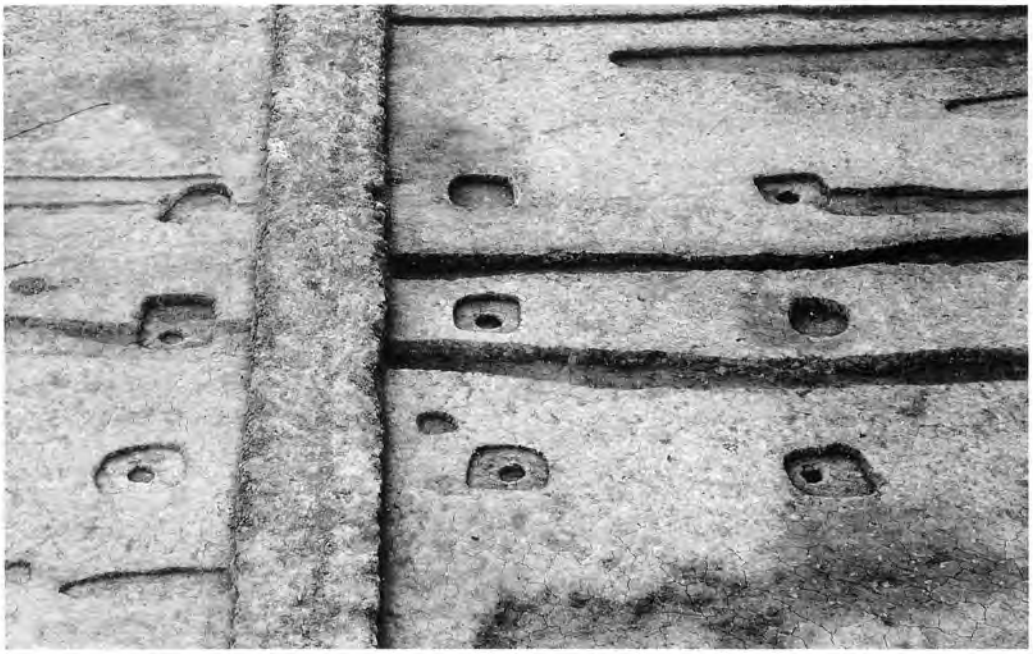
3　SB6639・6640
東から



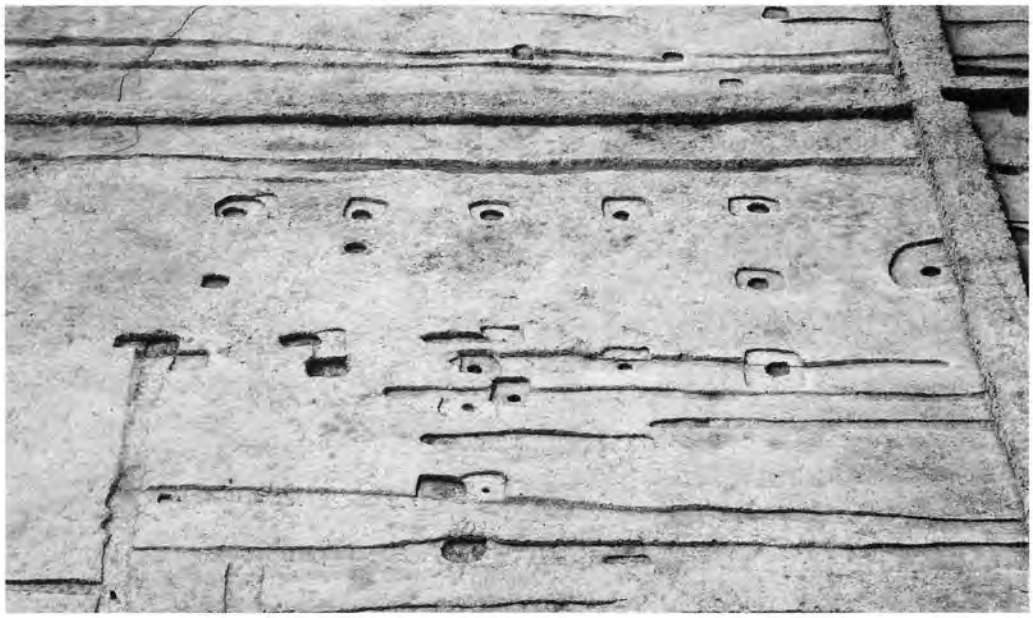
1 SB6630・6635・SK6636・SA6670 東から

2 SB6665・6666 南東から

第255次調査区3

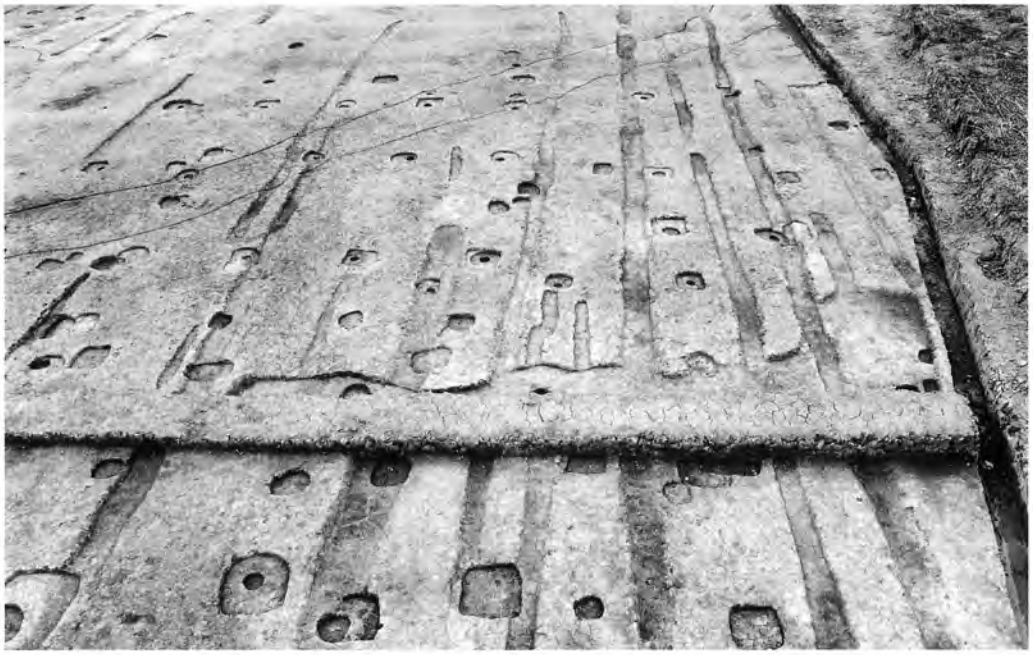


1　SB6626　東から



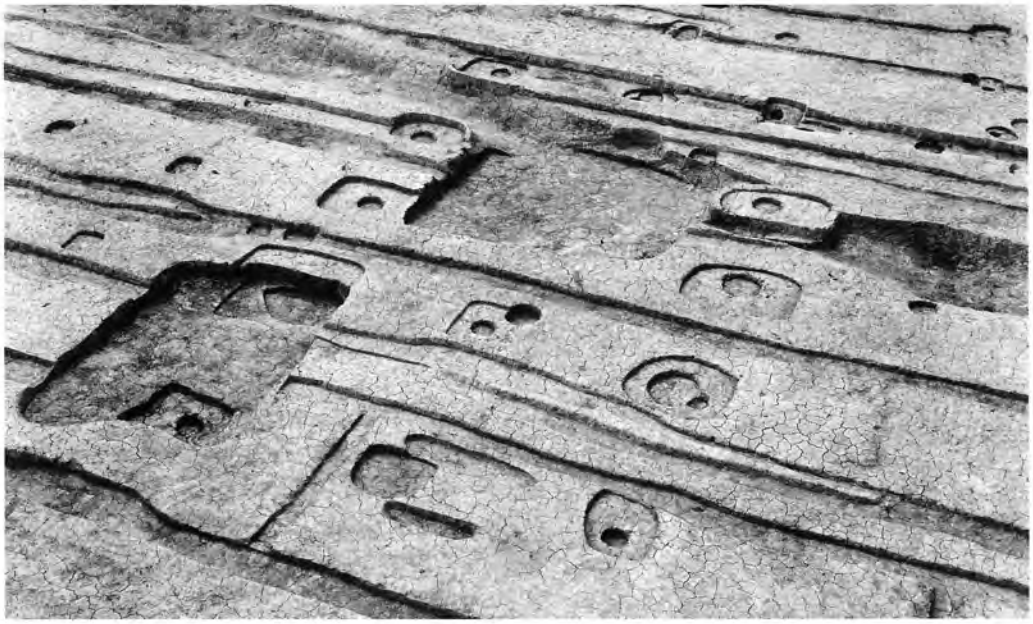
2　SB6625　東から

3　SB6620　北東から

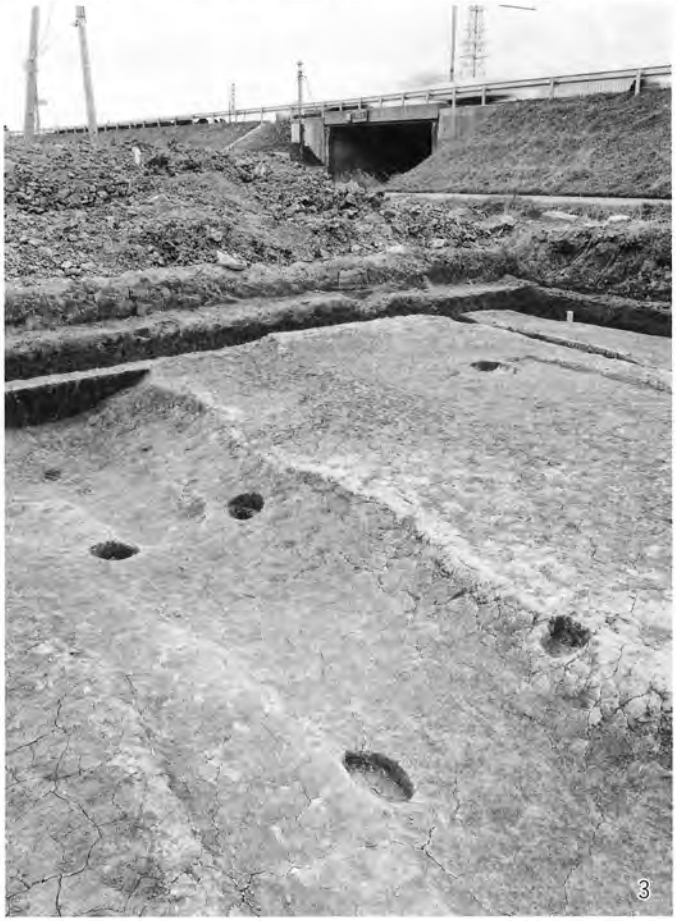


1 SB6645・6646・6647 北から

2 SB6650・6652・SD6642 東から

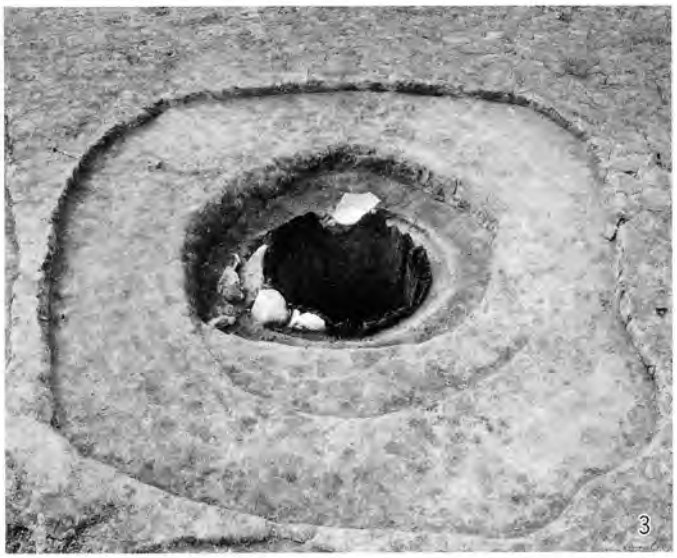


3 SB6660・SE6658・SK6659 北東から

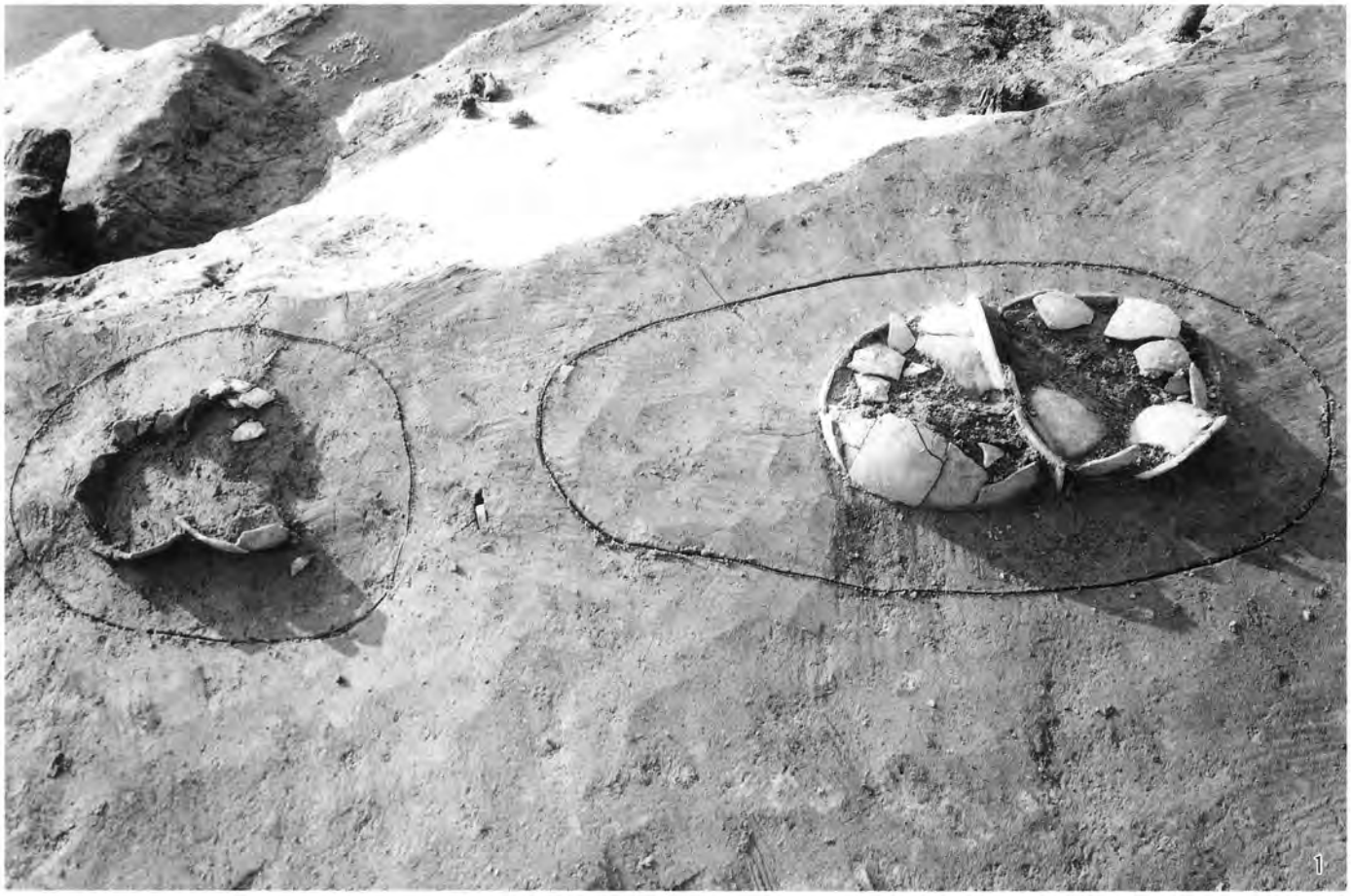


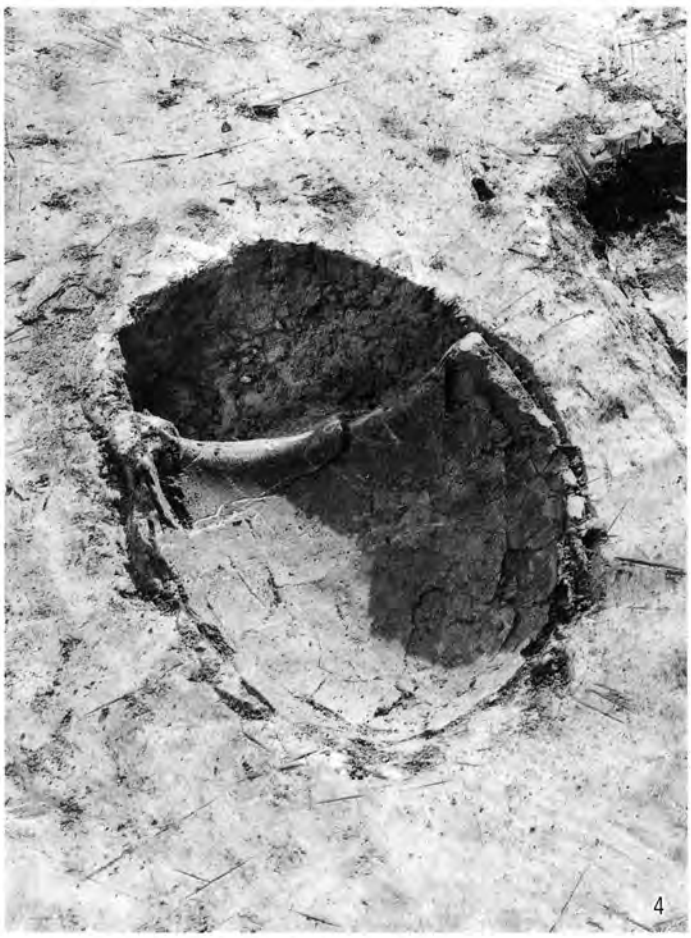
1　橋SX6420　西から　　2　橋SX6525　北東から　　3　橋SX6532　北東から　　4　土坑SK6423　北から

1　東西溝SD6430・地橋SX6429　東から　　2　南北溝SD6594　北から　　3　祭祀土坑SX6530　東から
4　木棺墓SX6428　南から



1　井戸SE6432　東から　　2　同前井戸枠　南から　　3　井戸SE6561　東から　　4　同前井戸枠　南西から
5　井戸SE6657　南西から　　6　曲物埋設遺構SX6422　東から





1 SX6460・6461 東から　2 SX6448 西から　3 SX6485 西から　4 SX6533 北東から

軒丸瓦

6012B

6143A

6272B

6282Bb

6282Ca

6285A

6291Ab

6304L

6314A

6308C

6346Aa

6346Ab

1 : 3

6641J

6663F

6663J

6668C

6681A

6681C

6691A

6703A

6710A

6710C

6716C

6721A

6721A

6721C

6721Gb

文様塼

1：3

丸瓦・平瓦・土管

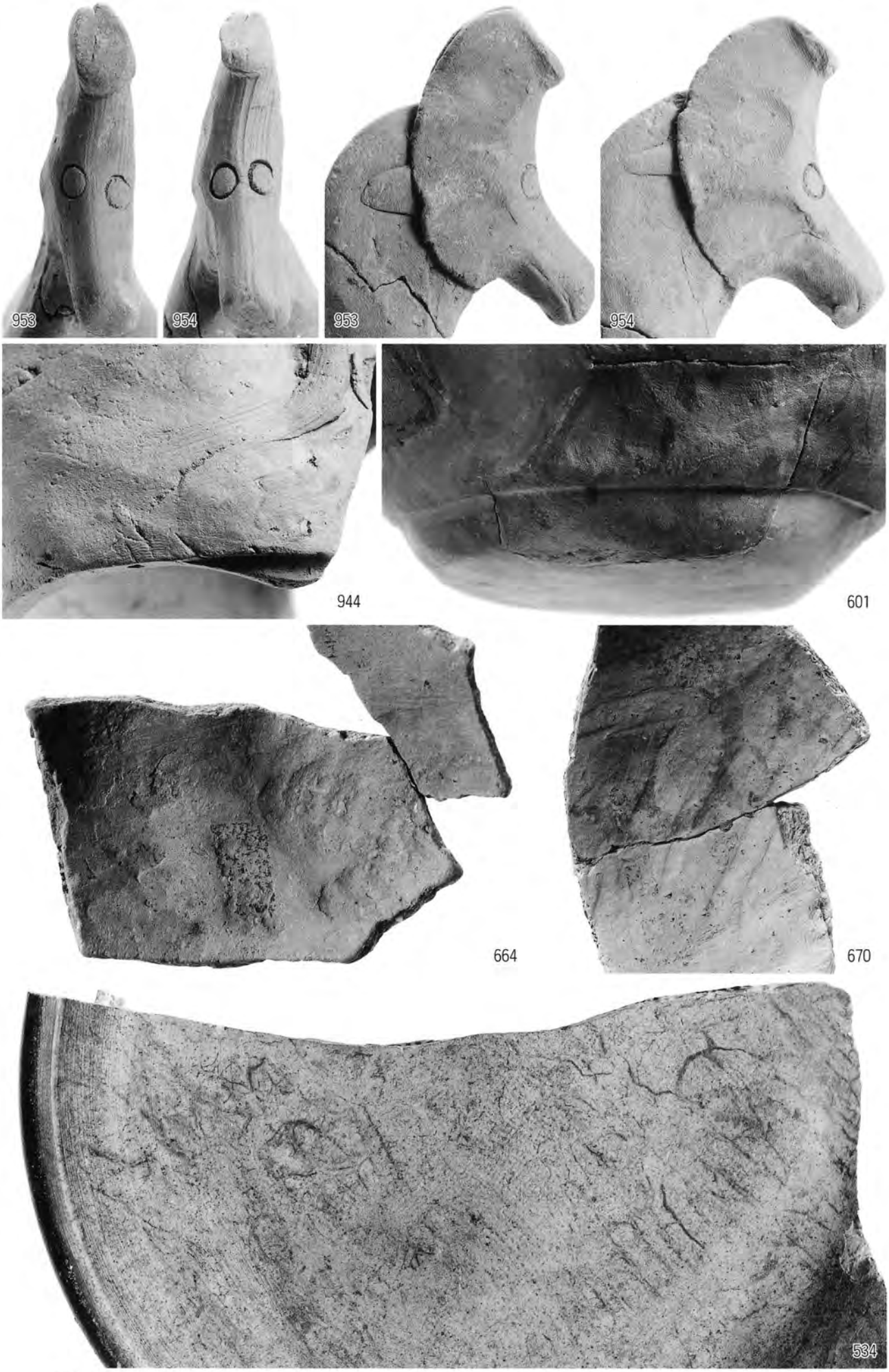
丸瓦

土管

平瓦2

平瓦1

1：3



953・954—土馬　944—小型模造竈　601—墨書人面土器底部
664・670—墨書人面土器内部当具痕　534—硯面の布目

1：1

SD6400出土土師器1

3

26

4

1

7

5

8

28

39

34

29

35

45

46

47

50

48

63

2：5

53

18

22

52

19

21

56

20

17

55

15

25

73

57

65

67

71

70

72

2：5

SD6400出土土師器3

77

75

74

79

81

82

78

2：5

202

203

237

231

213

210

209

255

214

225

256

235

230

252

242

264

238

261

267

266

2：5

SD6400出土須恵器2

292

294

275

268

282

280

283

277

293

2：5

302

300

296

286

303

284

295

317

315

319

314

2：5

SD6400出土須恵器4

316

318

328

325

333

322

316・318　2：5　　322・325・328・333　1：5

2：5

井戸出土土器1

95

369

100

102

103

2：5

107

108

104

105

106

374

375

2：5

井戸出土土器3

126

127

128

112

110

118

120

130

121

131

123

382

379

383

385

386

2：5

388

134

390

386

393

389

395

391

397

392

409

398

2：5

埋納遺構出土土器1

412

141

410

413

143

142

144

145

141・410・412・413　2：5　　142～145　1：4

146

147

148

149

503

151

414

153

146～149・151　1：4　　153・414・503　2：5

平城京造営以前・廃絶以降の土器

505　504

506

507

520

514

512

513

431

523

524

158

423

504～507　1：2　　他　2：5

535

531

534

538

539

541

536

529

525

542

1：2

墨書人面土器1

604

603

601

601′

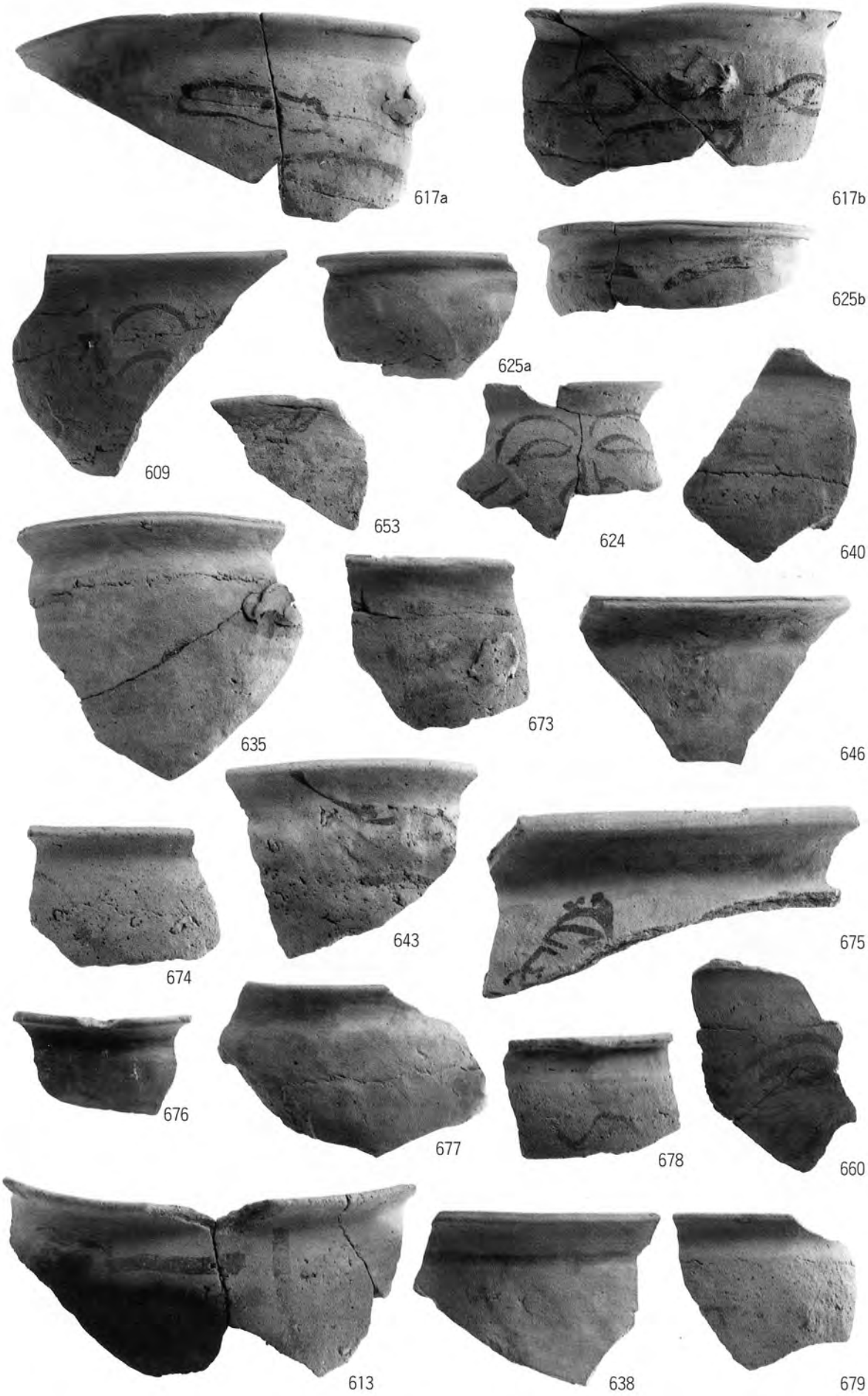
606

610

607

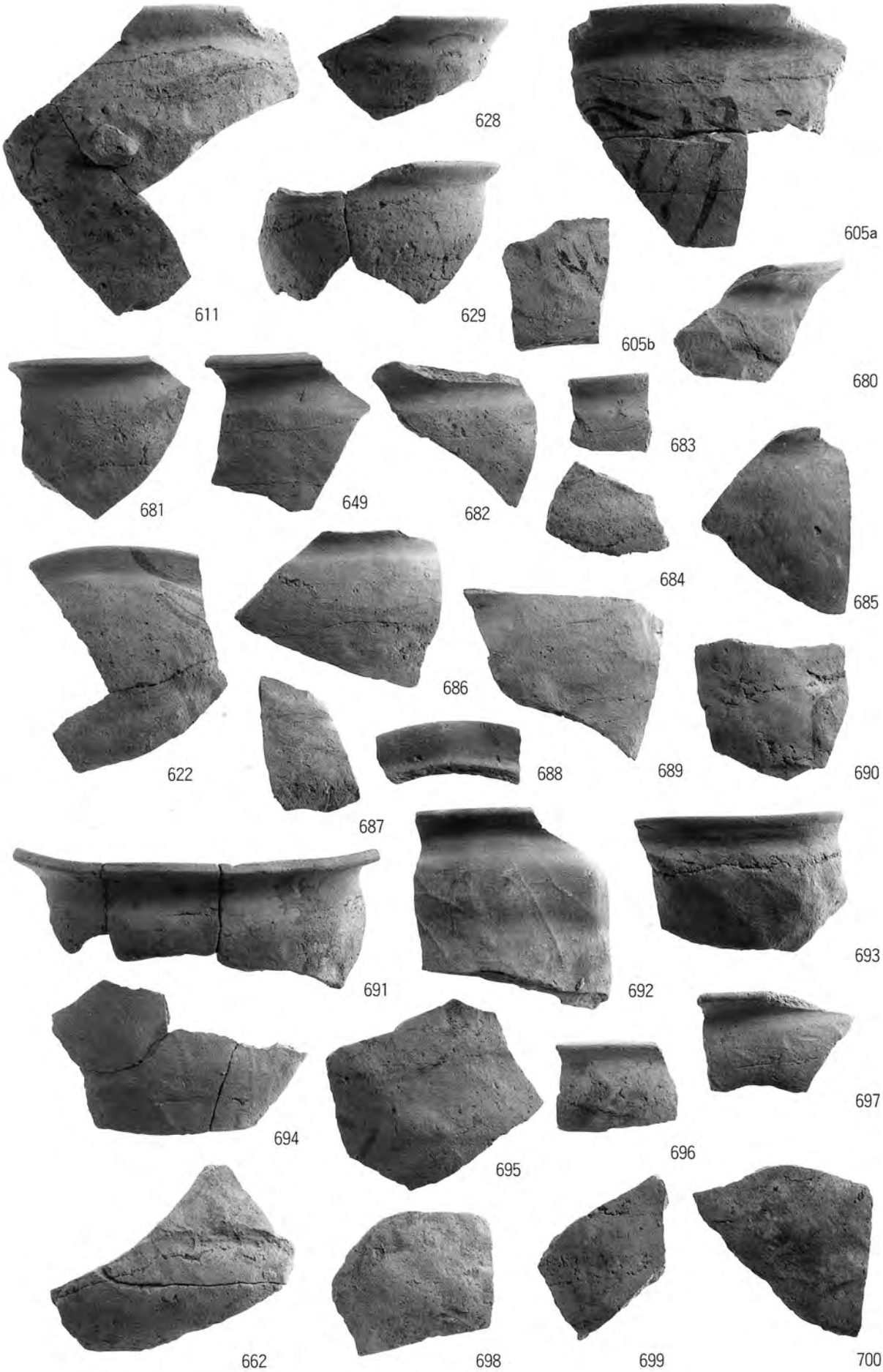
607′

2：5

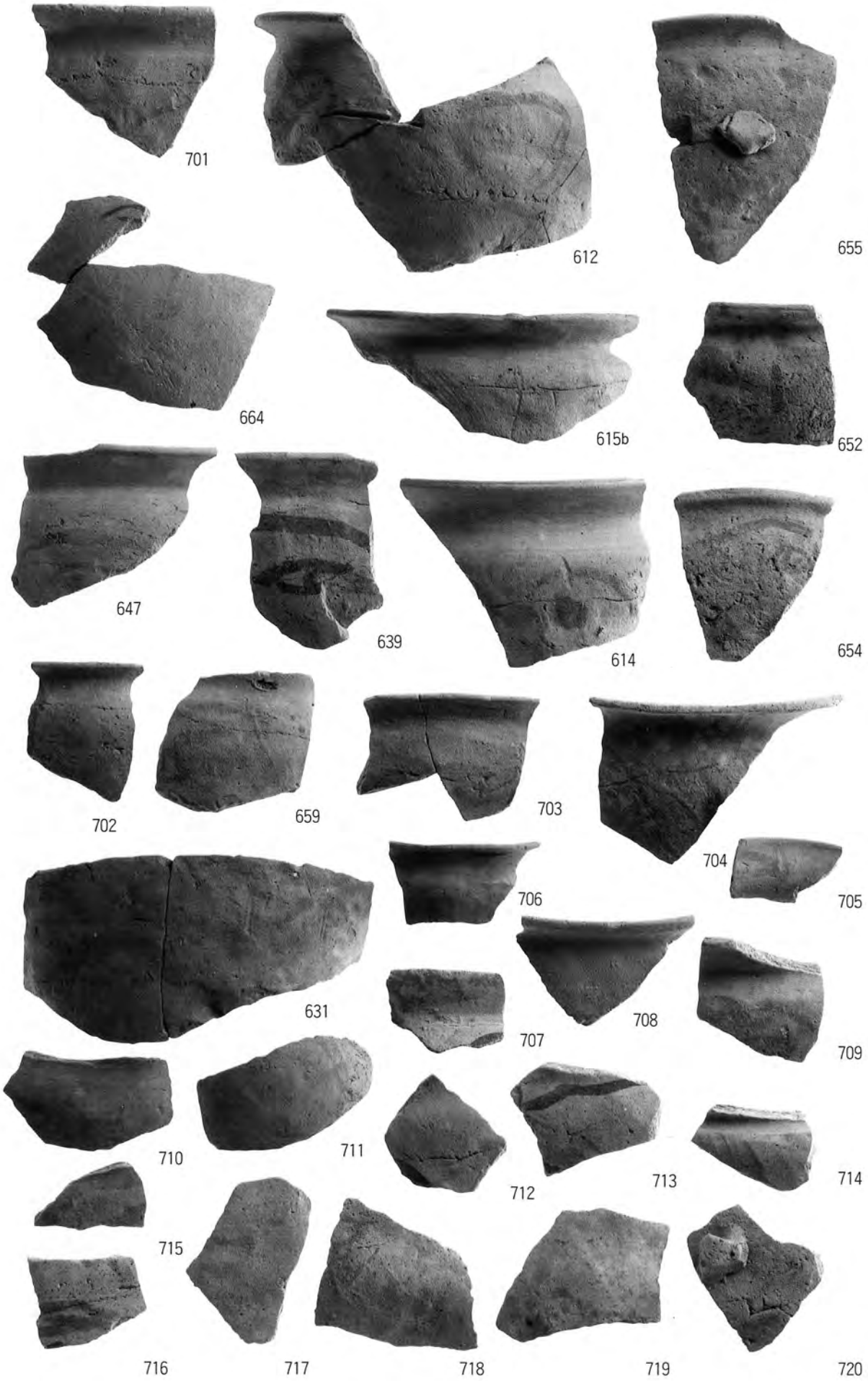

617a
617b
625b
625a
609
653
624
640
635
673
646
674
643
675
676
677
678
660
613
638
679

1：2

墨書人面土器3

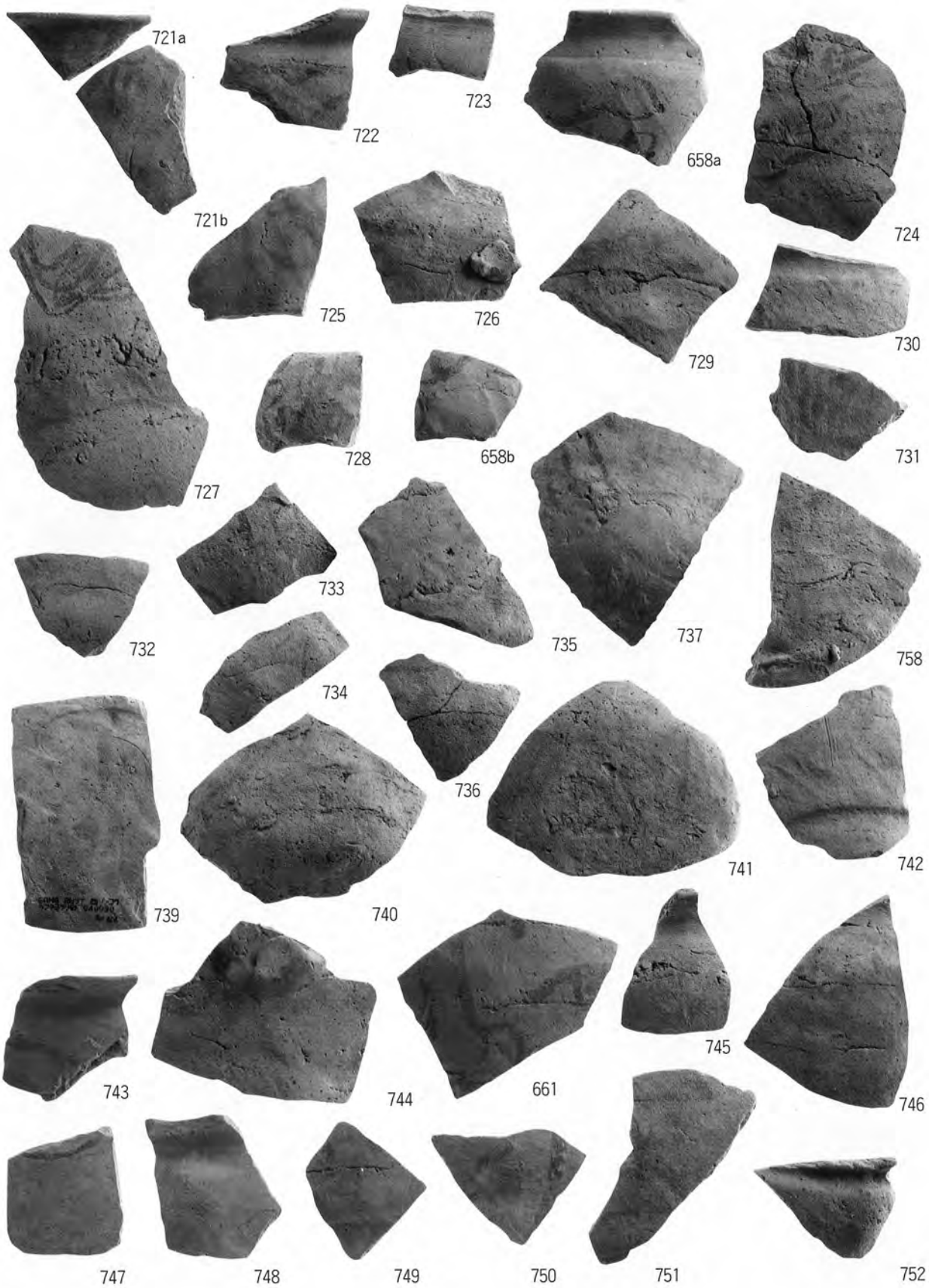

628
605a
611
629
605b
680
681
649
682
683
684
685
686
622
688
689
690
687
691
692
693
694
695
696
697
662
698
699
700

1：2

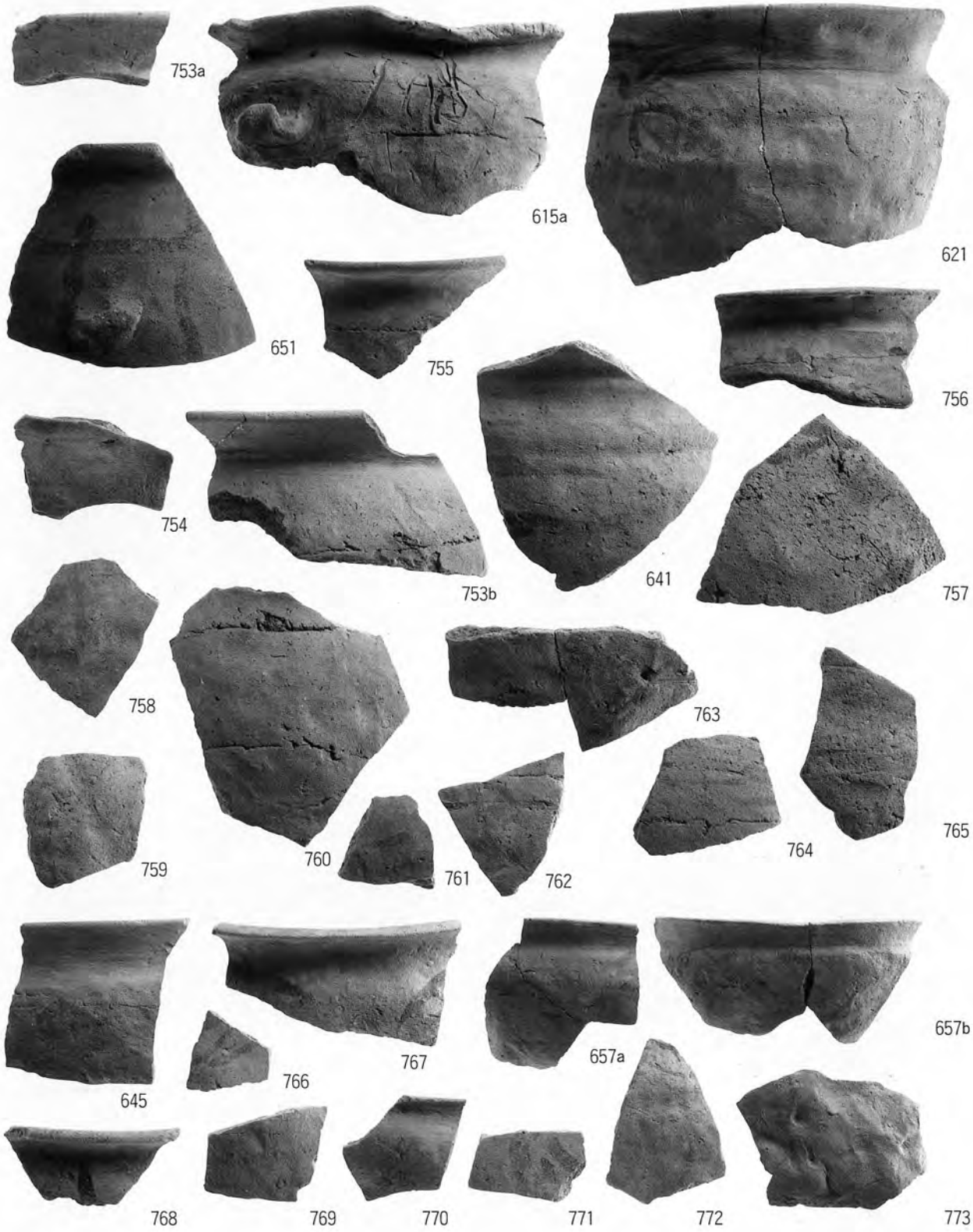

701
612
655
664
615b
652
647
639
614
654
702
659
703
704
705
706
631
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720

1：2

墨書人面土器5

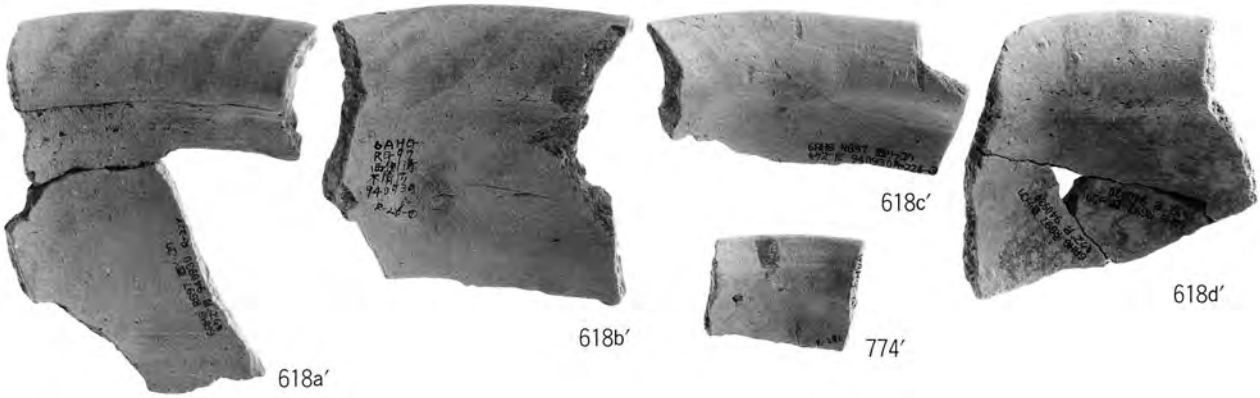

721a
722
723
658a
724
721b
725
726
729
730
727
728
658b
731
732
733
735
737
758
734
736
741
742
739
740
743
744
661
745
746
747
748
749
750
751
752

1：2

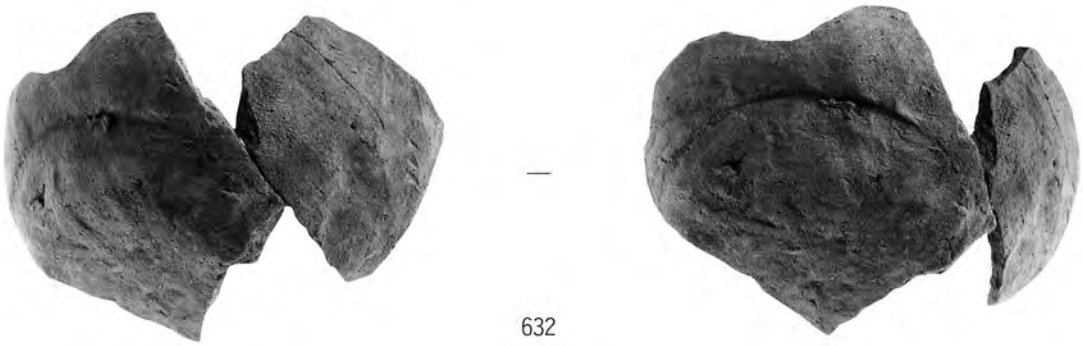

753a
615a
621
651
755
756
754
753b
641
757
758
763
759
760
761
762
764
765
645
766
767
657a
657b
768
769
770
771
772
773

1：2

墨書人面土器7

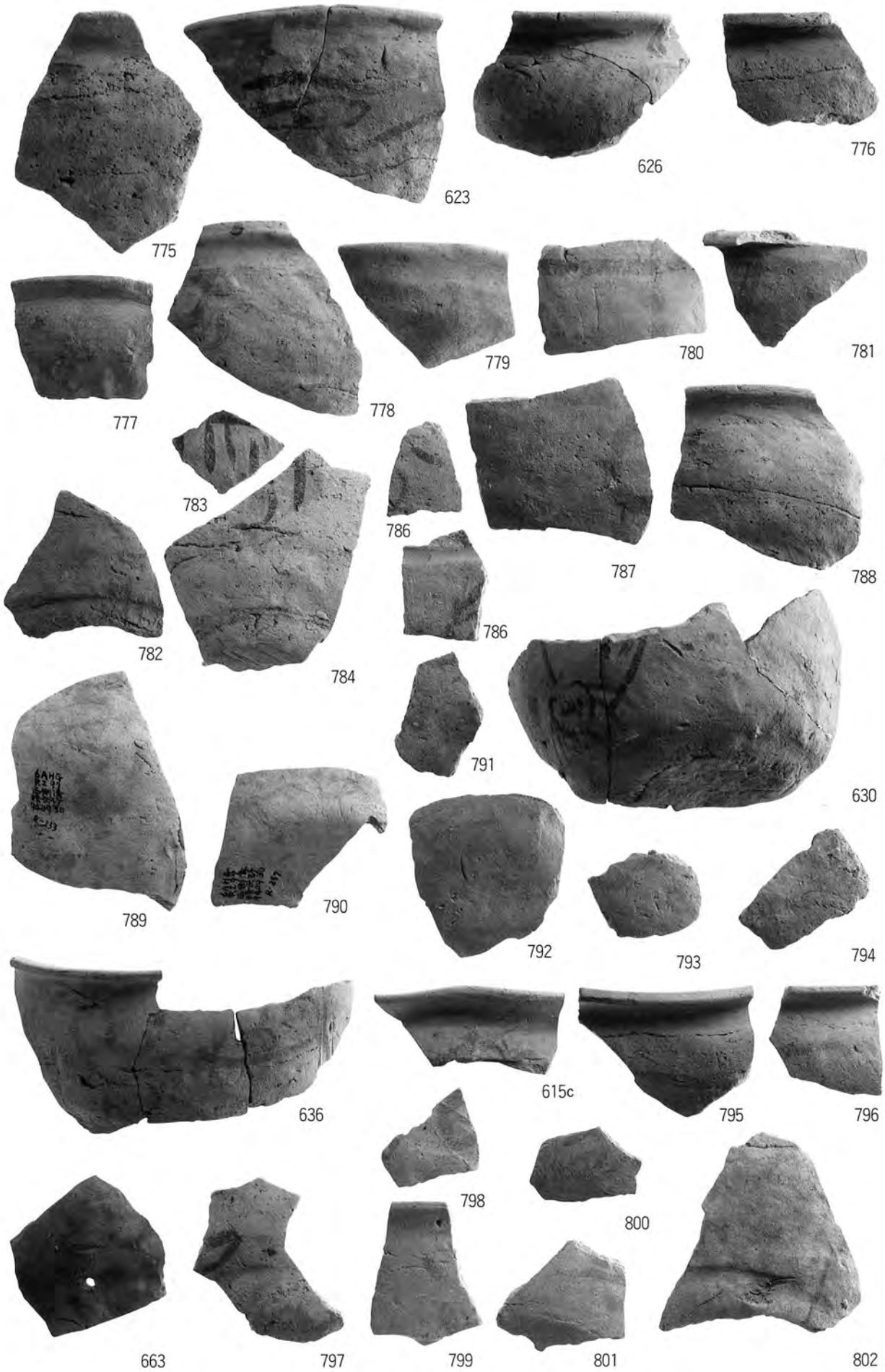


602



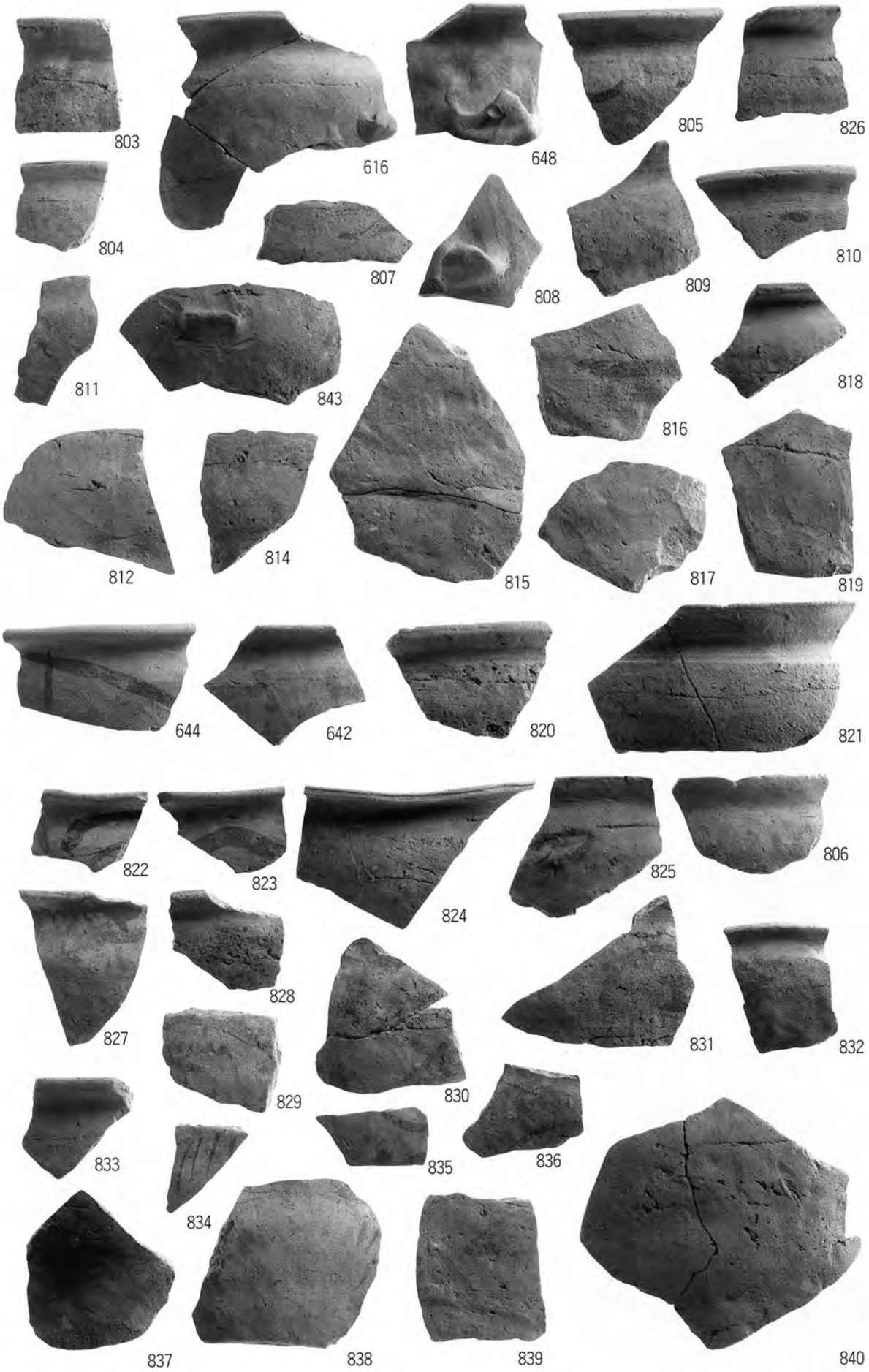
632

1：2

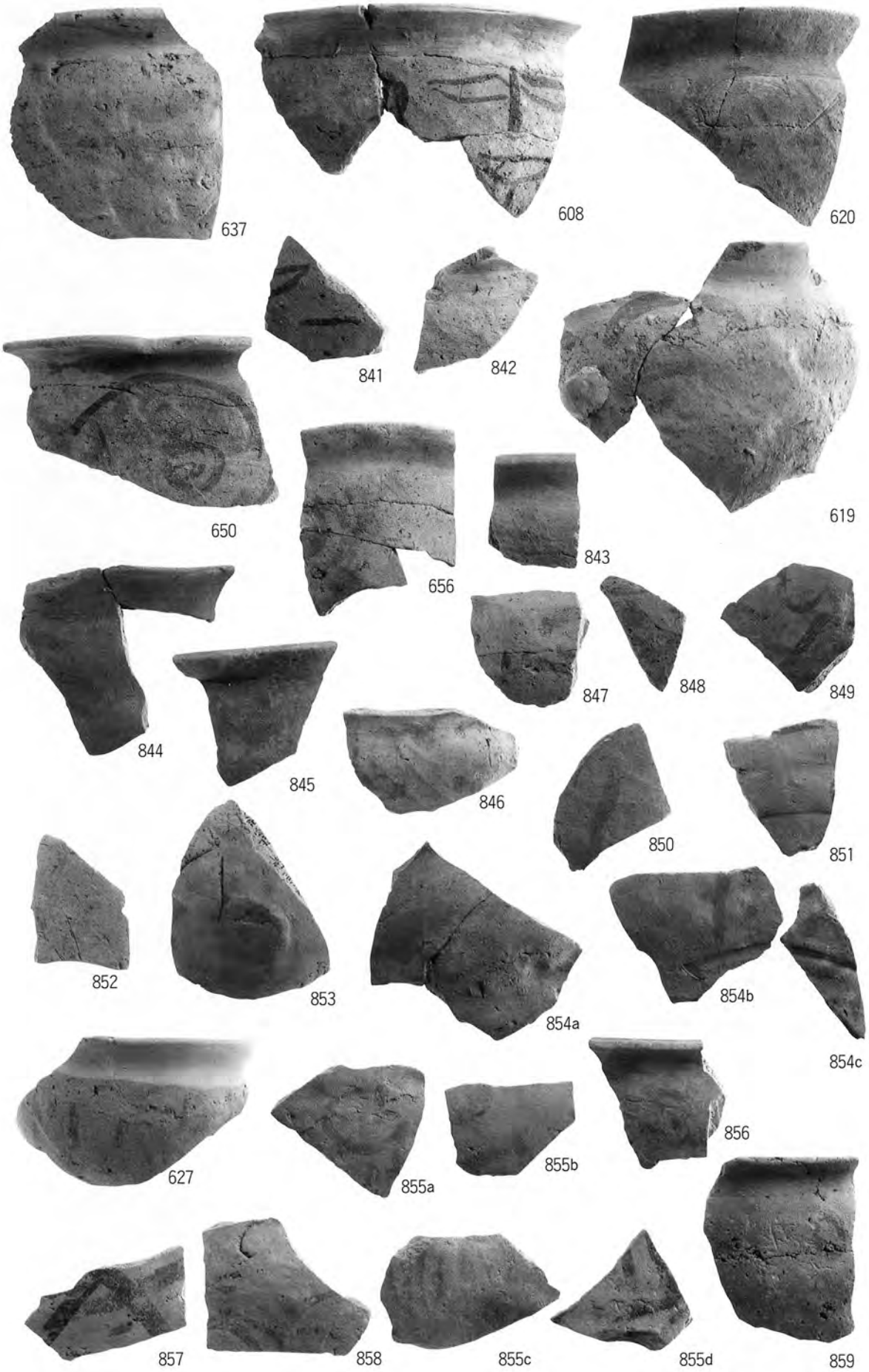

623
626
776
775
777
778
779
780
781
783
786
787
788
782
784
786
791
630
789
790
792
793
794
636
615c
795
796
798
800
663
797
799
801
802

1 : 2

墨書人面土器9

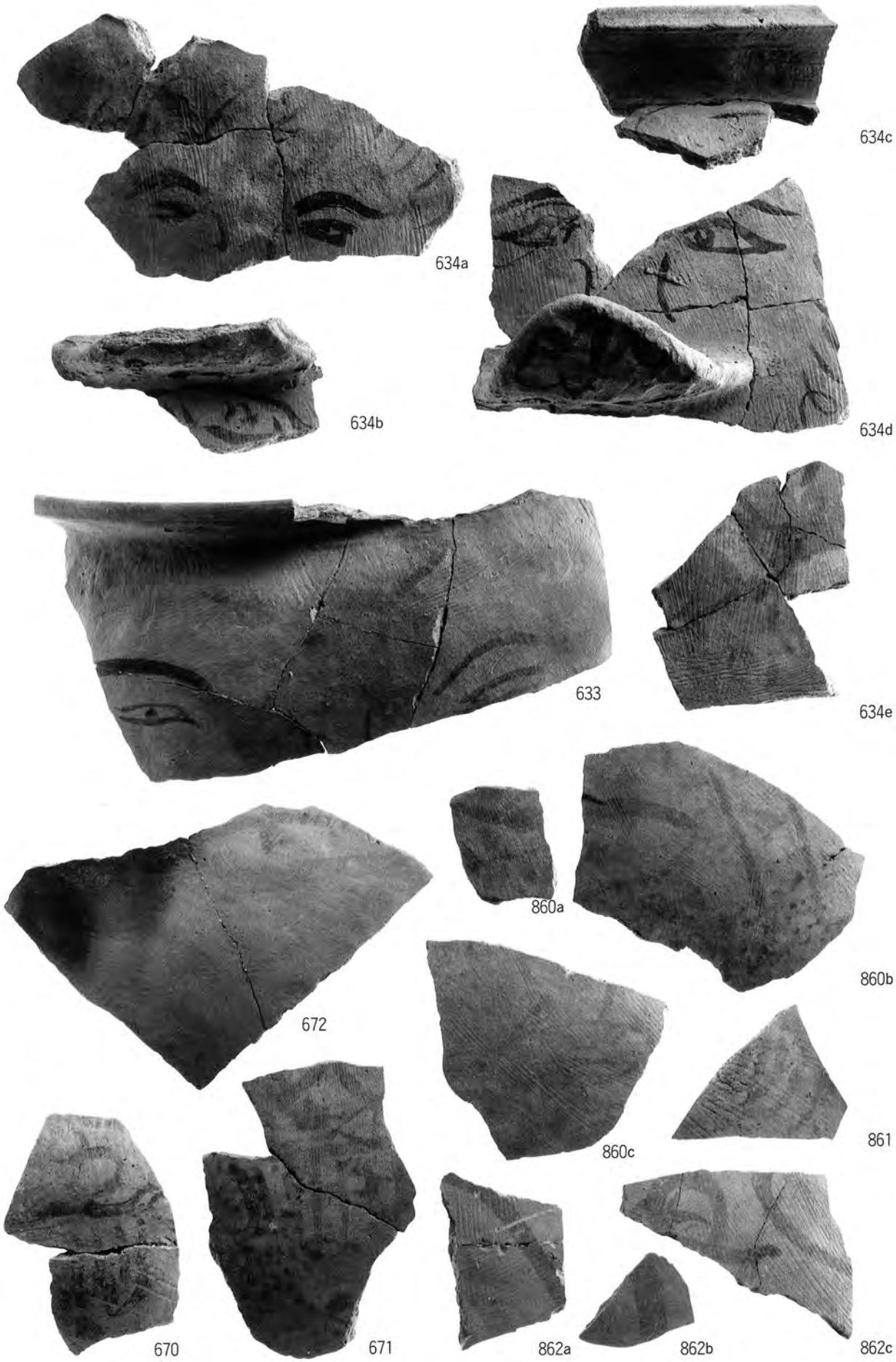

803
616
648
805
826
804
807
808
809
810
811
843
816
818
812
814
815
817
819
644
642
820
821
822
823
824
825
806
827
828
831
832
829
830
833
835
836
834
837
838
839
840

1：2

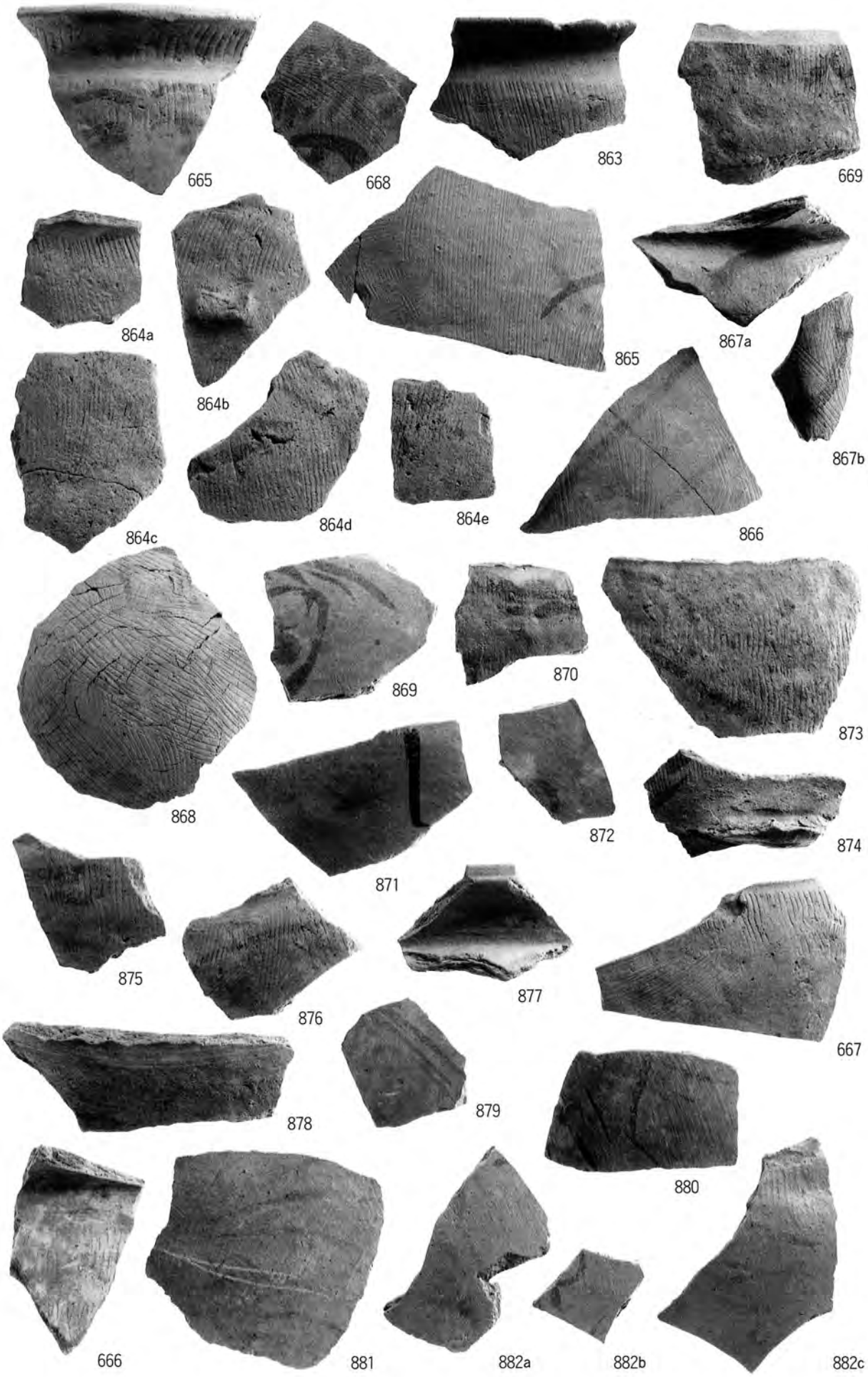

637
608
620
841
842
650
619
656
843
844
847
848
849
845
846
850
851
852
853
854a
854b
854c
627
855a
855b
856
857
858
855c
855d
859

1：2

墨書人面土器11


634a
634b
634c
634d
633
634e
860a
860b
672
860c
861
670
671
862a
862b
862c

1：2


665
668
863
669
864a
864b
865
867a
867b
864c
864d
864e
866
868
869
870
873
872
874
871
875
876
877
667
878
879
880
666
881
882a
882b
882c

1：2

小型模造土器1

904・929・941

904・906・923

904

923

908

906

901

922

921

911

909

925

916

912

913

918　917　919

1：2

928

929

930

934

935

938

939

932

940

937

941

943

942

944

1：2

土馬1

953

954

960

961

958

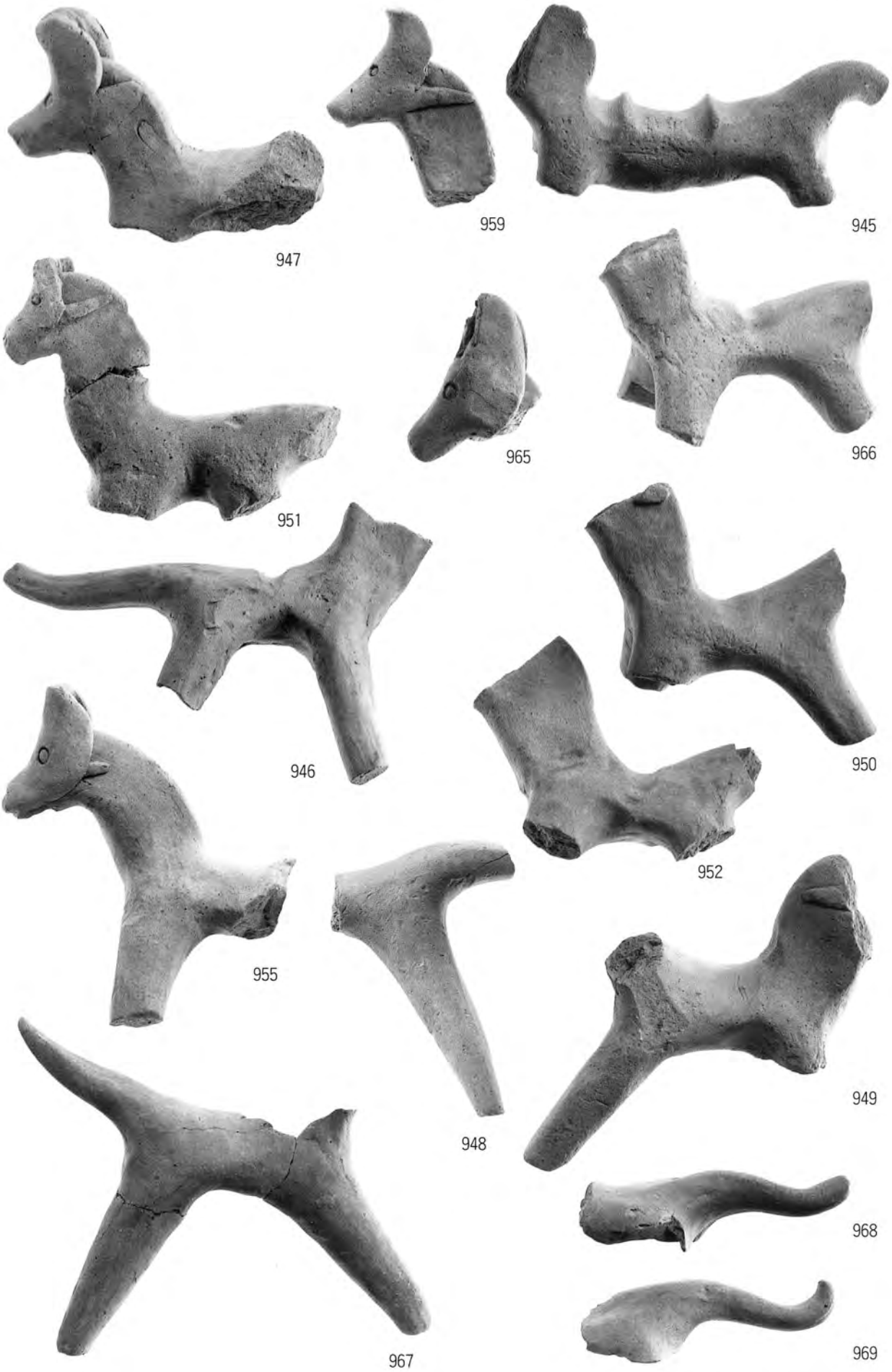
956

957

963

964

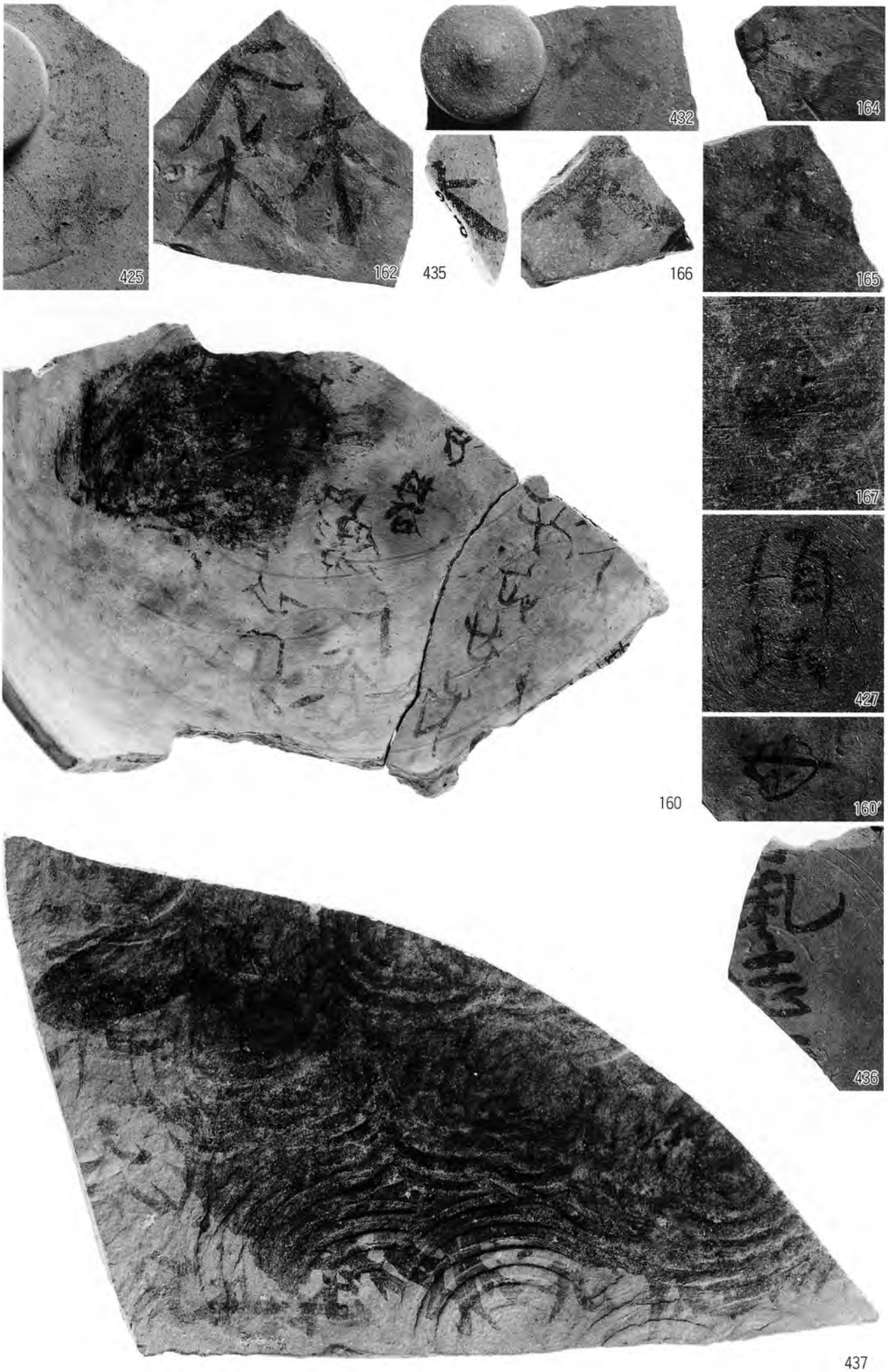
1：2



1：2

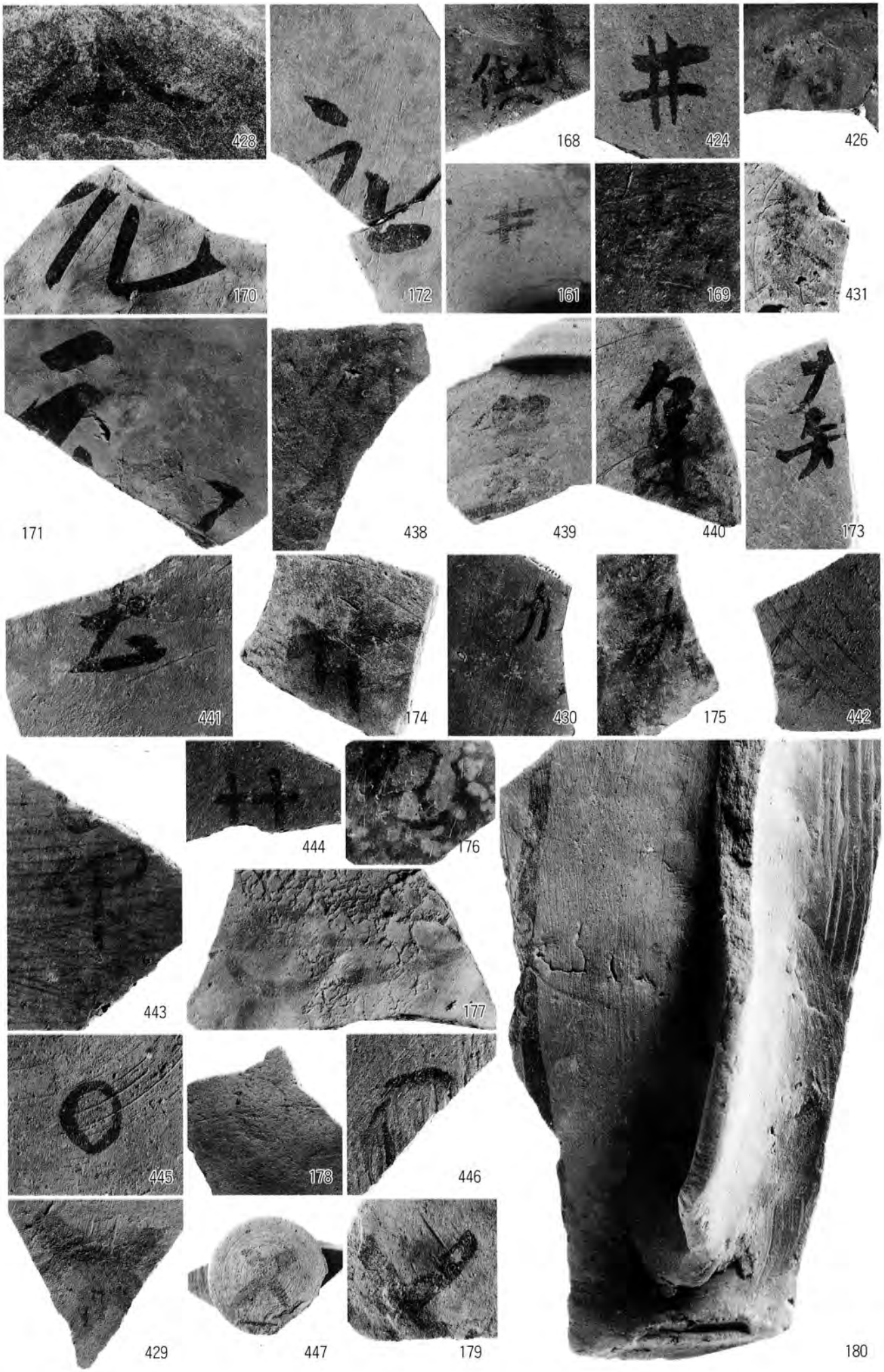
970
971
972
973
974
975
976
977
978
979
980
981
982
983
984
985
986
987
988
962

1 : 2



1：1

SD6400出土墨書土器2

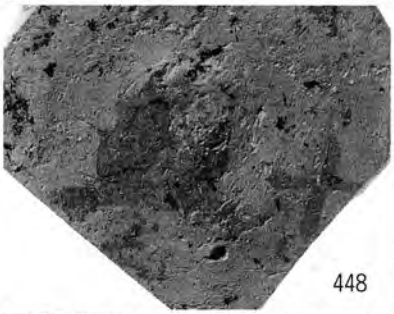


1：1

434

116

115


448

411

433

418

163

450

181

449

451

452

1 : 1

SD6400出土木製品1

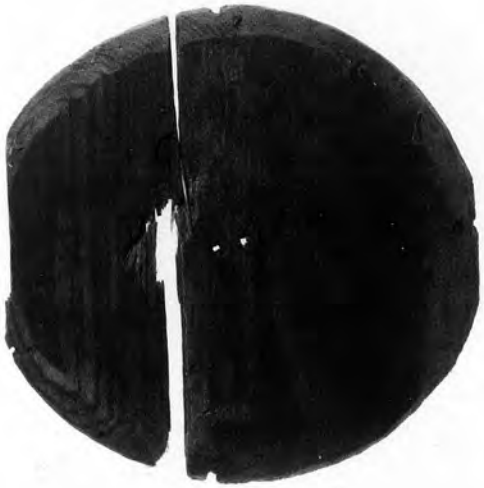
17

18

19

23

21


27

31

32

33

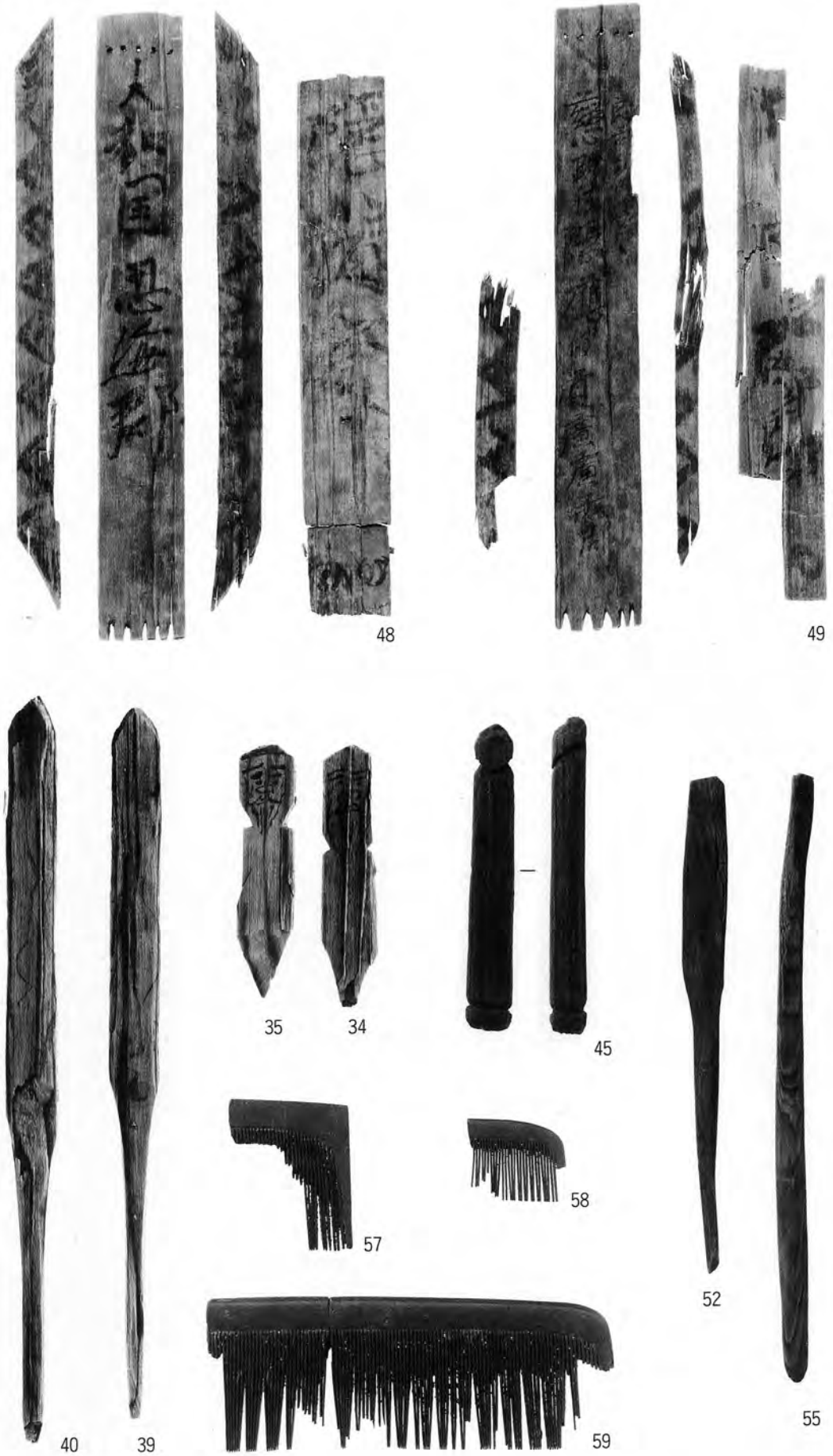
36

38

43

46

17～19・31～33・36・38・43・46　1：2　　21　1：1　　23・27　1：3



48・49 1：3　他 1：2

SD6400・SE6657出土木製品1

3・4・6～8・10～13・15・16—SD6400　76—SE6657　12・13　1：3　他　1：2

50

51

60

80

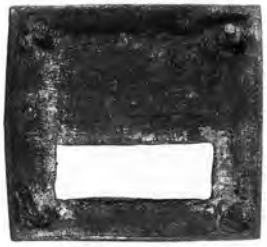
79

81

50・51・60—SD6400　79～81—SE6657　50・51　1：3　60・79　1：1　80・81　1：8

SD6400出土金属製品1

1


2

3

4

5

7

8

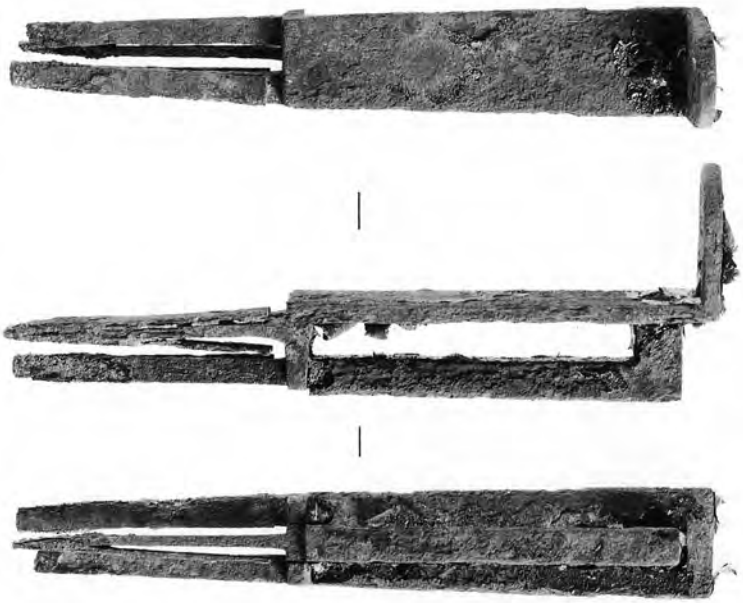
9

12

10

11

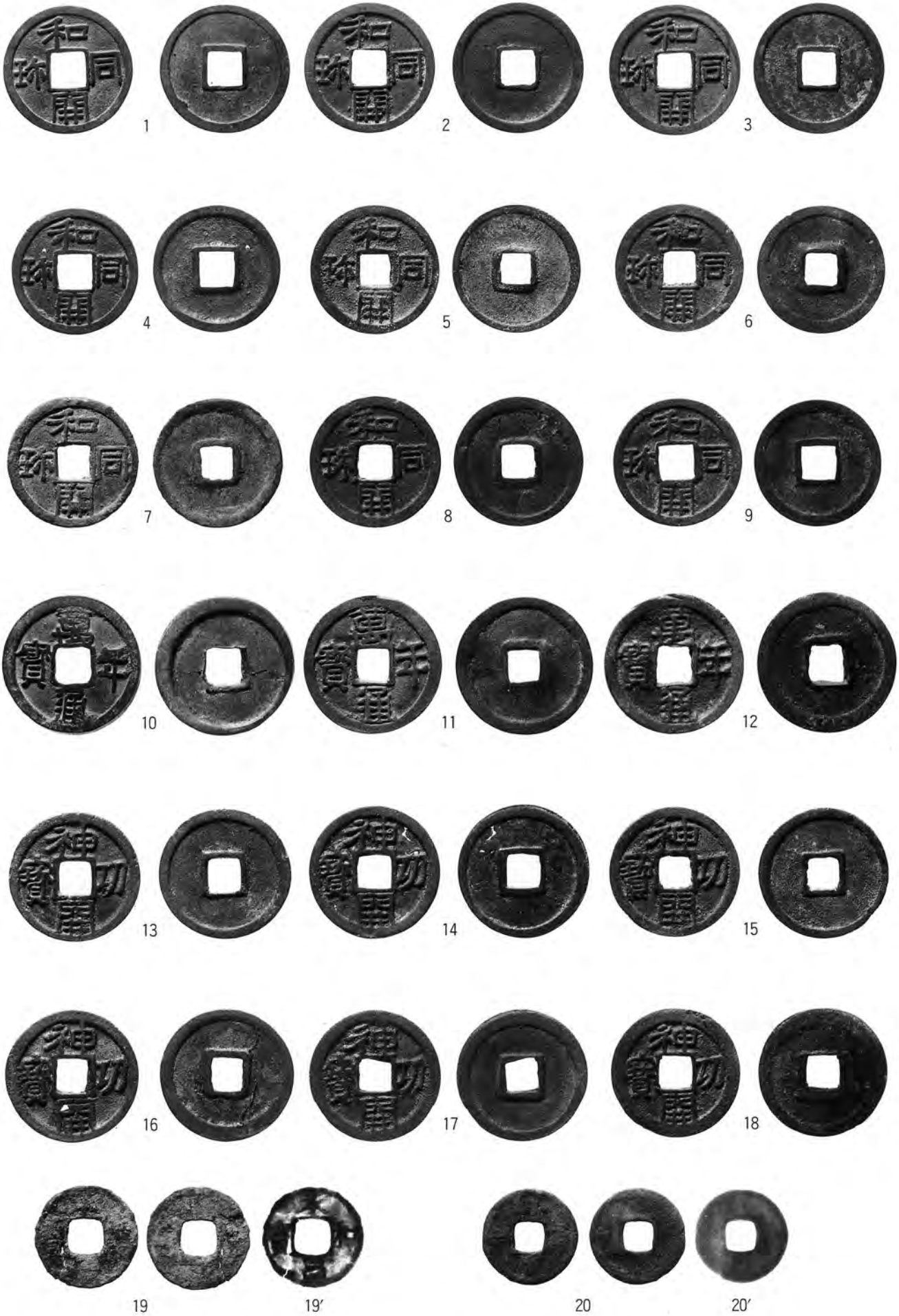
13


34

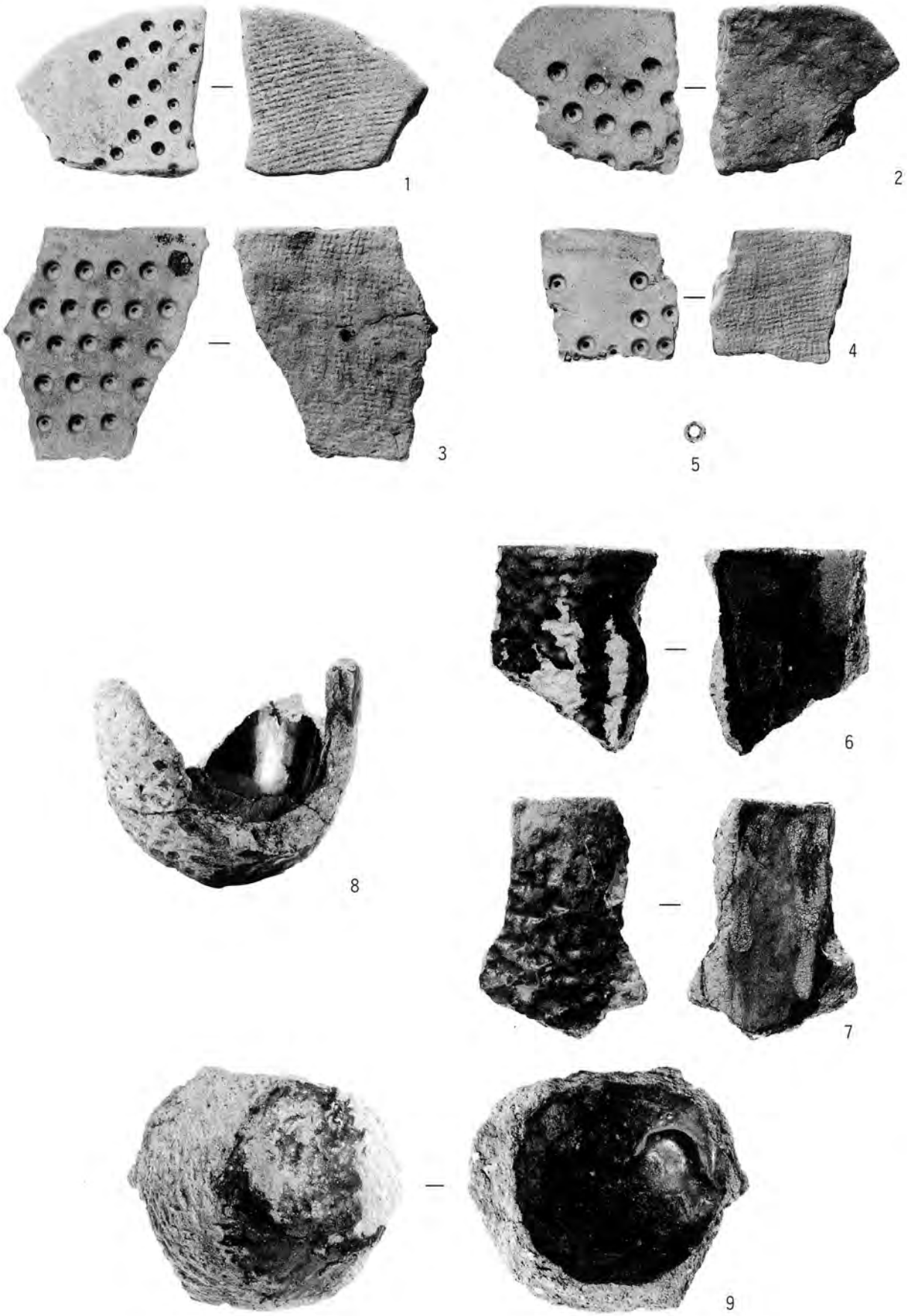
1 : 1

2：3

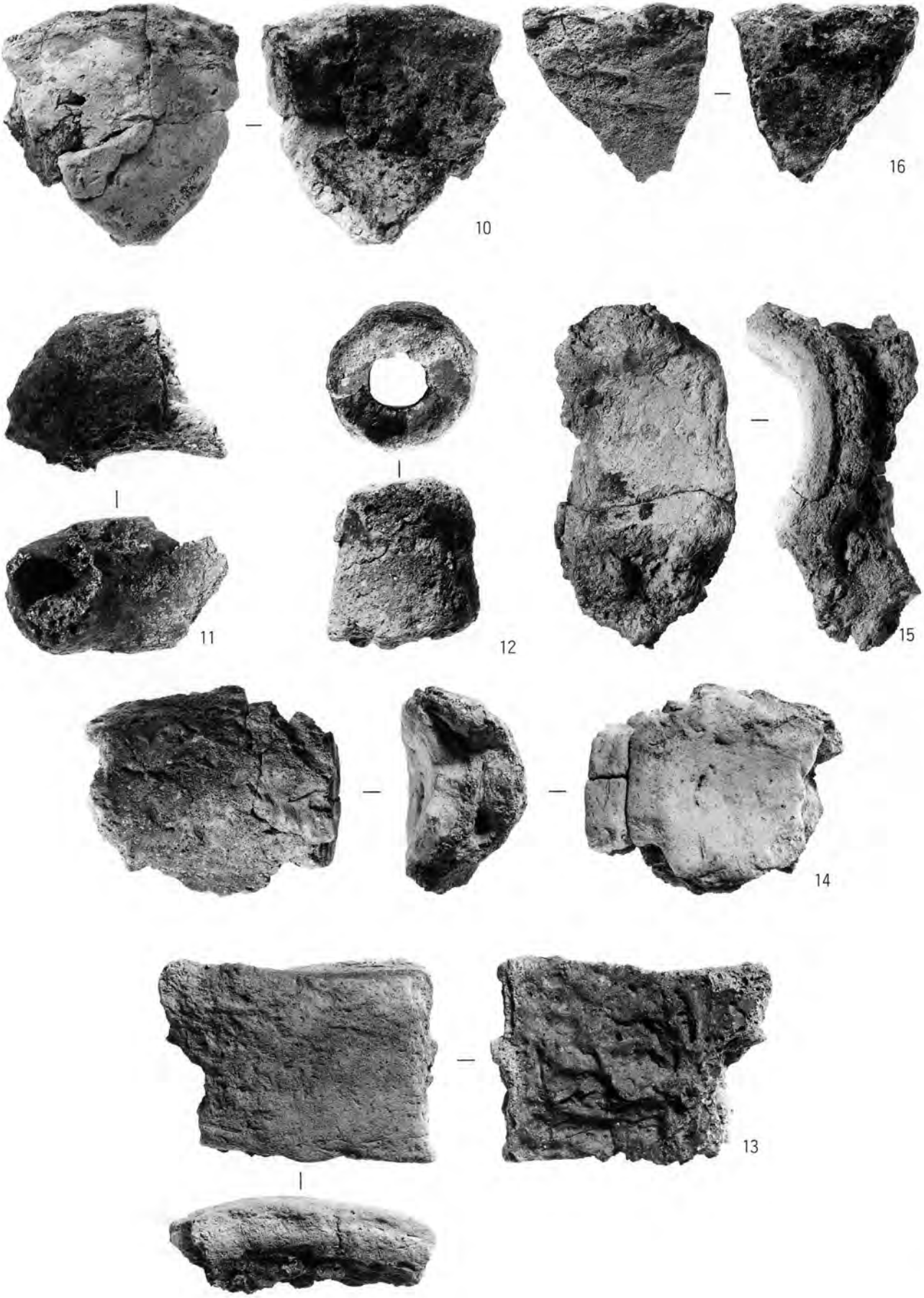
SD6400出土銭貨



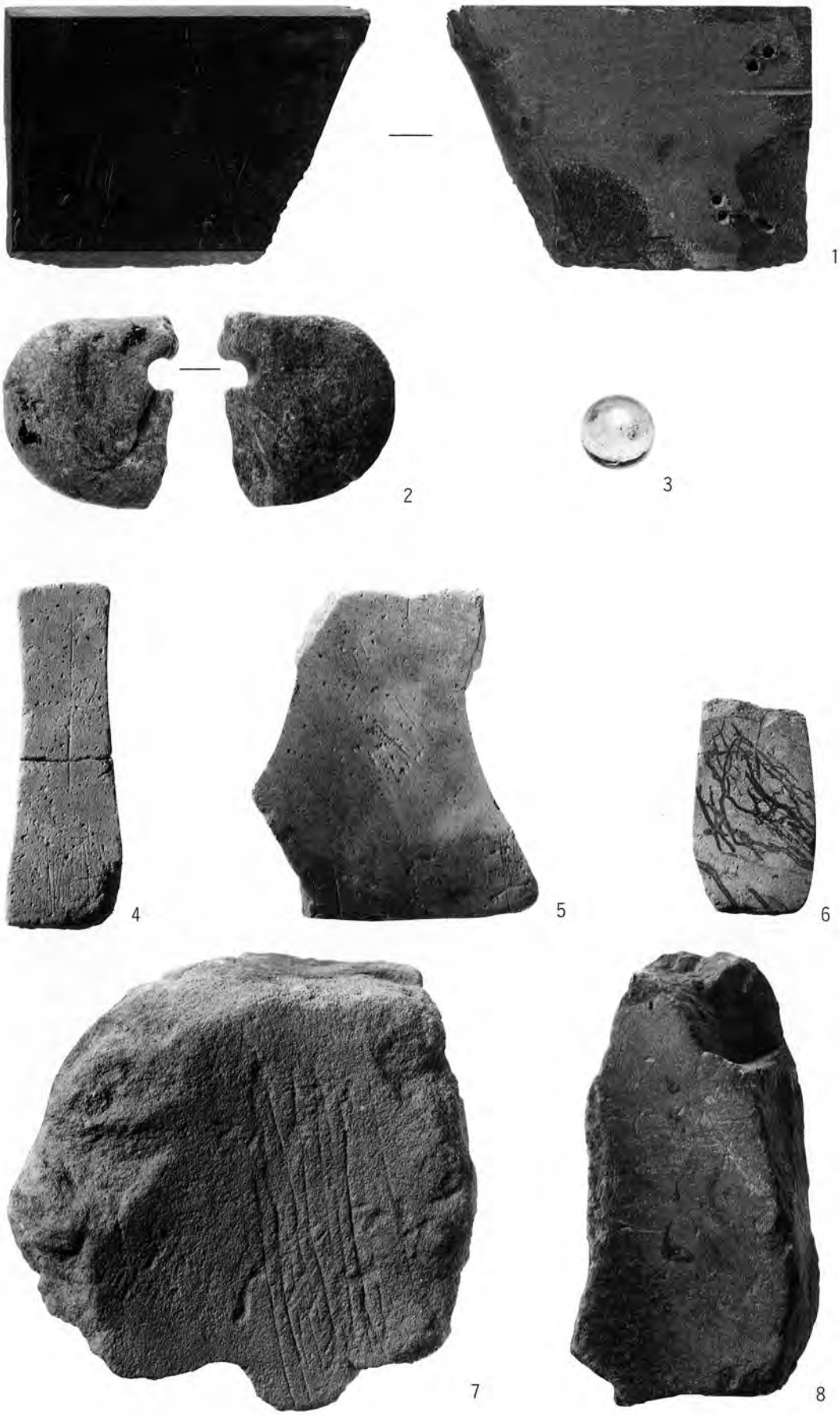
1：1（19′・20′　X線写真）



1～4ーガラス小玉鋳型　5ーガラス小玉　6～9ーガラス坩堝　1～4　4：5　6～9　7：10



10・16―坩堝　11・12・14・15―鞴羽口　13―炉壁
10～13・15・16―SD6400　14―遺跡包含層
10～12・15・16　1：2　13・14　1：4



1－石鏃　2－穿孔石製品　3－水晶玉　4～8－砥石
1・6　遺物包含層　2－SE6561　3－SX6428　4・7・8－SD6400　5－SK6507
1～3　1：1　4～8　1：2

21

21′

21′

23

85

5

30

12

21・23　3：5　　他は3：4（21′　赤外線写真）

15

19

14

8

18

7

25

24

3：4

54

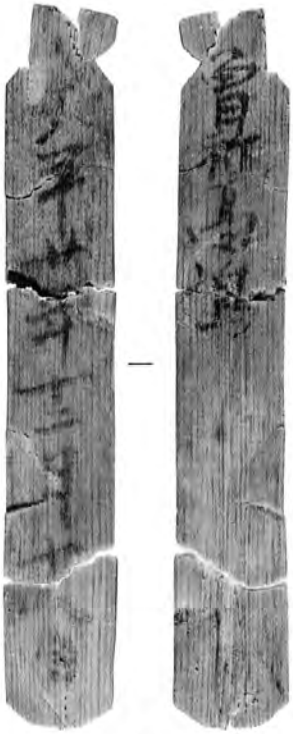
9

10

27

32

37



35

3

48

3：4

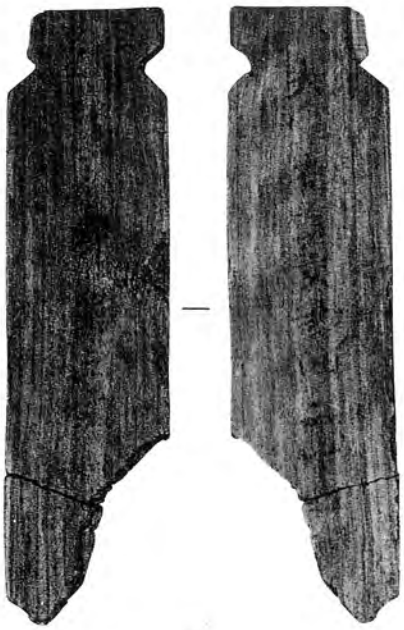
79

76

74

69

51



75

70

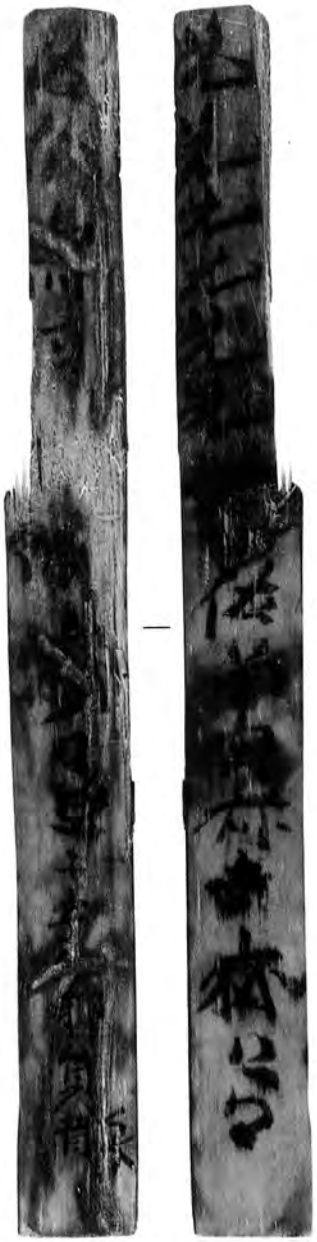
78

56

58

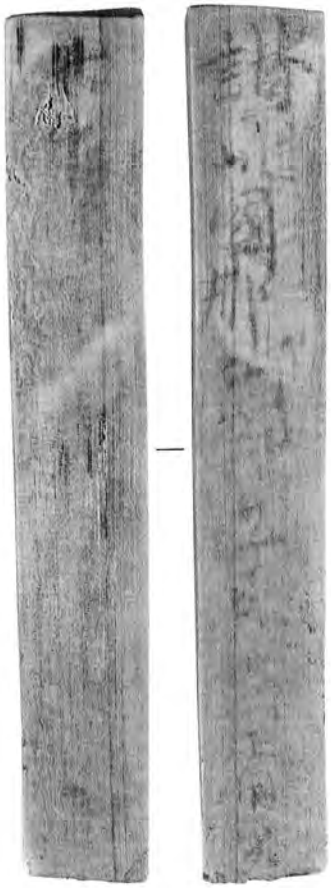
3：4

木簡5



93

92



71

94

119

118

116

101

82

84

105

97

86

3：4

91

89

90

88

1：1

SD6400・SX6530出土動物遺存体

1

2

3

4

5

6

7

8

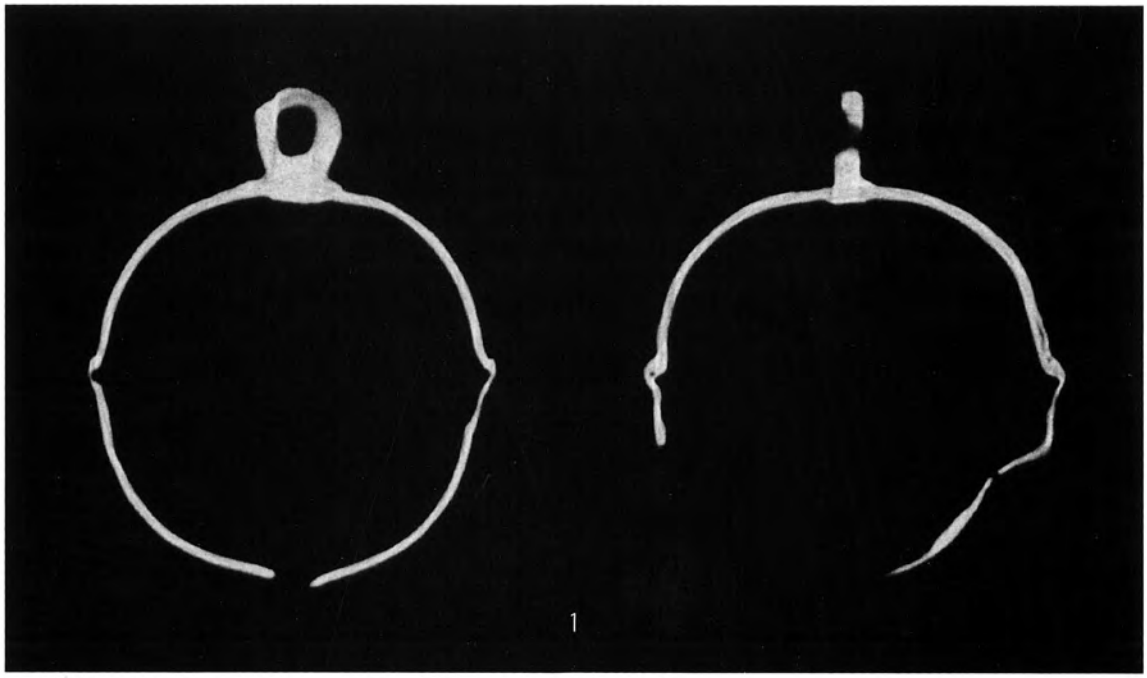
9

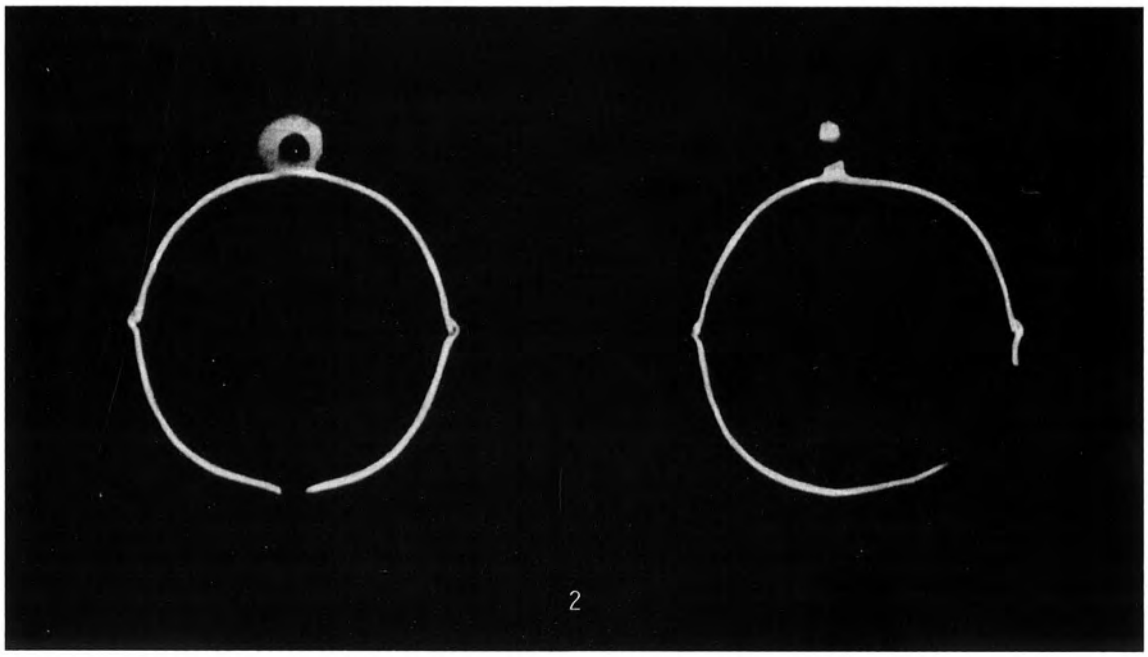
10

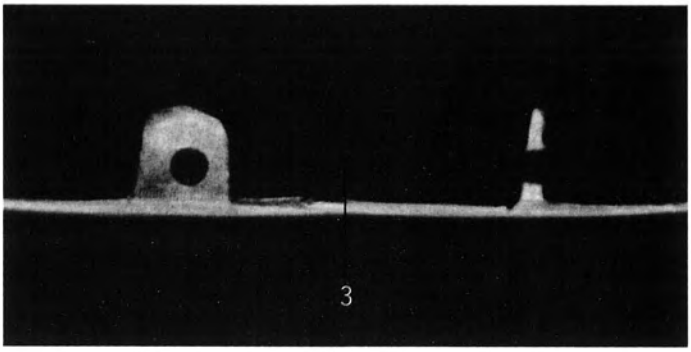
11

12

1・11・12—ウマ下顎
2・3—ウシ上腕骨
4—ヒト大腿骨
5〜7—イヌ下顎骨
8—ウシ下顎臼歯
9・10—イヌ上腕骨
1〜11—SD6400　1：2
12—SX6430　1：3

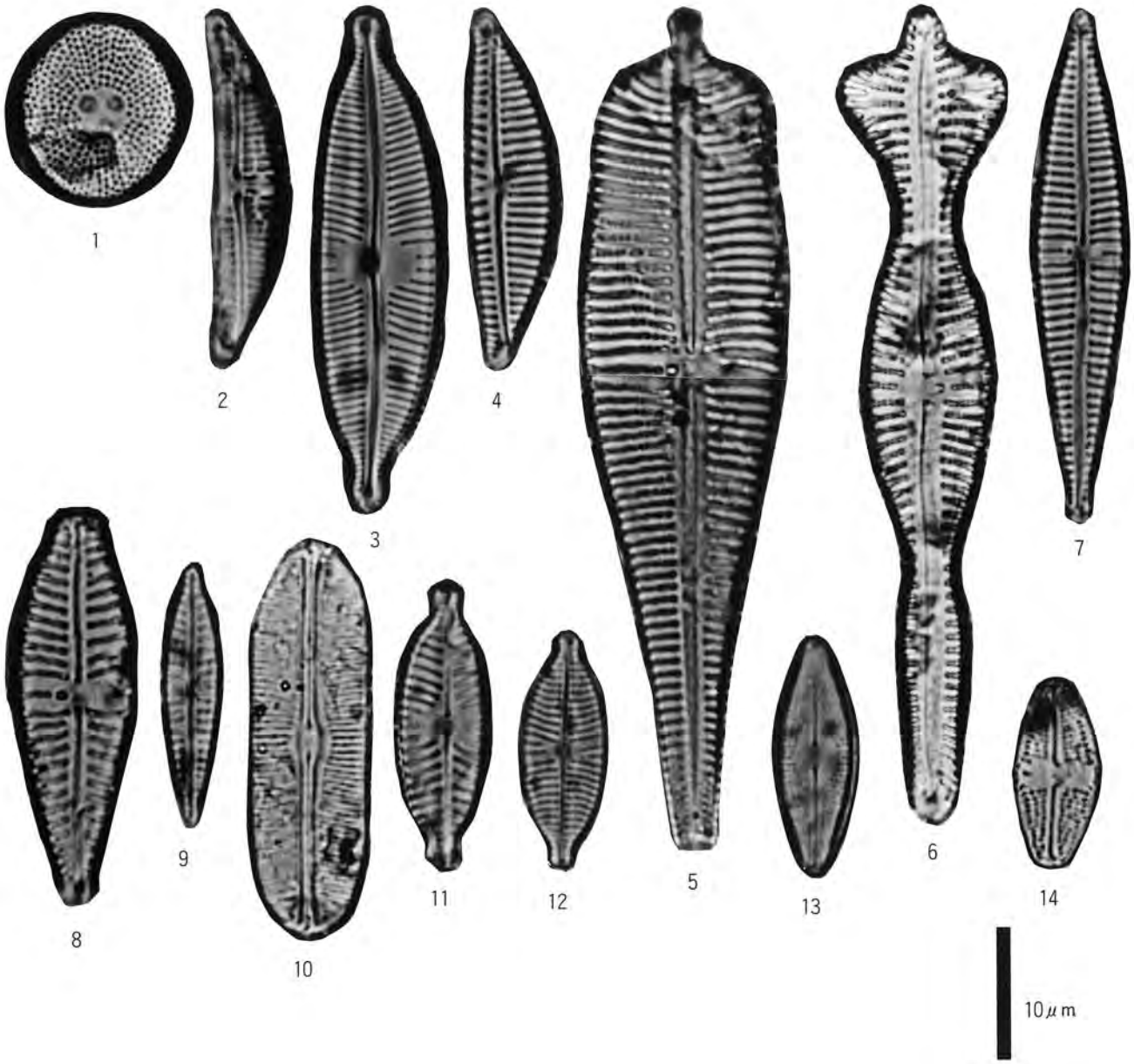




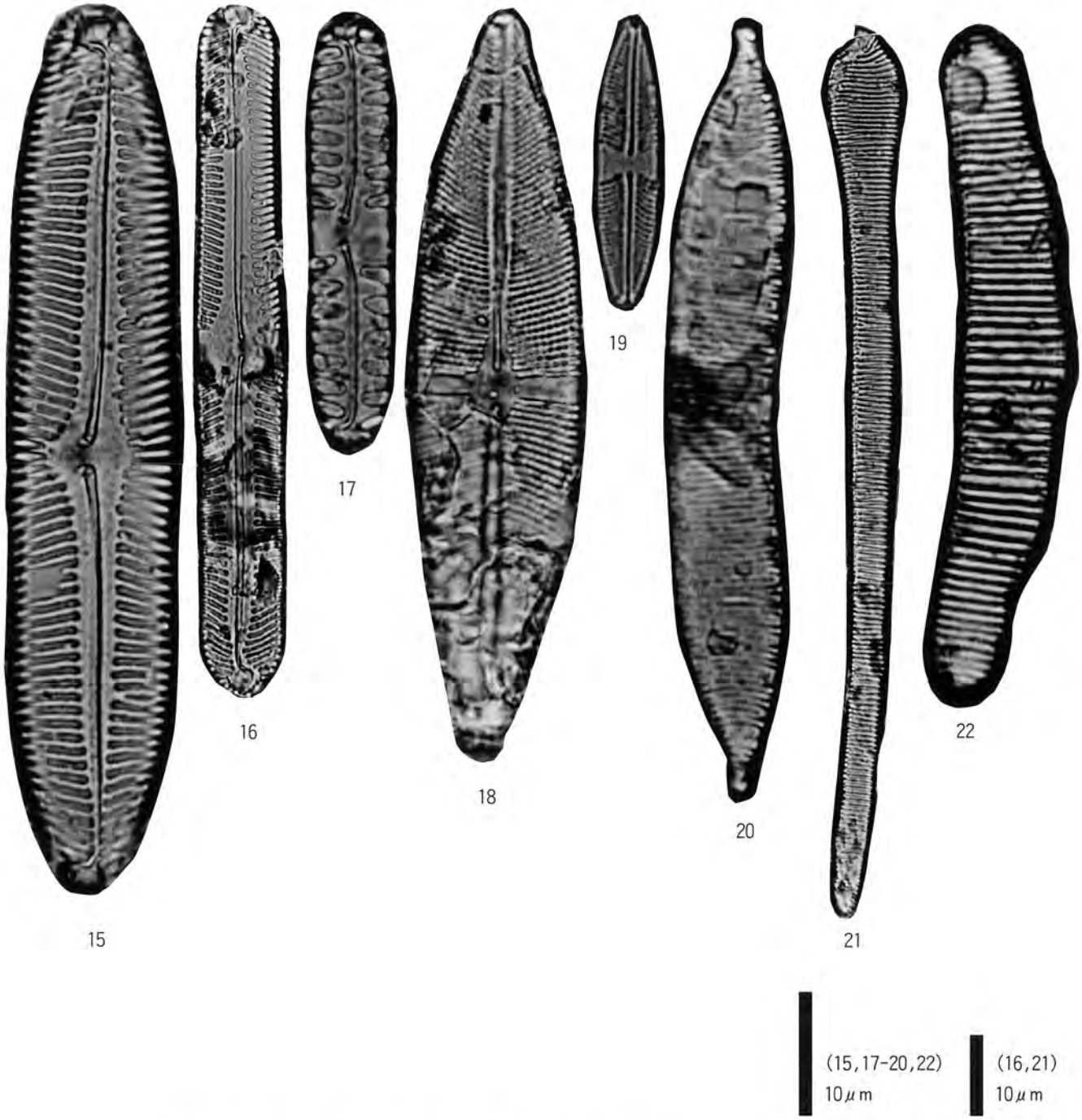


1—銅鈴(No.13)　2—銅鈴(No.12)　3—素文小鏡(No.8)

SD6400出土珪藻化石1

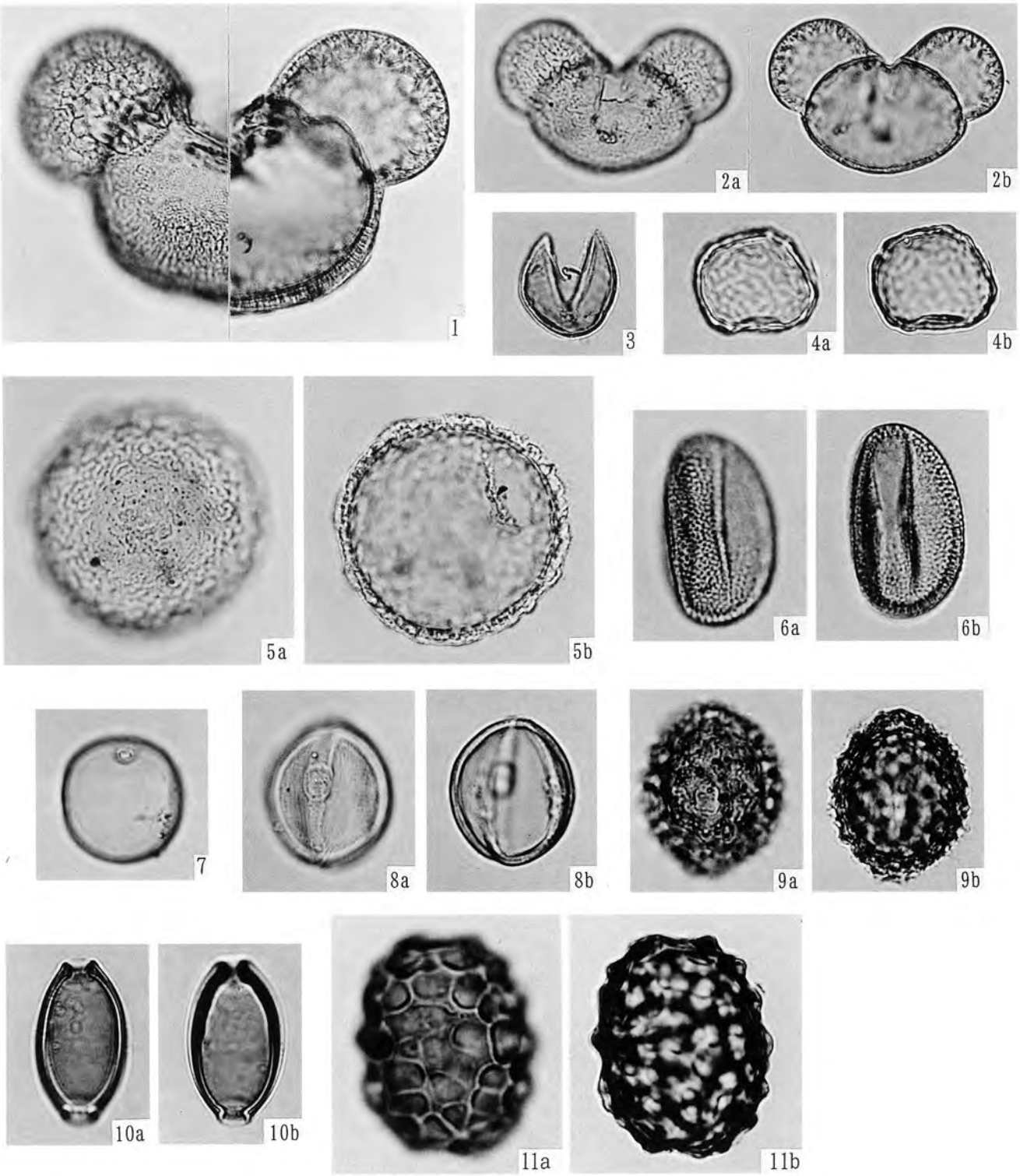


1—*Orthoseira roeseana* (Rabh.) O'Meara（Aライン；試料番号7）
2—*Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) V.Heurck（Aライン；試料番号5）
3—*Cymbella naviculiformis* Auerswald（Aライン；試料番号14）
4—*Cymbella silesiaca* Bleisch（Aライン；試料番号5）
5—*Gomphonema augur* var. *gautieri* V.Heurck（Aライン；試料番号5）
6—*Gomphonema acuminatum* Ehrenberg（Aライン；試料番号5）
7—*Gomphonema gracile* Ehrenberg（Aライン；試料番号7）
8—*Gomphonema angustatum* (Kuetz.) Rabenhorst（Aライン；試料番号6）
9—*Gomphonema parvulum* Kuetzing（Aライン；試料番号5）
10—*Navicula bacillum* Ehrenberg（Aライン；試料番号5）
11—*Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs（Aライン；試料番号7）
12—*Navicula decussis* Oestrup（Aライン；試料番号14）
13—*Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow（Aライン；試料番号11）
14—*Navicula mutica* Kuetzing（Aライン；試料番号6）



15—*Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (Aライン；試料番号6)
16—*Pinnularia gibba* Ehrenberg (Aライン；試料番号5)
17—*Pinnularia borealis* Ehrenberg (Aライン；試料番号6)
18—*Stauroneis phoenicenteron* var. *hattori* Tsumura (Aライン；試料番号5)
19—*Stauroneis obtusa* Lagerst (Aライン；試料番号11)
20—*Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (Aライン；試料番号5)
21—*Actinella brasiliensis* Grunow (Aライン；試料番号5)
22—*Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs) Rabenhorst (Aライン；試料番号5)

SD6400出土花粉化石



50μm (1, 5)

50μm (2—4, 6—11)

1—モミ属　2—マツ属　3—スギ属　4—ニレ属-ケヤキ属
5—ツガ属　6—ソバ属　7—イネ科　8—ゴキズル属
9—キク亜科　10—鞭虫卵　11—回虫卵

出土木簡釈文（抄）

凡例

(一)　釈文の漢字は概ね現行常用字体に改めた。

(二)　釈文に加えた符号はつぎの通りである。

・　木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

○　木簡の上端もしくは下端に孔が穿たれていることを示す。

□□□　欠損文字のうち字数の確認できるもの。

□　欠損文字のうち字数が推定できるもの。

□□　欠損文字のうち字数が数えられないもの。

□□　記載内容からみて上または下に一字以上の文字を推定したもの。但し、削屑においては煩雑になるので原則として省略した。

■■■　抹消により判読困難なもの。

〻〻　抹消した文字の字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。

「　」　異筆、追筆。

ˉ　合点。

［　］　校訂に関する注のうち本文に置き換わるべき文字を含むもの。

（　）　右以外の校訂注および説明注。

〔×〕　文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇所の左傍に・を付し原字を上の要領で右傍に示した。

カ　編者が加えた注で疑問の残るもの。

ママ　文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

(三)　釈文下の上段のアラビア数字は、木簡の長さ・幅・厚さを示す(単位はミリメートル)。欠損・二次的整形の場合、現存部分の法量を括弧つきで示した。なお長さ・幅は木簡の文字の方向による。

(四)　釈文下の下段に現在の遺存の形態を示す型式番号を記した。型式番号は次の通りである。なお端とは、木簡を木目方向においた時の上下両端をいう。

6011型式　長方形の材のもの。

6015型式　長方形の材の側面に穴を穿ったもの。

6019型式　一端が方頭で、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は6011・6032・6051型式のいずれかと推定される。

6021型式　小型矩形のもの。

6022型式　小型矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

6031型式　長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

6032型式　長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

6033型式　長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

6039型式　長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は6031・6032・6033型式のいずれかと推定される。

6041型式　長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作ったもの。

6043型式　長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にし、左右に切り込みをいれたもの。

6049型式　長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。

6051型式　長方形の材の一端を尖らせたもの。

6059型式　長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は6033・6051型式のいずれかと推定される。

6061型式　用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

6065型式　用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

6081型式　折損・割截・腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

6091型式　削屑。

二次的に整形されたもので原形が推定できる場合には、原形の型式番号を括弧内に付記した。

六条大路北側溝

(1) 茄子一斗　糖十□［斤カ］　(116)・(14)・4　6081

(2) □岐国寒□　(39)・19・3　6081

東一坊大路西側溝

(3) 皇后宮職解申請舎人事　(122)・(33)・4　6065

(4)・［中務省移衛門府カ］□□□□□□□　(113)・(8)・3　6081

・□人　□□□□［夫カ］

(5) 符　下廿□□■■□直百五十文□三□以二文□□使　(275)・(21)・3　6081

(6)・衛門府　右□□　(134)・(13)・2　6081

・　□故牒

(7) 牒　松本□［宅カ］　(63)・(17)・3　6081

(8)・宝字七年六月諸司継文　(96)・36・7　6061

・宝字七年六□諸司継文

（題籤軸）

(9)・主菜所　請「无」白大豆五合□□　(154)・(19)・4　6081

・□□用料□□

(10)・　請□　(127)・(23)・5　6019

・右命婦已下役夫□

(11)・請食一斗二升十一日□□四升十二日□二升　六月十三日□［案カ］［朝カ］［朝夕カ］十日□□今日夕二升　203・39・5　6011

・□　□□□□□□

(12) 請塩八勺　□六月十六日案主生江乙万呂　256・24・3　6011

(13)・□□［位下カ］［酒部カ］□□□□□□　(92)・(19)・12　6015

・□□［可授カ］□□新□位

(14)・間食弐升給案主蔵人等料　269・(15)・2　6081

・□　七月六日

(15)・府進塩肆斗二升六合　十月料者　214・44・5　6031

・　十月廿一日

(16) 穴師長嶋上田部水守進米五斗　166・18・1　6033

(17)・□二升充玉作
・五日阿閇堀川 (182)・29・3 6019

(18) 作皮筥所 (60)・(21)・1 6081

(19)・黒木作□材木「彙彙」一間古□[万カ]比木十四枝 「彙」
・十八日辟楫榑十村 得辟板□」枚 「□」合六百六十一枚「□□」 (253)・(25)・5 6081

(20)・」月下番□□[應仕カ]奉門部三
・ □月下番□□[門カ] (149)・(17)・4 6081

(21) 曽□[雅カ]門一 右四人嶋村列 中大伴門一 「 」」 右四人三龍列 420・(29)・7 6081

(22) □□[奈カ]史加比麻呂 □門仕女凡□ (190)・(12)・8 6081

(23) □□十一 史二 府一 中九 左右二 □□二 雑工卅一 「□」」 (374)・14・2 6081

(24) 右兵衛府 6091

(25) □[府カ]生已上 6091

(26) □司佐正六位上□□□ (126)・(12)・3 6081

(27) 次官従五□ 6091

(28) □小番三結各六□ 6091

(29)・□ □□□□[命婦カ]二□
・ 「 」 (81)・(9)・2 6081

(30) 奈癸勝麻呂 (刻線)
従八位下川□□麻呂[部カ] 船連玉麻呂
多米宿祢嶋足 (260)・(25)・4 6081

(31) □八位上□□五百□[従カ] [足カ] (114)・(14)・4 6081

(32) □大初位上息長□ 6091

(33) □呂[麻カ] 府 6091

(34) 无位丈部□」 6091

(35)・曽祢高嶋
・天平廿年十二月十八日 125・19・1 6032

(36) 牟毛都公万呂 174・19・5 6032

(37) 味酒牧男 □ (89)・25・2 6019

(38)・「 」 「肩野乙嶋
・□□ (129)・(20)・2 6081

(39) □□□［虫カ］壬生豊□［麻呂カ］ (124)・(14)・1 6081

(40)・□□　風早吉人　他□
・□　□　□□ (179)・(16)・3 6081

(41)・五百木部真□［古カ］弓良
・□□□　□ (78)・(5)・5 6081

(42) 物部□国［村カ］
舎人五百嶋
□　□ 6091

(43) 安倍男鯛□ 6091

(44) □久米若子□□ 6091

(45) □犬甘春 6091

(46) □前浄足　□ 6091

(47) 巨□［勢カ］ 6091

(48) □□　山直加太　名草郡上神郷戸主□ (179)・(16)・2 6019

(49) ○新家 231・(9)・5 6081

(50) 山口 6091

(51) 取松二人食□［一カ］ (140)・18・5 6019

(52)・□六十一人　用七升五□
・□一千五百六隻 (62)・(9)・5 6081

(53)・四月卅日紀伊遣人「□」
・□　「□　」（別筆は削り残りか） (123)・(10)・5 6081

(54)・「在蓋盤四口別笥一口内　「大盤一口
・□九九八十一　八九七十二　七九六□ (235)・37・7 6019

(55) 十三具 (116)・18・4 6051

(56)［銭カ］［給カ］
□廿五□□片尻受豊楽 94・(16)・2 6011

(57) 河内国大縣郡家原□ (91)・(13)・2 6039

(58) 伊勢国朝明□ (79)・17・3 6081

(59) 志麻国英虞郡名□［錐カ］□ (97)・(6)・5 6081

(60)・参河国八名郡多米郷□
・天平二年六月五□ (120)・19・3 6019

(61)・駿河国駿河郡柏原郷山□［田カ］
・真高銭六百文 113・21・3 6032

(62) 安房国安房郡白浜郷長□［屋カ］ (121)・(7)・5 6019

(63) 三衆郷熟麻□□ 100・20・4 6032

(64) 美濃国武義 6091

(65) 信濃 6091

(66) 敦賀郡返駅戸□同人万呂□三斗 198・30・6 6032

(67)・丹□□［後カ］□ (139)・28・7 6039

・天平□□［宝カ］

(68)・播磨国□

・養銭□□［六カ］ (67)・17・3 6039

(69)・周防国大嶋郡務理郷平群部岡調塩三斗

・天平勝宝五年九月 220・28・3 6033

(70) 讃岐国大内郡引□ (104)・22・4 6039

(71)・讃岐国那珂郡子松郷庸米

・六斗 155・24・4 6011

(72) 伊与国浮穴郡井門郷白米壱□ (100)・23・3 6039

(73) 伊与国伊与郡桜井村庸米白□ (101)・(14)・6 6081

(74) 宇和郡海部郷□知部万呂□□六斤［乎カ］［楚割カ］ 207・25・4 6032

(75)・大宰府貢交易油三斗□□［五升カ］

・宝亀三年料 (110)・28・3 6039

(76)・□上滑海藻五十斤

・□□二年閏六月七日［天平カ］ (172)・21・5 6019

(77) □□□□里□□部石足米六斗［郷カ］ (156)・17・3 6019

(78) □中男作物□栗一斗［搗カ］ (80)・14・3 6039

(79) 酢二合□□□虫丸 (160)・(18)・3 6081

(80) 津万呂一升 (86)・(19)・6 6081

(81)・田一月四日酒一升

・「□□」 (146)・20・5 6011

(82) 布乃理 71・17・3 6032

(83) 鮓鰒卌二斤 (79)・(15)・3 6033

(84) 鯛春須員三升 (73)・19・3 6039

(85) 天平二年九月十九日来銭十四□［貫カ］ (298)・(30)・3 6051

(86) 貽鮨二升直六十□ □ □□ 6091

(87) □四百九十六文○ (118)・23・4 6019

(88) 大和国忍海郡（琴形） 251・37・5 6011

(89) 隠道道（二つの墨円）（琴形） (216)・38・4 6019

(90) 良□郡隠［部カ］
恋□伎隠應伎道廣廣麻郡（琴形） 255・37・5 6011

(91) ○□隠郡郡（墨円）（琴形） (208)・38・3 6019

(92) 封 (165)・31・(4) 6031

(93)・光光光光光□佐伯宿祢赤麻呂
・佐伯宿□ 伯麻呂「千字文邪（ママ）□員散」 218・21・5 6011

(94) 白白絶年年年午午□ 6091

(95)・□斗内内
野禮智勢勢
・□物物物為□［為カ］ (124)・23・3 6081

(96)・應應
［至カ］
・□□□
・□（右側面） (68)・21・11 6011

(97)・周坊家□ □□□
・「国国国国珍珍重」 (89)・(11)・2 6081

(98) □條三□［坊カ］ 6091

(99) □坊［四カ］ (88)・17・5 6019

(100) □長八寸 □□ (83)・(19)・6 6081

(101) □之中 □□□□
今定九□ 6091

(102) □考□ (25)・(5)・9 6081

(103)・□□□□
・舎人 (38)・(6)・1 6081

(104) □□ □□□ 宗形□ (139)・(10)・3 6081

(105) 五月四日 御佐□ (84)・(21)・5 6081

(106) □□山□秋□○［門カ］ 130・29・4 6011

(107) ・□百枝
・藻
□□
(81)・(17)・5 6081

(108) □寒来暑□□［往秋カ］ 6091

(109) ・□従人者□
・鶯意□
(59)・21・2 6081

(110) 月外地可□ 6091

(111) 南方 6091

(112) 亀七□ 6091

(113) □六年 6091

(114) □□□［□］□布［カ］□布 一端 廿一
(34)・(293)・6 6081

(115) □老作 6091

(116) □二百四 二百廿二 6091

(117) 二百廿□［□十カ］ 6091

(118) 夕一百十 6091

(119) 夕二百六 6091

(120) 二百［□八カ］ 6091

(121) 百十一□ 6091

報告書抄録

ふりがな	へいじょうきょうさきょうしちじょういちぼうじゅうご・じゅうろくつぼはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	奈良国立文化財研究所学報
シリーズ番号	第56冊
編著者名	小林謙一・町田　章・内田和伸・長尾　充・岩永省三・玉田芳英・臼杵　勲・加藤真二・舘野和己・松井　章・肥塚隆保
調査機関	奈良国立文化財研究所
所在地	〒630　奈良市二条町2丁目9－1　TEL 0742-34-3931
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
平城京（へいじょうきょう）	奈良県奈良市（なら なら）七条町（しちじょう）	29201	－	34° 39′ 49″	135° 48′ 09″	1994.5.31 ～ 1995.4.6	約 14,200m²	(仮称)ダイエー奈良南店建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平城京	都城	奈良時代	掘立柱建物　58棟 塀　49条 井戸　11基 道路　4条 橋　2基 土器埋納遺構5基 その他木棺墓（平安時代）、竪穴住居（古墳時代）、土坑、溝など。	軒瓦42点、塼、土管、施釉陶器、土師器、須恵器、硯、墨書土器、墨書人面土器、土馬、小型模造土器、木製品(約1,100点)、金属製品(169点)、銭貨(59点)、石製品、ガラス製品、鋳造関係遺物、漆塗製品、木簡(855点)、動物・植物遺存体。	奈良時代から平安時代にかけて、6時期の変遷をたどる。敷地の利用形態は、各時期を通して1町規模。祭祀土坑、土器埋納遺構は、平城京初出。大路側溝に架かる橋を検出。大路西側溝から、大量の祭祀関連遺物が出土。

1997年 3 月 20 日　印刷

1997年 3 月 31 日　発行

奈良国立文化財研究所学報第56冊

平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告

著作権所有
発　行　者　奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所

印　刷　者　京都市中京区壬生花井町 3 番地
日本写真印刷株式会社

付図

平城京左京七条一坊十五坪・十六坪遺構集成図

付図　平城京左京七条一坊十五坪・十六坪遺構集成図 1:400

※　測量基準は国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく。
※※　遺構には一連番号をつけ、その前にSA：塀、SB：建物、SD：溝、SF：道路、SK：土坑、SX：その他などの分類記号を付記している。